THE KAIZO

改造

七月号

1923


髭剃りの順序
カテイ石鹸
安全剃刀
クラブ洗粉
乾きタオル
クラブゼリー
クラブタルカン
眉目清秀
齒牙の保健に
クラブ煉齒磨
齒科醫學の理想を
實現した世界的の
優良齒磨…クラブ
煉齒磨のチューブ
入は殊に便利德用
で衛生的で有ます

サンエス色インキ



感情の豊潤と思想の豊富を覺えさせる爽快鮮美なる新發賣のサンエス色インキ

重厚の性を表徴するは
ブロン（Brun）
英名――セピア

荘重の感じには
コバルト（Cobalt）
英名――コバルト

青春の榮えを示すは
ギオレ（Violet）
英名――ヴアイオレット

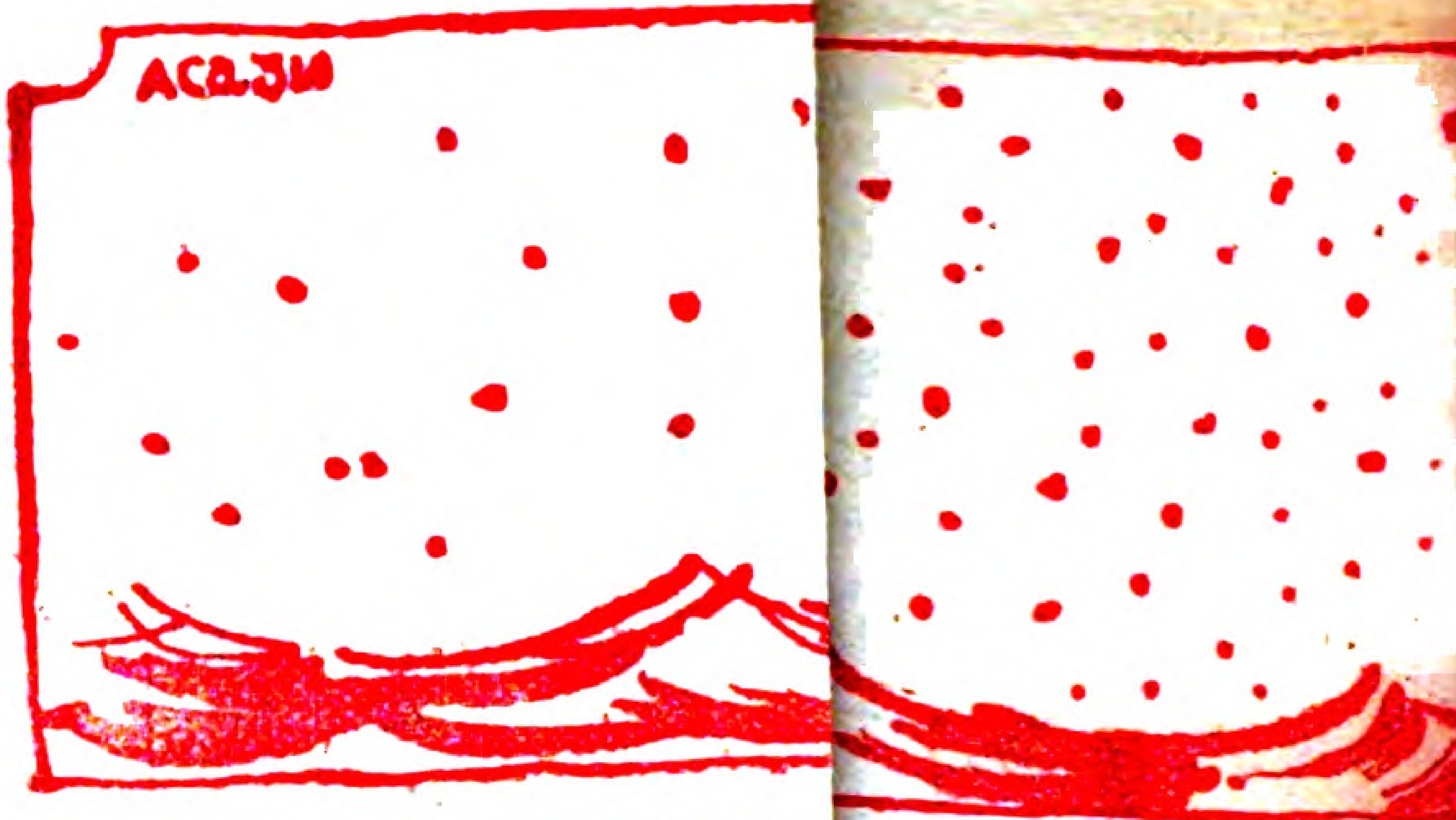
向上進取の感じには
エール（Vert）
英名――グリーン

以上各色 定價金貳拾錢

サンエス本舗
細沼株式會社

◇小林榮子新著◇（前編、桐壺より若菜の下まで） 全壹册箱入 一東

改造七月號目次



「夏と女」

創作

活躍せる女性

七月號の面白き記事

女性美の種々の段階に就いて……倉田百三

堂々たる長論は全く本誌のみの誇りである、氏は凡ゆる女性的なるものを崇拜する。「現實の世界に於ける男性の女性に對する優越は、反て其の性質に於ては、永遠の世界に於ける女性に對する從屬を證據立てるものである」と論斷して、氏は女性の優しき愛、纖細なる性能、ものを育む心に感謝と稱讚を惜まない。氏の藝術も哲學も常に此の溫く强き信念に基調する。四十枚の長論。

所謂獨逸の同性戀愛……黑田禮二

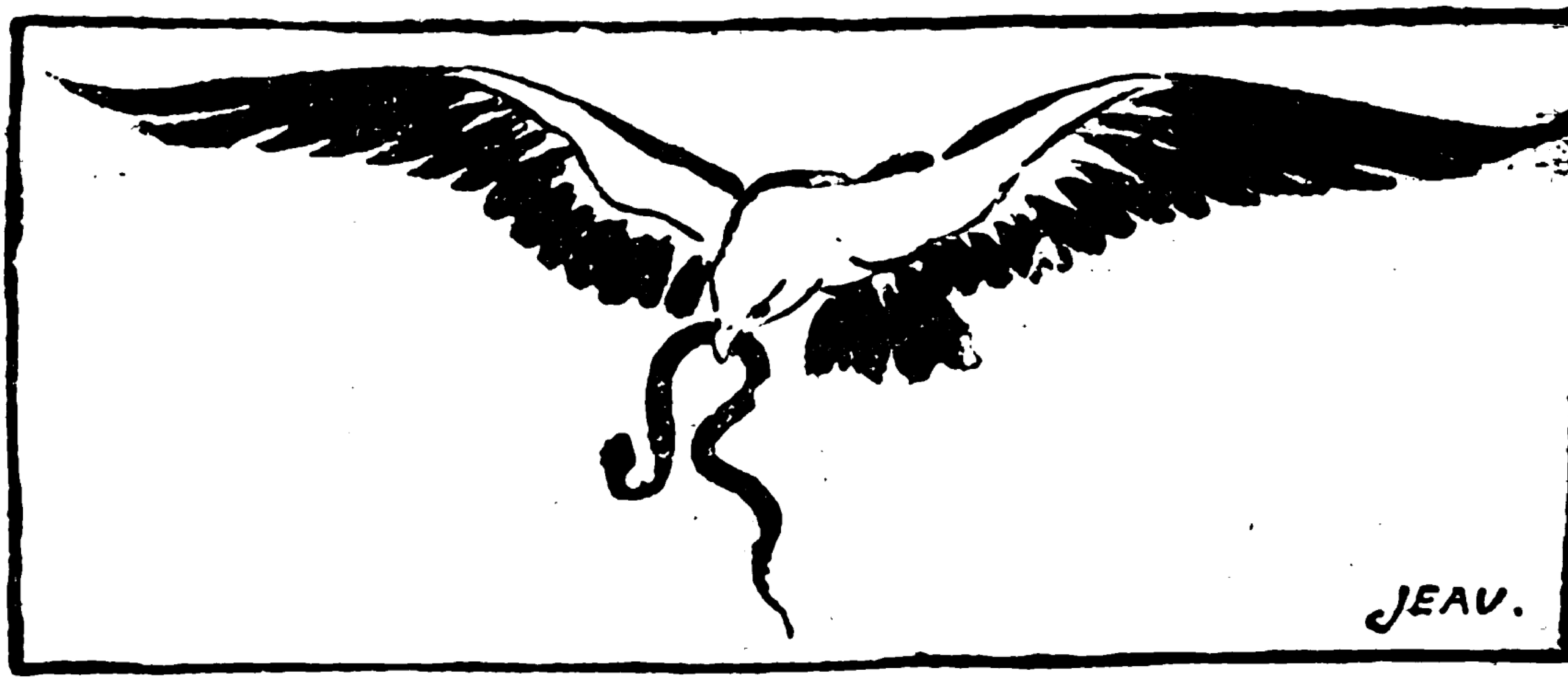
近頃歐米に頭をもたげかけた不思議な同性愛の戀愛心理を詳しく描く。

燈籠繪の追憶……正岡いるる

昔の童話 こぶとりぢゝい（新作晝ばなし）……岸田劉生

決勝點を見詰めて（自叙傳の二）……澤田正二郎

極東オリンピック大會參觀記……本社特派員 濱本浩



大學及政府の國家觀につき

森戸問題の勃發したとき政府が大學に對して採つた態度と、今回の共産黨事件に對し政府が大學に對する態度を比較して見るならば、四ケ年間に於て政府の見解が一の進歩を示すべきものなくして、却つて政府自身に於て抱懷する國家觀そのものが退歩せるにあらざるかを疑はしむる所が多い。

ただ單に、政府のみならず早稲田大學總長の大學制度に對する見解及社會觀の感念が現政府當局に敢えて差等のないものであるを知つて失望の感に堪えなかつた。

日本の各大學は勿論、形に於て國家統制の下にある、そして現行法の下に監督され、支配されて居る、しかしながら眞理への研究は國家として寸毫も沮止すべきものでなく、又研究の範圍につき制限さるべきものでもない、そこに學問の獨立があり、學園の自由がある、學そのものは、時に國家に不利益なる研究もすれば、また國家を否定する學說の研究をもすることがある、此等の研究を深め、進めることに依つて我々の國家生活は進歩し、そして合理的國家に進み、一面、人類生活も向上發展するのである。

我等は玆に司法官憲の權能を云々するものではない、しかしながら高田總長の大學制度觀、現在社會觀があまりに見識なく、自負なく、そして現代思想と學問の獨立に對する了解乏しきの結果、社會及學生にいかなる影響を及ぼすかを憂ふ、我等は高田氏なり、鎌田氏が近代的新國家觀に眼ざむることを希望する。

さるにつけても、もしも政府者が進歩した國家觀を正確に攫んでいたならば　かかる問題に對し焦燥することなく、狼狽する所なく、大學研究室を冒す所なくしてすんだであらう。

そして我等は大學が獨立し、安心して研究が繼續されなくては國家の昌榮もなく、民衆の眞の幸福に達し得ぬことを新聞記者諸君に特に理解して戴きたい。また、人間は眞理に依つて價値づけられ、眞理は獨立に於て闡明せらるゝ、妥協によつては眞理の發見は不可能であり、眞の合理的な國家・眞の民衆への國家は市井の小妥協精神ではとても到達するものでないことをも一言しておく。

（六月十二日までの新聞紙上で判明した事實を基礎として起草した）

誤判賠償の根本原理

末弘嚴太郎



はしがき

誤りたる刑事裁判の爲めに長く牢獄の慘苦を嘗めさせられた人々、又甚しきに至つては死刑に依つて生命までをも奪

はれた人々、夫れ等の罪なくして罰を受けた人々は異日其の無辜の明白となりたる曉に於て、當然國家に向つて何等か求むる所があつて然るべきである。國家も亦必然之に對して責任を感じて然るべきである。

吾々の胸に潜んで居る「社會的正義」はかくの如くに叫ぶ。而かも大聲を以て叫ぶ。それにも拘らず、今日吾國の法律はかくの如き責任を否定して居る。國家は其の責任を負はないのである。しかし、それは果して正しいことであらうか？、否否、私にはどうしてもかく考へることが出來ない。

けれども、國家をして此種の責任を負擔せしむべしとする主張は、一方に於ては在來の損害賠償理論と衝突する。又他方に於ては從來一般に行はれ來りたる國家思想國家理論と相容れない。從つて、此の主張を一般人士の間に徹底せしむるが爲めには、先づ第一に損害賠償に關する新しき理論を提唱せねばならぬ。又同時に在來の國家理論に向つて更に新なる批判驗討を加へねばならぬ。

此の故に、私は信ずる。此の問題は決して所謂「法律家」のみに依つて研究せらるべき事柄ではない。弘く國家を研究し來るべき社會を考ふる人々に依つて考慮せられねばならぬ問題である。何故なれば、それは國家理論の根本と深い關係をもつて居るからである。私はかく信ずるが故に、從來主として「法律家」に依つてのみ論ぜられ來りたる此の題目を、新に公衆の前に提出して一般論壇の批判攻究を乞ひたいと考へるのである。

第一　損害賠償の社會化

一

損害を受けた者は必ず其の賠償を希望する。被害者の立場のみよりすれば、加害者の何人たるを問はず、其の個人な

ると國家なると又其の小兒なると狂人なるとを問はず、乃至は又加害者に過失ありたると否とを問はずして、苟も損害を受けた以上、其の賠償を要求するのは當然である。

けれども、其の賠償は何人をして之を爲さしむべきか、一度思ひを轉じて其の賠償を爲さねばならぬ者の立場をも考へ合はせるとき、問題は最早決してしかく簡短ではない。被害者は其の損害の塡補を希望するにきまつて居る。けれども、例へば其の損害が全く過失なき他人の行爲に起因するとき、其の他人をして絶對に賠償責任を負擔せしむるのは彼れにとつて慘酷である。若しも、苟も他人に損害を與へた以上過失の有無を問はずしてすべて之を賠償せねばならぬものだ、とすれば、吾々は到底安んじて日常生活を營むを得ない。吾々は各場合の事情が要求する通常の注意――法律に所謂「善良なる管理者の注意」乃至は「善良なる家父の注意」――を加へて行動して居さへすれば、縱令之が爲め他人に損害を加へるやうなことがあつても原則として何等賠償責任を負はぬことになつて居るのでなければ、到底安神して日常の活動をすることが出來ない。此の加害者の立場を參酌して賠償責任法理の根本を築いて居るのが則ち在來の所謂過失責任主義であつて、現行民法第七百九條「故意又ハ過失ニ因リテ他人ノ權利ヲ侵害シタル者ハ之ニ因リテ生ジタル損害ヲ賠償スル責ニ任ズ」なる規定は正に其の主義を宣明したものである。

二

成程、加害者の立場を考へ合はせれば、此の過失責任主義は正しい制度だと云ふことが出來やう。各人の注意を促して將來の害惡を豫防せむとする見地から云ふても又加害者の行爲を非難する倫理的の立場から見ても、此主義には立派な根據がある。けれども、加害者が道德上非難せらるべきものなりや否やの問題と被害者に向つて救濟を與ふべきや否やの問題とは全然無關係である。被害者の損害が塡補されねばならぬと云ふ事實は、加害者の行爲が道德上非難せらる

べきものなりや否やに因つて、何等損益する所のある譯がない。例へば他人に依つて怪我をさせられた人間は、其の加害者に過失ありたると否とを問はず、又其の加害者が是非善惡を辨へた立派な成年者であると小兒乃至狂人であるとに關係なく、其の怪我を治療して貰ふ絕對の必要がある。其の必要はかくの如き加害者の主觀的事情の如何に依つて毫も增減する譯がないのである。又過失の有無に依つて賠償責任の有無を定めしむることは豫防的見地から見て最も適當な制度だと云ふことが出來やう。けれども、豫防的見地から見て一定の行爲は之に責任を負擔せしむべからずと考へらるることは、毫も因つて損害を蒙つた人間には救濟を與へずともよいと云ふ結論を生ぜしむるものではない。被害者はかかる事情には全く關係なく賠償を受ける必要があるのである。

然るに、過失責任主義にあつては、加害者に責任を負擔せしむべきや否やの問題を標準として、被害者に救濟を與ふべきや否やの問題を解決せしめむとして居る。其結果加害者に過失がない以上被害者救濟の必要が如何に大きくとも、之に向つて何等の救濟を與へない。從つて、客觀的には縱令加害者に過失があつても、被害者が訴訟上それを立證することが出來なければ、遂に何等の賠償を受けることが出來ない。小兒狂人等に依つて害を加へられた者の立場も亦それと全く同じである。それは被害者にとつて確に迷惑な制度である。それにも拘らず、此の制度は大體甚しき破綻を曝露することなしに古來今日まで兎も角も行はれて來た。併し近年蒸氣乃至電氣に依る機械工業の發展其他汽車自働車飛行機等運送機關の發達は、一方に於ては從來に比して著しく被害の事件及び數額を增加せしめたるに拘らず、其際加害者に過失ありと認むべき場合乃至は少くとも其過失を立證し得る場合は漸次に減少する傾向を生ぜしむるに至つた。

試みに、獨逸の工場災厄保險の統計表に現はれた數字を示すと次の通りである。

災厄の原因＼年度	一八八七	一八九七	一九〇七
工場主の過失	二〇、四七%	一七、三〇	一六、八一
職工の過失	二六、五六	二九、七四	二八、八九
双方の過失	八、〇一	一〇、一四	九、九四
不可抗力	四四、九六	四二、八二	四四、三六
	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇

此數字について見ると、從來の過失責任主義の立法に依れば、職工は主として工場主に過失ある場合にのみ賠償を請求し得るに過ぎないから、彼等が法律上賠償を請求し得るのは被害事件總數中僅かに約二〇パーセント弱に過ぎないと云ふ結果が現はれて居るのである。而して此種の現象は獨り工場災厄にのみ限るのではなく、汽車自働車に因る各種の災厄工業に起因する煤烟臭氣音響震動等の害惡についても同じく之を認め得るのであつて、其結果多數の被害者は單に加害者に過失なしとの一理由に依つて、損害が如何に大きく又それが自己及び彼の家族にとつて如何に甚しき苦痛を與ふるものであらうとも、全く何等の救濟を與ふることなしに放擲せらるゝと云ふ悲しむべ現象を生ぜしむるに至つたのである。

此の悲慘なる現象の發生、從つて過失責任主義の根底に横はれる矛盾の曝露は無論法律家其他一般人士の注意を喚起せずには居なかつた。加害者の立場はどうあらうとも、ともかく被害者を救はねばならぬ、「矛盾の曝露」に驚いた彼等は均しくかくの如くに叫ぶに至つた。かくして生まれ出たものが、所謂「無過失賠償責任論」である。此の論者は、彼

害者はともかく之を救はねばならぬと云ふ考から出發した。さうして之を救濟すべき責任を加害者夫れ自身をして負擔せしむるの根據を廣く「加害者の過失」以外の事情に求めたのである。其の「加害者の過失」以外の事情にして、而かもそれを根據として加害者に賠償責任を負擔せしむることが至當と認めらるゝものゝ何たるかに付いては、故岡松博士が其大著「無過失損害賠償責任論」（大正五年）中に於て種々分類して述べられて居る所の參看を乞ふことゝして、玆では私自ら深くそれに立ち入らないことゝするが、要するに、從來の過失責任主義は加害者に過失ある場合に限つて被害者を救濟したるに反し、無過失責任主義は加害者に過失がなくとも、何等か別に彼をして賠償責任を負擔せしむるを相當すべき事情あるときは、それを根據として彼に其責任を負擔せしめ、以て被害者を救濟せむとするものである。

三

無過失責任主義は之を從來の過失主義の狹隘なるに比べれば確かに一の進歩なりと云ふことが出來る。けれども、此の主義にも尙幾多の缺點がある。先づ第一に、加害者に過失がなくとも尙之をして賠償責任を負擔せしむるを至當とすべき事情も亦――「過失」と同樣――常に必ずしも存在するものではない。從つて救濟を要すべき被害者必ずしも常に之に依つて救濟せらるゝことがない。殊に、損害賠償制度の豫防的方面を顧みると、無過失賠償主義をすべて如何なる場合にも適用することは到底出來難い。先づ普通の人間は、日常「善良なる管理者の注意」を加へて居さへすれば、決して賠償責任を負擔せしめらるゝことがないやうになつて居るのでなければ、到底安じて行動することが出來ない。他人に損害を加へた以上全く過失の有無に拘らず賠償責任を負擔せしめられると云ふことであれば、賠償制度の豫防的效用は全く無視されたことになる。賠償責任の道義的根據も亦全く無視されたことになる。此故に、無過失責任主義を損害賠償のすべての場合に通ずる原則として認めることは到底不可能である。原則は今日も尙過失責任に置かれねばならな

い。數十年の昔過失責任主義の不備に氣付いた歐米の諸學者は、一時大に無過失責任主義採用の必要を唱導したけれども、今や形勢は既に反動時代に入りつゝある。成るほど、狭隘なる過失主義にのみ捉はれるのはいけない。けれども、さらばと言ふて無過失責任主義をして全く之に代はらしめ以て賠償制度の原則とすることは出來難い。原則は何所までも過失責任に置かれねばならない。今や學者は多くかく唱へつゝあるのである。

次に、無過失責任主義の下に於ても――全く過失責任主義に於けると同様――若しも加害者が無資力であるならば、縦令被害者の救濟を必要とする程度は如何に大きくとも、事實上何等の救濟を受けることは出來ない。法律は形式上如何に救濟を與ふべき旨を宣言しても、加害者にして無資力なる以上實質上何等の救濟の與へられる譯がない。而かも、苟も被害者にして救濟を要する以上、其必要の有無及び程度は決して加害者の資力如何に依つて影響せらるべきものではない。救濟の要否及び程度は全く被害者それ自身に付いてのみ定めらるべき事柄である。

第三に又、無過失責任主義の下に於ても――過失主義に於けると同じく――賠償問題の解決が被害者加害者間の對個人問題に放任されて居る以上、客觀的に觀察すれば確かに加害者に責任ありと認め得べき場合でも、被害者が貧乏にして訴訟をすることが出來ず又優秀な辯護士に依頼することが出來ず、其他上手に訴訟をすることが出來なければ、法律上正にとり得べきものまでが實際上とれない、と云ふ極めて不都合な結果を生ずるのである。

四

然らば、此等諸種の缺點の根本的病源は果して何處にあるのであらうか？私は一言にして云ふ。それは損害賠償問題の解決を加害者被害者間の對個人問題に放任してある點に存在する。從來の賠償制度は、過失主義なると無過失主義なるとの別なく、「賠償」なる一矢を以て「被害者を救濟すること」及び「加害者に責任を負はしむること」の二鹿を射んとし

て居る。從つて、幸にして加害者に責任を負はしむるの根據があれば格別、又被害者が巧みに訴訟を仕遂げ得れば格別その然らざる限り被害者救濟の必要が如何に顯著であり又如何に大きくとも、彼は遂に何物をも與へられない。而かもかくの如きは實に被害者救濟なる損害賠償制度の根本精神に鑑みて全然不合理だと云はねばならない。被害者は加害者側の事情がどうあらうとも與へらるべき救濟のすべてを與へられねばならぬ。彼が救濟を要するや否やは獨り彼自らに付いてのみ定めらるべきである。偶々加害者に過失其他歸責事由ありや否や、加害者が無資力なりや否や、又被害者が訴訟に成功したりや否や等の諸事情に依つて、救濟の要否及び程度が定めらるゝことは全然理由なきことゝ云はねばならぬ。

茲に於て、私の提唱せむとする根本的改革案は「損害賠償の社會化」である。從來全く被害者加害者間の對個人關係に放任されて居た賠償問題を新に社會的見地より觀察して別個に解決せむとする案である。元來加害者に責任を負はしむるを至當とするや否やの問題と被害者を救濟すべきや否やの問題とは性質上全く無關係の事柄でなければならぬ。然るに、容易に二者を關聯せしむることに依り、加害者に賠償責任を負はしめ彼をして支拂はしむることに依つて、被害者を救はむとしたのが、從來の賠償制度の根本的病原である。此故に、私は被害者救濟の要否及び程度は全く夫れ自身のみを引き離して考察すべきであると考へる。而して苟も救濟の必要あり救濟を受くるの資格ありと認めらるゝ限り、加害者側の事情如何に關係なく、其の救濟を與ふべきであると考へる。而して又加害者をして賠償を支拂はしむべきや否やの問題は獨り加害者に付きてのみ考察せらるべきであつて、當該の被害者側に於ける救濟の要否乃至程度等に依つて左右せらるべき事柄ではないと考へる。

而して、加害者の賠償責任と被害者の救濟との聯絡は――從來の賠償制度に於けるが如く――當該事件に於ける個々

の當事者相互間に之を求めてはならぬ。加害者に付いては其行爲を獨立に觀察して賠償責任の有無及び數額を量定し、其結果彼の支拂ふものは直接に之を當該事件の被害者に與ふることなく、すべて之を集積して一の基金——賠償基金——を組成すべきである。而して被害者救濟の問題は是れも亦夫れ自身のみを引き離して考慮すべきであつて、其結果賠償として彼に與へらるべきものは又すべて右の基金中より支拂はれねばならぬ。

此場合、加害者をして基金に拂込みを爲さしむべきや否やの問題は、從來一般に行はれたる賠償理論に於て加害者側の立場を顧慮したると同一の方法を以て之を決することが出來るであらう。即ち、過失責任主義を原則としつゝ其他縱令過失はなくとも加害者をして賠償を爲さしむるを適當とすべき事情あるときは無過失責任主義の原理を斟酌して、拂込みを爲さしむべきであらう。而して加害者富有なるに於ては——偶々他の場合に加害者の貧困其他に因つて起るべき賠償基金の缺損を塡補する爲め——彼をして普通以上の多額を拂込ましむるも可なるべく、又彼の行爲が情狀憫むべきものなりや否や等各種の事情を參酌して賠償額を量定するのも亦一法であらう。けれども、夫れ等加害者側の事情考慮をして直接當該の被害者救濟問題に影響せしめてはならぬ。被害者に救濟を與ふべきや否や其額を如何程にすべきや等の問題は專ら彼自身に付いてのみ之を決すべきである。從つて、其の事實蒙りたる損害の額を基本と爲したる上、彼の貧富從つて、救濟の要否及び程度を參酌し、又被害事實の發生につき彼の側にも亦過失其他非難せらるべき點なかりしや否や等を併せ考へて、彼の受くべき救濟の程度及び方法を定むべきである。けれども、其際かくして爲されたる斟酌をして直接當該の加害者の責任問題に影響せしめてはならぬ。要するに、具體的の被害事實に付いて當該の加害者が支拂ふ賠償と被害者の受ける賠償との間に何等直接の關聯をつけてはならぬ。前者は之を基金に拂込み後者は又之を基金より受くることに依つて、損害賠償の問題は全く社會化されるのである。かくして、加害者側の事情如何は全然被害

者救濟の問題と無關係になる。かくして被害者はすべて其必要に準じて安全に容易に且公平に救濟を與へらるゝことゝなるのである。

五

以上に說明した「損害賠償の社會化」を制度の上に實現するに付いては、尙研究を要すべき幾多の問題があるであらう。けれども差當り先づ第一に注意すべきことはかくして設けられる賠償基金は決して一個に統一せらるべきではないと云ふことである。賠償問題の或るもの――例へば工場災厄に對する賠償の如き――に在つては、賠償義務者及び權利者共に或る種の職業に關係したものゝみより成り立つて居ると云ふやうなことがあるであらう。かくの如き場合にあつては、其職業に關する限り一個の特別賠償基金を設くべきが至當であらう。何となれば、かゝる場合に於ては當該の賠償問題に關係ある者はすべて同種の利害關係を有するものである、從つて賠償及び救濟は何れも夫れ等の者の間に於てのみ之を受さしむべく、他の一般人の拂込みたるものを以て當該の特殊利害關係人に支拂ふべきでもなく、又他の一般人をしてかくの如き特殊利害關係人の支拂ひたるものゝ中から賠償を受けしむべきでもないからである。かくの如くにして職業乃至地域を標準として利害關係を同じうするものゝ間に幾多の特別賠償基金を設置せしむると同時に、別に一般の賠償問題の爲めに巨大なる一般賠償基金を設置すべきである。勿論此等の一般並に特別なる賠償基金の配置及び組織に付いては實地に付いて尙大に研究を要すべきものがあるけれども、根本の要點は正にかくの如くであらねばならない。

第二に、かくして設置せらるゝ基金の管理は何人をして之を爲さしむべきか。すべて國家をして之を爲さしむべきか又或は之を非營利的なるコオペラチーブの類に委ぬるを至當とすべきか等の諸問題は、今後に於ける國家組織の如何と

關聯して研究せらるべき事柄であつて、制度を實施する上には極めて重要且困難な問題であるが、今は當面の問題に直接の關係なきが故に之を省略する。

尙終りに注意すべき事柄が一ある。若しも將來此制度を實現するとすれば、賠償問題は最早今日の如く被害者加害者間の對個人關係ではなくなつて、被害者對基金、基金對加害者の問題となる。從つて從來は加害者をして賠償責任を負擔せしめ又其支拂を爲さしむることはすべて直接被害者の個人的仕事であつたのに反し、今後はそれが基金管理者の公共的仕事となる。其結果、管理者が此賠償を取立つるに付いて行ふ仕事の內容及び形式は、從來國家が刑事事件に付いて罰金を取立てるのと稍や類似したものに變るであらう。其結果將來或は損害賠償と罰金との區別が全く消滅して、刑罰としての罰金が新なる意味を以て大に其の重要さを增大する時が來るであらうと想像される。

六

要するに、將來の法制に於ては賠償責任は是非共之を社會化する必要がある。かくすることに依つてのみ、損害賠償の最大目的たる損害塡補は完全に容易に合理的に且公平に行はるゝであらう。而して此制度の他の一目的たる豫防的作用も、かくすることに依つてのみ初めて、右の主目的――損害塡補――と矛盾することなしに合理的に行はれ得るであらう。

將來の賠償制度は是非共此點に向つて進まねばならぬ。而して私は、誤判に對する國家賠償の問題を攻究せむとする者は、すべて先づ舊來の個人的にして且狹隘なる賠償理論を棄てゝ、是非共此の新しき未來を考へねばならぬ、と考へるのである。

第二 主權概念と國家の責任

一

國家賠償責任論の妨げとなるべき第二の事柄は、現在一般に行はるゝ國家理論の根底に横たはつて居る「主權」の概念である。それは、現在各國の通說たる「主權は國家に在り」とする議論よりするも、又今日尙我國の少數學者に依つて唱へられつゝある「主權は君主に在り」とする議論よりするも、國家をして其の權力行爲に對して責任を負擔せしむるの妨げとなるものは實に「主權」の概念である。此の故に、主權概念の驗討は、國家賠償責任論を研究する前提として、必ず先づ爲されねばならぬ事柄である。

二

國家其他公共團體の官吏吏員が職務の執行上人民に損害を與へた場合に、其の國家乃至公共團體自らをして賠償責任を負はしむべしとする思想は歷史上必ずしも新しい考ではない。其事は此の問題に關するクラシックスの一である Edgar Loening Die Haftung des Staats aus rechtswidrigen Handlungen seiner Beamten, 1879 中の歷史的記述を一讀するに依つて容易く之を發見し得るであらう。

けれども、ルーソーに依つて唱導せられ、フランス革命に依つて確立せられ、而して爾來今日に至るまで一般に行はれ來りたる國家主權の概念は、理論上必然に國家責任論と牴觸する。成程フランス革命に於ける人權宣言其他の諸憲法は人民の權利自由を保障することを目的とした幾多の法規を設けた。けれども、此等の法律が人民の權利自由を侵犯するものとして恐れたのは國家の名に於て實際の仕事をする所の――從來の國王及び貴族に相當すべき――官吏其他吏員

の專恣であつた。其の專恣に對して人民の自由を保障せむとするのが當時の法律の精神であつた。此故に、官吏が職務の執行上人民に損害を加へた場合に官吏其人をして責任を負擔せしむることは考へたけれども、國家をして其の責に任ぜしむることは到底思ひも及ばざる所であつた。

これは果して何故であらうか？　現代に於ける「主權」の研究者として最も有名なフランスのデュギーは、其理由を次の如くに說明して『事は極めて論理的だ』と冷評して居る（Duguit, Les transformations du droit public, 1913, pp. 224; Harold J. Laski の英譯 Law in the modern State pp. 199）。

「能く見ると、主權と責任とは互に相排斥する二の概念である。無論、主權は之を制限し得る。吾々の傳統的な公法思想によれば、主權は個人の權利に依つて制限されること、尙前者は又後者の權利を制限するのと同じである。此等の相互的制限は――主權夫れ自身の發露であり、而して其の國の法を形成する所の――普遍意思の表現たる立法に依つて規律せられ又それに依つてのみ規律せられ得る。此故に結局法を作るものは主權國家である。從つて國家をして責任を負はしむることは之を認め得ない。傳統的の思想に依れば、責任は法律違犯を前提する。然らば、自己の主權意思の行爲に依つて法を作るものは其の法を犯すことを得ない。專制王國に於ては『王は惡を爲し得ず』從つて責任を負ふこと能はざりしが如く、――主權的に組織せられたる國民に外ならぬ――デモクラチック國家も亦同じく惡を爲し得ず從つて責任を負ふことは出來ない。

『主權國家は主權の表現夫れ自身たる立法の故を以て責任を負ふことは出來ぬ。況んや、行政行爲、裁判行爲の如き執行々爲に付いて責任を負ふ譯には行かない。此等の行爲が法律に適合して居る限り國家に付いても又官吏に付いても責任問題は起らない。又それが法律に違背しても國家に付いては責任問題は起らない、何故なれば、國家は立法を爲し法

を作り、而して其の法律が執行されることを欲したのだから。若しも、其の法律が執行せられず、若しくは犯されたならば、官吏が其の意思を以て主權國家の意思に置き代へたのである。從つて、其際責任を負ふべきは獨り官吏の意思あるのみである。』

主權は組織せられたる國民全體――國家――に在りとする近世國家論は、其昔ローマ法皇の有したもの、專制君主の有したるものを、そのまゝ移して「國家」に與へむとするものである。『中世の「統一」崇拜は近世國家に依つて繼承された。而して近世史四世紀の間に變更せられたるものは單に其の「統一」を支配する勢力の所在に過ぎなかつた』。かくして、昔ローマ法皇に在つたものが近世國家に移されたに過ぎない（Laski, Authority in the modern state, 1919, p. 23）然るに「統一」は常に或る「假定」を前提する。ローマ法皇が神聖不可侵であり "infallible" であるのはそれが爲めであり、專制君主が神聖不可侵であり "The King can do no wrong" であるのも亦それが爲めである。而して、專制君主から「統一」を繼受した近世「國家」が論理上神聖不可侵であり、絕對無限の「主權」を有せねばならぬのは其の同じ理由に基くのである。かくして、國家は本來事實的なる有限の力に過ぎない所の「權力」をして形而上的概念たる絕對無限の「主權」たらしめたのである。

乍併、此の形而上的概念に基礎を與へて之を一般民衆の信條たらしむることに貢獻したルーソー自らは何處までも主權者としての國家と政府とを區別して居る。さうして彼れが絕對無限の主權を與へむとしてるものは獨り前者のみである。此事は此際最も注意されねばならぬ事柄である。所が、國家――則ち組織せられたる國民全體――に絕對無限の主權を與へつゝ、政府に取つては之を與へないといふのは實は不可能なる一の假定に過ぎない。それは結局、專制君主が其權力を擁護するが爲め自己に向つて權力を與へたる一の「神」を自己の背後に擬制したと同じく、政府が事實上絕對

無限の權力を行ふが爲めに自己の背後に絶對不可侵の主權者としての國家を想定し、以て國家の名の下に國民の代表者たることを僭稱しつゝすべて彼等自らの專恣を行はしむるの機會を與へたに過ぎなかつた。かくして、國民一般の自由も平等も到底之を實現し得なかつたのは自然である。

ルーソーの國民主權説は畢竟ラスキの唱ふるが如く「多數者の專制」majority rule を認むることに歸着する（Laski, Foundations of sovereignty, 1921, p. 213.。ルーソーは此種の非難に答へて『一の法案が人民の集會に提出せられたるときに、人民に問はれた問題は、其提案を承認するや又は排斥するやの問題ではなくして、其提案が彼等自身の有する普遍意思 volonté générale に合致するや否やを問はれたのである。各人は自己の投票を爲すことに依つてそれに對する自己の意見を述べたのであるから、夫等の投票の計算から出て來るものは普遍意思の表示である。從つて、若しも余の意見と反對の意見が勝を占めたならば、それは余の誤つて居つたこと、從つて余が普遍意思なりと考へたことがさうでなかつたことを證明するものに外ならない。又若しも余の意見が勝を占めたとしたならば、余は余の欲したることは異なつたことをしたことになるのであつて、其際余は自由ではなかつた譯である』（Rousseau, Contrat social, Livre IV, Chap. II 市村森口兩氏譯「民約論」二四五頁）と云つてゐるけれども、それが一の詭辯に過ぎないことは既にデュギーの唱破した所である（Duguit, Souveraineté et liberté, 1922, pp. 96）。主權は國民に在りと云ふても、それを國民の名に於て行ふものは結局多數者に依つて支持される「政府」に外ならぬ。して見れば、國民に主權ありとし、而して其の主權を絶對無限のものと爲すの論は畢竟「政府」に向つて絶對無限の權力を與へむとするものに外ならぬ。所謂デモクラシーの國民主權説も亦遂に專制君主の神權説と相距ること遠からざるものである。

尙第十九世紀に於て國民主權説の如上の缺點を最も巧に修飾せむとしたものは、ギールケに依つて唱導せられ、エリ

ネツクに依つて大成せられたる國家有機體說である。此說は、國家は一の有機體なるが故に其機關の意思は即ち國家の意思に外ならぬ、と說く。けれども、之れも亦畢竟先に擧げたルーソーの詭辯を去ること遠からざるものであつて、現在の權力者の爲め政府者の爲めに其權力を永遠化し理想化するの効あるに過ぎない。而して、此のことはアントン・メンガーに依つて銳く看破されて極めて皮肉にも次の如くに云はれて居る。『發達したる自然的有機體に於ては凡て個々の構成分子は自然の法則に依つて一定不變の機能を割りあてられて居る。手が腦髓から思考を奪つたり、足が胃から消化と云ふ愉快な機能を奪つたりすることは、決して出來ないのであらう。從つて現社會に於て腦や胃やの如き有利なる地位を占めて居る知識階級有產階級が、法律及び國家の有機說を常に其同胞に推奬する理由も首肯することが出來る』河村氏譯「新國家論」三三頁に依る）。

三

從來專制君主の有したる絕對無限の「主權」を奪つて之を「國家」の手に移しつゝ「政府」の力は之を制限することに依つて人民の自由と平等とを保障せむとする國家主權說の企ては、結局「政府」をして「國家」の名の下に絕對無限の權力を行はしむるの結果を導き出した。

それならば、最早吾々は國家主權說と手を分たねばならぬ。絕對無限の無責任なる「主權」と別れねばならぬ。國家の名の下に爲さるゝ事柄の一切が畢竟何人か個人の所爲に歸着する以上、其所爲をして絕對無責任のものたらしむることは最早吾々の堪へ難い所である。ルーソーは如何に國民主權說を辯護せんが爲めに『主權者はそれを構成する個人に依つて形作られて居るに過ぎないから、それ等個人の利益に反するが如き利益を有することなく又有するを得ない。從つて、主權者は其國民に向つて何等の保障を與へる必要はない、何故なれば、團體が自己の構成部分を害せんことを欲

するが如きは到底あり得ないからである』（Contrat social, Livre I, Chap. VII市村森口兩氏譯四五頁）と云ふても、現實は最早到底かくの如き詭辯の存續を許すものでない。又或は選擧に因つて成立した議會をして權力を行はしめ法律を作らせさへすれば、國民は能く「政府」の專恣を抑へ得ると云ふものもある。けれども、國民は事實上投票を投じたる瞬間に於て最早議員に對する制禦の力を失ふ。而して法律は結局二三の代議士に依つて作られるのである。從つて、代議制度も亦到底國民の權利自由を保障するに足りないのである。

四

玆に於てか、生まれねばならぬものは、責任ある國家であり、責任ある主權である。吾々人間が團體生活を營む限り、其所に世話役としての國家が存在せねばならぬ。統治者としての、支配階級の機關としての國家は或は結局に於て亡び去るかも知れぬ。けれども、世話役としての國家は永久に殘るに違ひない。而して、吾々は其の國家に向つても世話役たるに必要なるだけの權力を與へねばならぬこと勿論ではあるが、而かも其の世話役たる地位は事實に於ては結局何人か人間をして之に當らしむるの外はない。然るに、人間に過失は附き物であり、不公平も我儘も亦免れ難い性質である。一方に於て人間を使ふの外なく、而して人間に過失と不公平と我儘とは必然の附き物である以上、其の過失と不公平と我儘とに因つて生ずる二三國民の損害は已むなくかくの如き世話役を置くことに依つて團體生活を營みつゝある一般國民の共同負擔に依つて之を救濟すべきが至當である。

國民に投票權を與ふることに依つて「政府」に對する監督を充分ならしめむとする企ては事實に依つて失敗した。それよりは「政府」の所爲に因る責任を直ちに國民全部の負擔とすることに依つて、吾々は一層能く「政府」を監督し政治に興味を持つであらう。而して、それは同時に、從來國家無責任の思想の爲めに何等救濟を與へられなかつた一般

人民に取つて必要なる救濟を與ふるの結果になることを考へると、今後の國家は絕對無限の無責任なる主權に依つて保持されるのでなく、反つて責任ある政治責任ある國家に依つてのみ保全されるのだ、と主張せざるを得ないのである。

第三　國家賠償責任の實例二三

一

以上の考へ方を本として國家に賠償責任を負はしめて居る實例は決して稀れではない。以下其の例二三を擧示するであらう。

我國現行の不動產登記法に依ると、「登記官吏ガ其職務ノ執行ニ付キ申請人其他ノ者ニ損害ヲ加ヘタルトキハ其損害ガ登記官吏ノ故意又ハ重大ナル過失ニ因リテ生ジタル場合ニ限リ之ヲ賠償スル責ニ任ズ」（第十三條）ることになつて居る。併し其際國家自らは何等の責任をも負はないことになつて居る。所が、登記簿の記載に誤謬あるが爲めそれに信賴して不動產の取引をした者が損害を蒙る事例は決して稀れではない。而かも、其の誤謬は必ずしも「登記官吏ノ故意又ハ重大ナル過失ニ因」ることなく、或は登記申請者自らの過失に因り、或は登記官吏の輕過失に因り、又或は四圍の事情から萬已むを得ずに發生する。のみならず、それが登記官吏の重大なる過失に因つた場合でも被害者が事實に於てそれを證明することは殆ど不可能に近い。其結果、現在の吾國に於ては、登記簿に絕對の信用を置いて不動產の取引をすることが出來ない。不動產を買はむとする者、不動產を抵當にとらんとする者は、常に多少登記簿の記載の眞否に付いて疑念を抱かねばならぬ。現に不動產取引業者殊に不動產抵當貸附を業とする者は、其取引を爲さむとするに當つて、單に登記簿の記載を調査するのみならず不動產そのものの素情に付いても出來得る限りの調査をして居るやうな有樣である。

其結果現在の吾國に於ては到底敏活に不動産の取引が行はれ難い。所が、不動産の取引を安全敏活ならしむることが社會上善いことであるか惡いことであるかは暫く別問題として、少くとも資本主義經濟の發展物的擔保制度の發達が必然に不動産取引の安全敏活を要求するの傾向あることは之を否定し難い。

玆に於てか、近世の登記法は漸次に登記簿の記載に公信力を與へる傾向がある。即ち縱令登記簿の記載が誤つて居たとしてもそれに信賴して不動産の取引をした者があれば法律は何所までも其者を保護するのである。例へば、甲所有の土地が誤つて乙の所有と記載されて居たとする。丙が其實情を知らずして其記載に信賴し善意を以つて乙から其土地を買受けたとすれば、――吾國の法律によれば此際丙の買受は何等效力なきに拘らず――登記簿の記載に公信力を認めた國に於ては、丙は有效に其土地を取得し得る。かくして、一般人は登記簿に絶對の信用を置いて不動産の取引を爲すことが出來るのである。けれども、其際眞の權利者たる甲は――丙の買受が法律上保護される結果――權利を失はねばならぬ。因つて蒙る彼の損害は果して如何にして償はるべきであらうか？ 無論、彼は濫りに彼の土地を丙に賣つて仕舞つた乙に向つて損害倍償を請求し得るであらう。けれども、乙は或は無資力なることあるべく、其他必ずしも彼から完全に賠償を受け得るとは限らない。玆に於てか、不動産の取引を一般的に安全且敏活ならしむるのはいゝとして、それが爲めに損害を蒙る例へば甲の如きものは果して如何にして救濟せらるべきであらうかと云ふ問題が起る。

此の問題に付いて現在の所最も完全な解決を與へて居るものは、トーレンス式登記法Torrens systemに於ける國家賠償制度である。此登記制度は元來オーストレリヤに於て發明されたものであるが、現在に於てはアメリカ多數の州に於ても之を採用して居る。而して、其の國家賠償制度は大體次の如き考を以て規定せられ實行せられつゝある。登記に公信力を認める結果として損害を蒙る眞權利者があれば、豫め設備せられたる賠償基金の中から之を賠償する。而して、

其の基金は平素不動産の取引從つて其の登記がある度毎に當事者から支拂はれる登記料の中から金を出して之を組成するのである。其結果、不動産取引をする者はすべて多少の金を基金に向つて拂込まねばならぬ。併し、其結果彼は一方に於ては公信力に依つて絕對的安全を確保せらるゝと共に、萬一自己の不動產が登記手續上の過誤により――且公信力の結果として――他人の所有に歸して仕舞ふやうなことがあれば、因つて蒙る損害は直ちに右の基金から支拂はれるのである。それは恰も强制的の相互保險に類似したものである。平素取引を爲す每に少額の保險料を拂つて置きさへすれば、不動產の所有者としても又取引者としても大に安心を得ることが出來る。而して其の結果不動產の取引は一般に安全且敏活となるのである。尙此の制度が如何に不動產の取引を安全且敏活ならしむるの效果あるかに付いては A. G. Cancron, The Torrens system, its simplicity, serviceability and success, 1915 を參照せられたい。

以上のトーレンス式登記法に於ける國家賠償制度に於て最も注目すべき點は、其の根本思想が全く過失賠償主義の考へから解放されてることである。被害者が賠償を受ける根據は決して官吏從つて國家の過失に存するのではない。其際官吏に非難すべき點ありや否やは全く別問題として、とにかく登記手續上の過誤に因つて損害を蒙つた者のすべてを當然に保護せむとするのが本制度の精神である。成程、其過誤が登記官吏の故意又は過失に基くならば官吏法上彼に向つて制裁を加へるもよからう、又彼をして上記賠償基金の中に多少の拂込みをまさしめるのもよからう。けれども、先に記した吾國の不動產登記法第十三條に於けるが如く、登記官吏に「故意又ハ重大ナル過失」ある場合にのみ官吏自らをして被害者に對する救濟を爲さしめ、其以外の場合には絕對に何等の救濟をも與へざるが如きは、一方に於ては過失賠償主義の迷夢に捉はれ、他方に於ては狹隘なる國家無責任論に拘泥しつゝあるものと云はねばならぬ。

二

次に、吾國の現行法に依れば、燒打其他騷擾事件に際して或は門戸を毀損せられ或は窓ガラスを破壞せられ其他各種の損害を蒙つた者は、事實上何等の賠償をも受けることが出來ない。何となれば、其際加害者の何人なるかを知ることは通常の場合事實殆ど不可能に近いからである。

無論、此種の損害は被害者自らが豫め任意に損害保險をつけることに依つて之を救ふことが出來るであらう。けれども、自ら保險をつけない者は何故に保護されないのであらうか？ 彼は、單に事實上加害者を知ることが困難だと云ふ理由の爲めに、何等の救濟をも與へられない。それは彼にとつて明かに甚しき不正でなければならない。

所が、現在諸外國に於ては此種の被害者に向つて國家及び市町村が賠償を與へて居る例が頗る多い。例へば、フランスの市町村制第一〇六條以下は此種の責任を市町村に負はしめて居る。而して、依つて支拂はれたる賠償は結局其の市町村住民の分擔に歸すべき旨が規定されて居る。又從來ドイツ諸聯邦の法律に於ても市町村をして同樣の責任を負はしめて居たが（例へば、プロイセンの Gesetz, betreffend die Verpflichtung der Gemeinden zum Ersatz des bei öffentlichen Aufläufen verursachten Schadens vom 17. März 1850）一九二〇年五月一二日ドイツ國法律は新に國家をして直接此責任を負擔せしむるに至つた。

此種の法令に於いて、市町村乃至國家をして賠償責任を負擔せしむる根據は、決して市町村乃至國家に過失ありと云ふのではない。無論、賠償責任は獨り過失に因つてのみ生ずるものだと考へた狹隘な過失責任主義の思想が一般學者の頭を支配した時代に於ては、本賠償責任の根據をも亦市町村乃至國家の過失に求めむとする傾向のあつたことは事實である。而して、市町村乃至國家は軍隊警察を有するが故に治安の責任者である、然るに、其の責任を完全に盡さざりし結果騷擾を生ぜしめたのは、市町村乃至國家の責任懈怠であるが故に賠償責任を負擔せしむべきだと考へたのであ

る。現に上記のフランス法が——一八八四年に創定された當時には——原則として市町村をして賠償責任を負擔せしめつゝあるに拘らず、當該の市町村が獨立の警察權を有せず又軍隊を有せざるときは、例外として何等の責任を負はざる旨を規定して居たのは、正に此思想の影響を受けたものである。

乍併、本賠償制度の眞精神は決して其所にあるのではない。それは恰も、現在吾國の農村に於ても、何所か或る一家で火事を出したり落雷に遭つたりするやうなことがあると、一村擧つて消防其他救援をしたり見舞をするのと同じ精神であつて、同一市町村に居住する人々相互の間に於ける共同責任、連帶精神、比隣相愛の思想の現はれに外ならないのである。從つて、警察權乃至軍隊を有せざる市町村に在つては此種の責任を負擔することなしとするが如きは、決して本制度本來の精神に合致するものではない。此故に、フランスに於ても一九〇〇年以來此點に關する改正意見が議會に提出されて、終に一九一四年四月十六日の改正法となり、今日に於ては國庫補助の下にすべての市町村をして此種の賠償責任を負はしむるに至つたのである——此の改正法の詳しいことを知りたい方は Recueil périodique Dalloz の一九一六年度第四部三八六頁以下を參照せられたい。

三

尙、戰爭の爲めに荒廢せしめられた土地家屋其他財産の所有者が國家に對して賠償を要求し得るのも亦此の同じ精神に基くのであつて、國民共同の敵と戰ふが爲めに損害を蒙つたものがあれば、他の一般國民は共同の出資を以て其の犧牲者を救ふべきが當然である。而して其の國民共同の出資に依る共同犧牲者の救濟が即ち國家の賠償責任に相當するのである。例へば、歐洲大戰終熄の後フランス國が一九一九年四月十七日を以て制定公布した「戰爭ニ因ル私人ノ損害ニ對スル國家ノ賠償責任ニ關スル法律」が、其の冒頭第一條に於て「共和國ハ戰爭ノ負擔ニ對スル全フランス國民ノ平等

及ビ連帶ヲ宣言ス」と規定したるが如きは、正に其の精神を宣明したものと言はねばならぬ。

第四　誤判賠償の論理

一

個人對個人の賠償問題は今日に於ても大體過失責任主義の適用を以て之を解決することが出來る。しかし、それでも其解決が公平且容易に行はるゝが爲めには、國家其他の管理者に依つて管理せらるゝ賠償基金を仲介として、問題を被害者對基金、基金對加害者の二段階に分ける必要がある。そうして被害者の救濟は專ら其見地より觀察して之を解決し、加害者の責任問題は亦專ら其見地のみより之を考慮して之を解決すべく、決して前者に關する考慮をして後者の解決に影響せしめてはならず、又後者の考察をして前者の解決に影響を及ぼさしめてもならない。其事は既に第一節に於て詳說した通りである。

所が、國家對國民、市町村對市町村民の賠償問題は更に一歩を進めて全然過失責任論から解放される必要がある。何故なれば、過失責任主義の賠償法理は從來專ら個人對個人の問題を標準として研究せられ發達し來たつたのであるから。無論今までの所、過失責任主義に拘泥しつゝそれを出發點として國家の賠償責任を論定せむと企てた學者も決して其例に乏しくはない。けれども、過失責任主義は責任の根據として常に過失を要求する。加害者の自由意思を要求する。其結果、此論を基礎としつゝ國家に賠償責任あることを論定せむが爲めには、どうしても國家に自由意思あり、從つて國家に過失のあり得ることを論ずる必要が起る。

而して、從來の法律家中それを最も巧妙に論じたものは、云ふまでもなく、ギールケ及びエリネックの國家有機體說

である。元來、單に權利主體としての法人、適法行爲の歸責者としての法人を說明するだけの目的ならば、所謂法人擬制說を以て事は足りたのである。所が、法人代表者の違法行爲に向つて法人をして直接責任を負はしむるが爲めには、主として代理の法理を借り用ひたに過ぎない擬制說は終に行き詰まらざるを得ない。

玆に於て、此の行き詰まりを解決せむとして發明されたものが即ち法人有機體說であつて、それが頓て又國家に應用されたものが國家有機體說である。此說に依ると、「國家」は一の人格者であり、「政府」は其の機關である。政府は國家の機關たる限り、國家と別個の人格を有するものではない。國家は機關に依つて意欲し且行動する。機關の意思及び行爲は即ち國家の意思及び行爲に外ならぬ。從つて機關の過失は即ち國家の過失であつて、其責任は直接國家の負擔する所でなければならぬ、と云ふのである。

けれども、此の說は畢竟一方に於て過失主義の賠償理論に執着しつゝ、國家も亦其の理論にあてはまるべき「自由意思」從つて「過失」の持主たることを得る所以を說明せむが爲めに、巧みに組み立てられた一種の「論理技巧」に外ならないのであつて、事の眞相は何等之に依つて說明されては居ない。私は、有機體說の欲する目的を達せむが爲め、此種の廻りくどい論理の技巧を試みるよりも、寧ろ國家其他公共團體の賠償責任に付いては、到底在來の過失主義的賠償理論の適用し難き所以を明かにして、別に新なる賠償理論を考案すべきであると考へる。然らずして、一方に於て在來の賠償理論を固守しつゝ國家も亦其の理論に依つて賠償責任を負ひ得べき所以を說かむが爲めに、國家に意思あり行爲あり機關の意思並に行爲は正にそれに相當すと論ずるが如きは、假令其論理が如何に巧みに且莊嚴に組み立てられたとしても、畢竟明かに一種の空々しき擬制であり又自己欺瞞に過ぎないと云はねばならない。

二

過失責任主義に執着する限り、而して又國家主權論に拘泥する限り、論理は寧ろ國家賠償責任論の否定を導き出さねばならぬ。此の點に於て、現在ドイツ法學界の通說をして否定論に傾かしむるに付いて最も力のあつたエドガー・ローニングの議論は確かに徹底して居る。彼は曰ふ。

『國權の行使に際しては、國家は最高權力として權力服從者に對立して居るのであつて、後者は其の意見に服從する義務がある。個人の私權と雖も國權の制限を成すものではない。私權は立法に依つて變更又は廢止せられ得る。併し又國權保持者としての國家は彼の機關並に官吏として行動する人間に依つてのみ其の意思を作り又それを働かせることが出來る。其の人間の意思並に行爲は、彼が憲法其他法令に依つて與へられたる代表權に從つて意思を作り又働かせて居る限り、換言すれば其權限內に於て其委託せられたる職務を行ふ限りに於てのみ、國家の意思國家の行爲として效力をもつのである。個人の私權は國權の制限を成すものではないから、國家の機關官吏に依つて作られ又働かされた國家意思も亦個人の私權範圍を犯すことが出來る。無論、法治國に於ては國家最高の機關——即ち王國に付いて云ふならば國王——と雖も、其個人としての我意を以て之を犯し得ないには違ひないけれども。法律の形式を以て現はされた國家の意思は、國家が個人の私權を侵犯し得るに付いての條件と形式とを豫定して置く。而して、機關官吏が此等の法規に從つて行動する限り、其行爲は假令それが個人に財產上の損害を加へるとしても尙之を適法だと云はねばならない。…………國家は其の法律に依つて、一定條件の下に私權を侵害する權能從つて又義務を彼の機關に與へることが出來る。彼は彼の機關に向つて、一定の制限內に於て機關自らの意見に從つて私權侵害の手段を執るの必要ありや否やを判斷する權能を與へることが出來る。即ち彼は、個人の私權を脅かすが如き危險を防止するが爲め機關の職權發動を必要とするや否やの判斷を一定の範圍內に於て其の機關に一任することが出來る。此等すべての場合に於て、國家機關が法定の範

圍内に於て行動する限り、或は其の行爲が時宜に適せず又或は不必要な手段を執つたと云ふやうなことがあつても、尙彼等の作爲不作爲は違法ではない、彼等が違法なる惡意又は過失を以て行動したと云ふ證明が爲されざる限り、其際起つた加害は決して違法ではない。官吏が錯誤又は過度の心配の爲めに不必要な手段を執つたとしても、それが法律の制限を守つて居る限り違法ではない。例へば、或る人が長い間未決監に拘留されたが、後其無罪なことが分つたとしても其の未決拘留處分が法律の規定に從つてのみ爲された以上、それは決して違法ではない…………』(Edgar Loening, Die Haftung des Staats aus rechtswidrigen Handlungen seiner Beamten, 1879, S. 93 f.)。

論理は確かに透徹して居る。けれども、かくして「機關自らの意見に從つて」必要なりと考へて執られた所の手段が實は全く不必要であつたり、又適當なりと考へて爲された方策が實は全然不適當であつた場合に、其の手段方策の爲に害を蒙つた國民は何故に之を救濟する必要がないのか？過失責任主義に捉はるゝ人々は、此際其の被害國民に救濟を與ふることは即ち機關を構成する官吏自らを制裁することだと考へる、さうして一方に於て自由裁量を許して居ながら機關が其裁量を過つたからと云つて賠償責任を負はせるやうでは到底官吏の職務は勤まらないと云ふ。けれども、それは被害者救濟の問題と加害者をして責任を負はしむる問題とを必然に聯關せしめて考へる從來の賠償理論に捉はれる爲めに出て來る心配である。此種の場合に、官吏は自由裁量を許されたのである。從つて重大な過誤に因つて著しく其裁量を過りたるが如き場合に懲戒其他官吏法上の責任を負ふことはありとしても、彼自らをして賠償責任を負はしむべきでないのは勿論、通常の場合に於ては官吏法上の責任をすら負擔せしむべきではない。何となれば、彼は許されたる自由裁量の範圍に於て自由に活動することが許されるのでなければ、到底滿足に其職務を行ふことが出來ないからである。

併しながら、官吏をして責任を負はしめてはならぬと云ふことは、決して被害者たる國民を無救濟のまゝ放置して差

支へないといふことを意味するものではない。官吏が或る程度の自由裁量を許されて居るのは決して其範圍に於ては何をやつても差支へないと云ふ意味ではない。すべての行政行爲には必ず目的がある。從つて客觀的に觀察すれば、行政行爲の適法なるべき範圍は定まつて居る。唯其の範圍は事實上法規を以て之を豫定することが不可能だから、官吏に對して或る程度の自由裁量を許すのである。然るに、官吏も亦人間であつて全知全能ではないから、彼が許されたる自由裁量の範圍に於て爲したる行爲、從つて形式上官吏法上の適法なる行爲であつても、後より見れば明かに當該の行政行爲本來の目的を超越し、從つて實質的には適法と認むべからざるものが出て來るのは當然である。而してかくの如き場合に於ては、其の行政行爲は形式上適法且有效であり、從つて又官吏それ自身に付いては何等の責任を生じないけれども、其の實質的不適法——而かもそれは人間をして官吏たらしむることより生ずる避くべからざる結果である——を理由として被害者に賠償を與ふべきが當然である。而して、其賠償金の負擔者はかゝる——已むなく或る程度の自由裁量を許し從つてやゝともすれば形式上適法にして而かも實質上不適法なる場合を生じ得べき——行政制度に依つて利益を受くべき一般の國民でなければならない。

官吏には自由裁量を許すの外ないから、其範圍內に於て爲された官吏の行爲から生ずる損害に對しては、何人も救濟を求めるを得ないと一概に考へて仕舞ふのは思慮が餘りに形式的であり、餘りに單純である。

三

裁判の誤りに因つて損害を蒙つた者に對する賠償の問題も亦全く之と同樣の論理を以て解決することが出來る。

吾々が團體生活を營んで居る以上、其所に必ず爭ひの起るのは當然である。而かも、爭ひは決して吾々人間生活本然の目的ではないから、吾々は何とかして其爭ひを止めねばならぬ。玆に於てか、吾々の團體生活は必然に爭ひの裁斷者

を要求するのであつて、裁判所の必要は即ち此所に存するのである。而して、法律は實に其の裁判所の裁斷をして成るべく公平確實のものたらしむる爲めの尺度である。

然るに、其の團體生活の爲めに必要缺くべからざる機關である裁判所は事實上人間をして其職に當らしむるの外ない。而かも、人間に過失は附き物である。否、不公平すらも附き物である。のみならず、時には故意に惡意を以て他人を害することのあり得る人間である。かゝる全知全能ならざる人間――從つて到底人を裁くべき完全なる能力なき人間――ではあるものゝ、それを使はなければ事實上裁判所を作ることが出來ない。玆に於て、吾々は平常或は國家試驗により或は懲戒制度に依り、又或は地位の保障に依つて、出來得る限り有能有識なる裁判官を得ることを力め、又彼をして成るべく公平に裁判を爲さしむるやう力めては居るものゝ、而かも、事實上時には法律の解釋を過り事實の認定を誤る裁判官の出て來ることは到底之を防止し難い。又は甚しきに至つては故意を以て不當の裁判を爲すが如き裁判官が出ないとも限らない。かゝる裁判官が出た場合に、彼自らの官吏法上の責任を如何にすべきかに付いては色々考へもあらう。殊に、故意を以て不當の裁判を爲したるが如き者には、官吏法上の制裁として普通の懲戒處分に處する外、罰金を課して之を賠償基金中に拂込ましむるのも一法であらう。けれども、それと全く關係なく、誤判の爲めに損害を受けたものは兎も角も救はれねばならぬ。而して、それを救ふものは國家――即ち國民全體の納税――でなければならぬ。何故なれば、吾々が團體生活をして居る以上必ず裁判所が必要であり、而して裁判所は過失と不公平とが附き物である所の全智全能ならざる普通の人間を以て之を構成するの外なき以上、其の全智全能ならざることを原因として生じた損害はすべてかくの如き裁判所を必要とした團體生活者全部の共同負擔でなければならないと考へられるからである。

私の誤判賠償の論理はかくの如くに極めて簡短である。けれども、此簡短なる論理を理解するが爲めには、どうして

も先づ一般賠償責任の原理として被害者救濟の問題と加害者の責任問題とは全然引き離して考へらるべきものたることが會得されねばならぬ。而して又國家賠償の法理に付いては被害者救濟の資金を何人の負擔に歸せしむべきかゞ主たる問題であつて、當面の責任者たる官吏の官吏法上の責任問題と被害者救濟の問題とは全然引き離して取扱はるべきものなることが充分に理解される必要がある。

第五　餘論

一

以上を以て、誤判賠償に關する私見の大體を述べ終つた。無論之に對しては幾多の反對論あるべきことが豫想されるから、結論として玆に其豫想せらるゝ反對論の二三に向つて多少の辯駁を試みやうと思ふ。

先づ第一に提出せらるべく豫想される反對論は、誤判を理由として國家に責任を負はしむるときは、國家及び裁判官の威厳は到底之を保つことが出來ないと云ふ議論である。しかしながら、此議論は畢竟從來の絕對無限の主權者たる無責任國家の專制を以て國家存立の絕對的要件なりと考へる舊來の思想に捉はれつゝあるものだと云はねばならない。從つて、之に關しては先に縷述したる所の外別に多く云ふべきものがない。要するに、玆では唯無責任なる國家の專制的暴力の尊敬を强制することに依つて僅かに國家的統一を保つことの出來た時代は既に過ぎ去りつゝある、相互の理解と責任とを基礎とした新しき國家が生まれつゝある、又どうしても生まれねばならぬと云ふことを一言しさへすれば足りると考へる。

次に想像される反對論は、國家が此種の賠償責任を負ふときは一般國民は到底其の負擔に堪へざるべしと云ふ財政的の反對意見である。成程此制度を實施する爲めには相當の財源を要すべきこと素よりであるが、其の額が一般納稅者を

して著しく苦痛を感ぜしむるが如き程度に上らうとは到底想像することが出來ない。無論、多少の負擔は增加するであらう。けれども、裁判所は吾々國體生活の必須機關であり、而して誤判は「人間」をして裁判所を構成せしむることから生ずる避くべからざる出來事であるとすれば、之に因る損害を國民全體の共同負擔とすることは極めて自然であつて國民全體をして此點に關する多少の負擔を爲さしむることは決して不當ではない。

第三に豫想される反對意見は、國家が若しも誤判に對して賠償責任を負擔せしめられるとすれば、國家は必ずや官吏に向つて干渉する、從つて官吏殊に裁判官の獨立は著く害されるであらうと云ふ議論である。併しながら私は、若しも政府が此の賠償責任を苦痛とするに於ては、其結果政府が官吏に向つて干渉するに至るであらうと云ふことを恐れるよりは、寧ろ夫れが爲め政府自らが顧みて、或は官吏の選任を愼み或は職權の行使は付いて一層愼重の態度をとるに至るべきことを喜ばんとするものである。殊に、若しも上述の誤判賠償理論を應用して不當勾留に對する賠償法理を制度の上に實現するに於ては、現在檢事警察官が只管自己の便宜のみを顧慮して人民一般の權利自由の重んずべきことを忘れながら、濫りに逮捕監禁を行ふの弊は充分之を除去し得べしと考へるのである。

要するに、賠償法理と國家理論とに關する見解さへ一新されるならば、誤判賠償の法理は容易く容認せられ得るのである。之に反して、事其所に至らざる限り、幾多の反對論は尙多樣に續出するであらうと考へる。從つて、此問題の研究に付いては、根本思想の轉換が最も重要である。

二

總に以上の原理を法令の上に實現するに付いては尙研究を要すべき幾多の技術的問題あること勿論であるが、今玆には一々之に論及しない。又本論に關聯して、此種の問題に關する現行法令及び裁判所判決例の趨勢を講究することは極めて興味あり且必須の事柄であるが、其等はすべて事柄が甚しく技術的になるからして、寧ろ別の機會に於て法律學の專門誌上にそれに關する私見を發表したいと考へて居る。

本文では唯問題の根本に付いてあらましの議論をしたゞけのことである。

國際貸借理論と我國經濟界の危機

堀江歸一

一．

經濟の目的とする所は國民生活の繁榮を求めるの一事であつて、總ての經濟政策は其基調を此點に置かなければならぬ。私人の經濟に於て、收支の金額が常に平均して居るとか或は時に支出が收入に超過して居るとか云ふような狀態であつたならば、其經濟は不振の嘆を免かれない。私人經濟に於て、其主體である一家現在の家長なり、又は前代、前々代の家長なりの勤勉努力に依つて、年々收入の一部分が蓄積され、其蓄積された資本から利子利潤を生じて、後年家長と爲つた者の收入を補足したならば、私人經濟の運用は極めて安樂と爲る。若し其れ或る年度の收入に加ふるに、既往に蓄積された資本の利子利潤を以つてした金額を其年度の收入とし、一方に費用を節約して、剩し得たる所を資本の增殖に充てたならば、私人經濟の繁昌する勢は殆ど窮るものなしと云へる。啻に私人經濟の繁昌に資するに止まらず、斯く蓄積された資本に依つて、各種の生產業が起され、社會に必要なる物資を供給し、人々に適當なる職業を賦與したならば、其國民經濟を利することの大なることも亦論を俟たないのである。

右に述べた私人經濟の繁榮を遂げる法則は大體に於て、國民經濟にも之を適用するを得るであらう。今日の國民經濟に於ては、一國單獨の力だけでは、何としても國民の生活を完成せしめるを得ない。或る一國と他の一國とを比較して考へると、其間に氣候風土も違うし、天然の資料にも差があり、國民の技能、知識亦其れ〴〵特長とする所がある以上は、一國は他國に對して、低廉なる費用を以つて、或る物資を產出するであらうし、又他國の全然產出し得ざる物資を

自國に於て産出するを得るが如く、他國も亦一國に對して同一の關係に居ることを否定するを得ない。斯くて國際間には此關係から物資の交換が行はれ、互に自他の長所を生産上に盡すことに勉めるのである。此點に於ては、恰も今日內國の各地方に於て、其れ〴〵其地方の特殊の狀況に適應した事業が起り、他の地方に起つた事業と相對して、國內に於ける交換が行はれ、分業の利益を關係者に與へるのと同一の道理に據つて、國際間の貿易が行はれ、又國際間の分業が認められるのである。

國際間に貿易の行はれるに當つて、輸出貿易を以つて、輸入を賄うとか、輸入貿易に對する支拂に充てるに、輸出貿易を以つてすると云ふことは、彼の輸出超過を以つて、一國に富を吸收する唯一の手段としたり、輸入超過が繼續すれば、經濟的亡國の悲境に陥るとしたりする說と共に、一時世間に行はれ、今日に於ても尙は一個の俗說として認められるようであるが、輸出貿易と輸入貿易との間には、決して收支と云ふが如き關係の存するものでない。若しも兩者の間に斯る關係が存在し、一方に收得する所を以つて、他方の決濟に充るとしたならば、兩者は必ず金額に於て符合す可き道理であり、一年二年は時に均衡を失うことがあるとしても、長い歳月の經過する內には、均衡の保たれなければならぬ道理であるのに、之を事實に徵するに、一國に於て輸出貿易と輸入貿易とが相均衡するが如き、若しも事實であつたとすれば、偶然の出來事に止まり、普通の例から推せば、一國は輸出超過國か、輸入超過國かの孰れかに屬するし、又國に依つては、或る時期には輸出超過國であつて、他の時期には輸入超過國と爲るが如き變動を生ずること多しとするのである。

二

何故に貿易上に於て、輸出入が均衡を保たず、或る國は輸入超過を生じたり、他の國は輸出超過に接したりするのであるかと云へば、此事たる、今日國際間に於ける經濟的關係の複雜であることの結果、一國と他國との間に交渉する所は一の貿易のみに止まらず、他に海運業に於ける運賃、保險業に於ける保險料、仲介業に於ける手數料、移住民の送金、

外國漫遊者の費消金、移住民の内地送還金、外國に放下された資金に對する利子收益等が一國と他國との間に授受されて、債權債務の關係を生じ、債權科目に屬する收入額が債務科目に屬する支拂額に超過して居る國は其超過額に對する部分の支拂を商品の形で受取るから、自然輸入超過國と爲るし、債務が債權に超過して居る國は其超過額に對する部分を商品の形で支拂うから、前者と正反對に自然輸出超過國たらざるを得ない。即ち一國の輸出貿易と輸入貿易とは均衡を保つものではないが、債權に屬する收入と債務に屬する支拂とは必ず一致し、輸出貿易は前者に、輸入貿易は後者に配屬せしめられ、貿易關係以外の收支の「バランス」如何に依つて、或は輸入超過國と爲つたり、輸出超過國と爲つたりする。故に一國が外國より利子利潤を收納したり、運賃手數料を受入れたりして、國際貸借上に債權を持てば、恰も輸出に對して、輸入の行はれるが如く、右の債權に對して、必ず商品の輸入されるものあつて、斯くて國際貸借の均衡を保つに至るのである。サー　ロバート・ギッフェンは十九世紀に出現した英國の經濟學者中、最も正確に、又最も精細に國際貸借の理論の研究に從つた人であると云へる。而して氏は或る場合には、英國が外國に輸出した資本に對する利子收益に依賴して、輸入超過を決濟するを得る道理を擧げて、英國の經濟的繁榮の此所に繫がることの大なる所以を說明したが、他の場合には、外國の競爭に依つて、對外債權の收入の增加する勢の抑制されるや、之を以つて英國民が諸外國に就て、原料品や食料品の供給を仰ぐに就て、大なる妨碍を及ぼすものであるとして、國民に警戒を加へることに力を致した。而して上記の如き債權の收入を以つて、所謂「無形の輸出」(Invisible Exports)であるとした用語を創造して、後に傳へたのは、實にギッフェン氏である。蓋し對外債權の收入は商品の如く形に於て見るを得ないが、實際には商品の輸出されたと同一の効果あるものであるとしたのであつて、是れは後日彼のハートレー・ウヰザース氏が對外放資に依つて、利子利潤を回收することを目して、「利札の輸出」(Exports of Coupons)と稱したのと、同巧異曲の言と認められる。無形の輸出にした所で、利札の輸出にした所で、既に一方に輸出が行はれて居る以上は、他の一方に此輸出に對するだけの商品の輸入が行はれ、無形の輸出に對して、有形の輸入のあることの爲めに、商品の輸入超過の貿易上に現はれるのは、當然であつて、斯の如くして輸出入は不平均であつても、國際貸借の均衡は必ず求められ

るのである。

三

一國が商品の輸出を以つて、同一金額に於ける商品の輸入を購つて居る場合には、恰も私人經濟に於て、其主體たる私人が當時の收入に依つて、生活上に必要とする費用を支辨すると同じく、生活の狀況に於て、收支切迫せる趣きを免かれない。幸に其人の健康が維持され、職業が繼續して行けば、經濟の維持に支障を告げないようなものゝ、是等の點に不祥の變動が起つたならば、費用を辨するだけの收入を得られず、其差は借金なり、救助なりに依つて、之を塡補せざるを得ない。之と同じく、輸出入略ぼ同額であつて、輸出を以つて輸入を決濟して行く國に於て、天變地異其他豫想す可からざる事件の爲めに、輸出が劇減し、一方に輸入が內國民の生活又は國民產業の維持に必要なることの關係から行はれる爲めに、何としても之を抑制するを得ない狀態に居つたとしたならば、輸出入の不均衡は其國に於て新に債務を他國に負うことに依つて、決濟するの外に、道なきに至る。而して一旦債務を負うた以上は、年々其利子を支拂う點に於て、或る時期の後に至れば、元金を決濟する點に於て、是等に相當する商品を輸出して、之に當らなければならない次第であつて、此商品を產出するに必要なる資本の運用や、勞力の供與に於て、正に債權國に貢納を致すと同樣の關係に立たざるを得ない。此負擔が曩に外國物資の輸入超過に依つて得た利益と均衡を保つかどうかは、一個の疑問に屬するであらう。

我國に於ては、貿易上の狀況を觀察して、多數の人々の間に、如何なる感想が懷かれるかと云ふに、輸入超過が續けば、必ず經濟社會の前途を悲觀する一方に、輸出超過が續けば、其反對に經濟社會に何等か利益の齎されるを得るが如くに樂觀すること、恰もマーカンチリズム時代に於ける議論と擇ぶ所あるを知らないのである。然しながら如何に輸出超過であるからと云つて、或る國が外國に爲す可き義務を荷つて居つて、之を決濟する爲めに、多額の商品を輸出し、斯くて其輸出が輸入に超過するものであつたならば、何等喜ぶに値しない一方に、如何に輸入超過であるからと云つて

も、其輸入の超過は一國に之を決濟するに足る確平たる對外債權の收入あつて、行はれるものであれば、毫も意に介するに足らないばかりでなく、却つて外國から低廉なる價格の物資を容易なる條件の下に、內國に供給せしめる所以として、歡迎したければならない。獨逸は今日聯合諸國に對する賠償金として、一千三百二十億金馬克の債券を發行し、五分の利子の外に一分の減債基金を支拂はなければならぬ其上に、每年二十億金馬克の金額や、輸出貿易に對して二割五分に相當する金額をも支拂ふことを要する。而して獨逸は何に依つて、此支拂を果すかと云へば、貿易上に於ける輸出超過に依るの外に、道はない、此場合に獨逸の貿易に輸出超過の現はれるのは、畢竟獨逸國民をして聯合諸國に償金と名づくる貢納金を支拂ふ爲めに、餘分の勞働と餘分の資本運用とに當らしめるものである。然も獨逸の現狀に於ては此輸出超過すら、倘ほ之を期し難き爲めに、煩悶して居るものであるとすれば、獨逸の窮態誠に憐れむ可きと同時に、輸出超過の必ずしも喜ぶものに非ざる所以は此一事に依つて、優に之を理解するを得るであらう。

四

輸入超過に對して、我國に於て兎角悲觀論の生ずることに就ては、多少の酙量す可き事情を存する。第一、國民が一時の投機熱に驅られて、無謀なる消費を試み、多量の不生產的消費に屬する物資を輸入したとか、第二輸入される物資は機械とか、原料品とか言ふような生產資料であつても、其れが內國の事業に固定して、直に生產上の能力を發揮するに至らないとか、第三輸入貿易に對して、之を支拂ふ確平たる收入を持たない、輸入は單に其國に於て外國から借入れた資金に對して行はれたり、結局今日行はれる輸入に對して、將來債務を外國に起して、決濟に充てる必要を生じたりする場合に於ては、輸入超過は一國の經濟生活上に不良なる影響を及ぼさゞれば已まないであらう。第一の場合は日本に於て好景氣が進んで、國民に浮華輕佻の風の生じた時に、常に起る所であり、現に歐洲戰役の成金時代に於て、其盛なるを見た。第二の場合は是れも日本に於て、好景氣の漸く勃興し來つて、投機熱稍興時代に推移せんとする際に現はれる事柄であつて、機械、鐵道などが多量に輸入されるが、其れが未運用に當つて、更に外國に[illegible]されるかと云

へば、其時の來るまでに或る期間を要し、其期間に投機熱勃興時代の常として、一般物價が騰貴し、生産費亦増進して既製品としての販路を外國に得るに難き事情と爲り、當業者をして現に生産品を有しながら尙ほ資本固定の現實苦を嘆ぜしめるに至る。第三の場合は是れ亦日本が日露戰爭後から歐洲戰爭前に至る七八年間、當に實驗した所であつて、當時の實際を云へば、政府や民間事業家が外資を輸入するから、商品の輸入超過を惹起し、商品の輸入超過が起るから、之を決濟する爲めに、外資を得なければならぬことゝ爲り、斯くて我國には外國の物資は盛に流入し來るが、一方には外債が山積し、輸入される物資の内には、不生産的消費品があり、生産的消費品であつても、尙ほ固定停滯して、再生産の用を爲し難き一方に、外債の負擔は歴々として我國の財政に及び來ると云ふことが當時に於ける我國經濟社會の病根と爲つたのである。

斯の如き諸種の關係に依つて、輸入超過が一國に不利の影響を及ぼす、殊に其超過が當業者の投機的取引に基き、生産上の意義を有しない、之を有するとしても、其現はれるには、或る時期を要し、其間資本の固定を生ずる恐れある場合には、中央銀行たるもの、宜しく將來經濟社會の推移す可き狀況を察し、市場に警戒を與へる意味に於て、金利步合を引上げることは、最も必要の處置である。輸入超過が或る期間繼續して、其決濟に金貨の拂出を以つてしたならば、結局金融市場は壓迫され、金利步合は上進し、有價證券の市價は低落する等、種々面白からぬ事相に接するに相違ないが、斯る效果の生ずるに先だつて、中央銀行が或る程度まで、金利步合を引上げることは、投機的取引の勃興から生ずる輸入超過を抑制し、經濟社會に起らんとする變動を寡小ならしめる所以であると解される。

五

斯の如く觀察すれば、我國一部の人士が時に我國に起る輸入超過に臨むに、悲觀的態度を以つてすることも、强ち不條理の事でなく、又必ずしも一片の杞憂として、斥け去るを得ないが、茲に一國に於ける輸入超過であつて、無害有益とす可きものがある。其れは何であるかと云へば、一國が國際貸借上、債權國の地位に居り、債權の收入が年々確實に

國內に囘收される一方に、輸入超過の金額は債權收入額以內に止まる場合であつて、斯る場合に於ては、吾人は輸入超過を取つて、經濟的繁榮の證左であるとし、又輸入超過が多ければ多いだけ、經濟的繁榮の加はつたものと見ることが出來るのである。然しながら一國が國際貸借上、債權收入を持つとした所で、其債權收入と云ふのは、所謂貸方勘定の收入であり、貸方勘定に屬する收入の借方勘定に屬する支出に超過した部分であつて、其內容に至つては、國に依つて千差萬別の有樣であると共に、內容の如何が一國の經濟的運命を決定するに、重大なる關係を持つのである。何を以つて國際貸借に於ける貸方勘定の內容とするか、諸國を通覽して、其重なる項目と可きものは、

第一、對外放資に對する利子又は利潤

第二、海運業の運賃

第三、各種の手數料保險料

第四、海外に於ける移住民、出稼人等の內地に對する送還金

第五、內國遊覽外國人の內地消費金

であつて、如何なる國が右項目の何れに重きを置いて居るか、又何れを閑却して居るかと云ふことは、國情に依つて、著しく相違することを免かれない。例へば之を英國に就て見れば、同國の對外債權收入は主として第一項から第三項に至るものであつて、第四項の如きは絕無であり、第五項亦殆ど數ふるに足らない。歐洲戰爭前に於ける英國の對外放資は三十五億磅であつて、サー、ジョージ、ペイシュの計算に據つて、其れが平均四分二厘餘の利廻りに運用されて居ると云ふことであつた。而して對外債權收入の各項目は

對外放資の利子收益	一五〇、〇〇〇、〇〇〇磅
運賃	九〇、〇〇〇、〇〇〇
手數料、保險料	三〇、〇〇〇、〇〇〇

を合せて、二億七千萬磅に上るものと計算され、一方に年々一億三千五百萬磅を加へる輸入超過額に之を合の對外債權

收入から決濟し、殘つた收入額一億三四千萬磅の大部分は海外に於ける新放資に充て、他の小部分は之を金貨金地金の形で內國に囘收した次第である。英國の國際間に於ける經濟上の地位が斯る狀態に居つたものとすれば、幾ら外國から輸入される商品が多くして、輸入超過を現出したとした所で、之に對しては決濟の道が定まつて居る。而して輸入される商品、輸入超過の依つて生ずる商品は專ら原料品や、食料品であるとすれば、英國が對外債權收入を持つことは、內國民の必要とする食料品、內國工業家の需要する原料品を最も低廉なる、又有利なる條件の下に、獲得する所以であつて、輸出工業國としての英國の地位は正に此點に於て、最も鞏固に築き上げられたものと認められる。

六

更に此機會に於て、吾人の攻究を要することは、資本輸出國又は國際貸借上に於ける債權國としての英國と國際金融中心市場としての英國との關係であつて、私は是等二個の事實が何としても不可分の關係を持つものであることを斷言して、憚らない。蓋し國際金融中心市場として、有す可き最も重大なる資格を數へれば第一、其市場に於て人々の有する債權は何時に於ても、之を金に引換へ得られること、第二斯く引換へられた金は其所有者の好む所に依つて、自由に外國に輸送され、其輸出に就て、何等妨碍の加へられないこと、第三諸外國から到來する資金調達の交涉に對して、多くの滿足を與へ得ることとの三點に歸着する。一の金融市場が相當の發達を遂げた曉に於ても、盡く是等の三資格を具備するのは、容易の業でないのであつて、之を具備するには、國際貸借上に於ける債權國として、甚大の勢力を擁することを必要とする。英國經濟上の環境の如きは、戰前に於て、正に此地位に達したものであつて、前記の如く每年對外債權の收入を以つて、輸入超過を決濟した後に、尙ほ殘る一億三四千萬磅の大部分は其儘外國に於ける放資を充當塡補しても宜しいし、或は金貨の形で國內に囘收しても毫も之を妨げない、孰れの方面に向つて、對外債權收入の如何なる割合のものが供されるかは、年來の習慣に依つて、自ら定まつて居るに相違ないが、此略ぼ定められた割合が時に異動することのあるのは、一に英國に於ける英蘭銀行の割引步合引上に依るものと認めなければならぬ　即ち英蘭銀行の金利引上げに依つ

て、內國金融の狀勢が自ら緊縮し、市中諸銀行亦其れ〲割引步合を引上げ、市場に行はれる一般の金利步合を高からしめたならば、其時まで外國に在つて、其儘放資の道に就かうか、或は內國に歸還して、利殖の便を求めようかと、迷つて居つた對外債權の收入殘額は內國に於て高利に依つて、運用されることを有利であり、又便宜であるとし、續々內國に歸還する勢を生ずる其結果は必ず金貨の囘收と爲つて、吾人の眼前に現はれざるを得ない。斯くて從來英蘭銀行が割引步合を引上げれば、恰も物の響に應ずるが如く金貨の內國に流入し來るのは、斯く外國に彷徨しつゝある對外債權の收入あるの故に歸す可きであり、既に斯く自由に金貨を吸收する自信あればこそ、英蘭銀行は何時と雖も、其所有する金貨の外國に拂出されることを意に介せず、倫敦をして自由金市場たらしめ、斯くて國際金融の中心點として必要なる條件を備へしめたのである。即ち斯くの如くにして國際金融の中心點であることゝ、國際貸借上に於ける債權國たることゝの關係の不可分である所以が說明されるのであつて、若しも英國にして債權國として優越して居らず、又隨つて金貨を自由に外國に供給するを得なかつたならば、國際金融の中心點たるを得なかつたとは、論を俟たないのである。

七

斯る事情の下に、債權國として、將た又資本輸出國としての英國の經濟が營まれ、又榮へ來つたものであるとすれば其裏面に於て國際間を通ずる平和の維持と云ふことが英國に取つて、絕對必要である一事は何人も之を想像するを得るであらう。唯他の諸國が極端なる軍國主義を持し武力に保護されて、經濟の發展を謀ればこそ、英國も之に誘はれて、軍事上の力を張り、以つて他に對抗することを期した、而して千九百十四年に於ては、遂に歐洲戰亂の渦中に投ずるに至つたのであるが、此戰爭が英國經濟の基礎を動搖することは甚だしきものであつて、國民をして一時は國を擧げて、[illegible]の襲う所と爲つたかの感を懷かしめたようであつた。[illegible]の一つは戰時に於ける輸入超過の劇增であつて、他の一ツは對外債權收入の減損に外ならない。平生の經濟狀態であれば、輸入超過は一億三四千萬磅に止まつたのであるから、二億七千萬磅の對外債權收入を以つて、之を決濟して、尚ほ若干の殘餘を見ることを得たのであるが、英國戰時の輸入超過

は平時に二倍し、三倍し、千九百十八年に於ては七億八千三百七十八萬六千磅と云ふ多年來の記錄を打破する巨大なる數字を示すに至つた一方に、對外債權の收入中、對外放資の利子收益は諸外國並に殖民地の經濟狀態の戰爭に依つて攪亂されるに隨つて、兎角怠納勝ちに爲り、運賃や保險料の收入は戰時英國の船舶が兵員や糧食を運搬する爲めに、政府に徵發されたことゝ、獨逸潛航艇の跋扈並に獨逸の潛航艇封鎖に脅かされて、船舶の航行の萎縮したことゝの結果、著しく減少し、手數料の收入に至つては、戰時財政の急を支持することの必要から、倫敦市場に於ては、到底他國の金融上に於ける要求に應ずることが出來ず、遂に政府自ら進んで資本の輸出を制限し、禁止する方針に出でた程の次第であつて、此種の收入の如き、全滅に歸することゝ爲つた。即ち一方には對外債務が增加して、他の一方には對外債權の收入が減少したとすれば、其間のバランスは何に依つて決濟されるであらうか。之を決濟する道は第一內國所在の金貨を拂出すか、第二外國に有する債權元金を支拂の用に充てるか、第三外國に債務を起し、其收入を支拂に振替へるか、三策の或るものを行うより外にない。然も英國は世界に於ける金の分配を支配する權能こそ持つて居るが、國內に存する金は餘りに多しとするを得ないし、又之を拂出すことは、戰時に於ける金融市場の安全を保つ所以でないから、第一の方法は實行の域に達せず、自然第二第三の方法が併用されて、戰時英國は年來增蓄した對外債權の一部分を喪失すると共に、新に外國に債務を負うことゝ爲つた。此勢を以つて進んで行つたならば、英國經濟的優勢の基礎は全然破壞されざるを得ない。戰時に於て英國に食糧の不足したことも、國民に取つて大なる苦痛であつたに相違ない、陸に於ては獨逸の飛行船、海に於ては獨逸の潛航艇が其れ〴〵暴威を逞うすることも、英國民に取つては、甚だしき脅威であつた趣きを失はない。然し是等の苦痛や、脅威は固より一時的のものであつて、戰爭が過ぎ去れば何人の記憶にも殘らない、唯戰後英國の經濟に對する脅威として、殘された所は對外債權の減損と輸入超過の劇增とであつて、如何にして英國官民が此逆勢を凌駕し、將來の運命を打開するかは、一個重要の問題であつて、英國々運の盛衰は一に其解決に繫がるものと見られたのであつたが、最近の狀勢から判斷すれば、英國の經濟社會は著しく順境に向ひ來り、戰爭の爲に破壞された經濟上の基礎も漸次恢復治癒されるに至つた。其證左として私が茲に舉げんと欲するものゝ第一は貿易上の逆勢

の次第に抑制されるに至つたことであつて、旣に掲げた千九百十八年に於ける輸入超過七億八千三百七十八萬磅を以つて、入超額の最高記錄とし、爾來漸次減少することゝ爲り、

	千萬磅
一九一九年	六六三、七七二
一九二〇年	三七五、四二六
一九二一年	二七六、四三九
一九二二年	二七九、六四四

と云ふ數字を示すを得た一方に、此入超額の決濟に充てられる對外債權の收入は如何に爲つたかと云へば、受取勘定の純額は

	一九二一年 百萬磅	一九二二年
對外放資の利子收益	一二〇	一七五
海運業運賃	三四〇	一一〇
手數料	四〇	三〇
合計	五〇〇	三一五

と爲ることが計算された。然らば對外債權の收入額は輸入超過額を決濟して、餘りある次第であつて、其餘れるものが新に對外放資に供せられることゝ爲る。即ち戰爭中對外放資は永く杜絕するの已むを得ざるに至り、殊に內國に於ける資金調達の必要に迫られて、政府自ら資金の輸出を制限し、禁止したが、右の如き形勢の展開と共に、外國並に殖民地に對する放資も

	千磅
一九二〇年	三九、五二八
一九二一年	一一二、八〇一
一九二二年	一三〇、一五七

と云ふ數字を示したのであるから、大體に於ては英國の經濟的國運が戰前の優勢に復歸する端緒に就きつゝあることは、之を爭うを得ない。而して英國の經濟恢復を齎した事由斯の如く英國が早く戰後の經濟恢復に成功し、戰前に於ける經濟的優勢を近き將來に再現せしめるに至つたに就ては、決して何等の負擔を荷はず、又犧牲を拂はずして、獨り其效果ばかりを收めたのではなく、種々の努力が含まれて居ることを知らなければならぬ。其重なるものを列擧すれば、左の如くである。

第一經費の緊縮。英國の經費は戰爭の影響を受けて、其最も多く膨脹した際、即ち千九百十九年度に於ては、二十九億七千二百萬磅と爲つたのであるが、其れが同年以後に行はれた行政整理の效果に依つて、

一九二〇年	一、六四二
一九二一年	一、二七一
一九二二年	一、〇三九
一九二三年	八一六

に減縮され、斯くて生じた歲計上の餘裕を利用して、千九百二十三年度の豫算案に於ては、減債基金の繰入れと、或る程度の減稅とを併せ行ふに至らしめた。是れが時の大藏大臣ボールドウヰン氏に對する世間の信用を增進せしめる原因と爲り、政治上の閱歷に於て比較的後進である同氏をして、幾多の先輩を凌いで、ボナー・ロー氏に代つて、內閣を組織する事實を生ぜしめたことを考へたならば、經費の縮小が英國經濟社會の危機を救ふに就て、資する所の少なからざりしは論を俟たない。

第二、斯る財政狀態の改善は英國の信用を高め、最近數年間に於て國債市價に十點以上の騰貴を來さしめたことは、著しく英國の金融諸機關に於ける資產狀態を鞏固ならしめると共に、銀行に就て資金の融通を求むる者の融通力を大ならしめ、此一事が商工業の伸張を促すに、大なる效果を及ぼすに至つた。

第三、政府の經費に著しき收縮の加へられたことは、物價の下落を促し、物價下落の勢の引續くことは自ら金利步合

の下落を惹起すること、爲つた。英蘭銀行の割引步合が千九百二十一年七月十三日以來三分に引下げられ、諸種の金利步合の二分臺に居るが如き、英國の金融の如何に緩漫に爲つたかを示す證據であつて、經濟上の機運の恢復した商工業の復活した、物資生産高の増加したことの偶然に非ざる所以を知るに難しとしないであらう。然も斯く金利の低落するに至るまで、英國民が金利の高きに苦んだことの尋常一樣なかつたことは、吾人の諒察に値する所である。

第四、右の如く英國に於て公債の市價が上進した、金融が緩漫に爲つたことに就ては、政府の財政の立て方が與つて力ある一事を認めなければならぬ。即ち英國の國債は戰前七億一千一百萬磅に過ぎなかつたものが千九百十八年三月末に於て五十九億二千百萬磅に増加し、人をして其増加の急なることに、一驚を喫せしめたが、戰後に於ても財政整理の方針の確立しなかつた爲め、國債現在高は相次いで増加し、千九百十九年末に於ては八十億七千九百萬磅を數へた、而して其募集の容易でない結果、「政府紙幣勘定」に於て國債を引受けしめた爲め、一方に國債が發行されると同時に、他の一方に政府紙幣の増發を促すことは免かれ難き所であつて、同紙幣の發行高は千九百二十年末に於て三億六千七百六十二萬磅に達し、其大部分は國債所有高を代表して居つたが、千九百二十年來國債現在高の減少すると共に、政府紙幣の發行高は回收され、通貨制度を健全のものたらしめると共に、財政を通じて、金融を壓迫する弊を除却することに努力した事實は明瞭であり、斯る壓迫が除かれて、金融が常調に復したものと見なければならぬ。而して爰に揭げた千九百二十年以後の對外投資の如きも、英國の低廉と爲つた金利步合に比較して、諸外國並に殖民地の金利步合が高貴であればこそ行はれるのである。斯る狀勢を作るに就て、最も有力なる原因と爲つたものは、政府の非募債主義であるとすれば、政府が此主義を確立し、又維持するに當つて、自ら荷つた勞苦は甚だ大なるものとして、稱揚しなければならないのである。

八

國際貸借と一國の國際經濟との關係から、英國々際貸借の實際問題に遡して、多くの紙數を費したが、私は再び國際

貸借の理論に關する研究に立ち戻りたいと思ふ。一國が國際貸借上に於て、債權國たる地位を擁し、債權の收入に依つて、外國から物資を輸入することの如何に有利であるかと云ふ事實は既に說明した所であるが、債權收入の內容には種々の相違があり、其內容の相違が一國に於ける經濟の立て方に大なる影響を及ぼすのである。債權收入の種類を解剖して、吾人の第一に擧げんとするものは、對外債權の利子收益の二者であつて、是等の收入たる、要するに一國が或る程度まで資本の蓄積に於て成效し、金利歩合が低廉と爲り、其蓄積された資本が外國に輸出された結果として、生ずるものに外ならないが、此收入の生ずるに就ては、二種の道がある。一は內國の資本家が外國の債券類を買入れて、其利子を收得するものであつて、外國人の經營に係る外國株式會社の株式を買入れるが如きも、之に類する。要するに資本家は內國に居りながら、外國に放下した利子を獲得しようとするものであつて、外國に對する資本の運用法としては、最も危險の少ない代りに、收益歩合も亦低いことを免れない。他の一は資本家なり、或は其代表者自身なりが親しく外國に赴いて、適當と認める事業を經營し、之に其必要とする資本を注入する。斯くて資本家の獲得するものは資本の貸出に對する單純の利子に止まらず、利子に企業者利得を加へた金額と爲る。斯くて國民の對外的企業心は大なる刺戟を受けるに止まらず、單純なる利子を收得する場合と違つて、外國に於ける企業の繁昌するに隨ひ、假令ひ其使役する勞働者は外國土着の者を以つてするとしても、內國に於ける多數の青年を事務員として外國に簡派し、彼等をして對外企業に親しましめ、他日の大成を謀る素地を作らしめる。更に內國の資本家が外國の債券を引受ける形に於て、資金を輸出する場合には、其資金が如何に運用されるかは、一に外國債務者の自由なる處置に一任され、資本家は之に對し、干涉し、容喙する權利を持たないが、若しも彼等が自ら外國に於て事業を經營する場合には、如何であらうか。資本家は其認めて可なりとする所に資本を運用して、最大の利潤を獲得することに勉めるばかりでなく、更に一歩を進めて、自國經濟社會の發展に必要なる資料の供給を豐富ならしめるように、對外企業の方針を向けることも出來る。資本家が資本家である上に、內國に於て或る事業を經營して居り、而して資本の一部を外國に輸出する場合に、其輸出に關聯して、

第一、輸出される資本を以つて、必ず自家の工業に於て必要とする原料品の生產なり、又は其生產に便する未開地の

開發に供すること、

第二、右の働きを自由ならしめる爲めに、資本輸出國は資本の供給を受ける國に向つて、門戸開放、機會均等の主義を持し、其實行を強要すること、

第三、輸出される資本の一部として、資本家自身の製造した機械の類を供給したり、又は資本供給の附帶條件として、右の機械類を購入せしめること

の諸事實の行はれるのを見るのである。

九

斯の如く觀察したならば、一國が單に外國に債券買入れの形で資金を供給するのと、企業經營の形で、資金を注入するのと、利害孰れに在るかは、之を知るに難しとしない。前者に傾いたならば、國をして一個の金貸國たらしめるのであつて、假令ひ高利に資金を利殖するの利益は之を收めるを得るとしても、富家翁が他人に資金を貸付けて、利息日歩の勘定に忙殺されると同じく、何等直接に企業を奬勵する效果を奏せず、單に自己の囊裡を肥すに止まり、國民をして委縮退嬰を事とするに至らしめるの傾きを生ずるに反し、國民が海外萬里を遠しとせず、自己の支配し得る富を齎して、企業に從事する此精神が驅て發展し、其國をして國際經濟上に有力なる地歩を占めしめるに至るのである。資本輸出國の立場から觀察して、英吉利と佛蘭西との異なる所は單に外國に供給されて居る資本の分量の多寡ばかりではない、此外に輸出される資本の形式に異なる所のある一事は何としても看過す可からざる事實に屬する。即ち佛蘭西人の鄕里に愛着する念に強く、又對外的企業の精神に乏しく、或る一つの目的に向つて、邁往精進する力に貧しき結果は彼等をして若干の利潤を貪る爲めに、外國に資金を供給せしめても、尙ほ外國債の應募、外國會社の社債買入れ等を重なる形態の放資法たらしめる。斯くて對外放資は佛國資本家をして懶惰安逸の民たらしめることに一歩を進めたかも知れないが、此以外に彼等の對外企業心を刺戟したとはするを得ない。之に反して英國の對外放資に於て、特色とす[illegible]なる

點に現はれるかと云へば、債務の買入れよりも　企業其ものに重きを置くの一事である。是れは英國人が從來一個の島國に生活する國民として、外に發展する精神を備へ、又少年時代の教養に依つて、此精神を練磨され、天涯地角如何なる處にも一家一族を擧げて移住し、其處に新なる天地を開拓する天分に豐なる結果であつて、斯くて英國の對外放資をして必ず對外企業に伴はしめる。上記の如くサー　ジョージ・ペイシュが歐洲戰前金利の平準の低かつた時代に、英國の對外放資が四分二厘の利廻りに當ることを計算したのも、畢竟對外放資の內に、對外企業に關係する資本の少なからざる結果であつて、若しも國民の多數に對外的企業心を缺き、金貸國を以つて、外に對するが如き根性であつたならば、利廻りは遙に低きに居らざるを得なかつたことゝ想像されるのである。

私は對外放資に關する英佛の比較論から進んで我國の對外放資に及びたい。我國に於ける對外債權の收入が如何なる內容に居るかは姑く措き、一片の希望を表白すれば、我國民は決して單純なる金貸を以つて、外國に望む可きものでなく、寧ろ對外企業者を以つて、任じなければならないと考へる。或は一個の石を以つて、二個の鳥を獲ようとするの譏りを免かれないかも知れないが、日本の經濟的立場から考へれば、對外放資なり、對外企業なりの方針を正しきに就かしめて、原料品の供給、其確保に關する問題を解決することを以つて、急務とするのである。

一〇

日本が面積三百九十一萬三千五百六十平方里を有し、人口三億二千六百六十五萬人を養ふ支那を隣國に持つことは、經濟立國の上に、大なる意義を持つ次第であつて、此意義を闡明して、日支經濟政策の根柢を確立するの必要なるは、論を俟たない。其政策宜しきを得たならば、爲めに生ずる利益は日支兩國のみならず、世界到る所に及ぶであらう。唯日本の如き支那に對して、如何なる經濟政策を以つて、臨む可きやに就て、何等確乎たる方針を持たず、殆ど一時の氣紛れか、或は列國に追隨する趣きあるに過ぎないのは、私共の甚だしき遺憾とする所である。

從來我國の對支外交を支配する上に、軍閥の勢力の盛んであつた際には、確に軍事上の實力に依つて、支那の領土を

侵略し、斯くて經濟上の進路を伸張せしめようとする意嚮が少なくとも軍閥者流の間に存したことは、疑を容るゝ能はざる事實であつた。歐洲戰爭中、聯合諸國は固より各自の國に於ける戰備に忙はしく、自然支那に對して結び來つた關係を等閑視する一方に、獨逸の如きは、支那が聯合諸國に加擔した結果、支那と絶縁の狀態に陷つた際、日本が支那に對して臨んだ所は極端なる軍閥者流の考案に基いたものであつて、其方針は大隈內閣の下に於ける對支二十一個條の要求と爲つて、實際に現はれ、甚だしく列國の感情を害すると共に、支那の官民をして日本が其軍事上の勢力を挾んで、虎狼の慾を逞うするの念に急であることを感ぜしめた。其時以來支那人が日支協約成立の日を國恥紀念日とし、又機會を求めて、二十一個條の撤廢を要求して、已まないことの如き、其處に幾何の誠意の存するかは、疑問に屬するが、日本としては歐米諸國の軍事的行動に忙殺されつゝある時を以つて、恰も鬼の居らない內の洗濯同樣に心得、老弱の支那に向つて最後通牒まで與へて、彼の最も好まざる所を强要し、殊に第五項の要求は事實上日本をして支那の經濟財政軍事警察等に對して、支配權を有するに至らしめるものであつて、軍閥者流の最も重きを置いた所であつたに拘はらず、英米兩國の質問に會するや、希望條件に止まることを聲明し、支那をして所謂「以夷制夷」の外交方針を以つて日本に臨めば、日本の如き與し易きものであると云ふ感を懷かしめたことの如き、今日に至るまで、日本の對支外交の拙劣極まれる事實を示すものであるが、其事たる、要するに我國對支外交の根柢が當時軍閥の支那侵略論に支配されて居つた過誤に坐するものに外ならない。

大隈內閣の後を承けた寺內內閣は流石に軍閥の頭領を內閣の首班に戴いた爲め、對支外交に侵略主義を以つてしたことは、依然として舊の如くであつたが、唯此の主義を行ふに對支借款を以つてした點に於て、多少の特色を現はした。當時の支那は財政困難の狀態であり、之に當るには、外國に就て借款を起すことを必要としたが、歐洲戰爭の際、歐米諸國に之を求めることは不可能であつた爲め、勢日本に依賴するの必要に接した。日本は其際歐洲戰爭の經濟的影響として、內外に所有する正貨增加し、之を外國に利殖運用しなければならぬと云ふ純經濟的觀念のあつたことは勿論であつたが、同時に借款に依つて、日本の對支經濟的實力を發展させやう、北方軍閥派に南方征討費の財源を供給して、彼

等を日本の藥籠中のものにしようと云ふ考へから、擔保物の確否や、事業の將來の如きは殆ど之を眼中に置かず、借款さへ成立させれば可なりと云ふ態度を持して、支那に臨んだ。其の結果は今日に至つて、支那から利子も徴收されず、元金も回收されない一億數千萬圓の借款が殘つて、此借款に對して發行された公債を引受けた日本の特殊銀行を窮地に陷らしめたのである。

大隈内閣の支那に對する軍事的行動も、寺内内閣の對支借款政策も共に對支政策として大なる誤りであつて、前者は二十一箇條の條約を殘し、今日に至るまで、日支兩國々交上の障碍と爲つて居り、後者も亦單に日本の特殊銀行に損失を及ぼし、其地位を危殆ならしめたに止まる。斯くて原高橋兩内閣が從來の對支政策を打切ることを聲明したのは、時宜に適つたようのものゝ、單に既往の政策を打切つたゞけで、何等之に代る可きものゝ樹立されないとすれば、政友會内閣は前後數年間を通じて、對支無策を以つて、其日暮しを爲したものと評するの外なき次第であつて、閣並國務に對して、怠慢を極めること、斯の如きは他に類を見ざる所である。而して今日の加藤内閣に爲つて、如何なる對支政策が行はれたか。支那政府が講和會議や、ワシントン會議に於て、列國の間に宣傳を試みたり、各國の間に運動を敢てしたりしたことは、相當の效果を奏するに至つたものと見へ、遂にワシントン會議に於ては支那に關する九個國條約成立して、支那年來の希望である利權の回收を或る程度まで、實現する時期に到達せしめ、日本亦諸外國に追隨して、支那の爲めに讓步する所の少なからざるを見た。斯の如く觀察すると、結局日本の對支政策は或る時には駝鳥の如き勢を以つて突進するかと思へば、他の時には處女の如き趣を以つて、退讓する。而して進退の時に正しきを得るかと云へば、決してさうでなく、甚だしき亂調子を極めるものと評せざるを得ないが、斯る結果を生ずるのは、畢竟我國民の間に支那に對して將來我國の結ばざる可からざる經濟上の關係に就て、確乎たる理解を缺くの結果とせざるを得ない。此の邊の理解にして行はれたならば、日本は支那に對して、如何なる點に於て進む可きものであり、又如何なる點に於て、讓る可きものであるか。進退の節始めて正しきを得る道理となるのである。

二

日本の工業は之を率直に云へば、今日の規模に於ける發達を維持しやうとか、又は今日以上に發達を期圖しようとかするには、先づ何としても原料品確保の道を確立しなければならない。私が原料品確保と云ふのは、

第一、原料品の供給の豐饒であり、將來益々豐饒と爲る見込のあること、

第二、外國に就て原料品の供給を受ける場合に、其供給が廉價で、又運送に多くの期日費用を要せずして、得られること、

第三、原料品の代金を支拂ふ爲めに、我國の外國に輸出する物資、我が國の外國に供給する勤勞に對して、成る可く相手國に於て、確實なる需要の存すること、

の三點である。若しも北米合衆國の如き、天惠に富んだ國に於て企劃される工業であれば、原料品問題の如きは、第一の要件に就て顧慮すれば、即ち足れりするを得るのであるが、我國の如く如何なる種類の工業に就て之を見ても、原料品の內地自給と云ふことの望まれない場合には、勢第二第三の條件に顧みて、供給確保の策を定めなければならない。我國の工業が近年長足の進歩發達を致したことは、明白の事實であつて、此國土の狹隘なる我國に於て、人口四十萬以上の大都會が全國を通じて、六ツの多きを數へ、是等六大都市の人口が全國市區人口の一半以上に當るが如き、明に工業發達の爲めに大都會に人口の集中しつゝある證據であり、他方農村に於て、頻に農業勞働者の不足を訴へつゝあるが如き、亦以つて工業發達の結果とす可きである。斯く諸種の工業は相當の發達を遂げたものゝ、其原料品は多く海外から之を輸入する、然も其の海外と云ふ內には、我國に對して、距離の遠く、隨つて我國の權勢の及び難きものもあり、又今後其地方の經濟的發達の狀態に依つては、何時輸出の阻害される虞れあるものもあるとすれば、我國の工業の如き、現在の原料供給の有樣を以つてしては、到底安んずるを得ない。玆に於てか私は曩に論述した國際貸借の理論を支那に適用し、一方に日本の資本、日本人の經營能力を以つて、支那に於ける富源を開發すると共に、日本の資本や、經營能力に對して、受取る可き利潤なり、利子なりを斯く開發された原料品其ものゝ形態に於て、我國に輸入し、以つて原料

品の供給を確保する政策を樹立することを必要とする。日本が從來英米兩國と共に、支那に向つて、門戶開放、機會均等を根本方針として臨んだのは、何の爲めであつたか。或る一國又は少數の國の支那に於て行ふ專恣獨占を旨とする經濟上の政策に依つて、門戶が閉鎖されたり、機會が不均等に爲つたりすることを恐れた爲めに外ならない。果して然らば斯る方針の支那に依つて遵守される限り、日本は其趣意に基き、列國と相對して、資本に於て、經營能力に於て、互に競爭を試み、支那人には埋藏された富源の開發される爲めに生ずる利益を與へると共に、日本人としては、資本輸出國たり、又債權國たり得る素地を支那に求め、同時に原料品の供給を確保することゝしなければならないのである。日本が歐洲戰爭中、英佛露諸國の國庫債券を引受け、是等の國に對して債權を獲得するに至つたのは、我國の金融史上に特筆す可き所であるに相違ないが、對外債權獲得法としては、佛蘭西流を學んだものであつて、私の取らざる所である。而して當時寺內內閣が支那に向つて成立せしめた借款契約にした所で、支那政府と日本に於ける特殊銀行とを連結し、前者の發行する債券を後者に引受させたに止まるとすれば、是れ亦私の主張する、我國民の企業的精神に基いた債權獲得法を以つて見るを得ないのである。

二

我國は國際貸借上、債權國を以て見るを得るか、其れとも債務國とす可きものであるかと云ふ問題になると、時の狀況に依つて、自ら相違を生ずる程、不安定の嘆なきを得ない。歐洲戰爭當時我國の對外債權收入が著しく增加したのは海運業の世界的活躍に依つて、運賃並に傭船料の收入の增加した結果であるが、兩者共に極めて不定のものであつて、今日の如き不景氣に際しては、其減少することを至當とする。保險金保險料の如きは、受取る所と支拂ふ所と略ぼ同額であり、船舶の消費金に至つては、我國の支拂ふ金額を以て多しとする。放資に伴ふ利益金は我國の支拂ふものより、受取る方が多いようであるが、對外放資の從來著しく不振であつた我國に於ては、固より其大なることを期し難い。斯の如く推究すると、我國が國際貸借上、有利なる差額を維持するに就て、常に相當の力を爲して居る債權收入の科目は

海外出稼人の內地送金と遊覽外人の消費金との二種となるが、私は斯る二科目の存することを以て、我國經濟的優勢の頗る低き程度に居る證左であるとして、之を悲しまざるを得ない。戰前獨逸の國際貸借に於ける債權收入は額に於て必ずしも優良のものではなかつたらうが、其れにしても利子利潤、運賃を重なものとし、假令ひ南北亞米利加に於ける小賣商人の內地送金はあつたにしても、出稼勞働者の送金は殆ど數うるに足らなかつたであらう。斯の如き項目の收入を國際貸借の債權に持つのは、伊太利、露西亞、支那、日本等に於ける特有の事實であつて、詰り是等の國に於ける國民生活程度が劣等であればこそ、一部の國民は他の優等の國に赴いて勞働し、然も其國に定着永住する見込を持たず、又勞働者から資本家に進まうと云ふ希望をも懷かず、一日勞働に從つて、生活上の必要を充し、其上に剩し得た金額があれば之を本國に送金し、其蓄積されるのを待つて、自身も亦本國に歸還しようと云ふ次第であつて、勞働者の內地送還金が國際貸借に於て、債權科目に上つて居るが如き、其國の經濟不振であり、國民生活の程度も亦低く、自ら恥を外國に暴露することを求めるのと異ならない。之を換言すれば人肉を輸出するものとするを得るであらう。日本の九州地方や、中國地方が移住民の送還金に依つて、存外富んで居ると云ふ說は屢々傳へられる所であるが、果して此事が國家富實の繁榮を加へる所以であらうか。私はそれよりも內國に産業が起つて、國民生活の程度が上進し、出稼勞働者の如き之を供給する道の杜絕するに至る狀態の出現するに至ることを以て、我國に取つて、却つて喜ぶ可き所であるとする。

三

之に次いで我國に於て債權收入の科目として、最も不良性を帶ぶるものは外國人の內地消費金である。北米合衆國の如きは內國人の外國消費金を以つて、却つて國際貸借に於ける支拂勘定に數へて居る位に、一般國民は外國漫遊を好んで居るが、日本の如きは、寧ろ反對の地位に居るのであつて、國民の外に消費するよりも、外から吸收する消費金の方を以て、多しとする。日露戰爭後我國が諸外國に巨額の債務を負ひ、其利子支拂だけを以てしても、國際貸借に於ける支拂科目と爲ることの重大であつた爲めに、我國に於ては如何にして之に當るだけの債權收入を獲得す可きものである

かと云ふことが朝野の一問題と爲つた。其際に一部の人士の主張した議論は實に外國の漫遊者を我國に誘致し、其消費金に依頼して、右の目的を達しよう、日本を擧げて、世界の公園にしようとするのであつて、其方便として、西洋式旅館の建築には國庫の保護金を與へよとか、通譯業者の改良を試れとか、日本の風景を外國に紹介せよとか種々の說が唱へられた。日本が果して國際貸借上に有力なる債權科目を得るまでに、盛に外國人の漫遊者を吸引し、其消費金に依頼する程の風景文物を持つて居るかどうかは別問題とし、假に彼等が群を成して、我國に渡來するとして、彼等の內地に於ける消費金を大ならしめようとするに當り、尋常の手段のみを以つて、彼等に接して足れりとするを得るであらうか、尋常の手段を以てしても、自然我國の同胞をして彼等の爲めに、ホテルの客引であるとか、給仕人であるとか、自働車の運轉手であるとか云ふやうな不生產的業務に當らせ、彼等をして外國人の投ずる祝儀の多寡に意を勞せしめると云ふ結果と爲る。即ち外國遊覽者の消費金を多からしめるには、自ら我國民の多數をして所謂伊勢乞食たらしめ、江ノ島の鮑取りたらしめるのであつて、些少の債權收入はあるとしても、其國民品性に及ぼす不良の影響は斷じて許す可からざる所である。倫敦は晩秋から冬にかけて、濃霧に包まれ、白晝尚ほ人馬の交通に不便を訴へしめる時なしとしない。然も倫敦に世界人士の來往するのは、必ずしも其社交季節である五月から十月の頃の間に限らない、濃霧の時期に於ても、外國人の出入殆ど其跡を絕たないのは、要するに商工業都市としての繁榮が常に世界諸國の國民を吸引する結果であつて、彼等の消費金の如きは、殆ど英國中の何人の眼底にも映じない、寧ろ彼等が倫敦其他の大都市に於て行ふ取引に對して支拂ふ手數料こそ、債權收入として重大なる科目と爲るのである。若し夫れ我國が外國遊覽者から不自然なる方法に依つて、多數の消費金を貪らうとするように爲れば、結局社會の風紀を頹廢する手段の試みられるのは、當然であるとしなければならぬ。斯の如きは經濟と道德との調和を破るものであつて、如何に表面上に經濟上の手段であることを標榜しても、其實質に於て、之に反する甚だしきものとせざるを得ない。

右の如く論述した所に據つて、考へれば、一國が國際間に經濟的優勢を維持するに就ては、資本輸出國であり、債權國であることを必要とする。更に是等の狀態に達する前提としては、工業國であり、殊に輸出工業國であることを必要とするであらう。而して一國の資本輸出國である爲めに、內國の工業が原料品の供給に豐富なることを得たならば、其刺戟を受けることの大なるは勿論であつて、是等の諸條件は互に相緊聯し、負縁して、其一を離すを得ないのと斷ずるを得るのである。然も我國今日の狀態は如何であるか。世界五大工業國とか、三大强國とかの班に列したと稱されるが、經濟的國情に就いて見れば、資本輸出國としても、輸出工業國としても何れも事の半途に居り、然も其半途に停滯し、彷徨しつゝあるのであつて、何時に爲つて、終局の到着點に達するか、之を測り知るを得ない。即ち從來の如く、第一、財政が常に不整理の狀態に居つて、多額の經費が時の經濟的景氣の良否を問はずして、濫費され、第二、國債の市價は常に低落し、財產として、將た又資金融通の目的物として、之を所有する者を苦しめる、第三、金利は常に高くして、企業振興の妨碍と爲り、第四、物價は諸外國の群を拔いて高く、國民生活を壓迫して、貯蓄に依る資本の增進を妨げる、更に經濟上の根本問題としては、第五、富や所得の分配が不公正であり、第六、租稅負擔の狀況は此不公正なる富や所得の分配に一致せず、斯くて租稅負擔の不公正を生ずると云ふが如き狀態を以てして、何で我國經濟的優勢を維持し、伸張する爲めに、對外債權の獲得が期し得られるであらうか、私は到底其望みの絕無であり、又絕無に近いことを斷言するに躊躇しない。歐洲戰爭當時我國が多少の國際的債權を獲得したのは、誠に戰時のドサクサ紛れに乘じたのであつて、一場の火事場泥棒に過ぎない。今日に爲つて之を見れば、南柯の一夢に比す可きである。經濟恢復の曙光を認めるに至つた英國は盛に對外放資に從ふ一方に、日本は英國に就いて資金の融通を求めて、一時の小康を貪らうとする。英國が或る時期に脅かされた經濟的危機は拂ひ去られて、殆ど其跡を留めない一方に、日本は再び舊時の債務國に復しようとする。英國に於ては、チエンバーレンもボールドウヰンも其れ〳〵財政家として名を成したが、日本には最近數年間張三李四の輩が財政の局に當つたのみであつて、其誰れであつたかも、殆ど人の記憶に殘らない、何と驚く可きコントラストではないか。私は國際貸借の理論から我國經濟的優勢の保たれ可き根本論を試みて、茲に筆を擱くものである。

新經濟政策下の露國の產業組織

山川均

一

露國に近代的の工業が發達しかけたのは十九世紀の末年であつて、西歐諸國では工業資本主義が全盛期に達した時であつた。露國は日本と同じように、資本主義の先進國が百年を費して發達した近代的の工業を、僅かに二三十年間で輸入した。斯ように戰前の露國には、大規模の紡織工業や金屬工業と共に、是等の工業に原料と燃料とを供給する炭坑や鐵鑛業が發達して居つた。けれども之は露國の全經濟の上から見れば、ほんの僅かな割合であつて、人口の大部分は、農奴の狀態を去ること遠からぬ農民であつた。從つて露國は、工業上の生產物は大部分、これを外國に仰いでゐた。

開戰は露國の工業の進步に、一大打擊を與へた。交戰國は各々その工業と交通機關とを動員して、戰爭の遂行に用ひたが、ツアーの政府は全然これに失敗した。資本家は官僚政治家と結托して、有ゆる種類の腐敗が行はれ、有ゆる方面に投機が行はれて、殆んど拾收すべからざる有樣となつた。

斯くて三月革命の當時には、露國の工業と交通機關とは解體の危險に瀕してゐた。然るに一方には、革命によつて擡頭した勞働階級の勞働條件改善の要求は益々高まつて來た。そこで臨時政府は、一方には斯ような勞働者の要求に應じ他方には解體せんとする工業を立て直ほす焦眉の急に迫られた。

ところがツアーの政府の下で、戰爭による國民的の危機に附け込んで法外な投機的利潤を得てゐた資本家や工業主は、一切の改革に對して頑强に反對した。彼等は一九一七年の會議でも、產業の復興は露國に於ける焦眉の急であることを認めたにも拘らず、實際に於ては極力產業の復興を妨げ、勞働者の要求や臨時政府の施設が少しでも彼等の投機的

利潤の收得を妨げるような場合には、彼等は何時でも、工場の閉鎖を以つて勞働者と政府を威嚇した。たゞに威嚇したばかりでなく、彼等は實際にも、續々工場を閉鎖したので、露國の產業狀態は、救ふべからざる破綻に急いでゐた。一九一七年の八月九月の頃になると、この勢は益々甚しくなつて、資本家と工業主とは、そこでも此處でも工場を閉鎖し有ゆる金目のものは掻き攫らへて國外に持ち出した。

そこで既に一九一七年の六月には、莫斯科の勞兵ソヴイエツトの臨時執行委員會は政府及び工業主の代表者との會議に際し、(一)原料及び燃料の供給ある場合には決して工場を閉鎖せぬこと、(二)工場を閉鎖すべきや否やは、其の工場に於ける勞働者、政府及び莫斯科ソヴイエツトの代表者によつて最後の決定を與へることと云ふ二つの要求を提出した。けれどもメンセヰキと社會革命黨とが優勢を占めた當時のソヴイエツトには、この要求を遂行する力がなかつた。そして實質に於て資本家階級の政府たる臨時政府には、固より資本家を敵として產業の解體を阻止することは出來なかつた。斯ように臨時政府は勞働階級の下からの壓迫と資本家階級の上からの勢力との中間を彷徨して、眼前に進行する產業の解體を傍觀して居る間に、形勢は愈々最後の破綻に近づいて來た。そして此の危機を救ふべき唯一の方法として、『一切の權力をソヴイエツトに！』といふ要求が勞働階級の間に高まつて來た。

二

一九一七年十一月七日を以てソヴイエツト政府が樹立せられると、資本家及び工業主による產業の解體を阻止する爲に、十二月二十日を以つて勞働者產業管理の布告を出した。けれども勞働者の產業管理に對しては、資本家は積極的の反抗と共に、消極的のサボターヂを以つて對抗したので、翌一八年三月三日を以つて、政府は更に產業國有の布告を出した。そして布告の發布から五月十五日に至る間に、三百四の企業が國有となつたが、その半數足らずは鑛業及び金屬工業であつた。之を地方的に見れば、國有化の最も完全に行はれたのはウラル地方であつて、右の期間中に、この地方に於ける鑛業及び金屬工業の約八割は國有となつた。

直ちに一切の產業を國有とすることは、ソヴィエット政府の最初からの計畫ではなくて、資本家階級の抵抗を破る必要に迫られた政策であつたことは、次の實例によつても知ることが出來る。一九一八年の五月六月に亘つて開かれた經濟委員會全露大會の當時は、石油業は尙ほ國有化されてゐなかつた。ソヴィエット政府は石油坑主に對し、其の產額の一定分量を、一定の價格で國家に引渡すことを求めたが、坑主は法外な戰時の利潤を保障せられぬ限りは、石油の採掘を中止すると云ひ、政府がこの要求に應じないので、彼等は直ちに事業を中止した。そこで經濟委員會全露大會は燃料の危機に鑑み、石油業の國有化を決定した。其他紡織業にしても金屬工業にしても、化學工業にしても、ソヴィエット政府は當面の政策としては單に勞働者の管理權を確立し、急激な變化による生產の減退を防ぐ爲めに、是等の企業は出來得る限り舊所有主の手で經營を續けしめようとしたが、同じ事情の下に國有化を餘儀なくされた。是等の工場は、最初は勞働者の管理權を中心として工場主と勞働者との間に爭議が起つたり、又は工場主が工場を閉鎖した爲に、別々に國有化せられたが、右の大會により、今後は各產業を全體として國有化することとなつた。斯くて一九一八の十二月までに國有となつた工場の總數は千百二十五であつて、何づれも最も重要な大企業である。また鑛業、電氣工業、金屬工業、護謨工業砂糖業、紡織業の大部分は、何づれも產業全體として國有化された。產業の國有化は一九一八年、一九年を通じて進行し、一九二〇年の一月には、國有工場の總數は九十八萬五千四百十八人の勞働者を雇傭する四千二百七十三に上り、尙ほその外に、八萬七千八百五十三人の勞働者を雇傭する四千六百九の私有工場は、國家の管理を受けてゐた。

是等の工場は、勢ひ當初は、勞働者の工場委員會によつて管理せられることになつた。臨時政府の下に於ても、工業主の工場閉鎖に對抗する必要は、到る處の工場の勞働者と使用人との間に工場委員會の組織を促進し、是等の工場委員會のうちには、旣に或る程度の工場監督(コントロール)を行ふて居るものすらもあつた。そこで工業主が工場を閉鎖したり放棄した場合には、勢ひ是等の工場委員會の手で生產を續けようとした。ソヴィエット政府は十二月八日の布告によつて是等の工場委員會を公認し、勞働者の管理權を確立した。けれども單なる監督では資本家側の抗爭に打勝つことが出來ないので、工場委員會は更に一歩を進めて、自ら工場の管理經營に當つた。そして工業主や經營者が之に服從せぬ場合には、其の

工場を沒收して國有にした。

斯くて國有工場が增加して來ると、是等の工場は產業別に從つて分類し、各產業に中央局を設けて管理した。中央局部の任務は所屬の工場に原料及び燃料を供給し、生產を統制し、生產物の價格を定め、生產物の分配に當ることであつた。そして是等の中央局は更に最高經濟委員會の下に統一した。それと同時に一方には、同一の中央局に屬する工場が隣接地方にある場合には、管理上の便宜から之を合同してトラストを組織した。

斯ように國有工場の管理と經營は、極めて集中的に組織せられてゐたようであるが、實際の形勢は、集中的の管理と經營を妨げてゐた。一九一八年の獨逸軍の侵入とブレスト條約とは、露西亞から波蘭とドネツの炭坑地を奪ひ去り、露西亞は燃料の供給の七割と、金屬、食料、砂糖の供給の重要部分を失ふた。同年の暮には、露西亞は最も重要な穀物供給地たるシベリヤと、石油の產地たるカオカサスと、綿花の供給地たるトルキスタンから全く遮斷され、ウラルの金屬工業地方からも半ば遮斷され、尙ほ其上に歐羅巴諸國の經濟封鎖により、國外からの供給も一切斷ち切られた。斯ような形勢の下にあつては、經濟上の存立そのものすらも殆んど不可能であつて、各產業の中央局が、その所屬の工場に原料と燃料とを供給することは至難のことであつた。そこで多くの工場では、勞働者は非常な困難と危險とを冒して、遠隔の地方にまで原料や燃料を求め、辛うじて生產を續けてゐた。

一九一九年から二〇年にかけては、國有產業の管理の上にも、枝葉の點に多少の變更を見たが、大體に於ては其儘であつた。一九二一年の初めにデニキン軍とユーデニツチ軍に最後の打擊を與へると、露西亞は初めて平和の曙光を見、同時に全精力は經濟上の戰線に向けられた。赤軍はそのまゝ勞働軍となつて生產の戰線に鬪ひ、共產黨土曜日が始まつて全國到る所に勞働者と農民とは、最も緊急な仕事の爲に義勇的に勞働した。十一月革命以來、常に反感を以つて勞農政治を見て居つた專門家や知識階級の多くが、進んで露國の經濟的復興に協力しかけたのも此時であつた。けれども多くの希望をかけられた平和の日も永くは續かなかつた。佛蘭西の軍資と彈藥に支へられた波蘭軍の進擊は、一度び經濟上の戰線に向けられた精力を、再び軍事上の戰線に引戾すことを餘儀なくした。續いてウランゲル軍の侵入と二〇年の凶

作とは、經濟上の形勢を一層困難にした。

一九二〇年の春に最後の反革命軍たるウランゲル軍が掃蕩せれた時、露國には、六年ぶりで初めて平和の時代が來た。露國は初めて、經濟上の根本政策を立て、實際の形勢に應じて、有ゆる國家機關の整理を行ふことの出來る時が來た。當時の形勢は、如何なる代價を拂ふても生產を即時に增加することが、焦眉の必要であつた。そして此の必要に應じて立てられた政策が、謂ゆる新經濟政策であつた。

三

新經濟政策の結果として、國家の手に收めた產業のうち、國家經濟機關によつて有効に管理經營することの出來る主要產業だけを確實に其手に留どめ、其他の比較的主要でない工場は、之を貸下げて團體または個人の經營に委ぬることゝなつた。又た國家の手に留どめた產業も、從來の如く最高經濟委員會が莫斯料から指揮する代りに、各企業の管理部に經營を一任し、最高經濟委員會は產業の一般的の統制と指揮とに其の職分を限ることゝなつた。また各產業の中央局も廢止され、その職分は、直接生產に携はる是等の企業の國立トラストに委ねられた。そこで最も發達した企業を包括する是等のトラストは、中央局に代はつて企業集中の機關になつて居る。そして是等のトラストが集まつてシンヂケートを組織し、之によつて生產物の分配と商業上の活動とが行はれる。その結果として、最高經濟委員會の職員の如きも二萬五千人から千五百人に減少し、曾ては二十三萬五千人の職員を有した國有工業は、一九二二年の夏には僅かに一萬八千人の職員によつて管理せられるようになつた。

新經濟政策の下に於ける露國の產業は三つに分類せられて居る。第一類の產業は國民的に重要な事業や設備の完全な大工場であつて、交通機關を初めとし、炭坑業、鐵鑛業、金屬業の如き謂ゆる重工業は之に屬して居る。是等の主要工業は、最高經濟委員會の直轄の下にある。それほど重要でない事業や小規模の工場、又は機械や設備の不完全な工場若くは單に地方的の需要を目的としてゐる企業は第二類の產業に屬し、最高經濟委員會の地方機關によつて管轄せられて居

る。第三類の産業には、其他の一層小規模な工場や職場が之に屬して居る。

以上三つの種類の産業は、各々また甲、乙、丙の三種類に區別せられて居る。即ち甲種の産業は謂ゆる政府支給制度によつて全然國家の手で經營せられるものであつて、此の場合には、運轉資金、原料、燃料、勞働者の食料等は一切政府によつて支給され、生産物は悉く政府の手に收める。次に乙種の産業は國家の經營するものではあるが、半獨立的の經營であつて、企業の管理部が自分で原料その他のものを買入れ、生産物を賣り、その剩餘を政府に引渡す。以上二つの方法によつて國家が有利に經營することの出來ぬ企業は、貸下げ又は租借し、さもなければ閉鎖する。此の種の事業は即ち丙種の産業である。之は第一類、第二類、第三類の事業を通じて同じであるが。そして第二類の場合には、第一類の場合よりも、貸下げ料が遙かに高くなつて居る。

第一類の産業のうち甲と乙(即ち國家の經營に係るもの)とに屬する企業は、必要に應じてトラストに組織する。トラストには次の如き四つの種類がある。

(一)或る産業の一部門全體を結合したものであつて、生産物を賣る方面では、勢ひ獨占的の性質を持つて居る。製茶局、砂糖トラスト、護謨トラスト、製粉局などは之に屬して居る。

(二)一定の地域の資源を開拓するに當り、統一した計畫を必要とする場合に、其の地域にある類似の事業を結合したものであつて、木材や鑛業のトラストは全て之に屬して居る。

(三)第三種のトラストは、一定の地域にある種々なる企業を結合したものであつて、例へば紡織トラストには、隣接地方の紡績工場と織物工場とが結合せられて居る。

(四)以上の外に、全露に散在する種々なる企業を結合したトラストがある。之は或る一企業の生産物が、他の企業の原料として欠くべからざる場合に組織せられるものであつて、アニリン・トラストの如きは其の例である。

是等の國有産業は、最高經濟委員會によつて統轄せられて居るが、最高經濟委員會には種々なる地方機關がある。即ち省には國民經濟省委員會があり、幾つかの省を併せた州には、州委員會に相當する州産業局がある。例へばウラル

産業局はウラルに於ける五省の國有産業を管轄し、シベリア産業局は全シベリアの國有産業を管轄する。それと同時に州乃至は省の内部は、更に幾つかの地方に分けられて居る。例へばウラルは五つの地方に區分せられて居る。州及び省は地理上行政上の區分であるが、地方は全く産業上の見地から作られた區分になつて居る。是等の地方には、最高經濟委員會の地方機關とは異つた、經濟會議と稱する特別の機關が出來て居る。經濟會議は、ソヴイエツト政府の勞働及び防衛委員會に相當する構成分子から成つて居る。即ち地方ソヴエツトの執行委員會、勞働組合の代表者、地方ソヴエツトの食糧部、土地部、勞働部の代表者などから成り、其の任務は『各地方に於ける經濟機關の活動を統一し、且つ發展させ、其の事業を調整し、是等の機關をして、單に地方的利害の必要に應じて問題を解決するばかりでなく、同時に國家全體の利害の立場から問題を解決せしめる』ことである。

國民經濟最高委員會が國有産業を管理する方計も亦一變した。從來國民經濟最高委員會と其の地方機關は、直接に一切の國有産業の管理に當つたが、新經濟政策の下では、國民經濟最高委員會の機關はトラストの管理部を任命するに止どまり、直接の管理經營は是等の管理部に一任せられることになつた。そこで國民經濟最高委員會と其の機關の任務は、(一)トラストの管理部の任命、(二)管理部の行動の監督及び取締、會計監査、(三)生産豫定表並びに國有産業によつて生産せらるべき物品目録の作製、(四)國有産業に對する資金融通に限られることゝなつた。個々の工場の管理經營は、新經濟政策の下では一人の管理者に一任し、共産黨員及び技術家各々一名をして補佐せしめるのが普通になつて居る。トラストの場合にも個々の工場の場合にも、管理者は國民經濟州乃至は省委員會が任命するものであるが、この任命には勞働組合の執行委員會と國民經濟最高委員會の常任委員會との認可が必要である。

四

以上によつて大體を説明した産業組織を一層具體的に知る爲めに、露國に於ける最も重要な産業となつてゐる紡績工業の實例を述べて見る。

今日の露國に行はれて居る紡織工業は綿、毛、絹、麻、苧の五つの部門から成つて居る。紡織工業は一九〇五年の當時既に全工業勞働者の三割餘を占め、生産物の價格は全工業生産物の一割八分餘に達してゐた。十一月革命後、紡織工業も亦た國有となつたが、一九二〇年に至る間は、石炭の供給地と綿花の生産地が内亂の爲めに遮斷せられてゐたので、開戰以來衰退しつゝあつた露國の紡織工業は絶望的の狀態に陷入つた。綿糸業は一九一八年中に國有となり、一九二〇年の一月に中央紡織局の下には、最も重要な二百十四の紡織工場と三十二の小工場とが管理せられてゐたが、是等の工場は總錘數の僅かに七分六厘、織機はその一割一分三厘が運轉して居つたに過ぎぬ。當時紡織工業は全べて中央紡織局により統轄されてゐたことは前述の通りであつて、更に是等の工場は、同一地域にある同一部門の工場の間にトラストを組織し、中央紡織局は直接に是等のトラストを管理して居つた。即ち國民經濟最高委員會の下にある中央綿花委員會は、トルキスタンの綿花生産者から原料を買入れて是等のトラストに供給し、中央紡織局は燃料及び食糧の供給に當り、斯くて生産せられた綿糸と綿布とは全て中央紡織局の手に引渡された。是等のトラストに屬せぬ其他の小工場や農民の手工的の企業は、中央紡織局の大體の統制の下におかれてゐたが、殆んど獨立して管理經營されてゐた。

一九二一年の十一月に至つて、綿糸業も亦新經濟政策に基づいた新しい組織を見ることゝなつた。その結果、重要な工場は依然として國家の手に留められたが、新しい設備を要するやうな小工場は一時閉鎖され、極く小規模の織物や手工的の企業は、獨立の經營に任せることになつた。

斯くて國家の手に殘つた綿糸工場は十個のトラストに編制された。トラストは國家の中央經濟機關によつて大體の統制を受けるが、直接の管理經營は半獨立的である。各々のトラストには（一）その地域に於ける國民經濟委員會の地方機關と、（二）紡織勞働組合の地方執行委員會とによつて任命せられた管理部がある。また此の二つの機關はその協議によつて、トラストに編入すべき工場を決定したり、又は其他の補助産業をも同一のトラストに編入することが出來る。補助産業をトラストに編入するのは、主としてソヴイエツト農場や、若くは紡織勞働者の消費品を生産する小工場などである。

そこで國民經濟委員會の地方機關と紡織勞働組合の地方執行委員會とが、トラストの組織を立案し、管理部の人選をすると、中央紡織局と紡織勞働組合中央執行委員會に提出して其の認可を求める。斯ように中央紡織局は依然として、トラストの監督機關として存續し、トラストの生產豫定を檢査したり、原料や燃料の供給と生產品の賣却に關聯した財政上の手段を講ぜしめる筈であつたが、實際にトラストが組織されて見ると、是等の職分は中央紡織局によるよりも、トラストの間に組織せらるるシンヂケートの手に待つ方が便宜なので、中央紡織局は廢止され、唯だ國民經濟委員會が一般的の監督をすることゝなつた。そして十個の綿糸トラストが集まつて一つのシンヂケートを組織し、各トラストの代表者からなる管理部を設けて、原料の買入れや生產物の賣捌きを集中的にすることゝなつた。

トラストの管理部の任期は二ケ年であつて、直接工場の管理と經營については、管理部は其の責任を以つて、中央機關の干涉を受けずに行動することが出來る。トラストの資金は一部分は國家から貨幣で支給されるが、大部分は在庫品の賣却によつて支辨せられて居る。

各々のトラストには、紡績、織布、その他の仕上げ工場をも含んで居るので、原料から既製品に仕上げるまでの工程を通じて、中途で生產物を賣買する必要がない。トラストの支出は（一）原料、（二）燃料、點燈その他の作業に必要なもので、之はそれ〴〵の國家または都市の機關、協同組合等から、トラストが各自に現金を支拂ふて買ひ入れるものである。次は（三）賃銀及び給料で、之はトラストの收入のうちから支拂はれる。尙ほ其外に、國民經濟最高委員會から工場全體の生產能率に準じて割當てられる食料品がある、（四）修繕及び設備、外國から買入れの必要ある場合には、通商人民委員會の機關によることは云ふまでもない。以上の支出に對し、トラストの收入としては、（一）トラストの組織に當り、運轉資本として交附せられた生產物の賣上げ、（二）不斷の生產品を政府の部門に賣却する賣上げ（食料及び燃料買入れの必要ある場合には、生產品を協同組合に賣却する賣上げ）、當座取引の資金として國立銀行より貸附けられる資金である。

シンヂケートの職分は、綿糸工業の生產豫定表を作製して國民經濟最高委員會の認可を受け、トラストの爲めに原料

の購入に當り、國民經濟最高委員會の定めた計畫と價格とに從つて生產品の賣却に當ることとである。斯くて綿糸工業全體が、原料の供給や生產品の賣却については一つの單位として行動し、しかも企業の管理と經營については、直接に國家機關に干渉を受けないで、自由に活動することが出來る。即ち一方には各々の企業の單位に、出來得る限りの自由を與へ、出來得る限りの活動の餘地を與へると同時に、一方には全產業を統一して之を社會全體の利害の下に統制すること、この二つの方面を結合することこそ、新經濟政策の根本原則をなすものである。

露國の綿糸工業の原料たる綿花は、大部分はトルキスタンから供給され、僅かに一小部分がコオカサスから來て居つた。以上を合すると、露國の綿糸工業に要する綿花の七割五分となり、殘りの二割五分は米國及び埃及から輸入せられてゐたが、何づれも國內で得られぬ上等品である。一九一八年に露國の工業の中心地と邊境地方との間が遮斷せられた爲め、トルキスタンに於ける綿の栽培は一時非常に減少した。爾來ソヴイエット政府は、トルキスタンに於ける綿の栽培を獎勵すると同時に、一九一八年から綿花の獨占制度を行ふて居る。即ち綿の栽培者に對しては一定の價格を支拂ひ全收獲は悉く政府に引渡されるものであつて、斯ような獨占制度を設けた理由は、國有綿糸工業の爲に原料の供給を確實にし、綿の栽培者を仲買人や投機者の搾取から保護し、且つ栽培者に對する資金の融通を容易にする爲めであつた。そこでソヴイエット政府は綿の栽培者の間に協同組合の組織を促進した。一九二二年の前半には、トルキスタンには既に五十の協同組合が組織され、是等の協同組合は商人や仲買人に代つて取引の衝に當ることゝなつた。協同組合の管理部は綿の植附け面積を登記し、收獲を集め、ソヴイエット政府は協同組合を通じて栽培者に資金の融通をする。是等の協同組合が集まつて綿花栽培者協同組合同盟を組織し、中央綿花委員會との間に直接の交渉をすることになつて居る。

綿の價格は穀物の價格を基礎にして定められて居る。即ち同一の重量に對し、綿の價格は穀物の二倍である。この割合は戰前の價格を標準としたもので、必要に應じて改訂せられるものである。



イタアの動態利子論と、資本利子、利潤の發生は階級的獨占に基くとなすオッペンハイマアの靜態利子論とは著しき對

の購入に當り、國民經濟最高委員會の定めた計畫と價格とに從つて生產品の賣却に當ることである。斯くて綿糸工業全體が、原料の供給や生產品の賣却については一つの單位として行動し、しかも企業の管理と經營については、直接に國

資本利子と獨占



土方成美

一、

資本利子なる不斷の流は何れより來るか。此問題は多くの經濟學者を惱し、又現に惱しつゝある問題であつて、之が解決は至難の業である。

近事行はれる利子學說中、利子は社會の發達を齎す企業家の新しき生產要素の結合によつて發生するとなすシュムペイタアの動態利子論と、資本利子、利潤の發生は階級的獨占に基くとなすオッペンハイマアの靜態利子論とは著しき對

照をなし、一見調和し難き學說の如く思はれる。以下に於いては主としてシュムペイタアの動態利子論を考察し、オッペンハイマアの階級獨占論を參照しつゝ資本利子と獨占との問題に付いて若干の考察をなさんとする。

資本利子は何處より來るか。吾人は今日の經濟組織の下に於いて利子現象に習熟して居るが故に利子の存在に付いて疑問を持たないが、利子現象の存在は說明を要せずして當然自明であると考へる事は出來ない。

利子は如何にして生ずるかに付いて最も多く行はれる說明の一つは生產力說である。機械を使用して生產を行ふ場合には機械を使用せずして生產する場合に比して多額の生產物を獲得し得る。此差額が利子を形成するとは何人にも先づ起る考であるが、少しく考察すれば、此の如き生產力を以て利子を說明する事の不可能なるは明白である。機械を使用して生產すれば機械を使用せざる場合に比して多くの生產物を獲得し得る事は事實である。併し問題は單に機械の使用が之を使用せざる場合に比して多くの生產物を產むと云ふ事では盡くされない。何故に資本は繼續して不斷の利子を產むか。機械は一定の年數を經れば磨損して遂に何等の生產物をも產まなくなると云ふ事が吾人の前に與へられた事實である。世人は森林に投資して不斷に繼續的所得を獲得する事を以て當然と考へてゐる。併し吾人の前に與へられたる事實は、森林は最初之を植付けたる時から年々成長して一定の年限の立つ迄は成長を繼續するが、其後一定の年限經過後は枯死すると云ふ事である。何故に森林に投資したる人は資本の消耗を償つた上に尙ほ餘剩の繼續的所得を獲得するか。

シュムペイタアの云ふが如く吾人に與へられた事實は器具が消耗されて產物が存在するといふ事である。其器具が漸次補充されて行くと云ふならば、何故に償却されるかを說明しなければならない。……資本の補充Kapitalersatzは最後の事實でなくして一つの問題である。(Schumpeter, Wesen und Hauptinhalt. S. 396.)

更に資本利子を生產財の生產力を以て說明するものは次の如き困難に逢着する。生產財の價格には生產物の價格が歸

屬 zurechnen せしめられるとする。即ち生産物の價格によつて生産財の價格が定まるとなす限界效用說より出でゝは、(勞働價値說より出でゝはもとよりであるが)資本利子なる餘剩は何れより來るか之を說明するを得ない。歸屬說Zurechnungstheorie より出でては斯くならなければならない。『生産せられたる生産財は財貨の生産に役立つものである。吾人は生産財を使用して生産財を使用しない場合よりも多くの財貨を生産し得る。而して之等の財貨は生産財を使用せずして生産した財貨よりも高い價値を持つ。併し之等の財貨の價値が高い結果は生産器具の價を高くし、此の生産器具の高い事は又勞働並に土地の給付の價(勞銀並びに地代)を高くする。何等の價値の要素も此の中間的因子(生産財)に繼續して止まつて居る事は出來ない。生産財自身の價格と生産物の價が歸屬せしめられて存在するに到る生産財の價格との間には永く差異が存在する事が出來ない。一つの機械は或數量の産物の生産を助ける。併し競爭は、其の産物の價格が生産財の價格と等しくなる迄産物の價格を下げる。機械は又手工的勞働よりも多くの給付をなすかも知れない。併し一度此の機械が使用せられて勞働を節約する時は其後は絕えず新しく勞働を節約するものではない。故に絕えず新らしい利益を提供しない。』(Schumpeter, Theorie. S. 329.)

更に以上の事項をシュムペイタア、ランドリイ等によつて引用せられるロッシャアの漁夫の例に付いて說明するに、私有財産も資本も無き數人の漁夫に取つて天然の條件、天賦等が皆同じであつて、之等の漁夫は日々手で三匹の魚を捕へ之を直ちに消費すると假定する。今其漁夫の一人が百日間魚の消費を二匹に節約して一匹づゝを百日間貯へ、斯くして貯藏した魚を五十日間に於いて船と網とを作る爲めに利用する。斯くて船と魚とを以て繼續的に日々三十匹の魚を捕へ得るとする。今船と網とが百日間の使用に堪え得るものと假定する時は、此漁夫は百五十日間の勞働を「支出」して三千尾の魚を捕へ得て、從來船と網とがなかつた時代に於いて捕へ得た百五十日間の魚の捕獲四百五十匹に對して二千

五百五十匹の利益を獲得する。船と網は出來上つた時は幾何の價を持つであらうか。明かに其產物の價格即ち三千匹の價格から船と網となくして捕へ得る三百匹の魚の價格を控除した二千七百匹の魚の價である。斯くして船と網とは百五十日間の勞働を以て獲得し得るに拘らず、其價は二千七百尼の價格を有し此の兩價格に差異が存在するに到る。併し此場合に考へなければならないのは、漁夫の間に若しも自由競爭が行はれるならば百五十日間の生產期間に於て三千匹の魚を捕へ得るのであるから勞働の價格は三匹から二十匹に上る筈であつて、幾許もなくして此の價格の差異は消滅してしまふべき筈である。

以上の如く限界效用說より出でゝも、後に述ぶべき社會の發達等の動的要素を考察中に齎さゞる限り資本利子の存在を說明する事不可能であると信ずる。

二、

生產力說に次いで廣く行はれる利子に關する說明は、彼の有名なる時差說である。ベエム・バヴエルクは將來財の現在財よりの低き評價によつて利子現象を說明して居る。將來財の現在財よりの低き評價は氏の云ふ所によると三個の理由に基く。第一の理由は異る期間に於ける個人の欲望狀態と其充足資源との關係が異ると云ふ事である。老年に到つて欲望が減退し、一方夫れを充足すべき資源の減ずる事がない人は、將來財を現在財よりも低く評價する。併し之にはベエム・バヴエルク自身認める如く反對の場合も存在し、現在は欲望を比較的豐富に充足して居るが、將來の見込に於いて其收入が著しく減ずるやうな場合には、例へば主として勤勞によつて食して居つて、老年に到つて勞働能力を失ふ如き人に取つては將來財を現在財よりも高く評價するに相違ない。併し一般的に見てベエム・バヴエルクは將來財を現在財より高く評價する人は少數であると考へて居る。（Böhm-Bawerk, Positive Theorie des Kapitals. S.331.）

次にベエム・バヴエルクの擧ぐる將來財の現在財に比しての低き評價の第二の原因は、將來の慾望並に其滿足手段を吾人が系統的に低く評價する事であつて、其原因は又分れて三個となる。(一)は吾人が將來の慾望狀態に關する表象の缺陷(二)意思の缺陷(三)吾人の生命の短き事と不安定とに基くと稱して居る。(Böhm-Bawerk, Positive Theorie S.S. 332-338.)

以上の將來財の現在財よりの低き評價に關するベエム・バヴエルクの所說に對してはシユムペイタアの云ふ如く、理性の發達した個人は年金等が確實である場合に將來の年金を現在の年金よりも低く評價するか否かは疑問である。(Schumpeter, Theorie. S. 53.)一般に現在のみを考へるのは自然人のみである。(Ibid. S. 54.)『實際に於いて將來の低き評價は存在する。併し之に付いては危險關係の變化等の多くの說明が存在して居つて、此の場合實際に於いて特別なる心理現象が存在するものではないか否かを決定的に論ずる事は困難である。現實は吾人が今迄に見又は之より見んとする如く、斯くの如き心理現象の存在を認むることを强要せず、又此の如き心理現象なくしては說明し得ない經濟現象は存在しないから、之等の將來財の低き評價と云ふ事に關する要請を證明の缺陷といふ理由の下に排斥するも不當然ではない(Schumpeter, Theorie. S. 318.)と云つて居る。

A

一勞働月より生ずる生產量

投資の年 / 經濟期間	1909	1910	1911	1912	
1909	100	——	——	——	
1910	200	100	——	——	
1911	280	200	100	——	
1912	350	280	200	100	
1913	400	390	280	200	
1914	440	400	350	280	
1915	470	440	400	350	
1916	500	470	440	400	

更に進んでベエム バヴエルクの將來財の低き評價に關する第三の理由は、氏の最も重きを置く所であつて、氏は生産期間が長き程生産物が多くなるといふ技術的條件の存在が、將來財の低き評價といふ事と結合して現在財を將來財よりも高く評價せしめる所以を述べて居る。氏は先づ單に技術的條件のみを考へる時は、A表の如く投資期間と生産物との關係は投資期間の長き程生産物の量が多いといふ事になる旨を述べて居る。

B

一月の勞働より生ずる價値

經濟期間＼投資の年	1909	1910	1911	1912	限界效用
1909	500	——	——	——	5
1910	800	400	——	——	4
1911	924	4[illegible]0	330	——	3.3
1912	875	700	500	2[illegible]0	2.5
1913	880	770	616	440	2.2
1914	924	810	735	588	2.1
1915	940	880	800	70[illegible]	2
1916	750	705	6[illegible]0	600	1.5

斯くの如くして限界效用遞減を考慮せずして、純技術的條件のみを考慮する時は、投資の期間の長き程有利となるものであるが、今限界效用遞減を考慮する時は以上の關係はB表の通りである。

斯くしてベエムは生産期間が長き程生産物の量が多いと云ふ事と限界效用の遞減の事實とは合して、現在財を將來財よりも高く評價せしめると稱して居る。（Böhm.Bawerk, Positive Theorie. S.S 333 362）

此のベエム・バヴエルクの將來財の低き評價に關する第三因に對してはランドリイの明快なる反對が妥當である樣に思はれる。即ち生産期間が長くなればなる程生産物の量が多いといふ事は正當ではない、或生産は生産期間を長くする程始めの内は生産物の量を多くするであらうが、やがては生産期間を長くするも生産物の量を増加せざる點に到達する。

故に以上のベエム・バヴエルクの第一表はC表の如く書き替えるを以て正當とする。（Landry. Intérêt du Capital.

今斯くの如きランドリイの云ふ所を採用して限界效用遞減の事實を考慮に入れる時はDの如き表を得る。

C

經濟期間＼投資の年	1909	1910	1911	1912
1909	100	——	——	——
1910	200	100	——	——
1911	280	200	100	——
1912	350	280	200	100
1913	350	350	280	200
1914	350	350	350	280
1915	350	350	350	350
1916	350	350	350	350

D

經濟期間＼投資の年	1909	1910	1911	1912	限界效用
1909	500	——	——	——	5
1910	800	500	——	——	4
1911	924	800	500	——	3.3
1912	875	924	800	500	2,5
1913	875	875	924	800	2.3
1914	875	875	875	924	2.1
1915	875	875	875	875	2
1916	875	875	875	875	1.5

一九〇九、一九一〇、一九一一、一九一二年の何れの年に一〇〇を投資するを問はず其最高の生産額（價値）を擧ぐるものは三年の生産期間であつて、最大の生産價額は九二五となる。此際特に一九〇九年の投資を一九一〇、一九一一、一九一二年の投資に比して選ばしめる理由は、前掲ベエム・バヴエルクの將來財の低き評價に關する第一因第二因を除す

にあらざれば說明することを得さる事となり、從つてベエム・バヴエルクの所謂第三因は將來財の低き評價に關する何等獨立の原因たるを得ざることゝなる。

三、

シュムペイタアは以上の如く靜態に於いては利子の成立するを說くを得ない爲めに、發達 Entwicklung と云ふ要素を藉して利子現象の成立を說明せんとして居る。

先づ第一にシュムペイタアの靜態の意義を明にして置かなければならない。シュムペイタアはクラアクに倣つて靜態と動態とを區別して居るが、氏の動態はクラアクの夫れにも異り、其れよりも遙かに狹義のものである。クラアクの所謂靜態は氏の所謂五個の有機的變化即ち人口の增加、資本の增加、生產方法の變化、生產組織の變化、消費者の慾望の變化等によつて靜的平衡の亂されない狀態であつて、其は略々靜止的狀態で、經濟生活が年々與へられたる條件の下に一定の routine を繰返して行く靜止的狀態である。

シュムペイタアによればあらゆる狀態の下に於いて與へられたる條件が變動すると否とを問はず經濟主體が與へられたる條件に向つて適合しなければならない場合に於ては、之等の與へられたる條件を一樣に一定と見る事が出來る——假令經濟主體が新しき條件に向つて適合することを努める場合に於ても。全經濟主體が斯くの如き事(與へられたる條件に適合する事)をなす場合に於ては、……經濟の狀態は年々同樣であつて、與へられたる關係の下に於いて絕えず同樣の經濟活動が最大の滿足に向つて行はれる。……故に吾人は之を休止的、受動的狀況によつて制限せられた靜止的、靜態經濟と稱する。 ruhender, passiven, von den Umständen bedingten, stationären von einer statischen Wirtschaft (Schumpeter, Theorie. S. 88)

今此處に或人が單に與へられたる條件に向つて適合する事をのみせず、生産要素の新らしき結合 neue Kombination によつて、發達 Entwicklung を爲すや否や之を靜態に對して動態と稱することが出來る。『發達とは單に經濟生活の循環の變動であつて而も經濟が夫れ自身の内部から作り出すものである。共れ自らの狀態に置かれ、他の衝動によつて動かされない國民經濟に起る變動のみを指す。』(Schumpeter, Theorie. S. 103)

即ち氏の所謂動態に於いては、經濟生活の循環が共れ自らの内部から變動を起す事が必要であつて、クラアクの擧げる如き有機的變化、人口、欲望、資本の增加、技術の進步、經濟組織の變動等によつて起る經濟生活の變動は、未だ動態に屬せずして靜態に屬するものとなして居る。

何が故に動態の意義を斯くの如く狹義に解釋するかに付いて氏は、以上の如き所謂有機的變化に伴ふて經濟主體が單に適應を事とする場合には靜態と同じ理論を以て經濟活動を說明するを得て特異なる理論を必要とせざるに反して、氏の所謂發達の存在する場合には、靜態に於ける理論を以ては說く事を得ざる所の異る現象が存在するとなす。

更に氏は之等の個々的の人口の增加も單に靜態的に働く事がある。人口の增加は勞銀の下落、地代の騰貴を導くけれども、此場合特に發達と名付くべきものは存在しない。之に反して人口の增加が新しき形式を刺戟すると云ふ場合にのみ人口增加によつて發達が起されるのである。且つ多くの場合に於いて人口の增加は發達の原因でなくして寧ろ結果であると稱して居る。其他發明、商業的技術的組織の變化、欲望の增加等に付いても略々同樣なる說明を施し、之等は夫れ自體として發達を導くものではないと稱して居る。

靜態動態の區別に於いてシュムペイタアは特に企業家的人格の「生産要素の新しき結合」が存在するか否かと云ふ事に重きを置いて居る。而して之等の企業家的人格の新しき結合に基く發達は、人口增加其他前揭の有機的變化が存在しな

い場合にも存在するとなして居る。

氏によれば經濟生活に二個の形態が存在し、一は與へられたる條件に適應して能ふ限り多くの慾望を滿足せんとする受動的ヘドニスチッシュな人間であつて、多數は此の種類に屬する。他は以上に反して單に與へられたる條件に適應して最大の慾望滿足を事とする受動的の人間にのみ止まらないで、更に新しき結合を行つて經濟生活に發達を齎す所の企業的人格である。狹義の發達動態は、實に此創造的人格によつて齎される。斯くの如き人格の活動は、單に快樂主義なる慾望滿足からは說明することを得ない。斯くの如き國民經濟の指導者が若しも快樂主義の慾望滿足の爲めに活動するものと考へるならば、此等の人は飽くなき慾望によつて動かされて居ると考へなければならない。然るに此の如き解釋をなす事は此種の企業家の活動が極めて反目的的であるといふ困難に逢着する。營利活動は或所得額を超えて專ら獲得せられるを常とする財貨の享樂に對して直接の障碍である。如何となれば、此種の財貨に屬するものには、就中閑暇がある。閑暇に對する欲求と、獲得したるものを消費する欲求とは、快樂主義者に取つては直ちに非常なる重要を占めるに到るものである。（Schumpeter, Theorie. S. 135）故に企業家は社會的權力の地位並に創造的形成の喜びに動かされて居ると考へなければならない。

以上の如き所論より氏は（一）氏の所謂經濟的發達は以上の如き人口增加等の要素なくしても起り得、（二）而して氏の解釋は現實の發達を本質的に說明するを得、（三）氏の說く所以外の原因による發達の原因もそれが單なる適應現象に止まらない場合には、氏の方法（新しき結合）を通じて實現し得るが故に、之等の要素を無視して——之等の要素を一定不變と見做す——本質を捉へるを得る、（Schumpeter, Theorie. S. 488.）と結論して居る。

四、

氏は以上の如き靜態の解釋論より出でゝ、靜態に於いては、如何にしても費用以上の餘剩が生まれる理由を發見するを得ない。動態に於いて始めて費用以上の餘剩が成立するを得ると說いて居る。前揭の如く靜態に於いては自由競爭が行はれて、生産財の價格は嚴格に生産物の價格と一致しなければならない。

前述のロッシャアの例に於いて船と網とが生産された瞬間に於いて、此の船と網とは如何なる價を持つかを見るに、此の船と網とを以て獲得し得べき魚の三千匹から船と網となくして獲得し得る三百匹を控除した二千七百匹である。然るに一方船と網とは百五十匹の魚を以て生産し得るが故に船と網との歸着價格 Zurechnungswert と補充價格 Ersatzwert との間に差異が生ずる。此の差異は企業家たる漁夫の「新らしき結合」に基くものであつて之が企業利潤である。(Schumpeter. Theorie, S. S. 315 ff.)

今此の如き企業家が新らしき結合を行ふに當つては、常に前揭の例に於けるが如く、豫め魚を貯藏して以て貯藏資金 Sparfond を準備する事は今日の社會に於ては寧ろ比較的重要をなさない。之が爲めに企業家は自己の使用すべき消費財を獲得するが爲めに、「自由なる購買力」freie Kaufkraft を必要とする。此の自由なる購買力が卽ち資本である。

資本とはシュムペイタアに從へば、企業家をして其の使用する具體的財貨を支配せしめる爲めの動力 Hebel に外ならない。又財貨を新らしき目的に處分する手段、生産に新らしき方向を與へる手段に外ならない。(Schumpeter, Theorie. S. 226.)

而して玆に注意すべきはシュムペイタアは企業家が資本を以て必要なる有形的生産手段、又は必要なる勞働を購入するや否や、企業家は其の處分の下に置かれたる資本を最早所有しない。(Ibid., S. 229.) 斯くして資本は企業家が或時點に於いて處分し得べき貨幣其他の支拂手段であるとして、(Ibid., S. 236.) 資本は貨幣其他の支拂手段の形を有する事

を必要とするとなして居る。

之等の所論より出でて利子は利潤が存在するによつて生ずるものであつて、企業家が自由なる購買力の支配を得んが爲めに利潤中の一部から提供する租税の如きものであるとなして居る。

以上の叙述は可なり煩雜になつた爲めに左に氏の所説の重點を要約するに、

(1)發達なくして利子は存在しない。利子は發達が起す經濟價値の海に於ける波濤の一部分である。(Ibid. S. 345)

(2)利子は企業利潤から流れ出でなければならない。利子は企業利潤に對して恰も租税の如き作用をなす。

(3)利子は具體的財貨には宿らない。(Ibid, S. 345)

(4)共産的に組織せられ又は全然交通のない社會には利子は獨立なる價値現象として存在しない。(Ibid, S. 348.)

(5)企業家の計畫の施行に必要なる生活手段が彼の計畫に關與しない經濟主體の所有に屬する場合に利子が起る。(Ibid. S. 351)

(6)利子は生産財の支配手段としての購買力の價格の要素である。

五、

シユムペイタアの云ふが如く、利子は果して靜態に於ては存在しないであらうか。此の問題に對する答は利子の解釋如何によつて異らなければならない。多くの學者によつて看過せられる事であるが、筆者は利子現象の内に於いて二個の者を峻別しなければならないと信ずる。

先づ利子を以て或元本たる貨幣額に對する一定の率を以て云ひ表はされる步合であると考へれば、換言すれば單に貸用以上の餘剩であると解するのみならず、之が元本に對する步合を以て云ひ表はされる事を必要とするに於ては、經濟

生活が嚴格に靜的（クラアクの解釋に於ける）であつて年々一定の行事を繰返して行く場合には利子は存在しないと云はなければならない。何となれば上述の如き元本に對する一定の步合を以て表示せられる利子が存在するが爲めには、費用以上の餘剩たる利益が利率を以て還元せられて資本價格が算出せられると云ふ還元現象が存在しなければならない

還元なる現象は何故に起るか。此問題に答へるに付いて吾人は今日の經濟組織成立の根本原則に立ち歸らなければならない。今日の經濟組織に於ては各人は外界財の貨幣價値に着目して能ふ限り多くの貨幣價値を獲得せんことを期して居る。現今に於て各個人は、外界財に一定の組織を與へ、少くとも此の貨幣價値の減少せざる事を期して居る。例へば天然の森林は之を自然の成長に放任する時は一定の年限迄成長して遂に枯死するに到るものである。爰に於て森林に一定の組織を與へ、例へば年々五十分の一を伐採し、五十分の一を植林して以て森林の貨幣價値を繼續的に保たんとする。併し此現象があるのみでは未だ還元現象は起らない。曩に述べたるが如き社會の動的變化殊に企業家による生產要素の新らしき結合によつて、例へば木材の價格が騰貴し費用以上の餘剩を得る狀態になる。同樣に其他の生產業も動的變化によつて年々費用以上の餘剩を獲得し或は損失を招く。斯くの如き動的狀態あるが爲めに經濟生活を營む人は、絕えず一定の組織の下に置かれたる外界財の貨幣價値增殖率に着目し、增殖率を比較して增殖率多き結合に向つて外界財を向ける必要が起る。爰に於いて一定の期間內に於いて該資本組織を運用し特定財貨の賣却によつて獲得し得る費用以上の餘剩を算出して貨幣價値の增殖率を計算する。資本の職能は貨幣價値の增殖であるが故に、最低の增殖率を有する資本と其以上の增殖率を有する資本とを共通なる根據に於いて比較せんが爲めには、最低の增殖率を有する資本を共償の資本額に以て表現するならば、最低以上の增殖率を有する資本は最低の增殖率を生むものとしての價が算出せられる事が必要である。例へば五分が特定の社會に於ける資本の最低の增殖率であるとすれば年十二圓の配當をなす額面百圓

の株式は五分の増殖率を生むものとして還元せられて二百四十圓の資本價額を獲得する。利廻り計算即ち還元なる現象は斯くして發生する。

還元作用の起る理由にして經濟生活の動的變化にあるとすれば、市場が全然靜態にある場合には、還元作用の起る事は考へ得られない。各個人が不斷に一定の生産力を有する外界財を以て生産を繼續して居る場合に優秀なる生産力を有する外界財を有するものは劣等なる他人の有する外界財と比較して之と交換する必要を見ない。反對に劣等なる生産力を持つ外界財（例へば土地）を有する者は之を優等なる生産力を有する外界財と比較して之を交換せんとしても不可能である。嚴格に同じ生産力を有するものでなければ交換が行はれる筈がないと同時に、同じ生産力を有するものを交換する事は無意義である。斯くの如き場合に所謂生産財の交換は例外的の場合以外、例へば甲、乙、兩人が相互ひに自己の住宅から遠隔の距離にある土地を所有する場合に相互に之を交換する等の外は起らないと考へなければならない。從つて上述の如き還元現象が發生する理由は存在しない。還元現象は外界財の結合の變化、其他の事情によつて所謂生産財の貨幣價値増殖率が絶えず變化するによつて生ずる現象である。斯くして動的變化なくして還元作用なく從つて歩合を以て表はされる利子は存在しない事が明になつた。

併し玆に云ふ動態は必ずしもシユムペイタアの云ふが如き狹義のものであることを必要とせず、人口の増殖、慾望の増加等が豫見せられ之に應じて貨幣價値を以て代表せられる財貨の作出の方向を適應せんと努力する場合に以上の如き現象が起ると考へて差支へがない

六、

次に資本利子を以て、單に費用以上の餘剩利益であるとし、必ずしも元本に對する歩合を以て云ひ表はされる事は必

要でないと考へる時は、費用以上の餘剩は靜態に於ても存在する。シユムペイタアも地代と獨占利益とは靜態に於ても存在すると稱して居る。

爰に於て考慮すべきは動態でなければ、歩合を以て表はされる利子はない事は承認し得るが、動態であれば、シユムペイタアの所謂發達さへあれば歩合を以て表はされる利子が存在し得るか。今若し各人の才能等各人に對する自然的條件等が總べて平等であつて、而かも各人が同樣に資本財の新たなる結合を行つて産物の多くを獲得すると云ふ場合に直ちに利子が存在すると稱するを得るかと云ふ事である。例へば五人の漁夫が今迄手で一日三尾の魚を捕へ得たものが、皆一樣に船と網とを造つて一日三千尾の魚を捕へ得るやうになつたとする。斯くの如き場合には明かにシユムペイタアの所謂發達が存在する。併し何人も費用以上の餘剩を獲得するものはない。嚴格に各人は費用と同額の魚を獲得するものであつて、還元せらるべき何物も存在しない。還元せらるべき餘剩利益が成立する爲めには新らしき結合によつて多くの魚を獲得し得るものと然らざるものとが存在する事が必要である。此の如き場合に始めて多くの魚を獲得する人は費用以上の餘剩（此の場合に船と網を持つ人に取つて船と網を使用して自己の勞働を魚の捕獲に用ゆる費用は、魚を手で捕獲して獲得し得べき魚である。）を獲得し、斯くて船と網とを使用して獲得し得べき之以上の餘剩が利子を形成し、之が還元せられるのである。單に發達といふことがあるのみで各人の經濟力に何等の差等がないならば、費用以上の餘剩利益を獲得する者がなく、從つて還元せらるべき何物も存在しない事となる。所謂自由競爭が行はれて一人の行ふ新らしき生産要素の結合が何人によつても行ひ得るならば、何故に此の餘剩利益が消滅しないか。所有狀態の差を無視しても、少くとも、各人の才能に差異が存在するにあらざれば、此の餘剩利益の發生は說明する事が出來ない。

今日の經濟社會に於て一定額の貨幣を所有する者は、市場の最低の利子歩合を獲得する。此の利子額は何等の貨幣を

所有しない者から見れば餘剩利得と見做し得る。何が故に此の餘剩利得は資本家の自由競爭によつて消滅しないか。此の理由は如何にしても貨幣（購買）力の分布が不平等であると云ふ事に歸せざるを得ない。即ち社會に於ける生産手段が不平等に分布されて居る（Lederer, Grundzüge der ekönomischen Lehre. S. 156.）と云ふ事に基く。

今日の經濟社會に於て資本家が利子を獲得するのは其是非の問題は別として、主として一方に無産勞働者が存在して、絶えず必要なる場合には生活資料さへ獲得出來れば何時にても自己の勞働を企業家に惜し氣なく賣らうとする事實が存在する爲めであると認めなければならない。今假りに今日の社會に於て、各人が其の才能、天與の條件、購買力の使用に於て全然平等であるとすれば其處に費用以上の餘剩が發生すべき餘地を存しない。各人の費用は皆平等であつて還元すべき何物も存在しない筈である。ランドリイも資本の稀少性と云ふ事が利子の出現に缺くべからざる條件であると述べて居る。即ち利子が出現するのは「世人が資本の使用によつて生産せられる財貨を過大なる量に於て生産しないといふ條件の下に於てゞある。今人が此の財貨をAなる量だけ生産するならば、此の財の生産に使用せられた資本に餘剩價値を齎す樣な價格が成立するであらう。若し更に大なる量例へばBなる生産量に於て生産せられるならば、價格は下落して餘剩價値は存在しなくなるであらう。……斯くの如くして生産に於て資本が利子を齎す爲めには、資本が「生産的」たることを必要としない。即ち其資本が該資本なくして生産し得るよりも財貨の量を多く生産するに役立つ事を必要としない。資本を必要とする産業が存在して、而かも夫れが過度に發達しないならば、資本家に利子を提供すると云ふ事實さへあれば足る。此の條件が存在するや利子は發生し、當該産業は其産業に吸收する資本に最早何等の利子を與へないやうになる點迄發達しないと云ふ事が確實である。」（Landry, Intérêt du Capital. p.88;

斯くの如くして吾人は歩合を以て表示せられる今日の利子現象は社會の動的變化と經濟力の不平等とが存在する事を

條件として今日の經濟社會の組成原理たる營利主義の作用によつて發生するものである事を知り得ると信ずる。

玆に社會の動的變化と稱するのは、必ずしもシュムペイタアの所謂企業家による新らしき生產要素の結合に基くものたる事を必要としない。人口增加によつて絕えず無產者の群が社會に生れ來る如きも有力なる利子發生の原因である。無產者が益々群生し、爲めに勞働供給は增加し勞銀は低下すると云ふ事によつて、經濟力の不平等は愈々甚しくなり、其處に利子の發生を見るに到る。勞働者が增すと云ふ事は直ちに勞銀の低下を意味し、一方食物等に對する需要の增加は企業家資本家の利益獲得を益々大ならしめるものと考へる。

七、

吾人が玆に云ふ利子なるものは費用以上の餘剩利益であつて、必ずしも市場に所謂貸付金の利子のみには限らない。シュムペイタアは前述の如く地代獨占利益及び利子の三者を峻別し、地代並びに獨占利益は靜態に於て存在するも、利潤は動態に於てゞなければ發生しない。利潤は企業家の生產要素の新らしき結合によつてのみ生まれるものであつて、此の企業家の新らしき生產要素の結合に必要なる「自由なる購買力」即ち資本を提供する資本家が利潤から徵收する一定の利益が利子であるとなして居る。

併し吾人はシュムペイタアの所謂地代、獨占利益及び利潤の三者の間には本質的の區別は認め難いと信ずる。シュムペイタアは獨占利益と企業利潤とを峻別すべきを說いて、「始めて現はれ來る企業家の新らしき生產物は競爭者を有しないから、其の生產物の價格の構成は全然又は或制限內に於て獨占價格の法則によつて行はれる。資本主義的經濟に於ける企業利潤の中には多くの獨占利益の要素を包含して居る。今新らしき結合（即ち企業的活動）がトラストを造る等外部からの競爭者を全く恐れない機構的獨占的地位の設定にある樣な場合を假定する。此の場合に動もすれば企

業利潤を單純に繼續的獨占利益とし、獨占利益を單純に企業利益と看做し勝である。併し此の場合二個の異つた經濟現象が存在する。獨占的組織の施行は一つの企業的行動であつて、其生産物 Produkt が企業利潤として現れる。此の組織は其れが一旦動き出した曉には絕えず同一の收益を生むで行く。併し此の收益は其後は獨占的地位の立脚する自然的社會的要素に歸せしめるべきものであつて、——獨占利益となり終るものである。起業者利潤と繼續的收益とは實際的にも異つた事物である」（Schumpeter, Theorie, S. 320.）と。

次に地代と企業利潤の關係に付いてシユムペイタアの說く所を見ると、「最初に企業利潤であつたものゝ一部分は地代に移つて行く。此の場合に於て此の經濟的量は經濟的性質を變ずるものである。玆に一人のプランテイションの所有者があつて從來甘藷を栽培して居つたのに、今や遙に利益の多い棉の栽培に移つたと假定する。此の如きは此の所有者の新しき結合であつて、此の者は企業家となり一つの企業利潤を獲得する。何となれば其人の費用の表には甘藷の栽培に相當する地代が計上されるのみである。其れが如何に事實上起るとしてもやがて起り來たる競爭は早晩此の收入を消失してしまふと假定する。併し此の場合に尙ほ餘剩が殘存するならば、如何にそれを說明すべきであるか。又此の餘剩は經濟的に見て何であるか。此の餘剩は競爭のフリクションを除外して考へれば、單に當該土地が棉の栽培に對して特に differentiell に適して居るか、乃至は土地の收益が新たなる使用方法によつて一般的に上昇したか、何れかの場合に於てのみ起る。——原則として此は常に之等兩要素から生起する。此の事は既に繼續的なより高い收益の全部を地代たらしめる。加ふるに繼續して棉を栽培するならば企業家的職業は終りを告げて、全收益は今や原始的なる生產要素（土地勞働）に歸せしむべきである」（Schumpeter, Theorie. S. 320）と。

シユムペイタアの以上の所論より、氏が如何に利潤を地代乃至獨占利益と區別するかの一端を窺ふ事が出來ると信ず

る。氏は土地、獨占等に歸屬せしめらるべき純收益は總て之を企業利潤と見ようとはしない。氏に取つては單に企業家の生產要素の「新らしき結合」と云ふ事に歸屬せしめらるべき純收益のみが利潤である。而して氏は自由競爭が行はれる事を假定する時は、此の企業利潤は久しからずして消滅するものであると考へて居る。卽ち繼續的でなくして一時的なる事が企業利潤の特質であり、從つて其れは繼續的となるや否や企業利潤は立ろに其の本質を變じて地代乃至は獨占利益となり終るものである、利子は此の企業利潤から徵收せられるものであつて、從つて地代乃至獨占利益とは峻別せらるべきものであるとなして居る。

玆に於て考へなければならないのは、先づ第一に獨占の意義である。シユムペイタアは獨占を以て單に一つの經濟主體が一財貨の供給を完全に支配する場合（Schumpeter, Wesen. S. 371.）のみを指稱し、優良なる土地の地主の如きは何等獨占的利益の所有者ではないと考へて居る。併し獨占を斯くの如く嚴格なる意味に解するならば、現今の經濟社會に於ても獨占なるものは殆んど存在しないと云はなければなるまい。鐵道が國家によつて排他的に供給せられて居つても、交通手段の供給を排他的に國家が支配して居ると稱し得る場合を想像するは困難である。前揭の如き典型的獨占と見られる樣な場合に於ても、其實は唯比較的强大なる支配力を持つて居ると云ふに止まると信ずる。然らば獨占の本質は何等かの意義に於て他人よりも經濟力が强大であると云ふことに覓める方が、より論理的であると信ずる。獨占を斯くの如く經濟力の比較的强大といふ事に覓めるならば、新らしき結合を行ひ得る企業家は、他人に比して少くとも其の才能的獨占を所有すると認めらるべきであつて、其の獲得する企業利潤は才能的獨占に歸すると稱する方がより論理的であると思ふ。

又シユムペイタアは、競爭によつて間もなく消滅するといふ事を以て企業利潤從つて利子の特質となし、其が繼續的

となるや否や企業利潤は直ちに其の性質を變ずるとなすけれども、謂ふ所の『繼續的となる』とは何程の繼續を必要とするか、一年間繼續するのが繼續的であるか、百年間繼續するのが繼續的であるか、更に不明である。今或る獨占が作られた場合には、シユムペイタアの理論よりすれば必然始めから獨占利益の性質を存するものと見なければならないに拘はらず、氏は此の場合にも企業利潤が存在するとなす。何によつて獨占利益と企業利潤とを別つか更に不明である。

吾人の見地よりすれば、所謂地代、獨占利益、企業利潤は何れも費用以上の餘剩利益たる點に於ては其の間に本質的なる區別を認め難い。何れも其の所有者の有する何等かの經濟力の强大(企業家の才能も貨幣價値獲得力たる方面より見て經濟力と稱するを得る)である。之等の區別は之等の餘剩利益の歸屬せしめられたる所謂生産要素の差異である。利子は之等の總ての餘剩利益から徴收せられるものである。

此の見解は現時行はれる通說と著しく異るものであるが、而も吾人は現在の所では以上の如き見解を持せざるを得ない。

以上の所論に於いて何等かの獨占と利子なる現象とは不可離の關係にある事が知り得ると信ずる。併し斯くの如き獨占狀態を容認する得失の問題は、所謂資本家の社會的職能、進んでは今日の經濟組織に關する根本的批判の問題であつて玆には之を論ずるを得ない。

又資本は貨幣其他の支拂手段の形を有する限り資本であつて、特定の具體財の形態を採るや否や資本ではないとなすシユムペイタアの見解には吾人の同意し難き所である。吾人は營利の職能を盡すが爲めに特定の組織の下に置かれたる各種の外界財の貨幣價値が資本であつて、如何なる具體的財貨に貨幣價値が宿るかは問題でないと信ずるが、資本概念其者を深く考察する事は更に別の機會に讓り度い。

軍事豫備教育批判

軍閥の思想占領

青野季吉

陸軍が主腦となつて文部や内務を左右に引きつけ、「軍事豫備教育」の大計畫に着手すると云ふことである。いや既に、その一歩を踏み出してさへゐるやうである。「大阪朝日」の言葉をかりると、これはまことに、「わが國民教育の根本に觸れ、延いては國防の上に大變化を來す」大計畫と言はなければならぬ。

學校教育を生ぬるい文部の分掌にまかせておくわけにはゆかぬ。社會教育をぐづぐづの内務の勝手にさせておく可き時ではない。軍部の將帥が自ら肥馬に鞭つて、この文化思想戰線の陣頭に立たなければならない。軍事豫備教育計畫の旗幟の裏に、右の文字が鮮やかに記されてゐることは、四十六議會の陸軍豫算委員會席上の、山梨陸相の說明で明らかである。

「國防といふことを人民自らが進んでやらずに、これを嫌惡するやうになつて來たならば、これは私は、わが國の思想上の一大變化とし、國の安危に關する所ではないかとまで、實は思つてゐる。唯々私はこの思想を導いてゆくことは頗る重要で教育上、又社會の教育上どうしても是はやつて行かなければならぬことゝ思つてゐる。」山梨陸相はさう云つてゐるのである。陸軍の主腦がこゝに忽ち文教の主宰者に早變りしたわけである。そして、「わが國の思想上の大變化」の秋に際して、「思想を導いて」行き「教育上（學校）又社會の教育上」の戰線に立たなければならぬと宣言してゐるのである。

陸軍の主腦が、忽ちかくも文教の主宰者の坐に直つて來たわけは、何に依るか？

いま兵隊の數の方から見ると、日清戰爭時代には、現役兵萬

能でことが足りて行つた。日本の軍國主義はまだ歩き出したばかりの幼年時代だつたのである。日露戰爭時代には、それを在鄕軍人中心主義にひろめて、あの通りのことをやりおほせたのであつた。日本の軍國主義は、その時まさに、晴やかな青年時代に入つてゐたのである。ところで次に來る戰爭では、名實共に國民皆兵主義で行かなければならぬ運命になつて來た。日本の軍國主義は、がつしりした成年の時代に入らなければならなくなつたでのある。この軍國主義の成年時代には、軍部の主腦者はもはや、限られた兵營内の教育の主腦者であつては、事が濟まぬのである。進んで全國民の文教の主宰者として乘出して來なければならぬのである。陸軍大臣が「軍事豫備教育計畫」を發表し、支配階級の執行委員會たる議會において、國民の思想的指導の決意を宣言するのも、勢ひの當然である。

軍國主義が資本主義、資本家階級の、對敵保證であることは、あらためてこゝに說明を須ふる必要はない。そこで資本主義の方から云ふと、日清役時代の日本の資本主義は、高が渤海朝鮮の原料產地、市場のための競爭であつたのだから、それに應じた軍國主義、少數の現役萬能　軍隊の小供で、事が足りて行つた、ところが日露役時代になると、日本の資本主義は、支那、滿洲、北洋の被搾地の奪ひ合ひになつて來て、第二段の成長を遂げたのであるから、現役兵以外にいくつも輪をかけた在鄕軍人中心、軍隊の青年を必要としたのである。そこで今日になつては、日本の資本主義は、支那、西比利亞、南洋での資本競爭を目標とし、英米資本を向ふに廻して來たのであるから、正に第三段の展開に入つたので、ドラスチックな國民皆兵、云はゞ軍隊の大人を準備せねばならなくなつたのである。

かう言ふわけでそれは資本主義の進展上、さうなるより外はないのである。これを言ひかへると、資本主義がますます展開するためには、無產者大衆は、ますます廣きに亘つて、一方に被搾取の經濟的十字架を負はねばならず、他方に、兵役の政治的十字架を負はねばならぬのである。「軍事豫備教育」による國民の軍隊化とは、無產青年大衆が一人の例外も無く、この二重の義務――十字架を負ふことに外ならぬのである。

だが、無產大衆をして素直に、この二重の義務に甘んぜしめるためには、何よりも厄介なものはとかく我儘な「思想」である。そこで先づこの「思想」を導いて下地を造らねばならぬ。しかも無產者大衆の現實の思想は、國防の義務を「嫌惡」する傾向を示し、「わが國思想上の一大變化」が來てゐる今日であるから、それは何よりも重要であらねばならぬ。「軍事豫備教育計畫」を軍縮による實質的補充といふ機械的意味からよりも、思想の

指導といふ生命的な意味から、その重要さを說いた山梨陸相は正直な告白者として大いに推賞してよいのである。

しかしながら、山梨陸相の言葉をかりて言へば、既に「軍服を着るのが厭になつた」無產者大衆に對してのことであるから、事情をかく露骨に言つてしまつたのでは、とうていその思想の指導を果し、文敎の總指揮官としての光榮ある戰勝を斂めることの出來ぬのは明白である。こゝに、文部や內務の智慧をあつめて、「國防は國民の國防なりとの本義を明らかにし」云々の寺小屋式スローガンが案出された次第である。國防は資本家階級の國防なりと言つたのでは、あまりにむき出しで文敎の舵がとりにくいので、余り明るみへ曝し度くない「資本家階級」といふ中味を、人聞きのいい「國民」といふオブラートに包んで、無產青年の舌觸りをよくしたまでなのである。

ところがそれだけはまだ安心が出來ない。思想はまだまだ「惡化」してゐるのである。とかく軍閥とか、「軍事當局とかいふ稱呼は「墮落」した國民には快よい響きを傳へない。それは事實である。そこで總指揮官はしばらくその英姿を潛めて、おもむろに未來を計ることが肝要となつて來る。その邊のタクチツクをモウ一度議事錄をひつくり返して、曩に正直な告白者として推稱した山梨陸相に聞かう。

「學校に於ける是等敎育は、陸軍が要求するのでなくして、學校そのものが要求する。斯ふ言ふ方針はなれぬといふと、其所に何か余計なことをするかの如き感を與へてはいけない。又團隊がやるに付いてもその通り、地方の長官がそれを主としてやる。斯う云ふことにならぬと、どうも貫徹しにくい。」是れである。つまり言ひ換へると、陸軍の要求としたのでは甘く行かぬから、學校や團隊そのものゝ要求としてやると言ふのである。そして陸軍は知つたことぢや無いと言つて、ノホホンで居て遂には物の見事に、大計畫を「貫徹」しやうと言ふのである。

（——これにつけて思ひ出すのは、早稻田大學の軍事研究團の問題が騷々しかつた時、發團式に臨んだ軍事當局は、あれは陸軍の知つたことぢやない。學校そのもの、いや、學生自身が「要求」したんだと言つて、平氣でゐたと新聞は傳へてゐた。それが本統だとすると、山梨陸相が議會で明したタクチツクは、尠くとも早稻田大學の場合だけでは施す世話が無く、まことにお誂へ向きに先樣が運んでくれたものである。——）

これまで述べたところでも分る通り、「軍事豫備敎育」とは、無產青年大衆の腦髓の中まで武器化して、一個の完全な靈肉合致した肉彈を準備しやうとする大計畫である。それをしかも無產青年大衆の自發的要求の形をもつて押出さうとするものであ

る。これはまことに、「わが國民教育の根本に觸れ、國防上の大變化を來す」一大計畫と云はなければならぬ！（終）

外に侵略、内に反動

小牧近江

今更らびつくりする程のことでもないといへばそれまでだが、五月卅日の「東京日日」を讀んだ僕はさてはいよいよ勅令になるのかと思つた。さすが新聞だけあつてその標題は面白い。「眞物の鐵砲を舁ぐ少年軍を組織し聯隊區の所管を昇格して教育に當らせる」とある。その意味は、軍縮の結果、今年度は一箇聯隊で、三中隊づつ減つたので、壯丁は體格方面で、今までより嚴選される結果になるのだが、それでゐて壯丁の體格低下は最近著るしい傾向なので、こんなことでは末が思ひやられる。面白くない現象だとあつて、當局では俄かに軍事豫備教育に意を注ぎ差し當り國民少年軍を組織する魂膽なそうだ。そしてその國民少年軍なるものは在來の「市長やめても少年團長は退めぬといつた」あんな少年團よりも遙かに具體的な眞物の鐵砲を舁がせる仕組なそうで、これまで軍令のもとにやつてゐた聯隊區の仕事が今度これは關係なく勅令でやるとに變更を見たのはそれの準備であるといふのだ。それが五月卅日の地方官會議でなした山梨陸相の講演から推して察して見ても滿更ら根も葉もないものでもないらしい。陸相のいはく「現時思想界の狀況は或は國民の國防觀念減退せんとするの傾向なきにあらずこの時機に處し在鄕軍人をしてその思想を正順にし堅實なる發達をなさしむるは國防上喫緊の事なりと信ず。而して各位は本會が國家國民の在鄕軍人會たるの趣旨を普及徹底せしむると共に將來一層の援助あらんことを望む」と。

陸相は、在鄕軍人會はいかにも穩健なる發達を遂げつつあるか如くに思ひ、更らに本音を吐いていはく、「青少年の心身を鍛練し國民の資質を昂進すると共に國防觀念を向上するの要愈々切なるものあり當局も今や思を茲に致しこれが方案に就き攻究中なるが陸軍においては目下成し得る範圍に於て各地方に於けるこの種訓練の援助を企畫しあり各[illegible]はこ

れが程度方法等に關し各地方師團長と協議せられ管下青少年の訓練に資せられんことを望む」

とある。そこへ持つて來て同じく六月二日の「東京日日」は在鄕軍人、學生、思想團體などの青年本位の百萬の團員を作るつもりで軍事研究團を組織するそうであることを報じてゐる。右に對し、高畠素之氏によれば、同團はイタリーのファスチスチと目的はちがつてゐるが行き方は同樣なそうだ、氏らが心强く思はれてゐることは、この計畫がいつの間にか軍人社會にもれて豫後備の佐官、尉官階級から盛んに入會を申込んで來てゐるそうだ。

まことにさもある可きことなので、ここには何らの不思議がない。政府の仕組もうとすることに出來ないものは一つとしてありあしない。百萬どころか地方長官と師團とを結托させたら、さしあたり、三百萬の團員と資本金五百萬圓を有する青年團の名義を假りに變更さしただけでも此の位の研究團を作るには難事でなからう。

こんなことから想像して見ると、最近早稻田であんな散々な味噌をつけた陸軍當局も軍艦の海軍に較べて見劣りする程頭が惡かつたやうだつたがさすがの根氣だけは偉らい。帝國在鄕軍人會は國家國民の在鄕軍人會だなどといふ陸軍としては案外開けた宣傳ぶりは誰れの入智えか知らねど滿更捨てられたものではないのだ。

在鄕軍人會は國家國民のものであつたり、軍事研究團が國家國民のものであつたり、國家國民の軍事豫備教育にするために、さすがに當局は甘い先手を打つたものである。國家國民の陸軍であつたり、國家國民の豫備教育といふ提唱は、もともと國民から起る可き筈のものである。それを當局の方からうまくあつさりいかにもそれが國民の聲らしく仕組んだのだ。軍隊が軍國主義の軍隊であるといふ非難から逃れる唯一の方法は軍隊は國家國民のものであるとする最後の宣傳より他に救はれる道がないのだ。つまり軍隊は職業軍人のものではなくて國民それ自らのものだといはせることである。言ひ換れば、これからの軍隊は兵營の軍隊ではなくて國民生活の軍隊化 l'unité par en haut の軍隊ではなくて、l'unité par en bas の軍隊だと甘く軍隊を民衆化するのだ。

そうなると勢ひ地方の青年や學校や其の他で軍事豫備教育の普及といふことになる。それが當局のからくりで、もともとそういつた叫びは直接國民から起るべきのに、日本國民はそんなことに案外無頓着なものだから、上から火をつけ初めたのだ。各校の軍事研究團などの本體は全くそこらにある。師團長會議

で學校を軍隊化しやうと決めたり、早稻田の軍事研究團發會式に軍人が馬で乘こんだり、發會式の光景を活動寫眞に撮つてこれを全國的に軍事教育の宣傳にしやうとした魂膽がはつきり讀まれるではないか。

かつてフランスに三年兵役法案が出た時、ジヤン・ジヨレスは「新軍隊論」を唱へてこれに猛烈に反對した。そして、「近世に於ける列強の軍隊は盡く兵營の軍隊である」が吾人の主張する國防軍に兵營と兵役の迷信から脱却せる國民の國民軍でなければならぬと叫び、それには軍隊の社會教育と大學生の軍隊豫備教育とを唱導した。ジヨレスはそうしたことにより、職業軍人乃至職業愛國主義者に依らざる理想のデモクラチック軍隊が出來るものだと思つたらしい。今日日本の陸軍省の口から「兵營の開放」や「兵役年限の縮少」や「學校その他の軍事教育」や「いはゆる軍隊の民衆化」を聞くことは何んたる皮肉だらう。これでは、當局は社會平和主義者の「新軍隊論」をたくみに逆用してゐるといつていはれぬことがない。

軍隊の軍隊にしろ、國民の軍隊にせよ、いづれにも軍事教育熱は必ず戰爭後に起る世界を通じての現象で、ウイン會議後に於ても、またヴエルサイエ會議に於てもその結果は同じことである。そして軍事教育の生む二つの精神は？いつの時代と同じことで、外には帝國主義、内には反動主義。それ以外にいい結果何ものもあれやしない。（一三・六・三）

軍事豫備教育批判

青柳篤恒

それは、區別を立てゝをかねばならぬ、亞米利加合衆國の如き傭兵制度の國と、我が日本國の如き徵兵制度の國との間には、勿論。……彼の、どこからだかの宣傳――僕の周圍の人の多くは、陸軍あたりからだといふ――『醒めよ』てふパンフレットなどによつて。亞米利加あたりの軍事豫備教育の現狀を見て、直ちに日本もこのとほりにしなければならぬと卽斷するのは、早計である。

たゞ、方面をかへて考へて見る、自由と規律とは矛盾するも

のではない、規律性を基調としての自由、そこに正しい意味に於けるリベラリズムがある。規律ある國民の洪就、そこに軍事教育の必要を認める。現代日本國民の國家的觀念に就て見る、そこも軍事教育の必要を認める。

近く、日本國民の國家的觀念は衰退しかけた、母國の徵象（シンボル）たる國旗に對する觀念を見ても、日本建國の紀念日たる大祭日に對する觀念に見ても、しかし、日本の國民は忘恩の國民ではない、終りを愼しみ遠きを思ふとは東洋道德の根幹である。國家的觀念の衰退は、國民教育の缺陷にも據らう、又た、日本は幸か不幸か、建國以來二千五百八十有餘年、未だ嘗て國難といふべきほどの國難に出會はなかつたのにも據らう、有りと有らゆるものは、皆日本の歷史を飾り、日本國民の自負心を唆るものばかりであるから、蒙古の襲來といひ、神宮皇后の三韓征討といひ、豐太閤の朝鮮征討といひ、又た日清、日露、日獨の戰爭といひ。

世界戰後、歐米列國の間には、インターナショナリズム・國際主義・國際協調主義が高調せられてゐる、しかも、彼等が燃ゆるが如き國家主義に腐心しつゝあることは、見逃すべからざる事實である。僕は言ひたい、現實の國家主義は、理想の國際主義と、必ずしも矛盾するものではないといふことを。

アングロ・サクソン民族の理想は高遠である。しかも、彼等は、一日でも現實を忘れたことがない。其のあたまは高く雲表に聳えてをつても、その脚はシツカリと大地を踏みしめてをる。彼等は、現實に立脚して理想に活きるものである。現世を忘れぬ久遠（くをん）の理想とは、これだ

東洋人の理想、そこには、燃ゆるが如き憧憬はある、射るやうな考察はある、しかし、動もすれば餘りに抽象的に過ぎて現實を忘れ、流行を追ふて、ひたすら極端から極端へとはしつてゆく。この輕佻な、浮薄な、雰圍氣を脫却して、健實な、眞劍な、國家思想を打建てんとするところに、軍事教育の最も適切なる方法なるを認識する。

軍事豫備教育を實行する前に考慮を必要とする一點がある、我邦に於ける現行軍隊の研究がこれである。日本が、今のまゝ徵兵制度でいつまでも押し通さうとするならば、軍事豫備教育を一般的に廣く行ふべき必要を認めない。我日本の軍隊制度が改造されて、亞米利加の如く傭兵制度となつたならば、軍事豫備教育は、之を一般に行はなければならぬ。それは擧國皆兵といふ見地から、軍備は縮少すべし而かも國防は充實せざるべからずとの見地から、今までの軍隊的國防にあらずして國民的國防の基礎を築き上げなければならぬといふ見地から。……吾人

は、日本の軍事豫備教育は、どうしてもその先決問題として、その中に現行軍隊制度の解剖分析を目的とする學理的研究を包含しなければならぬことを提唱する。

軍事豫備教育の實施に就て、注意すべき第二點は、軍隊の民衆化？ 民衆の軍隊化？ といふこと、國民を主體とせる國家主義と軍閥を主體とせる軍國主義との間に於ける思想上のコンフエージョンを豫防するといふことが、それである。露骨に之を言へば、由來軍閥――若しさういふものが今の世にまで殘存してをるとしたならば――のなすところは、多く陰險であるとは、いつともなしに深く國民の心象に植ゑつけられたところの思想である。軍閥は double game の使ひ手であるといふ思想は、これといふ理由もなしに廣く民衆の間に行き渡つてをる。民衆は、軍部の人人に接觸することを、こわいものにされるやうな氣持でをる、軍隊の民衆化は進歩であり、民衆の軍化は逆轉であるが、うつかりしてゐると、この逆轉が現實となるやうなことがありはせまいか、ここに特別な注意の必要があることを、僕は痛感する、民衆は、軍部の人人の飽くまで公明な見地から出發してこの問題を研究せんことを要望してをる。

なほ、日本の大學と歐米の大學とを比較して、日本の大學の劣つてをる點も顯著なる事實は、體育（Gymnasism）にあるこのジムナシズムと軍事豫備教育との關係は、ここに僕の議論から取り殘されてをる。（大正十二・五・三十一）

近代國家の國民皆兵主義の成立と破壞

長谷川如是閑

武門階級の廢止は、近代的デモクラシーの國家の一つの特徴であつた。それには軍國的貴族の權力を剝奪して、その武力を國家的に統一した舊王朝の統一事業が其先驅であつた。王權の擴張が國家運動と結び付いたのが、デモクラシーの直ぐ前の國家的形勢であつた。佛蘭西革命の直ぐ前のルイ朝の統一事業がそれであつたが、日本の近代のデモクラシーも、先づ大名の武

力を王權で統一することから始つた。

デモクラシーの前期が右のやうな武力の國家的統一を先驅とした結果、デモクラシーは當然、國民皆兵主義でなければならなかつた。而も、それは武門階級の崩壊を伴つてゐたが、その間に自然近代的の軍人階級を生み出した。これは昔の武門貴族の傳統的の組織とは別のものであるが、軍事は如何なる時代に於いても、特別の智識經驗を必要とするので、其處に自ら一種の生活理想を持つ、一階級を發生せしめない譯に行かないのである。謂ゆる軍閥は、現代の意味では、此の職業的生活意識に基づく一階級であつて、必ずしも傳統的貴族のそれと一致するものではない。傳統的貴族は、皆軍國貴族の後裔であるから、自から新な軍閥階級と結合する傾を持つが、それでもデモクラシーの國家に於ける軍閥階級と、武門貴族とは全然の一致を見るとは出來ない。例へば、新たに生じた軍閥階級は、現代的支配階級、即ち政黨政治の政治家（自由主義者）と一致の歩調を取る傾きを持つが、武門貴族はもつと保守的の地位を固執する傾を持つ。

デモクラシーの國家に於ける軍人階級は、それ故に、昔の武門貴族と異つて、民衆の軍國化に努力する。即ち軍人階級の意識を民衆化して、軍國的理想を近代的デモクラシーの國家的行動で達成せしめんことを計る。之には二つの意味がある。一つは軍人階級それ自體の生活理想の實現を意味し、又一つには近代資本主義の階級的理想を實現する爲めの、帝國主義を意味する。この軍人階級の理想と資本家階級の理想との一致は、近代的デモクラシーの國家の一つの顯著な特徴をなすものである。そして此の理想を實現する爲めに、軍事教育が近代國家の有力な方法となる。

近代の國家がその軍備に於いて、如何なる時代のそれよりも有力に大規模に發展したのは右の理由に依る。而して世界の大戰――今までの如何なる戰爭にも増して大規模の――を惹き起したのも、當然の成り行きである。つまり國民皆兵主義は、此の大戰亂の準備行爲に外ならなかつたのである。その規模の空前であつたのは、一つは戰爭目的が國際的資本主義の戰であつた爲であり、他の一つは國民皆兵主義を以つて戰つた爲めである斯樣の目的 斯樣な方法を以つて戰つたことは、今までの國家では有り得ないことで、廿世紀の資本主義國家――デモクラシーの國家――あつて始めて起り得る現象である。

其處で、日本の普通教育に行はれ來つた軍事的教養の意味も明かである。少年は無意識に、又遊戲的心理で鐵砲を擔ぎ、突貫し、無邪氣にその軍事的教養を受けてゐるが、國家が何故にさう云ふ教養を無邪氣な少年に施すのであるかと云へば、以上述

べたやうな根柢に依つてゐるのである。隨つて此の方法を如何に批難した處で、それが撤廢される譯のものではない。世界の國家が國際的資本主義の理想と、それに結合した軍人階級の理想とで行動しつゝある限り、それが教育方面に表るゝことを如何ともする譯に行かない。

然し此の武力と國際的資本主義の結び付きが、今尙ほ堅固な基礎を持つてゐるとは云へ、其の組織が近代社會組織の圓滿な發展を伴ふものであるかと云ふに、其の點では明に離局に陷つてゐるのである。世界のデモクラシー國家に於ける政治能力の減退が、明かにそれを示すと同時に、近代的軍國組織が經濟上から行き詰つて、止むを得ない平和主義が、次第に國家理想に喰ひ込みつゝあることを見てもそれがわかる。これは二十世紀に於いて頂點に達した一種の生活組織が、既に崩壞の過程を取りつゝある證據であつて、而もその事實は、現代人の生活意識の上に表れて、舊思想、舊信仰の動搖が謂ゆる思想界の混亂を捲き起しつゝあるのである。それは舊思想、舊信仰を生み出した生活組織が崩壞して、新たな建設を要求する過渡期の當然の心理であつて、社會的に不健全な外觀を持ち乍ら、實は健全であることを示す症狀である。それは恰度苦痛を感ずる病人は、尙ほ生きる力を持つてゐる證據であるのと異らない。

此の新たな建設を要求する生活の衝動は、他方に於いては生活意識に働いて、舊制度に對する國家自身の意識的の破壞事業となる。一旦努力して造つた軍艦を惜しげもなく破壞すると云ふやうな行動は、卽ち舊制度の維持者それ自體の中に、舊制度を破壞する意識が働き出した結果である。組織の有機的變化はかくして、組織自體の內部から働き出されるのである。

此の意味に於いて、日本の普通教育の制度自體が改造を要求されるのである。既に教育當局者、殊に文部大臣の類が教育界を近代的軍人精神から解放させやうと試みた例は少くない。無論大した程度にそれをなし遂げたものはないが、着々その方向を取りつゝある。尤も日本の教育は、普通教育の創設時代、卽ち維新後始めて取りかゝつた當時の教育制度は、今のそれから見ると遙かに非軍國的であつた。それは武門貴族を打ち壞した維新當時の精神が、有力に働いてゐた爲めである。然るにその後國民主義の勃興となり、帝國主義の影響を受け、日本の教育は非常の速力で軍國的に變化した。明治十年代に於いては、國民は普通教育で、鐵砲擔ぐことは無論のこと、兵式體操一つ授けられなかつた。教科書は頗るインターナショナルの飜譯本を用ひ、日本固有の武術の如きも決して普通教育には入れられてなかつた。

此の非常に進歩した教育樣式は　明治廿年代の末から卅年四十年代に渡つて急激に逆轉して、少年は昔の武門階級の子弟の如く、柔道撃劍を强ひられ、鐵砲をかつがせらるゝに至つた。而して此の逆轉は依然として今日に及んでゐる。撃劍柔道も普通教育の正課に入れられ、軍事的教練は普通教育で强制されてゐる。

之は慥かに前に言つた世界的大戰爭を惹き起した國家目的と共通の目的を持つた國民教育である。それは資本主義的大戰爭の準備行爲であつたのである。近代國家は日本に限らず、斯樣な方法でその商業上の地位を軍國的に擴張せしめやうと努力したのである。

然も前に言つた如く、現代の生活意識は既に内部から右の樣な制度を破壞すべく働き出してゐるのである。從つてその意識の作用に依つて、恰度折角造つた軍艦がぶち壞されるやうに、右のやうな制度は破壞されるにきまつてゐるが、然し制度の進化は一方で舊組織を破壞する力が働くと同時に、他方ではそれを維持する力が有力に働く。近代國家の軍人階級は他の國家機關を通じて、その理想を固執する運動を怠らない。一旦崩壞の徴候が現るれば此の努力は益々猛烈となる。階段的生活の自家妨禦は必ず必死の努力となつて現れる。それは階級的生存の安危にかゝはるからである。故に斯樣な舊組織の擁護者に對して社會的に努力する必要がある。之も亦、新たな建設を要求する階級の理想であつて、他方が極端化するに對し、こちらも極端に働いて、いゝ加減中庸の進行を取るのである。

さう云ふ極端は別として、普通教育に軍事的教養を加味する今日の教育制度が、社會的に有害な結果を生ずることは疑ひない。普通教育は、今日の社會的意義に於いては、軍國的征服の準備でもなければ　資本主義的侵略の修養でもない。今日までの教育の意識は、慥かに右の二つの侵略を目的としたに違ひないが、その國家目的が行き詰ると、同時に教育の目的も行き詰つた。さうして新たな社會意識がその基礎とならなければ教育は全く無意義となる。一方で多數の軍人を止めさせて、平民的生活に追ひ遣り乍ら、他方で平民を軍人に造り上げると云ふのは、餘りに明白な自家撞著である。或人は言ふ。專門軍人を止めさせるから、愈々全國民を軍人にする必要があると、さう云ふ議論が政黨などの間に可なり有力なのは甚だ滑稽である。軍人を止めるのは、現代の社會生活が軍國主義を基調とする組織に於いて行き詰つたからである。それは、軍事が大切であるが金がないので軍人を止めるのだと云ふ解釋は、軍事組織そのものゝ崩壞が、經濟關係に依つてゐることを自白してゐるのであ

つて、軍事そのものが、今日の社會に經濟的に存立の能力を失つたことを示してゐるのである。畢竟、軍國的勢力が、社會的能率を失つたのである。國民全部が軍人になつて見ても、維新後の武士と同じく、それでは食つて行かれないと云ふ狀態に陷つたのである。故に維新後の教育が、武技專門から生産的に變化したやうに、今日の教育も軍國的から生活的へと移つて行く筈である。今日の人民は鐵砲擔ぐよりも、もつと重大な教養を要するのみならず、鐵砲を擔がせられる爲めに發生する軍國的精神は、今日の社會的精神と相容れない爲めに、現代的教養の妨害となる。

普通教育は、現代の社會が各人に何う云ふ仕事を要求してゐるかを見定めることに依つて、方針がきまるのである。現代は貴族的文化の享樂者を要求してゐない。ギリシヤ市民のやうに全く何もしないで、高級の文化を享樂すると云ふやうな人間は現代に於いては無用の長物である。從つて、ギリシヤ市民を作るやうな教育は今日では有害である。又現代は互の生活を民族同志の侵略に基かせるやうな時代のそれとは一致しない。國家同志民族同志は互の侵略に依つて生きることは不可能となつた。そして生活の共存が國際的生活樣式となりつゝある。資本家は資本家で國際的に協同し　勞働者は勞働者で國際的に協同し、互の社會的集團は全く世界的となつた。力は此の協同生活の集團力に依つて養はれ。働き出される、其處で人間の教養す生活の協同に向つてゐる。民族的排他や武力的打撃やを修養するのが今までの教育であつたが、今後の教育はその正反對の協同の爲の修養である。日本の普通教育にはそれが全く缺けてゐるのを見ても、既にそれが意味を失つてゐることを知るのである。軍事教育を普通教育に結び付けるのは、此の無意味に基いてゐる。

殊に大學教育に軍事的教養を、注入せやうとする如きは無類の珍思想で、抑も如何なる生活の理想に基いてさう云ふことをするのであるか、全く判斷がつかない。恐くこれは、衰退して行く軍人階級が何かに縋つて、その階級的生存を維持せやうとする一努力に過ぎないのであらう。然し唯だそれ丈の意識でさう云ふとをする結果が、如何に現代の國家の進化を妨げるかを知らないのは甚だ危險である。日本の大學が、日本の國家的生存の上で、如何云ふ地位を占むるかは、彼等軍人階級が考へるやうに簡單なものではない。大學が危險思想を作るから、之を軍國的に征服すれば安全になると考へるのは、甚だ單純な軍人的頭腦である。露國の舊皇室は澤山の大學生を、サイベリアに流した。それは安全を目的としたのであつたが却つてさう云ふこ

とが、一層安全を脅やかす結果となつた。淺薄な手段は却つて反對の結果を招く、深く考慮せねばならない。

然し今まで軍國的精神に依つて行はれてゐた軍事的教練そのものは、一つの生活の規則即ち人間的生活協同の規律として、或程度まで生活に實現されなければならない約束である。集團的行動、命令服從の關係、或る種の武器の取扱ひ、馬匹自働車等の技術其の他は軍國的生活以外に於ても必要なのであつて、云はゞそれは日常生活の有力な技術である。それを軍事的精神に於いてせずに日常生活の精神に於いて修練することの必要であるのは云ふまでもない。(此點に關しては雜誌『我等』六月號の『大學生の軍事研究』と題する筆者の一文で述べたからこゝには省略する。)

京都大學の講演

京都大學に於ては來る八月一日より左の科目にて第十四回講演會を開くそうだ。

科目	講師
憲法學上の基本問題一般	森口繁治
和歌の用語	吉澤義則
藝術哲學	植田壽藏
心の進化	川村多實二
性教育論	山本宣治
遺傳論	桑田義備
日本社會史	本庄榮治郎
マルクス資本論大意	河上肇

右の外會期中左の科外(夜間)講演を開く(聽講料を要せず)
我國の婚姻及離婚に就て宮本英雄　フランソワ・ラブレ太宰施門　支那の古禮と原始社會の生活小島祐馬

日本脱出記

――ヨーロッパまで――

巴里にて　大杉栄

一

去年の十一月二十日だつた。少し仕事に疲れたので、夕飯を食ふと直ぐ寝床にはいつてゐると、Mが下から手紙の束を持つて來た。いつものやうに、地方の同志らしい未知の人からの、幾通かの手紙の中に、珍らしく横文字で書いた四角い封筒が一つまじつてゐた。見ると、かねてから新聞で其の名や書いたものは知つてゐる、フランスの同志コロメからだ。何にを云つて來たのだらうと思つて、ちよつと其の封筒をすかして見たが、薄い一枚の紙を四つ折にした位の手觸りのものだ。もう長い間の習慣になつてゐるやうに、それがどこかで開封されてゐるかどうか、先づ調べて見たが、それらしい形跡は別になかつた。たゞ附箋が三四枚はつてあつたが、それは鎌倉に宛てゝ書いてあつたので、そこから逗子に廻り、更に又東京に廻つて來たしるしに過ぎなかつた。そんなにあちこちと廻つて來ながら、よく開封されなかつたものだと思ひながら、とにかく開けて見た。ほんのたゞ十行ばかり、タイプで打つてある。

それを讀むと、急に僕の心に踊りあがつた。一月の末から二月の始めにかけて、ベルリンで國際無政府主義大會を開く事になつたが、ぜひやつて來ないか、と云ふ、其の準備委員コロメの招待狀なのだ。

大會の開かれる事は僕はまだちつとも知らなかつた。が、ちようどいゝ機會だ、行かう、と僕は心の中できめた。そして机もとの小さな丸テエブルの上から、其の日の着來たまゝまだ封も切つてなかつた、イギリスの無政府主義新聞『フリイドム』を取つて見た。果してそれには大會の事が載つてゐた。

招待狀にもちよつと書いてあつたやうに、九月の中ばに、ス

キツルのセン、テイミニで、最初の國際無政府主義大會と云つてもいゝ、謂はゆるセン、テイミエ大會の五十年紀念會があつた。フランス、ドイツ、イタリイ、スヰツル、ロシア、及び支那の、百五十名ばかりの同志が集まつた。そして其のセン、テイミエ大會に與かつた一人のマラテスタも、ロオマから窃かに國境を脫け出て、そこに出席した。先年彼れは此のスヰツルから追放されてゐるので、そこにはいれば、見つかり次第捕まる恐れがあつたのだ。

紀念會は一種の國際大會のやうなものになつた。そして其處で、無政府主義の組織の事や、無政府主義とセンディカリスムの關係の事なぞが問題となつて、いろ／＼議論のあつた末に、フランスの代表者ニロメ等の發議で、新たに國際無政府主義同盟を組織しようと云ふ事になつて、急に國際大會を開く事にきまつたのであつた。

此の國際同盟の事は、もう隨分古い頃から始終問題になつてゐて、現に十五六年前のアムステルダム大會でそれが一旦組織されたのであつた。此の同盟には、僕等日本の無政府主義者も、幸德を代表にして加はつた。そして幸德は每月其の機關紙に通信を送つてゐた。しかし、元來無政府主義者には、個人的又は小團體的の運動を重んじて、一國的とか國際的とかの組織を輕んずる傾向があり、國際大會を開くにしても、其の選定した土地の政府がそれを許さなかつたり、又、各國の同志がそれに參加しようと思つても、政府の迫害や經濟上の不如意なぞのいろんな邪魔があつたりして、僅か一二年の間に此の同盟も立消えになつて了つた。最近滿足に開かれた大會は、前に云つたアムステルダム大會一つ位のもので、隨分久しぶりに開かれた一昨年の暮れのベルリン大會なぞも、長い間の運動の經驗を持つた名のある同志は殆んど一人も見る事が出來なかつた程の、餘程不完全なものであつたらしい。

しかし時はもう迫つて來た。殊に、ロシアの革命が與へた敎訓は、各國の無政府主義者に非常な刺戟となつて、今までのやうな怠慢を許さなくなつた。

『フリイドム』の此の記事を讀んでゐる間に、Kが其の勤めさきから歸つて來た。

『おい、こんな手紙が來たんだがね。』

と云つて、僕はコロメからの手紙の內容と大會の性質とをざつと話した。

『これや、ぜひ行くんですね。』

Kも大ぶ昂奮しながら云つた。

『僕もさうは思つてゐるんだがね。問題は先づ何によりも金なんだ。』

『どの位要るんです？』

『さあ、ちよつと見當につかないがね。最低のところで千圓あれば、とにかく向うへ行つて、まだ二三ケ月の滯在費は殘らうと思ふんだ。』

『其位なら何んとかなるでせう。あとは又あとの事にして。』

『僕もさうきめてゐるんだ。で、あした一日金策に廻つて見て、其の上ではつきりきめようと思つてゐるんだ。』

『旅行券は？』

『そんなものは要らないよ。もう、とうの昔しに、うまく胡麻化して行く方法をちやんと研究してあるんだから。たゞ其の方法を講ずるのにちよつとひまがかゝるから、あしたぢうにきめないと、大會に間に合ひさうもないんだ。』

　Kは此の二つの條件を聞いて、すつかり安心したらしかつた。そして下へ降りて行つた。

　しかし僕にはまだ、さうやす〳〵と安心は出來なかつた。實は其の借金の當てが殆んどなかつたのだ。借りれる本屋からは、もう借りれるだけ、と云ふよりもそれ以上に借りてゐる。そして、約束の原稿は、まだ殆んど何處へも何んにも渡してない。それに、若しまだ借りれるとしても、いやどうしても借りなければならんのだが、それは留守中の社や家族の費用に當てなければならない。ほかに二三人多少金を持つてゐる友人はあるが、それもほんの少々の金であれば時々貰つた事もあるが、まとまつた金はくれるかどうか分らない。それに此頃は隨分景氣が悪いのだから。

　そんな事をそれからそれへと、いろ〳〵と寢床の中で考へて見たが、考へてきまる事ではない。あした早く起きて、あちこち當つて見る事だ。さうきめて、僕は頭と目とを疲らせる眠り藥の、一週間程前から讀みかけてゐる『其角研究』を讀み始めた。

　翌日は尾行をまいて歩き廻つた。果して思ふやうに行かない。夕方になつて、うんざりして歸りかけたが、ふと一人の友人の事を思ひ浮んで、そこへ電話をかけて見た。そして、最後の幽かな希望のそこで、案外世話なく話しがついた。

　それでもう事はきまつた。

其の翌日は、九州の郷里に歸つてゐる女房と子供とに呼びよせに、Mを使ひにやつた。關西支局のWも女房や子供と前後して上京した。

準備は何んにも要らない。たゞ小さなスウツケエス一つ持つ

て出かければいゝのだ。が、其の前に、正月號の雜誌に約束した原稿と、やはり正月に出す筈の或る單行本とを書いて了はなければならない。そんな事で愚圖々々してゐる間に、もう暮れ近い事だ、やうやく貰つて來た金が半分ばかりに減つて了つた。そして、それを又やうやくの事で借り埋めて、十二月十一日の晩窃かに家を脱け出た。

二

家を脱け出る事にはもう馴れ切つてゐる。しかしそれも、尾行をまいて出る事が直ぐ知れていゝ時と、當分の間知れては困る時とがある。前の場合だと何んでもないが、後の場合だとちよつと厄介だ。

去年の夏日本から追放されたロシヤ人のコズロフが、其の前年窃かに葉山の家から僕の鎌倉の家に逃げて來て、そしてそこから更に神戸へ逃げて行つた時には、其のあとで僕は三日ばかり時々大きな聲で一人で英語で話ししてゐた。が、二三日ならそんな事でもして何んとか胡麻化してゐるが、一週間も十日も胡麻化さうとなるとちよつと困る。

一昨々年の十月、僕は窃かに上海へ行つた。其時には、上海へ着いて了ふまでは、僕が家を出た事を其筋に知らせたくなかつた。で、夜遲く家を出たのであつたが、其の翌日から僕は病氣で寢てゐると云ふ事になつた。しかし大して廣い家でもなしそれに往來から十分のぞかれた家でもあつたので、尾行者は直ぐ疑ひだした。そして四つになる女の子をつかまへて、幾度もきゝただして見た。そして其後、其の尾行の一人が僕にこんな話しをした。

『魔子ちやんにはとても敵ひませんよパパさんゐる？　と聞くと、うんと云ふんでせう。でも可笑しいと思つて、こんどはパパさんゐないのと聞くと、やつぱりうんと云ふんです。おやと思ひながら、又パパさんゐる？　と聞くと、やつぱり又うんと云ふんです。そしてこんどは、パパさんゐないの？　ゐないの？　と聞くと、うんうんと二つうなづいて逃げて行つて了ふんです。そんな風でとう〳〵十日ばかりの間どつちともはつきりしませんでしたよ。』

こんどだつて、駒込の家はやはり狹いし、そとから十分のぞかれる。直ぐ前のあき地の小さな稻荷さんの小舍の中にゐる尾行共には、家の中の話し聲を聞ゐてゐるだけでも、ゐるかゐないかは大てい知れよう。

尤も、四つの魔子は六つになつた。それだけ利口にもなつてゐる筈だ。そして女房は、子供をだますのは可哀さうだと云つて、よく云ひ聞かして、尾行の目串に乘らせないやうにし

ようと主張した。しかし僕は利口になつてゐるだけそれだけ安心が出來ないと思つた。そして僕が出る日の朝、Mに連れさして、同志のLの家へ遊びにやつた。そこには魔子より一つ二つ下のやはり女の子がゐた。

『こんどは魔子のすきなだけ幾つ泊つて來てもいゝんだがね。幾つ泊る？　二つ？　三つ？。』

僕は子供の頭をなでながら云つた。其の前に二つ泊つた翌朝僕が迎ひに行つて、彼女が大ぶ不平だつた事があつたのだ。そしてこんどもやはり『二つ？　三つ？。』と云はれたのに彼女は不平だつたものと見えて、たゞにこにこしながら默つてゐた。

『ぢや、四つ？　五つ』

僕は重ねて聞いた。彼女はやはりにこにこしながら、こんどは首をふつて、

『もつと』

と云つた。

『もつと？　それぢや幾つ。』

僕が驚いたふりをして尋ねると、彼女は左の掌の上に右の手の中指を三本置いて、

『八つ。』

と云ひきつた。

『さう、そんなに長い間？』

僕は彼女を抱きあげて其の顔にキスした。そして

『でも、いやになつたら、いつでもいゝからお歸り。』

と附け加へて彼女を離してやつた。彼女は踊るやうにして、Mと一緒に出かけて行つた。

彼女は、其の一ケ月前に、其の母が半年ばかりの豫定で郷里に歸つた時にも、どうしても一緒に行く事を承知しないで、社の二階に僕と二人きりで殘つてゐた程の、パパつ子なのだ。そして今でもまだ僕は、時々彼女を思ひだしては、なぜ一緒に連れて來なかつたのだらうなぞと、理性の少しも許さない後悔してゐる。

子供の事はそれできまつた。あとは僕の顔がちつとも見えない事の口實だ。それは、こんども又、病氣と云ふことにした。そして多少それを本當らしく見せるために、毎朝氷を一斤づゝ買ふ事にした。

『それも尾行を使ひにやるんですね。』

そんな事にはごく如才ないMがさう發案して、一人でにこにこしてゐた。

家からつい近所までKが一緒に來て、そこから僕は自働車で

市内の或る驛近くまで驅けつけた。そして其邊で小さなトランクーつとちよつとした買物をして、急いで驛の中へはいつて行つた。もう發車時刻の間際だつたので。

僕はプラツトホームを見廻はした。が、僕の荷物のふろしき包みを持つて來てゐる筈の、Wの姿が見えなかつた。待合室の中にでもはいつてゐるのだと思つて、其の方へ行かうとすると中から誰れか出て來た。姿は違ふが、其の歩きかたは確かにWだ。其の舊式のビロオドの服が、人夫か土方の帳つけと云ふやうに見せるので、よくさう云つてからかはれてゐるのだが、どこから借りて來たのか、今日は黑い長いマントなぞを着こんで、やはり黑のソフトの前の方を上に折りまげたのをかぶつて、足駄をカラ〳〵鳴らしてやつて來るところは、どう見ても立派な不良少年だ。

彼はWから荷物を受取つてもう發車しようとしてゐる列車に飛び乘つた。列車は走りだした。Wは手をあげた。僕も手をあげてそれに應じた。これが日本での同志との最後の別れなのだ

前の上海行きの時には、Rが此の役目を勤めてくれた。偶然其日に鎌倉へ遊びに來たのだつたが、行先きは云はずにたゞちよつと行衛不明となるんだから手傳つてくれと頼んで、トランクを一つ持つて貰つて、一里ばかりある大船の停車場まで一緒に行つた。もう夜更けだつたが、ちよい〳〵人通りはあつたそして家を出る時に何んだか見つかつたやうな氣がしたので、後ろから來るあかりは皆な追手のやうに思はれて、二人とも隨分びく〳〵しながら行つた。殊に一度、建長寺と圓覺寺との間頃で後ろからあかりをつけない自働車が走つて來て、やがて又それらしい自働車が戻つて來た時などは、こんどこそ捕はるゝものと眞面目に覺悟してゐた。

それが何んでもなく通りすぎた時、僕はRに僕の本當の目的を話してない事が、堪らなく濟まなかつた。そして幾度もそれを云はうとして、口まで出て來るのを漸くの事でとめた。彼れは決して信用の出來ない同志ではなかつた。しかしまだ僕等の仲間にはいつてから日も淺かつた。そしてごく狹い意味での僕等の團體とは直接に何んの關係もなかつた。

そして僕は無事に大船から下りの列車に、彼れは上りの列車に乘つた。これはあとでKから聞いた事だが、Rは其時の事を誰にも話さず、又Kにも其他の誰にも默つて僕の行衛を尋ねる事がなかつたさうだ。僕は今でもまだ、彼の顏を見るたびに、窃かに當時の事を彼にわびそして感謝してゐる。

Wの姿が見えなくなるとすぐ、僕はボーイに顏を見られないやうに外套の襟を高く立てゝ、車内にはいつて寢台の中にもぐ

りこんだ。僕はまだ僕の顏の一番の特徴の、鬚をそり落してゐなかつたのだ。そして一寢入りした夜中に、そつと起きて、洗面場へ行つて上下とも綺麗に鬚をそつて了つた。そしてWが持つて來てくれたふろしき包みの荷物を、トランクの中に入れかへた。荷物といつても、途中の船の中でやる豫定の、仕事の材料と原稿紙とだけなのだ。そして又一寢入りした。

移動警察の成績が大へんいゝので、十五日から其の人數を今まで幾倍とかにする、と云ふ新聞の記事が出たばかりの時だ。其の成績のいゝ一つの例に舉げられては大へんだ。が、それらしい顏も遂に見ないで、翌朝無事に神戸に着いた。

神戸は、實は僕にとつては、大きな鬼門なのだ。先きにコズロフの追放されるのを送りに來た時、警察本部の外事課や特別高等課に顏を出してゐるので、多勢のスパイ等によく顏を見知られてゐる筈だ。そこから船に乘るのは隨分劍呑だとも思つたが、しかしそれよりもつと劍呑な橫濱からよりは、多分安全だと思つた。橫濱の警官ども、殆んど僕の顏を知らないものはない位なのだ。長年鎌倉や逗子にゐた間に、代る代るいろんな奴が尾行に來てゐる。

改札口を出ようとすると、どこの停車場にも大てい一人二人はゐるのだが、怪しい目つきの男が一人見はつてゐる。そして僕が通り過ぎたあとで直ぐ、改札の男の方へ走り寄つたやうな氣はいがした。僕は直ぐ車に乘つて、いゝ加減のところまで走らして、そこから更に車をかへて或るホテルまで行つた。

あした出る筈で、其の切符を買つて來てある或る船は、あさつて出航に延びてゐた。仕方なしに、其日と翌日の二日は、ホテルの一室に引つこんで、近く共譯で出す或る本の原稿を直して暮らした。そしてたつた一度、晝飯後の散歩にぶら／＼そとへ出て見たが、道で改造社の二三人が車に乘つて、其晩のアインシュタインの講演のビラを撒いて歩いてゐるのにぶつかつた。僕は僕の顏が果して彼等に分るかどうかと思つて、わざと其の方へ近づいて行つて、車の正面のところでちよつと止まつて見た。が、分る筈はない。嘗つて僕が入獄する數日前、僕のための送別會があつた時、僕は頭を一分刈りにして顏を綺麗にそつて、すつかり囚人面になつて出かけて行つた。そして室の片隅のテエブルに座を占めてゐたが、僕の直ぐ前に來て腰掛けたものでも、直ぐにそれを僕と氣のついたものはなかつた位だ。

船の中に四五人の私服がはいりこんで、あちこちとうろうろしたり、僕が乘つた二等の喫煙室に座りこんだりしてゐた。隨分氣味は惡い。しかし又それをひやかすのもちよつと面白い。船の出るまでキャビンの中に閉ぢ籠つてゐるのも癪だし、僕は

餘程の自信をもつて、喫煙室とデッキの間をぶら〲してゐた。そして一度は、私服らしい三四人のもののほかは誰れもはいつてゐなかつた。喫煙室へ行つて、彼等の横顏をながめながら煙草をふかしてゐた。

船は門司を通過して長崎に着いた。そこでもやはり、二人の制服と四五人の私服とがはいつて來た。そして乘客の日本人を一人一人つかまへて何にか調べ始めた。日本人と云つても、船はイギリスの船なのだから、二等には僕ともで四人しかゐないのだ。僕の番は直ぐに來た。が、それは寧ろあつけない位に無事に過ぎた。そして彼等は一人のヒリッピンの學生をつかまへて、何にやかやとひつつこく尋ねてゐた。

上海に着いた。そこの稅關の出口にも、やはり私服らしいのが二人見はつてゐた。警視廳から四人とか五人とか出張して來てゐるさうだから、多分それなのだらう。

僕は稅關を出ると直ぐ、馬車を呼んで走らした。そして暫く行つてから角々で二三度あとをふり返つて見たが、あとをつけて來るらしいものは何んにもなかつた。

三

最初僕は此の上海に上陸する事が一番の難關だと思つてゐた。そして多分こゝで捕まるものと先づ覺悟して、捕まつた上での逃げ道までもそつと考へてゐたのだつた。それが、かうして何んの事もなくコトコトと馬車を走らしてゐるとなると、少々張合いぬけの感じがしないでもない。

『フランス租界へ。』

御者にはたゞかう云つただけなのだが、上海の銀座通り大馬路を通りぬけて、二大觀樂場の新世界の角から大世界の方へ、馬車は先年始めてこゝに來た時と同じ道を走つて行く。

僕はこゝで、もう幾度も洩らして來た此の先年の旅の事を、少し詳しく思ひだす事を許して貰ひたい。

八月の末頃だつた。朝鮮假政府の主要の地位にゐる一青年Mが、鎌倉の僕の家にふいと訪ねて來た。要件は、要するに、近く上海で、××××××、××、×××××××××を開きたいのだが、そして今はたゞ日本の參加を待つてゐるだけなのだが、それに出席してくれないかと云ふのだ。

僕等は曾つて、××××××××、×××　××、××、××××、××、××××××××××××××、×××××と云ふものを組織した事があつた。が、其の組織後間もなく、例の赤旗事件のために、僕等日本の同志の大部分が投獄され、そしてそれと同時に和親會の諸同志の上にも嚴重な監視が

加へられて、會員の殆んど全部は日本に止まる事が出來なくなつて了つた。其の次ぎに起つたのが例の大逆事件だ。そしてそれ以來僕等は、隨分長い間、僕等自身の運動は素より、諸外國の同志との交通も全く不可能にされて了つた。

それが今、此の朝鮮の同志が齎らして來た××××××××の提案によつて、こんどは社會主義と云ふもつと狹い範圍で再び復活されようとするのだ。僕は喜んで直ぐさまそれを應ずるのほかはなかつた。

が、それと同時に、と云ふよりも、それよりももつと云ふ方が本當かも知れない。僕をして進んでそれに應じさせた、或る特殊の原因があつた。それは、Mが既にそれを堺や山川と相談して、そして二人から體よくそれを拒絶されたと云ふ事だつた。

Mを密使として送つた上海の同志等は、最初、××××××××××××××××××。そしてMは先づ密かに堺と會つてそれを謀つた。しかし、まだ組織中でもあり又ごく雜ぱくな分子を含んでゐる社會主義同盟が、直ぐさまそれに加はると云ふ事は勿論、創立委員會でそれを相談すると云ふ事ですらも、到底不可能だつた。第一には先づ、事が非常な秘密を保たれなければならなかつた。そして第二には、×××××××××××××××××××××の主なる人がそれを助けてゐると云ふ事は、いろんな異論と共に非常な險をも伴はなければならなかつた。

そこでMは更に個人としての加盟を堺と山川とに申込んだ。が、二人とも、大して理由にならない理由で、それを拒絶した。そして更に又、誰れかほかに出席する事の出來さうな人の推薦を頼んだが、そして其の中には僕の名もあつたのださうだが、二人はそれも到底あるまいと云つて拒絶した。Mは仕方なしにそれでは、せめては其の會議に贊成すると云ふ何か書いたものを土産にして持つて歸りたいと頼んだが、それも體よく拒絶された。

そしてMは殆んど絶望の末に僕のところへ來たのだ。僕は堺や山川がMをどこまで信用していゝのか惡いのか分らないと云ふ腹を持つてゐた事はよく分つた。僕にも其の腹はあつたのだ。よしMが誰れからどんな信任狀や紹介狀を持つて來たところで外國の同志との聯絡のなかつた僕等には、其の信任狀や紹介狀其物が既に信用されないのだ。しかし一二時間と話してゐるうちに、Mが本物かどうか位の事は分る。そして本物とさへ分れば、其の持つて來た話しに、多少は乘つてもいゝ譯だ。殊に堺や山川は、當時既に、殆んど、或は全く云つてもよかつた

かも知れない、共産主義に傾いてゐたのだ。

が、堺や山川の腹の中には、それよりももつと大きな、或物があつたのだ。それは危險の感じだ。××××××××××××××××××××、と云ふ事には、まかり間違うと內亂罪にひつかけられる恐れがある。これは其の當時僕等が皆んな持つてゐた恐怖だ。そして此の恐怖が、堺や山川をして、上海の同志等の提案にまるで乘らせなかつた、一番の原因なのだ。

Mも其の事は十分に知つてゐたやうだつた。そして其の使命を果たす事の出來ない絕望と共に、日本の謂はゆる××××××××××××らしいかの絕望をも窃かに持つてゐるやうだつた。彼れ自身も、見つかれば直ぐ捕まる、そして幾年の間か分らない入獄の危險を冒してやつて來たのだ。そして日本の謂はゆる同志は誰れ一人其の話しに見向いてもくれないのだ。そしてMは其の會議の計畫を僕に話しするのにも、最初から僕に正面から加盟を求めると云ふよりも、寧ろごく臆病に、まるで義理の惡い借金にでも來たかのやうなおづ／＼した態度で、先づ僕の腹をさぐつて見るやうな話しぶりであつた。そして僕が其の廻りくどい長い話しを默つて一應聞いた上で、『よし行かう』と一言云つた時には、彼れは寧ろ自分の耳を疑つてゐるかのやうにすら見えた。

實は、此の上海行きの事は、其の二年程前にも僕に計畫があつたのだつた。僕は、日本での運動の困難を感ずるたびに、此の上海を考へない事は出來なかつた。支那の同志との聯絡を新しくする事を思はない譯には行かなかつた。そして僕は、いよ／＼それを實行する間際になつた或日、山川と荒畑とに其の計畫を洩らした。堺にも、山川を通じて、其の席に出てくれるやう頼んだのだが、堺はそれに應じなかつた。堺と僕との間には其の少し以前から或る個人的確執があつたのだ。山川と荒畑とはたゞ僕の云ふ事だけをごく冷淡に聞いてくれただけだつた。二人とも、やはり其の少し以前から、僕とは大ぶ冷淡な仲になつてゐたのだ。尤も、僕の此の計畫は中途で失敗して、まだ日本を去らない前に再び東京に歸つて來る事を餘儀なくされたに過ぎなかつた。

××××××、いろんな一般的の目的を持つてゐたと同時に、十數年以前からのこれらの親しかつた舊い同志等の確執や冷淡を和らげると云ふ、特殊の一目的をも持つてゐた。が、それは無駄だつた。僕等の間には、いろんな感情の行き違ひの上に、更に思想上の差違がだん／＼深くなつてゐたのだ。そして堺や山川はMの事を僕に話さず、僕も又二人に其の事は話さなかつた。Mが鼻であしらはれたやうに、僕も鼻であしらはれる

だらう事をも恐れたのだ。そして若し事がうまく運べば、歸つて來てから彼等に相談しても遲くはないと思つた。

約束の十月にたつて僕は窃かに家を出た。其時の事は前に云つた。

上海へ着いた時には、豫め電報を打つて置いたのだから、誰れか迎ひに來てゐると思つた。が、誰れも來てゐない。仕方なしに僕は、稅關の前で暫くうろ／＼してゐる間に切りに勸められる馬車の中に、腰を下ろした。

馬車は、まだ見た事はないが全くヨオロッパの街らしい所や話しに聞いてゐる支那の街らしい所や、とにかくどこもかも人間で埋まつてゐるやうないろんな街を通つて、目的の何んとか路何んとか里と云ふのに着いた。僕は此の何んとか路何んとか里と云ふ町名だけ支那語で覺えて來たのだ。

尋ねる筈の家は二軒あつた。同じ何んとか里の中の、たとへば、十番と十五番とだ。最初は十番の方へ行つた。そこにMが住んでゐる筈なのだ。が、そんな人間はゐないと云ふ。で、もう一軒の、そこに××がある筈なのだ。十五番の方へ行つたが、そこでもそんな人間はゐないと云ふ。又十番へ行つた。返事はやはり同じ事だ。そこで又十五番へ行つた。が、返事はやはり同じ事だ。そして、かうして尋ね廻るたび每に、出て來る男の語氣は益々荒くなり態度も益々荒くなるのだ。しかし、御者と何事か支那語で云ひ爭つてゐるやうなそれらの男が、朝鮮人である事だけは確かだ。僕は、こんどは何んと云はれてもそこに座りこむつもりで、又十番へ行つた。

十番では、始めて戸を開けてくれて、中へ入れた。僕は僕の名とMの名とを書いて、四五人で僕を取りかこんでゐる朝鮮人にそれを渡した。すると、其の一人が二階へ上つて行つて、暫くしてもう一人の朝鮮人と一緒に降りて來た。見ると、それは船の中で、日本人だと云ひ又それで通つて來た、そして僕が可なり注意して來た男だ。

「やあ君か。君なら僕は船の中で知つてゐる。」

僕は始めて日本語で、馴れ馴れしく彼れに言葉をかけた。かうした調子で、彼れはいつもデッキで、ほかの日本人と話ししてゐたのだ。尤も僕は彼れと話しする事は殊更に避けてはゐたが。しかしもう此の家にゐるとなれば、僕の疑惑も當つたのだし、何んの遠慮する事もなくなつたのだ。

しかし彼れは、船の中での日本人に對する其の馴れ馴れしさを見せるどころではなく、反對に僕の方からの此の馴れ馴れしさを先づ其の態度で斥けて了つた。そして僕が腰かけてゐる前に突つ立つたまゝ、僕の言葉なぞには何んの頓着もなく、まる

で裁判官のやうな調子で僕を訊問しはじめた。

『君はどうしてMを知つてゐるんです。』

僕は、はあ始まつたな、と思ひながら、机の上に頰杖をついて煙草をふかしながら、有りのまゝに答へた。かうしてゐる間に、きつとまだ電報を受取つてゐないMが、どこかから窃つと僕をのぞいてゞもゐるんぢやないかと思ひながら。

しかし訊問は中々長かつた。そして裁判官の調子もちつとも和らいでは來なかつた。

そこへ、ふいと表の戶が開いて、Mがはいつて來た。そしてあはてゝ僕の手を握つて、ポカンとしてゐる皆んなに何んか云ひ置いて、僕を二階へ連れて行つた。

四

『いや、どうも失禮。實は、日本人でこゝへはいつて來たのはあなたが始めてなんですよ。それに、あなたが來ると云ふ事は僕とLとのほかには誰れも知らないんだし、僕もまだあなたからの電報は受取つてなかつたんですよ。』

Mは、さつきの裁判官程ではないが、可なりうまい日本語で、辯解しはじめた。で、怪しい日本人がはいつて來たと云ふので、此の朝鮮人町では大騷ぎになつたのださうだ。そして、先づ僕を十番の家へ入れたあとで、御者に聞いて見ると、日本の領事館の前から來たと云ふので、（實際又稅關の前は直ぐ領事館なのだが）益々僕は怪しい人間になつて、一應調べて見た上で若しいよいよ怪しいときまれば殺されるかどうかするところだつたさうだ。それに又、どうしたものか、Mの名の書き方を僕は間違へてゐた。二字名の僞名を二つ敎はつてゐたのを、甲の方の一字と乙の方の一字とを組合はせたので、それがMの本當の、しかも餘り人の知らない號になつた。犯罪學の上ではよく出て來る話しだが、僞名には大ていかうしたごく近い本當の何かの名の聯想作用があるものなのだ。で、Mは其の日本人が僕の名をかたつて、自分を捕縛しに來た日本の警官だと先づきめた。そしてこゝへ一人で警官がはいつて來る筈はないから、きつともつと多勢どこかに隱れてゐるのだらうと思つて、あちこちとあたりを探がさして見た。が、それらしいものは何處にも見當らない。そして最後に、漸く、自分で其の日本人に會つて見る決心をした。

『何にしろ、顏だの服裝だのをいろ〳〵と細かく聞いて見ても、ちつともあなたらしくないんですからね。』

Mは最後にかう附け加へて、其のちつとも僕らしくもなくなつてゐると云ふ顏を、今更のやうに又見つめ直した。

Mは、Lのところへ行かうと云つて、さつきの十五番の家へ案内した。

Lの室にはもう五六人つめかけて僕を待つてゐた。其の中で一番年とつたそしてからだの大きな、東洋人と云ふよりも寧ろフランスの高級の軍人と云つた風の、口髯をねぢり上げてホワンテュの顎鬚を延ばした、一見してこれがあのLだと思はれる男に、僕は先づ紹介された。果してそれが、日本でも有名な、謂はゆる××××のLだつた。

『日本人とかうして膝を交へて話しするのは、これが十幾年(或は二十年目と云つたかとも覺えてゐる)です。或は一生こんな事はないかとも思つてゐました。』

Lは一應の挨拶が濟むと、Mの通譯でかう云つた。Lは軍人で、朝鮮が日本の保護國になつた最初からの×××。

かうして僕は一時間ばかりLと話ししたあとで、Lの注意でMに案内されて或るホテルへ行つた。そこには、つい最近までイギリスのラッセルも泊つてゐた、支那人の經營してゐる西洋式の一流のホテルだと云ふ事だつた。

××××の室と云つても、ごくお粗末な汚ない机一つと幾つかの椅子と寢臺一つのアパートメントで、敷物もなければカアテンもない、何んの飾りつ氣もない貧弱極まるものだつた。それに僕がこんなホテルに泊るのは、少々氣もひけたし、金の方の心配もあつたので、もつと小さな宿屋へ行かうぢやないかとMに云ひ出した。が、Mは小さな宿屋では排日で日本人は泊めないからと云つて、とにかくそこへ連れて行つた。實際、道であちこちでMに注意されたやうに、『抵制日貨』と云ふ、日本の商品に對するボイコットの張札が到る處の壁にはりつけられてあつた。

そして僕は、それともう一つは日本の警察に對する注意とから、支那人の名で其のホテルの客となつた。

翌日は、ロシア人のTや、支那人のCや、朝鮮人のRなどのこんどの會議に參加する六七人の先生等がやつて來た。そしてそれからは殆んど二三日置きに、Cの家で會議を開いた。Cは北京大學の教授だつたのだが、或事で入獄させられようとして、竊かに上海に逃げて來て、そこで『新青年』と云ふ社會主義雜誌を出してゐた、支那での共産主義の權威だつた。Rは其

の前年、例の古賀廉造の勝入りで日本へやつて來て、大に騒がしかつた問題になつた事のある男だ。

僕は、日本を出る時に、きつと喧嘩をして歸つて來るんだらうと、同志に話してゐたが、果して其の會議はいつも僕とTとの議論で終つた。Tは、こゝで××。支那の同志も朝鮮の同志もそれにはほゞ贊成してゐたやうだつた。で、僕が若しそれに贊成すれば、會議は何んの事もなく直ぐ濟んで了ふのだつた。

しかし僕は、當時日本の×××××に加はつてゐた事實の通り、無政府主義者と共産主義者との提携の可能を信じ、又其の必要をも感じてゐたが、各々の異なつた主義者の思想や行動の自由は十分に尊重しなければならないと思つてゐた。で、無政府主義者としての僕は、極東共産黨同盟に加はる事も出來ず又國際共産黨同盟の第三インタナショナルに加はる事も出來なかつた。そして僕の主張は、×××××××××××××××××××××云ふ事以上に出る事は出來なかつた。

又、そこに集まつた各國同志の實情から見ても、朝鮮の同志ははつきりとした共産主義者ではなかつた。たゞ、單なる獨立の不可能と又其の無駄とを感じて、社會主義でもいゝ、共産主義でもいゝ、又無政府主義でもいゝ、××××××××××××××××に過ぎなかつた。支那の同志は、Cは既に思想的には大ぶはつきりした共産主義者だつたがまだ共産黨の謂はゆる『鐵の規律』の感情には染まつてゐなかつた。そして皆んな、ロシアのTの、各國の運動の内部に關するいろんな細かいおせつかいに、多少の反感を持つてゐたのだつた。

で、此の各國諸革命黨の運動の自由と云ふ事には、朝鮮の同志も支那の同志も僕に贊成した。さうなればもう、×××。

此の委員會の相談がきまると、Tは『少し内緒の話しがあるから二人きりで會ひたい』と云つて、僕を自分の宿に誘つた。其の話しと云ふのは要するに金の事なのだ。運動をするのに金が要るなら出さう、そこで今どんな計畫があり、又其のためにどれ程金が要るか、と云ふのだ。僕は、さし當り大して計畫

はないか、週刊新聞を一つ出したいと思つてゐる、それには一萬圓もあれば半年は支へて行けよう、そしてあとは何んとかして自分等でやつて行けよう、と答へた。

それで其の金は直ぐ貰へる事にきまつた。が、其後又幾度も會つてゐるうちに、Ｔは其の新聞の内容について例の細かいおせつかいを出しはじめた。僕には、此のおせつかいが僕の持つて生れた性質の上からも、又僕の主義の上からも、許す事が出來なかつた。そして最後に僕は、前の會議の時にもそんな事ならもう相談はよして直ぐ歸ると云つたやうに、金などは一文も貰ひたくないと云つた。もともと僕は金を貰ひに來たのぢやない。又そんな豫想も殆んど全く持つて來なかつた。たゞ東洋各國の同志の聯絡を謀りに來たのだ。それが出來さへすれば、各國は各國で勝手に運動をやる。日本は日本で、どこから金が來なくても、今までも既に自分で自分の運動を續けて來たのだ。これからだつて同じ事だ。條件がつくやうな金は一文も欲しくない。僕はさう云ふ意味の事を、それまでお互に話ししてゐた英語で、特に書いて彼れに渡した。

Ｔはこれで承知した。そして猶、一般の運動の上で要る金があればいつでも送る、とも約束した。が、いよ／＼僕が歸る時には、今少し都合が惡いからと云ふので、金は二千圓しか受取らなかつた。

歸ると直ぐ、僕は上海での此の顛末を、先づ堺に話しした。そして堺からそれを山川に話しして、更に三人で其の相談をする事にきめた。そして僕は、近くロシアへ行く約束をして來たから、周刊新聞も若し彼等の手でやるなら任してもいゝ、又上海での仕事は共産主義者の彼等の方が都合がいゝのだから、彼等の方でやつて欲しい、と附け加へて置いた。が、それには、堺からも山川からも直接の返事はなくて、或る同志を通じて、僕の相談には殆んど乘じないと云ふ返事だつた。

で、僕は、以前から一月には雜誌を出さうと約束してゐた近藤憲治、和田久太郎等のほかに、近藤榮藏（別名伊井敬）高津正道等と一緒に、周刊『勞働運動』を創めた。前の二人は無政府主義者で、後の二人は共産主義者なのだ。近藤榮藏は。大杉等の無政府主義者と果して一緒に仕事をやつて行けるか、と云ふ注意を堺から受けたさうだが、却つて彼れはそれを笑つてゐた僕も一緒にそれを笑つた。

最初から僕は、此の新聞はこれらの人達の協同に、全部を任せるつもりでゐた。僕は仕事の目鼻さへつけば、直ぐロシアへ出發する筈にしてゐたのだ。が、其の仕事も始めないうちに、

僕は病氣になつた。隨分長い間其のために苦しんで、そして暫く落ちついてゐたと思つた肺が、急に又惡くなつたのだ。醫者からは絕對安靜を命ぜられた。又、自分でも殆んど働く氣力がなくなつてゐた。で、新聞の準備も殆んど皆んなに任せきりにしてゐる間に、こんどはチブスと云ふ難病に襲はれた。

僕の病氣は上海の委員會との聯絡を全く絕たして了つた。Tから直ぐ送つて來る筈の金も來なかつた。が、近藤憲二が僕の名で本屋から借金して來て、皆んな一緖になつてよく働いた。そして新聞は、僕が退院後の豫後の靜養をして殆んど其の仕事に與かつてゐなかつた、六月まで續いた。

多分四月だつたらう。僕は再び上海との聯絡を謀るためと、約束の金を貰ふためとに、近藤榮藏を使ひにやつた。が、其の留守中に、近藤榮藏や高津正道が堺山川等と通じて、窃かに無政府主義者の排斥を謀つてゐるらしい事が、大ぶ感づかれて來た。若しさうなら、僕は上海の方の事は一切共產黨に讓つて、又事實上榮藏もさう云ふ風にして來るだらうとも思つたが、そして新聞も止して、僕等無政府主義者だけで別に又仕事を始めようと思つた。

すると、上海からの歸り途で、近藤榮藏が捕まつた。新聞はこれを機會にして止した。

榮藏は一ケ月餘り監獄にゐて、出て來ると山川とだけ會つて其の妻子のゐる神戶へ行つた。そして僕は山川から榮藏の傳言だと云ふのを聞いた。それによると、Tはちようど上海にゐないで、朝鮮人の方から榮藏がロシアへ行く旅費として二千圓と僕への病氣見舞金二百圓とを貰つて來たと云ふ事だつた。しかしそれは、僕等がほかの方面から聞いた話し、尤も十分に確實なものではなかつたが、とは大ぶ違つてゐた。が、そんな事はもうどうでもいゝ、それで彼等と緣切りになりさへすればそれでいゝのだ、と思つた。

上海の委員會は、Tが大して氣乘りしてゐなかつたせいだらう、僕が歸つたあとで何んの仕事もしないで立消えになつて了つたらしい。そして榮藏が警視廳で告白したところによると、朝鮮の某（そんな名の人間はゐない）から六千圓餘り貰つて來た事になつてゐる。

『ヨオロツパまで』が脇道の昔しばなしにはいつて、大ぶいやな話しが出た。僕は其後或る文章の中で『共產黨の奴等はゴマノハイだ』と罵つた事がある。それは一つには暗に此の事實を指したのだ。そしてもう一つには、これも其後だんだん明かになつて來た事だが、無產階級の獨裁と云ふ美名（？）の下に、

共産黨が窃かに新權力をぬすみ取つて、謂はゆる獨裁者も無産階級を新しい奴隷に陥いれて了ふ事實を指したのだ。

かくして僕は、甚だ遅まきながら、共産黨との提携の事實上にも又理論上にも全く不可能な事をさとつた。そして又それ以上に、共産黨は資本主義諸黨に同じく、しかもより油斷のならない、僕等無政府主義者の敵である事が分かつた。

が、今こゝに上海行きのこれだけの話しが出來るのは、共産黨の先生等が捕まつて、警察や裁判所でペラ／＼と仲間の秘密をしやべつて了つた、其のお蔭だ。それだけはこゝでお禮を云つて置く。

五

それでも、僕にはまだ、ロシア行きの約束だけは忘れられなかつた。そしてからだの恢復と共に、僕等自身の雑誌の計畫を進めながら、窃かに其時を待つてゐた。僕はロシアの實情を自分の目で見ると共に、更にヨオロッパに廻つて戰後の混沌としてゐる社會運動や勞働運動の實際をも見たいと思つた。

そこへ、突然、其の年の十月頃かに、ロシアで××××××××××××××××××。それは共産黨の方に來たのだがこんどは僕も其の相談に與かつた。そして僕は、いづれ又上海の時のやうな事になるのだらうとは思つたが、とにかく日本から出席する十名ばかりの中に加はる事にきめた。しかし、あとでよく考へて見て、それも無駄なやうな氣がした。又、共産黨との相談にも、いろ／＼面白くない事が起きて來た。そして、いよ／＼二三日中に出發すると云ふ時になつて、僕一人だけそこから抜けた。

翌年、即ち去年の一月に、僕は又こんどは月刊の『勞働運動』を始めた。そして殆んど毎號、其頃になつて漸く知れて來たロシアの共産黨政府の無政府主義者やサンデイカリストに對する殘虐な迫害や、其の反無産階級的反革命的施設の紹介に、僕の全力を注いだ。

八月の末に、大阪で、例の勞働組合總聯合創立大會が開かれた。そしてそこで、無政府主義者と共産主義者とが始めて公然と、しかも其の根本的理論の差異の上に立つて、中央集權論と自由聯合論との二派の勞働者の背後に對陣する事となつた。

日本の勞働運動は、此の大會を機として、其の思想の上にも又運動の上にも、特に劃時代的の新生面を開かうとする非常な緊張ぶりを示して來た。そこへこんどの×××××××××の通知が來たのだ。たとへ短い一時とは云へ、日本を去るのは今は實に惜しい。又、殆んど寢食を忘れる位に忙がしい同志を置き去りにして出るのも實に忍びない。しかし、日本の事は日

本の事で、僕がゐようとゐまいと、勿論皆んなが全力を盡してやつて行くのだ。そして僕は僕で、外國の同志との、しかもこんどこそは本當の同志の無政府主義者との、交渉の機會が與へられたのだ。行かう。僕は即座にさう決心するほかはなかつた

上海では、前に、三四軒のホテルに十日程づゝ泊つた。同じホテルに長くゐてはあぶないと云ふので、其のたびに新しい變名を造つては、ほかのホテルへ移つて行つたのだ。此の時々變る自分の名を覺えるのは容易な事でなかつた。先づ其の漢字と其の支那音との、僕等には殆んど聯絡のない、と云ふよりも寧ろ全く違つた二つの事を覺えなければならないのだ。が、それは先づ無事に濟んだ。けれども、支那語をちつとも知らない支那人と云ふのも、隨分變なものだ。が、それも先づ、ボオイとは英語で、しかもほんの用事だけの事を話せばいゝのだから、何んとか胡麻化して濟ました。

しかし一度其の變名で、失敗のやうな又過失の功名のやうな事をした。それは、やはり上海にゐた支那の國民黨の或る友人に會ひたいと云ふ事を、朝鮮のLに話した。Lは其の友人の家へ行つたが、旅行中で留守なので、たゞ僕が何々ホテルにゐると云ふ事だけを書き置いて來た。友人は歸つてから直ぐ僕のホテルへ來た。そして、きつと變名してゐるのだらうと思つて、たゞ日本人がゐないかと尋ねた。すると、日本人はゐないと云ふので、更に日本人らしい支那人はゐないかと聞いた。が、そんなのもゐないと云ふ。で、仕方なしに、旅客の名と室の番號とを書き列ねた板の上を見廻はした。

『はゝあ、これに違ひない。』

彼れは其の中の或る名を見て、一人でさうきめて、其の番號の室へ行つた。そして果してそこに僕を見出した。

『あんな馬鹿な名をつける奴があるもんか。』

彼れは僕の顏を見ると直ぐ、笑ひこけるやうにして云つた。

『何故だい。朝鮮人がつけてくれた名なんだけれど。』

僕は其の笑ひこける理由がちつとも分らないので、眞面目な顏をして聞いた。

『何故つて君、唐世民だらう、あれは唐の太宗の名で、日本で云へば豐臣秀吉とか德川家康とか云ふのと同じ事ぢやないか。が、お蔭で僕は、それが君だつて事が直ぐ分かつたんだ。本當の支那人でそんな馬鹿な名をつける奴はないからね。』

此の友人は、近く廣東へ乘込む孫逸仙一行の先發隊として、あしたの朝上海を出發するのだつた。從つて、若し其の晩會へなければ、暫く又會ふ機會がないのだつた。

『新政府の基礎が出來たら、ぜひ廣東へ遊びに來たまへ。陳烱明は何んにも分らないたゞの軍人なのだが、社會問題には大ぶ興味を待つてゐるし、僕等も向うへ行けば直ぐ、支那や外國の資本家を壓迫する一方法としてだけでも、大いに勞働運動を興して見るつもりなんだ。』

今は立派な政治家になつてゐるが、昔しは熱心な勞働運動者だつた彼れは、かうして其の新政治の必要の上からの勞働運動を主張してゐたのだつた。そして實際又、其頃既にもう、陳烱明の保護の下に無政府主義者等が盛んに勞働組合を起して、廣東が支那の勞働運動の中心にならうとしてゐたのだ。

上海で無政府主義者の誰れとも會ふ事の出來なかつた僕は、廣東のそれらの無政府主義者と會ひたいと思つた。そして此の支那の新政治家とは、近いうちに又廣東で會ふ約束をして、分れた。

が、こんどは、例の共産黨の先生等のペラ〳〵のお蔭で、これらのおなじみのホテルへは行けなかつた。近藤榮藏が捕まつて以來、日本政府の上海警戒が急に嚴重になつたのだ。そして僕等が前に泊つたホテルにはどんな方法が講じてあるのか知れなかつたのだ。

で、僕は先づ、支那の同志Bの家へ行つた。まだ會つた事のない同志だ。しかし其の夏、やはり支那の同志のWが窃かに東京に來て、お互の連絡は十分についてゐたのだ。そして僕がこんど此の上海に寄つたのは、ベルリンの大會で××××××××が組織されるのと同時に、僕等にとつてはそれよりももつと必要な〇〇〇〇〇〇〇〇〇の組織を謀らうと思つたからでもあつた。

折惡くBはゐなかつた。そして其の留守の誰れも、支那語の外は話しも出來ず、又筆談も出來さうもなかつた。僕は少々途方にくれた。ほかへ行くにも、前に知つてゐる支那人も朝鮮人も今は皆なロシアへ行つて了つた筈だ。新政治家の友人も、其後陳烱明の謀叛のために廣東を落ちて、多分今は上海にゐるんだらうとは思つたが、どこにゐるんだか分らなかつた。こんなことなら、豫めBに僕の來る事を知らして置くんだつた、とも思つた。が、今更そんな無駄な事を考へても仕方がない。どこか西洋人經營のホテルを探しに行くか、或はこゝに坐り込んでBの歸るのを待つかだ。僕は長崎から上海までの暴風で大ぶ疲れてもゐたので、そして又よくは分らないがBが直ぐ歸つて來さうな話し振なので、とにかく少し待つて見るつもりで玄關の椅子の一つに腰を下ろした。

すると、直ぐそこへ、そとから若い支那人が一人はいつて來た。僕は其の顔を見てハツとした。知つてゐる顔だ。去年まで東京でたび〳〵會つて、よく知つてゐるNだ。彼れも無政府主義者だと云つてゐた。そして其の方面のいろんな團體や集會にも出入してゐた。しかし僕は彼れがどこまで信用の出來る同志だか知らなかつた。そして又彼が支那に歸つてからの行動に就いては何んにも知らなかつた。僕は彼れをちようどいゝ助け舟だと思ふよりも、今彼れに見られていゝのか悪いのか分らなかつた。とにかく、何人によらず、知つてゐる人間に會ふのは今の僕には禁物なのだ。

彼れの方でも、僕の顔を見ると直ぐ、ハツとしたやうであつた。が、其の直ぐあとの瞬間に、僕は彼れが僕の顔を分らなかつた事が分つた。そして、さうだ、其の筈だ、と僕は始めて安心した。

彼れは取次の者と何にか話しゝてゐたが、Bは直ぐ歸つて來る筈だから、と日本語で其の話しを取次いでくれた。僕は彼れが僕の顔を分らずに、其のハツとした態度をまだ其儘續けてゐるのが少々可笑しかつた。そしてちよつとからかつて見る氣になつた。

『あなたは餘程長く日本においでゝしたか。』

僕は済ました顔で尋ねた。

『いゝえ、日本にゐた事はありません。』

僕は彼れの此のむつゝりとした返事を少々意外に思つた。が直ぐ又、彼れが排日運動の熱心家で、其のために日本の警察から可なり注意されてゐた事に氣がついた。そして彼れが僕を普通の日本人か或は多少怪しい日本人かと思つてゐるらしい事は更に又僕のからかい氣を増長させた。

『しかし隨分日本語がうまいですね。』

『いや、ちつともうまくないです。』

彼れは前よりももつとむつゝりした調子でから云つたまゝ、テエブルの上にあつた支那新聞を取り上げた。僕は益々可笑しくなつたが。しかし又多少氣の毒にもなり、又あまり長い間話しゝてゐては險吞だとも思つたので、それをいゝ機會にして默つて了つた。そして彼れには後ろむきになつて、やはりテエブルの上の支那の新聞を取りあげた。

かうして暫く待つてゐる間にBが歸つて來た。僕はNに分らんやうに、筆談で彼れと話しゝた。彼れは僕をいゝ加減な名でNに紹介した。

翌日僕は、Bの家の近所を歩き廻つて、ロシア人の下宿屋を見つけた。そして、たゞ少々の前金を拂つたゞけで、名もなん

にも云はずにそこの一室に落ちついた。

僕は食堂へ出るのを避けて、いつも自分の室で食事した。従つて、下宿屋の神さんでも又ほかの下宿人でも、殆んど顔を見合はした事もなかつた。二日經つても三日經つても、宿帳も持つて來なければ、名刺をくれとも云つて來ない。僕は呑氣なもんだなと思ひながら、支那人のボオイに僕が何處の國の人間だか分るかと聞いて見た。ボオイは何んの疑ふところもないらしく、

『イギリス人です。』

と答へた。僕は變な事を云ふと思つて、

『どうしてさう思ふ！』

と問ひ返した。

『お神さんがさう云ひましたから。』

ボオイは、神さんと同じやうに、ごく下手な僕の英語よりももつと下手な英語で、やはり何んの疑ふところもないやうな風で答へた。

『ハア、奴等は僕をイギリス人と支那人との合の子とでも思つてゐるんだな。』

僕はこれはいゝ具合だなと思ひながら、其のボオイの持つて來た夕飯の皿に向つた。實際、かうした下宿屋には、支那人や日本人が來る事は殆んど絶對にない。お客は皆な毛唐ばかりなのだ。

六

上海に幾日ゐたか、又其の間何にをしてゐたか、と云ふことに就いては今はまだ何んにも云へない。たゞそこにゐる間に、ベルリンの大會が日延べになつた事が分つたので、ゆつくりと目的を果たす事が出來た。そして、其の間に、日本では、僕が信州の何とか溫泉へ行つたとか、ハルピンからロシアへ行つたとか、香港からヨオロツパへ渡つたとか、いや何處とかで捕まつたとか、と云ふやうないろんな新聞のうはさを見た。上海の支那人の新聞にも、さうしたうはさを傳へたほかに、ロシアから每月幾分とかの宣傳費を貰つてゐる、と云ふやうな事までも傳へた。

そして、本年某月某日、僕は四月一日の大會に間に合ふやうに、或る國の或る船で、そつと又上海を出た。途中の事も今はまだ何んとも云へない。

某月某日——これがあんまり重なつては、讀者諸君に甚だ相濟まないのだが、仕方がない、まあ勘辨して貰はう——どこをどうしてだか知らないが、とにかくパリに着いた。

コロメの宛名の、フランス無政府主義同盟機關『ル・リベルテエル』社のあるところは、パリの、しかもブウルヴアル・ド・ベルヰル（强いて飜譯すれば『美しい町の通り』）と云ふのだ。地圖を開いて見ても、かねてから名を聞いてゐるオペラ座なぞのある大通りと同じやうな、大きな大通りになつてゐる。

いづれその横町か屋根裏にでもゐるんだらう、と思つて行つて見ると、成程大通りは大通りに違ひないが、ちやうどあの、淺草から萬年町の方へ行く何とか云ふた大きな通り其儘の感じだ。尤も兩側の家だけは五階六階七階の高い家だが、其のすゝけた汚なさ加減はちよつとお話しにならない。自働車で走るんだからよくは分らないが、店だつて何んだか汚ならしいものばかり賣つてゐる。そして通りの眞ん中の廣い歩道が、道一ぱいに汚ならしいテントの小舍がけがあつて、そこを又日本ではとても見られないやうな汚ならしい風の野蠻人見たいな顏をした人間がうぢや〱と通つてゐる。市場なのだ。そとからは店の樣子はちよつと見えないが、皆朝の買物らしく、大きな袋にキヤベツだのジヤガ芋だの大きなパンの棒だのを入れて歩いてゐる。

リベルテエル社は、それでも、其の大通りの、地並の室にあつた。週刊ル・リベルテエル（自由人）月刊ラ・ルギユ、アナルシスト（無政府主義評論）との事務所になつてゐるほかに、ラ、リブレリ・ソンアル（社會書房）と云ふ小さな本屋をもやつてゐるので、店は皆な地並みにある譯なのだ。

其の本屋の店にはいると、やはりおもてにゐるのと同じやうな風や顏の人間が七八人、何にかガヤ〱と怒鳴るやうな口調でしやべつてゐた。其の一人をつかまへて、コロメはゐないかと聞くと、奥にゐると云ふ。奥と云つても、店から直ぐ見える汚ならしい次の部屋なのだ。そこにもやはり、同じやうな人間が七八人突立つてゐて、ガヤ〱としやべつてゐるほかに、やはり同じやうな人間が隅つこの机に二人ばかり何にか仕事をしてゐた。其の一つの机のそばに立つて、手紙の束を手早く一つ一つ選り分けてゐる男が一人、ほかの人間とは風も顏も少し違つてゐた。日本で云つても、ちよつと藝術家と云つた風に頭の毛を長く延ばして髯のない白い顏を皆んなの間に光らしてゐた。ネクタイもしてゐた。服も、黑の、とにかくそんなに汚れてゐないのを着てゐた。そしてその丸い大きな目が、インテレクテユエルらしく、殊に皆んなの間に光つてゐた。僕は其の男をコロメだときめて其のそばへ行つて、君がコロメか、と聞いた。さうだ、と云ふ僕は手をさし出しながら、僕はかう〱だと云へば、彼は僕の手を堅く握りしめながらさうか、よく來た、

と云つて、直ぐ日本の事情を問ふ。腰をかけろと云ふ椅子もないのだ。

『何處か近所のホテルへ泊りたいんだが。』

と云ふと、

『それぢや私が案内しませう。』

と云ふ、女らしい聲が僕のうしろである。ふり返つて見ると、まだ若い、しかし日本人にしてもせいの低い、色の大して白くない、唇の大きくて厚い、たゞ目だけがぱつちりと大きく開いてゐるほかにはあんまり西洋人らしくない女だ。風も其邊で見る野蠻人と別に變りはない。

とにかく其の女の後について、二三丁行つて、ちよつとした横町にはいると、殆んど軒並みにホテルの看板がさがつてゐる皆んな汚ならしい家ばかりだ。女は其の中の多少よささうな一軒を指して、あのホテルへ行つて見ようと云ふ。看板にはグランドホテル何んとかと書いてある。が、はいつて見れば、要するに木賃宿なのだ。今あいてゐると云ふ三階の或る室に通された。敷物も何んにも敷いてない狹い室の中には、ダブル・ベット一つと、鏡附の大きな箪笥一つと、机一つと、椅子二つと、陶器の水入れや金だらひを載せた洗面臺とで、殆んど一ぱいになつてゐる。そしてその一方の隅っこに、自炊の出來るやうにガスが置いてある。すべてが汚ならしく汚れた、そして缺けたり傷ついたりしたものばかりだ。ちよつといやな臭ひまでもする。が、感心に、今まで登つて來た梯子段や廊下は隨分暗かつたが室の中は先づあかるい。窓からそとは可なり遠くまで廣く開いてゐる。

『中々いゝ室でせう。』

と連れの女は自慢らしく云ふ。とても、お世辭にもいゝとは云へない。實は、今までもあちらの一流ではない二流三流のホテルに泊つてゐる人だが、こんなうちは始めて見たのだ。が、フランスへ行つたら勞働者町に住んで見たい、若し出來れば勞働者の家庭の中に住んで見たい、とはかねてから思つてゐた。

『いゝでせう、こゝにきめませう。』

と僕も仕方なしに、ではあるが又、こゝに住む事に就いての大きな好奇心を持つて答へた。

そして先づ、一ケ月百フラン(其時の相場で日本の金の十二圓五十錢)と云ふ室代の幾分かを拂つた。東京の木賃宿の一日五十錢に較べれば餘程安い。ガスは一サンティムの銅貨を一つ小さな穴の中に入れゝば、三度の食事位には使へるだけの量が出て來るのださうだ。

するとこんどは宿帳をつけてくれと云ふ。今までも、どこのホテルでも宿帳はつけて來たが、そしていゝ加減に書いて來たが、こゝではカルト・デイタンテイテ（警察の身元證明書）を見せろと云ふのだ。何んの事かよく分らんから、連れの女に聞いて見ると、フランスでは外國人は素より內國人ですらも、皆な其の寫眞を一枚はりつけた警察の身元證明を持つてゐなければならんのだと云ふ。勿論こんなものは持つてゐない。で、仕方なしに、其の女と一緒になつて、いゝ加減にそこをごまかして了つた。

『フランスは隨分うるさいんですね。』

僕はホテルを出て、社へ置いて來た荷物を取りに行く途で、女につぶやいた。

『えゝ、そしてあの身元證明書がないと、直ぐ警察へ引つぱつて行かれて、罰金か牢を仰せつかるんです。外人なら其の上に直ぐ追放ですね。』

が、僕は女の此の返事が終るか終らないうちに、社の直ぐ前の角に制服の巡査が三人突つ立つてゐるのを見た。皆な社の方を向いて、社の入口ばかりを見つめてゐるやうなのだ。

『おや、制服が立つてゐますね。』

僕は少々不審に思つて聞いた。

『例のベルトン事件以來、ずつとかうなんです。』

と云つて、彼女は、最近に王黨の一首領を暗殺した女無政府主義者ジエルメン・ベルトンの名を出した。そして其の以前からも、集會は勿論嚴重な監視をされるし、家宅捜索もやる、通信も一々調べる、尾行もやる、遠慮なく警察へ引つぱつても行くと云ふ風だつたのださうだ。

『はあ、やつぱり日本と同じ事なんだな。』

僕はさう思ひながら、多分其の巡査共の視線を浴びながらだらう、社の中へはいつて行つた。

廣東大本營の孫文

鶴見祐輔

一、

風にあほられた雨が、横なぐりにザッとあたると、自分たちの乗つた小さいモーター・ボートが、ぐらりと大きく揺れた。領事館の永澤君と自分とは、そのたびに舷に手を掛けて中心をとつた。舵に座つた支那人の船頭と、助手の少年とは、一切無關心に、顔や頭を雨にぬらしながら働いて居る。珠江とはまた。誰の酔狂でつけた名か、濁流滔々と流れてゐる。雨よけのズツクの覆布のすきまから覗いて見ると、沙面（シャーミーン）(廣東の外國人租界)を遙か後にして、舟はいま廣東市の埠頭に沿つて駛つてゐる。高い大商店の洋風建物が河を壓して聳えてゐる。そして珠江の兩岸は一杯の支那船で埋まつてゐる。それは廣東名物の一つである蜑民（タンミン）である。一隻の小艇を家として、終生を水上に暮らす人々の群である、小なるは我が傳馬船のやゝ大なるものに類し大なるは舷高く舳艫共に反り、芝居で見る毛剃九衛門の船を思ひ出させる。軍艦が一艘、中流に泊つてゐる。自分たちの船はハタ／＼と音を立て乍らこれらの船の間を駛りぬけて、ものゝ十五分も溯ると、やがて、ぐつと舵を右に取つて、廣東對岸の河南（ホーナム）の岸に向つて往つた。大きな聲で支那人らしくわめき立てながら、船頭はそこらの小船を追ひのけ、はらひのけ、とある棧橋にぴたりと横着けにした。それは、瓦斯會社の事務所で、いま廣東軍政府の大本營になつてゐるのである。

二、

銃劍を鐵砲のさきにつけ淺黄色の制服をきた兵士が二人、門を衛つてゐた。中から書長といつた格の人物が出て來て、何かと訊問する。もの／＼しい氣配である。門の右手の薄暗い部屋に通ると、皆木綿の支那服を着た給仕とも、小使とも、志士と

も、見別けのつかないやうな人間が、十五六人も居る。胸にみな出入票といつた小さい木札をさげてゐる。自分たちの名前を聞いて、訪問票と印刷した紙片に書いて、奥に持たしてやる。來る者、ゆく者、ざわ／＼として、何となく物凄いやうな空氣が漂つてゐる。これは、いつ誰れが暗殺に來るか解らないといつたやうな氣配である。なんとなく維新當時の日本が思ひ出される。あとでは、大臣とか伯爵とか言つて、勿體らしく暮した人々も、初めのうちは、矢張こうした木綿着物をきて、武者窓のついた部屋で、受附けなどしてゐたのかも知れない。

それからまた、門をいま二つくゞつて、殺風景な應接間に通された。いつまで待つても案内がない。蚊が隅から段々飛び出してくる。廊下に出て見る。雨は天心から小休みなく降つてゐる。と見ると、向ひ側の三階の廊下で、中年の兵士が三人、胸のボタンを外して、制帽を阿彌陀にかぶつたまゝ、大きな鉢から、飯を茶碗に盛つてたべてゐる。自分のすぐ前の上り段のところには、カーキ色の、新しい制服をピタリと身につけた、十八九の青年が、最新式の銃と彈帶とをつけて、森閑と立つてゐる。痩せた淋しい顏をした青年である。葵の鉢が二つ、その上り段の左右に置いてあつて、桃色の花が幾輪、雨に打たれたまゝ咲いて居た。

三、

細い嶮しい梯子段を昇つて、自分たちが孫文の部屋に上つてゐつたのは、五時十五分前であつた。

簾をあけて、自分が通つたのは、薄暗い大きやかな部屋であつた。ふと見ると、中央の四角い机の傍に、支那服を着た小柄の人が立つてゐる。

それが、孫中山先生であつた。

無意識に手をさし伸べながら、自分は、モガ／＼と何か英語で挨拶をしたやうに覺えてゐる。挨拶しながら、自分は何かほかのことを考へてゐたのである。これが孫文かと、自分の耳に私語く聲がする。自分が長い間會ひたいと思つた孫逸仙といふのは、この人かと、頭の中で言ふものがある。一言にして言へば、これはあまりに平凡であつた。

扁平な顏、鼻の下にすこし隙間のある八字髭、低い額平らな頭、にこやかな小さい眼、そしてやゝ小柄な體格、そのいづくにも、彼の六十年の革命家的生涯を暗示する特徴が無かつた。

席について、自分はすぐ口を開いた。

『お忙しい時間ですから、私はすぐご質問に入ります。あなたの現代支那に施さふとなさるプログラムは何でありますか。

『共和制と國家』

ぶつきら棒な返事が、こゝだけよりも早く返つてきた。自分は一寸、戸迷ひをした。

『何と仰しやいますか』

と聞きかへしたときに、自分は受け太刀になつて居ることを感じた。しまつたと思つた。

『貴下方は、何も私たちのプログラムをお聞きにならずともよい。六十年前の貴下の國の歴史を振り返つてご覧になればよい。王政維新の歴史、それを私たちが今支那で成就しやうとして居るのである』

孫逸仙氏が、少しなまりのある英語で早口に言つた。それは、北京で會つた王正廷氏や、王寵惠氏などの英語とは、全く感じの違ふ英語であつた。學窓に這入つてゐない人の英語である

『それは違ひませう』と自分は陣形を立てなほした。『日本の維新は單純な政治的變革でありました。それは正當な君主を實權にかへすと言ふ運動であつた。しかしあなたの國は、そう單純にはゆかない。のみならず六十年の隔りがある。時代が全く變りました。世界が變りました。』

『いや少しも異りません。當時の日本と、今日の支那との相違は日本の近所には強い外國がなかつた。しかし今日の支那には、隣國に日本といふ強國がある。これが、六十年前に日本の成し遂げたる所を、今日支那が成し遂げ得ざる理由である。日本さへ邪魔をしなかつたならば、支那の革命は、とうの昔に完成して居るのである。』

一分の猶豫もなく、孫逸仙氏は述べ立てた。その論法が自分に奇異な感じを與へた。

『それでは、あなたは支那の革命の一番大切な部分は外交であると仰有るのでありますか』

『その通り』と孫中山は、例によつて、響の物に應ずるやうに答へた。『その通りである。日本の過去二十年間の對支外交は悉く失敗である。日本は常に支那の發達と東洋の進運とを障碍することき外交政策を執つて來た。第一に日清戰爭、これから、革命以後の北京援助政策、悉く、支那人の期待を裏切つた近視的政策である。たゞこの故に支那の革命は失敗して來たのである。』

『それでは日本はどうすれば、よいと、あなたは仰有るのでありますか』

『北京から撤兵なさい』

『それは、どうゆう意味ですか』と自分は思はず、聞きかへした。

『日本公使を北京から召還なさい。北京政府を、支那の中央政府と認めるといふ沒理をお止めなさい。一體北京政府は不正統な、そして何等實力なき政府である。それを日本は認めて以つて、支那政府となし、これに公使を送ると言ふが如きは明らかに、支那に對する侮辱である。一刻も早く公使を撤退なさい。そうすれば、北京政府は朽木のごとく倒れる。』

「日本が、他の列國と協調せずに單獨に撤退せよと、あなたは仰有るのですか』

『その通り、何の遠慮がいりませう。一體日本は列國の意嚮を迎へすぎる。かくして、列國の政策に追從するの餘り、可惜東洋の盟主たる地位を放棄しつゝあるのである。私は、日本の二十年來の失敗外交の爲めに辛酸を嘗めつくした。それにも拘らず、自分は一度も日本を捨てたことは無い。それは何故であるか。自分は日本を愛するからである。自分の亡命時代、自分をかばつてくれた日本人に感謝する。又東洋の擁護者として、日本を必要とする。しかるに、日本は自ゝ自身の責任と位置とを自覺してゐない。自分が若し、日本を愛しない者であるならば、自分は日本を倒すこと易々たるものである。卽ち、自分は米國を引いて日本を倒すの容易なるを知つてゐる。若し自分が、五年間、米國全土を遊說して日本の非を說いたならば、全米の輿論を動かして、日本討伐に向はしむることが出來る。しかるときは、米支聯合の力は、易々として、日本を擊破することが出來る。しかも、自分が日本の政策を憤りつゝ、此策に出でざる所以のものは、自分が日本を愛するからである。自分は日本を亡ぼすに忍びない。又自分は飽くまでも、日本を以つて東洋民族の盟主と爲さんとするの宿志を捨てることが出來ない。』

孫逸仙氏は、右手をあげて、ハタ／＼と卓を叩きつゝ、机の角にすり寄つて、自分の顏をのぞき込むやうにして論じた。その眼は輝き、頰は紅し、力經身に滿ちかへりさきに、平凡それ自身のごとく思はれた、短身矮軀の人は、一個の火團のごとく燃え上つた。その熱情、そこに初めて、孫中山の眞面目が躍動して來た。その風姿を見乍ら、自分は、成程と思つた。この一見好々爺のごとき人が、全支那の青年の血を沸かすところは此處に在る。彼は自ら燃えて、而して人を燃えしむる一個不斷の火焰である。

その五年にして、全米の輿論を動かすべし、と言ふ大膽な壯言を聽き乍ら、自分はふと、匈牙利の愛國者、ルイ、コッスートを思ひ浮べた。コッスートが、匈牙利の革命、成るに垂んとし

た、露國の武力干渉の爲め敗れ、英國に奔竄し、義を倫敦に徇ふるや、全英の山河爲めに震撼するの概があり、在朝の政客、愕然として色を失つた。獨り首相パーマーストン莞爾として曰く、只一週日を待てと。果して旬日にして英國民の激情は退潮の如く引いてしまつた。コッスートの雄辯は只英人任俠の血を刹那的に奔騰せしめたるに過ぎなかつた。英人の國民性を知悉せるパーマーストーンは、その暴風の旬日にして去るべきを豫知してゐたのである。孫逸仙氏、米國に遊説せば、或は、一時米國の輿論を動かすことあるべしと雖、その效驗久しきを保たざるべきは、コッスートと異ることゝないであらふ。たゞその全米を動かし得べしと確信するところに、吾人は孫中山の革命的熱情家たる天稟を見るのである。

四、

『然しながら、打ちつゞく日本外交の失敗は、自分をして最近望を日本に絕たしめた。支那の依るべき國は日本ではない。露西亞であることを知つた。支那にして、露西亞と同盟し、社會主義國と爲つて、攻守の盟約を結ばゞ、天下恐るゝに足るものなし。支那の衆四億、露西亞の民一億五千、よく坤輿民衆の三分の一を占める。而して、その土地の大にして富める、よく天下を制するに足る。』

今までの雨が、驟雨に變つてきた。驟然たる雨滴が、屋根と窓とを亂打した。そして、雷雨が轟然と鳴り出した。部屋のうちが益々暗くなつて來た。ぴかり、と電光が奔馳する度に、部屋のうちが、パッと明るくなつた。部屋の一隅の長椅子の上には、先程から、四五人の人が坐つて居た。幕僚であらふ。孫中山が激しい、經世の大畧を痛論し始めると、薄暗がりの部屋の内の人々が、一様に聽き耳を立てた。部屋のうちの空氣が息苦しいやうに緊伸して來た。そして、雨は間斷なく降つてゐる。

『それで、あなたは勝算があると、仰有るのですか』

『ある。ありますとも。露支の同盟は、東洋民族聯盟の烽火である。土耳古、波斯、アフガン、それ等の國々は皆我々の味方である。そして、そこに獨逸がある。一體、東洋人はあまりに、自覺を失つてゐる。東洋の文明は、西洋文明より進んでゐるのである。たゞ後れてゐるのは、物質文明だけである。それは、獨逸の科學者一萬人あらば、之を補つて餘りがある』

孫中山の大きい夢が、雷雨に鎖された陰鬱な部屋のうちに燃え上つた。

『その人種的抗爭の行手は、大戰爭でありますか』

『そう、大戰爭は近付きつゝある。決戰が近付きつゝある、た

ど其の時日本は、どちら側に付くか知らない』

『その人種的大戰爭が、人類に如何なる幸福を齎らすでありませうか。歐洲戰爭のごときは、人種戰爭に較ぶれば數ふるにも足らざる戰亂である。しかも、人間の生命全體に與へたるその慘禍は如何でありませう。もし今、更に大規模なる人種戰爭が、この後に續くならば、人類六千年の努力は、根本的に破壞されないと、保障することが出來ませうか。一たい、人種戰爭から我々は何を得るのですか。勝つた者も、敗けた者も、果して何を獲るのですか。歐洲戰爭の教訓だけで充分ではありませんか。』

それでも、孫中山は頑として謂つた。

『いや、人種戰爭が起つても、文明は破壞などされない』

『それはご意見です。しかし、私は更に伺ひたい。國家主義の見地に立つた、その人種戰爭の後に、又更に、大きい戰爭が後から後へと、續いて來は致しませんか。我々は、よい加減にして、國家主義の上に、國際精神を加へたらどうなんですか。國際精神なしに、あなたは、世界の人類が文明を保存してゆけると、お考へになるのですか。』

『然しね』と孫中山は一寸、聲を和げて言つた。

『然しね、國際精神は、今私の申した、東洋民族聯盟のうちにも、あるんですよ。卽ち、多くの國々が聯合してゆくと、いふことが、一種の國際精神の發揮だからね』

『いや、それは全く違ひませう。あなたの仰有るやうな國家の聯合は、昔からありました。それは春秋戰國時代の合縱連衡に過ぎない。私の申す國際精神はそんな方便的なものではない』

しかし、孫中山は依然として、自說を固執して、それもこれも同樣の國際精神だと言つた。それが、自分に少からぬ失望を與へた。自分は支那の政客中の思想家と言はれる孫文氏は、今少しく、現代民族の要求に徹して居るものと豫期して來たからである。彼の思想的發達は十九世紀中葉の國家主義で行きどまりに、なつて居るのかと思はれ出して來た。

五、

『それでは、あなたは、日本が對支外交に於て、絕對不干涉の立場を取れば、支那は統一されると、お考へになるのでありますか』

『それは、必ず統一出來る。』

『しかし、その統一可能の證據は、どこにありませう。東洋に於ける治安の維持者たる日本としては、支那統一の見据えの確實ならざるうちに　列國との協調を破つてまで、單獨で北

京から撤退は出來ますまい。』

『その證據は、此處に在る。斯く申す拙者である。支那紛亂の原因はどこにあるか。皆拙者である。滿洲朝廷の勢威に恐れて、天下何人も義を徇へなかつた時に、敢然革命を提唱したのは誰れであるか。我輩である。袁世凱全盛の日に、第二革命の烽火をあげたのは、誰人であるか。我輩である。第三革命、第四革命、あらゆる支那の革命は、悉く我輩と終始してゐる。しかも我輩は未だ一回だも革命に成功しない。何故であるか。即ち、外國の干渉である。殊に日本の干渉である。外國は擧げて我輩の努力に反對した。しかも、遂に一人の孫文を如何ともすることが出來ないではないか。それは我輩が眞に支那の民衆の歸向を代表するからである。故に、日本にして、絕對無干渉の態度を取るならば、支那は必ず統一される。支那の不統一を理由として干渉するのは、夫れ自身に沒理である。』

それは、大膽至極な聲明である、或人は、誇大妄想狂の空言と聞き流すかも知らない。しかし、自分は一種の悲壯なる尊敬を感じた。革命のこと、言ふべくして、行ふことは頗る難い。孫や其の生涯六十年、革命と共に寢ね、革命と共に起き、夢寐その宿志を忘れない。今日の世界に於て、其の初志に忠なること、彼のごとき、又これを多く求むることを得やうか。昔の[illegible]に失する。亦深く咎むべきではあるまい。

六、

『先刻、あなたは、共和と言ふことを申されましたが、共和とは制度に過ぎない。その制度の器(うつは)のうちに、あなたは、何を盛らふとなさるのでありますか。』

『それは三つのものである。社會主義と、平民主義(デモクラシー)と、國民主義(ナシヨナリズム)との三つである』

『今日の儘の支那に、あなたは、社會主義が實行出來るとお考へでありますか。一たい支那のやうに人口の多い國で、すべての人が平等の經濟狀態に立ち歸つたなら、各人はどうゆう生活をするのでありませう。且つや、支那のやうに家族制度が盛んで、從つて人口の增加する國で、このまゝで各個人の經濟的安定が所期されると、仰有るのですか』

『それは出來る。私の言ふ社會主義とは、國家社會主義である。大資本は國有となる。しかし消費的財產は私有を許す。それから、家族制度と言はれたが、私は家族制度の存在が、支那の社會主義を可能ならしめると考へる。人口とあなたは、言はれるが、支那の人口はそんなに增加しない。二百年前乾

陸の世に人口統計を取つたが、その時も四億、今日も四億である。支那の人口は增してゐないのである』

『一歩讓つて、支那の人口が增さないとしてもそれは、饑饉と疫病と、間斷なき內亂の爲めでせう』

『いやそうでない』

と孫文先生は、大聲に否定したが、別に理由は言はれない。そこで又自分は、しつこく、

『あなたは國家社會主義と、デモクラシーとは、調和すると、お考へになるのですか、國家社會主義は、官僚政治となり、專制政治と化し易い。自由を尙ぶデモクラシーと調和が出來るのですか』

『私の言ふ、デモクラシーのうちには、自由といふものを含まない』

一落千丈、奇想が天の外から直下した。自分は一寸、度膽を拔かれた形で、

『デモクラシーのうちに、自由を含まないとは、どうゆう意味ですか』

と問ひかへした。多分そのとき、自分は眼をパチクリさして居たに違いない。

『支那は自由の國だから、自由などゝいふことを、事新しく言ふ必要はない、と言ふんです。外國では、人民に自由がない故に自由の獲得の爲めに戰つたりする。それは丁度、空氣のやうなものである。空氣は天下に充滿する。だから我々は空氣を獲やうとして戰はない。自由は支那に充滿する。故に自由などを論ずる要はない。第一自由と言ふ文字が今まで支那には無かつたので判る』

成る程、そうゆう意味なのか、それなら自分は、びつくりする必要はなかつたと、思つた。それは日本のお年寄り方でも、よくなさるご議論である。珍らしいことでも何でもない。そこで自分は、ずつと落付いて、

『いや、それは、例が違ひませう。自由と申すものは、空氣のうちの濕氣のやうなものでありませう。この廣東の空氣は、濕氣でむせかへるやうで、我々初めて來た旅行客は不愉快でたまらない。しかし、廣東に住んで外に出たことのない人々は平氣である。不平も何もない。これは、北京や、紐育の乾いた空氣の、如何に心地よきやを知らないからである。支那人の自由を求めないのは 眞の自由と言ふものゝ味を、ご存じないからである。世の中といふものは、こうゆうものかとあきらめて居られるのである。それであるから自由はいらないとは申せますまい』

『いや、さうではない、支那は自由の國である』と孫文先生は、例のごとく理由を言はないで、頑として自説を固持される。

それから、自分は、支那の思想的中心勢力たる儒教が果してデモクラシーの思想と一致するかと、聞いた。すると孫文は孟子の民を先とす、と言ふ句を引いて、儒教にはデモクラシーがあると主張し、更に、滔々として、支那の政治の理想は堯舜の古しへに歸るに在り、と主張した。自分は、自分と孫文氏との距離が、次第に明瞭になつて來ることを感じた。

彼は更に、國民主義の必要より、東洋民族の結合を說いた。

『あなたが日本に歸られたら、日本の青年方に傳へて下さい』孫文先生が厳粛な面もちをして、說き出した。すると一人の參謀が、電報を持つて、這入つて來た。自分はフト思ひ泛べた。いま對岸の廣東城は、雲南軍の駐屯地で、南岸は孫文の兵の所在地。そして、北方兩三里の地には、陳鴻英の率ゆる廣西軍が虎視眈々として、機會を窺つて居るのである。孫文の地位は、旦夕を測らざる危險に瀕してゐる。今にも、この雷雨に乘じて廣西軍が砲擊を始めるかも知れない。雲南軍が寢返へりを打たないものでもない。抽象的議論をして、この危急な老政治家の時間をこれ以上、奪ふべきではない。自分はさう思つて、參謀の來たのを合圖に、椅子を立たうとした。これを見ると、孫文先生は、すぐ、兩手でおしとどめるやうな手振りをしながら、

『まア〳〵、お待ちなさい。私はもつと、あなたとお話がしたい。どうか、日本に歸つたら、日本の青年方に傳へて下さい日本民族は、自分の位置を自覺しなければいけない。日本は黄金のごとき好機會を逸した。今後は逸してはならない。それは、日露戰爭の勝利である。あの勝利の時に、東洋民族一般の狂喜歡喜を、あなた方は知つてゐるか。私は船に乘つて紅海をぬけてポートセイドについた。その時、露國の負傷兵が船で通つた。それを見て、埃及人、土耳古人、波斯人たちが、どんなに狂喜したか。そして、日本人に似た私をつかまへて、感極まつて泣かんばかりであつた。「日本が露西亞を敗かした。東洋人が西洋人を破つた」そう呼んで彼等は喜んだ。日本は一躍して、精神的に東洋の盟主となつたのである彼等は、日本を覇主として、東洋民族の復興が出來ると、思つたのである。

しかるに、其の後の日本の態度はどうであるか。あれ程慕つた東洋民族の力になつたか。否、我等東洋人の相手になつてくれたか。日本は、やれ日英同盟、やれ日米協商と、西洋の強國とのみ交を結んで、ついぞ東洋人の力になつて與れな

かつたではないか。

私は、譬へをもつてお話し致さふ。東洋人が、亞米利加に移民して、キャルフォルニアで成功して、金持になつて、渡つて來たと致さふ。すると親族緣者や友人たちは、大層喜んでさあ歸つて來てくれた、大歡迎會を開いて、彼を迎へやうと色々の準備をする。扨て、着いて見ると、この男は、傲然として、鄕里の友人親戚には、眼もくれない。そして、揚言して言ふ。私はお前方の友達ではない。私の友達は、モルガンだ、ロックフエラーだ、グールドだと。それが日本である。」

もう日はとつぷり暮れてしまつた。いつの間にか電燈がぽんやり點いて居る。孫文は、しんみりした調子で語りつゞける。

「しかし、自分たちはまだ、日本に望を絶つてゐない。露西亞と同盟することよりも、日本を盟主として、東洋民族の復興を圖ることが、我々の望みである。日本よ　西洋の友達にかぶれてはゐけない。東洋の舊い友達の方に歸つてくれ。北京政府援助の政策を捨てよ。西洋かぶれの侵畧主義を捨てよ、そして、滿洲から撤退し、虛心坦懷な心持ちで、東洋人の保護者となれ。支那の發達を杞憂するのは、無益である。支那は決して侵畧主義の國民ではない。その證據には、嘗て支那の附庸國であつた國々は、未だに支那を德としてゐる。ネパールの國は今でも、支那に貢を容れて居る。嘗て支那革命以前に、暹羅の外務大臣が、自分に語つて、あなたが支那の革命を成しとげて、支那が共和國になつたら、暹羅は支那と合體して一國になりたいと言つたことがある。それは、支那の民族には、專制的侵畧主義の心持がないからである。日本は支那の統一と發展とを、決して心配することは要らない。東洋民族の保護者として、自分たちは、日本を必要とする。そして、今自分たちの同志が計劃して居るやうな、東洋總聯盟は、日本を盟主として完成するのである。それには日本が、從來の謬つた侵畧政策と、殊に對支政策とを捨てなければいけない。それまでは、日本の如何なる對支施設も、支那人の感謝を贏ち得ない。支那人は深い疑ひをもつて日本を眺めつゞける。」

言葉は暮陰の底から、ひし／＼と自分の耳に墜ちて來た。自分は焦茶色の支那服の上に浮み上つてゐる、その村夫子のやうな顏をじつと看乍ら、外のことを考へてゐた。自分は古い希臘のことを考へてゐたのである。自分は、雅典といふ小さい都を治めたペリクリス三十八年の治蹟が、如何に今日まで我々の生活に影響してゐるかと、いふことを考へてゐたのである。そして、亞歷山大の覇業も、ネブカドネザルの榮華も、如何に脊[illegible]

の泡のやうに消えてゐつたかと、考へてゐたのである。永い人類の歷史をふり返つて見ると、東洋の盟主といふやうな文字が、そうた易く我々の感激を呼び起さなくなつて來る。孫文先生は今一度世界人文史を讀みなほされなければいけない。

「あなたは露西亜や、北蒙古の使者と、此處で會見されるのですか、』

と自分は、だし拔けに聽いた。

『いや、使者が來るのではない。文書で話し合ふのだ』

それからまた、半間のなかに、二人は暫らくだまつて坐つてゐた

『お主旨はよく解りました。しかし、私は國家主義だけでは駄目だと思ふ。それはもう、大昔から、何度もく試みられた芝居です。私は東洋の救濟も、私たちが世界人といふ心持まで登つてからでなければ駄目だと思ひます。』

それから自分は進んで、支那の政界の腐敗とこれに對する日本人の侮蔑とを端的に言つて、果してこれが、なほるであらふかどうかと聞いた。

『それは滿洲朝廷の遺習である。滿朝の遺積である北京政府の疾患である。眞の革命家は金錢を眼中に置かない』

と激語して、彼が嘗て、醫師として、天津の大官を診斷せむとして、門番に賄賂を求められて、駮推した話をしたのち、

『官吏が賄賂を取つたのは、滿朝の自衛策である。滿朝に漢人官吏の腐敗を奬勵して、民衆と官吏との反目を利用したのである』

と付け加へた。

もう戸外は眞黑になつて居る。自分は飛び上るやうに、椅子を離れた。にこやかに立つてゐる孫中山先生の手を握つて、別れを告げ乍ら思つた。この體格がいけないのである。その低い脊丈、村夫子のやうな顏、そして小さい手、その凡ての感じが、天才と言つたやうな銳い感じを對者に與へない。あれだけの熱情を持ちながら、どうしてもつと、この人の風貌に、人を壓するやうなちからが現はれて來ないのであらう。

部屋を出て、時計を出して見ると、七時前である。いつの間にか二時間經つてゐる。

七、

そのあくる朝、自分は、香港行の汽船に乘つて、珠江を下つてゐつた。甲板の籐椅子に倚つて、山と水との姿を送迎してゐるうち、ふと、押へ難き哀愁の胸に迫ることを感じた。この雄大な支那の山河を見乍ら、自分ははしなくも、支那の人物のあ

まりに貧しきことを感じたのである。この大いなる山河と、幾億の民衆とを救ふべき天才は、どこから出て來るのであるか。戸口までさし迫つた外國の侵略を目前に眺めながら、いつまで支那大陸は紛亂を續ける積りであらう。この混沌のうちから、秩序を生み出すべき力は、いづくにあるか。山西省の閻錫山か、否。南通州の張謇か、否。洛陽の吳佩孚か、否。然らば、廣東の孫文か。

その大なる疑問と、期待とを抱いて、自分は遙々廣東に順禮して來たのである。そして、自分はいま、何を抱いて歸る乎。あれ程に支那の青年の血を沸き立たせ、勞働者の親附を得たる孫中山先生は　支那南北を通ずる一個の勢力である。野に隱匿すると、朝に翺翔するとの別なく、彼は常に儼然たる一個の勢力である。この原因は、色々あらう、廣東總領事の藤田榮助君の說のごとく、彼の恬淡と、勇氣との賜物でもあらふ。又は、彼の革命家たる情熱の故でもあらふ。兎に角彼は支那の一大勢力である。若し支那安定の一因子を尋ねるならば、誰人も彼を除外することは出來ない。しかし、彼は果して、混沌たる現代支那に一道の光明を投ずるだけの天才である乎。

こうして靜かに、二時間の會談を心中に繰りひろげて見る。その日の印象をじつと檢討して見る。それは熱情(エンスージアズム)──偉人の最大切なる資格であるところの──はあつた。よく六十年あれだけの若々しい情熱を持續して來られたと、頭は下がる。しかしその外に何物を自分は感得したか。自分の手さわりは、非常にかたいもの、大そう大きいものに、觸れたといふ感じではなかつた。一個の天才に面接しているといふ靈感は、とう〱起らなかつた。この人に依つて支那が統一されるといふ、莊嚴な期待は自分の內心に喚び醒まされなかつた。

昨年自分は、北支那と、長江沿岸の人々に會つた。到る所で孫中山の名前にぶつかつた。そして一年振りでやつと廣東まで尋ねて來た。その待望の本尊はこれであつたか。もとより、自分はカヴールに會はふと思つて來なかつた。しかしマチニーには會へるかも知れないと思つて來た。そうではない、自分の會つたのはコッスートであつた。

『大きい國と小さい人』そうゆう感じが強く、心のうちに湧いて來た。自分は淋しい氣がした。振り返つて見ると、廣東州の豐饒なる平野が、春霞のうちに消えてゆく。あれ程の惠まれた自然、あれ程勤勉な民衆、これが、いつまでこうした、小さい空論と、小さい實行的手腕との下で、混沌と渦卷いてゆくのか。

（一九二三・五・八）

性のユトピア

室伏高信

──（性のユトピア）──

一

幾度、戀愛の自由が詩の美しい題材となつたことであらう。そしてこの詩人の美しい酒が多くの青年男女にたゞ幻滅の悲しみを味はせたに過ぎなかつたことが幾度であらう。

戀愛が若しも謂ふところのプラトニック・ラブに止まることができるとしたら戀愛は死屍からぬけ出して空中をふらり〳〵彷徨つてゐる人魂のように自由にその行くべきところに行きつくことができるであらう。だが、戀愛が友情や、親子の愛や、ナアルシシズムと異つた何ものかであるとしたらそれは疑もなく性愛なのだ。フロイドの言葉でいふと性的相合を目的とする性愛なのだ。そして、戀愛が男女間の、若しくは同性間の性的相合を目的とする性愛にほかならないことが解つたとしたら、性愛の起原、職分、關係において、Eros'eine Platos と Freuds Libidotheorie が同一物だといふても、ナッハマンゾオン等の一派がプラトオを冒瀆したのだと云ふわけにはなるまい。こゝに戀愛が天の高きから地の現實にと落とされる。プラトニック・ラブが地上の制約をうける。性的相合の自由がない限りかくして人々は戀愛の自由を語ることができなくなる。戀愛の自由とは、私の定義によると性愛なる心的欲望と、性的相合なる肉的實現との一致であるにほかならないからである。

それには先づ女も男もともに人格者でなくてはならない。自由戀愛の前に女の解放が要求されるのも勿論のことであらう。女性の從屬の原因の最も根本的なものが今日ではその經濟的從屬のうへにあること もしば〳〵社會主義者の論じてきたところなのだ。そして今日ではこの點に異論をもつてゐる人はあんまり多くはないだらう。だからベエベルがブルヂョア社會に自由戀愛が存在しえられないと論じたことにも異論を唱へよう

とするものは多くはなくなつてきたであらう。

でも、もう少し附け加へていつておきたいのは、今日の社會では凡てのものがそれ自身目的ではなくて一つのたゞなる經濟財だといふことだ。土地だとか機械だとかだけがそうであるのではない。凡ての藝術品もそうなのだ。聲樂家の聲、パヴロバの足、學者の頭、みな一つとして經濟財でないものはない。一つの立派な商品なのだ。いや人間そのものまでも商品なのだ。プロレタリヤといふ奴は勞働と名づけられた商品よりほかの經濟財をもち合せない動物のことなのだ。女性とは、性と名づけられた商品のほかの何ものをももち合せない動物のことなのだ。この商品を切り賣りする女を賣女と名ける。永久的に賣ることが結婚なのだ。

それでも尙ほ今日の世の中に自由戀愛が存在することができると思つてゐるほどの頭のよくない人があるのなら私はフウリエをつれてくることにしよう。彼は決してショウペンハウアアなぞのように頭から女性を輕蔑した人たちの仲間ではなかつた。正にあべこべである。フウリエのように女性の優越性を讃美したもののあることを私は知らない。そのフウリエのように今日の結婚制度に痛烈な批評を加へたものもまた少くないであらう。彼は結婚における今日の所謂戀愛なるものを罵つて曰く、結婚における文明的戀愛とは、一ケ月の終りには、恐らくは結婚の第二日には、心の一切の幻覺から醒めてしまつて、たゞ家庭的紐帶に連なつてゐる純粹の殘忍性、偶然の交合のほかの何ものでもあらないと。

それなら財產の問題が片づいたなら兩性の問題は直に片づいてしまうであらうか。社會主義の世の中では戀愛の自由が障害されることなく行はれることができるであらうか。ベエベルなぞの考方はこの點であまりに唯物的單純に過ぎはしないだらうか。

私はこゝに私の考を述べようとするのではない。また私自身のユトピアを描こうとするのではない。プラトオや、モアや、その他の昔からの多くの人たちのユトピアをとほして兩性の關係を見ようとするのだ。

二

ユトピアは十人十色だ。殆んど凡ての點についてそうなのだ。兩性の關係についてもみなそれ〴〵に描く人々の考に從つて樣々の理想が畫き出されてゐる。

男女の能力に差等があるか？差等がなくても差別があるか。今日の男女の間にそれのあることは勿論だが、ユトピアのよう

に男も女も平等の教育をうけ、平等の境遇に居り、各々その天賦を自由に發達させることのできるところではどうか？つまり男女は生れながらにして能力に差別、差等であるかどうか？

ウエルスの「近代のユトピア」はこの點で最も多く保守的だ。彼は差別も差等もあると答へてゐる。彼の言葉でいふと女が男と同一價値の仕事をすることのできないのは——女の劣等なことは疑がない。たゞに女性がその體力において劣等なばかりではない。自發力が劣り、發明力が劣り、組織や結合の點において女性特有の弱點をもつてゐると。

けれども能力に差等のあることは地位や報酬にも差等のあるといふ理由にはならない。そんな考方はブルジョアの世界では通つてもユトピアでは通用しない。ウエルスのユトピアにおいてさへ男女は平等の待遇をうける。特に母性は一段と高い待遇をうける。母、若しくは母たらんとしてゐる女性は、賃銀の點でも、自由の點でも、尊敬をうける點でも、警官や、檢事總長や、王や、大學教授や、僧侶などと同樣に待遇されべきだとまでいふてゐる。

モアや、モリスなどは男女の間に能力の差等があるとは考へてゐないが、それでも尙ほ能力の種類に差別があると考へてゐる。モアのユトピア島では凡ての人が同じやうに技藝を學ぶことになつてゐる。女性もまた同じやうに技藝を學び、そして同じやうに職業をもつやうになつてゐる。けれども男と女とが同じ職業や、同じ性質の働きをすることになつてゐるのではない。女性はこゝでも主としては家庭に働く。ユトピア島では家庭が社會組織の單位となつてゐるのだ。そして女が結婚すると良夫の家庭に入り、良夫に仕へることは今日のわれ〳〵の風習と同じである。けれども自分で料理をしたり、裁縫したりしないで、奴隷を監督してやらせることになつてゐる。女が外に出て勞働する場合にもその體力に應じて適當な仕事が與へられることになつてゐる。「無何有郷」でも女は家庭的な仕事をする。食膳をとゝのへ、お茶を運ぶのは女の仕事となつてゐる。

プラトオや、ベラミイになると男女の間に能力の差等を設けないばかりではない。差別さへも殆んど考へてはゐない。プラトオの「共和國」でも勿論凡ての人間の能力が平等だといつてゐるのではない。天才もある。凡人もある。けれども性の區別によつて能力の區別があるものではないといふのだ。プラトオの言葉でいふと　天才は男にもあり、女にもあり、兩性の間に無差別に混交されてゐるといふのだ。だからそこでは女の醫者もあるし　音樂家もあるし、相撲取りもあるし、若くは公務員がある。公務員の職分は彼の共和國では最上の名譽ある仕事で

あるが、女性もまたこの仕事にたづさわることとなつてゐる。そこには家庭は最早や存在しない。凡ての公務員はみな男も女も公共の建物のうちに共同に棲むでゐる。だから女が家庭の仕事をする必要はこゝにはないわけだ、男も女も同一の仕事をする。力業は成るべく男がして女は腕力のあまり必要でない仕事をするといふのがたゞ一つの一般的差別なのだ。プラトオの言葉通どほりにいふと、彼等は凡てのことを共同になすべきだ。たゞわれ〳〵は女を腕力の弱者として、男をその強者として使ふだけなのだと。

ベラミイの「回顧」の中でも女は家庭の仕事をしない。女には家計の責任もなく、また良夫は「世話をやかれる赤兒」であるのでもない。女も男も共同の勞働者なのだ。工業に農業に、女は男ともに働く。男の產業軍があるように女の產業軍もある。女の產業軍の總指揮官は必ず女である。女性間に起つた事件を裁判するのも女性に限られてゐる。報酬は男女を問はず凡てが平等だ。たゞ「若し何等かの差別があることとしたら女の方がより多く受取るべき資格がある。」何故なら子供を產み、子供を育てることと位國民にとつて感謝すべきことはないからだと。

フウリエのファランヂュでもこの點では全く同様だ。女性は一切の家族の面倒くさい仕事から解放されてゐる。凡ての料理は共同臺所で、熟練した專門の料理人によつて行はれる。そして凡ての女性はその性能に應じてそれ〳〵有益な仕事をすることになつてゐる。

私はフウリエが女性の非常な讃美者だといふた。フウリエはたゞ女性の能力が男性のそれに劣るものでないと考へてゐたばかりではない。彼は更に一歩を進める。腕力の場合を除くと、自由な狀態のもとでは、肉體と精神とのあらゆる機能において、女は男に優越するとまでいふてゐるからである。

三

かくしてユトピアでは男女はみな平等なのだ。男女の能力についてはみなそれ〳〵に異つた觀察はしてゐながらも男女が社會的に平等な地位をもつてゐることは、凡てのユトピアに共通な一點なのだ。そこでは最早や女性が經濟的に男性に隷屬するようなことはない。政治的に支配されるようなこともない。男女は全く平等なのだ。無何有郷見聞の言葉でいへば男性は最早や女性のうへに專制する機會を失ひ女性もまた男性のうへに專制する機會を失つてゐるのだ。

それゆえにそこでは性はたしかに一つの商品ではない。ベラ

ミイもいふてゐるとほり金のために性を賣るような結婚はこゝでは起るべくもない。戀愛の自由はこゝにその性的相合のために一つの有力は障害を取り除いたわけなのだ。自由戀愛なるものが若しもベエベルあたりが考へてゐたようにたゞなる結婚選擇の自由―― Freiheit der Liebeswahl ――であるに止まるとしたなら、それだけで兩性上の凡ての問題の根本が解決されてしまつたのかも知れない。無何有郷では財産問題は美事に解決されてゐる。凡てのユトピアのうちで、私には無何有郷が最も卓越したもののように思はれる。けれどもその花咲き鳥歌ふ、凡てが生き〳〵とした、人々が勞働を樂しみとしてゐるユトピアにおいてさへ、性の問題は一つの困難な問題として殘つてゐた。ハモンド老人はいふ、この國で兩性間の面倒が一切とり除かれたように思ふのは自己欺瞞だと。

ウエルスは凡てのユトピアの連る問題のうちで一番六かしいのは結婚問題だといふたことがあつた。財産問題が解決されても結婚問題が兩性間の一つの難問題として殘されてゆくのではないだらうか。

私はもう一度フウリエに歸つてゆこう。結婚問題が私たちの生活において、社會進化のうへにおいて、どのように大きな役割を働くかについて、私たちはフウリエに聽くべき點が甚だ多いと思はれるからである。彼は本能派の一方の重鎭であつた。彼の社會觀がこの本能性のうへに根を置いてゐたことは人のよく知るところなのだ。彼は今日の心理分析學者がするように性愛そのもののうへに大きな社會的役割を見てゐる人であつた。彼は世の中の進化の階段を幾つかの時代に分けてゐるが、その一つ〳〵の時代の決定には常に性愛の問題がかゝわつてゐると考へてゐた。

彼は時代の特徴をその結婚制度において見た。野蠻時代とは女性の絶對的服從をその特徴とする時代である。文明とは獨占的結婚制度、――そして閨房から私法的に解放された女性――をその特徴とするものなのであつた。この二つの結婚制度が世の中を野蠻と文明とに分ける。たゞ分けることの標準であるばかりではない。進んでそれ等の時代を決定する力さへももつてゐると彼はいふ。文明人の間に若し女性の絶對服從の制度が回復されたら、文明は間もなく野蠻にと復歸するであらう。また野蠻人の間に今日のわれ〳〵のような結婚制度が採用されたなら、野蠻が間もなく文明に化するであらう。フウリエはこうまで思ひきつて結婚制度そのものの重大さを說いたのである。

こゝにまたユトピアンの苦心があるのだ。性のユトピアはたゞ財産の問題や、その他の男女平等の社會ができただけで自然

的に解決するものではないのだ。性のユトピアはここから先きにこそ却つて本舞臺にと入つてゆくのだ。

四

性のユトピアを結婚制度を通じて見よう。

性生活の形式には一夫一婦、一夫多妻、一女多男、群婚、亂婚といふようないろ〳〵な種類に分れる。そのうち群婚は濠洲に今も尙ほ存在するが、亂婚とか群婚とかいふことは流石にどのユトピアにも出てはこない。或はゴドヰンがその政治的正義のうちでいふてゐるとほりに、將來の社會で、たとへ性生活の在來の一切の習慣や道德や形式やが除きとられた後でも亂婚を來たすようなことは起りえないのかも知れない。

けれども亂婚や群婚の場合を除くと、いろ〳〵のユトピアに現はれた性生活の形式は、またいろ〳〵なのだ。亂婚に近いと思はれるほどに急進的なものもあれば、今日のわれ〳〵の制度と五十歩百歩のやつもある。

私は便宜上にこれを個人主義的結婚制度と共產主義的結婚制度との二つに分けて話をすゝめる。

モアの理想は個人主義的結婚制度であつた。彼のユトピア島では人々は一人の女性を妻とすることに滿足してゐる。即ち一夫一婦なのだ。その一夫一婦でさへ死によつてのみ消滅するといふから全く偕老同穴的なものなのだ。離婚はそこでは容易なことではない。即ちお互が完全に合意のうへで、そしてお互がそれ〳〵に新らしい愛人をもち得る時でなくては離婚は終生許るされることはできない。女の容貌が惡るくなつたといふことや、愛情が衰へたといふことだけでは離婚の理由とはならない。破婚はこのユトピア島では最も重い處罰をうける。またしかしそれだけに姦通は直に離婚の理由となる。妻が姦通したときには良夫、良夫が姦通した時には妻は、直ちにその相手方を離別して新らしい相手方と結婚することができる。そして姦婦姦夫は生涯再婚することが許されないこととなつてゐる。

ベラミイの「回顧」は性愛の自由を說くために長い一章を費してゐる。彼は美しい詩のような言葉で性愛の自由を說いてゐる。そこでは性愛の關係は卒直で無制縛で、舊時代にあつたような一切の窮屈から逃れてゐる。兩性はそこでは完全な平等さをもつて、たゞ純粹に戀愛の求めるところに從つて、お互にその相手方を撰むことになつてゐる。女も男も、そこではその愛情を隱くしたり、若くは女が媚を賣るようなことは蔑しめられる。人間の歷史のうちで性愛撰擇が初めて無拘束に働くのだと彼は說いてゐる。そこにはたゞ一つのアリストクラシイが殘つ

てゐる。性生活のそれなのだ。性生活が門閥とか財産とかによつて制約されるといふことでは勿論ない。性的撰擇はその自然の狀態では異性のうちから最良にして最貴なものを求めようとする傾向にある。ユトピアでは人道のために最も多く貢獻するものが最善にして最貴な人間なのだ。ユトピアの女性等は自然にこの最善にして最貴なものを撰もうとする。こゝに最善にして最貴な兩性の間に性愛が結ばれる。それが性愛のアリストクラシイだと彼はいふ。

ベラミイは性愛の自由を謳歌することにおいて他の如何なるユトピアンにも劣らない。しかし彼の說くところはあまりに抽象的である。それが如何なる制度を伴つてゐるか、若しくは如何なる制度を否定してゐるかを少しも說いてはゐない。

ウエルスの「近代のユトピア」はベラミイに比べると遙に具體的な敍述である。性のユトピアとしても勿論そうなのである。彼は凡てにおいてそうであるように、男女關係においても國家の立場からそれを見る。小供を産むことも、養育することも、彼にとつては個人的の問題ではなくて全社會の立場から取扱はれべき公的事件なのである。政治家の立場からすると結婚は第一にはよき小供を産むことの可能性、第二にはよき家庭を作ることの可能性をうるために國家にとつて第一義的に重大な事件である。――こういふ風に考へてゐるウエルスのことであるから彼の性のユトピアは具體的ではあるとともにまた官僚的な七面倒臭いことも爭はれれない。彼は先づ一般的に教育が普及してゐることを必要とするためや、產兒の死亡率を少くするために、結婚年齢を相當に高くする必要があるといふてゐる。女が二十一歲、男が二十六、七歲といふのが彼の案である。いよ／＼結婚の許可がえられても、彼等は先づその結婚の意思を公署に屆け出て、そこから一枚のカアドを貰はなくてはならない。そのカアドには夫婦の年齢や、以前の結婚（若しあつたとしたら）や、病氣のことや、小供のことや、住所や、その他のいろ／＼の項目が記入される。簡單な結婚式があつて證人立會のうへでこのカアドが朗讀される。その儀式がすんだ後でも當事者の一方または双方がこの結婚を中止したいと思ふこともあらう。その萬一の場合のために一定の猶豫期間が設けられてゐる。この期間内なら當事者の一方または双方は何時でも契約を破棄してしまうことができる。ウエルスは結婚を性愛のうへからではなくて寧ろ國家や家庭やまた從つて小供の立場のうへから考へてゐただけに結婚がなるべく長く繼續することを望むでゐる。またしかし長期の結婚を望むものの常として彼は貞操についての嚴格な考の持主なのだ。若し妻が貞操を破つたとした

らそれがたゞ離婚の理由となるばかりではない。その良夫が望むと望まないとにかゝわらず離婚しなくてはならない。何故なら有夫姦は國家への罪惡だからだ。國家への罪は、相手方がこれを望むでも望まなくても公罪として所罰すべきだといふのである。ところが良夫が貞操を破るといふことは、ウエルスによると女の場合とは全く別問題だ。それは國家にとつては何の害惡でもない。たゞ、女性間の嫉妬の原因となるだけなのだ。だからこの場合は離婚を要求するとしないとはたゞ妻の自由判斷に任せて國家は何ごとも干渉しないと。

ウエルスのユトピアのうちでは、有夫姦の女よりも小供を産まない女の方が國家にとつてより好ましくない。そこでは小供のないといふことが離婚の理由なのだ。そして結婚後四年か五年たつてまだ小供のない場合にはその結婚は消滅させなくてはならないことになつてゐる。

五

問題はまだ殘つてゐる。モアやウエルスは生涯結婚を原則としてゐるだけに姦通の問題をも考へずにはゐられなかつた。けれども姦通とは何か。姦通の存在することは制度それ自體の缺陷を示してゐるものではないのか。そこに戀愛と性的相合の自由との一致が存在してゐない證據ではないのか。

そこでは男も女も、最初にその配偶者を撰むことの自由をもつたであらう。そこに戀愛の自由と性的相合の自由が一致したこともたしかだ。けれども戀愛は固定的なものか。戀愛はもつと流動的なものではないのか。姦通の存立することがこの戀愛の流動性を證據立てゝゐるではないのか。

無何有郷見聞のうちにはクララといふ一人の美しい女性が描かれてゐる。彼女は快活な、そしてこの理想郷に代表的な女性であつた。そこにデイックといふ青年もゐた。若いクララとデイックとが戀に落ちた。彼等の初戀は二年の間何ものにも碍げられることのない美しい夢として續いた。二人の子供までもなされた。二年の後に新らしい他の男性が現はれた時にクララは新らしき戀が追ふて走つた。戀愛の自由は、デイックを失戀の底に落とし、そして二人の子供等から彼等の母を奪ひとつた。無何有郷見聞の著者がいふたとほりに Calf love が一生涯續くもののように思ふことが間違ひであつたのだ。それは失望の彼方へと弱められてゆくべき運命を負はされてゐるのであつた。無何有郷のような理想郷でさへ、一つの戀愛は常に失望の彼方へと弱められてゆくべき運命のもとにあつたのだ。

初戀が一生涯續くものでないとしたら、結婚制度もまた一生

涯を目標とすることが間違ひではないか。少くともそこに戀愛の自由が失はれてゐるといふことになりはしまいか。

そこで一時的結婚、または共産的な結婚制度が自由戀愛の形式として考へられるわけなのだ。

六

共産的若しくは一時的結婚制度のうへに性のユトピアを描いたのはプラトオであつた。

プラトオが彼の有名な共和國を書いたのは四十位の時であつたから、彼の思想上の最高成熟期であつた。それには一種の共産主義が對話の形で書かれてゐるが、その共産主義は財産についてばかりではない。性生活のうへにも及んでゐる。そして性生活においての共産主義は、財産上のそれよりも精細に描かれてゐる。財産上の共産主義は彼にとつては當然に性生活の共産主義を必要とするのだ。彼にとつては財産上の共産主義と性生活上の共産主義とは分つべからざる二つなのだ。

プラトオは疑もなく一種の共産主義者であつた。彼は共産主義のうちに正義を見た。財産は人間の心を墮落させると考へてゐた彼は同時に共産主義が理性の要求であると考へた。理性とは非利己主義を意味する。それゆえに理性は共産主義から生まれる。彼はこうまで考へてゐた。

彼は勿論唯物論者ではなかつた。アリストオトルなぞの攻撃したようにたゞ物的改造に重きを置いてゐたのでもなかつた。彼の「共和國」は、ルソウもいふてゐるように、寧ろ教育の書物なのだ。教育がプラトオにおいては人間建築にとつて最も重要な手段であつたことは少しも疑がない。たゞ彼は教育の全能を信じなかつた。環境の力、物質的誘惑が人間精神に與へる力の見逃してはならないことをよく知つてゐた。そこに教育の力と俟つて物的社會改造の必要を見たのだ。そして共産主義のもとでこそ初めて精神生活が最もよく榮えるといふ風に考へてゐたのである。言葉を換へていへば彼の共産主義とは如何なる意味においても唯物的ではない。利己的でもない。靈性生活の必要條件だとともに、非利己主義の標徴であつたのだ。彼の性的共産主義はこの財産上の共産主義から分離することのできない二つなのだ

こうした立場から彼は家庭の廢止が必要だと考へた。家庭とは彼にとつては利己主義の城廓である。反社會的本能がそこに培養されると考へてゐた。

希臘文明は彼の時代に高潮に達してゐたが、その結婚制度は尙ほ蓄房制度から進んではゐなかつた。女は十五歳位の頃に一

度結婚すると家庭の一偶に幽閉された良夫以外の男性はこれを目撃することさへも殆んどできなかつた。たゞスパアタだけがやゝ進んでゐた位ひのものであつた。プラトオはこゝに希臘文明の一つの暗影を見てゐたのである。そうした家庭の廢止は、彼にとつては、國家のための結合、個人のための自由、そしてまた國家と個人とのためなる正義を意味してゐたのだ。

　プラトオは謂ふところにプラトニック・ラブの主張者ではなかつた。彼の時代では結婚は小供を産むための手段として一般に認められてゐたように、彼もまたこの時代の考を分けてゐた。彼にとつては結婚とは小供を産むための男女の性的相合の制度のほかの何ものでもなかつたからである。

　小供を産むことは私的の事件ではない。國家への奉公であつた。彼は凡てを正義と國家と全體の立場から見た。美醜の區別さへもこの立場から見るべきだと彼はいふ。公共にとつて最も有益なものが立派なもの、有害なものが醜いものなのだ。裸體で働く女性も、彼女が公共のために働いてゐる限り、それを笑つたり輕蔑したりすることは、笑つたり輕蔑したりする方が滑稽なことなのだ。

　プラトオの理想國では、凡ての公務員は共同の建物のうちに住むでゐる。男でも女でもそうなのだ。彼等には家庭はない。家庭は公共的精神の敵である。男女の性的關係はそれ故に家庭において行はれるのではない。共同の營舍において行はれるのだ。こゝに一夫一婦的獨占的個人主義的結婚制度は不可能でもあり、また彼の正義の觀念とも相容れることはできない。彼の所謂婦人の共產制が考へられるのもこゝからなのだ。「これ等の凡ての女性はこれ等の凡ての男性にとつて共通でなければならない。そして如何なる女性も如何なる男性とも個人的に住むではならない。」彼はこういふてゐるのである。

　女性の共產はたゞ必要なことであるばかりではない。國家にとつて「最大の善」である。何故なら「財產と肉體と、そしてその他の一切のものの共通であることは」人々が金や、小供や、またはその他の諸關係についての利已的な面倒から離れて、快樂と苦痛とについての共同の感情を養ふであらうから。――そういつてゐるプラトオの言葉によつても分るとほり、彼の所謂女性の共產とは性的放縱の如何なる動機から出てゐるのでもない。公共と、從つて正義の立場からの產物なのである。

　女性の共產または公有は從つて小供の共產若しくは公有である。プラトオは女性とともに小供の共通または公有を要求する、財產上に誰れのもの、彼のものといふような所有權がないように、女性にも小供にも、誰れの妻、誰れの小供といふよう

なものはない。小供が生まれると保姆の手に移される。その親はその兒を知らない。親がその兒を知ることは偏愛の基だとして排斥される。兒は親を知らず、親は兒を知らないのだ。けれども親と兒の區別がないのではない。凡ての男女はその結婚の日から、實際の小供が結婚後十ケ月たつて生れても七ケ月たつて生れても、そんなことには關係なしに、それ等の生れるものを小供と呼ぶ。同じようにしてその小供の小供を孫といふ。そしてこれ等の男女が小供を産み始めてから産まなくなるまでの期間に生れた小供等を相互に兄弟または姉妹といふ。

性愛の自由は「共和國」の理想である。プラトオがモノガミストから攻撃されるのもそのためなのだ。彼にとつては性愛の制限はたゞ二つきりだ。一つは年齢、一つは等親の關係。親は兒を知らず、兒は親を知らないが、親とその子孫との間の性愛は許るされてはゐない。年齢のうへにも一つの制限がある。よき小供を生むためには性的相合は人間の成熟期においてなさるべきだと、ソクラテスのしたごとくに彼もまた考へてゐたのだ。その年齢は、女は二十から四十まで、男は二十五から五十五まで。男の方が十年だけ性生活の期間が長い。この期間は彼にとつては重要である。その期間外に生れた小供は不正規の小供として幼兒殺ろしをすることが必要だともいふ。また姙娠中に墮胎すべきだともいふ。それもたゞ法律違反といふような意味からではない。よき小供を要求してゐるからだ。プラトオが優生學的の思想をもつてゐたことは少しも疑ひのない事實なのだ。

この二つの制限のほかにはプラトオの理想國では性愛は一切自由である。女が二十、男が二十五に達した時は、親兒の間、または親と孫との間でない限り、凡ての男は他の如何なる女性とも性生活をともにすることの自由が許るされる。また凡ての女は同様にして他の如何なる男とも性生活をともにすることの自由が許るされる。兄弟姉妹の間でさへ性關係は自由である。勿論それとても彼の理想國の住民の一切に分たれた自由ではなく、兵士と事務員と二つの支配閥の間に與へられたことは彼の財産の共産主義におけるのと同一ではあるが、しかもその限りにおいては性生活はかくして一切自由である。就中彼の所謂よき市民、例へば戰爭やその他の公務について優秀な働きを示したものは、より多くの報酬や賞牌とともに、またより多く女性を抱擁することの自由さへも與へられる。またかくしてより多く女性を抱擁することの自由が市民等をして戰場やその他の公務における犧牲的行動をなすことの獎勵ともなると彼はいふ。

それゆえに彼の理想國では所謂一夫一婦の制が行はれてゐる

のでないことは勿論だ。女性は男性にとつて共有であり、男性は女性にとつて共有なのだ。けれどもそれだからといつてそこに群婚や亂婚が理想とされてゐるように考へたら間違ひである。プラトオの考は寧ろ一時的結婚制度なのだ。一定期間内の結婚である。戀愛の求むるまゝに婚し、その戀の衰へる頃には最早や夫婦ではない。だから姦通もそこには起るらしく思はれない。また離婚の問題も起るらしく思はれない。共和國のうちに離婚や姦通やについて何ごともいふてゐないのはこうした意味からであらうと思はれる。

七

共産主義的性生活のユトピアはノイエスの場合にも見ることができる。ヂョン・ハムフレイ・ノイエスは一八一一年ベルモントに生まれてエエルやアンダバアで神學を學んだ人である。それだけに彼の運動は最初は純粋に宗教的であつたがフウリエの影響をうけてから一つの共産主義運動にと代つた。そして紐育州のオネイダに一つの共産村を開いた。この村の住民は一八七四年には三百人で所有する土地は九百エーカアであつた。村民のうちには醫者もあり、法律家もあり、僧侶もあり、教師もあつた。そして彼等の共同事務は二十一人の常任委員によつて執行されてゐた。

彼等の共産主義は財産についてばかりではなかつた。プラトオのそれのように、人についても行はれた。私有財産が排斥されたように、そこでは一夫一婦制は個人主義的なものとして排斥された。

彼等の運動は最初に宗教運動であつたように、最後まで宗教的な立場を維持してゐた。彼等の二つの信條は至善主義と「相互批評」とのそれであつた　至善主義を奉ずる彼等は人間の罪業が拭ひさられるであらうことを理想とした。そしてこの境地に到達するために彼等の間では相互的に自由批評が交換されることを修養の手段とした。

彼等が一夫一婦制度を排斥したのはこうした至善主義の立場からであつた。彼等は性慾の放縱をいたく難んじた。性愛の自由を分つた彼等はその性愛の自由の前に「心の神聖」であることを要求した。そこに彼等の所謂「複雜結婚」なるものが行はれた。

複雜婚—— Complexed marriage ——とは一夫多妻、一女多男制の併用であつた。人々はある期間、若しくは往々にして生涯婚を實行した，それは勿論一種の群婚ではあるが所謂亂婚とされるものでないことは一般に認められたところ。小供はそ

こでは共有であつた。產兒はその離乳期とともにその母の手から離れて一般保育所に移される。そこでは性的關係も圓滿に行はれ。小供等の發育も、教育もよく行はれたといはれてゐる。

一夫多妻、一女多男の制度は一般に性的關係を亂雜にし、嫉妬心を挑發し、性的爭鬪を繁くするもののようにいはれてゐるが、オネイダの經驗は却つてその反對を證據立てた。

一女多男主義が今日尚ほ行はれてゐるところとして有名なのは西藏である、リバアスの記るしてゐるところによると、西藏では一女多男が一般の結婚制度であるが一人の妻にとつての相手方は多くは兄弟である。兄弟の幾人かゞ一人の女性と性的相合の關係を結ぶのである。また若し兄弟の幾人かゞそれ〲に妻女を迎える場合にはその各々の妻女について兄弟の全部が性的關係に入るのである。例へばこゝに三人の兄弟があつてそれが各々妻女を迎へたとする。その性的關係は次のようになつてくる。



だから一女多男はまた一夫多妻ともなるのである。そのうへに西藏では姦通といふ言葉がない。姦通することは何の罪惡でもない。却つて自分の妻女を他人に貸し與へることを吝しむものが不道德だとして非難される位ひである。それでゐて性生活においての爭が殆んどないとのことだ。オネイダ・ユトピアの理想はかくして西藏に今も尚ほ實在してゐるわけなのだ。

八

共產主義的性生活に行くべきか、若しくは一夫一婦制度を維持しなくてはならないか。今の私にはそれは問題ではない。或は一夫一婦の關係が人間進化のうへにおける自然の境地であるのかも知れない。プラトオのそれにしても一時的に見れば一つの一夫一婦制度だといふこともできよう。また一夫一婦制度にしても、若し離婚が絕對自由だとしたらそれは事實上一時婚でもあり、また共產婚だといふことにもあらう。かくして戀愛の自由と性的相合の自由とがその階調に近づいてゆくこともできないことはない。

けれどもまだ一つの問題が殘されてゐる。性生活がその自由をえた時に母性が如何なる關係に立つであらうかと云ふことである。母性愛については、モリスの無何有鄕見聞のうちに詳しく論じられてゐる。そこでは母性愛こそ女性の最高道德でもあり、また女性の本能的要求だともいふてゐる。

母性愛と性愛との關係はどうか。私はこゝにはこれを省略しておく。

大學騷動

ロシヤ大學改革運動史話

古市春彥

いとぐち

青年B、青年Aの若き妻に導かれて、青年Aの書齋には入つて來る。

B――そんなに取り散らかして、何をしてゐるんだい？

A――ロシアの學校騷動の歷史を書いてみようと思つてね。

B――今頃、どうして、そんなことを思ひたつたんだい？

A――どうしてもない。早稻田や東洋大學の今度の紛擾の經過をみてゐると、何だかしら、ロシヤの學校騷動を思ひ出したんだ。

B――ふむ、ロシヤの學校騷動に似たところでもあるのかい？

A――あるやうに思はれるよ。早稻田では、軍國主義的精神と排軍國主義精神とが闘つた。今迄日本には軍隊と緣のある學校騷動がなかつた。ロシヤにはあつた。從來日本には新舊思想的背景のある學校騷動はあまりなかつたが、ロシヤの大學騷動は大ていそんな種類のものであつた。それに、「現在」といふものに反抗する總てのものを「社會主義者」にしなければ氣の濟まない支配階級が、早稻田でも、東洋大學でも、反抗者を社會主義者にしてゐる所にも、今度の騷動の異色が認められる。それがまたロシヤ學校騷動の特色でもある。

B――さう云へば、さうも思へるが、ほんとうに彼等は社會主義者なのかい。君の所謂反抗者は？

A――どうだか知らない。或はさうかもしれない。さうでないかもしれない。僕が注意してゐるのは、それが果して社會主義者の仕業かどうか、そんなことではない。支配階級がこれを「社會主義者の仕業だ」と判斷し且つ宣傳した所がロシヤと似てゐるといふだけである。眞實はどうか知らない。たゞ支配階

級が社會主義者の仕業と觀、またさう宣傳するところに變つた所がある。

B――成程、それで君が今度の騷動に特別の興味を持つ譯だね。

A――特別の興味を持つといふ程のことでもない。たゞ「日本の學校騷動の內容も大分變つて來る」と思ひ、「ロシヤに似て來るらしいぞ」と思ふだけだ。ロシヤに似て來ると云へば、反抗者が社會主義者視せられ、また「社會主義者なるが故に」彼等に一種の制肘又は壓迫が加へられさうであつたことが、また今後さういふ思想的背景によつて生るゝ學校改革運動に加へらるゝかもしれない、或る種の力と改革者との抗爭、そこから生るゝ樣々な悲喜劇を想像してゐると、ロシヤの學校騷動を回想させられるのだ。それに今一つ僕の感興をそゝるのは、自由主義者――僕はさう思ふが、官憲又は舊思想者は社會主義者で、然もその宣傳者であると云つてゐる――教授連に、何等かの○○が加へられさうであることである。そんな點もロシヤのある時代に似てゐると思ふ。

B――新聞には、そんな教授や學生を檢擧するらしいと書いてゐたが、實際やる氣だつたらうか。

A――僕は警視總監ではないから、どうだか知らない。たゞ僕はそんな噂を聞いてゐるだけだ。ともかく思想が罰せらるゝこと位恐ろしい事はないと思つてゐる。思想を罰すると恐ろしい結果が生れる。ロシヤの學校騷動史を見てゐると、思想を罰すること、言ひ換ゆれば、思想の自由を許さないこと、何等かの力で思想を抑壓することが、如何に恐ろしいことであるかゞよく判る。

B――それで君は、日本に、ロシヤの足跡を辿りたくないと思ふのか。

A――さうだ。僕のやうな小心者は、ロシヤに似てゐると思ふだけでも身の氣がよ立つ。スペインの鬪牛は、赤いものを見れば、角を眞赤にして忽ち激怒するさうだ。ロシヤに似たものが生れて來ると、勇氣百倍して、○○する人は偉いものだと感心させられるが、僕は恐ろしい。

B――僕も今度の騷動には從來の昇格運動や單なる當局者排斥運動とは異つたものがあるとは思つたが、君のやうにロシヤの學校騷動のことを知らないから、別に大して氣にもとめてゐなかつた。然し今君の話を聞けば、何だか興味が湧いて來た。どうだい、一つ、君の知つてゐるロシヤの話を聞かせないか。

A――聞きたければ、話してもいゝ。然し君が思つてゐる程僕はロシヤのことを知つてゐない。たゞ一二冊の本を讀んだだ

けだから、少しも知らない人よりは少し餘計に知つてゐるだけだ。然し、どうせ、何か書いてみようと思つてゐるから、腹案を作るつもりで少し話してみよう。

大學騷動の發端

『コルツオフは、「ロシヤが、遂に、待ち望んだ自由の日を迎へ、その功勞者のために紀念碑を建設する時が到來するならば、最高所に、最初に建てらるべきものは、身にトウジョウカを纏ひ、然も全身鮮血を浴びて立てる大學生の像でなければならぬ」と云つてゐる。ロシヤの大學生が、ロシヤの解放のために、どれ程の貢獻をしたか、それは、人によつて議論の岐るゝところだが、然し、誰でも、大學生がロシヤ革命の先驅者であり、又、或る時は社會運動の中心であつたことは、否定することは出來ない。或る批評家は、「彼等大學生の高邁な理想と抱負、文化生活への熱き憧憬、社會正義に就いての堅き信念、若か若かしく、熱つい靑年の血潮は、ロシヤ國民の心臟となり、大ロシヤの腦髓となつた」と云つたが、永い間のロシヤの革命運動史上に於て、その或る時期に、太陽のやうに輝くものは、大學生の一群であつた。

『大學生が何故ロシヤ革命運動の先驅者となつたか？今そんなことを詮議する必要はない。僕は史實の二三點を話せばいゝ譯だ。

『ロシヤの社會運動が何時から始つたか？或人は一八五五年のクリミヤ戰爭を始期とする。或る者は一八二五年のデセムブリストの反抗を擧げる。ラポポールは「モスコーの專制政治がモンゴルの汗達によつて打建てられた權力の廢墟の上に確立せられた時に、革命の種子が、始めて、ロシヤの沃土の上にまかれた」と云つてゐるが、それ程に古いロシヤの革命運動史上に大學生が顏を出し始めたのは、十九世紀の中葉である。實はそれまでには、ロシヤには大學らしい大學がなかつたのだ。ロシヤ最古の大學と云はれてゐるモスコー大學は一七五五年に建てられたが、その內容は極めて貧弱なものであつた。ロシヤ最大の大學たるペトログラアド大學がニコラス一世によつて一八四九年に創立せられてから、キエフ、オデツサ、カザン、ハリコフ等の大學が出來たが、大學が大學らしい教育を始めたのは、まあ十九世紀の中葉以後である。だから、學校騷動が熾んに起つたのも、それ以後のことで、十九世紀の終りから二十世紀の始め頃までが、その焦點である。』

――少しかた苦しいが、背景になつてゐる時代に就いて話させてくれ給へ。

B——うん。

其の時代

「大學内部に於ける學生の改革運動は、一八七〇年代には、もう沸騰點に達してゐた。一八七〇年には、ロシアの革命運動はもう爛熟期には入つてゐた。専制政治の勝利を滿喫したニコラス一世が世を去つて、アレキサンダー二世の、即位當初の半可通の自由主義を棄てられて、反動政治がその猛威を逞ふしてゐた時分である。その反動政治の下から、「土地と自由」團が生れ、「地獄」團が生れ、テロリストが横行し、秘密結社、秘密出版は政府の嚴重な監視の眼を偷んで、ロシアのあらゆる社會層に浸潤してゐた時代である。スイスから歸つて來た大學生が、「人民へ」を叫んで、農村や工場に潜入してゐた時である。大學内では、スペンサー、ダーウィン、ミル、フーリエー、サン・シモンなどが賑かれて、ラッサール、マルクスが盛んに讀まるゝ時期であつた。パリ、コンミュンが大學生に大きい刺戟を與へた時である。クロポトキン、バクーニン、セエルニゼフスキイ、ラヴロフ等は彼等の明星となつて輝いてゐた時分である。大學生は、もうその時、革命運動の渦中にあつて、血氣に委せて、種々の過激な運動に、骨を彫り、血を流してゐた。

「日本でも、社會主義的思想は早くから大學の内で特に植ゑた。大正に入つてから、社會運動の潮頭に立つた者は、多く大學出身者である。知識階級排斥の聲が起らない前に、勞働者運動の指導者は皆大學卒業者であつた。在學中から社會運動に從事してゐる者も尠くはない。社會思想の研究、社會運動を目的として組織せられた團體はいくつもある。一面から觀れば、諸大學は社會運動者の孵化所だと云つてもいゝ。然し、内部に於ける改革運動は起つてゐない。社會思想が背景となつてゐる學校騒動は殆んどない。内部には改革を要するものがないのかもしれない。そんな點も十九世紀中葉頃のロシアの大學に似てゐるやうに思ふ。」

「學内の自治」の欲求

「簡單に云へば、「解放」「自由」が學生の内部改革運動の旗幟であつた。その具體化された要求が「學内の自治」である。集會と結社の自由、食堂と圖書室の自治、學生組合や學生相互扶助會やの組織等が、その綱目である。

「こんな要求を持ち出すと、大多數の大學は、一言の下に撥ねつけた。こんな要求を容るゝのは「危險だ」と云ふのだ。たゞ一個所だけ、キエフ大學がこれを許した。時勢の力でもあり、

また熱心な運動の結果であるとも見られるが、當時のキエフ大學評議會の議員の「寛大さ」の賜だと謂はれてゐる。

『キエフ大學で、此の學生の自治が許されると、彼等は先づ一番に、社會事業の一として、ロシアに於ける最初の日曜學校を始めて、少年の教養に着手した。それから、各種の徒弟講習會などを設けて、下層階級の子弟の教育を始めた。「民衆の教育」といふ、彼等の主張の現はれである。然るに、當時の政府は、「危險な思想を宣傳する惧れがある」といふことで、學校や講習會の閉塞を命じ、學校の設備は一旦政府に沒收した上で、教會に下附して仕舞つた。それから、こんな學生の社會事業ばかりでなく、大學當事者が許してゐた、各種の學生の自由をも奪つた。

『今一つ、キエフの大學生は、集會結社の自由が許されたので、ウクライナの住民に對して國民精神を鼓吹し、且つその獨立運動を援助する目的で、ウクライナ學生組合を組織して、宣言書を發表し、着々實際運動の計劃もたつてゐたが、これも亦政府から禁止せられた。組合は解散させられ、宣言書は大學の構内に跡を止めないやうにされた。此の運動は、學生が大へん力瘤を入れてゐた仕事でもあり、また一般の民衆も歡迎してゐたので、此の宣言書を剝いで仕舞へと命令せられた小使のお爺さんは、これを剝ぐ前に、大學の構内や、街路にまでも駈け出して行つた、

「オイ、皆、早く來て讀め！ ウクライナの獨立運動宣言書がもう剝かれるぞ！」

と大聲に怒鳴り歩いて、わざと、澤山の人に宣言書を讀ませてから、剝ぎ取るといつたやうな按梅であつた。

『此のプル、ウクライナの主唱者の一人であつたランドラスキイといふ大學生は、一八七四年に、捕へられて、ソロスキイの牢屋に投り込まれた。此の一八七四年のキエフ大學の閉着以來、ロシアの各大學內での紛擾は、殆んど慢性的になつたと云つてい丶。

『一八七八年、カルコフ大學の學生が、自治獲得のためにやつた示威運動、それに伴ふた紛擾は、ロシアの大學騷動中で、最初の大仕掛なもので、此の騷動を鎭壓するために、一個中隊の軍隊が繰り出された。これが大學の構内に軍隊が侵入した最初である。これから後大學生と軍隊との大學構內に於ける衝突が繰り返され、大學騷動は更に發展して、次第に市街戰化するに至つた。

『當時の司法大臣だつたプレノフは「これ等の學生運動は、不幸にして、健全な精神に基いてなされるものではない。墮落し

た自由主義者の妄動だ。今頃はやる大學騒動は、みんな不良少年の仕業に過ぎない」と云つてゐる。或る批評家は、これを評して、「ロシアの官憲はこの學生運動の眞相を少しも諒解せず、また運動の中心思想、學生の要望に就いて、全然諒解がない」と云つてゐる。

集會禁止

B――そんな司法大臣は何處にも居るものと見えるね、

A――ロシアには確かに居た。

B――ロシアだけかい。

A――ロシアだけでもあるまい。まだ他にも居るだらうよ。「歐米の社會思想にカブれて、輕擧妄動をする者は、容赦なく檢擧すべし、」なんて訓示する大臣は、大正の今日は居ないかもしれんが、昔は何處の國にも居たものらしいよ。

B――それで、そんな大臣連がどんなことをしたんだい？

『此の不良少年を退治るためには、自治を許すどころか、極力壓迫して、手も足も出ないやうにするほかないと思つたのさ、それで、圖書館、飲食店、音樂堂、劇場、その他苟くも公衆の集合する場所は、學生に「惡影響を及ぼす」といふ理由で、こんな場所に、學生の出入することを絶對に禁止し、また、その性質上、目的 方法の如何を問はず、一切の學生の集會を嚴禁したんだ、

B――成程、早稻田でも、當時集會一切嚴禁といふことになつたさうだね。それで、學生は承知したのかい？

A――承知どころではない。内部運動は益々亦熱して行つた。同時に、内部の運動を阻止せられ、集會さへも禁ぜられた學生はその鬱憤をもらす爲めに、益々外部の運動に熱中するやうになつたんだ。時のロシヤ政府は。ゴム毬は力を入るれば入る丶程、反撥が強いものだといふことを知らなかつたと見えるね。

A――さうだ。彼等は益々力を入れてゴム毬を叩きつけたんだ。

『政府は一切の社交と集會を禁じたゞけではまだ足りないと思つた。次には學生の共同生活の解散を命じた。日本でもよくあるが、△△縣、○○社などと云つて、例へば出身地、出身中學別だとか、また或る主義思想だとかの關係で、學生がグループを作つて共同生活をしてゐる。あれだ。經濟上の都合とか、趣味や思想の一致などから、數人或は十數人の學生が一團を作つて、一軒の家で共同生活をしてゐた。これも學生を「惡化」すると云つて、皆解散を命じた。その代り、一種の學生監禁所とでも謂ふべき寄宿舍を澤山設けて學生を收容し、政府の指揮の下に、大學の當事者が直接監督の任にあたつて、學生の生活を

嚴重に監視することになつた。

『ブレーフの記錄によれば、「政府は大學生の寄宿舍及び家庭內に於ける生活狀態を調査し監視するためには、最善の努力を拂つた」んだ。學生を監視するために、政府のスパイが、敎室にも、寄宿舍にも、街頭にも、家庭にも、凡そ大學生と名のつく者の居る所には、必ずその陰慘な白眼を輝かすやうになつた。「これまで多くの自由主義者を出した、下層階級出身の者は、大學には入學を許可しないやうにといふ戒告が大學當局者に下された」のだつた。

『凡そ如何なる外敵よりも「內敵」（社會運動者、殊に大學生）を怖れたアレキサンダー二世は、彼の此の內敵を斃すためには、どんなことでもした。彼は曩に六人以上の民衆の集會を禁じたが、大學生はそれよりも今一人少く、五人以上集會することは絶對に罷りならぬといふ勅令を出して、その反則者を嚴罰に處した。ロシヤでは、何か不都合があつて、大學を退學させられた者でも、一二年のうちには復校が許されたものであつたが此の集會に關する勅令の反則者は、どんなことがあつても、絶對に復校を許さなかつた。

過當な壓迫

『集會禁止、共同生活解散だけでもまだ安心が出來なかつたと見えて、アレキサンダー二世は、一八八七年、こんな勅令を出して、大學の自由の上に最後の打撃を加へた。その勅令によつて、

一、各大學及び高等の諸學校には、各々一名づゝの「監察官」が置かれた。この監察官は、大學の學務に就いて、何等責任のある地位には居ないが、恰度、監獄內に於ける看守のやうに、學生に對して一種の警察的監督權をもつてゐる。彼の大學生に關する偵察の結果は、細大洩れなく、其の筋に報告せられ、殊に政治上、社會上、自由思想を抱いてゐる者の動靜は、一々詳細に報告せられた。彼は寄宿舍や家庭內に於ける學生を監視し、その日常生活を偵察する役目をもつてゐた。然も此の監察官には、大學及大學生々活には、殆んど何等の理解ももたない、老朽の軍人や、警察官の古手やが任命せられた。彼は亦平服の憲兵や角袖やを使ふ權限が與へられてゐた。學生服を着た憲兵や巡査は、各大學に水も洩らさぬ網を張つてゐた。

二、普通市民や農民、即ち下層階級に屬する者の子弟は、事實上、絶對に入學せしめないことになつた。これは、前にも云つたとほり、此の階級から多くの「自由主義者」が輩出したからである。

三、凡そ學生は、如何なる時、如何なる場所でも、必ず制服制帽を着用してゐなければならぬ。これは、監察官が學生を監視し、禁止の場所に出入したり、示威運動に參加したりすることや、その他一切の學生の動靜を看視するに、便宜なためである。

四、從來は、官吏を志望する者だけが、國家試驗を受くるだけで、一般の學生には試驗がなかつたが、今後は、全ての學生が嚴重で煩雜な試驗を、然も頻繁に受けなければならなくなつた。これは、學生を試驗責めにするためである。學生が試驗に追はれ、その準備に忙殺されて、教科書以外の讀書をしたり、學生運動や社會運動やに參加する餘力のないやうにする爲めであつた。

五、從來實施せられてゐた學長の互選制度も廢止せられ、政府が直接任命することになつた。互選制度の下では、自由主義に同情ある學長が選擧せられて、政府の命令が徹底しなかつたり、勅令が充分の效果を上げなかつたりするからである。

『從來とてもさうであつたが、この勅令で、大學は徹底的に壓迫された譯だ。

B――それで學問の權威とか、大學の自由とかは、全然蹂躙せられた譯だね。然しその勅令は效果があつたのかい？

A――監察制度によつて、一時的には學生の運動を防止することは出來たやうだが、やはり學生には反抗する力があつた。試驗責めも餘り效を奏しない。彼等は前よりも精出して學校の學科を勉强した代りに、社會問題の學問的研究も一層深くなり忙中の寸暇を偸んでやる內外の運動は、機敏で、激烈になつた。

B――試驗責めだとか、學長互選制度とかは、日本と反對だね。

A――試驗責めといふ點では、近年までは同じだつた。今でも或はさう云へないこともない。だが、運動がましい事を好まないのは同じだ。學生が學業の餘暇で何か社會運動でもすると「學生は學業に專心なるべし」といふ訓示が出たりするからね。大正四年頃京都大學の學生が寺內の反動政治に反抗して、政治演說をすると、「學業懈怠」といふことでお目玉を頂戴したことがあつた。あの時は當局者は放校するとまで敎圍いたものだ 互選制度も、京都大學が元祖だが、これも澤柳政太郎のデスポチツクな態度に反抗して、教授や學生が月餘に亘る排斥運動の結果贏ち得た慣例だ。だから何か事が起つた際には、これ等の制度や習慣は極めて力の弱いものであることが證明せらるゝよ。根本の精神は當時のロシヤに少しばかり毛の生えた位のところだから……。

B——それからどうなるんだい？

A——これからが大學騷動の本舞臺だ。いろんな事件が起つて來るよ。だが、少し咽喉が渇いて來た。どうだ。ロシヤ流に紅茶でも飲まうか。

B——よからう。

血の記念祭

『一八九九年の二月八日はペトログラード大學の創立第五十周年の紀念日であつた。お祭の多い、年中何かお祭ばかりしてゐた帝政時代のロシヤでも、此の日は、大學の年中行事中最大のお祝ひ日で、例年いろんな催しがあつて、學生は此の日一日中無禮講の底拔け騷ぎをするのだ。世界で大學祭の一番盛んなのは、劍橋の紀念日だと云ふことだが、日本では一高が親玉だ。ペトログラード大學のお祭も、それに匹敵するものらしい。奇拔な假裝行列がある。珍趣向を凝らした見世物、元氣のいゝ演説會、大はしやぎの會食、底拔けの懇親會、學生連の、若々しい元氣が一番よく發揮される日だ。だが、十九世紀の中葉以後先から話した樣な、五人以上の集會も禁止せらるゝといふ時勢になつてからは、紀念日も昔の紀念日でなくなつた。殊にフエトローフアと謂ふ女の大學生が、或る城砦内で、一士官に凌辱せられた爲めに、自ら火中に投じて自殺した事件があつた際に學生連が一般市民や勞働者と一つしよに、開設の大示威運動をしたことがあつてからは、一層、學生の集合を嚴重に禁止したので、此の頃の紀念日は、講堂で威めしい紀念式といふものがあるばかりで、以前の樣なお祭騷ぎは禁止せられてゐた。

二月八日の數日前、ペ大學の總長は、紀念日を利用して、學生が示威運動でもやり出しては大變だと慮つたのか、

『第五十回紀念日に、大學に於ける紀念日式以外に集會をなし、又は騷擾を起したる者は、直ちに捕縛せられ、シベリヤに追放せらるべし』

といふ命令を出して、學生を威嚇した。ところが、此の威嚇が少らず學生を憤慨させた。その學生の反感が、威めしい紀念式場で爆發した。式辭を述ぶべく總長が登壇すると、滿堂の學生はワーッと鬨の聲をあげた。拍手の音、罵詈の聲、足踏みの響、式場は蜂の巢を毀したやうな混亂に陷つて、總長は一語を發することも出來ないで、スゴ〳〵と壇を下るほかなかつた。それでも、國歌だけは最後に合唱せられた、然し、それも、機械的に、力なく唱はれるに過ぎなかつた。

『此の日、學生達には何の計劃もなかつた。騷擾によつて總長に復讐することが出來たので、式らしくない式を終つた。彼等

は、それ〴〵家路に就くために、冬宮と向ひ合つて建てられてゐる大學の大講堂を靜かに出て行つた。校門に出てみると、意外にも、宮殿の方に渡る橋の上は、騎馬巡査によつて物々しく護衛せられてゐた。學生達には全然豫期しなかつた光景である。行手を遮られた學生達は、氷の張りつめた河上の道を歩るいて歸らうとして、その方に進んで行つた。ところが、今朝まで嚴丈だつた河の上の氷は無殘に破壞せられて其所も通行が出來なくなつてゐた。先頭に進んでゐた一人の大學生は、警官隊の指揮者に訊ねた。

「一體、どうして私達をこんなに包圍するのです？」

指揮者は、何とも答へないで、おし默つてゐた。

『次第に人數を增して來た學生隊は、あと戻つて今度はほかの橋の方に進み始めた。すると、二人の騎馬巡査が、彼等の本隊の群から離れて、學生隊に挑戰するかのやうな態度で、突進して來た。學生達はカッとなつた。雪の彈丸が騎馬巡査に向ふて飛んだ。號令一下、本陣の警官隊は、何の警告もなく、學生や附近に居あはせた通行人に向つて突撃して來た。彼等の手にあつた革の鞭は、空中に閃めきながら、恐ろしい唸りをたてゝ、學生や民衆やの、頭と云はず肩と云はず、急霰のやうに打ち下ろされた。

同盟休校・追放

『事件の報道は電光のやうに全ペトログラードに擴がつた。その翌朝、大學生大會が開かれて、決議文が議決せられた。

政府が、學生の人格を無視した、不法な官憲の干渉を中止することを聲明する時まで、吾々は同盟休校を繼續する。

『學生の激昂は最高調に達した。教授の大部分も亦學生に味方して、學生のストライキが公表されると同時に、問題が圓滿に解決するまでは講義をしないといふ申合はせをした。二三人の教官は、警官に講堂を護衛させて、講義を始めたが、聽講する學生は十二三人に過ぎなかつた。大學構内は、輕騎兵で埋まるほどであつた。それでも、學生大會の拍手の音、激越な演説の聲が、ひつきりなしに大講堂を搖がしてゐた。

『未曾有の全大學の教授と學生の同盟休校は全ロシヤの視聽を鍾めた。殆んど全國の高等程度の各學校の學生は、同情休校を宣言した。全國の警官隊は是等の各學校の周圍に集つた。三十二個の學校は彼等によつて包圍せられた。その重圍の中で、學生大會が毎日續いた。印刷物は彈丸となつて全露に撒き散らされた。

『各大學は遂に學生の大部分（カルコフ大學は全大學生）を擁

校に處して、或る者には即日歸鄉を命じ、或る者には邊陬の地を指定して、其所に退去すべきことを命令した。學生達は此の處分や命令を不當とし、或は旅費のないことを口實にして、命令を聽かなかつたので、政府は憲兵や巡査に命令して退去を強制した。それから、學生を護送する馬車は、朝から晩まで、每日停車場と學校の間を往復した。

『政府は此の大學騷動の原因を調査するために特別調査委員會を設けた。學生は勿論、一部の社會でも、此のことを喜んだ。委員會によつて事件の眞相が明かになり、政府が學生の要求する所を諒解してくれるだらうと思つたからである。此の期待が政府に對する反感を緩和して、彼等は、三月一日、ペトログラードで全國學生大會を開いて、直ちに休校の同盟を解くことを議決した。

『此の調査委員長には、時の陸軍大臣バノフスキイ中將が任命せられた。彼は一介の武辯に過ぎなかつたが、極めて率直で、公平な人物であつた。彼は適任者として歡迎せられた。然し此の特別委員會は、公平無私な立場で、學生騷動の眞相を究明して、公平な處置をする目的で作られたものではなかつた。その使命は、政府の司法政策、言ひ換ゆれば、如何に彼等を處置するかを調査するために設けられたものであつた。ところが、バノフスキイ將軍は、政府の眞意なんかお構ひなしに、出來るだけ忠實、公平に事件の眞相を調査した。その結果、將軍は、學生が革命を目的とし、また反抗せんための反抗として、此の騷擾を起したものでなくて、彼等の反抗は、官憲の不當なる壓迫に對する反抗であり、且つ決して無理からぬ反抗であると信ずるやうになつた。そこで、彼は學生の態度を是認し、官憲の不法を認め、政府のやり口には全然反對であるといふ意見を發表した。そしてザアーに、「學生に自治を許すべし」といふ意見書を奉つた。將軍の態度が官憲に懌ばれなかつたことは云ふまでもない。彼の報告書は「不法な文書」として取扱はれ、將軍以下の調査委員、調査に關係ある一部の官吏、調査を補助した學生等は、勅命によつて、譴責又は罰俸處分を受けた。

『調査會は學生の期待を裏切つた。既に放校せられた學生の復校は絕對に許されないことも判つた。そこで、學生はまた同盟休校を宣言したが、一度授業開始を宣言したものゝ、實際は、多くの大學がまだ開講してゐなかつたから、今度の宣言は、たゞ形式的の宣言に過ぎなかつた。

『三萬五千餘人の男女の大學生から成る、全國的の大同盟休校は、夏が來ても熄まなかつた。その間、大學からは、毎日、一團の大學生が、輕騎兵や巡査に護衛せられて、停車場に送られ

た。停車場では、これ等の學生を輸送する列車が出るごとに、インテリゲンチヤの感激にみちた送別の歌が合唱せられ、萬歳の叫びが擧げられた。この群の中にゐることを見出された學生は、直ぐに捕へられて、次の列車では、同じく遠地に送られるかくて眼ぼしい學生は殆んど全く追放せられた。學生は段々反抗の力を失つた。徹底的に大學生を援助する市民はさう多いものではない。血氣な大學生が放逐されて仕舞ふと、大學町は死んだやうにヒツソリなつた。』

恐ろしい勅令

B――それで騷動は終つたのか？

A――終つたやうで、終らないやうなものだ。肉にありついた虎は、血の最後の一滴までも舐め盡さないでは措かないものだ。アレキサンダー二世は、半死半生になつた學生の最後の息の根を止めるやうな勅令を出した。

B――どんな勅令だ？

A――軍隊に懲めさせようといふんだ。

B――と云ふと？

A――勅令の大要に曰く、

「大學及び高等程度の學生にして、學校の内外を問はず、また、その如何なる理由によるとを問はず、騷擾を惹起し、或はこれに參加し、または就學を拒み、徒黨を作つて決議をなすが如き行爲ある者は、陸軍と司法の當局から特派せられた二名の官吏、及び一名の輕騎兵の臨席する地方教育委員會の決議により、二年以上三年以下の兵役に服せしむる。此の刑罰法は、年齢の如何、健康狀態及び體力並に家庭の事情の如何に拘らず、全ての反則者に之れを適用する。また此の法の適用による決定には、上訴、その他如何なる種類の救濟方法も許されない。」

と、いふんだ。

B――では、未成年者でも、病人でも、片輪者でも、兵隊にやられるんだね。

A――さうだ。誰れ彼れの容赦はない。高等程度以上の學生で、地方教育委員が「不穏」と認めたものは、二年以上三年間軍隊に懲役にやられるんだ。

B――成程ひどいなあ！夫で世間の識者は默つてゐたのか？

A――專制治下だ。仕方がない。

B――皆泣き寢入りか？

A――いや。反對したものがある。それが軍隊だから面白い或る軍人は此の勅令は無用に學生を苦しめ、徒に貴重な勉强時間

を容變させるといつて反對した。然しそれは極く少數の具眼者だけで、反對者の多くは、軍隊自身のために反對したのだ。此の勅令は、軍隊を一種の監獄たらしむるもので、軍人精神を墮落せしめるばかりでなく、軍規軍律を嚴守する上にも、少らぬ不都合がある。その上、入營した學生の自暴自棄の態度や動作が、軍隊内の秩序を紊り、また學生が抱いてゐる自由思想、社會思想が一般の軍人に感染するからいけない、と云つた樣な理由で反對したんだ。

B――それで、勅令はどうなつた？

A――どうなるものか、發布の日から施行せられて、ずつと暴威を逞うしたんだ。

B――學生の反對運動は起らなかつたか？

A――二月からの騷動で、元氣のある學生は皆放校せられ、大學町から追放せられて、無氣力な學生ばかりが殘されたんだから、暫時は目ぼしい反抗運動も起らなかつた。反抗すれば、すぐ軍隊にぶち込まれるんだから堪らない。二年ばかりは、表面無事で過ぎた。

B――ぢや、その後また起つたのか？

A――さうだ。

教授の抗議免職放逐

『一九〇〇年の二月十九日、ペトログラード大學の學生は、アレキサンダー二世の農奴解放三十週年紀念の感謝祭を催した。知つての通り、アレキサンダー二世は即位匆々農奴を解放した。民衆はその自由政治を謳歌した。然し農奴解放は期待した程の喜びをロシヤの民衆に齎らさなかつた。そればかりではない。それから後のアレキサンダー二世の反動政治は、少らぬ民衆の反感を買つた。だから、農奴解放の紀念祭と云へば、何かそこに事變が起りさうな氣が誰にもした。學生の胸裡には、過去二年間虐げられて來た鬱憤が將に燃え上らうとしてゐた。當局もやめさせたかつたに違ひない。然し農奴解放の紀念、アレキサンダー二世への感謝祭と云へば、止めさせ度くも、止めさせる譯には行かない。

『感謝祭はカザン寺で型の如くに莊嚴に執り行はれた。式がすむと、學生達は寺院の正面に擴がつてゐる廣庭に降り立つて、『我等をして歡喜せしめよ！』の歌を唱ひ始めた。その歌詞のうちにある、「共和政府萬歲！」の數語は、官憲の耳を針のやうに衝きさした。

「その歌をやめろ！その歌をやめろ！」

一人の警官が叫んだ。

然し、若かい血の迸るやうな熱狂的な合唱は、「共和政府萬歲！」を叫び續けた。

忽ち、一隊のコサック騎兵が、街路の兩方から突進して來た。革の鞭は、疾風に吹き捲くらるゝ木の葉のやうに、學生の頭上に亂れ閃めいた。何の武器も持つてゐなかつた學生達は、雪丸や上靴で對抗するほかなかつた。大亂鬪が開始せられた。

『亂鬪の最中に、何處からともなく、忽然として赤旗が持ち出された。それを見て、官憲は怒髮天を衝いた。ロシヤの官憲は赤い布に對しては、スペインの鬪牛よりも、もつと敏感で、より猛烈に昂奮する。

B——それは、ロシヤの官憲だけかい？

A——シツ！　シツ！


『忽ち、一人の將校のピストルの先から赤い閃光が閃めき去つた。亂射の音！、叫喚！　罵聲、怒聲、平和なるべきカザン寺の廣場は、目もあてられない修羅場と化した。

『報道はロシヤの四方に電波した。モスコウ、キエフ、ワルソウの各大學でも、その翌日から、學生の示威運動に伴ふて軍隊との衝突が始つた。

『恰度、その頃、トルストイの破門が宣布せられて、モスコウは新しい示威運動の動機を與へられた。トルストイは革命運動には反對した。然し民衆は彼を愛慕してゐた。當時は、ロシヤ正教會の權威は殆んど地に墮ちてゐた。モスコウの民衆は、新しい宗教を求め、新しい思想を渇仰してゐた。そこに、破門の報が傳はると、學生達は、トルストイを無理やりに街路に擔ぎ出して來た。民衆は忽ち彼の周圍をとり圍んだ。「トルストイ萬歲！」の叫びが、モスコウを震撼した。政府は此のトルストイの破門によつて、別な、新しい脅威を受けたのである。

『全ての智識階級は學生の味方であつたが、殊に大學教授は、熱心な後援者であつた。文部、司法、內務、陸軍の各大臣に宛て、大多數の大學教授が署名した意見書が提出せられた。その中には、自然科學、文學、公私の法學、其の他各科の學問の權威者が名を連ねてゐた。意見書には、學生は已を得ざる唯一最後の手段として騷擾を起したこと、學生は四肢を縛られたも同然、何等研究の自由のないこと、曩の緊急勅令が此の騷擾の原因であること、勅令によつて處罰せられた學生は、仲間の學生からも、一般社會からも、一種の殉教者を以て遇せられ、處罰は何の効果も擧げてゐないこと、速かに勅令を停廢して騷擾の根本原因を芟除すべきこと、研究の自由、集會結社の自由を與へて學生生活の安固を圖るべきこと等が力强い文章で陳述せられてゐた。

『曩に此の勅令が發布せらるゝと同時に、政府は自由思想を抱



決して一時の抑へ藥にあらず
ワキガと汗止の良効藥
治療適確
レート藥用クレームは世界的良効藥にして如何なる難症のワキガをも確實に治療するは多數實驗者の礎狀之を證明す。又夏季の汗止に偉効あり。
定價 一瓶 金壹圓（郵税共）
一瓶にても送附
毛髪を美化する
最新式煉香油
レートポマード
硬毛もスナホにし品位ある整髪を自由ならしむ
Lait
POMADE
HIRAO SAMPEI SHOTEN
發賣元
本店 東京市日本橋區馬喰町一丁目
支店 大阪市東區南久寶寺町四丁目
レート化粧料本舗 株式會社平尾賛平商店
本店 東京振替六六六番
支店 振替大阪四四八〇番

UNIVERSAL ELECTRIC BELT

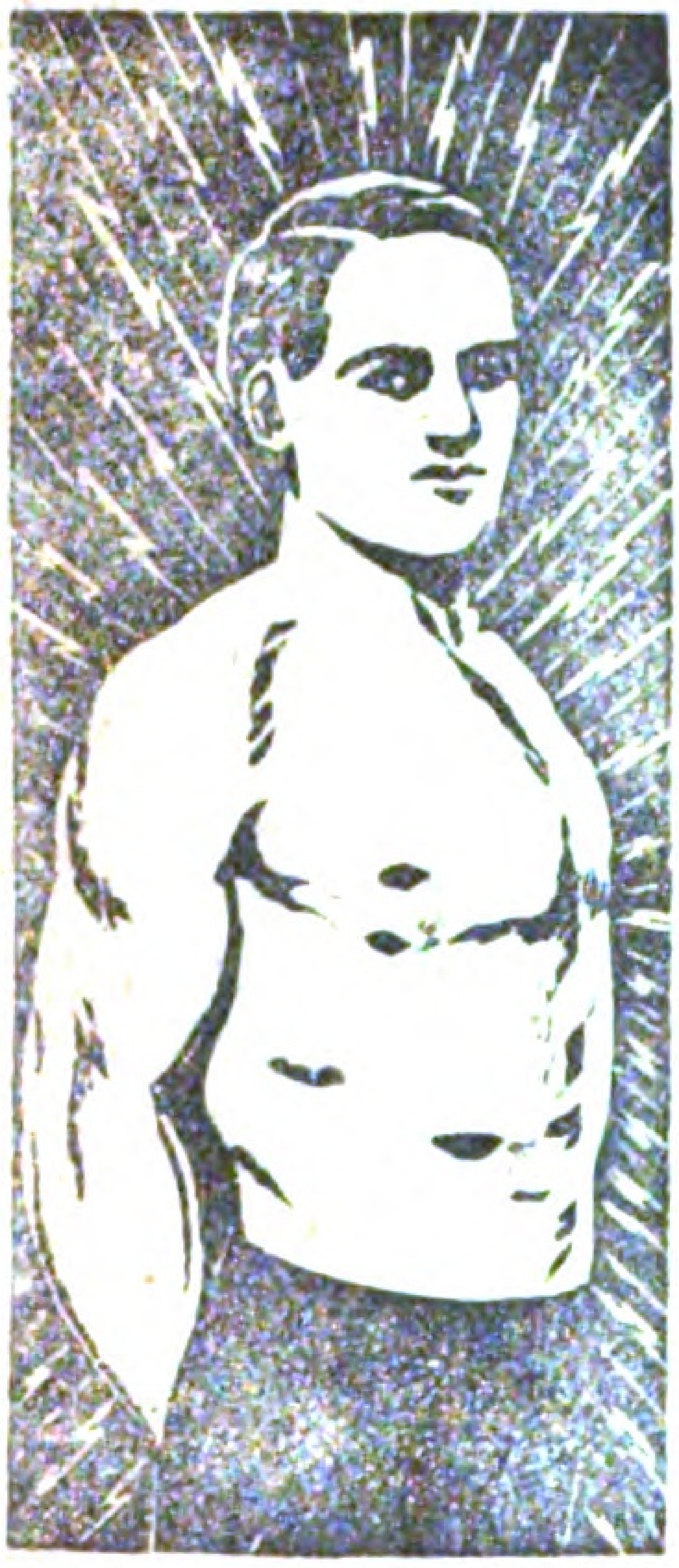
Most modern apparatus for the cure of disease and restration of vital strength.

英國電氣學者 ジョン、レビス醫學博士創製

最新發明 英國式治療法 ユニバーサル電氣帶 新發賣

卓効病名 神經衰弱、不眠、消化不良、内臓諸疾患、頭痛、便秘、神經痛、リユーマチス、脊髓病、中氣、全身虚弱、營養不良、遺精、夢精、早漏、陰萎、婦人病一切。

吾々の身體は**エレクトロン**（電子）の集成である事を電子論によつて證明された、吾々の神經は一種の電氣の作用である事も又說明され、胃腸の消化作用は電氣**イオン**の方則によつて立證さるゝ事となつた、我々の身体の微妙なる感覺は電氣感應の作用であり人類に陰陽あり同性相反撥し、異性相吸引する又人体電氣の存在を示す有力な證據である神經が衰弱したり、人体が疲勞したり胃腸の消化作用が不充分になつたりするのは恐く人体電流の不足に歸因すると云ふ論據によつて英國の碩學ジョン、レビス博士は人体内に於て發生され且つ消耗されつゝある人体電氣と殆んど同性質の電流を外部より補給すれば必ず有効なるべしとの意見により人体に必要なる電流供給裝置を作成して幾多の實驗を行ひしに非常なる卓効を奏した、其主なる効能は神經系の疾患で本裝置を使用すると如何に難症の神經疾患も必ず全治する事を確めた、英國に於て今回之れを**ユニバーサル**電氣帶と命名して發表した、本裝置は英國皇室に於て多數の御使用を賜はり今や英米佛の上中流社會一般に恐ろしき勢力を以て賞用されて居る弊商會主伊藤賢治今回英國より歸朝の際之れが製造販賣權を得て發賣する事になつた、本裝置は使用簡單、電燈線不用、電流なき所にても晝夜何時にても使用、効果偉大、實に理想的の最新發明品である。



說明書要求あれ

定價
一號（輕症用）一具 金拾五圓
二號（普通用）一具 金拾八圓
三號（慢性用）一具 金貳拾五圓
送料各五拾錢

東京市本郷六ノ五（帝國大學赤門前）

發賣元 **ラヂオ電氣商會**

電話小石川局六二一四番
振替東京四八〇七番

勞農ロシア三十詩集　尾瀨敬止譯

（最近の詩集で一番よく賣れる書）

勞農ロシア詩集

（四六判上製）

定價二圓

送料十七錢

プロ文學の最高權威

プロレタリア文學とは何か！ソビエツト・ロシアの大地に深く根ざした人間の深い感激が靜かに深く響いて來る、勞農の新詩人世人の心臟を貫くが如き激情が、我々に何を齎らすのであるか、安價なプロ文字に「耳慣れ」「見慣れ」た我が國人たちには、こんな深刻な「人間の聲」があるかと思はしむる程、深刻な人間性を帶びた純眞の叫び聲である、革命の叫びである、我青年たちが本書を競ひ讀むのは何故である？

新ロシア青年革命の叫び

四版

いてゐるといふ嫌疑のある教授を大學から一掃する方針を立てて、多くの有爲な教授を馘首した。此の政府の大學に對する不當な干渉、大學に於ける學問の自由を奪ふやうな專恣に對して憤慨した心ある教授連は、自ら進んで職を去つたが、政府に迎合する御用學者の一群は、學生や同僚の進退を冷眼視しつゝ平然として大學に留つた。彼等の多くは、一躍して過當な優位に据えられ、不相應な優遇を受けて、得々としてゐた。

『默つてゐてさへ此のとほりだ。先の意見書が提出せらるゝと政府は男女の大學及び高等程度の學校全部に休講を命じ、意見書に署名した教授連を、その寢込みを襲ふて逮捕した。そしてペトログラード始め各學校の所在地から三年間の追放に處したカザン寺前の學生の示威運動の際に、群集に混さつて、たゞ見物してゐただけの二人の有名な教授も、そのことの爲めに追放の刑に處せられた。

『第二の意見書がザアーに捧呈せられた。歴史家のミリユコフはその首謀者として投獄せられ、マキシム・ゴルキーも自由主義の教授や學生に同情して論文を發表したことによつて捕縛せられた。普通の、適法に發行せられた、刊行書でも、單に學生に愛讀せられ、又は學生の書架に置かれてあつたといふことだけで、「不隱文書」と見なされて、發賣頒布を禁ぜられた。』

B――さうなると、まるで氣狂ひだね。

A――さうだ。氣狂ひ以上かもしれない。氣狂のやることが成功する譯がない。政府はこうして社會思想や社會運動に對する政策を誤つたんだ。こゝに、君に一つ注意して貰らわねばならぬことがある。ロシヤ大學生の學内運動は、初め自治を求むるものであつた。それが許されないで壓迫に壓迫を加へるので彼等の思想は益々矯激になり、改善から改革に移り、改革から革命と、史家の形容詞が變つて行かざるを得なくなつたとだ。內部で壓迫せられた鬱憤が、外部へハケ口を需め、「人民へ」の運動が益々盛んになり、テロリズムが暴威を逞うするに至つたことだ。

『大學内には常置の實行委員が設けられ、彼等委員は外部の社會革命を企つる諸團體と連絡をとり、內外呼應して政府への反抗を續けるに至つた。勞働者は公然と學生の示威運動に參加するやうになり、學生の主宰する秘密出版所や秘密結社は益々猛烈に活動するやうになつた。

『無抵抗主義のトルストイ翁も、遂に堪忍袋の緒をきらして、彼の有名な書翰をザアーに送つた。ト翁が逮捕を免かれたのはザアーが全國民の猛烈な忿怒を愼れたからであつた。

ペトロヴス・デー

『その翌年即ち一九〇一年の三月にも同じ樣な騷動があつた。それは女大學生ペトロヴスの追弔會に端を發してゐる。三月四日、大學生の一群はカザン寺の廣場に集つた。例によつて警察

は解散を命じ、例によつて兩者間に衝突が起つた。

『當時の警視總監クライグヘルスは、自ら駿馬に騎つて出陣した。學生の勢ひがなか／＼熾んなことを観た總監は、

「君等のやり方は手溫るい、片つ端から叩き殺して仕舞へ」

と命令した。總監の命令に勢ひづけられた警官連は、拔劍して、學生の群に亂入した。

『そこを適々通り合はせた政府の顧問官ウイゼスキー侯は、此の慘狀を見かねて、

「男學生は仕方がないが、力弱い女學生を虐めるのは可憫さうぢやないか」

と、忠告を試みたが、血を見た猛獸になつてゐる總監は冷然として言ひ放つた。

「あなたには關係のない事です。默つてゐて下さい。なあに、女學生と云つても、淫賣みたいな奴等ですよ」

『數時間の亂鬪の後、死傷者五名を出し、男學生四十一名、女學生百二十八名を捕縛して、警官やコサック兵は凱歌を上げたそして警官は女學生の着物をみんな剝ぎとつて、丸る裸のまゝで留置所に投り込んで仕舞つた。ウイゼムスキー侯は學生に同情したと云ふ理由で、東部總督府に左遷せられた。

『三月十七日、大學生は再び政府に抗議する爲めに、示威運動を起した。參加學生約三千人、多數の一般市民と勞働者とが參助援した。今度は彼等の運動はやゝ組織的になつてゐた。總勢は五組に分たれ、各組には赤旗を持つた指揮者がゐる。その一部は銃劍をつけて武裝してゐる。

『當局はコサック騎兵一中隊を派して解散させようとした。激烈な市街戰が始つた。數時間の戰鬪の後に、十數名の死傷學生と五百名の捕虜とを擧げて、コサックは再び凱歌を奏した。

『越えて三月二十三日、こんな檄文が市内至る所に張られた。

「明早朝、市民諸人は各自武器を携へてネウスキー街に參集せよ、學生を見殺しにする勿れ、軍隊が亦政府の暴を助長せす、須らく此の義軍に參加すべし」

『二十四日の朝、大學生、勞働者、一般市民一萬餘人がネウスキー街に集合した。彼等は一齊に「永遠の生命よ！」を高唱しながら、冬宮に向ふて行進を始めた。政府はコサック騎兵八個中隊を派して行進を防止しようとしたが、死物狂ひになつた學生軍に對抗しかねて、旗色が大に惡るくなつて來るのをみると更に五個中隊の歩兵を繰り出してコサックを援助させようとした、ところがその歩兵隊の指揮官は「兄弟たる市民に銃劍を擬すること」を背んじない。兵隊の中からは却て學生軍に加擔する者が出て來たので、學生軍の勢ひは益々昂り、遂には當時ニコラス二世が滯在してゐたザールスコエロとペトログラアード間の鐵道線路を破壞しさうな形勢を示すに至つた。そこで當局は更に近衞歩兵一聯隊を派遣して學生軍と闘はしめ、猛烈な市街戰の結果、夕刻に至つて漸く暴動を鎮壓し得た。』

フランス大革命と國民美術の起源

板垣鷹穗

一、宮廷藝術の時代

時代文化の基調が、同時に美術史上にも其支配權を要求して居ることは、今更めて云ふまでもない。政教一致の上古、都市國家制のギリシヤ、世界的大帝國のローマ、教權中心の中世――此等各時代固有の文化が、何れ程美術史上に深い痕跡を殘して來たかは、ピラミツト、パルテノン、コロセウム、ランス本寺等の建造物から明らかに窺はれる。靈魂の不死を信ずる國王が、其絕對權を用ひて營むだ國家の大事業はピラミツトを築き上げた。困難に堪え得たアテン市民が都の守護神に捧げた謝意と讃辭とはパルテノンとなつた。ローマの政事家達が民心を收攬することに如何に苦心したかは、演劇場なるコロセウムを觀れば解る。ゴティックの大伽藍はクリスト教權の象徵であつた。

藝術家の個性が、時代文化の基調と區別されて作品の表面に出るやうになつたのは、ルネサンス以來である。殊に十五世紀時代の伊太利では、藝術家は自己の解放を說きながら、思ひ〳〵に好ましい表現法を撰むだ。然しルネサレスの美術製作は、なほ其保護者なしに考へることは出來ない、ロレンツオ・デ・メディチなしにボティチェルリの纖細な畫風を考へることが不可能であると等しく、ユリウス二世の意志の力がなければ、ミケランジェロの製作欲も滿足することが出來なかつたであらう。

此處に云ふ藝術家の個性は然し、十七世紀から十八世紀にかけて宮廷藝術てふ匡の中に制限されることになつた。此頃はじめて强固な建設を完ふすることの出來た各國の宮廷は、中央集權制を敷いて宮室の文化を要求した。スペインの大作家を網羅

したフィリップ四世の宮廷や、有名なルイ十四世時代等は代表的な典型である。

殊にフランスでは、晩年のレオナルドを優遇したフランソア一世頃から、宮廷美術が明らかな輪廓を採つて現はれ初め、ルイ十四世の時代には最も典型的な姿になつた。マザレンとコルベールとの權力に依る美術のアカデミー、ウエルサイユに集る五十人の彫刻家、シャール・ルブランの專横等が此頃の記念である。かゝる傾向はブルボン王朝の沒落の日まで續いて行く。ワトーの筆になる、貴族達の野宴や、ブーシェの寫したポンパドウール夫人の肖像から、ヴィジエ・ルブランの描いたアントワネットまで、皆等しく、當時の華麗な宮廷生活の香に浸つて居る。榮華を極めつくした此時代の後に大革命が起つた。新興の機運に宮廷文化の一切は否定されてしまつた。從來國民と沒交渉だつた文化が直接國民の所有物になつた。文化の樣式を規定するものは國民の思想であつて、宮廷の意志ではなくなつた。美術家の製作を導くものは保護者の意志でなくて作家自らの信念であつた。古典主義がロココの傳統を破り、ロマンティスムが古典主義を亡ぼし、寫實主義がロマンティスムに代り、終に印象派畫家の革命となる。――此等の主義と思潮との興亡は藝術の獨立が完うされてからでなければ生じ得ない現象である。フランス大革命は此點に美術史上極めて重要な意義を持つて居る。

然し大革命の後を受けて佛國の覇權を掌握したのはナポレオンであつた。覇者として最も輝く世に出で、そして恐らくは、最も偉大な覇者の一人であつた彼の治世は――束の間のことではあつたが――古來の權勢ある帝政時代に逆もどりした觀があつた。然し大革命の洗禮を受けた後の時代に出た丈にナポレオンのやりくちは一面極めて專制的であると同時に、極度に民望に依賴し民望によつて政權を保たうとして居る他の半面を持つて居た。

此時代のかゝる傾向は、同時に、美術史の上にも明らかに現はれて居る。なほ宮廷藝術の餘光を保つて居ると共にひたすら民心に投合しやうとして居る。その頃最も多く描かれた題材――ナポレオンの讃美――はナポレオン自身の名譽心を滿足させたと共に、なほ二つの重要な役目を持つて居た。作家の側からみれば、人氣者の英雄的な行爲を描くことによつて、畫家は其名聲をあげることが出來た。描けるナポレオンの側からみれば繪畫の力を借りて彼自らの行爲を美化し、廣告し民心收攬の手段とすることが出來た。美術が此樣な複雜な使命を持つたことは前後に例がない。ルネサンス時代の有權者が用ひた所謂美術

政策も、之程露骨且つ幼稚ではなかつた。此處に宮廷藝術が國民藝術となるために通りぬけねばならぬ「過渡期」の興味深い現象が窺はれる。

二、古典主義運動

ロココ以來の宮廷藝術の名殘は、一七九三年に行はれたアカデミーの閉鎖によつて最後の一撃を加へられた。しかも此一撃こそは繪畫史上新運動の暴力的な勝利の第一步であつた。從來のロココ樣式に反抗して、漸次養はれて來た古典主義の繪畫運動は、大革命と共に一大飛躍を試みた。然し此運動のよつて來るところは可成りに遠い。

丁度十八世紀の半頃に、古典主義の藝術運動を一般化すべき大事件が起つた。千何百年かの星霜を、ベスビオの噴灰の下に眠つて居たローマ時代の都市――ポンペイとヘルクラネウム――が新に發掘された。二都市の發掘は漸く全歐の大事件になつて來た。發掘事業の與へた影響は非常に重大であつた。此の新しい發見に對しては古代に關する從來の知識は何でもなくなつた。以前人々が古典時代に就て理解して居たものは、唯個々の美術品を通した限りのものに過ぎなかつた。然るに新發見は古典時代の全社會生活其物を明るみに出した。生きながら葬られた古代の都市生活は、その折りのまゝで人々の眼前に現はれた。全歐の人々は爭つて伊太利旅行をくわだてた。旅行記、歴史書の數は限りなく出版された。

此大事件が造形美術の上に甚大な影響を與へたことは云ふまでもない。新しい憧れであり最新流行である古典樣式は室内裝飾にまで應用された。ポンペイ風の壁面裝飾が流行したのは此頃である。舊來の傳統の流れを汲むで居た畫家達――グレーズやウイジエ・ルブラン等も流行を追ふことには免れなかつたが、古典主義新運動の先覺者達が何れ程多くの影響を受けたかは想像するに難くない。畫家として新運動の魁をなしたヴィアンはヘルクラネウムで古代の壁畫を模寫した。一七五〇年ヴィアンがパリに歸つてアカデミーに有力な地位を得た頃には既に新しい畫論を持して居た。ユーベル・ローベルは一七六五年伊太利から古代の遺蹟を研究して歸つたが、パリで行つた彼の室内裝飾には古代の遺蹟が甚しく應用された。既に一七六二年以來、ローマ賞金の畫題は殆ど古典時代の材料に限られ、聖書から題材を選ぶことは跡を斷つ程になつて居た。

そして更に美術研究や製作上の中心地も殆どローマに限られた。ウィンケルマンが此地に來たのは一七五五年であるが、此の

處で彼は「古代美術史」を書いた。ラファエル・メングスは、一七二四年に新設された繪畫のアカデミーの主唱者となつた。殊に美術史上重要な地位にある大作家達も此時代に多くローマを訪れた。佛國畫界の大立物ダウィットは一七七五年に此地に來た。全歐の彫刻界を古典化したカノワは一七七九年に、トルワルドセンは一七九七年に同じくローマを訪れた。――かゝる新機運の内に古典主義の藝術運動は養はれる。そして從來の傳統から脫した新しい傾向が全歐の畫界を風靡する。

恰も此新機運の熟しきつた丁度其時に佛國政界の危期は到着した。貴族の專橫を惡み、ブルボン王家を怨むだ國民の心は、偏に古典ローマの共和政治に憧れた。法のために私情を棄てたローマ時代の政治家が最も尊敬すべき英雄であつた。古典主義は革命を神聖化し革命は古典主義に權力を與へた。十九世紀初頭の繪畫史が、古典主義の濃厚な色彩に彩られて居ることは、上の事情の導き出した必然的な結果である。

大革命の暴力と、それに繼ぐ專政君主の權威とに、奇しくも手際よく國民思想の織り込まれた此頃の時代精神は、自己の模型さながらの一人格を創り上げた。それが畫家ダウィットである。古典主義を武器として、彼は世間を征服し、世間を征服し得た權力を用ひて古典主義の支配權を求めた。革命政府のプレジダンまで務めた彼は同時にナポレオンの畫史者ともなつた。めまぐるしい程に多忙な此頃の畫界はダウィットの生涯中に壓縮されて居る。

三、ダウイットの生涯と其事業

ジヤク・ルイ・ダウィットは一七四八年にパリに生れた。彼の家族と永年親しく交つて居たフランソア・ブーシエの保護でダウィットは畫家になつた。家族の意志に反してダウィットが畫家を志願したとき、彼はブーシエに紹介された。此老大家はダウィットの素描に依つて其優れた才能を見拔いたが、之から修行を始めやうとして居るダウィットを指導するにはブーシエはあまり年とりすぎて居た。それで止むなくブーシエは此年若い弟子をヴィアンに依賴した。此頃畫室を開いて弟子達を養成して居たヴィアンは、既に新古典派の開拓者として知られて居たから、舊い傳統の世界に人となつたブーシエは、ダウィットをあづけるにも多少の不安を感じた。

一汝はヴィアンの所へ行くがよい。ヴィアンは立派な畫家だし指導も良い。然し彼の作風は少し冷めたい。折々私を訪ね

ておいで。汝の製作を持つて來れば私は師匠の缺點を訂正し肉付に溫みを與へ、優雅に腕や脚をくずすことを教へてあげやう。」

と年老いたブーシエはダウィットに云つた。

ヴィアンのアトリエでダウィットはルノートル、ワンサン、メナジエオ等の同窓であつた。彼の進歩は非常に速かつた。一七六六年以來、彼の才能は認められ、輝しい將來が約束されるやうにみえた。然し彼が最上の賞擧を受けるまでには意外の年月が過去つた。自尊心の強い感じ易い性格を持ちながら、勝利の日を待ちつゝ彼は多くの辛酸をなめた。彼を成功に導く路は過酷であつた。彼の性格は堪へ難い苦痛の傷痕に常になやまされた。幾度かくりかへされた殘酷な不首尾は彼に自殺の覺悟までさせたが、友人達の雄辯が危くダウィットの勇氣を取りもどした。

一七七四年終に彼は勝利を克得た。永年彼の待ち望むだローマ滯在はいよ／＼事實となつた。此時の出品なる「ストラトニーケ」は然し全然十八世紀趣味のものであつた。此畫の作家が將來の革命家であることは、誰も想像することが出來なかつた。ブーシエの傳統に浸つて居たダウィットは、やがて現實すべき彼のローマ滯在が、彼を古典主義の潮流に引き入れやうとは夢にも豫想して居なかつた。友人の忠告に對してすら、「古典美術は自分を誘惑しないだらう。あれは活氣を持つて居ないし活動性にも乏しいから」と答へた程であつたから。然し彼の地の遺物が彼を誘惑したのは實に此活氣の欠乏と態度の不動とであつた。ローマに於ける佛國アカデミーの長となつたヴィアンは、ダウィットをともなつて一七七五年の十月にパリを出發した。

旅行は可成り困難だつた。多くの都會で留つた後彼はやうやくローマに入つた。彼はワティカノを訪れてミケランジエロやラファエルロの作品に面接した。然し此等の大作家より彼の心を捕へたのはカラチ派の諸であつた。ローマ滯在は彼の心を動搖させたが、此地でダウィットに古典主義の洗禮を授けた人は彫刻家のラマリとペイロンであつた。素描に關して彼はラマリの影響を受けたが、ペイロンの與へた感化は主として理論的方面にあつた。才能の豐かなペイロンは古典美術に精通して居たが、ダウィットは彼を通してレッシング、メングス、ウインケルマン等の藝術論を知つた。パリを出るとき「古典美術は自分を誘惑しないだらう」と云つたダウィットは、後にペイロンに伴はれてナポリを訪れた。

此頃彼が試みた製作は「ホールエミールの勝利」「パトロクロス」等であるが、此等の作品には、なほ明らかに十八世紀の

傳統が支配して居る。然し作風上の變化は間もなく表はれて來た。一七七八年の製作にかゝる「パトロクロスの葬列」は、百數十人の人物よりなる大掛りな構圖のものであるが、此作品には既に古典的なる想意の端緒が窺はれる。彼の作品に對する視察官の報告は全體として好評であつたが「パトロクロスの葬列」はアカデミー派の人達に幾分不滿な印象を與へた。

ローマを去る前に彼は「サンロシュ」を完成させた。單純な構圖も巧みに描かれ、人物のデッサンも佳く、個性的な表現も充分であつた。一七八〇年の七月ダウイットはローマを去つてパリに歸つた。一七八一年サロン出品の權利を得るや、彼は直ちに「サン・ロシユ」「ベリゼール」「パトロクロスの葬列」其他を送つた。其作風は既にブーシエの筆法に遠かつて居たが、それにも拘らず多くの弟子や讚美者が出て來た。殊に「ベリゼール」は非常な好評で、若い美術家達は彼の周圍に集つた。加ふるに宮廷建築家のペクールは、娘をダウイットの妻に與へた。しかも此結合は甚だ有利な結果をもたらした。王の命令を受けたダウイットは、心安らかに、最初の大作「ホラティスウの誓」を準備することが出來た。

かゝる題材を取扱かうには種々の點でローマに滯在することが便利であつた。此地の學究的な會合は彼に多くの知識を與へるに違ひなかつた。ペクールは彼のためにローマ滯在の費用を供給した。此度の旅行にダウイットは三人の愛弟子を作つたが此等の弟子は少からず彼の製作を助けた。

此大作は十一ケ月で完成したが既にローマでも其評判は非常であつた。貴人カルディナール、學者等が彼のアトリエを訪れた。古典學者は此作品を種に盛な論爭を試みた、パリでは友人や弟子達が傑作の到着を待ち受けて居た。批評家ドルーエの嘆稱は一般の世評を代表して居る。——如何なる表現を以て讚えるも「ホラティウス」の美しさに相應することは出來ぬ。——

「ホラテイウスの誓」は一七八五年のサロンに出品された。二三のアカデミー會員の嫉視が災して、此繪は觀照に不利な高所に懸けられたが、其麼なことは何でもなかつた。群集は此大作を仰ぎ視て限りない稱讚の言葉を送つた。ダウイットは終に一派の主領株になつた。多くの弟子と友人とが彼の周圍を護つた。

一七八七年ダウイットは「毒を飮むソクラテス」をサロンに送つた。甚大な成果をおさめたことは云ふまでもない。此時のサロンを訪れたレイノルズはロンドンで「ソクラテス」を讚美した批評を公にした。「カペルラシスティナ以來最大の力作である」と彼はダウイットを稱讚した。

然し新しい勝利は一七八九年のサロンに出品した「ブルート

ウス」によつて克得られた。極めて革命的な題材が風雲の急な一七八九年に出品されたことはダウイットの名を廣めるため殊更に都合がよかつた。政事的な意味を含むだ此作の出品が政府の問題となつたことは云ふまでもない。然し當局の干渉は一般觀者の好奇心を益々そそつた。古代の物語に親しみ、自由思想に醉つた群衆は、共和政治の權化を描いた此の繪の前につめよせた。

「ブルートゥス」の製作にあたつてダウイットは、以前にも増して考古學上の正確さを求めた。人物、住居、調度等は研究しつくされた。ブルートゥスの首には、古代ローマに製作された立像の模造を試みた。涕泣くブルートゥスの娘の、亂れた髪を描くにあたつては、當時フィレンツェに住つた彼の弟子に依頼して、醉ひ狂ふバッカントの首を寫させた。——然し今度の製作に群衆を惹きつけたのは考古學上の研究ではなかつた。政治上の興味が遙かにまさつて居た。

「ブルートゥス」を描いたダウイットは終に革命家の群に投じた。然し彼がかゝる決意をなすに至つた最も有力な動機は、恐らく宮室附屬のアカデミーに對する醫し難い怨恨と嫌惡とであつたらう。ローマ賞を克得やうとして居た彼の、若年時代に受けた苦難の追憶は何時までも消えなかつた。革命政府に全能の權力を專にし得た一七九三年、彼は終にアカデミーの閉鎖を命じた。二世紀以來美術界の覇權を掌握して來たアカデミーは其命脈を斷たれた。ダウイットの意志は佛國の畫界に改めて重大な影響を與へることになつた。一度革命政治の渦中に身を投じた彼は、その強烈な性格に從つて何處までも進むだ。目覺しい活動は囚はれの身となつた彼が、日夜死の恐怖に慄く時が來るまで續いた。

一七九二年の秋、共和政府の代議士(コンベンシヨン)に撰出された彼は、終に同政府の頭領(プレジデン)にまでなつた。その後、ロベスピエルが失脚したときには彼の生命も甚だ危かつた。「彼の顏色は蒼白となり、額から流れる冷汗は衣服を傳つて地に落ち廣い斑點を地上に描いた」と當時の目擊者は傍聽所に立つたダウイットに就て語つて居る。自由の身になつてからも恐怖は彼を去らなかつた。政治上の仇敵が手を引いた後には美術家の競爭者が彼を苦しめ、彼等の告訴に依つてダウイットの生活は常におびやかされた。然しやがて平和な時が來た。獄中で計劃して居た製作に彼は再び親しむことが出來るやうになつた。——政治的生活の余暇に描いた「ルペルティエ」や「マラー」や「バラ」は彼が權力の絶頂にあつた時代の思出である。

政治上の混亂した生活から脫して、一七九五年、彼は再びア

トリエの生活をはじめた。「サビニ女」は此頃の大作である。此作の製作で、ダウイットはモデルの撰定を非常に苦心したが若干の美しい貴婦人と友人とが悦んで其任務をはたした。一七九九年に此繪は完成したが、モデルになつた人物が世間の注目を喚起した丈に此作は多大の好奇心を以てむかへられた。完成に先立つて彼の畫室を訪れた人も多かつた。完成後ダウイットは、特に一フラン八〇の入場料を取つて此繪の特別展覽を行つたが、結果は彼の期待以上であつた。彼は始め入場料の總額が二四〇〇〇フランに昇つたら晩餐を饗應することを弟子達に約したが、弟子達は特別展覽の閉期までに三回の饗應を受けた。收入の總額は丁度七二〇〇〇フランであつた。

之程の成功をおさめ得た「サビニの女」は、然し彼の作風の上からも亦注目すべき作品である。畫中の人物を裸體で表はすと云ふことは、ダウイットのあまり試みなかつたことであるが、彼は「サビニの女」で初めて大膽な裸體描寫を行つた。しかも特別展覽の折、入場者に分けた解説には下のやうな説明が書いてあつた。

「余に對して既に加へられ、また今後も其跡を斷たぬであらうと思はれる批難は、畫中の英雄が裸體だと云ふこ とである。然し神々、英雄達、其他、描かうとする人物を裸體で表はすことは、古代の畫家、彫刻家、並びに詩人達の間に許された常習である。哲人を描くや其姿は裸體である。肩に被布をかけ性格を示す附屬品を持たせる。戰士を描くや其姿は裸體である。戰士は頭に甲を頂き、肩帶に劍をつり、腕に楯を持ち、足に靴をうがつ。時として美術家は衣をも描くが、それ等は、像の姿に優雅な印象を與へやうとするときに限る。…………一言にしてつくせば、此畫に試みられた余の意嚮は、ギリシヤ人並びにローマ人等が、余の畫を前にして、彼等の習慣に應ふを感ずる程正確に、古代の風習を描くにある。」

古典主義の主將と成り切つたダウィットの面目は此言葉の内に躍如として居る。

「サビニの女」の評判が喧ましかつた間に、ダウィットは「テルモピレのレニオダス」を、同樣に古典主義的な理論に基いて製作をはじめたが、此仕事は此頃漸く勢權をおさめて來たナポレオンの依囑で中斷された。ダウイットが大ナポレオンに奉仕した最初の紀念は、「聖ベルナルドの嶮を越へるナポレオン」である。此肖像畫はダウイットにとつてナポレオンを描いた二度目の作で、彼とナポレオンとは可成り以前から知り合ひの關係にあつた。ナポレオンが伊太利に遠征して居た時分は、丁度ダ

ウイットの生活が脅かされて居た頃であるが、ナポレオンは彼の爲に種々の援助を與へた。カンポ・フオルミオの條約が了つてナポレオンは凱旋したが、此將軍のダウイツトに對する態度は極めて親しかつた。公の晩餐でナポレオンはダウイツトの隣りに席を希望した。ダウイツトに最初の肖像を依頼したのは此時である。

しばらくしてボナパルトはエジプト遠征に出たが彼はダウイツトを忘れなかつた。遠征から歸ると直ちに彼は新しい肖像畫を依頼した。

「戰亂の中に劍を手にして居られる姿を描きませう」とダウイツトが云つた。然し名譽心の強い將軍はそれを否定した。

「否、親愛なるダウイツト。余が戰ひに勝つたのは劍によつてではない。余は心安らかな態度で、猛り狂ふ軍馬に騎乘する樣に描かれたいと思ふ」

と答へた。「聖ベルナルドの劍を越えるナポレオン」は此意嚮に基いて製作された。

一八〇〇年になつてから、ダウイツトの社會的地位は再び重くなつて來た。首席執政官となつたナポレオンは美術總監の重任をダウイツトに與へるだらうと云はれた。果して此世評は事實となつたが、革命時代に苦い經驗をなめさせられたダウイツトは、なほ將來の不確實な執政官と運命を共にすることを躊躇した。彼はさかしくナポレオンの好意を避け、提供された榮職を恩師ヴイアンにゆづつた。然し、それにも拘らず、ダウイツトとナポレオンとの關係は次第に親しさを增した。以前共和政府の主領株だつた彼としては、此處に、外見上、若干の矛盾を感じた。然し事情は容赦なく彼を引きづつて行つた。共和主義を讃美し、マラーを描き、バラの行爲を讃たえたダウイツトは終に獨裁政治家の忠僕となり了つた。

ダウイツトは、首席執政官のナポレオンに對して拒んだ地位を、「皇帝ナポレオン」に對しては肯定した。彼はナポレオン王家の宮廷附首席畫家となつた。そして彼の地位と權力とが許す限り、美術界に獨裁的な權利を要求した。然し政事的意見と社會的地位との變遷はまた彼に畫風の變遷を誘致した。此處に重要な轉廻期がある。此時期に屬する彼の代表的作品は「戴冠式」と「軍旗授與式」との二大作であるが、此等の大掛りな製作は、無意識的に、美術史上新時代の到來をつげて居る。感情的な古典崇拜の時代は過ぎた。千年の昔に出た英雄を讃へるよりは、現在武威を輝しつゝある英雄を讃える方が好まれて來た。「戴冠式」を描くにあたつてもダウイツトの努力は非常なものであつた。多數の人物の一人々々は個別的に習作され、裸體の素

描を取つた後に着衣の素描が試みられた。そして特に、畫中の重要な人物の内、若干の人達はわざ〳〵ダウイットのアトリエに來て肖像を寫された。あらゆる人物を研究しつくしてからダウイットは構圖をまとめた。しかも公の儀式を描くことであるから、隨意なまとめ方をする事は少しも許されなかつた。ナポレオンの指圖は樣々な變更をよぎなくした。

製作が終るや「戴冠式」は直ちにルーブルに送られ、一八〇八年のサロン開催を待ちつゝ美術館の大廣間に置かれた。祭壇の下にピウス七世が坐し、カルディナールと僧達とが其周圍に集る。なほ其後方には使節等が立並んで居る。緋ビロードの皇帝縣衣を着したナポレオンは、頭に黄金の月桂冠を頂き、法王の手より王冠を取つて、祭壇の段に跪いて居る皇后の頭に置かうとして居る。ジョセフイーヌの縣衣は貴婦人の手に保たれ、其後にはパリの大僧正を始め、將軍達、ナポレオンの近親、貴族達が續く。――此繪によつて得たダウイットの成功は著しかつた。

皇帝も滿足の意を表して彼に名譽を與へた。

「軍旗授與式は」は「戴冠式」程な出來榮でなかつたが、彼の光榮を增すには充分役立つた。其他の下命された二作――「即位式」と「オテル・ドウ・ビルに於ける受任式」――は終に完成されなかつた。

ダウイットはかくて、光榮なる地位に依り、非常な勢力を持つては居たが、反對者達との間にいさくさは絶えなかつた。一八〇九年にヴイアンは死んだ。プリュードン、グロ、ジェラール、グェラン等が新しい時代を代表して居た。然るに突然、一八一四年の大事件が起つた。ナポレオンの幸運を信じて疑はなかつたダウイットの期待は美事に裏切られた。ルイ十八世の即位はダウイットの生活を再び脅かした。革命政府の大立物であり、ナポレオン王朝の首席畫家であつた彼にとつては、ブルボン王家の復興は恐るべき出來事である。彼は「戴冠式」「軍旗授與式」ナポレオンの肖像、其他の作品を隱して來るべき危難を待つたが、新王の處置は以外に寛大であつた。ダウイットはアトリエにこもつて肖像畫を描いて居た。

然るに一八一五年になつてナポレオンは再びフランスの國土に歸つた。彼の未來は暗らかつたが現在は光り輝いて居た 彼を眞先にむかへたダウイットには更に名譽が與へられ、近く完成した「レオニダス」を稱觀するために先の皇帝はダウイットを訪れた。此時ダウイットは、ロベスピエールの治世以來の大膽な行爲を敢てし、ブルボン王家に反抗の意を明示した 然しナポレオンの幸運は既につきて居た そして一八一六年にはダ

ウイットも國外に逐放されることになつた。

ダウイットは、自己の生命と作品とを安全にするため、命令を待たずして退去の準備を急いだ。彼は「ルペルテイエ」と「マラー」とを鉛粉で掩ひ、「戴冠式」と「軍旗授與式」とを三部に斷ち切り、他の作品と共に輸送した　ローマ滯在は許されなかつたので彼はブリユツセルを選んだ。時に六十七歳である。彼の才能は既に衰へて居たが名聲は甚だ高かつた。王の容赦は望めぬでもなかつた。然し彼は友人の好意と弟子達の歎願とを振り棄て、アトリエをグロにゆづゝて追放の路についた。

ダウイットのブリユツセル到着は恰も凱旋のやうであつた。國王はじめ彼の弟子達は悦んで彼をむかへた。プロイセンの國王すらも彼を招聘しやうとした。然し彼はフランドル人を愛し、此國の光と生活と繪畫とを愛した。住み心地の良いブリユツセルに移つてからも彼は製作をつゞけた。病と老とはしかし彼から才能を奪つてしまつた。

ロマンテイスムの新時代は既に釀めて居る。ダウイットの光榮をしたう巡禮者の群は斷えなかつたが、其中には、重大な使命を帶びて生れた新時代の兒も混つて居た。或時一人の畫工が彼を訪ねた。それはドラクロアの先驅をなすジエリコーであつた。

老衰と病苦とに疲れた彼は人々の好意に護られて居た。彼が毎夕訪れる劇場には彼の坐座が常に設けてあつた。然し彼を見掛けない日が幾日か續いた。彼はやがて來なくなつた。一八二五年の十二月二十九日ダウイットは終に世を去つた。然し彼は屍となつても佛國に歸ることが出來なかつた。近親、友人、弟子達の請願も徒勞に了つた　ダウイットの屍は今尚異郷の墓地に眠つて居る。

四、ダウイットよりグロへ

ジヤコベン式なダウイットの頑固な排他的な個性は古典主義の暴力的な勝利を許した。加ふるに、當代一般の古典主義が極めて皮相的な力の弱いものであつた中に、兎も角もダウイットの畫風は血の通ふ何物かを持つて居た。「優れた肖像畫の群」だと批評された「戴冠式」やレカミエ夫人の肖像等は、充分に藝術家としての彼を辯護して居る。

ウイアンに始まりダウイットに依つて宣傳された古典主義の繪畫は、其弟子のアングルによつて充分藝術的に純化した。然しダウイットの主張を貫徹させたアングルが彼の弟子であると同時に、其仇敵なるロマンテイスムを養つたのも亦彼の弟子な

るグロであつた。

　ダウイツトが追放の途につくに臨むで、彼の後繼者としてアトリエの指導を依託したのはグロであつた。グロとダウイツトとの間柄は、師弟の關係と云ふよりはむしろ父子のそれに近かつた。ダウイツトの唱導して居た古典主義に飽くまで忠誠を捧つたグロは、古典主義の衰亡を歎きつゝロマンティズムの新思想と健氣に戰ひつゞけた。

　然し、ダウイツトがグロを後繼者に選むだことは、極めて興味ある一つの「皮肉」であつた。敬愛する師匠の教義を護る筈のグロは、實のところそれを亡ぼすべき運命を授かつて居た。彼はロマンティムスの新思想と極力爭つては居たが、ロマンティスムを養ひ育てた父親はグロ自らに外ならなかつた。

　グロの生涯は、二つの移り代る時代思潮の作り出した、苦しいディレンマにもまれて居た。そして更に走馬燈のやうにめぐる佛國政界の變遷も亦殘酷に彼の運命を弄むだ。一時代の代表作家として彼程に割の惡い役を授つた畫家は恐らくなからう。

五、グロの生涯と事業

　ジャン・アントワン・グロは一七七一年パリで生れた。一七八五年僅かに十五歳の彼はダウイツトのアトリエに入つた。十八世紀の傳統を殘して居る親切なレブラン夫人を彼は知つて居たが繪畫商をして居た夫人の夫の所藏にかゝるフランドル派、オランダ派、ヴェネチア派等の古畫も亦彼の心を養つた。なほグロの父も優れた古畫のコレクションを持つて居たから充分藝術味のある空氣の中に彼は育つことが出來た。

　然るに一七九三年の始め頃からグロの境遇は惡くなつた。父の財産は失はれて彼は生活にも苦しんだが、貴族の關係者として政府から疑はれた事は最もグロを恐れさせた。そこで彼はパリを去る決心を定め當時權力の絶頂にあつたダウイツトの助力で旅行の許可證を得た。しばらく南部のフランスに滯在した後伊太利に行きゲヌアやフイレンツエに貧しい生活をつゞけて居た。

　一七九六年ナポレオンは伊太利遠征軍の總指揮官としてオーストリアの軍を破り勝利の進軍を續けてミラノに來た。此處に彼は結婚後日淺くして別れたジョセフイースを呼びよせたが、ジョセフイーヌがゲヌアを通過するときグロは彼女に紹介された。ジョセフイーヌは直ちにグロを伴つてミラノに行き、彼を其夫君に引合はせた。藝術家に好意を持つて居たナポレオンはグロを用ひて樣々な役に任じた。「アルコールのナポレオン」—

は此頃の作である。

ナポレオンがエジプトに赴いた時も彼はなほ伊太利にあつたが、ゲヌア滯在中には敵軍の恐るべき攻圍を受けた。此時佛軍の陣は流行病と饑餓とに甚しくなやまされたが、彼が眼のあたり實見した悲慘な有様は永く彼の心に留り彼の戰爭畫に極めて寫實的な力を與へた。英船に便乘して彼がフランスに逃がれ歸つたのは一八〇〇年の夏であつた。

グロが伊太利で送つた八年の月日は彼の才能を豐かに養つた。此間彼はあまり製作しなかつたが、彼個有の傾向は自由に發展し傳統の教義からは解放された。伊太利で彼を悅ばせた過去の大作家はルーベンスであつたが、多くの都會の目新しい有様や戰爭の殘酷な實驗又はナポレオンの榮ある行跡等が彼の藝術的構想を豐かにした事は否定出來ぬ。

時代の出來事を寫實しやうとする傾向の作家にとつて此頃程に好都合な時期はなかつた。勝ち誇る國民の譽、社會上の事件、神の如く尊ばれて居る英雄――此等が日々の出來事であり社會上興味の中心である此時代にあつては、畫家は刺戟的な畫題を取扱ふと云ふことで丈でも優に衆目を集めることが出來る。增して才能の豐かな作家にとつては彼の技巧を研く上に此上もない好時期である。様々な色の軍服、金モール、毛皮、艷澤な武器、――畫家は更めて色彩の豐な寫實を悅ぶやうになつた。加ふるに伊太利の平原、エジプトの砂漠、ラインの流等目新しい背景の必要なことも同じく繪畫の發達をたすけた。ダヴィット、ジローデ、ジエラール等の諸作家は共に此の「壯嚴なる現代」を描いて居るが彼等が戰亂の有様を唯想像丈で描いて居たに對してグロが伊太利で經て來た忘れ難い經驗は確實な優越權を彼に與へた。

當時國家の權力ある人達の中にも其頃の事件を尊重して古代の物語の如く一般美術界の畫題となることを望む人があつた。既に一七九六年時の一大臣は美術家達に對して下の如く告げて居る。

「自由は其勝利を描かしめんために諸君を招けり。我祖國に名譽を與ふべき其事業を後の世のために描かれよ。國民が示したる尊嚴と偉力並びに彼等が事を處理し彼等自らの運命を築きし時用ひたる能力を、壯嚴にすべき必要を感ぜざる者あらんや。古代國民の歷史より諸君の採りし題材は既に諸君の周圍に滿てり。自尊心と國民的精神とを持ちて、我が英雄の事業を描かれよ。我國の歷史に於て最も銘記すべき時代に生きながら、國民の義務を完ふせざりしことに就き、後の時代が諸君を譴責せざらんがために。」と。

ナポレオンは既にコンソル時代から功勞者を記念する計畫を持つて居たが其處には藝術を以て彼自らの榮譽を飾らうとする野心が含まれて居た。一八〇四年年金の競技を行ふに際して彼は題材を二種類に分け「歷史的題材」（古典時代を意味する）と「國民的精神上稱讚すべき題材」（即當代の出來事）とを區別した。

グロの戰爭畫で最初に注目すべき作品は「ナザレの戰」であらう。此畫の爲に殘された努力は、彼の描き殘した素描をはじめ、エジプトからの通信を拔書したものや、遠近法其他の嚴密な研究に窺はれる。亂鬪の折りの烈しい感情を寫實的に描くことはロマンティスムの本領である。グロは自己個有の得意の筆を以てロマンティスムの新思想を知らず〱養つて居た。此作で充分な効果をおさめた彼は次ぎ〱に大掛りな戰爭畫を描いた。「ジヤフアのペスト患者」「アブーキルの戰」「エーローの戰」「ヒラミツト下の戰」等がそれである。

「ジヤツフアのペスト患者」は一八〇四年の作である。一七九九年シリアの遠征中軍隊の止まつて居たジヤツフアにペストが流行した。ペストの傳染力に恐れて居る部下の勇氣を引きたたせるためにナポレオンは自ら病院を訪ひ患者の傷に其手をふれた。――此名高い話をグロは描いた。ペスト患者の寫實的な姿、明暗を使ひ分けた巧みな構圖等、此作の出來榮は非常に美事であつた。

此畫がサロンに出品された時其人氣は盛んなものであつた。出品の翌日此畫の緣は美術家達の結むだ棕櫚樹の枝で飾られて居た。彼等はなほ此畫の作家のために宴會を催し散文や詩の讚辭を贈つた。當時アカデミーの長であつたドウノンは特に遠征中の皇帝に書面を捧つて此畫の成功を報告した。

繼で一八〇六年に製作された「アブーキルの戰」も非常な効果をおさめた。特に此畫では正確に描かれた地方的なコステユームが稱讚の的であつた。

一八〇七年エーローの戰で勝つたナポレオンは此戰ひを畫題にして――露骨に云へば自身に對する讚辭に對して――競技を催し極めて細かなプログラムを發表した。

「エーローに於ける戰鬪の翌日皇帝は戰場を訪れ其有樣をみて嫌惡と同情との感に打たれ傷ける露兵の救護を命じた。かゝる勝利者の人道に厚き行に對して一若年士官は力をこめ熱誠を以て恩を忘れざることを陛下に誓つた。遠方には陛下の閱兵を行はんとする戰場に野營する佛國の軍隊がみえる。」

競技に加はつた作家の數は二十九人でグロが其首席を占得た。彼の作品は一八〇八年のサロンに展覽された。一般の稱讚

は大きかつた。批評家は此畫の豐な色彩に對して「ティチアノやルーベンスに遠からず」と讃へた。然し古典主義を奉ずる作家達は少なからざる反感を彼に示した。

同年彼はサント・ジュヌウイエーブ寺院の穹窿を裝飾すべき依頼を受けたが此畫の完成に先立つて「マリー・ルイズとロームの王（ナポレオンとルイズの子）とをガルド・ナシオナールの士官に依託するナポレオン」が描かれた。先の光榮ある時代に軍神として描かれたナポレオンは同じ畫家によつて終に其沒落の姿を描かれた。后と皇儲とを依託する悲壯な畫題はナポレオンとグロとを結びつけて居た最後の紀念である。

ナポレオンの沒落はグロの地位に重要な影響を與へた。彼はブルボン王家の復辟に對して何等の不安をも感じなかつたが英雄至上主義の消滅は彼から其得意とする題材を奪つてしまつた。加ふるにロマンテイスムの運動は當に起らうとしつゝある。過去の光榮ある時代に彼が畫界に與へた新思想は漸く宮庭の媚に墮落しかけた今の彼を亡ぼさうとして居る。彼はしかし飽くまでも恩師のために義理立てした。何等の理解も要求をも持つことなく徒に古典主義を標榜した。ダウイットの忠告を入れて彼が描いた「オレステスの出發」や「エデイプスとアンテイゴーネ」は決して成功の作ではなかつた。此頃の作で見るべきものは一八一七年のサロンに出た「トゥイレリを出づるルイ十八世」と一八一九年の作なる「アングレームの侯爵夫人」とであらう。然し、いづれもテクニックの點で優秀なばかりである。

一八一四年から二四年にかけて彼が最も努力したのはナポレオン時代に依託された穹窿の裝飾畫である。此天井畫は最初の計畫では佛國の歴史にとつて最も光榮ある人物なるクロビス、シャールマーニュ、サン・ルイ、及びナポレオンの四人を描く筈であつたが、今の時勢となつてはナポレオンの代りにルイ十八世を描かざるを得なかつた。ルイ十八世に繼ぐシャール十世は此畫の出來榮に滿足しグロに男爵の爵位を授けた。然し「ジャッファのペスト患者」を描いた彼の意氣は既に完く認められない。

天井畫の出來上つた一八二四年は然しドラクロアが「シオの虐殺」を描いた其年である。既に一八一九年にはジエリコの「メドウサの筏」が出來二二年にはドラクロアの「ダンテとウイルジル」が完成して居る。ジエリコにダウイットを訪れた日があつた如くドラクロアは最盛期のグロを稱讃して居る。然しグロは無意味に新思想と爭つた。ブリュセルにあるダウイットすら「色彩」の味方となつて「色彩に着眼することを余も亦誇へ

ざるを得ない。余も亦仲間に入ることを欲する。然しもう晩い」と云つて居る時勢だ。グロは必然的なるものに對して無理な爭をつづけて居た感がある。加ふるに氣力の衰へた彼自身の作風は古典主義の作家からも亦非難された。古典主義を標榜してロマンティスムと戰ふにはグロの空虚な言葉よりアングルの力強い製作の方が遙かに功力があつた。グロが陳腐な製作を殘したルーブル博物館にはアングルの筆になる「ホメロスの神化」が描かれた。當時のグロは――ロマンティスムと新古典主義との間に立つて板ばさみの苦境に陷つた。

彼に多くの榮譽を與へたシャール十世の後にルイ・フイリツプが位についた。一八三五年彼は美術アカデミー總裁に撰ばれたが、此頃の作品は慘じめな墮落の跡を示して居る。しかもカリカチュアのやうな「ディオメード」は彼にとつて最後の製作であつた。

一八三五年六月二六日の朝、グロは裁判所に行くために家を出た。然し夕方になつても彼は歸宅しなかつた。翌朝、二人の漁夫はセイヌ河の支流に浮んで居る彼の屍を見出した。岸邊に殘された彼の帽子には妻に對する簡單な別離を記した紙片が附いて居た。自殺の原因としては家庭上の煩悶（妻との不和）肉體上の病苦、藝術上の無力、アングル派並びにロマンティックの攻撃等が推察される。物に感じ易い彼の性格が此等の苦惱に最後の解決を與へた。

彼の死に對して社會は甚だ冷淡であつた。翌年の祭日にも參會者の數は極く少なかつた。美術アカデミーは一人の代表者すら送らなかつた。

六、國民藝術の確立（ジェリコとドラクロア）

古代の英雄達が讃美された時代にダウイットは出た。グロの出たのは「現代の英雄」が讃美される時代であつた。彼は現代の英雄、――ナポレオン――を讃美することに力をつくし其報酬として彼の地位は高められた。然し不幸なことに「現代の英雄」に與へられた時はあまりに短かかつた。永らへすぎたグロはナポレオンの滅亡と共に宮廷畫家としての藝術的生命を失つた。彼の生涯が終らないうちに國民藝術の獨立は完成して藝術が主權者の僕となつて居る時代は終つた。

一八一九年のサロンに、非常に意味の深い一個の作品が出た。ジェリコの描いた「メドウサの筏」がそれである。

此頃世評の喧ましかつた事件をジェリコは題材に撰んだ。「一

八一六年六月一七日軍艦メドウサ號はセネガルのサンルイ行に向つてフランスを出發した。此植民地に役人を派遣するのが目的で四百人の乘員を乘せて居た。七月二日メドウサは暗礁に乘上げたが、五日經つても離れることが出來なかつた。そこで乘員は百四十九人を乘せ得る筏を作り、他の乘員をカノーに乘せ筏をカノーに索かせることにした。ところがカノーに索綱を斷たれた筏は大海にたゞよう運命を負はされた。十二日經つて筏が救はれたときには、饑渇と失望とに狂亂して相鬪つた人達は十五人の死に瀕した者を殘すばかりであつた。」——人の熱情を描かうとするジエリコにとツては此程適當な題材はなかツた。

テオドール・ジエリコは一七九一年に生れシヤール・ウエルネやゲランの畫室で畫を營むだ。一時彼は兵役に從つて居たが歸休すると再び製作に親しむだ。彼は自然を觀察することの外に古來大家の作品を研究し、伊太利や英國に旅行して其心を養つた。喜怒哀樂等人間のあらゆる感情を描くことが彼の希望であつた。從ツて彼の取扱つた題材も「黑人の賣買」と云ふやうな卑近なものが多く、英雄を讃美すること等は少しもしなかつた。

既に「メドウサの筏」が示して居るやうに、ダウイツト風の權威ある事物を撰むで之を靜觀しやうとする時代は去つた。卑近な人間の熱情を主題として、熱情其物を表現しやうとする時代が來た。かゝる傾向が最早宮廷藝術と沒交渉なことは云ふまでもない。グロの戰爭畫に醒めた新傾向はジエリコを得てにわかに發展した。惜しいことにジエリコは、豐かな光明の滿ちて居る將來を殘したまゝ、一八二四年の春に世を去つた。然し彼の後には繪具を焔に代へた熱情畫家ドラクロアが居る。既に一八二二年のサロンには怒り狂ふ亡者の中を舟行する物凄い「ダンテとウイルジル」が出品され、一八二四年には火焔の渦卷くやうな「シオの虐殺」が描かれた。續いで一八三一年のサロンには「一八三〇年七月二八日」と云ふ七月革命の繪が出品された。「自由の神」が國民を率ひる有樣である。「自由」は若い、半裸體の肉感的な女である。左手に劍銃をさげ右手に三色旗を高く捧げて國民を導いて行く。ピストルを兩手に持つ若者と、小銃を持ち絹帽を被ツた男とがその後につゞく。——之程までに卑近な表現はない。リユードの有名な群像、マルセイエーズを觀てさへあれ程怒ツた古典主義者が此畫を觀たら何と云ふだらう。

グロの描いた「ジヤフアのペスト患者」は一八〇四年のサロンに出た。ドラクロアの「一八三〇年七月」はそれより二十七年後の作品である。テクニツクの問題は別として、構想と表現

との點から此二ツの作品の示して居る相異は如何にも著しい。走馬燈のやうにめぐるフランス政界の變遷は美術史の上にも其明らかな痕跡を留めた。政界の變遷と美術樣式の變遷とは、それ等の源なる「時代精神」の展開が示す異つた二面の表現であつた。

× × ×

佛國政變年表

一七八九年（五月）	ベルサイユ議會
一七八九年（七月）	バスティユ牢獄破壊
一七八九年―一七九一年	Assemblée constituante
一七九一年―一七九二年	Assemblée législative
一七九二年―一七九五年	Convention Nationle
（一七九三年）	ルイ十六世處刑
（一七九三年―一七九四年）	恐喝政治
（一七九四年七月）	ロベスピエール失脚
（一七九四年―一七九五年）	温和派政府
一七九五年	第三制度布告（ナポレオン軍隊の主權を掌握す）
一七九五年―一七九九年	總督（ディレクトワール）政治
（一七九六年―九九年）	ナポレオン伊太利及びエジプト遠征
一七九九年―一八〇四年	執政官政治（ナポレオン首席執政官）
（一八〇二年）	ナポレオン終身執政官
一八〇四年―一八一四年	皇帝ナポレオン一世
一八一四年―一八二四年	ルイ十八世
（一八一五年五月）	ナポレオンのパリ進撃
（一八一五年六月）	ワーテルローの戰
一八二四年―一八三〇年	シャール十世
一八三〇年七月	七月革命
一八三〇年	ルイフイリップ即位

所謂共產黨事件

所謂共產黨の大檢擧

高橋龜吉

今度の所謂共產黨の大檢擧に方つて起つた最も注目すべき現象は、警視廳側が、之を「大臣暗殺」の「大陰謀」のと、如何にも大事件であるかの如く發表してゐるに反し、司法當局は、恐く、重大問題ではないと言明してゐる點である。若しも、經驗の教ふるが如くに、司法當局の言を眞なりと信ずれば、警視廳側の仰々しい宣傳は、何かためにする處あつての術策ではなからうか。之れ誰しも考へ及ぶ疑問であらう。

而して、之れと同時に、此の疑問を解くべく二つの噂が何處からともなく傳へられた。一は、此度の大檢擧を以て、政府が來る議會に過激法案を提出せんとするの口實を得んがためだと謂ひ、二は、警視廳の某高官が、近く他に轉任する筈なので、共の功名の置土產に急にやつたのだとの見方である。無論、眞僞は保證の限りではないが、成る程、さう見れば、あの大袈裟の檢擧のヤリ方も合點が行くし、又、警視廳の仰々しい發表もさうと肯かれないでもない。

さるにても、假令風評にもせよ、かうした大事件が、斯樣に不眞面目に、解釋せらるゝの余地を與えたことは、何と謂つても、當局の大きな落度であり、不德の致す處であると謂はねばならない。事實に於て人間と謂ふものは、誰しも、個人の淺墓な功名心や虛榮心に誤まられて、一國の大事を判斷するの明を掩はれることが多いことを、自分自身のケチな心に引き較べて考へさるを得ない。從つて、さうした疑念の差挿さまる余地があると、誰しも、それをほんとうではないかと考へたがるものである。

で、眞に、國家を憂ふる赤誠から、今度の樣な檢擧をしようとする場合には、當局が得意の鼻をうごめかしてゐる樣な印象を與へる、芝居がゝりの檢擧の仕方を、努々もしないことである。それと共に、大向ふの大喝采を博しやうとする樣な、下司な、ゼスチユアーは、折角の手柄に、泥を塗つて了ひ、折角の努力を無効力化して了ふものである。併し、こんな、野卑な考へ方は、畢竟、自分自身の、野卑な人間性の反射に過ぎないとしておいて、さて、今度の大檢擧を、眞正直に見て、どれだけ之を、是認することが出來るであらうか。私は、かうした場合の批判の標準は、檢擧の對照そのものに限るべきではなくして其の經過としての結果に、最も重大意味をおくべきであると思ふ。さうすると、新聞の傳ふるが如き企圖が、傳へられた人々に由つて計畫され、それが、今度の檢擧で、どれだけ、打撃を蒙るか、と謂ふが如き問題は、尠くとも第二義的なものであつて、第一義的なものは、此度の大檢擧が、如何なる印象を國民に與へたかであらねばならない。

之について、先づ、當局者が留意せねばならない點は、かうした大檢擧をなすに方つては、殊に、國民をして、其の檢擧を「成る程尤もだ」、と考へしむるだけの、充分な理由を明示せねばならないことである。若しも、國民が、さう考へるだけの理由がない檢擧だとせば、現在の社會が由つて以て、安寧秩序を維持してゐる法律の權威を、政府自ら、否定し、法律は權力者の專恣な行使に委せられてあるものだと謂ふ考へを國民に教ふるものである。實に、之れ以上の、危險思想の宣傳があるであらうか。此の點に關する、政府の責任は甚大であると謂はねばならない。知らず、政府は、果して、事件の今後に於ける進行に由つて、立派に、今度の大袈裟な大檢擧を是認せしむるだけの理由を、國民に與へ得るか否か。謂ふ迄もないが、檢擧されたる事件が、單に、無罪とならなかつたと謂ふことだけでは、國民をして此度の大檢擧を首肯せしむる理由とは成らないのである。國民は、あの大袈裟な、而して人心に大不安を與へた大檢擧に對しては、其れ以上の重大な理由を要求するものである。

第二に留意すべき點は、斯の如き大檢擧を行ふ場合には、殊に、其れが國民の一部階級の利益の擁護のためではなくして、國民全部の利益の擁護のために、全然公正なる法律の適用をなしたるに過ぎないとの印象が、國民に強く與へられねばならないことである。然るに、遺憾ながら、此の點については、已に國民の中に、政府の公正を疑ふものが尠くない。國民は恐らく、若しも政府が、社會の安寧秩序を維持するため

に、共産黨を大檢擧するの必要を認めるほどならば、何故に、それよりも尚ほ暴力主義に立つ國粹會其他の反動團體の「結社」を檢擧しないのであるか、と。

忠良なる國民の眼に映ぜる斯かる政府の不公正が、如何なる惡影響を、我が純良なる國民の心理に植へ付けるであらうかは誰にも容易に想見されるであらう。即ち、國民は、法律の適用に依怙贔負あることを知り、延いては、共産黨それ自らの教ふるが如き「政府は階級的所産なり」との信念を政府自らに由つて實物教授するの嗤ふべき結果となるであらう。

要するに、如何に眞正直に、今度の大檢擧を見ても、其の動機が、檢擧に由つて國民に與へる影響如何と謂ふが如き、第一義的な、堂々たる政治的考慮にあつたとは、どうしても考へ難い。どうしても、今度の大檢擧は、屬僚的な考へから、第二義的な目的のために、即ち、直接共産黨そのものゝ壓迫と謂ふことのみを眼中において、それが、如何なる結果を國民に及すべきかと謂ふが如きは、殆んど檢擧者の考慮の中にはなかつたのではないかと考へられる。果して然らば、かゝる大檢擧が、當局にあるものゝ、御手柄、功名心のために決行されたのだなどと、邪推さす餘地を與ふるが如き行爲ありしことは、返す〲も、遺憾の極りである。屬僚的な仕事には、殊に、さうした個人的な功名心のために、大事を無視することが、世間にはよくあるので、一層、さうした疑問を深くさすからである。而して國民の最も恐れねばならないことは、當局の功名心のために、國事が左右されることである。

何れにせよ、かうした大檢擧や壓迫に由つて、所謂、社會主義や共産主義を、撲滅乃至は阻止し得ると考へる位ひ、矛盾したことはない。其れ位の壓迫や脅威のために、縮み上る程の主義者であるなら、放つておいたつて、結局何事もなし得るものではない。若し、何事かなし得るだけの主義者なら、かうした壓迫は、結局彼等に、更に巧妙な戰術と、遠謀とを教ふるのみである。畢竟は一時の壓迫の快を貪るに過ぎないのである。我が政府は、海外の生きた有り餘る經驗に學んで、壓迫に由つて、思想運動を阻止し得るものでないことを、もういゝ加減に覺るべきである。若し、我國に於て、社會主義、共産主義、等を撲滅し得べしとせば、其は、唯一つ、自由なる思想の討究に由つてのみ望み得られることである。

花々しい白化宣傳の一幕

—（所謂共產黨事件）—

赤松克麿

一

社會主義者を無性にいじめつけることに於て、日本は世界に比類稀な白色恐怖の國である。社會主義者の出版物は○○深山で文意を捕捉するに苦しみ、しかも折々發賣禁止の巨弾と、安寧秩序紊亂の機關銃と、出版法違反の毒瓦斯とを浴びせかけられる。社會主義者の集會は數百の正服私服の警官を以て包圍せられ（時には警官の數が聽衆の數を超過することがある）臨監の警部はヒステリックに注意と中止を連發し、揚句の果ては解散を命じ、グズ／＼ホザく者は片つ端から檢束する。少し手むかふた者には公務執行妨害罪を投げつける。社會主義者の結社は絶對に罷りならぬ。大正九年十二月十日、大戰後の我國の社會主義運動の勢揃ひであつた社會主義同盟大會は、發起人の一人大庭柯公君が登壇して「只今から社會問題講演會を開きます」と云ひ終らぬ内に、臨監の佐々木錦町署長は立ち上つて「辯士中止！解散を命ず」と云ひ放つた。忽ち青年會館は大混亂を呈したが、五百人の警官隊は會衆を蹴散らして、社會主義者七十四名を檢束し、數台の自動車で押送して警視廳の留置場にブチ込んだ。

メーデーは實に無産階級の唯一の戰鬪的祝祭であるが、之れに對する官憲の神經の尖り方と來たら亦格別である。社會主義者は大抵其の前晩から檢束される。檢束を免れた者は當日の示威行列から引つこ拔かれる。勿論示威運動そのものに對しても猛烈な威壓を加へる。今年の東京のメーデーでは、參加人員五千人を算したが、警視廳に檢束されたものは、社會主義者と勞働組合員を合せて約四百五十人であつた。官憲は頭からメーデーの示威運動を敵視してかゝつて居る。上官の意を迎へるに汲々たる精悍な下級警官は、一寸した口實を見出しては無暗に勞働者や社會主義者を引つ張つて行く。たゞ引つ張るだけならよいが、日頃鍛えた武藝の技を見せて呉れんと毆る蹴る首を絞め

る。揚句の果ては新聞記者まで殴り飛ばして傷を負はした。

社會主義運動や勞働運動に對する苛酷な壓迫もさることながら、朝鮮人の運動に對する×××××××××××××××××××××××××××××××××××××人の先驅者が火の如き×××と鐵の如き志操を有するのは、此の殘虐なる試錬を經て來たからである。

二、

以上のところは官憲が直接に社會主義者に對して揮ふ物理力に就いて述べたのであるが、官憲は更に一歩を進めて、社會主義者と一般社會とを隔離することに異常な骨を折るのである。社會主義者を不逞な狂亂的な變態心理の所有者のやうに一般に吹聽して、社會民衆が惡性の傳染病患者に對する如く之れに近づくのを忌避するやうに仕向けるのである。それは相當に成功して居る。「僕は社會主義者だ」といへば、素樸な頭を持つた者はスグ胡散臭い感じを起さす程、宣傳は利いて居る。就中、社會主義者を特殊扱ひにするのに與つて力ある方法は、忠君愛國一點張りで鍛へ上げられた純樸な人々に、社會主義者は皇室を何んとかするものだと說きつけることである。此の方法は多くの場合、社會主義者を一遍に「國體を紊る國賊」にすることが出來る。政府、資本家、御用思想家は、學校、工場、兵營、徴兵檢査場、教會、寺院、家庭等に於て、種々樣々の眞しやかな方法を用ひて、社會主義者の隔離運動をやつて居る。彼等の努力の效果も大分現はれて、無產階級自身が、無產階級の指導的精神の所有者である社會主義者を排斥する場合が到る處あるのである。

併し乍ら如何に社會主義者を壓迫し、社會主義者の隔離宣傳をやつたところが、社會主義思想の當然發生し發展する約束を持つた資本主義社會の下に於ては、年を逐ふて社會主義思想はますく無產階級に浸潤し、それが次第に力強い運動となつて現はれざるを得ない。此の必至的社會現象は、如何に周到嚴密なる警視廳的物理力を以てするも、到底之れを抑止することは出來ないものである。よく世間では社會問題は流行後れだといふが、實際は社會主義は日々猛然たる勢を以て知識階級及び勞働階級に信奉者を見出しつゝある。世界大戰前に於ては、我國の社會主義運動は一部知識階級の思想運動の如きものであつたが、大戰後に於ては確しかに其れが大衆化的傾向を示し、勞働運動や一般社會運動の指導原理たらんとしつゝある。例へば日本勞働總同盟の綱領に就いて見ても、明かに此の傾向を見るのである。總同盟の創立當初(大正元年)に揭げた綱領は次の如

きものである。

一、我等は公共の理想に從ひ、識見の開發、德性の涵養、技術の進歩を圖らんことを期す。

二、我等は共同の力に依り、着實なる方法を以て、我等の地位の改善を圖らんことを期す。

三、我等は互に親睦し、一致協力して、相愛扶助の目的を貫徹せんことを期す。

右の綱領は昨年の第十一年大會に於て左の如く變更された。

一、我等は團結の威力と相互扶助の組織とを以て、經濟的福利の增進並びに知識の啓發を期す。

二、我等は斷乎たる勇氣と有效なる戰術とを以て、資本家階級の抑壓迫害に對し徹底的に鬪爭せんことを期す。

三、我等は勞働者階級と資本家階級とが兩立すべからざることを確信す。我等は勞働組合の實力を以て、勞働者階級の完全なる解放と自由平等の新社會の建設を期す。

三、

社會主義思想の普及及び社會主義運動の勃興に就いて、支配階級はしきりとやきもきせざるを得ない。此の形勢を見て、國暴が來たとばかりに憤慨して義勇兵を申出る國粹會、赤化防止團、經綸學盟等もあるが、支配階級は最後の鐵腕政策を案出する。過激社會主義運動取締法案が之れである。併し此の鐵腕政策はうつかり實施出來ない。下手にやると、反對黨の政爭の具に利用され、小ブルヂョア階級の猛擊に遭つてスゴ／＼引つ込めるやうな不體裁を演ずるからである。それを立派にやつてのけるには、一般社會をして否應なしに首肯せしむるやうな口實が無ければならぬ。政府は此の有力な口實を見つけるために常に高等警察の督勵を怠らない。かくて高等警察が血眼になつて探し當てたものが「社會主義者の大陰謀發覺」であり、「第二の幸德事件」であり、「政府大官の暗殺計畫」であり、「爆彈の發見」である。警視廳は大鳴物入りで社會主義者の大檢擧を行ふ。新聞記者は血迷つてしまつて、あることないことをゴッチャにして書き立てるから、事件は素晴らしい光彩を以て包まれて來る。

僕は今度の所謂共産黨事件がどんなものか知らない。如何なる刑罰を適用されるものか知らない。事件の取調の進むにつれて、其の内容は判明することゝ思ふ。**然るに今度の事件に就い**て、一般の世人に頗る奇怪な感を抱かしめることは、檢擧當日のあの仰々しい新聞記事が、日を經るに從つてだん／＼小さく細つて來ることである。最初は、コレハ大變だといふ印象を與へて置いて、次の日から次第に、これは大したことではないと

いふやうな印象を與へつゝある。大したことでなければ、それで結構であるが、併し一般の社會人殊に地方人などには、あの恐るべき第一印象がいつまでも腦裏に刻印されるのである。そして日頃宣傳されて來た「社會主義者は國賊だ」といふ觀念がこれによつて益々鮮明に確實にされるのである。その結果、社會主義者といふ奴は、モツト之れを嚴重に取締らねばならぬといふ考へになり、政府の行はんとする鐵腕政策に同ずるに適當する心理狀態になるのである。今度の事件は、此の意味に於て顯著なる効果を生んだに相異ない。事件の內容如何に拘らず、我々が新聞記事に就いて察するところによれば、今度の事件が一面に於て、花々しい白化宣傳の一齣であり、政府の將に行はんとする或る種の鐵腕政策の實施に頗る有利な條件を與へたことは疑ない。併し、仰々しい白化宣傳と鐵腕政策とが、果して能く資本主義沒落の必至的運命を救ふか否か、我々は其の顯著なる効果を疑ふものである。(六月十三日)

官憲も時代眼を用意せ

千葉龜雄

社會主義取締りの手心とか、方針とかはどういふものか、恐らく取締りの元締めである當の當局からが、一向わかつて居ないらしいのだから滑稽な話で、其の證據には、一つの取締り的實行と他の實行の間に、それを連絡づける一つの理法も無い。此間警視總監が西神田署へ臨檢に行つて、或る巡査にレエニンについての何かの、極めて常識的な質問をしたら、その答案の奇拔さは、全く驚嘆に値するものがあつた。かういふ警官でも立派に主義思想の取締をする權限を許されて居るのだといふと世の中といふものは恐ろしく變挺になる。

今度の大騷ぎだつてそうだ。廿世紀文化の標本みたいな、宣傳といふものの利用については、警視廳も隅に置けぬほど中々うまくなつたが、さてこの大宣傳の結果はどんな獲物をつかまへたといふのか。尤も正直な中味は、いよいよ評判があつた上でないと解らぬが、どつちにしたところ、あの頃の凄まじい宣

氣込みに比べては、捉まへたものは、結局煙のやうなものでないかと取越苦勞もされる。いくら共産主義の何のといつても、現代のボルシキストは云ふまでもなし、その目の敵であるアナアキストでも、共産主義の理想では共通である。今月出て直ぐ發賣禁止になつた「突破」の中で堺氏が「ヨーロッパのプロレタリヤ運動の左翼は大體コンミユニズムに發展した。それが日本にも影響せずには居られない」といつて居るが、影響する所か、普通のブルジヨア・リベラリストでも私有財産廢止、共産主義の主張を持つて居る人には、その邊にどれほども轉かつて居る。イギリスのエッチ・ジイ・ウエルズや、バアトランド・ラツセルは、みな共産主義の支持者だが、日本の武者小路氏などは、一足御先に飛越して、日向に共産村を建てて居る。また大抵の主義者は、自分はコンミユニストだといふ事をはつきりと自分で話合ふ上で諮詢して居る。だからもし共産主義の研究が悪ければ、家並み警察の御厄介にならねばならぬわけだが、いかに「階級打破が直ちに社會秩序破壞の實際行動」だと主張する政友會當時の内務省でも、そこまで踏み出す勇氣は無からう。

で、それはどうする譯にもいかない。唯だ今度のは「極東共産黨」とかいふ秘密結社を結んだのが捉まへ所で日露承認問題がやかましい頃でもあり、ヨツフエ氏も來て居る。赤化見本のためにもどうかして久しぶりに取つちめてやらうと思つて居た節が、旨く壺にはまつたのだといふ話もある。も一つは、こんな結社をつくるものも、つまりは海外から金をもらつて、宣傳をする事が出來るからだといふのだがあいにく之には取締の法律が無い。だから、それには例の過激法案を何でもかでも早く提出して、いたい目に遭せねばならぬといふので、過激法案の提出にも、大分引掛りを見つけて來た――いや、實はこの法案の引かかりを見出す爲のこの騒ぎだといふ評判もあるが、それでは神聖な法權の取扱ひを全く轉倒した沙汰だから、當局の名譽の爲に一先づ取消して置く方がよからう。――さういへば秘密結社が既成法律に觸れることは、なるほど違警罪廿八條乃至七十七八條にあるのだからそれも一通り合法の處置としてもよい。但しそれが單に結社に過ぎないのか、しかし結社といへば、どうせ何等かの行動に移る過程だらうが、今度の豫審中の問題がそれにどれほどまで觸れて居るか。そこがわからぬので議に議論が出來ぬが、もし普通の法律使用の目的たる、第一が犯罪防止、第二が犯罪者の懲治、改悛、第三がそれによる社會安寧の維持などいふのか、今度の大檢擧の目的であるならば、それは當局から見て第一の目的だけの(もし犯罪といふべくは、)十分

の一位ゐが僅かに達せられただけで、第二第三は全く無効であるばかりではない。それほどでもないと思はれる事件に、誇大な大騒ぎをした事實によつて、（裁判所側でもそれ程の大事件ではないと云つて居る）警察權や、法律性の權威を何ほどかでも民衆に疑はせる記錄を與へた事が第一。第二に、出來るだけその存在を民衆に氣付せないのを得策と考へる當局が、無用などたばた騒ぎによつて、知らして惡い筈の主義や傾向を、却つて大袈裟に觸れてあるき、逆さまに民心の不安を惹き起した事。この二つの事實が社會に與へる損害は、犯罪防止（現行法律の上から見て、たとへばその疑ひがあつたとして、）の幾部分の、目的達成位ゐの効能では、とても償還される譯のものではないまして結社などといつても彼等にとつては結社したとせぬによつて、事實上の主義の宣傳に、何等の差別もある筈はないのであるから。要するに私から見れば、あの檢擧は社會主義取締に何の効力を與へるものでなく、またそれだけの事なら、何も檢擧などの必要はないやうにも思へる。儲けた者は主義の宣傳的大宣傳による主義者側の方に却つてあるであらう。

次に大學研究室の臨檢がひき起した學問獨立の權威については、高田總長は、もし裁判で立證せられた結果、犯罪となる證據が少しもなかつたなら、その時こそ裁判所側に目にもの見せてやると憤慨して居るのは變だ。一體どういふのがこの犯罪の正體であるか、それの目標の分るが先づ大切であるが、それよりも研究室の蹂躪が間違つて居るのは、それが犯罪があるとないとにはよらぬ。それがたとへ犯罪であらうとあるまいと、絕對に研究室を臨檢する理法が惡いといふのである。もし個人の物品を檢閱したいなら、別にどうでも方法がある。それを無視して、强ゐて、研究室を臨檢した學問獨立の蹂躪が理屈にならないといふのである。その心理が怪しからぬといふのである、尤も私などに云はせれば、たとへ大學だらうが何だらうが、今日の教育機關では、その研究室からが、已に官僚的精神や、反人類文化精神や、その他、等々の者で平生完全に蹂躪されて居るのだから今更警察に臨檢されたとて學問の獨立がどうだなどゝ、うでまくりしていきみ立てる義理は少しも無いのであるが……。

が、それはそれとして、こゝでおそれるのは、警察や法律が考へるほどの、社會主義者の、いはゆる「赤化」程度のそれではない。それは即ち現代における法律權、警察權の昨今の行使方法のいかんが、どんなに社會生活の根本に、大きなゆるぎを與へつゝあるかといふ事である。一體「國家が力である」といふ場合に、その力を代表するものはいつも兵力と、法律權と警察力でなければならぬ。けれども兵力は、特殊の性質のものだ

からこゝでは除外する。法律權と警察力が發生する根據は、どこまでも民衆の利福を保護する爲であつて、民衆を恐怖させる爲であつてはならぬ。道德が內在として個人の生活を整理する場合に、警察權は法律の執行機關として、社會連帶生活の整理と融合を計ることを基調とすべきものである故に、當然に、警察力も、法律も、時代と道德を背景とする社會生活を土臺として、どこまでもその利害に遂行しないやうに、充分に聰明な時代眼と、人類的な屈曲性を用意すべき約束がある。勿論法律も警察權も力ではあるが、その力の恐怖の發動さへも、民衆生活の安定のための、止むを得ざる場合の强制力なのであつて、かくて法律も、警察權も、始めて民衆を恐怖させ、民衆を逃避させるものではなく、却つて之によつて、民衆に安心して、依賴し、親ませる本務を盡すことが出來るのである。

然るに鬪爭本能の潛在意識を持つ人類といふものは、とかく困つたことに、力といふ機械力に關して非常に强い誘惑を持つ與へられた力が、たとへ他の本務をつくす爲の、萬一の用心として附加されたものであつても、つい知らず、その與へられた力の使用といふ屬性のみに無限の興味を感じて來る。其の結果、思想が混亂して、平和の使者を命ぜられた筈のものがいつしか恐怖のひろめ役專門に役目をとりかへて了ふ。そしてその與へられた力が大きければ大きいほど、なほもその不可侵な權利を濫用する興味が大きくなる。かうなるともう手がつけられない。かゝる場合に民衆の側にひき起される心理現象は、一方において法律の權威に對する無限の侮蔑であり、他方において法律の現實に對する無限の恐怖である。丁度狂人が正宗の銘刀をふるやうなもので、狂人の心理は冷笑に値するが、ふり廻す刀の尖は劍呑至極だ。けれどもどつちにした處が、この場合民衆の胸にやどるものは、單に法律の無視である。そしてもし法律や警察權の不可侵な神聖が、かくも無反省に使用される時代が來たならば續いて來るものは、國家の法權に對する民衆の嫌忌と反抗である。それはまことに戒愼すべき時代と云はねばならぬ。事實は手近かの一國土に起つた、最近の歷史がそれを語つて居る。

今度の大檢擧や研究室蹂躪についても、警察側の誤算だとか又は裁判所側が手にのつたのだとか、いろいろ噂もあるが、それは單に噂であるかも知れぬ。少くとも我國にあつて、この不可侵な法權と警察權が、或る點まで熱烈な誠意をもつて取扱はれてゐるものであることには、私とて盲目でないのではあるが、また時代と錯誤した、頑な一本調子の誠意といふものが、時によつていかに大きな實害を社會に與へるものであるか

は、全く身ぶるいに値するものがある。ましてやそれが力への無反省な唯一無二の信仰と抱き合つた場合には。

言ひたきこと二三

室伏高信

馬鹿と鋏とは使ひようによつて切れる。秘密の結社が司法上の大事件となつて世間の耳目を聳動させる、なんぞいふような昔話は、何んでも中學時代に伊藤痴遊の講談か何かで慥に聞いたことのあるような覺えがする。若し「文明開化」の今の世に、治安警察法第何條とか何んとか彼とかいふような、××××××××××××××××を探し出してきて、この秘密の結社なるものを一刀兩斷し、それで大向ふをアツといはせることが出來るとしたら正に天晴至極の立役者なのだ。

この立役者が金釦洋刀の扮裝ならこれを名巡査といひ、または名警視總監、若くは名内相ともいふ。どつちにしても同じものなのだ。そいつを嗅ぎ出してきて嘘八百を書き立てるものが名記者なのだ。

役者は揃つてゐる。上に名うての官僚君があり、下に兎耳梟目の名記者君あり、どんな興業だつてやりたくてやれないことはない。

大爆彈事件の陰謀！大臣暗殺の密計！號外々々！見物人たるもの正に固唾を飲み手に汗を握らざるをえないではないか。

私たちのような正直者は號外を讀んでゐるうちにもう大臣の首が四つも五つも飛んでしまつたかとも思つた。白晝切りとる大臣の首か！櫻田門外雪紛々でないだけ季節が面白くなつたなあ！私はかういつて嘆息したい位であつた。さうかと思ふと、また直ぐになあんだ、あんな腐りきつた老耄れの奴どもの首を切るなんて、日本刀の穢れだ！私は再び嘆息した。

日本刀はたう〳〵穢れずにすんだ。が、この大陰謀事件の「巨魁」堺利彦以下の悪る者どもが捕縛されたとなると今度はこの國賊共の首が飛ぶのか、日本刀の名譽もまあいくらか回復だ、友さんや、練ちやんの髑髏首を切るよりか少し古るくはなつてゐてもサカヒ・カリニンの雁首でも取つた方が優しだ。

そうなつたら上は和氣清麿、楠正成・乃木希典から下は上杉愼吉のともがらに至るまで安心だ。天下の丸持ちの諸君も確にやれ〳〵と胸を撫で下ろすことができたであらう。

嗚呼々々！何も彼も一場の夢であつた。サカヒ・カリニンの白も飛そうにもない。ヤマカワ・ラデックもぴん〳〵してゐる。サノ・チノヰエフさへ壓を蒙つたといふぢやないか。日本刀は正に脾肉の嘆だ。

上杉愼吉よ、しかし、がつかりするなよ。この事件が龍頭蛇尾に終つたからといつて直ぐに世の中が澆季になつたかに思つたら、お前さんは「當局の苦衷」を知らない田舎作なのだ。この冬まで待ちなさい。過激法案とかいふものを和製ビスマアクがせつせと拵へてゐるといふぢやないか。その時だ。國賊どもを一網打盡にやつつけることのできるのは。そして素町人どもを嬉れしがらせることができるのは。

しかし誤解されても困まる。私は上杉愼吉や楠正成ばつかりを最負にしてゐるのではないのだ。

社會主義だつてまあ損はないさ。首をちよん切られる位ひは覺悟の前さ。主義者の看板をかけただけで飯が喰へてゆくなら社會主義はあんまりにいゝ商賣だ。時々は年貢も納めべきだ。年貢か金儲けか。今度の共產黨事件は主義者にとつては儲けではあつても損にはなるまい。この一、二年社會主義も流行しなくなつて、日蓮、親鸞、腸チブス、軍事研究團、ムツソリニ、武藤山治、ヒツトレイ、天然痘、赤化防止團なぞが流行するといふことだ。この時の社會主義を一網打盡にやつつけるといふのが「當局の苦衷」なるものであらうが、主義者よ心配することはない。社會主義は色揚げの機會なのだ。かくして徐々本ものになつて行くのだ。素町人の番頭どもが一生懸命になつて社會主義運動を本ものにしてくれてゐるのだ。

日本に共產黨といふ秘密結社があるかないか、それが秘密結社である限り私たちには分らないわけだ。けれども去年一月モスコウで開かれた共產黨極東大會でも、若しくは同年十一月の第三インタナショナル大會の席上でも日本に共產黨のあることが報告されてゐることから見ると、少くともモスコウでは日本共產黨なるものを認めてゐるわけだ。外國の政府さへ知つてゐるものを探偵國の日本政府が今まで知らずにゐたのが寧ろあまりに阿呆であつたのだ。內地にばかり探偵が充滿してゐるのなら兎に角、米國へ行つても、英國、獨乙、佛蘭西、どこの國へ行つても士官、官費留學生、どこそこのお役人といつたようなわが大日本帝國の「お上」の人間が人民の金を濫費してうよ〳〵してゐるのだから第三インタナショナルの報告書位ひは

見てゐる筈なのだが。

今度の事件は社會主義運動に何の惡影響もない。昔の幸德事件の影響とは丸で譯が違ふのだ。たゞ社會主義運動の刺激となるばかりだ。サカヒ・カリニンなどもそれで益々執行委員長としての威望が加はつて行くことであらう。

損をしたのは早稻田大學の先生方位ひのものだ。官憲に大學の自由とかいふものを蹂躙されるなんて。

それもよく考へて見なさい。大學の自由！研究の自由！私は無論賛成なのだ。だがしかし研究の自由とは大學の獨占なのか？大それたことを言ふ者ではない。大學の先生方だけが研究の自由をもつてゐられて堪るものか。民間の先生方はどうなるのか？早稻田大學の大山教授の研究室に侵入してはけしからんが民間の山川均の研究室は蹂躙してもいゝといふのか、獨逸の昔の大學の御用教授や、獨逸崇拜のブルヂョア學者のいふやうな古くさいことはもうやめて貰いたいものだ。われ〳〵から見ると却つてあべこべなのだ。今の大學の先生方は世間から身分不相當に買はれてゐるのだ。馬鹿でもチョンでも老朽でも雛兒でも大學の先生とさへいへばエラヒ學者のやうに世間は思つてゐるし、先生方も増長の氣味じあないか。研究の自由なんぞ生意氣なことをいふものは今のような資本主義の機關、若しくは官僚の機關である大學なぞに平然として勤めてゐることはできない筈ぢあないか。大學の自由などいふケチ臭ひことは止めて萬人の自由のために戰へ。その勇氣のないものはくよ〳〵いはずに安月給で泣寢入るべきなのだ。社會主義の世になつたらこうした人の殆んど全部は「自由に研究」して貰いたくない人ばかりぢあないか。

新聞に現れた共產黨事件

山川均

□

六月五日の新聞を繰り擴ろげて見ると、先づ第一番に不思議なことは、この朝行はれる筈の共產主義者の檢擧が、夜半に刷り上つた新聞に、しかも大々的の大見出しで掲報せられて居る

ことである。新聞紙は一齊に、前代未聞の大事件であると報じて居る。しかし其れほどの大事件の大檢擧が、これほど大袈裟な新聞紙の先き觸れで行はれた例めしは、慥かに前代未聞である。

その日早稻田大學では、研究室の家宅搜索をやられたが、豫審判事の自動車が早稻田に向ふ。かつきり三時間前に、各新聞社では、研究室搜索の號外が出來上つてゐた。家宅探索中は、家人の外出すらも許されぬのが通例である。三時間前に新聞號外の大袈裟な先き觸れで家宅搜索の行はれた例めしも、慥かに前代未聞のことである。

たゞ六月五日の新聞紙を一瞥しただけでも今度の共産黨の檢擧なるものが、前代未聞の檢擧であることが分かる。前代未聞の檢擧でないまでも、少くとも並み一通ほりの事柄でなかつたことがよく分かる。

□

其日の夕刊を擴ろげて見ると、愈々以てこの事件は、並み一通りでない事件に發展する。『社會主義者大檢擧、暗殺や赤化運動』、『大逆の眞相を今日閣議に報告す、範圍全國に及ぶ』『背景に大陰謀、共産主義者一網打盡』、『勞農ロシヤから爆彈を密輸』、『秘密結社の大檢擧、勞農黨の陰謀發覺す』、『今秋の重大時機をトし、○○○政府の樹立』、陰謀發覺して百五十名、一網打盡』、曰く何、曰く何——こんな大見出し(一寸四角もある大活字の大見出し)の下に、謂ゆる前代未聞の大事件の『眞相』が一齊に報導されて居る。何でも『○○○に關する大陰謀事件』であつて『過般來より○○の目的を以て爆彈を製造し或は輸入したもの』ださうである。そして是等の報導を裏書きするかのやうに、新聞紙は一齊に、直接の當局者たる水野内相が『事實と證據は握つて居る』、『覺悟の上の斷行だ』と、『決心を語つた』ことが報ぜられて居る。

もう一つ面白いことは、各新聞紙には申合せたやうに、此事件の擬せらるべき刑法第七十七條内亂罪に關する條項が御丁念にも正文まで掲載せてあることである。

この仰々しい前觸れで檢擧せられた十二三名の共産黨主義者は、愈々治安警察法違犯として、豫審に廻はされたと云ふことである。

新聞の誤報は決して前代未聞のことではない。しかし是れほど見當違ひの誤報を、しかも全ての新聞が一齊に歩調を揃へてやつたことは、慥かに前代未聞のことであり、慥かに並み一通ほりでない事である。若し之を新聞の誤報とするならば、少くとも記録的の誤報でなければならぬ。

秘密を傳ふべき完全な組織をもつ警視廳が、翌日の朝やらうとしてゐた大検擧を、前夜のうちに共の內容までも覩破した千里眼の新聞紙が、揃ひも揃ふて似ても似つかぬ、間違つた物を透視してゐたことは、若し偶然とすれば、慥かに前代未聞の偶然である。在るものは皆な合理である。合理なものでなければ存在せぬ。斯ような前代未聞の偶然——斯ような在り得べからざること——在るべき理由が無ければ在り得ない。新聞が誤報をしたのも成るほど尤もだつたとうなづかれる理由がなければ在り得ない。

警視廳では前夜のうちから、わざ〳〵二十臺の自動車の勢揃ひをして、新聞記者に見せびらかせておいたと云ふことである現に之を見て、五日の記事を書いた老練な記者の一人は、苟めにも重大事件の検擧の前に、態々斯うした仰々しい準備や思はせぶりを見せられた例めしは未だ曾て無いので、實は變だなと思つたと述懐を語つてゐた。成るほど前代未聞のことに相違ない。また他の一記者は、五日の夕刊に現はれた事件の內容は、正力官房主事から記者團に暗示せられたものだと物語つた。そして第三の記者は、私の顏を見るといきなり『今度は一杯喰はされました』と憤慨した。

私は誰れが喰はしたのか、何を喰はしたのか聞き落した。

□

二週間前から旅行——乃至は『逃亡』——してゐた私は、大検擧の號外を郷里で見た。私は五日の朝は東京で検擧されたり逃亡したり、潜伏したり、逮捕令を移牒されたり、令狀を執行されたり、五日の晩には郷里で逮捕、東京へ護送されたりして居る間にも、約束の原稿を二つ三つ書き、そして七日の午前にほんとに郷里を立つて東京に歸つたので隨分忙しかつたが、それでも二日半ばかりの間に、可なりに多くの種類の多くの人々に逢ふた。ところが是等の人々——その多くは社會運動に何等の興味も持たぬ人々——が私に對して發した第一の質問は、揃ひも揃ふて、殆んど一人の例外もなく——『今度の事件は、政府は一體何の××でやつたものだらう』と云ふ疑問であつた私は此の事件の裏に、どんな政略があるかを知らぬ。けれども此の事件の報導を讀んだ時、地方の人々の受けた第一の印象が何かの政略だらう、何か政治的の意味が含まれて居るに相違ないと云ふことに一致してゐたことだけは、爭はれぬ事實である

現に或る人は、ヨッフェの來朝以來、國民思想の惡化だとか赤化だとか云つて、その實大政黨の內意を受けて日露會議の再開に反對したり、妨害したりしてゐた或る人も、愈々大勢に引ずられて、最早や對露交渉の開始を如何ともすることが出來な

くなつた今日、今までの言ひ分に對しても、惡化だとか赤化だとか云つた何かの振り所を示さねば面目が立つまい、いや尤も千萬ちやと、ひどく思ひ遣りのよいことを云つた人もある。また議會で否決になつたものを緊急勅令で出そうと云ふのだから何か無くては勝手が悪るからう、愈々出ますかなと云つた謂ゆる地方の有志家もあつた。また或人は、正力官房主事も愈々内務部長になりますなと、私にはよく分らぬ穿つたことを云つた人もあつた。

在るものは皆な合理である。その如く、することは皆尤もである。人間は曾て、尤であると肯づかれぬような事をやつた例めしはない。全てが尤もである。新聞が誤報をしたのも尤もである、故らに新聞をして、組織的に誤報をさせたものが若しあつたとしたならば、それには一層も千萬なことがあつたに相違ない。

□

地方を旅行して見て今更に感じたことは、社會的不安と之を反映した思想の動搖である。崩解期に入つた資本主義の不安定を無意識に反映した思想の不安な、農村に往つても小都會に行つても、大衆の間に滿ち充ちて居る。彼等は何物かを求めて居る。けれども求むべき物が何であるかを知らぬ。彼等は現在の生活は、どうかなることを感じて居る。しかしどうなるのかをはつきりとは知らぬ。彼等は何だか大きな力によつて、何處かへ運ばれて居ることを感じて居る。けれども何處に運ばれて居るかを覺つては居らぬ。彼等は暗の中を手探りに探つて居る。彼等は何處からか、微かな光の差し込んで來ることを感受する。けれども彼等は、其の光が僅かにどの方角から來て居るかを知らぬ。彼等は其の光を、どの方向に求めてよいかをも知らぬ。

彼等は今、何物かを求めて聞き耳を立てゝ居る。

この時彼等の耳元で出し拔けに大きな音がした。×××！×××！××××　××××××××××の方を振り向いた。

私は地方にあつて、共産黨大檢擧の報導が達した刹那に於ける、人心の機微を目の當りに見ることが出來た。假りに其の筋の計畫が、×××××××××たとしたならば、今度の檢擧は、豫期以上の成功を收めたと云つてもよい。政府と警視廳とは、全日本の新聞紙を動員して、大衆の頭の中に、共産主義の四字を恐ろしい力で叩き込んだ。政府と警視廳とは、共産主義の七面倒な理論を説明する代りに、共産主義を力強い觀念として暗示した。

警視廳では、共産主義者はロシアから金を取つて宣傳をしてゐるかの如く云ふて居る。そして警視廳は國民から税金を取つて、共産主義を宣傳しつゝある。

□

共産黨の大陰謀も煙の如く消へ去つた。ロシヤから輸入された爆彈の響きも靜まつた。黒い手で掻き亂はされた池の水が再び澄んだ時、この底には怪物の姿が映つて居る。

露西亞通信

在モスコウ　片山潜

全露共産黨第十二回大會は愈四月十七日午前十一時を以てクレムリン新宮殿に於て開會した、定刻には數千名の代表者か參集して第四國際共産黨大會の時よりも遙かに多數の代表者が集まつたので眞に滿堂立錐の地なき有様である。僕も、國際共産黨代表者(英のマクマナス、獨のレヴイ、伊のクラムシー、芬のクシネン等)中の一人と選定されたので、特に出席する事となつたので充分の觀察も出來た、又、今大會の十一月革命の第五年祭に次ぐ建黨二十五年祝賀祭に當るので一層の深き意味を有し、加之、全露統一の第一の大會で北サガレン以外は全く自山の露國からの代表者が集るので、前景氣は非常のものです。尚ほ二ケ年前の同黨大會で採決、決定して實施し來りたる新經濟政策の結果の顯著になりつゝある際なれば各地よりの報告は一層の注意と趣味とを以つて迎へらるゝのである。

今日開會の模様を記する前に昨夜國立大劇場に於て代表者の饗應として歌劇を演じたが今其實況を摘錄する。此會に、各遠近地より來會せる代表者中にはモスコウに來たのが始めての者も澤山ある事なれば、彼等に取つて一層の歡迎の意味を有するのである。此大劇場は依然國營である。昨年十月限り一時閉場する事に決した、其理由は經營上困難であるからであるが、其重なる點は藝術家等の月給が高いので到底收支がつぐなわぬと云ふことであつて、藝術家等は外國へ出稼ぎすると云ふのであつたが、しかし藝術家達は月給は安くともよいからモスコウに居て働きたいと云ふので終に繼續開演することゝなつたのであ

る。而して彼等は勞農露國で寧ろ安い月給で働くを滿足せるものである、無論新經濟政策の下に經營することであるから萬事經費は掛る。當劇場は六階の大劇場である、第三バルカニーが百ルーブル、即ち我二圓位いに相當する、ヲーケストラは十圓内外で最上席は二十圓もするが何時も滿員である。

昨夜即ち四月十六日は全く大會出席代表者と其直接間接の關係者を以つて滿堂を占領した。歌劇はビゼーのカーメンであつた。其演じ方と背景は露國獨得のもので、宏大なる裝置と、華麗なることは實に嘆賞の外はない。僕は歐米にて屢々カーメンを觀たが其何れよりも一番立派で而かも愉快であつた。

當夜僕を最も强く刺戟し且つ深い〳〵印象を刻した一事は其歌劇の面白かつたこととか又其背景の壯觀であつたことではなかつた。其は僕が今日迄劇場へ出入して未だ嘗つて見ない一事を觀たのである。それは初幕が終ると一同志が舞臺に現れて、觀客の爲に如何に背景の變更を行ふかを示すであらうと報告して落した幕を一切に引き揚げて舞臺の大變更をやつたのである、其活動振りは敏速で取り下ろしも圓滑に行き又仕組も早く出來た、それに對し限りなき趣味を感じた。で、愈出來上つて幕を下ろした時に、觀客は一切に拍手喝采を始めた、で又幕を揚げ、全大道具掛り員が舞臺に起立して其觀賞に接した、此時の拍手は實に今でも忘れることの出來ぬものになつている、舞臺掛り大道具の人々も滿足であつたらうが、我々總觀客も亦同じ勞働者であり、又、互に關係があることを語つたので僕は非常なる感に打たれた。斯る事は露國に於てのみ行はるゝのであらう。

愈午後十二時三十分、モスコウ、ソヴヒエツト會長カメネフ氏の簡明なる開會の辭を以つて大會は開かれた、曰く「我がレニンは今大病に罹つてる、彼は世界革命の大勝利者である如く、彼は其病氣にも打勝つて、又我々の間に働くであらう。彼の病氣は全く過勞の結果から來て居るのである。が、決して回復の望みなき譯ではない。今や日々快方に向つてる」と云ふ意味の冒頭を以て演説を始め、全代表者は起立してインタナショナルを歌ひ、カ氏は進んで露國共産黨は第二十五年祭であるがレニンに取つては正に第三十年祭である。千九百四年迄の黨

は微々たるものであつた、而かも一九百五年の革命は失敗に終つた、我々は敵を殺し得なかつた。亦、我が敵も我々を殺し得なかつた、千九百十七年迄は、我が黨は秘密運動をやつた、小なるヌラレアイを以つて暗々裡に運動を繼續して來た。千九百十七年の革命は我々をして勞農國家を組織することを得せしめた。而して今や失敗や成功を積けつゝも、益國家の基礎を鞏固にしつゝある。今日及今後の重大問題は、如何にして產業勞働者と農民とが手に手を携へて進むかにある。今日は實に之が事業は急務である、不幸にしてレニンは我々と一つに此處に働き得ない、併し、彼は我が勞農兩勞働者が如何に結合し、如何に働き、又、如何に進歩せねばならぬ事を既に論文として發表して吾人に與へたから之を基礎として働くことが出來ると。又、結論には黨の結束が最も重大である事と、勞農露國政府の進航は黨が大に監督してやらねばならぬと云ふような意味で開會の辭を結んだ。

次に大會中の中央執行委員即ち幹部二十五名の選擧を行つた、其中重なる者はアクンドフ、ブカーリン、バラシロフ、ザルツキー、ゼレンスキー、ヂノヴヒーフ、カリニン、カメネフ、レニン、マラトフ、ペトロブスキー、パコブスキー、ルイコフ、スターリン、トムスキー、トロツキー等で當時の有力者を網羅して居る。其外に二三の委員を選定してヂノヴヒーフ氏の報告演說があつた。殆んど二時間に渡る大演說で、日露の關係にも言及した。勞農露國は、既に正式に通商を開いた國々、非公式に通商を開いたものと全く國交遮斷せるものとあるが、露國の國際的位置は益鞏固になりつゝある。其他內政外交に對しての報告をなして晝の會を終り、夜はスターリン氏とノギン氏の報告ありて第一日の會を終つたので仲々皆熱心に出席し、時間等も露國には不似合な程キチリ／＼と守り、そして討議が續けられた。

ノギン氏の演說後、コンミンターンの代表者が、五分間演說をした。ポーランドのドンパー氏は最も盛んなる歡迎を受け、聽衆は總立ちとなつて敬意を表した。英のマクマナフ、佛のレ

ヴヒー、獨のノイラー、日の片山等の演說で當日の會を終つた。

翌十八日はヂノヴヰーフ氏の報告の討議があつた。舊勞働反對の殘黨共が多少は幹部抗擊を試みたが、別にたいしたこともなく、クラシン、ヲシンスキーのヂノヴヰーフ批評演說とラデツクのヂノヴヰーフ辯護演說は何れも皆花が咲いて頗る痛快を極めた。

總べての爭點は、所謂レニン主義の修正である。其の骨子とも云ふべき點は曾つて（昨年）新經濟政策に對して總べての產業は共產黨員か監督支配せねばならない、而して專門技師を使用して彼より技術を學び終に黨員外の技師の必要なからしむるに至らねばならないと云ふのである。

然るに、之が反對論者は政治的には立派なる專門家なる黨員も實際の產業になると盲目同然である。此人が專門技師を監督且つ支配することは有害無益であるから宜しく之を廢止すべし、換言すれば、黨と產業とを全然分離して產業は專門家に一任すべしといふのである、之が有力の理由は現下の產業は收支償はず之が儘につゞけば非常なる困難に陷るべしと云ふにある、之が有力なる主張者はクラシンである。

但し、クラシンの說は無論採用されぬであらう、修正派は今日迄の監督支配の地位に在る黨員の欠陥を基礎として修正を唱ふるのであつて全然現組織を否定し、之が不可能を主張する譯には行くまいから、結局彼は現制度の改善に滿足せねばなるまい、此議論に對して勞働反對派を幹部抗擊の意味から修正派に贊成する樣であるが大した勢力となるが如き事はない。

ラデツクもサフワロフも皆斯る討論の繼續無用論者であるから決して物にはならない。

本日最も大會の注意を惹ひた一事はユゴスラヴ、ドンネツ其他からナンバーチー農民の代表者が本大會に來りて祝意を表して記念の旗を贈りたる事である。彼等の共產黨に對する信任は頗る健實である、其各代表者等の演說も皆熱心のもので全聽衆を感動せしめた。

（四月十九日モスコウ府ルツクス旅館にて）

勞農露國新勞働法（全文）

勞農露西亞の舊勞働法は革命の翌年（一九一八年）に制定せられたものである。當時國內の反革命的勢力は國外の反動勢力の援助の下に必死の反抗を試みてゐた。そして、生產機關は勞ひ彼等の爲に反動革命の用に供せられた。また十一月革命の數日後（十六日）の布告によつて、一切の工場には勞働者の統制權（コントロール）が樹立せられたるにも拘らず、傭主と技術員側のサボターヂの爲に殆んど有名無實に終つてゐた。殊に多くの工場主は、工場を棄てゝ逃走した。そこで勞農政府は、一方には斯ような反革命的運動から經濟上の根底を奪ふ必要から、また一方には是等の生物と機械が、勞働者の避くべからざる敵意の爲めに破壞せられることを防止する必要から、一切の產業と工場とは、次から次と沒收して國有化せられてゐた。從つて當時は、最早や私人たる傭主と勞働者との雇傭關係は存在しなかつた。勞働法は斯ような實際の形勢——謂ゆる戰時共產主義——を背景としたものであつたのみならず舊勞働法は、勞農政治が勞働條件の方面に於て爲さんとし、また爲すべき目標を揭げたものであつた。然るに一九二一年の新經濟政策の採用により、非常時の政策たる戰時共產主義から常時の經濟的進化の途に復すると同時に、中小の產業に對しては、或る程度まで私人の企業を許すことになつた。また國有工業も、營業的の基礎で經營することゝなつた。そこで露國には或る程度までは、傭主被傭者の關係が復活することゝなつた。從つて勞働階級國家は、資本の搾取に對して勞働者を保護する責務がある。新勞働法は斯ような新形勢に應ずる爲に制定せられたものであつて、舊勞働法が勞農政府の目標を揭げたに反し、新勞働法は、資本主義に對する讓步の最大限度を規定したもの——言葉を換へて言へば、無產階級國家の下に許さるべき勞働條件の最低限度を規定したものである。從つて新勞働法は舊勞働法の場合と異りて、その一切の條項は嚴密に實施され、傭主側が之に違反した場合には、普通裁判所によつても處罰を受ける。そこで勞働に對する資本の搾取は、勞働法によつて精密に制限せられて居る譯である。本法は一九二二年十一月九日、全露ソヴイエット中央執行委員會によつて布告され、同十五日から實施せられて居る。

一　總則

一　勞働法は雇傭勞働をする總ての人（家庭勞働者をも含む）に適用せられる。そして總ての事業と機關（軍事上の機關を除く國家の事業と機關、公共の事業と機關、私人の事業と機關、但し家庭內で勞働者を使ふ者をも含む）報酬を支拂ふて雇入れる勞働を雇傭する總ての人々の上に拘束力を持つ。

備考——本法の適用を受けぬ家庭勞働者

の範圍を定める爲め、人民委員會をして特別の布告を發布せしめる。

二　義務勞働（第十一條）に本法の適用せられる場合の制限は、人民委員會は、勞働及び防衞委員會並びに其の命令により勞働人民委員會によつて定める。

三　人民委員會は本法の規定、若しくは其の一部分の適用を、現役の軍務に服して居らぬ或る種の兵卒に及ぼすことが出來る。

四　本法の定めた勞働條件よりも惡い勞働條件を課する一切の勞働の契約、乃至は合意は、總て無効とする。

二　勞働の提供及び雇傭の方法

五　露西亞社會主義聯邦ソヴイエツト共和國の市民は、勞働人民委員會の機關を通じて、任意の勞働を提供するものとする。但し第九條に定めた場合は此限りでない。

六　求職者は、勞働人民委員會の地方勞働部に、失業者として登錄を受けること。

七　諸種の事業、機關、土地（國營公設及び私營の）並びに個々の雇主が勞働力を雇傭する場合には、總て例外なく、次に掲ぐる手續により、勞働人民委員會の當該部門の仲介を經るものとする。

（1）事業及び機關の管理部、又は個々の傭主は、勞働人民委員會の當該部門に求人申込をすること。

（2）當該部門は其の登錄名簿に、この申込に記入せられた資格を備へた者のある場合には、一定の手續によつて其人を差向けること。但し其の手續は、勞働組合全露委員會の協議によつて勞働人民委員が之を定めること。

（3）此の場合には、傭主は勞働人民委員會の當該部門に對し、差向けられた人を雇傭するか否かを、勞働人民委員會の定めた手續に從つて報告すること。

八　傭主は（1）求人申込をした仕事の條件に就いて虛僞の申立をして居つた場合、（2）雇傭の條件を履行せぬ場合、（3）差向けられた人の雇傭を、不合法に拒絕した場合には、責任を負はねばならぬ。

九　次の場合には、勞働人民委員會の當該部門の仲介を經ずして、勞働者を雇入れることが出來る。卽ち（1）候補者の人物につき、政治的の信賴または特殊の資格を必要とする場合、（2）勞働人民委員會の當該部門が、求人申込を受けて三日間に、所要の勞働力を供給し得ぬ場合。但し右の場合には、雇入れ後に必ず勞働人民委員會の當該部門に登錄しなければならぬ。

十　國營、公設、又は私人の事業及び機關の管理部は、勞働人民委員會の定めた手續及び期間ごとに、勞働人民委員會の當該部門に對して、管理部の役員の變更を報告しなければならぬ。

三　義務勞働

十一　非常の場合（天災、又は國家に取つて根本的に重要な仕事を遂行する上に、勞働力の不足した場合）には、第十二條より第十四條に掲げた者を除く露西亞ソヴイエツト聯邦社會主義共和國の總ての市民は、人民委員會または人民委員會によつて權能を與へられた機關の特別の布告により、義務勞働の爲に召集することが出來る。

十二　次に掲ぐる者は如何なる場合にも、義務勞働の爲に召集せられない。（1）十八才以下の者、（2）四十五歲以上の男子（3　四十才以上の婦人。

十三　次に掲ぐる者は、義務勞働を免除される。（1）病氣または負傷のため一時、勞働

不能の者は恢復に必要な期間中、(2)妊婦は分娩前後各々八週間、(3)乳兒を持つ婦人、(4)軍事または勞働による傷病者、(5)八才以下の子供の母親、但し他に子供の世話をする者のない場合。

十四　人民委員會、勞働及び防衛委員會、勞働人民委員會は、種々なる形の義務勞働に就いて、健康上の理由、家族の關係、仕事の性質又は社會的の事情により、以上の外に免除と特權を追加することが出來る。

四　團體契約

十五　團體契約とは、被傭者を代表して勞働組合（第百五十二條、第百五十三條）と、傭者との間に結ばれる契約であつて、個々の事業、機關、又は其の一團（第十七條）に對する勞働及び雇傭の條件を定め、且つ其後に結ばれる個人的の雇傭契約（勞働契約）（第二十七條、第二十八條）の内容を決めるものである。

十六　團體契約の條項は、其の人々が團體契約を結んだ勞働組合の組合員たると否とに拘らず、或る事業または機關に雇傭せられる總ての人々に適用される。

備考——團體契約は、勞働者を雇入れ又は解雇する權能を有する管理部員には適用されぬこと。

十七　團體契約は一般的、即ち共和國全體を通じて、産業の全部門、乃至は國民經濟の全部門に適用されるものでも、又は地方的なものでもよい。一般的の團體契約のある場合には、右の一般的團體契約のことに特に規定してある事情の下に、特に規定してある方法によつてのみ、地方的の團體契約を結ぶことが出來る。

十八　團體契約の期間の制限は、勞働組合全露委員會と共に勞働人民委員會これを定める。

十九　本法または其他の現行勞働法規の定めた條件よりも惡い勞働條件を定めた團體契約の條項は無効とす。

二十　勞働組合は團體契約に對し、物質的の責任を負はぬこと。

二十一　團體契約は成文として、勞働人民委員會に登錄しなければならぬ。契約の條項中、現行法規の定めた條件よりも惡い條件を定めた部分に第十九條に對しては、勞働人民委員會は不認可の權能がある。團體契約を登錄する手續は、勞働人民委員會によつて定める。

備考——勞働人民委員の當該部門が、團體契約の或る條項の認可を拒んだ場合にも、契約當事者双方の同意ある場合には、殘餘の部分を登錄することを妨げぬ。

二十二　登錄された團體契約は、當事者双方が調印した即日、乃至は其の契約のうちに規定してある。期間後から効力を發生する。

二十三　事業または機關が編制替へをした場合、又は他人の手に移つた場合にも、團體契約は其の期限の滿了までは有効とする。

備考——斯ような場合には、當事者の一方から、團體契約の改訂を希望を申出ることが出來る。但し相手方に對し、二週間前に豫告を與へねばならぬ。此の場合にも、新契約の成立するまでは、從來の契約は有効とする。

二十四　契約を更新して更に一定の期間繼續する場合には、從來の條項そのまゝでも、又は双方の合意によつて契約に變更や追加をした場合にも、普通の場合と同じ手續で（第廿一條）登錄しなければならぬ。

二十五　何等かの理由のために登錄して居らぬ契約に就いて、傭主被傭者間に爭議の起つた場合には、右の契約に基づかず、現行の

法律に從つて決定するものとする。

二十六　主として團體契約の履行監督に當るべき機關は、評價及び爭議委員會（第百七十二條）とする。

五　勞働契約

二十七　勞働契約とは二人若くは二人以上の間に結ぶ契約であつて、當事者の一方（被傭者）が相手方（傭主）に對して、支拂を受ける目的で勞働力を提供するものである。勞働契約は、團體契約の有無に拘らず結ばれるものである。

二十八　勞働契約の條件は、双方の合意によつて定められる。勞働法規、團體契約、並びに或る事業または機關の內部規定（第四、十五、十九條、及び第五十二條より第五十五條）の定めた條件よりも、被傭者に取つて不利な條件を定めた勞働契約、並びに被傭者の政治上の權利、又は公民としての權利を制限するやうな結果を來たす條件を定めた勞働契約は無效とする。

二十九　勞働契約を結んだ場合には、一切の事業機關の總ての被傭者（管理部員を除き）に對し、其の人員の多少に拘らず、賃銀帳を出さねばならぬ。但し勞働契約の期限が一週間以內の場合には、賃銀帳を出すことは、任意である。

備考一——アルテルと勞働契約を結んだ場合には、アルテル全體に對して賃銀帳を交附した上に、アルテルの各員に對しても賃銀帳を出さねばならぬ。

備考二——賃銀帳發行の方法、並びに其の內容は、特別の法律によつて定める。

三十　勞働契約は一個人との間にも、一個人の一團（アルテル其他）との間にも結ばれる。

三十一　勞働契約に就ては、未成年者は成年者と同一の權利を有す。兩親、後見者、又は勞働保護の法律の遵守を監督すべき責任ある機關または人は、其の契約の履行が未成年者の健康を害し、若くは其他の有害の影響を與へる場合には、契約期限の滿了に先つて其の取消を要求する權利がある。

三十二　勞働契約による勞働が、直接その契約に調印した人の爲めに行はれないで、其人を使用する事業または機關の爲めに行はれる場合、又は勞働の行はれる事業が、他の事業の一部分若は一部門を成す場合には、勞働契約に對する責任は、是等の仕事を爲さしめて居る事業、機關、又は人の負ふ可きものである。

請負人が、自己の引受けた仕事をさせる爲めに勞働契約に調印した場合には、請負人が責任を負ふ可きものである。

備考——事業、機關、個人、乃至は請負人の間に爭議は、普通の法律上の手續によつて決定する。

三十三　アルテルと勞働契約を結んだ場合には、傭主は此の契約に規定せられた仕事に從事するアルテルの各員に對して、個人々々に契約を結んだ場合と同じ責任及び特權を持つものとする。

三十四　勞働契約は（１）一ケ年を越えざる一定の期間を定め、又は（２）期間を定めず、若くは（３）一定の仕事の完成に必要な期間について結ぶことが出來る。

三十五　被傭者は傭主の承諾なくしては、自分の爲すべき仕事を他人に引繼ぐことは出來ぬ。アルテルは、勞働契約に反對の條のない限り、仕事と其の組合員の間に割り振り、又は或る組合と他の組合員とを振り替へることが出來る。

三十六　傭主は被傭者に對し、當初契約によつて雇入れた仕事と性質の違つた仕事をすること　又は明かに生命に危險な仕事、乃至

勞働法規の規定を履行せぬ仕事に就くことを求めることは出來ぬ。

若し當初雇入れた仕事が一時無い場合には、傭主は被傭者の資格に相當した他の仕事に移すことが出來る。被傭者が之を拒む時は、解雇することが出來る。但し此の場合には解雇豫告の代りに解雇手當(第八十九條)を支拂はねばならぬ。

災害を防止する必要のある場合には、傭主は被傭者に對し其の資格に相當なる仕事を求めることが出來る。

上記の場合には、賃銀を引下げることは出來ぬ。若し一時的の仕事か、一層賃銀の高い種類の仕事でない場合には、この高い賃銀率によつて支拂はねばならぬ。(第六十四條)

三十七　被傭者を或る事業から他の事業に移し、又は或る地方から他の地方に移すことは(事業全體が他の地方に移轉した場合と雖も)被傭者の承諾なくして行ふことは出來ぬ。若し被傭者が移轉を承諾せぬ場合には、勞働契約は當事者何づれの側からも取消すことが出來る。但し何づれの場合にも、傭主は解雇豫告の代りに解雇手當を支拂はなければならぬ(第八十九條)

三十八　長く續くような性質の仕事の場合には、永久的に雇入れる前は、筋肉勞働者は六日以內、事務乃至は管理に從事する勞働者は、資格の六ヶ敷くない責任の輕い仕事は二週間以內、責任の重い仕事は一ヶ月以內の試驗期を設けることが出來る。

三十九　試驗期の結果により、永續的に雇入れ又は解雇することが出來る。解雇する場合には、試驗期間中の勞働に對しては、被傭者に屬せしめた仕事の等級に應じて定められた賃銀率によつて、支拂をしなければならぬ。

四十　傭主は試驗雇傭の結果、採用するか否かを、直ちに勞働人民委員の當該機關に報告しなければならぬ。(第七條)試驗期中の勞働者は失業者と見做し、勞働人民委員會の登錄名簿の順番は其儘にしておくこと。

四十一　若し傭主または事業の管理者が、被傭者から身元證明書を取つた場合には、本人の請求次第返還しなければならぬ。

四十二　被傭者の請求した場合には、傭主は自己の許に雇入れてゐた期間と仕事の性質とを記載した、證明書を渡さねばならぬ。證明書には秘密の記號や暗號を記入することを禁ずる。

勞働者の雇傭條件を協定する目的を以つて、傭主の間に秘密の通信を受授することを禁ずる。

四十三　特別の法律または內部管理規則によつて規定せられて居る事情の場合を除く外、傭主または管理部は、被傭者に對して金錢上の科料を課することを禁ずる。

四十四　勞働契約は、(1)當事者双方の合意により、(2)契約の仕事の完了により、又は(3)當事者の何づれからか、第四十六條第四十七條の規定に從つて取消を申出た場合には消滅する。事業または機關が或る部門乃至は或る持主から、他の部門乃至は持主に移つた場合には、勞働契約は消滅せぬ。

四十五　勞働契約の期限が結了しても、双方の仕事の關係が繼續し、且つ双方何づれからも、仕事の關係を打ち切ることを請求せぬ場合には、右の契約は期間を定めずに、從前通りの條件で有效なものと見做される。

四十六　傭主は何時でも、期間を定めずに結んだ契約の取消を請求することが出來る。但し傭主は、賃銀每週拂ひの場合は少くとも一日以前、每月拂ひまたは半月拂ひの場合には、少くとも一週間以前に豫告しなければならぬ。

四十七　傭主は第三十六條第三十七條に規

定した場合の外には、次に掲げる場合以外には、期間を定ぬ契約を取消し期間を定めた契約を其の期限に先つて取消すことは出來ぬ。

（１）事業または機關を一部分、乃至は全部閉鎖した場合、

（２）經濟上の原因により、一ケ月以上に亘つて仕事を中止する場合。

（３）後日に至つて、被傭者が其の仕事に不適當なことの知れた場合。

（４）被傭者が相當の理由なくして、且つ過然的でなく、契約乃至は內部管理規則の命ずる義務を履行し得ぬ場合。

（５）被傭者か直接その仕事に關聯して犯罪を行ひ、裁判の宣告が實行される場合。並びに被傭者が二ケ月以上に亘つて逮捕收監された場合。

（６）被傭者が相當の理由なくして、三日以上連續して缺勤し、又は相當の理由なくして、一ケ月中に六日以上缺勤した場合。

（７）被傭者が一時的に勞働不能となつた爲め、二ケ月以上に亘つて復業し得なかつた場合、又は姙婦の場合には、第四十八條に規定した四ケ月の期間後、更に二ケ月間に亘つて復業し得なかつた場合。

備考一――第三項第四項に規定した場合の契約取消は、爭議委員會の決定を待たないでは行はれぬ。

備考二――その被傭者が勞働委員會、乃至は此種の機關の一員たる場合には、契約の取消は、本誌第百六十條の規定に從つて行ふべきものとする。

備考三――第一項、第二項、及び第三項の規定により契約と取消した場合には、傭主は被傭者に對し二週間の解雇豫告を與へて、且つ普通に賠償を支拂はねばならぬ（第八十八條）

四十八　被傭者は次に掲げる場合には、期間を定めた契約を、其の期限の滿了に先つて取消すことが出來る。

（１）約束の時に約束の賃銀を支拂はれぬ場合。

（２）傭主が契約した義務、又は勞働法規の命ずる義務を履行せぬ場合。

（３）傭主、管理者、乃至は彼等の家族が被傭者に對して無禮の行動をした場合。

（４）仕事の衞生狀態が變化して、惡くなつた場合。

（５）一般に法律によつて定めた其他の場合。

備考――傭主の抗議ある場合には、第一項、第二項、たゞ第三項に規定する場合の實否は、爭議委員會によつて決定すること。若し傭主の抗議なき場合には、爭議決定の手續によつて決定すること。

四十九　如何なる勞働契約も、勞働組合の請求によつて取消すことが出來る。傭主が勞働組合の請求を承諾せぬ場合には、爭議を決定する普通の手續によつて決定するもの。

六　內部管理規則

五十　五人以上を雇傭する總ての事業及び機關は、勞働條件を定める爲めに、內部管理規則を制定すること。是等の規則は、本法の定めた方法（第五十二條より第五十五條）によつて制定し、且つ被傭者に提示してある場合に限り、總ての被傭者に對して拘束力を有するものとす。

五十一　內部管理の規則は、被傭者と管理部との一般的の義務と特殊の義務、並びに是等の義務を履行せぬ場合に負ふべき責任の範圍を明確に、且つ出來得る限り詳細に規定しなければならぬ。

五十二　內部管理規則には、勞働法規に反する條項、又は其の事業乃至は機關に行はれてゐる團體契約に反する條項を含んではなら

ぬ。

五十三　勞働人民委員會は、勞働組合全露委員會及び最高經濟委員會と協議の上、標本的の内部管理規則を制定すること。

備考――或事業または機關に於て内部管理規則を起草し、相當の手續によつて認可を受けるまでは、（第五十四條）第五十三條によつて制定せられた標本的規則が其の事業または機關内に効力を有すること。

五十四　國家、公設、及び私人の一部の事業及び機關の内部管理規則は、其事業または機關の管理部と勞働組合の地方支部との聯合協議によつて起草し、勞働監督官の認可を必要とする。勞働監督官の不認可に對しては、地方勞働局に抗議するとが出來る。地方勞働局の決定を以て最終の決定とす。

五十五　産業乃至は國民經濟の一部門全體に亘る内部管理規則、又は中央の諸機關乃至は事業、聯合した一團の事業、若くは特に國家に重要な事業または機關に適用する内部管理規則は、直接中央に於て、關係勞働組合の執行委員會と管理部との聯合協議によつて起草することが出來る。そして勞働人民委員會の認可を受けるものとする。此の場合に一團を爲して居る個々の機關及び事業に適用する補足的の規則は、本法第五十三條及び第五十四條に從つて追加することが出來る。

七　生産高の標準

五十六　生産高の標準は、事業または機關の管理部と勞働組合、乃至は勞働組合の特別の機關との聯合協議によつて定める。（第十一條及び第百五十六條）

五十七　被傭者が自己の過意により、標準的勞働條件の下に於いて、生産高の標準に達し得ぬ場合には、仕事の成績だけの賃銀を受けるものとす。但し如何なる場合にも、賃銀率の三分の二以下に減額することは出來ぬ。若し被傭者が永續的に生産高の標準に達し得ぬ場合には、第四十七條及び其の備考に從つて解雇することが出來る。

備考一――本條の標準的な勞働條件とは次の諸項目である。

（1）機械、旋盤、腰掛その他のものは、適當に完備して居ること。

（2）原料及び道具は、適當の時期に供給せられること。

（3）原料及び道具は、所要の分量だけあること。

（4）仕事の場所に、適當の衛生設備（採光、暖房その他）のあること。

備考二――全日働かないで、時間ぎめで雇傭せられてゐる未成年者の場合は、成年者の生産高標準を、未成年者の勞働時間に準じて減額したものを以つて、其の生産高標準とする。

八　勞働の支拂

五十八　被傭者が其の勞働の報酬として受ける額は、團體契約または勞働契約によつて定める。

五十九　報酬の額は、國家が一定の時期に於て、一定の種類の勞働に對して定めた强制的の最低額を下つてはならぬ。

六十　報酬の額は契約により、標準勞働時間（第九十四條以下）に從つて時間で計算しても、又は出來高で計算してもよい。殘業に對する報酬は、特に契約によつて定めること。但し最初の二時間に對しては、普通の報酬の一倍半を、二時間以後の殘、並びに休日祭日の就業に對しては二倍を下つてはならぬ。（第百九條以下）

六十一　未成年者には、其の勞働の種類に從ひ、短縮した勞働日を全日勞働と見做して支拂ふこと。勞働人民委員會は、其の産業部門

の性質と、其の産業部門に一般に行はれて居る勞働條件とに鑑み、未成年者に對する報酬率と計算方法とを定める權能を持つ。

六十二　若し同一の被傭者が、種々なる熟練等級に屬する仕事をして居る場合には、其内で最も報酬の高い等級によつて支拂ふ可きものとする。（第三十六條）

六十三　被傭者が特殊の知識乃至は訓練を必要とする仕事に從事して居る場合には、右の仕事に對する修業證書または證明書を持つて居らぬ場合と雖も、此の仕事の賃銀率によつて支拂ふべきものである。

六十四　被傭者を報酬の低い仕事に移した場合には、この移動から二週間は從前の賃銀率によつて支拂はねばならぬ。

六十五　永久的の性質をもつ仕事の場合には、報酬は定期的に支拂はねばならぬ。但し二週間に一回以上でなければならぬ。

二週間以内の一時的乃至は臨時の仕事に對する支拂は仕事の完了した時、即時に行はねばならぬ。

六十六　勞働に對する支拂は通貨を以てし、勞働契約乃至は團體契約に規定してある場合には現品（住宅、食料、一般消費品）を以てする。現品による支拂の條件、計算の方法は契約によつて定める。

六十七　勞働に對する支拂は、勞働時間中に、勞働の場所に於て行はねばならぬ。

六十八　被傭者が、自己の責任ならざる理由の爲に、所要の仕事を果さなかつた場合には、その平均の日給賃銀に從つて支拂を受ける。

備考——勞働人民委員會は、平均賃銀算出の方法を定めること。

六十九　勞働者が普通の公休を得る場合には、公休期間の平均賃銀を前渡しされること。

七十　請取仕事乃至は出來高拂ひの場合には、其の種類の勞働に相當する日給賃銀を、生産高標準（第五十六條）で割つて出た率に從つて支拂ふこと。其他の出來高拂ひの計算方法は契約によつて定めることが出來る。

七十一　請取仕事の準備に要する時間に對する支拂ひの方法は、團體契約または勞働契約によつて定めること。

七十二　或る特定の一と仕事を、請負ひ賃銀率で受け、其の仕事の完了以前に通例の賃銀支拂ひ定日が來た場合には、（第六十五條）被傭者は自己の勞働の種類に該當する賃銀率と同額の賃銀の前渡を受けるものとする。

七十三　請負仕事の報酬が普通賃銀率により賃銀額に達せぬ場合には、實際の揚け高によつて支拂はれる。但し此の場合にも其の傭者の普通賃銀率の三分の二以下に降つてはならぬ。（第五十七條）

七十四　被傭者が、自己に基づかぬ理由の爲めに、請取仕事を完成せずしてする場合には、實際終了した仕事だけの支拂ひを受ける。但し前借した賃銀（第七十二條）は控除する。終了した仕事の評價は、地方爭議委員會（評價及び爭議委員會）によつて決定する。この機關もなく、又た當事者の間で協定のつかぬ場合には、爭議を決定する普通の手續によるものとする。

七十五　未成年者が請負賃銀率で働く場合には、同一の仕事に從事する未成年者と同一の率により、尚ほ其上に、本人の普通賃銀率による二時間分の增額を行ふこと。

七十六　時間制の賃銀率を變更した場合には、請負賃銀率にも、之に相當せる變更を行ふこと。

備考——請負賃銀率を變更する以前から仕事に着手してゐた被傭者に對しては、爭議委員會の定める賃銀率によつて支拂ふこと。爭議委員會の場合には、所屬勞働組合

の定める賃銀率によつて支拂ふこと。但し協定のつかぬ場合には、普通の爭議解決法によつて定めるものとする。

九　保障及び報償

七十七　相當の國家機關によつて、勞働時間中に選擧權を行使することを許されて居る場合には、選擧權行使の爲に缺勤した勞働者及び使用人に對しては平均賃銀(第六十八條)を支拂ふこと。

七十八　證人、鑑定人、又は陪審員として出廷を命ぜられた勞働者及び使傭人は、司法機關によつて命ぜられた義務を履行する期間中は平均賃銀の支拂を受けること。

七十九　國家、勞働組合、協同組合團體の大會、協議會、執行委員會に代表者として選擧せられた勞働者及び使用人は、是等の義務を遂行する爲に費やした勞働時間に對しては、平均賃銀を支拂ふこと。

八十　赤軍に召集せられた勞働者及び使用人に對しては、平均賃銀二週間分を支拂ふこと。

八十一　被傭者が傭主の用向の爲めに、平素の職務を缺勤した場合には舊職に復せしめること。右の場合には平均賃銀の外に、一日に對し一ケ月の賃銀額の二十四分の一を下らざる增額を支拂はれること。且つ勞働人民委員會の定める範圍に於て、又た勞働人民委員會の定める方法により實費償の却を受けること。

八十二　被傭者が其の事業または機關の管理部により、一地方から他の地方に移ることを命ぜられ、居住の移轉を必要とする場合には(第三十七條)移轉に關する一切の費用を支辨せられること。且つ移轉に要した日數に對する手當と共に、其の被傭者の一ケ月の賃銀額の二十四分の一を下らざる割合にて、手當を受けること。尙ほ其外に、從來受けてゐた一ケ月の賃銀額に均しい一時手當を受けること。家族を同伴する場合には、一人に對し一ケ月の賃銀額の四分の一に均しい一時手當を受けること。

八十三　被傭者が不注意または內部管理規則の違反の爲めに用具、製品、原料等を毀損した場合には、爭議委員會の決定により、其の賃銀から損害に相當する額を控除することが出來る。但し一ケ月の賃銀額の三分の一を越えてはならぬ。

八十四　傭主は仕事に必要な一切の道具及び設備を、無料にて被傭者に使用せしめること。

八十五　被傭者が自己の用具を使用して働く場合には、傭主は其の增減に對する報償を支拂はねばならぬ。但し其額は團體契約によつて定めるか、團體契約のなき場合には、勞働人民委員會が之を定めること。

八十六　勞働の狀態が、特に被服及び履物の損傷を來たすような事業では、傭雇主は勞働人民委員會が特に定めた職業及び所要品分類表に從ひ、被傭者に無料で被服及び履物を支給しなければならぬ。地方勞働部が、右の物品の支給を不可能と認めた場合には、傭主は實費に相當する金額を支拂はねばならぬ。

八十七　或る事業または機關が、一ケ月未滿の間仕事を中止した場合には、此の事業または機關に留どまつてゐる被傭者は、各々其の賃銀率による賃銀の支拂を受けること。

備考――三日以內の間事業を中止した場合には、此の休業期間に對しては、平均賃銀(第六十八條)に基づいて支拂を行ふこと。

八十八　第四十七條の(1)(2)及び(3)節に規定した事情の下に定期または無期限の勞働契約が取消された場合には、傭主は被傭者

に對して二週間分の賃銀に相當する手當を與へるか、又は二週間の豫告を與へること。

八十九　第三十六條第二項、第三十七條、第四十八條、第八十條に規定された事情の下に、勞働契約の取消された場合には、被傭者は二週間分の賃銀に相當する手當を受けること。

九十　第四十七條の（4）（5）（6）及び（7）節、並びに第四十九條に規定した事情の下に勞働契約の取消された場合、若くは被傭者の志望によつて勞働契約の取消された場合には、解雇手當を取けることとは出來ぬ。

九十一　爭議委員會、爭議委員會のない時は當該勞働組合の承認により、事業または機關が普通の休暇を與へぬ場合（第百十四條）若くは本法に規定せられた事情の下に追加の休暇を與へぬ場合（第百十四條）には、勞働者または使用人は金錢による報償を與へられること。但し此の報酬の額は、支拂ひ當時に於ける其の勞働者または使用人の平均賃銀と同額たるべきこと。

九十二　被傭者が一時的に勞働不能となつた場合には、病氣の場合は少くとも三ケ月間分娩の場合は四ケ月間（第四十七條、第百三十二條）は現職に留どめること。

九十三　傭主が破產した場合には、雇傭契約または勞働契約に基く一切の勞傭者に對する支拂は、其他の總ての債權に對して優先權を有すること。

一〇　勞働時間

九十四　生產事業に於ても生產の補助事業に於ても、標準勞働日は八時間を超過してはならぬ。

備考——勞働人民委員會は勞働組合全露委員會との協議により、責任ある政治上の勞務、勞働組合及びソヴイエットの勞務中、本條の規定を受けぬ種目を定めることが出來る。

九十五　次に揭ぐる者の勞働日は、六時間を超過することは出來ぬ。（1）十六歲以上十八歲までの者。（2）生產に直接關聯したものを除く精神的、事務的の仕事に從事する者、（3）勞働人民委員會の起草する職業表に明記せられる地底勞働に從事する者。

例外的に激しい勞働、又は健康に有害な仕事に從事する者の勞働日は、勞働人民委員會の定める範圍に從つて短縮すること。

九十六　第九十四條及び第九十五條に定めた勞働日は、夜業の場合には一時間短縮すること。交替制による勞働時間の一部が夜間に亘るか、または晝間より引續づく勞働時間の一部が夜間に亘る場合は晝間と同一時間とする。但し夜間に亘つた勞働時間に對しては、七分の一（第九十四條の場合）及び五分の一（第九十五條の場合）の割增を行ふこと。

請負賃銀率による勞働者の場合には、出來高による賃銀以外に、夜間の每一時に對し、其の種類の勞働に該當する時間拂ひ賃銀額の七分の一（第九十四條の場合）及び五分の一（第九十五條）の場合の增割を受けること。

備考——午後十時から午前六時までの勞働を夜間勞働と見做す。

九十七　家庭勞働者農業勞働者、修繕乃至取毀はしの作業に從事する勞働者又は類似の勞働者にして、月給で常傭せられて居る者は、勞働時間を適宜の長さに分割することが出來る。但し此の休憩時は一日に二回を越えぬこと、また一ケ月間に勞働する時間は、一ケ月の標準勞働時間を超過せぬこと。（第九十四條）

九十八　被傭者は勞働時間中に、別に休憩及び食事時間を與へられること。但し休憩及び食事時間は勞働時間に算入せぬ。

備考——仕事を中斷することの出來ぬ事

情のある場合には、勞働時間中に食事をする折を與へねばならぬ。內部管理規則には食事の場所を規定すること。此種の場合を列擧した表は勞働人民委員會に於て作製すること。

九十九　被傭者が休憩時を費消する方法は自由であつて、雇傭の場所を離れてもよい。

備考――特殊の性質を有する事業に於ける第十九條の規定の例外は、當該勞働組合の同意により、勞働人民委員會の機關が認可した場合の外は許されぬ。

百　規則正しい間隔をおいて行はれる仕事の場合には、休憩は始業後四時間以內に行ふこと。休憩時間は三十分以上二時間以內とする。休憩時間の長さは右の範圍內に於て、內務管理規則によつて定めること。

備考――授乳する母親の特別休憩に就ては、第百三十四條に規定する。

百一　始業、終業、並に休憩の時刻は、內部管理規則によつて定めること。

百二　交替制による場合には、各組は標準勞働時間づつ勞働するものとする。交替の時刻は內部管理規則によつて定め、交替の爲めに作業の順當なる進行を妨げぬ施設を講ずること。

百三　標準勞働日の超過(殘業)は、原則として禁止する。

百四　次に掲ぐる例外的の場合に限り、殘業を許す。

(1)共和國の防衛に欠く可らざる仕事、又は社會的の災害を避ける緊要な仕事を行ふため。

(2)水道、點燈、衞生、運輸　郵便、電信及び電話による交通等の如き社會的に必要な勞働の正確なる進行に對する突發的の障害、又は豫期せざる障害を除去するため。

(3)既に着手せられて居る仕事が、事故または豫期せざる技術上の障害のために、標準勞働日のうちに完了しなかつた場合、且つ仕事の中止が、材料若くは機械に損害を與へる場合に、右の仕事を完了するため。

(4)機械若くは設備の修繕または取毀はしの爲め。但し損害を共儘にしておけば、多數の勞働者が就業し得ぬ場合。

備考――本節の規定によつて許された殘業は、地方爭議委員の決定により、地方爭議委員のなき場合には、當該勞働組合の同意により、勞働監督官の認可した場合に限つて行はれる。火急の場合には、後から勞働監督官に報告すること。

百五　十八才以下の者は、絕對に殘業を禁止する。

百六　如何なる被傭者と雖も、一ケ年間の殘業の總計は、百二十時間を超過してはならぬ。また二日間連續して行ふ殘業の總計は、四時間を超過してはならぬ。

備考――仕事が季節的性質を帶びる或る種の產業では、勞働組合全露委員會の同意により、殘業の時間數を本條に定めた限度以上に增加することが出來る。

百七　遲刻を補ふ爲に殘業をすることは出來ぬ。

百八　殘業時間數は其度びごとに、被傭者の賃銀手帳に記入しなければならぬ。又た殘業手帳には、殘業の始め及び終りの時刻、被傭者の受けたる殘業手當額を記入すること。

(未　完)

夏と女

浴衣

木村莊八

源之助の演る芝居に女團七と云ふのがあります。大きな茶のべんけいの浴衣を着て、黒繻子の帯を平つたく四角に〆めすそを片方だけ高くからげるから白の蹴出しが出て、それが素足にかゝります。頭は崩れたつぶしかおばこか何かで、顔は白く塗り、眉は無いにちがひない。——手にたしか出刃を持つて黒ぺいの前で義理あるおとら婆アを殺す狂言です。

——序でに之れも書いておきますが、あとで、その黒ぺいの向ふの青空を遠見で五彩の花車が通ります。黒ぺいの一端にはくつきりと白い井げたがあつて、つるべの青竹が出てゐる。そばに柳もあるでせう。舞臺のこつちには泥ためがあつて、果し合ひが段々と苦しく、泥だらけになる仕組みだ。——何しろその黒ぺいの前に團七縞のお梶の浮き上る姿は、一種末期の味ながら、誠に効果の冴へた影像の強いやり方です。

そのお梶の姿をここに想像しますが、——

私はかねて思つてゐるが、日本人はよく無作法な、つまり肌を現はす様な姿を(殊に夏は)爲ると云ふ。何でも耳食の話に、桑港か何かでは日本の女が浴衣がけでゐると罰金をとられるとか云ふことです。

さう云ふところはあるだらう。と云ふより、さう成りやすいところはあるかも知れません。但本來の日本の——女に就て云ふ——浴衣がけの姿は、決してさう云ふ無作法がつきものゝ性質のものではなく、桑港あたりで偶々罰金をとられるのは、只その邊の連中が浴衣を浴衣らしく着こなさないからのことである。もし浴衣をうまく着る、つまり本來の此の服裝の美感に添

ふて正當に——とは實は平凡に——着る場合には、日本の夏裳束は危なげでゐながら、然も決して危なくありません。

例へば更に今云つた源之助のお梶をもう一度よく見ると、この役はかなりはげしく立ちまはりをしますが、殆んど胸はおろか、肘も、はぎも、三寸とは不作法に着衣の外へ出しません。只いつも涼しい襟足と、それから身體全體へかけての線を、流暢にのばして見せるだけです。——と云ふのは、さうすると初めて美しいから。と云ふのは更に、浴衣はさう着られると云ふことを語る。さう着れば美しくなり、それが又本當だと云ふことを理窟以上に語る。

それ故この美藝に化された巧みな扮裝の場合を不取敢例にとつたわけですが、この點は、外國の夏の風俗の場合は、初めから何も彼も露出して了ひます。結局出る程のものはすつかり出して了ふから、つまり夏を直接「夏」らしく豫め平面描寫にして了つて、出したくもあとには何にも出すものがない。即ち出るものがないから先づ不作法にはならない。多分實感（卑俗）には决して陷ちずにすむでせう。——但それ故に美か否かと云ふことは、それは全く別の第二問になるが、——これを、日本の場合には、豫め裳束の條件は極めて危いものである。

稍もすると際立つて實感に陷ちたがる。が、然し實は陷ちないものである。陷ちずに、一轉、そこを不思議な美におきかへる余地がある——

と云ふ、この（かね合ひの）ところに、日本の夏のしどけなさ想に見える姿のうちには、却つてそれ故に進んだ、つまり特別に「美しくなれる」要素が充分にあると思ひます。

○

で、源之助のことから浴衣のことに移して來ましたが——

ここに、「曲線美」と云ふ言葉があります。之れは特に夏、外國婦人の身なりに就て思ふ場合、誠にそこにあるものはこの「曲線美」だと思ふ——或ひは言葉を變へて、形似（寫實）的な味感と云つてもいゝ。

それに反して日本の美しさは、——強ち「夏」乃至「服裝のこと」には限らなくても云へるが、——直線的美感と云ふのがいゝ。より字の意味を大きくすると、所詮、象徴的味感と云

ふことになります。

就てはその服裝の直線的美感と云ふについて、思つて見ると、それには第一材料の浴衣それ自身を衣紋竹へかけた、その場合から判じてかゝるのが早いと思ひます。それは誠に角ばつた「ideal」なものです。——然しその服裝の内部には元來丸味から出來てゐるからだが包まれる。

——（夏）

そこで、殊に夏、着ものゝ單衣となる場合には、上徹の直線と内部の曲線との融合は美しさに於て——と云ふのは肉感的にと云ふのとは一應はつきりと遊ぶ意味で——一層端的に結びます。

と

「浴衣」の美感はそこで材料それ自身、肉ときもの——の仕組みに因緣が濃いことゝなつて、やがては美しさへの筋道を素直に定跡で行つてもたどられる。

——（女

○

で、一體日本の着ものは角ばつたものである。たゞそれを身にまとふと、角味はつや消しとなり、殊に單衣の場合には、中の丸身（肉）は一應外へ極く魅惑的に偲ばれて、所謂「かくす

より細はれる（工合の、一種刺戟を宿した一つのかたちとなります。

之等のかたちをぢかに機緣として、德川期の美術の仕事には一つ特殊な「笑ひ繪」と云ふ、イヤに進んだ境地のものがありますが、例へば線のなだらかな羽二重の胴衣に細帶と云ふ種の女裝は、あまつさへそれ（の素描味）へ自由に色味が加はる。說明以上に或る畫境への畫材です。

それはその「かたち」を描き生かして直ちにそれが「題材」への肖像となるから、美術として充分味はうに足るものとなる。それ等が此の際日本獨特なのは、それは元より贅するまでもないでせう。

就ては浴衣（うすき單衣）の場合にも、その「美」と共通のところは多分にあります。——然し此の服裝の場合、つまり生活の日光には、云ふ迄もなくあり得る美しさの偏奇はぐつと避けられて、と云ふのは、衣裳の線美を格段に至るところで强調してあります。

先づ身なりの中心に當る胸部へがつちりと（それは端厳にと

云へる）帶板をしめつけます。次いで背後へは、極めて進歩した澁い表現の工合に、帶の結び目やカケや舌がロココとは正反對の意味での、強い裝飾となり、殊にその色は屢々末梢をとり除くべた塗りです。それで、成る可く丸味（實感）を形美の方へかくし、生かして了ふ。

殊にここに浴衣については一つの面白いやり方があるのは、意識か無意識か——恐らく前者でせう——浴衣には一體のりの強さを愛措して、それは氣持もよく、實利にもいゝ、更により善いことには、つまり單衣が丸味を包むその「危なさ」をこののりは獨得の手續で無垢により健康な形ちの美感へ救ふ、さう云ふ仕方をとるところもあります。

で、さうした上で、前に云つた樣に、日本の夏の女は決してさう手足、肌、胸などを實は着衣の外へは好んで現はすものではない。——何れはこの服裝に認める傳統は、凡て、美しい、進んだものと考へる

○

私はかう云ふ浴衣を甚だ好ましく思ふのです。恐らく政信あたりの描いてゐる寛潤な風俗から、それが更に微妙に、つまりイキに、推移したものではあるまいか。兎に角、そこに認める夏の「女性美」は、一品と思ふに躊躇しません。

附記。——私は不取敢この文をかくに就て、差し當り源之助のお梶を念頭に浮べたわけですが、又、夏の鎌倉海岸なども念頭に浮べたのでした。乃至、偶々電車にのつて丁度向ひ合せたネルの着ものゝ人のことなども考へたのでした。——然し鎌倉（と云ふのははだかの海水浴や、大きな麥わらを被つて、袖の長く、帶の小さい令孃）その他、一種ふくよかなネルの着もの（之れは夏とは云へないが、然し近頃の女は一體うすものでもネルに似通ふなだらかな切れ地を好む）——それ等の場合は、そのあり得る「美」から享ける感じがどうも云はゞ「淫美」で、とは云へその「淫」が「形ち」の風情に融けてゐると云ふわけのものではなく、つまりなまじつかでいけません。それと甘くていけません。

尤もかう云ふには、凡て私が繪かきだと云ふところは、ぬきさしならぬ形ちの判斷の立場です。——が、何としても、頃來一般のあり合ふ風俗は、概しておもしろくない。外國、即曲線美ならば、曲線の味感で何とか徹底してくれたら、又面白からうとは思ひます。近頃の大勢では、稍もするとそこが極めて中途半端で、それ故うす着の女裝はどうかすると美よりは形ちなき實感の方へ思ひを誘ひやすく、即ち卑

俗で氣に入りません。

きつと今時はそれを見るなら、その點は商賣人の藝妓か、乃至、町のおかみさんや娘達なら、相變らず仕來り通りに浴衣は「美しく」着こなされてゐるでせう。——それは直ちにその裝をとつて繪になる、と云ふ意味で、つまり美術の「美」にかけて、あの平凡なものを矢張り一番それが美しいと云ふ。六月八日記す。

非享樂的

——(夏と女)——

百田宗治

夏のをんなは色あまり白からぬが、あさく化粧したるがよし。こさへは黒と白なり。すだれを透す青葉のかげに、衣紋たゞしき黒地のかたびらに、白き麻の肌着のそれとなく透けて見ゆるもつともよし。湯もじも素より白なり。ゆふだちに赤き蹴出しを賞でたるは過ぎし時代の下町風俗なり。

夏のをんなはきりゝとして小またの切れたるがよし。夏のをんなは非享樂ならざるべからず。余、大阪のうまれなれど、惣じて上方風のをんなは好まず、殊におのたらりとして締りのなき帶のむすび樣、裾さばきの惡さ、また京風の厚化粧がきらひなり。およそ寶女の風をまねたる貴婦人もつとも排すべく、上品にして己れの分をこゝろ得たる藝者の貴婦人風をよそほふはわろからず。

香水はうつり香なるほどがよし。出がけに一瓶かたむけつくしたらんと思はるゝほど、電車のなかほどにて胸わるきものはなし。

足袋は甲ふかきがよし。足のかたちのまゝに添ひたるがよし。生得のかたち惡しきを仕入れ足袋のヌーボーなるにさし入れて大皺の寄りたるもつとも醜し。下駄は塗らぬもの。緒は單色。年のころを問はずして黑、白、淡き水あさぎなど夏は萬人向きなるべし。

この萬人向きといふことと、決して個性を沒却したるの意にあらず、よろづ衣裳、髮、履きものゝ末にまで、ことごとしく異

を立てたるほど心知れたるものなし、要は調和とそれを活かすころすの自らなる擧止姿態にあり、好みは萬人向きなるがよし、個性は持前のものなり。

夏のをんなは、茶室または寺院の一室などには、美しければ美しきほど見たきものなり。朝もよし、夕方もわろからねど、暑き日がかりの庭の、紫陽花の萎へたる茂みより匐ひ出づる蜥蜴のたゞ一つ影つくりて走り過ぐる時刻、すだれ越しの影ふかき場所にあまりに年若からぬ女性の、何ごとかうれはしげに、何ごとか無心のさまに、身なりとゝのひて端座せる、垣間見ゆる足袋のけさやかに白きなど、何よりもすゞしげなり。

顔はもとより細面にて、髪はわざとしからぬ束ねにてよし、帯も素より黒好みなるがよからん。かゝる場所、かゝる時、かゝる女、いづくやらんにて見しことあるこゝちす。

女の裸身のうつくしきは冬なり。夏は身じまいのわざとしからず調ひたるもつとも涼しげなり。夏のをんなに求むるものは氣品なり、少しぐらゐは濟ましてゐてもよし。うす着して肌もあらはに、脂粉の香たゞへたる一目ぼれの對照は、ゆふかたの町など歩けば二人や三人はかならず眼に觸れるものなり、今更めきて持噺すほどのものでなし。夏は女の肌はあまりに見せまじきものなり。

去年の夏なりしか。淺草雷門にて、あはたゞしく余のあとより電車に乗り込みきたりし女あり、日暮れにちかく、空は黑き雲垂れ込めてゆふだちの氣配しきりなりし時刻とおぼゆ、いづくかの料亭の女中などなりしならん、ふとりじゝの中年増にて、髪はあまり小さくもなき丸髷なれど、素肌よつの細かきをまとひ、無造作なる黑繻子の晝夜締めたるが、かゝるありきたりの身なりのものなりしが何かしら余の注意を惹きたることあり、顔かたちそれほどのものでもなく、たゞ眉毛は剃り落したりし——。思ふに女の美しく、何か人の眼を惹くはおそらく時と場所のせいによるものも多かるべきが、この種の女、その怯懦にしてわざとしからず、しかも何處かに締めくゝりの自らな

るものありと吾らを魅するにあらざるか。女は洗はれたるがよし、苦勞したるがよし、耐ゆるが上にも耐へ得るがよし。夏のをんな、おのづからこれらのものゝその表てにあらはれたるがよし。

一（夏）

―田端に新しき獨居生家をはじめたる二日目の匆々のうちに。―

わが夏女の記

と

室生犀星

夏咲くものは花の白きが多く、赤きは柘榴のごときものなるべし。夏の女の白さよそほひせるが清々することちして、この

一（女

上にうすくれなゐの帶揚げしは、まことに花の外のものならず夏菊、夏牡丹、夏女、浴衣、朝顔などとひと口に言へば自づとその心つたはるごとく、その姿一つとなりて艶艶として匂ひ放てるは、わが文章も及びがたきここちするなり。

美しからざれば女は死ぬべし。

美しからざりしために己れ敢なくなりし女あらば、その優しき心とこしへに名殘りを惜しまるべし。古き世にこの心もちたる女多かりしかな。いまの世は學深く才高ければ美しからずとも何のおそれやあらん、かく思へる人あらば悲しきこと遂に限りなかるべし。

坂道あり、ふた側の垣根青々と繁り、ネルを纏へる少女一人ものの本など讀みながら登りけり。垂髮はネルの上に戯れて爽かなり。洋装をせる少女ありてこの時坂をのぼり行かんか。まことに日本風なる風景を破りて不調和限りなし。――われら願ふらくネルをまとへる少女の、すずしき姿のたどたどしく行かんことなり。父親好みの、詮方なき洋装に疲れたる少女に會はさらんことを、これ祈るなり。

若し吾子に洋装させたまはん深き慈悲心持てる親たちは、できるだけ急拵へでなきところの、念入りの心づくしせる服を着せたまふべく、然らずばあたら美しき子供らも、縫ぎ剝ぎの

父母の好みに恥多かるべし。

されど柔らかきネルの衣服着たる少女の、心も楽さうに歩めるは、清げなる姿なるかな。しかも素足にはところどころ乾きたる泥をつけたるなど、親ごころのみにはあらず、我もまた讃ふるに言葉なし。――わが逝ける子供も今年早や三つとなり、ネルなど着けんものをとぞ、返らぬことを思ひめぐらしぬ。

われは下町を知らず、されど下町の女らの夏のけはひは机に座れる我にさへ、なまめしく思ひ出されつ。

いつか浅草誓願寺裏に人を尋ね、同じ道を幾たびとなく往反してありしが、かてて尋ぬる人の家もわからず、永き夏の夕方どきなりしかば、往きかへりせる我が姿見て佇める涼める女ら、わが山の手くさき姿をいぶかりつつ眺めてありぬ。狭き路次の中には、三味せん常盤津の習へある家構へに、下駄の華緒店なども打交りつつ紅き緒をさげたる。――縁日ものの草花屋の夕方の打水済して屋臺車ととのへ、立ちながら一服喫める烟管のけぶりなど棚引き、店々みな親しげなる挨拶交されしごとく、山の手のごとく隣近所に住み居て揖を交すことなきむつかしき暮しにくらべて、何となく長閑にぞ思ひける――されど我が尋ぬる人のありか分らず、ふと思ひ切りてとある格子戸のうちに道をたづねしが、そこの家にてもわからず、あい色の浴衣をつけたる女の、折柄の夕裝に白き片肘露き出し鏡臺に向ひつつ此方向きになり、あひにくわたくし共はつい近ごろ越して來たばかりでございますから……と左う答へておいて又た専念に鏡裡の人とはなりぬ。そのこちら向きの左寄りの瞳の美しさ白みのあざやかさは、又もとの道へ出て番地尋ぬる我には、もはや尋ねん人よりぞこの方がどれだけ美しかりしか分らず。おほ方ひと妻なるべく、人妻ならば夕方遅き夫まつためのけはひなりけんなどと思ひめぐらしつつ、電車通へといそぎ出でゆきぬ。へらへらな手拭地なりしが、あのやうに匂やかなるはあの人の持前の美しさならん。――馬子にも衣裝といふ言葉あれど、美しき人は何を着ても統べられて美しくあるとぞ思ひぬ。

或日、わが友の曰く、女子らの帯をもて腰より下を覆ひたる

は、美しきを隱してしまふなるべし。腰下は帶よりすこし下がりてふつくりと露はに優しく、まれに哀しきまでに露はにしてこそ美しさはあるべし。みな帶をもて隱したるは己が美しさを揉み消したる姿なりと言へり。

まことに我が友の言へるがごとく、腰下はそのままあらはになすべし。わけて人妻になりたる人人の、好んでそのやうなる姿せる時、つつましさを形せるものならんも　好んで美しきを隱したまふは由なきことなり。曲線などと曰はば言古りたらんも、夏女のうつくしさはそのままの姿なるべし。處女らの下腹のふくれたるは西洋人の胸にもくらぶべく、花ならば花の蕾なるべし。

うすき衣流行らば、紙よりうすき衣つけるもよし。羅馬のむかしならねど、今はいかやうにも贅澤と豔艶を競ふ時なるべく、今百年も經てばみな蟬の羽根のごときものに身をささへ、まことに世は天國のごとくなるべし。われら生けるうちはまだ女子らの姿に贅澤が贅澤のそしりまぬがれず、されど我らの子息の女の子息の時代には、いまより三倍くらゐの美しさは女子の上にあるべく、贅澤もなほ三倍すべし。舞踏飛行機の類も普通となるべし。ダンスを取締りたる記事掲げたる新聞紙取り出して、新しき子息らは嗤ひ興ぜん。まことに我らの子息の父の子息らの、姿よろしき服を着て光れる靴穿きダンスせる姿を思ふとき、わが古き文章もかれらが祖父の代とやならん。古き父親はいま新しく、又後には古く、されどその悲しみは子息らにもよく分るべく、ときには笑ふを止めて百年前をふりかへり物語なるべし。

己が女のために盜みて良き衣着せる人のこころを笑ふべからず。わが子のために貧しき詩文つづれるは眞實これ以上あらさるべし。何をも世の誤りとなすべきぞ。――百人の女を知れる人の品行惡しといへるは間違ひなり。一人の妻をまもりてなほ品行わるき人もあるべく、品行とはその心のいやしき形のみ。千人の女を知りてなほかつ士君子と稱ふべき人あり得べし。

一人の女子に二三五人群がりてその氣息を窺ふに恬たるあめり

か人は恥知らずにあらず。かれらは形は紳士にて心は文明のけだものなるが故に、をとめ蝶を迹ふごとく、あらはに又愉快げなり。まことに女の靴さきへキスをする彼の國の風俗はいみじくもデリケエトなるかな。女子に以つて禮節をあつくするはなほ電車内に席を美人に割愛するごときなり。わが國、女子に一席を與ふるに因循にしてその席に着かず、却つてわれらの方にて赭面することあり。悠々としてその席に着くまではなほ百年を要するべく、又わが國の女心のやさしさ有り餘りて內氣に禮す。これまた讃ふるべきかな。

去夏、輕井澤に行き、平原の草綠なるところに、あまたの白衣せる西洋婦人を見たり。かれらの白衣はなほ一點の色彩を交へず、白くまばゆきまでなり。その上にうす紅せる顏と手とが色づけるあるのみ。——白き蘂をしてうす紅き花つくる草あらば、それにも數ふべし。

人間を花にたぐへるは古し。されどそれに類ふは美し。雨の日は女のきめ濕りて冴えず、樣同に草木の花光らず。雨ふれば

胃の工合わるき子供をみれば植物とかはりたるところとてなし。されば草木の花と女とたぐふは、由あることとなり。

西洋婦人の腕時計はよくはまりて雕り込めるごとく感ず。されど日本婦人は氣障なり。かれの金色せる時計は花のごとき腕に、なほ一さうの花を纏りたらんごとく、しかもがつしりしたる感じあり。わが婦人のなよらしき手にはあのやうなる金屬を帶するには、あまりに優しすぎると言はんか。——彼の國の婦人に何となく建築的壯艷あり、趙瘦と謂はんよりは楊肥になぞらふべく、わが婦人は鮎といはんより白魚にたぐふべし。——まことに日葵と夏菊ほど異ふべし。

西洋婦人の肌はなかばあぶら身にてゝところどころあさのごとき波紋あり、仔細に點れば毛穴大きく皮は薄冷たく、又さわりはやや粗世と言はんか。されどその色は概ね毛桃色にして氣候によりて變色することなし。わが婦人はきめこまかく、ぺつとりと糊刷毛にて刷きたらんごとく、色やや黃味をふくめるゆゑ、をりをり蒼白き陰影をなすなり。肘にいちじるし。西洋婦人は眺めて悲しくなく、わが婦人は支那婦人のごとく常に一時

の悲哀を匿ふ。考へ深く嫉み強げなり。かの國の婦人ら内にあまり考へず、概ね額の上に考へるごとき心地す。ゆゑに妻とするべくは餘りに人情を感ぜず、ただ見て過ぐる植物園の花なり。見て過ぐるゆゑ美しと言はん。

——（夏と女）——

女優リリアン・ギッシュをよく見れば、何となく日本風の顔容をもつ。アニタ・スチワードも又同じ。オーバア・ゼ・ヒルのカー夫人のごときは一介の日本の老母のみ。——

活動寫眞の夏女はみな涼しくさつぱりと。小島が朝起の一浴にも似たり。緑深き芝生に座りて良き人生の手習を見せるとき、ものうきこひや流浪の民の伴奏なくとも、まことにのんびりした夏女の涼しさを持つ。——されどアンネット・ケラーマンは海中に老ひ、パールホワイト失明したることを思へば、映畫の人生もそぞろ身に沁みて悲しきなり。我のごとき用なき一介の阿呆は、何よりぞ映畫のなかに己れ嘆かるること多し。……名もなき一女優の二年ぶりにて映畫の中に見出すとき、君もまだすこやかなりしかと思ふほど、情切なきことあり。これ一介の用なき痴文者の、ときに己れ忘れたるの媒なり。わが文賣れずなり並木に殘骸を晒すときあらば、走りてアニタ・スチワードを戀ふるところの一道化役をつとむるとも、放れすぎたる空想ばかりにはあらず。わが心悲しとも悲し。

扇を攜てる日本のむすめらは、手巾をもて唇を拭く西洋婦人にくらべては、奥床しく寂しくほつそりと扉のかげて微笑ひたまふべし。ラケットを持ちて上着をぬぎたる運動家は、水蜜桃を齧りつつ運動が人生にとりて最も愉快なるべきを說きたまふべく、われは机上空想を焚きて自ら毒され蟲のごとく腹痛になやまさるる又ふさはしかるべし。以てわが夏女の記となす。

美しき夏女

近松秋江

「夏と女」など〻云ふ文字は、直ちに、女を男の側から玩弄物視してゐることを、言外に含んでゐるのであるが、自分は、こ

——（女と夏）——

の文章を改造社から依頼されて、それを拒むほど、それほど女權論者でもない。やつぱり、どちらかといへば、美的生活論者である。尤も女子の地位を、男子と同等視することに異存はない。これで、なか／＼のフエメニストであるのだが、しかし飽くまでも美的生活論の立場から女の美といふことを考へてみるのも無益のことでもなければ、又その爲めに女を玩弄物視したことにもならぬ。

今から二十餘年の前高山樗牛といふ不世出の才人があつて、盛に美的生活といふことを論じたものだが、今日の社會のやうに何となく世間の物情が洶然としてゐる時代に多少美的生活を鼓吹するのも強ち無用のことでもあるまい。今の世の社會改良家などは、恰も道德先生と同じやうに女の美などを云々するのを餘計なことゝ思つてゐるやうであるが、それは遺漏なき經世家の條件を缺いでゐる。

夏季になると、三越や白木屋や又は銀座あたりの盛り場も、ぐつたり疲れたやうになつて、路傍の並樹も烈日の光に萎れ、日頃は盛裝した美人の往き交ふ街路に、美人はもとより、小僧つこさへ通つてゐない。東京はさながら留守になつてしまつてゐるかと思はれる時に涼しい山の上、海のほとりは至る處に美人の展覽會が開かれる。

夏の都會の女の美を見て樂むのも、七月のお盆まではよい銀座や淺草の街辻に草市が立つ頃涼しい中形の女が夏の夜の涼風に萩や桔梗の秋草を分けて歩いてゐる姿を見るのは清楚な感じがする。

お盆を過ぎる頃から盛夏の都會は次第に寂れて方々の避暑に美しい女を見ることが多い。しかしいくら美しい女でも、それを一人々々に離して見る時は、特にこの女に興味を持つてゐない限り、かへつていろ／＼なアラが眼に付いていけない。避暑地の溫泉宿の廊下でふつと出會はしたり、海岸の松原の中を行く若い女の群れ、又は海水着をつけてゐる女が、廣い經木帽[illegible]の下に、白い顔の日に黑くなるのを惜みながら。清沙の砂の[illegible]に裸體を乾かしてゐるところなどに美の集簇的の美を認めることが多い。

箱根の仙石原とか輕井澤とかには每夏各女子大學などの夏季

學校が開催されたりして、若い女學生が多くゐて、若い樂しい空想に富んだ表情をして快活に嬉戯してゐる。それを一つひとつ取りはなして見ては格別美人がゐるとは思はないが凉しい湖水の畔、綠の木蔭などに油氣の少ない束髪を色氣もなく後の方に手束ねにして、小ざつぱりした白地の單衣や派出なネルの着物にメレンスの丸帶などを締めて、三々五々手に手を取つて、空想と希望に充ちたやうな潤んだ眼をして、唱歌の合誦をしたりしてゐるのを聽くと、自分ももう一度生まれ返つて、あんな若い時があつて見たいなど丶思はせられる。

箱根の溫泉場などにいつてゐると、自働車のある今の時節にもまだ山駕籠に乘つて名所めぐりをしてゐる女などを見ることがある。メレンスの蒲團に凭れ、絽縮緬の羽織を着て、駕籠の横に匂ひの高い白百合の花などを挿してゆくのに山道の散歩をしてゐて往きちがふと、山中にはめづらしい、得ならぬ香油の薫がぱつと爽涼な山氣の中に漾ふのも、そゞろに都會の懷しさをそゝる。早く秋が來て涼しくなつたら、東京に歸つて都會の趣味に浸りたいなどと思ふ心が頻りに動く、

年中さうであるが、殊に夏季になると、東京から小田原ゆきの汽車の中では湘南地方に往來する良い階級の婦人を常に見受ける。今年はお召でも明石でも飛白が流行するさうであるが、東京驛又は新橋驛あたりから乘り合はした湘南ゆきと思はれる人妻、紺地の派手な明石に白地の羽二重に水色の荒い七寶型の染模樣の帶を腰のまわりに幅廣にしめ、涼しさうな翡翠のぱちん留め、水色の手柄の一番型の丸髷に挿した簪の玉も翡翠の小粒飾り、七八つの洋服を着た男の兒を一人連れてゐたが、小田原で下車して別莊にでもゆくか、それとも箱根か。

この頃レースの襦袢が流行するやうになつたのも、時代につれて女の夏の清楚な美の一ケ條を增したものである。古風な趣味からいへば、やつぱり在來の絽縮緬か何かの日本袖の襦袢もよいが、膚をあざむく白麻のレースの袖口が明石や上布の袖の下からほの見えてゐるのは凉しらしい。夏の女の裝ひは何といつても上布か明石、その下に眞白のレースの長襦袢などの、ほの見えてゐるのが最も淸楚の美がある。蟬の羽衣を着るのは新

貴金を身にかけてゐながら、人間が下品に見えていけない。帶は無論絽か羽二重の丸帶が好ましい。

もしそれ、涼しい風の流れるやうに吹いてゐる銀座の夜を歩いて資生堂あたりに入つて清凉飲料を攝つてゐる婦人などを見ると、涼しい中形の浴衣に帶はやゝ幅の詰つたのを締めて、夏になると一層皮膚の色の白くなるやうな體質の肌に、しつとりと汗がにじんで、さういふ腕にじつと觸つてみると、夏季は却つて健康體の持つ冷さを感ずるのが常である。

日光などにいつてゐると、遊覧の女が、効々しい身裝をして高々と中形の裾を端折り、長い縮緬の蹴出しに、白足袋に草履を赤い紐などで縛り、蝙蝠を翳して、ハンケチで顔の汗を拭き〳〵男體山の中腹をめぐる木蔭の道を登つてゆくのを見る。彼女の顔はぽうつと上氣して、しつとりと皮膚から汗がにじみ出てゐる。さういふところに夏の女の美しさを認めることが多い。

人間生活は事務のみではない。若し人間生活が事務のみであつたならば、此の世は決して住むべき場處ではない。生物の本能をもつと自然に發揮することを考へねばならぬ。

赤いカンナの花

西條八十

たつた一輪の赤いカンナの花、それが忘られないとその男は云ふのである。

なんでも或る夏の日の午さがり、その男は愛宕下のある細い路次へ入つて行つた。さうして一軒の家の格子戸に手をかけながら、そつとなかの樣子を窺つた。

そこはもと男が間借りしてゐた家であつた。半年ほど居る間に、男は其家の妙齡の娘に思ひを懸けたのだつた。けれどもたうとうその戀はものにならずに男はそこを出た。それは、ひとつは當時その娘が輕い肋膜を患つて、遞信省のつとめを休んで家に引籠つてゐたからである。そのやさしい寢亂姿が、最初か

ら男をひきつけたのであるが、何分狭い家に人目が繁くて、一緒に居ただけに却つて云ひ寄る機會が無かつた。

男が其家を出ると間もなく、娘の病氣もすつかり快くなつて以前の役所に通ふやうになつた。さしうて或日二人はばつたり外濠の柳の下で邂逅したのである。男はこの間、已に或る有名な會社の一つの椅子を探し當ててゐた。さうしてこれが緣となつて、二人は折々伴立つて日比谷公園を散歩するやうな仲になつたのである。

男は一時駄目だとあきらめてゐた思ひが適つたので心中深くその幸運を欣んでゐた。が、彼が嘗てその獨床の二階で、階下の娘を對象にして描いてゐたのはこれよりももつと進んだ戀の場面であつた。

男は散歩に假託けて娘を大森の或る旅館へ伴れ出し、たうとう關係をつけてしまつた。

その男はどちらかと云へば女蕩しの側であつた。しかし生來の憶病者だつた。冒險が好きで、その癖一面にいやに理智のはたらく當世の男のタイプの一つだつた。で、最初彼の考へでは、どうせ間借りの人間が出入りする家の娘だから、底擦れのした、男の二人や三人はとうの昔に知つてゐる女だと多寡を括つてゐた ところが其夜いざとなつて見ると、相手は意外にもカラ初心で、正眞正銘の處女だつたので、男はひどく吃驚してしまつた。

その夜の娘の涙は、男の剝げ易い盲目的情感を容易に洗ひ流して、生地の理智を露出させてしまつた。歸途、娘が夜空の星を仰ぎながら、

「××さん、後生ですからわたしを棄てないで下さいね。」と心細い聲で云つて腕に縋つた時、男の胸には「あゝ飛んだことをしちやつたな」といふ怯々した悔恨がもう芽をふいてゐたのだつた。

それから三日ほど男は娘に逢はなかつた。逢ふのは恐いやうな氣がしたし、またお互に夏の休みで逢ふ機會も無かつた。もちろん、男からきつかけを與へない限り、娘の方から訪ねる術は無かつたのである。

が、何となく案じられもするので、その日、男は思ひ切つて、それとなし娘の家を訪ねることにした。さうして其家の格子に手をかけながら、内部の様子を窺つたわけである。ところが内部には一向人のけはひらしいものが無かつた。いつまで經つてもしいんとしてゐた。そこで男は一寸思案した後で、格子戸を靜かに明けた。

なにしろ眞夏のことで、襖障子はのこらず取り拂はれてゐるので、家内の様子は一目瞭然であつた。人影は見えず、見通しの緣向ふの狹い庭に、赤いカンナの花が一輪、燃えるやうな色をして咲いてゐた。

「今日は。」男は土間で汗を拭き〳〵から聲をかけて見た。二階から誰か下りて來るかも知れぬと想つた。が、一向それにも應へが無かつた。

「皆不在かな。」さう呟いて男はもう一ぺん格子の外へ出ようとしたが、その時ふと緣に近い奥の六疊の間の、古ぼけた葭戸のかげに横になつてゐる白い姿に眼が付いた。

よく見るとそれは若い女の姿だつた。まがひも無い娘であつた。午睡でもしてゐるらしい。さう覺ると、男は遠慮なくズカ〳〵上つた。誰かが急にでも歸つて來たら、通りかかりに一寸お立寄りしましたと云へば濟むことだつた。

歩み寄つて見ると、いかにも娘はよく眠てゐた。派手な眞岡の單衣を着て細帶のなりで、心持顔をうつむけにして眠てゐた。出先から戻つて、それなりうと〳〵してしまつたらしく、足袋だの、帶だの、しごきだのがそこらに取り散らされてあつた。

男は傍に突立つたまま、ぢつと罪ふかくその寢顔を瞻つてゐた。赤い唇、地藏眉、——その頸の締つた色白な顔がよけい子供らしく無邪氣に見えた。小鼻のあたりに透きとほつた汗の顆が浮いてゐた。

「おれの物だ」男はそんな誇りがな心持さへ感じて、飽かず瞻つてゐた。

「×さん」「×さん」やがて男はこんな風に名を呼んで見た。それでも娘はまだ氣付かずに眠てゐた。

白晝の靜寂さが沸るやうに屋内に在つた。男はこの正體の無

い娘を急に擽つてゞもやりたいやうな、また何か惡戯をしかけたいやうな、一種の性的な衝動を覺えてきた。‥‥

と、この時である。偶と、娘の右手の指の間に挾まれた小冊子に男の眼がついたのは。——何やら黒字に朱印を捺したやうな表紙が心持まくれ上つてゐた。

男は何の氣なしに、その表紙に手をやつて直して見た。と、それは思ひも掛けぬ書物であつた。「男女一代之運勢三世相」とした、抜萃の易斷書であつた。

咄嗟、男は電氣にでもうたれたやうな氣がして、覺えず手を引いて。彼にはその書物を購つて讀むまでの娘の突きつめた心持がはつきり分るやうに思はれた。先夜の彼女の悲しげな目付から、老朽の驛員である彼女の父親の事、母親、姉弟の事、それからそれへと種々な事柄が、一齊に、閃くやうに胸に浮んできた。‥‥

男は一種神秘をまじへた激しい悔恨の氣持に壓されて、默つて、そつと、眠てゐる娘の傍を離れた。さうして逃げるやうに、格子の外へ辷り出た。

その時に何氣なく振顧つて見た庭の、一輪赤いカンナの花、それが未だに忘られないと、その中年の男は語るのである。

赤帝の惠み

生方敏郎

夏になりてよいことは、日の永いこと。

日が永いとて寢てしまへば、何にもならぬ樣なれども、その永い眞晝中を寢るのがよし。必ずしも藤の長椅子を要せず、必ずしも羽根布團を要せず、肱を曲げ明窓の下近く、うと／＼として華胥の國に遊ぶ時、三公も之に代へがたかる可し。

許由、天下を讓らるると聞き、煩はしとして之を山に避く。器具の一つだに運ぶことなく、手して水を掬ぶ。或人瓢を贈る。之を枝上に懸く。風來て之を鳴らすに、また煩はしとて之を捨てにき。

これ或は盛夏の出來事か！　許由は午睡の醍醐味を解すればならん。

○

夏は夜、月の夜は更なり、やみにも螢の飛びちがひたる、と清少納言の言葉なれども、山の端近く住む人々には、晝も捨てがたき趣きあり。都會の中とはいへ、林と藪とに蔽はれたる小山に降りて住めば、雉の聲、鳶の聲、みん／＼の聲、ひぐらしの聲、とり／＼に面白く、眠をさそうよすがと成る。

○

風そよ吹けども塵埃を揚げず、雨こそ春の日の足細きその趣きに及ばざれ、夕立の壯んなる、霽れての後の虹の橋。

川に溢るる濁流に、さま／＼の物押し流し運ぶさまこそ可笑けれ。

四手網引く人の後に、物見高き人、子供たちの數多立ちたる。

○

夏の外の都は樂し。夏の夜の都の女は美し。若き人々の夏の夜の銀ぶらは、都會生活享樂の極みなる可し。

永の年月見飽きたる自分の妻すら、浴みしたる後の夏の夕暮には、新しき人迎へたる心地するなり。

○

久米の仙人が女の脛の白きを見て通を失ひたるは、まさしく夏の出來事なる可し。

○

闇の道を歩きつつ、明るき灯影に照し出されたる女たちのあざやかな姿を、人の家の軒端に垂れし簾を通して垣間を見るも、夏の夜の淫れたる男心になん

○

春知り初むる頃の乙女は、何時にても美しかり。三十路すぎたる人妻などの艶やかに若やぐは、ただそれ夏の夜のみ。

○

胃の健かならん若人は、何にても食へ。我は眞夏の山陰に湧き出でたる淸水に浸して、銀の糸の心太をすすらばや。

さくらんぼ

久保田万太郎

…………

…………——（夏）

うまやばし、吾妻ばし。——吾妻ばしを越えるともう水の上とはまつたく暗くなつてゐた。

兩岸のあかりのいろの、濃く、だん／＼にうるんで來るにつれて、ふなばたに騒ぐ水の音のみいたづらに身に泌みた。——わたしたちはだれも無言だつた。——（女）

…………

…………

山谷に船はついた。

船からあがつたわたしたちは、そのまゝ大きな泥溝のふちを右に切れた。

夕暗の音もなく下りた細い道。——たよりない軒あかりが一つ二つみえるばかりだつた。——わたしたちはだれも無言だつた。

門はもう閉つてゐた。——くゞりだけあいてゐた。

わたしたちは構はずくゞりをあけて入つた。

……草の匂がした。

『これだよ。』とわたしたちの一人はいつた。『この墓がさうだよ。』

『これが……？』

『あゝ。——これがあの女のなれの果だ。』

わたしたちのまへにあるのは、香華の断えた、貧しい、形ちばかりの墓石だつた。——わたしたちはだれも無言だつた。

舟にのるとき、そこのうちの女中が舟のなかに入れてくれたさくらんぼ。——わたしたちの一人は、そこにのつてゐる茶碗のなかにそのうす紅い種をつかみだした。

さくらんぼの手向……

わたしたちは門を出た。——あたりは暮れつくしたが、空には、まだ、しみ〴〵したあかるさが殘つてゐた。——わたしたちはだれも無言だつた。

貝殼追放

水上瀧太郎

子供の眼と大人の眼

あらゆる物を珍しく見、一切の物事に驚く子供の心はしあはせであると、何時始つたのかはわからないが、自分は永年さう思つて居た。すべてほんとに在る物よりも、大きく、立派に、美しく見る子供の眼を、一昔もふた昔も前に失つてしまつた事が殘念だつた。

禽獸蟲魚草木天文時候――何から何迄日毎に新しく眼に觸れ、耳に聽く事が、未だ色情の惱ましさを知らぬ水々しい肉體の發育を刺戟するものゝやうに、全身に喜びを傳へたのである。春になつて木の芽が萌え、蒲公英、菫、茅花、土筆、五形花、紫藤、春菊その外さまざまの名前を覺えるだけでもひとゝほりで無い草むらに、蛇も蛙も蝶も地蟲も天道蟲も、いろいろの光り輝き或は又澁くゝすんだ背中の色をあからさまに、踊り、飛び、のたうつ姿の面白さ、百鳥は空に交り、けだものは地に孕む、目のあたりの自然の姿を、人一倍大きい眼をみはつて驚き眺めたのは誰だつたか。行く春の物の哀れを知るよしもなく、夏は又池の金魚の浮藻に腹をこすりつけ、夕燒の空の軒端に蜘蛛の巣を營む事を只管不思議に思ふばかりであつた。秋、天の川の遠く迄心を誘ふ夜、蟬、松蟲、草馬、鈴蟲、蟋蟀、がちやがちや、すひつちよの啼きかはす聲に耳を傾け、更に又目に觸るゝすべての物のすがれ行く冬が來て、やがて樂しい正月を迎へる事

を何よりも待遠しかつたものである。すべてが單純に樂しかつた。笑ふ事も、泣く事も、怒る事も、山清水の湧くやうにせきとめられずにほとばしり出た。

しかし、そんな事よりも、もつと深く心を動かしたのは、矢張り人間である。小説家になる下地は充分あつたのであらう。しかも其の人間をつくづく感心して見たのは、生きた實物によるよりも、幼い自分が好んで集めた錦繪の影響の方が先きだつた。繪草紙屋の前では自分の足は動かなくなつた。駄々をこねて、どうしても購はなければ承知しなかつたものである。剛健なる明治初年の人々の觀賞に適した筆力餘りある月岡芳年の畫風には男性美を感じ、新時代の文明漸く根ざし深くなつた時代の好尙にかなふ優婉なる水野年方の三十六佳選に女性の美しさを知つたのは、たゞに審美眼の芽生ばかりではなく、同時に英雄崇拜女性讃美の第一歩であつた。

神武天皇の御手の弓に翼をやすめた鳥の存在に何等の疑もさしはさまず、金毛九尾の狐が美女とあらはれて宮殿にかしづく事も、凄艶極まりなき事として、眞僞を惑ふ心などは起さうとさへしなかつた。天子様は一番偉く、太閤樣はその次に偉く、武將は强く、學者は知らざる事無く、女は誰しもやさしき心を持ち、大人は誰でも子供より偉いのだと確信して居た。

さうして、其の美しいと思ひ、又偉いと思ふ事は、批判を超越した絕對のものであつた。曾て「貝殼追放」のひとつとして「女人崇拜」と題する一文を公にしたが、それは自分の幼い時、世に女程やさしく美しく、一切の邪惡な心に遠いものは無いと思つた儚ない夢想の回顧である。

家の前の原つぱは、築山や泉水のある我家の庭よりも廣々として面白く、町つ子と遊んではいけないと嚴しく云はれながら、毎日々々拔け出しては、その町つ子と遊ぶのだつたが、何事にもませて居る町つ子の一人が、女性に對して侮

葉の言葉を用ゐた時、自分は心の底から憤つて相手にむしやぶりつき、遂々泣かしてしまつた事さへあつた。それ程女を尊びなつかしんだ。

あまりに尊びなつかしみ過ぎた反動として、夙に幻滅の悲哀を感じ、大人になつた今日此頃は、女の淺はかな事がはつきりとわかり過ぎて來た。但し自分の女性觀は、他の機會に披瀝する事にして、茲には全然除く事にする。これも町つ子に敎へられたのだつたが、往來を通る見ず知らずの馬車の上の人や車の上の人におじぎをして、先方がうつかり禮をかへすと、手をうつて喜ぶいたづらがあつた。日淸戰爭の頃で、且陸海軍の軍人の澤山住んで居た土地柄、勳章をぶらさげて意氣揚々として通る將校が多かつた。向ふの方から、金モオルを光らせて來る姿を見ると、車の前につかつかと進んで、帽子をとつたり擧手の禮をしたりして得意がるのであつた。子供のいたづらと知つて、すまして通り過るのもあり、笑つて行くのもあるが、中にはおあいそに禮をかへすのも、又うつかり誘はれて本氣で手をこめかみに上る人もあつた。偉い大人が自分達の相手になつて吳れた嬉しさと、偉い大人を相手にさせてやつたといふ力量をほこる心持が、ちやんぽんに心の中で躍つた。たつた一人、幾度繰返しても、うかとは手に乘らない苦手があつた。其の頃は少佐か中佐か、いくらよくても大佐だつたらうが、後の海軍大將伯爵山本權兵衞である。毎日馬車に乘つて、參謀の徽章を胸にかけて通つた。不思議に子供も名前を知つて居て、權兵衞が來た、權兵衞が來たと口々にしめしあはせながら、先を爭つて帽子をとつて頭をさげた。しかし權兵衞さんは、頰髯に埋まつた青白い顏に、陰性の凄い眼を光らせて睨みつけるばかりで、微笑を浮べた事さへなかつた。

「權兵衞が種蒔きや鴉がほじくる………」

と子供達は口惜しがつて、馬車のうしろから追かけながら、はやし立てるのがおきまりだつた。

斯う書いて來て、話が甚だ横道にそれた事に氣が付いた。自分が玆に記さうとするのは、權兵衛さんの面影では無く同じく其の往來の出來事で、永く心に殘つて忘れられない白馬に乘つた人の事なのである。それを、子供の眼が、如何に實際在るよりも美しく見たかといふ例證のひとつにしたいのである。

夏の日の事である。門前で遊んで居ると、遠くから埃をあげて、まつしぐらに白馬をかけさせて來る人があつた。西洋の狩獵の繪に見るやうな黑い鳥打帽子をかぶり、霜降の乘馬服に足ごしらへもすつかり本式なのが、鞭は手綱と共に手に持つて、心持前屈みの姿勢を崩さず、振向きもしずに通り過ぎた。僅かに一瞬間の事であつたが、子供の眼には仰ぎ見る馬上の姿が、天かけるやうに聳えて高く見えたのである。

「いゝなあ。」

子供は一齊に感心して、見る見る町角に消えて行く白馬の行衛を見送つた。

「おいらも今にあんな馬に乘つかるんだ。」

一番瘋狂な乾物屋の子は、ありあはせの竹の棒にまたがつて、其處いら中をかけずり廻つた。

「馬鹿、てめえみたいな鼻つたらしが馬になんか乘れるもんかい。あの人なんて百圓の月給取なんだぞ。」

年かさの車屋の子は、はしやぎ切つて汗を流して居る奴を叱りつけた。

「百圓？おつかねえ、おつかねえ。」

乾物屋の子は目をまあるくして、おどけた顔を突出した。

「百圓の月給だつさ。」

周圍の者も口々に驚嘆の聲を發した。驚く外に何等の考も浮ばない程、當時の子供の頭には、百圓といふ金が大金だ

つた。口でこそ百圓と一口にいふけれど、其の分量も値うちも、到底想像出來なかつた。

その連中にまじつて、自分は聲こそ出さなかつたが、心密かに驚歎して居た。自分も大きくなつたら、あんな立派な馬に乘り度いが、百圓の月給取にならなければ駄目かと思ふとがつかりした。いつたい世の中に、どういふ人が百圓なんていふ莫大も無い月給をとるのだらう、大將かしら、いろいろ考へたがわからなかつた。話に聞けば自分の父も、自分が生れない先に役人をして居た頃は、馬に乘つて役所へ通つたさうだが、どうも百圓の月給取ではなさゝうに思はれる。しかし、萬一父が百圓の月給取だつたら、どんなに嬉しい事だらうと、その事ばかり考へて居た。

夕方になつて、

「蛙が鳴いたからかへろ。」

と吾勝にいひながら、お腹を空かしてうちに歸つたが、自分は直ぐに母の所に飛んで行つて、父の月給がいくらであるかを訊いた。

「何故そんな事を訊くのです。」

「何故でもないけれど、百圓？」

母は默つて自分の顏を見てゐたが、

「そんな事を訊くものではありません。」

と云つたばかりで取合はなかつた。金錢の事を口にするのは卑しい事だと、おちぶれ士族の娘である母は確く信じて居て、平生から子供達にいひきかせてあつた。

それつきり自分は口をつぐんでしまつたが、たつた一瞬間にして通り過ぎた丈の白馬鞍上の紳士の姿は、一生涯忘れ

ない程爽かに眼に殘つた。どうか〳〵と、自分も大人になつたら、偉い人になつて百圓の月給取にならうと、恰も天下を望むやうな大きな事として考へてゐた。百圓の金高は、廣大無邊に思はれたのである。

或時母方の叔父が來て、自分は其の膝の間で遊んで居たが、ふと思ひ出して訊いて見た。

「叔父さんはうちのお父さんの月給いくらだか知つてる？」

叔父は不思議さうな顏をして見下して居たが、目尻に微笑が浮んだので、自分は安心して重ねて訊いた。

「百圓より多い？少ない？」

「多いとも、倍も三倍も多いだらう。」

自分は嬉しさに顏が紅くなる位だつたが、あまり無雜作に、且つ意想外な返事だつたので、半信半疑だつた。

「それぢあ叔父さんは？」

「叔父さんか。叔父さんは百圓の半分の又半分位かな。」

さう云つて太い聲で笑つた。

父の月給が百圓より多いらしく思はれて來た事は、やがて自分も白い馬に乘る事が出來さうな氣持を起させた。嬉しくて堪らなかつた。さうして、さういふいゝ返事をして呉れた叔父が、矢張り偉い人に思はれた。叔父さんの月給が、百圓の半分の又半分なんていふのは嘘に違ひ無い。嘘だからこそ後で笑つたのだと思つた。

その馬上の紳士の姿は二度と見た事が無いが、それから三十年たつて、自分は百圓の月給取になつた。その時自分は馬に乘るどころではなく、一家を榰へる力も無く、下宿屋の二階にくすぶつて、常に懷中の乏しさに難澁し、朝夕滿員の電車に鰯の鑵詰の姿をして乘らねばならぬ身の上だつた。勿論物價の驚くべき騰貴と、貨幣の購買力の變化は計算外

に置く事は出來ないが、しかし子供の時に考へた百圓は、今日の壹萬圓よりも拾萬圓よりも百萬圓よりも莫大なものであつた。

上に引合に出した叔父についても、英雄崇拜の思ひ出がある。叔父は慶應義塾を出て、郵船會社に勤めて居た。海上勤務の頃は、事務長をしてゐたのか、或はその下役の事務員かは知らないが、歐洲航路の船に乘つて、屢々珍しいお土産を持つて來て呉れた。六尺近い大男で、日本人には類の無い白皙の面に、稍赤味を帶びた口髭をはやして居た。それが金筋の入つた正服を着て、當時はまだ珍しかつたバナナだのパイン・アップルだのゝ籠を提げて歸つて來る姿は、自分の異國趣味を充分滿足させた。文明開化といふ言葉が流行し、何品でも質のいゝ物は上等舶來と唱へた時代だから、西洋といへば何よりも美しい國に想はれた。自分は叔父にせびつては、歐羅巴の港々の話を聽かして貰つた。

しかし叔父を崇拜するのは、單にそればかりでは無かつた。それよりも、叔父の投げる小石が、子供の眼には判然と距離のはかれない程遠く迄飛んで行く事に敬服して居たのだ。

叔父の家は木挽町の、田川といふ待合の隣にあつた。二階一室に階下が三室位の小家で、自分から見れば祖母に當る母親と、自分から見れば矢張り叔父で、まだ高等小學校に通ふ位の年配だつたから叔父さんと呼んで居た叔父の弟と、台所を働く婆やとが暮らしてゐた。涙脆く、金錢にしまりの無い、お調子に乘り易い性質を多分にうけついだ自分は、まぎれも無く母方の血を多く引いてゐるので、子供の時から此の祖母の御贔負だつた。悧巧な兄は父方の祖母のほめ者だつたが、母方の祖母は自分をつかまへて、お前は兄さんよりも屹度偉くなるよと、無責任な事を云つて可愛がつて呉れた。時々はそのお祖母さんの寢顏が狸に見えて、夜中に泣き出す事もあつたけれど、年中泊りがけで遊びに行つてゐた。二階の椽側に置いてある藤椅子の上に足を投げ出して、目の前の川を漕ぎ下る端艇を見るのが樂しみだつた。夕方

叔父が會社から歸つて來る頃は、祖母に手を引かれて河岸に出て待つて居た。大男の叔父の姿が見えると、自分は祖母の手を振切つて、半町ばかり先の或金持のお妾の家の門前迄かけて行つて、叔父の手に縋りつくのであつた。

此の甥を喜ばせる爲めに、叔父は小石を拾つて川水の上に遠く投げて見せた。眞似をして投げる豆叔父さんの石は川の眞中位で水に落ち、更にその眞似をする自分のは足下の淺瀨に水音を立てるのであつたが、叔父のは向ふの海軍大學の石垣にぶつかるのであつた。その向ふ岸は幼い者には非道く遠方に見えた。早く叔父さんのやうに大きくなりたいなあと、つくづく感じたものであつた。川を越えて石を投げ得る人は、あらゆる事の勇者であるやうな氣がしたのである。

叔父は其後友人の爲めに連帶債務をしよつて東京にはゐられなくなり、各地を流轉したあげくに、殆んど誰も知らないやうな狀態で、北海道に死んでしまつた。

つい近頃往年の木挽町の河岸をぶらついた事があつた。聖人ぶつて得意になり、平民がつた自慢をしながら、死ぬ間際には爵位を貰つて大往生を遂げた心卑しき金持の妾宅はなくなつたが、田川は愈々商賣繁昌らしく、向岸の海軍大學の景色も昔通りだつた。だが甚だしく意外に思つたのは、川幅の至つて狹い事だつた。子供の時に見た大人の偉さと仝じく、大人になつて見ると大したものではなかつたのである。

祖母も叔父も豆叔父さんも今は世になき人であるが、叔父の住んでゐた家は以前のまゝに殘つてゐて、知らない人の表札がかゝつて居た。低徊去るに忍びない心持もあつたが、幸い附近の人影も見えないので、足下の小石を拾つて向岸迄投げて見た。別段力を入れないでも、無雜作に石垣に屆くばかりでなく、樹木の繁つた校庭にも樂々と投げ込む事が出來た。二つ三つ投げ、最後のひとつをもう一度石垣に叩きつけた時、

「誰だッ。」

と校庭から怒鳴つて、灌木のしげみを押分けて顔を出した人があつた。自分ははしたない所爲を恥じて一散に逃出した

遂に自分も大人になつた。しかし、あれ程迄に崇拜した大人が、いかに馬鹿々々しいものであるかを夙に知つてしまつた。あらゆるものを驚嘆し、すべてほんとに在る物よりも、大きく、立派に、美しく見る子供の眼を失つた事を悲しみ、永い間その子供の頃の回顧以外に、心から自分を喜ばせる事が無かつた位落膽した。

言葉を換へていへば、盲目的な憧憬の甘美に醉つた自分をなつかしみ、實際の世の中の美しくない事に悲觀し、著しく懷疑的になつたのであつた。

ところが最近になつて、自分には更に新しい眼が開かれて來た。それは完全に發達した大人の眼である。徒らに物事に驚かず、よきものと惡き物の區別を知り、あらゆる物の價値を正當に批判し、しかも尚熱情を以つてよき物を喜ぶ大人の眼が、無批判の憧憬讃美を事としてゐた單純極まる子供の眼に勝る喜びを持つ事を悟つて來た。

それは物の本體を見極める眼である。價値の批判の眼である。單に生々しい色彩に眩惑されるのではなく、光と共に陰影を見る眼である。單に事物の分量に驚くのではなく、その點を吟味する眼である。子供の眼が夢を見る眼ならば、これは實在を見る眼である。それが幻影を見る眼ならば、これは現實を見る眼である。深く、鋭く、冷靜に、世態人情の一切に迄視線の及ぶ眼である。

確かに線香花火のやうに容易に熱し、忽ち火花を散らす感激はなくなつたが、今時に又贋物ののぼせ上り、くわせ物にだまかされる事のなくなつたのが、大人の眼の効果である。凡て今日の世の中の如く、不正直なる自己宣傳の流行する時、その聲の大なる事に驚いて、批判の心を忘れる傾向のあるのは否み難い。

たとへば普通選擧を叫ぶ政治家の多くが、必ずしも眞に普通選擧の實施を希望してゐるのでは無く、單に反對黨を苦

しめる爲めの手段であるとしても、その弊の大なる時、人は何等の疑を起さない。プロレタリアの藝術を說く者の中にも、必ずしもプロレタリアの藝術とかいふものに信仰を持つ者ばかりではなく、中にはどうにかして文壇の地步を占め度いが、さりとて順當に勉强してもとても見込が無いから、變つた旗印でしかも存外現在の人氣にかなひさうな此派に屬して、新聞の文藝欄を賑はしてゐる者があるであらうが、そのがむしやらの暴言に釣込まれて、これこそ新時代の藝術であると悅喜するものが無くもない。新聞一面をつぶして忠義孝行を說く有田ドラッグは、矢張り梅毒淋病の藥を賣廣めるのが目的で、忠孝はその馬鹿々々しく且つ巧妙なる手段であると氣のつかない人も澤山ある。

これらは皆永久に子供の眼を持ち、遂に大人の眼の開かれぬ人々ではないだらうか。宜なるかな、在野黨は常に憲政の神樣と思はれ、原稿の押賣する者は新進作家と思はれ、有田ドラッグは國民道德の師表と思はれるのである。近頃の言葉でいへば、宣傳の力に壓倒されて目のくらんだ狀態である。本體を見極める大人の眼を持つてゐないのである。(以下約四百字脫漏)

いゝ年をして子供の眼を持つ人間は、其人間自身にとつては幸か不幸かしらないが、少なくともよりよき世の中へ進む爲めには、斯かる存在はわざはひである。

自分はおもふ。今日の世の中に何が一番はびこり過ぎてゐるかと云へば、女と子供を相手にする新聞雜誌と、子供の眼しか持たない人間である。大人は早く目覺めなければならない。物事の本體を見極め、價値判斷を明確になし得る大人の眼を持たなければ、此の國は救はれない。(大正十二年六月四日)

人形見物記

黒田禮二

面白い一人の人間の記事を書く。それは喩話でも諷刺でもない。僕等と同じ樣に血を通はせて現に生きて居る一人の埃及から來た青年を僕の眼に映じた儘に書きしるすであらう。

場所は伊太利です。別にさう取り立てゝ外つ國のお話し計りする必要もなからうけれど、それかとて又殊更に自分の故郷の物語りのみに筆を限るべき必要もあるまい。今の僕にとつては伊太利であらうと我が日の本であらうとさう區別を立てゝ、詮議立てすることすら既に物憂い。橄欖の花薫る羅馬の古都を彷徨ふとか、ゴンドラの舷歌に醉ふてヴェニスの夏の一夜をしめやかに過ごすとか、そんな物珍しい所謂エキゾチクな前提を頭の後に置いて殘暑に疲れた讀者諸君の興味を釣らうと言ふ魂膽は毛頭持つて居らぬ。伊太利の舞臺が少し氣障だと言ふなら、コビの沙漠の眞ん中と考へても勝手であらう。唯だ人間のことを考へて見るのだ。僕の頭の中には其の人間の印象が底深く彫り付けられてある計りだ。背景のそれが南歐の氣分であつたのか、オレンヂの香であつたのか、或はゲイシヤ、富士ヤマ、大佛の配置であつたのか、もう疾うの昔の霧の樣に消散した。今は唯だ胸に痛ましく殘つた重苦しい陰影の醜い姿……はて、それは、伊太利であつたかはたまたそれとも佛蘭西であつたか？　何處に頭があつて何處に脚があり尻尾があるのか分らない樣に、探へる一個の怪物。その怪物に寢ても醒めても劫かさるゝ人間が今伊太利の寢言を言つたとて別に不思議なこともあるまい。去れ、亡靈よ！　ファシスチの醜い姿よ!!

扨てサボナと言ふ小さい漁村がある。ゼノアの町から一時間計り汽車に揺られて着い。た地中海岸の港だつたと思ふ。時は忘れた。夏かも知れぬ。

其の時には慥か雨が降つて居た。僕は其の漁師町の或る暗い宿屋の一室に、雨の一週間をじつと閉ぢ籠つて、硝子窓を透して見ゆる灰色の海の空計り眺めて居た。

何の爲めにこんな田舍へやつて來たのか？　でも其の當時は

誰れでも人間の氣が浮き立つて翼あらば飛んでも見たい焦燥の想ひが漲つて居た爲めでもあらう。蝙蝠でさへ塒を出た。で僕も矢張り迂路ついたのさ。歐羅巴中處嫌はず。

一寸、考へても見給へ。僕は怎うしても不思議でならぬ。今に分らぬ。此の浮き立つた氣持ちで時の伊太利の勞働者は四百萬人と言ふものが堅い組合の結束をなして動いて居たのである。古い羅馬やフイレンツエの美術を破棄して電氣を喰ひ鋼鐵を着よと叫んだ未來派の革命的氣分を單に藝術上でのみ觀察する必要はなく、現に筋肉を動かして工場に働く雲霞の如き生産者の群集が四百萬に近い連帶の強い力となつて現はれて居たのである。ニッチもなくジョリッチもなく羅馬法王も封建の遺物もブルジョアジイも陰にかくれて唯だ生産者の活ける力計りが全伊太利を震撼させて居た。赤色國際勞働組合の最初の參加者となつて、否な此のインターナショナルの急先鋒となつて寧ろ此の組合を設立せしめたもののも實に此の伊太利の勞働者であつたではないか。伊太利とソキエト、此の二つの言葉はもう怎うしても切り離すことの出來ない結合帶になつて見えた。赤い感激の波濤…

然りそれは唯だ感情の波濤に過ぎなかつた。西の方から資本の結束した潜勢の力が微かに守勢を攻勢に轉じて來るまで彼等の感情は唯だ大渦の破紋を立てゝ渦れ狂ふが儘に狂ふて居た。軈て暗夜に忍び寄る伏兵の様な資本主義が不意に叢から立ち上つて總攻撃を開始した時に一遍に彼等は陣立を崩された。亂れた。燐光の如く碎けて散つた。ムソリニのフアチストは能く一擧に四百萬の大衆を僅か二十萬足らずの情けない殘黨と化へた。

それなのだ、僕の不思議に思ふのは、當時小さなサボナの漁師町は今でも夢の様に僕の記憶を去らぬ。宿屋の硝子窓から一面に見渡される雨の湊町をじつと眺めた時、其の四尺四方計りの窓枠（まどわく）の中へ收まつたサボナの町は赤く流がるゝ大旗小旗に渦巻きの如く搖れて居るのだ、電氣と鋼鐵の工場より解き放たれ、トリノを劫し、ミラノに溢れ、ゼノアに迫つた勞働の大衆が燃え立つ如きデモンストレーションの滂湃する潮の流れを此の遍鄙なサボナの町の片隅にまで送り寄せたのだ。震れるが如く崩れたコ、ーシユカの油繪の活ける炎の姿を現實其の儘に此の小さい窓の中に映しとつて眺めて居たものだ！

雨は霽れ相もない上にもう夕方の六時も近いたので夕靄に暮れ行くサボナの町には一齊に田舍らしい電氣が輝いて來る。デモンストレーションの迅雷はもう窓から過ぎ去つて、只だ遠方に叫喚の山彦が聞える。窓からは夕べの地中海が灰色に輝やい

て黒いトロール船の檣柱がその光りをぎざぐ\に突き裂いて居る。じつとして考へて居られなくなつた。

つと部屋を出で街頭をカリバルデイの廣場に向ふ。デモンストレーションが解散した名殘りの男女勞働者は十人位つゝ黒い塊りとなり、醉ひどれの步調の如く騷がしく通る。雨に濡れそぼちた犬が吠え乍ら途を横ぎる。小供が行列からうろ覺えに感染して覺えた赤衛軍進行曲を歌つては燥いで居る！

百萬の群れ、限りなく
暗夜に慕ふ樣を看ろ
我等の望みが達せられ
天地もゆるいで裂けるまで。
……
奴隷の國は永遠に
堅い戰爭で葬らう！

こんな工合で僕は唯一人、廣場の隅に退つて居るベンチに腰を掛けて、靜かに道行く町人の織り交ふ姿を夢の如く眺めて居た。小糠よりも細い霧雨に頬を撫でられてもさう感じない程度ではあるが、頭の上に生ひかぶさつた並木の梢から間歇的に落ちる雫にふと氣が附いて……見ると自分の前に三四人の女工の群れが立ち止まつて居た。何事か耳語きあつた合つた後の笑ひ顏を見合せたかと思ふと、又思ひ出した樣に其の場を消え失せた。

『あの女等、一體俺の何をさう笑ふのだらう。東洋人の面が珍らしいのかな？ 珍らしいなら珍らしいで宜い。笑はなくつたつてよさ相なものだ……』

之れは失策つた！ 成る程誰れでも冷笑するに極つて居る。僕の洋袴の前のボタンは皆な外れて居るのだもの。乾度ぼんやりして部屋を出た時から前の方を懸けることを忘れて居たに違ひない。極めて紳士の體面に欠けて居た……本能的に僕は自分の洋袴のボタンをきちんと締め合はせ、僕自身も悔しい樣な侮辱された樣な態とらしい苦笑を仕て見た。笑ふと言ふことは不思議なものだ。洋服のボタンが外れて居るのが一體何故に可笑しいのかしら。洋服のボタンは締めて置く可きもの。締め一置くべきものが外れて居るのだから可笑しいのは當然さ……いやそれが分らん、第一何故にしめて置く可きものだ？ それが外れて何故に笑ふのが當然なのだ？……

不圖自分の横を見る。何時の間にか僕のベンチのすぐ横に一人の勞働者が腰をかけて居る！ 汚れた茶色の背廣を着け鳥打帽を阿彌陀に冠つた青年だ。デモンストレーションに疲れた歸途の一人でもあらう。後の手すりに左右の兩肱をかけ、身體を

前につんのめらし、頭をぐつたりと胸の前に垂れて居る。恰も十字架の最後の耶蘇を半分地上へ斜にした樣な姿だ。右手に握つて居たでもあらう小さな赤旗がだらりとした掌から地上に落ちて其の柄がベンチの脚に倚りかゝつて居る。示威運動解散後の疲勞！

それ丈けなら別に此處に取り立てゝ書く必要もないことだ。處がそれが面白いのだ。此の眼を閉ぢてぐつたり依りかゝつた青年の洋袴の前のボタンが矢張りすつかり開いて居るのではないか。それを不圖發見した時に今度は前の樣な無意味の苦笑でなく、本統の笑ひが込み上げて來た。偶然にもベンチに並んだ二人の男が申し合はせた樣にだらりと物思ひに沈んで、而して又申合はせた樣に洋袴の前を廣げて居る……

『……おい、君。君の洋袴の前が可笑しくなつて居ますぞ』

おせつかいな事だが本能的に僕は隣りの青年の肩を輕く叩いた。

青年は靜かに頭を上げ、ぎよろと眼を見開いて僕の顏を不機嫌さうに眺めた。彼の顏色は恐しく渇色である。沈鬱な表情の中に何處か人を馬鹿にした樣な皮肉の色が開いて居る。額の廣さと言ひ唇の恰好と言ひ北伊太利に特有なセンチメンタルの甘さのない處から考へても、一見彼れが土地の人間でなく、寧ろナポリかそれともシチリア邊から流れて來たものゝ樣に感ぜられた。

『君もさう仰有る！　矢張り君も！』彼は厚い唇を少し曲げ加減に答へる。『僕も今此の洋袴のことを一心に考へて居たのです』

これは酷い奴だと思ふ。僕自身だつてたつた洋袴のことをぼんやり考へやうとして居た。然し僕は自分の外れたボタンを閉めた後に之れを哲學化して居たのだ。然るに此の男は自分の外れて居るボタンに氣が附き乍ら、それを瞑想して居るとは何て變つた奴だらう！

『いやさうですか？　實は僕自身も今初めて自分の外れて居たボタンに氣が附いた處で、それは此處を通行する人々が立ち停つて笑つて居たもんですからね。そして氣がついて見ると君も矢張り僕のお隣りで同じ樣に其處が外れて居られる……』

『いや僕は實に此のボタンの問題には殆ど悲觀して居ます。それに就て僕は實に人類的な苦痛に打ちのめされて居る所なんです』

此の意外な難かしい而して不可能な答辯を聽いて僕の隣人が純然たる勞働者ではなく矢張り一種の智識階級の青年なることが察せられた。

「君がボタンを外して居られるのに何か深い理由があるんですか？」

「別に理由はない。然し僕には不思議で堪らないのです。僕は今日此の町で勞働組合のデモンストレーションに參加して居ました。工場占領妨害に對する大々的示威行列なのです。お見掛けする處君は日本人ですな。僕も君達といくらか緣の近い東方の人間です。埃及のポート・サイドに生れたものです。十一歲の時ゼノアに流れて來て同市の商業學校に學んで居たのですが戰爭の時には伊太利の國籍を得てゴリチアに戰ひ、負傷後送還されてミラノの或商店に勤めて居ました。」

それから彼れは例のボタンの問題は放つて置いて始めて會つた東洋人の僕に對し彼れの生ひ立ちを簡單に物語るのであつた。

彼の名はアンドレ・ハミッドと言ふ。彼は埃及のポートセイドに生れた生粹の埃及人であるが、早くから兩親を失つて十一歲の時伊太利ゼノアに流れて來、久しくホテルの給仕をしたり事務所の小使をしたり、種々の苦しい生活を送つて來た。十六歲の時ある富有な寡婦の手に拾ひ上げられて、同地の商業學校に這入つたが、其の時分からシンヂカリズムに關する讀書の味を覺え、廿歲に足りないうちにもう世の所謂學問に嫌になつた。其の內、歐洲の大戰が始まつて、彼は伊太利に歸化した關係上、直に軍籍に入れられ、ゴリチア及びアルプスの塹壕と對陣することゝなつた。でも日頃讀んで居たジョレスの言葉が常に彼の耳の底にこびり附いて居るものだから、怎うしても銃器を手にすることが出來ない。二度計り陣地を投てゝ逃走を企てた爲め、久しい間獄屋に投ぜられて居た。軈て露西亞に革命が起つたとの報を手にし、莫斯科を慕ふ念がいや募りに募り、遂に破獄の目的を遂して、瑞西に逃亡することが出來た。ハミッドの一家は祖先傳來ファナチックな回教信徒であつて毎年一回メッカに參拜するのを無上の光榮と心得て居た、其の血は青年ハミッドの中にも漲つて居て、怎うかボリシエキの世界を尋ねて莫斯科に巡禮したい念は一日も已まなかつた相である。當時赤い思想の流れは唯一人此の埃及青年の頭を支配する計りでなく、其の後の伊太利のプロレタリアートは何れも過激な革命精神に浸潤し、『一切をソキエトに』の觀念は伊太利勞働者の重なるモットーと變じた。此處に於て今迄有色人類として獨り淋しく不愉快な念に充ちて居たハミッド君は、此の大きな階級的インターナショナリズムの下に於て寧ろ伊太利に籍を置いたことを喜ぶ樣になつた。彼は窃かに瑞西より歸國してミラノに這入り、ロムバルチア電氣工場の職工となつて、同志の間に盛んに

ボリシエヰキズムの宣傳に從事して居た相だ。其の結果伊太利に工場占領の事件は勃發し、同盟罷業は隨所に續出し、一時伊太利は勞働者の掌中に墜ちんとさへ見ゆる形勢であつた。然るに改良派の優柔不斷は此の形勢を持續せしめず、一方資本家は愛國黨を糾合し、また他方には旣にフチスチの萠芽さへ現はれて昨日まで社會主義の左傾者と思はれて居たムソリニの一派が漸く擡頭の氣運に向つた。社會主義の內部に於ても社會民主黨との分裂は次第に著しくなつて、昨日まで賴りに思つたセラチさへ自分等の仲間を離反しやうとさへ試むる傾向が見えた。表面は盛んな共産黨の內部――何時革命が勃發するかと指折り數へて希望の口角に泡を飛ばして居る過激派の連中も日夜續く示威運動に疲れ果てゝ自黨の行末をじつと考へた時は心あるものは矢張り暗い陰影が腦裏にかゝれるを否むことが出來なかつた。まだ齡も若い單純で、眞直ぐな此の青年ハミツドの淋しい心にも矢張り不安な氣持の雲が掩つて來たでもあらう。昨日までは黨の前衛の勇士として工場にハムマアを握る手にも希望の力を覺えたが、僅か三ケ月計りのうちに何だか形勢が變になつて來て何處の工場へ往つても斷はられる、意氣は何となく沮喪する。工場勤めは放つて置いて、宣傳やら會合に計りに沒頭して居るので、收入の道は塞へ、借金は殖える。下宿の部屋は追ひ立てを喰ふ、行き附けの安いレストランは代金引替へでなければ食物を與へて呉れぬ……

『然し本統の革命家がそんなことで閉口する樣ではいけない。飯を喰はせなければ喰はないで宜い。僕は今朝ミラノから此のサボナの町の示威運動に應援に來たのですが、實はまだ昨晚からパンの一切も食つて居ない。今日の樣な雨天に濡れて僕の痼疾のリウマチスは痛む。それでも僕は氣違ひの樣に赤旗を持つて行列の先登に立ち、此處の廣場では聲を絞つて演說もしました。然し僕等の運動は今ぢや當分の最高潮點ぢやないから　何か大きな變動の力で僕等は一遍にやつ付けられる樣な日が近づきはしないか知ら。唯だこんな空の感情に狂ふ行列が果して何の役に立つか知ら、と考へて來ると、果ては我々未來の兇兆に對する絕望と、哀歌との悲しい行列を今大規模にやつて居る樣に思はれて仕方がない。もう行列は解散した、雨は御覽の通り鬱陶しく降りしきる。夕邊からの疲勞が一時に出てそれに飢餓が急に襲つて來たものだから、一步も步かれなくなつて了つた。これから共産黨の事務所へ行つて旅費を貰ひ今夜ミラノへ歸る積りで居る」

『其處で例の洋袴のボタンは怎うしたのです？』

『あゝさうでした。其處で僕は疲れた身體を此のベンチに凭た

せて暫くじつと休んで居る。宜敷いが。すると僕の洋袴の前は開いて居る。それには僕と雖も氣は附いてる。途行く人はそれを見て笑つて通る。或る者はわざ〳〵注意までして呉れるのです。然し僕にはそれは誠にうるさい。洋袴が一體何だ。洋袴の前が開いてることが何故にそんなに人間の大問題となる。僕等は腹が減つて居る、人間の問題として之れ程耻かしいことはない。ご覽なさい此處を面白さうに歸り行く勞働者の連中でも實は飯の喰へない奴がさらに居るだらう。生きて居る人間としてこんな耻しいことはないぢやないか。然し誰れ一人資本家の中に我々の胃の腑の測定をして呉れるものはない。洋袴のボタンが外れてると資本家はおろか、同じ友達連中でも、おい見つともないぞ、と注意して呉れる。僕は今しかたそんなことを考へて、別な直ほしもしないで、じつと自分の開いて居るボタンを眺め入つてる處でした……」

其の日僕は此の初めて出會つた友達を誘つて僕の宿屋に一日を憩せて、而してホテル・レストランで麵麭と肴とマカロニとを鱈腹喰はせてやつた。すると今迄打ち沈んだ憂鬱のこの青年は急に愉快な活々とした顏色に變つて無邪氣に燥ぎ初めた。窓から渡してある木材の梁に飛び附いて、鳥の如く其の上に跳ね上り、軈て見事な逆立までして見せたりした。彼れは小供の時ある曲馬團に雇はれて綱渡りや曲藝なんかやつたこともあつたと言ふ。其の日は僕の勸めで、たう〳〵僕の寢床で一緒に夜を明かし、翌朝僕が好意に呉れてやつた廿リラの紙幣を握つて彼は飄然とミラノの方に歸つて行つた。

それから丁度一箇年の歲月が流れた。而して僕は獨逸の土地から再び北伊太利の空を訪れる機會を得た。別に成すべき用があつた譯ぢやない。東歐羅巴の方々を旅行して居た序にまたふらりと伊太利へ彷徨うて來たのだ。汽車をミラノに捨て、停車場前の宿屋に荷物を置いてお馴染の大伽藍の廊下を散歩する。伊太利はもう死んで居る。假令商店の景氣は活氣附いて來たでもあらう。煙突の數も殖へたかも知れぬ。それでも今度の伊太利はもうサハラの樣に冷たく僕の眼に映じた。サボナで會つた靑年の豫言は的中した。ムソリニに蹴飛ばされた四百萬の勞働軍は算を亂して潰走した。多血な感情に依つてのみ結合された革命精神の微弱なことよ。哀れむべき孤立の伊太利プロレタリアートはファシスチの暴力と桎梏との下に再び無制限な時間と奴隷賃銀に苦しまなければならぬ秋となつた。靜かな空に針の行列の如く突き立つた大伽藍の屋根を仰いで鴉の群れの啼き聲などしづと聞いて居ると窓から眺めたサボナの町の昨日の姿がまるで別世界の出來事だつた樣に感ぜられる。若い伊太利はも

う死んだ。ゴンドラや橄欖の花に民族を特種付ける‥‥資本家の舞臺面を装飾する、昔の匂ひが復活して居る。伽藍の奥から哀歌の鐘が鳴る。

伽藍(カテドラーレ)の前面の廣場の周圍には、東京ならば丸ビルの通り路見たいな商店の竝ぶ廊下街(ガレリヤ)が四角に走つて居る。お賽錢をおてにした洗足(はだし)の小供が、執拗に物乞ふ襤褸の乞喰の群れが‥‥

伽藍の入口には案內者の一と殘りが控へて居て、ペデカ案內書や寫眞のカメラなどを手にしてうろ付いて居る外國人などを見付けた時は喧嘩の樣に喧しく御案內のお客にしやうとする。五月蠅(うるさ)い！　俺は伽藍に用はないのだ！

『でもミラノにいらして大伽藍の內部を御覽にならないぢやお土產話になりませんぜ‥‥』

『いや、僕は昨年見せて貰つてもう知つてるから、折角だが案內はいらん』

『でも去年のことでしやう。去年とは時代が違ひますぜ。一昨年から去年にかけて工場勞働者が此の邊で亂暴した當時は此のカテドラーレも大變淋しく荒れてたんでね‥‥‥今ぢや怎うして、ムソリニ閣下が政府の上にお立ちになつてからは、此處へは大變な御寄附をされるし、お坊さん方を優遇される者、內部の壞れた壁なんかは、奇麗に修繕もして、まるで見違へる樣になりましたぜ、案內料はお思召で宜敷い。さあ斯うらつしやい。抑々正面に見える此の大理石の柱は‥‥』

執拗(しつこ)い奴だと其の狡猾な案內者の顏を見る。彼れだ！　彼れだ！　間違ひもなく去年サボナで赤い旗を握つて示威運動の魁けをして居た埃及の青年だ。青年共產者のあのハミツド君であつたのだ！

『おい君だらう。何時かサボナの漁師町で共產黨の旗を振つて――それから僕の宿屋で泊つて行つたぢやないか。』

『ハミツド君は駭きの眼を見張つた。鳥渡耻かし相な皮肉な態度に肩をすぼめて苦々しい笑顏をする。去年見た時の樣に袖垢に染んだ勞働服はもう折目正しい流行の背廣服に變つて居る。それに新しい絨の帽子さへ粋な阿彌陀に冠つて居る。

『なる程さうだ。君はあの時僕が大變なお世話になつたあの本人ですな。なる程さうだ、妙な處で又お目に掛りました。お蔭で僕は今ぢやこんな處の案內人(ギイド)になつて、まあやつと飯は喰つて行かれる樣になつたんですがね‥‥』

『然し可笑しいな。あの時は君は大變な氣焔だつたぢやないか。僕は矢張り君が今でも勞働軍前衛の勇士として何處かの工場に奮闘して居ると思つたのに。別に案內人になつて可笑しい

とは思はん。然しあの時の口調に對しムソリニ閣下が怎うの斯うのとお仕儀計りする仕事をやつてるのは何だか一寸可笑しいな。皮肉の樣で』

『左樣。皮肉です。皮肉と見て下さりや僕としても滿足です。まあ其の邊はいろ〳〵と聞いて下さるな。矢張り智識から這入つた共產黨員は本物ぢやないんですね。いくら熱情に燃えたつて、冷靜な反動の時が來りや僕の樣になる。僕の樣に多少外國語の智識なんかあつてその上寄席藝人でも案內者でも何でも出來るやうな人間は不平を言ひ乍らも矢張り脇途にそれる可能性があるんだ。一時飯が喰へなくなつたり、失業したり、貧乏に惱んだりすることは決してプロレタリアートのソリダリテイには關係のない個人の問題なんだ。勞力以外何一つ賣るものを持たぬ本統の勞働者にして始めて社會主義は眞理でもあり宗教でもあり得る。僕等の樣な人間は社會主義を眞理にしたり宗教にすることは出來るが、本來からあることは出來ない。だからそんな運動の先登に立つて居た樣な時の眞最中でも景氣が好くなる時と惡くなる時との豫感が切實と僕等の胸に映じて來るのです。僕はあのサボナで君にお目にかゝつた當時も、已に今日の樣な反動時代がやつて來やしないかと、前兆の樣に胸に泛んで居た。だから示威運動で大意張りして居ても其の後では急にがつかりした樣に疲れて何となし心は重苦しい不安の念を抱いて居たのだ。不安つて監獄や何かを怖れることぢやないんです。監獄や何か怎うでもいゝ。あれからでも僕は二度計り引つ張られて居たんで、そんなことは平氣さ。然しそれは自分と言ふ人間の立場に對する恐しい不安なんだ。僕等は元來本統は矢張り案內人見たいなものだつたのです。伽藍を見る可き人が在れば、それに勸めて見せてやる。女郎屋を素見したいお客さんが居れば其の手引きもする。敎育や慈善の事業に興味を持つた人間にぶつ付かつた場合は眞面目な顏をして文部省とか國立敎育會などの訪問のお役に立つ。小供の時から讀んだり聞いたりして寄せ集めた智識は別に自分の爲めのものぢやなかつた。皆んな案內人になる爲めのものさ。僕はまあ一生、人生の案內人だね。今に共產黨が盛り返へしたら又その案內も出來ることだらう……』

伽藍の石段に腰を下した喋舌の埃及人は洋袴の衣嚢（ポケット）から新しい麻ハンカチを取り出して滲んだ額の汗を拭つた。

「怎うです。こんな處ぢや充分お話が出來ん。何なら僕にお附合ひして下さらんか。何處か此の邊で食事でも濟ませて、それから僕の家へ來て下されば有難いが、妻にも御紹介したいし』

『君は妻君もあるのかね？』

『それがだ、中々面白いんだから兎に角僕の方に來て下さい。

何時かは君に御馳走にもなつたし、どうせ御禮の積りもあるから。』

彼は先に立つて進む。人生の案内人、時勢の都合に依つて生活の態度が伸縮され得る、蝙蝠の様な人間。一體それは誰れのことかなあ。敬虔なムソリーニの寄附に依つて景氣よくなつた伽藍から撞き出す鐘の音に送られ暗い氣持を抱いた僕は默つて彼れの後に從つた。

マヂニ街の、とある料理店の扉を排して僕を導いた彼れは慣れた態度で、東京なら銀座のカフエテリヤの様な賣場に切符を買つて來て、二人の爲めにマカロニや肴の皿と、外にキヤンチの葡萄酒一壜とを取り寄せた。何時かサポナで會食したと何じ鹽梅のものゝのお返しなのだ。二人は默つて喰つた。彼は時々冷やかに微笑んで僕の空しくなつた酒盃に酒の酌のつぎ足しなどをした。

料理店を棄てゝ往來に出た時も二人は矢張り沈默を忘れなかつた。彼は時々口笛を吹き空を見上げて歩調をとることもあつた。道にたゝずむ貧女や勞働者などが何れも萎びた顔を伏せて居る、フアシスチの自動車が爆音を立てゝ途の眞中を驀くらに走る。……

どんな四つ辻を怎う曲つたのか小さなミラノの町でも見當がつかない。狹い市場や荷馬車の間を潛つて汚い脇道へ脇道へと外れていつたのにつけて考へても、矢張り場末の勞働者街なのであらう。壞れた赤煉瓦の壁なんかフアシスチ勞働組合集合の廣告など、處せまき計り貼付けられてあるのが見える。暗い奥庭の路次を這入る……

『僕の家は此の奥の建物の四階なんだ。階段が暗いから氣をつけて上つて下さい。近頃瓦斯が壞れて燈かなくなつて居るんだ。』

塵埃だらけの階段の欄杆を頼りに彼れは四階の一室の陰鬱な扉を外から鍵で、ぎいつと開けた。

不思議な部屋であつた。四方の壁には波斯模様の絨緞が垂れており、床の上にも美しい古風の敷物が敷かれてある。眞中の黒檀の卓子とマントルピイスの上には埃及の人形や古鍋なんか配置され部屋の横の方には書物の推積が崩れて居る。怎う見ても淋しいヂレタントの棲ふべき一室としか見えぬ。不思議相にきよろ〳〵と落ち附かない僕に少し計り破れては居るがそれでも柔かいソーフアを指し示し、戸棚から埃及莨の箱を取り出して、燐寸と共に僕にもそれを薦めるのであつた。

『中々立派な家でしやうが。此の邊の悲惨な勞働者街の中ではこんな眼の冴える様な部屋は一つもない。此處ぢや僕は王様見

たいなものですね。僕等の階級の人間は資本家の間に出這入りすると先づ門番か犬見たいなものだが、こんな場所へ來ちや矢張り光りますね。斯う光るのが駄目なんだ。だから結局熱情に驅られて赤旗なんか振つて見てもぴつたりと來ないのだ。こんな隱れ家を作らうと思へば作られるんだから。道途く旅行客を欺しちや口錢を集めて居ると、兎に角蝸牛見たいに見分の貝殼が出來る。自然洋服のズボンの前が外れてりや正しくもして見たくなる。こんな生活の貝殼があればこそ初めて外れたズボンのボタンをかける意味が分つたのです。あの例のベンチでの洋袴のボタンの哲學が……』

彼は笑つた。僕も笑つた。

『處が君。君は奥様が在るといつたぢやないか？』

『あゝ女王様ですか。勿論居ます。直ぐ御紹介しませう。さう〳〵、それが君をお連れ申した目的だつた。』

彼は傍の呼鈴を押した。異様な響きを立てた電鈴の音に應じて奥の扉がさつと開いた――

僕は自分の眼を疑つた――

神經衰弱に惱む僕は時々物象の距離を失つて大きな物が小さく見えたり近くのものが馬鹿に遠く見えたりする。演壇に立つた辯士や芝居の役者が時々豆粒の樣に小さく見えて驚きをするのが惜い樣に感ぜられる事もある。

僕の眼の前にはそれが現はれたのだ――

それは〳〵小さな若い女であつた。西洋の人形の樣に小さな美人であつた。いつか東京で露西亞の一寸法師一座の芝居を見てよくも人間の中には小さい奴が居られたものだ、と呆れた印象がまだ殘つては居るが、今現に僕の眼の前に現はれた存在は――實に二尺に足りない――一尺五寸位かしら。怎うしても僕には今に想像がつかない。

一寸法師の美人は莞爾として僕の前に現はれ小さな掌を差し出した。僕は二本の指で摘む樣にして彼女の掌に初對面の握手をしなければならなかつた。怎う見ても立派な女だ。眼の冴える樣な美人だ。頭と胴の釣合ひから言つても全然平均のとれた可愛いゝ人形の存在だ。薄い緑色のローブを身に着けてさらりとした姿は、或は僕の視覺の錯誤から來る距離のパースペクチヴに幻像ではないか知ら……僕は額に皺を寄せて眼鏡をかけ直ほした。いや、矢張り立派な侏儒なのだ。本統に小さい體軀の女なのだ。圓味のある美しい顏には粉黛を施し、伊太利人に特長の黒く縮れた髮の毛は巴里流行の撫で付けた型に束ねられ、漆黑に輝く瞳の奥から眞珠の玉がこぼれ出さう。普通の侏儒によく散見せらるゝ悲慘な滑稽味は毛頭發見することが出來ぬ。

それにしても如何に彼女の小さいことか！

　ハミッド君は得意な樣な冷笑を泛べて

『怎うです。僕の妻は。美しいでしやう。可愛いゝでしやう。子供の時ある曲馬團に這入つて居た時に僕が一緒に働いて居た此の小さな女友達と近頃結婚したのです。彼女は僕の懷に居て此上もなく幸福に暮して居ります。小さくつて美しい。從順で人形の樣だ…これこそブルジョア文明に生きてる女性の備へて居なければならぬ理想の型でしやうが。でも此の女王は僕の家庭では暴君です。此の女王の爲めに僕は街頭を案內者となつて彷徨ひ儲けた金錢で彼女の爲めに眞珠の首頸りを註文したり。金剛石の指輪を買つたりしなければなりません。何しろ小さいんですからね。漆塗りの靴一つ註文するにも特別に誂へなくちやならないのですから。中々厄介です。でも彼女は解放されて居ます。家の中で讀書したりマンドリを奏いたりして小鳥の樣に暮して居ります。さうです、女の解放されることが又僕の奴隷となる所以なのです…』

　彼はにこ〳〵と笑つてゐる彼女をちよいと輕く抱き上げて自分の膝の上に据えた。乳房のあたりに小波うち胸廓から、西洋婦人獨特にふくらんだ腰のあたりの輪廓は怎う見ても立派にもう完成し切つた女なのだ！

『でもまだ極くお若いでしやうな。失禮だが大變美しい。然し子供さん見たいでもある』

『私これでもう廿六歲なんですよ…』不意に彼女は鈴蟲の樣な聲を出した！

『身長が半米突で目方は一ミリグラムに足りないの。嘘だと思つたら構はないから私を抱き上げてご覽なさい』

　僕は躊躇した。

　青年は笑つて、『えゝ構はないです。僕にや嫉妬と言ふものがない。君が珍しいと思ふなら今でも着物を脫がせて裸身にならせてお眼に掛けます。斯う言ふ女ですから妻とは言ふものゝ僕の人形に過ぎない。抱き上げてご覽なさい』

『君等御夫婦の間にまだお子供さんはないのですか？』

　青年は小さな美人と顏を見合はせた…哄笑して、二人とも腹を抱へた。

『小供？　產兒制限です。物理的方則から考へても自然にさうでしやうが。』

　何時の間にか狐につまゝれた樣に眞面目な顏をした僕も其の小さな柔い存在を矢張り自分の膝の上に載せて其の袖邊や掌などにさわつて居るのであつた。

　ハミッド夫人の爲めには小さな卓子、椅子、ソーフアから化

粧鏡、スーツケース及び食器の類まで一寸法師の飯事見たいな特別の器物が備へられてあつた。三人はチヨコレートを吸りシガレツトを吹かせた。夫人の紅い唇に啣えられたシガレツトはクラリオネツトを吹いてる樣に大きく見えた。

　夫人は僕の爲めに特にハミツド君の指定に從つて、之れも亦特別誂への小さなマンドリンを奏でた。アヴエ・マリア……。

小さな小さなアヴエ・マリア！

　去年はサボナで赤衛軍の進行曲を聞いた。今日は全じミラノの町端れでアヴエ・マリアの絲の樣に細いマンドリンの音に耳を傾ける。

　勞働者であつて、然も貴族もブルジヨアも、デレタンチズムも隠遁も虚無も、何でも這入つて居る。人格も哲學も文化も味噌も糞も散り〳〵ばら〳〵に、而して伸縮自在に光つて居る。それがハミツド君なのだ。新しいインテリゲンチヤなのだ。昨日は赤色のデモンストレーシヨンに聲を絞つて、洋袴のボタンの哲學を說く。今日は融通自由の案內人となつて片隅に小さな人形の洞窟を作る。之れが矢張り伊太利の末路だつたのか？　虐げられた伊太利の無產の兒よ。フアシスチの荒れ狂ふ嵐の下に忽ち倒ほれたお前達の陣立ての下には、こんな南の國の酵母計りを賴りにして居たのではあるまいか。

フアシスチの暴風は今何處を吹く？

――（六月八日夕）――

對比全慶應敗戰記

三宅大輔

敗軍の將は兵を語らずと云ふが、私は敗軍中の一兵卒であり乍ら、敗軍の有樣を語らなければならない事情になつて了つた。それは今度のオリンピックの野球に關する感想を書くやうに改造社から頼まれて居た。そして敗軍以前即ち吾々が下阪する前に頼まれて、私はそれに對して必ず書く事を約束して了つたので、今更敗けたから書かないと云ふ、云ひ譯も立たない事になつた。私は乘氣になつて書くのではないが『何故負けたか』と云ふ事を書いて置く事は、色々の事を誤解し易い世間の人々に、多少吾々の眞意を了解してもらへると思ふから、斷らないで書く事にした。而も私は仕合其物に對する其時の眞の有樣及び心理狀態を書くのが、一番眞意を了解してもらへる近道であると思つて居るから、仕合其物の有樣を書いて見たいと思ふ。勿論當時の新聞紙上其他に仕合の經過に關する詳細の記事はあつたが、仕合の經過を報導する人と、實際に仕合に參加したものとの間には、多少其時の感情とか、心理狀態に異なる點があると思ふから。私は自分自身が仕合に負けた組の一員としての立場から書くのである。私は讀者諸君に『全慶應はかうして負けたのか』と云ふ事さへわかつてもらへば滿足である。『全慶應かうして負けたのは氣の毒だ。』と云ふ同情を强いるのではない。

先第一に私が云ひたいのは、吾々は勝負を爭つたのであるから負けたくなかつた。勝ちたかつたのは勿論である。然し負けて了つたのだ。吾々は殘念に思つた。口惜しかつた。それでも私は負けた事を恥ち入つては居ない。何となれば吾々は此仕合に關して、恥じ入らなければならないやうな事を、一つもして居なかつたからである。吾々は吾々の出來る丈けの事をして負けた。吾々にはあれ以上出來なかつた。少なくともあの當日の吾々はあの當日吾々がやつた以上の事は出來なかつたから負けたのだと思つてゐる。

私は重ねて云ふ。吾々が仕合に負けたのは殘念だつた。口惜

しかつた。然し吾々は仕合に負けた以上に口惜しい目に會つた仕合が終了した時、卽ち吾々の敗軍が確定した時、吾々は『恥を知れ!!!』と罵倒された。『何の態だ!』『態を見ろ!』と叫ぶのを聞いた。吾々の周圍には礫ぶとんや、小石がバラ〳〵と飛んで來た。一つの小石が私の衿首に當つて地に落ちた。『氣にしないで下さい。』と云ふ聲が聞へたので私は振り返つて見た。學生服を着た某校の選手らしい人が私の後に立つて居た。私は只『有りがとう!』と云つたのを覺へて居る。これが、吾々が敗けた瞬間の有樣である。これが假りにも日本を代表して仕合をしたチームが、而も日本の領土內で負けた瞬間に受けた出來事である。

兎に角吾々は敗けた。數萬の觀衆の眼前で文句なしに敗けた吾々は『全慶應が日本の代表チームであるから勝つてくれゝばいゝ』と思つて居てくれる人々許りの眼前で敗けたのならば負けてももう少し氣持がよかつたらうと思つて居る。

仕合に敗けた最大原因は何であるかと聞かれれば、私は選手が大事を取り過ぎて固くなつたからであると答へたい。これは一回仕合には最も有り勝ちな事である。吾々は三回仕合を極力主張した。然しそれは採用せられなかつた。三回仕合でも必ずしも勝つとは云へないが、然し一回仕合よりも實力の仕合が出來る事は明らかである。私は仕合前に人々から『勝てるか?』と聞かれた時にいつでも『普通にさへいけば……』と答へた、一回仕合でも選手が固くさへならなければ勝てる自信は十分にあつた。私は相手共者よりも、味方の選手が固くなる事を余程恐れて居た。

吾々は仕合の前夜、翌日の仕合に就いて協議會を開いた。其席上で某先輩は熱心の余り『明日野球が勝たなければ、聖上カップは日本の手に入らない。』と云ふ事を再三繰り返して選手に話した。私は惡い事を云つてくれたと思つた。私は其後で主將の高濱君に『吾々は普通にさへやれば勝てるのだから、明日の仕合には、何とかして若い選手を固くさせない方法を考へやう』と相談した。仕合當日も吾々は運動場へ出かける前に打ち合はせをした。其時私は『今日の仕合は少し位ダレてもいゝから、なるべくのんきにやらう。』と話した。又私は成可く早く運動場へ行つて練習をする事を主張した。或選手は日當りの暑い所で、仕合前永く練習するのは、身體がダレて困ると云つたが私はそれでもかまわないと主張した。早く運動場へ行つて、若い人々の氣を落ちつけさしたかつたからだ。仕合の間際に入場して、氣がワク〳〵して居る時に仕合を始めるのは損だと思つたからである。「吾々は仕合の二時間半も前に運動場へ行つた。そ

れでも若い選手は固くなつて居た。而も仕合場で選手を激勵するつもりで來だ『聖上カップ…』の事を云々する人があつた。私は少し癪にさわつた。『余計な事を云はないでくれ。默つて居ても吾々は仕合に勝ちたいのだ。』と余程云はうかと思つたが我慢して云はなかつた。折角落ちつきかゝつて來た若い選手の心持が、又固くなつたやうに見へた。若い人計りではなかつた。老練の腰本君や小野君まで固くなつてゐるらしかつた。私は『こいつは困つた』と思つた。仕合が始まる少し前に多くの觀覽者が、柵からあふれて仕合場へなだれ込んで來た。そして吾々の選手席の後ろは是等の人々で一パイになつた。そして地面に腰を下した彼等は『選手のベンチが邪魔で仕合が見へないから選手は地上へ座れ』と云つた。吾々は相手にしなかつた。彼等は小石を拾つてベンチの上の選手に投げた。吾々はそれでも默つて居た。多くの選手は『こんな不愉快な所で、仕合をする義務はないから歸らう』と云ひ出した。吾々は背後から敵が押しよせて來たやうに感じ乍らベンチに座つて居た。吾々は委員の人々が一生懸命に制して居るのを見て、氣の毒になつたのでやつと我慢をした。然し其内に仕合が始まつた。

　小野君の出來は極端に悪かつた。六回まで比軍に安全球を打たれなかつたのは、小野君の出來が良かつた爲めではない。相手の打撃が弱かつたのと、相手も固くなつて居た爲めである。七回迄吾々は固くなつて居ながらも、敵を常に壓迫して居た。七回目に吾々は危機に出會つた。第一打者のパブロが投手へゴロを打つて一死となつた。第二打者のイラナンが、投手の右へ强い當りのゴロを打つた。小野君が手を出したが捕へ得ないで、ゴロは桐原君と新田君の間の方へそれて了つた。此ゴロは小野君が手を出さなければ、桐原君が捕へて一壘へ投じてアウトと爲し得るゴロであつたが、それは結果から押した丈けの事で、此場合小野君が其ゴロに手を出した事は悪い事ではない。否手を出さなければならないゴロである。小野君が平常通り捕へ得れば、普通の投手ゴロであつて、何の事も起らずに終つたのである。小野君が偶然捕へ得なかつたのは、比軍の運がよかつたのである。

　第三打者のブラトンが三壘へゴロを打つた。新田君がハンブルした。新田君の失策である。然し失策は如何な好選手も爲す事であるから仕方がない。然し結果から見れば、其ハンブルにした球を一壘へ投じなければよかつた。新田君が一壘へバウンドを投じた爲めに、一壘に居た走者が三壘まで行つた。而も其球を一壘へ好い球を投じても、打つた走者を一壘でアウトするには間に合はなかつたやうに思はれた。然し一壘へ好い球を投

じて居れば、一壘の走者が三壘迄は行かれない。即ち一壘へ好い球を投じて居れば、全然一壘へ投じなかつたのと同じ結果になる譯である。それ故新田君としては、まさか自分でバウンドを投げるつもりで投げるのではないから、或は一壘へ投じて打つた走者をアウトと爲し得ると考へれば、一壘へ全然投げないよりも投げて見る氣になるのは當り前である。それ故ハンブルした後に急いで投げても悪くはなかつた。只バウンドを投じたのが悪かつた。是も新田君のエラーである。ミス・ジヤツヂではないから、エラーはあきらめるより外に仕方がない。然し其エラーの結果は大きかつた。一アウトで走者が一壘と三壘に居る事になつた。四番目の打者はレギスである。吾々は此打者をあまり恐れて居なかつた。それ故私は小野君に『走者を氣にしないで打者に全力をそゝいでやれ!』と勧めた。小野君も自信があるやうに『ウン。』と答へた。レギスは投手へゴロを打つた。此場合普通の投手ゴロであれば、投手は二壘へ投じ、二壘から一壘手へ投じてダブルプレーをして其回を終了し得るが、レギスの打つたゴロは三壘の方向へ寄つて居た。それ故二壘と一壘とでダブル プレーをするには一寸困難のゴロであつた。小野君は其ゴロを本壘へ投じた。私は其瞬間『さうだ!』と叫んだ。小野君がうまい事をやつてくれたと思つた。三壘と本壘間でレギスを狹んで球を持つた人が(誰であつたか忘れたが……)本壘の方へ走者を追ひつめて、本壘でアウトとした。新田君は本壘の側に居た。私も守備を助ける爲めに本壘の所まで行つた。本壘で走者をアウトとした時に新田君は『三壘へつめてアウトすればダブル プレーが出來たね。』と私に云つた。私は『馬鹿云へ。アウトとして了へば同じだよ。』と答へた。一體走者を狹んだ場合には、出來る丈け本壘に遠ざかる方の壘へ、つめて行かなければならない。何となればもしも其走者を生かした時には、本壘に近い方へつめて居れば、一つ先の壘を得られる事になるが、本壘に遠い方へつめれば、走者を生かしても、元の壘へ返した丈けに留まる譯になるからである。然し走者を生かさずに、アウトとすれば、その走者の次の走者が間違つた事さへしなければ、何れへつめてアウトとしても、結果は同じ譯である。新田君は平生こんな理屈は百も承知して居るが其時には變な事を云つた。私は『新田君は固くなつて居るな!』と思つた。レギスが投手ゴロを打つた爲めに二アウトで走者が二壘と三壘に居る事になつた。今度は餘程楽になつた。小野君は私の方を向いて笑つた。危機を切り抜けられると云ふ自信のある笑ひであつた。然し第五番目の打者はヤロビロンであつた。吾々は此打者を一番好い打者だと思つて居た。而も其次の六番目の

打者はパータルボである。吾々はパータルボは好い打者であるとは思つて居ない。小野君が十分防ぎ得る打者であると思つて居た。それ故私は小野君にヤロビンに四球を與へて、滿壘として、パータルボに全力をそゝぐやうに勸めた。小野君も勿論其氣になつた。所が小野君は第一球をストライキに近い球を投げた。打者はフアウルを打つた。一ストライキ、ボールとなつた譯である。私は小野君が一ストライキを得た爲めに、打者に四球を與へる事を中止しやしないかと心配した。私はもう一度念を押す爲めに小野君の所へ走つて行つて『四球にするんだぜ。ヒネロウと思つちや駄目だぜ。』と云つた。小野君は『ウン！』と答へたので、私は安心して一壘の守備に歸らうと思つたが、小野君は其前の球も四球を出すつもりでストライキに近い球々投げたのを考へて、又あんな球を投げれば危險だと思つたので『小野!! この打者は底い球は打てないんだ。間違つても高いのを投げちやいけないぞ!!』と注意した。然し私の注意した意味が小野君によく通じないらしかつた。私は此打者に直球で、遠い底い球を投げれば、四球となるか、もし打たれても凡打に終るから、直球の底い遠いのを投げろと云ふ意味で云つたのであるが、私がそれを云ふ前に、小野君は既に森君からカーブの信號を受け取つて居た。それ故小野君は『底い球』をカーブの底い球たと考へて了つた。所が小野君としては、こんな場合にカーブの底いのを投げて、もしも投げ損じてパウンドでも投げればパス ボールとなつてムザ／＼一點與へて了はなければならない。それよりも少し高いカーブを投げて見やうと考へた。（是は小野君から聞いた話である。）小野君は思切つて高い、そしてボールに近い球を投じた。其球は不幸にも其打者の一番好きな場所へ行つて了つた。私が『シマツタ!!』と思つた瞬間、球が私の頭上を勢ひよく飛んで行くのを見た、二人の走者は得點して了つた。私は小野君の顏を注意して見た。小野君の顏は青かつた。眼が血走つて居た。投手を替へなければ駄目だと思つたが、次の打者は小野君が十分ヒネリ得る打者であつたから、私は此回さへ終ればと思つて默つて居た。小野君は二點先取された事の爲めに活氣がなかつた。それ故十分ヒネリ得る打者にまで本壘打を打たれて了つた。私は小野君を活氣づけてやらうと思つて側へ行つた。小野君の唇がかすかに震へてゐるのに氣がついた。『こいつはいけない！』と思つて、私は右翼の高濱君の所へ行つて『小野を替へるぜ。』と云つた。高濱君は『固くなつてるか？』と聞いたから『駄目だ。まるで固いから……』と答へた。『じやア、濱崎と替へてくれ！』と云つたので 私は小野君の所へ行つて『濱崎と替つて見たらどうだ。』と云つた。『ウン……』と小野君は答へて『失敬したね』とつけ加へた。私は『かまうもんか四點許り、さあ今度はこつちが五點

入る爲だ。』と云つて、若い人達に氣を落させないやうに勵まして、恢復に努めたが終に回復しずに終つた。然し濱崎君はよく守つてくれた。乘氣になつた彼等を阻止してくれた効は大であると云はなければならない。

吾々の方が得點出來なかつた原因の大部分も、亦固くなつた爲めである。比軍の投手バータルボの球を十分打ち得なかつたのは事實であるが、其打ち得なかつた理由は、多くの人々が云ふやうに、彼が投手として非常に優れて居るからであるとは私は思はない。彼の投手としての特長は、身體が大きいと云ふ事と、腕力の強い爲めに球を無雜作に投げ得る點とである。私は打者に立つて彼を少しも、恐ろしい投手であるとも、又は上手な投手であるとも思はなかつた。只味方のものが固くなつて居た爲めに、普通なれば打ち得る球をも打ち得なかつたのであると思つて居る。相手の投手として考へて見れば、早大の谷口君や明大の渡邊君の方が余程上手である。余程恐ろしさを持つて居る。もしもあの場合に相手の投手が谷口君や渡邊君であつたら、吾々はもつと打てなかつたであらうと思つて居る。

吾々の負けた最大原因は攻守共に固くなつた爲めである。然し吾々としてはあれ以上の事は出來なかつた。少くとも當日丈けの技倆を比べれば、吾々よりも彼等の方が優れて居た。あんなに固くなつて居れば仕合に勝てないのは無理はない。私は味方の大部分が固くなる事を非常に恐れて居た。而も其最も恐れて居た事が不幸にして實現したのである。

吾々の敗因を『相手を輕んじ過ぎた爲め――』であるとか、吾々が『仕合前夜に酒などを飲んで、不攝生をした爲め――』であると傳へた新聞紙もあるやうであるが、私は吾々がもう少し相手を呑んで仕合をし、又は仕合前夜に酒を飲む位の無責任な氣持になれて居たなら、反つて好成績を得られたかも知れないと思つて居る位である。要するに吾々は大事をとり過ぎた。大事をとり過ぎて、大事を失して了つたのである。

仕合が終つて私はあらゆる惡口雜言の間を潜り拔けて、運動場の門前に待つてゐる自動車に乘つた。車の中で私は『これ丈けの惡口雜言を受ける爲めに、吾々は日本の代表チームであると云ふ重大な責任を引受けなければならない義務が何處にあるのだらうか……』と考へて見た。私は『もしも今度と同じ狀態で、今度と同じやうな責任を負はなければならないやうな仕合をする場合が再び來たならば、代表チームとして推薦せられるチームは、全慶應許りではなく、全早大にしても、全明大にしても、相手になる可きチームの强弱を考へる前に、如何に多くの恐ろしい敵が他にあるかと云ふ事をよく考へた上で、其推薦や承諾するか否かを決する必要がある。』と云ふ事を附言しておきたい。

吾々は宿屋へ歸つて一言も語らずにユニフォームを脱いだ。偶然私の目と高濱君の血走つた眼とが出會つた。高濱君は只苦笑ひをした。腰本君は其側で默々として平服に着替へて居た。私は仕合に就いて結局一言も交さずに其夜歸京した。

ロトの溪谷より

——巴里の一友に與ふる尺牘——

黑田重太郎

○

一九二二年七月十二日。カオールにて。

君も知つてゐる通り、『郊外アカデミイ』と云ふ、一寸氣の利いた趣向に唆かされて、アカデミイMの有志達と一所に、谿谷の地ロトを志してオルセイ河岸の停車場を發したのはこの三日前——七月九日の暮れ方だつた。一行八人、その中で一番多いのが北歐人で瑞典三、諾威二、占めて五人の過半數である。あとは佛蘭西に米國が各一人、日本人と云つては私獨り、そしてまたこの中六人までが女で、結局私はどつちへ廻つても少數黨だから、聊か心細からさるを得なかつた。一行の率領をつとめたのがA女史と云つて瑞典の閨秀畫家、アカデミイMの經營者で、兼ねて生徒で、事務員、門番(コンシエルジュ)の役目まで一手に引受けやうと云ふ元氣な人、年齡(とし)は私なぞよりずつと上らしいが、肥つて緻丈で、立つときの出だちを見てあれば、枠張りの畫布(トワール)を幾枚も重ねて荒繩で縛つたのを輕々片手に提げてゐた。一夏に五十枚も仕上げるつもりらしい。これで折々ヒステリイに惱まされると云ふのだから大分矛盾してゐる。續いてマドモアゼルNに、Dと云ふ男、この二人は戀仲か、許婚の仲らしく、何時も鴛鴦(おしどり)の樣に睦みあつて、女は男の不自由な佛蘭西語を補つてやると、男は女の初歩を踏み出したばかりな畫を丹念に直してやる。アカデミイMに入つて、A女史につゞいて私が懇意にしたのは此人達だ。以上三人が瑞典で、諾威人はKにSと云ふ二人の若いお孃さん、仲のよさゝうな友

達同仕ながら、K嬢は畫の方にも才氣煥發といふ性質、從つて態度も無邪氣な様で人を食つた所があり、S嬢は眞面目で慎ましやかな人、しかも偶々口を開けば思つた事を率直に云ふ、これが仲々いゝ對照を作つてゐた。佛蘭西人のR嬢は朗らかで人なつこく、それで性根にしつかりした所があるのは、流石に此國の中流階級の育ちを思はせる。既に装飾畫家として一本立ちになつて居るが、ギオーム・アポリネイルに『三年ばかりやつて御覧、あなたはものになりさうだ』と云はれて純正繪畫に志したと云ふ逸話をもつてゐる人。米國人のH老嬢は前患つたヒステリイの結果ださうで、眸が右へ釣り上つて見るから意地悪るさうに見えて、その實つき合つて見るとさう悪い人でない。畫はゝじめてから六年ばかりになるさうだが、嘗て私が巴里で逢つた米國人のどれに比べても、この人程米國臭のない畫を描く人はなかつた。此の顔觸れを聞いた或る見知り越しのモデル女に、巴里を立つ少し前『さぞ面白い事でせう』と冷かされた事があるがそんな陽氣な沙汰どころでない。女三人の諍を倍にして、旅に出ると程なく、ひしひし思ひ當る事ばかりだ――が、それはあとの話である。

一體私はよく家を飛び出す癖に、性來の旅行好きでない。嘗て風景畫家てふ範疇（カテゴリイ）に入れられて居たので、日本に居る時も毎年展覧會前になると、その範疇（カテゴリイ）に對して何か描いて來ぬと義理が濟まない氣がして、最う余程期日が迫つた頃やつとお尻をもち上げるのだつた。そして居住居のわるい汽車の中や、口に馴染まぬ宿屋の食事を氣にし通して、辛うじて仕事を終へて歸る。それを態々習慣の一致しない斯うした人達の仲間へ入り、好んで窮屈な思ひをする氣になつたのも、平素敬愛してゐるB氏が、此『郊外アカデミイ』で私達の仕事を指導せられると云ふ前觸れがあつたからである君も知つてゐる通りB氏は私の今一人の師匠L氏と共に、新古典派畫家の錚々たる人で、以前アカデミイMで教鞭を執つて居られた。併し事情あつて一切をL氏に委ね、其畫室裡に退かれてからは、絶えて弟子と云ふものを取られた事がないと聞いてゐる。で、例年の如く氏がその生れ故郷に近いロト縣のカザールで、此一夏を過されるのを幸ひ、A女史の發起で氏の周圍に設けられやうとした『郊外アカデミイ』は、私に取つてまたとない機會なのだつた。

車中別に記載する程の事はない。巴里から大分南へ下つたとは云へ、流石に緯度高い國の夏の夜は殊更みぢかく、三等車の堅い板張りの腰掛の上で、連れの婦人方の氣を兼ねて手足をちゞめたまゝ寢の夢が覺め、痛む節々をそつとさすり乍ら起き上つて見ると、まだ四時そこそこと云ふのに、四邊(あたり)はもうかつきりと明け離れてゐた。凄まじい音がして汽車はいま鐵橋を渡るらしい。窓をあけて見下すと、遙かな谷底の緑に埋もれて、赤瓦の村家が散在してゐる。一すじ青い流れが、迂曲り乍ら眼の下を過ぎるのはコレェズであらう。大きな巖の根元を嚙むで、白い泡を立てゝゐる。——間もなく大きな停車場へ來た。

『ブリイヴですよ』と、この時眞向ふの腰掛けからむつくり起き上つたR嬢が云ふ。私達の樂園(パラデイ)も最うそんなに遠くありませんのね』

樂園、私達の夏二月の樂園(パラデイ)、ひとしく其俤を胸に描いて來た私達は、この次汽車が止まれば最う其處へ第一歩を置くのだと信じてゐた。そして二人はそう語りあつて、殊にR嬢は嬉しさうにはしやぎ出したのである。併しこの幻影(イリュージョン)は間もなく破られねばならなかつた。

隣りの車室(コムパルチマン)に陣取つてゐた一行の他の連中が、そろそろ降りる仕度をはじめたので、私達も網棚から毛布(トワール)の卷いたのや、鞄なぞを降しにかゝつた。その間に汽車は二三の小驛と、また一つの鐵橋——それはドルドオニュに架つてゐる——を走り過ぎて、そして停つた。私達は最初の目的地グールドンへ着いたのである。

斯うして女連れが多い時ほど、男は西洋ではみぢめなものだ。自分の荷物ばかりでも兩手に餘る程あるのに、それはあと廻しにして先づ女達の鞄を降してやつたり、手を借して降りるのを手傳つてやらねばならぬ。だがDなぞは、それを光榮と心得てゐる種族の一人だから、一人で立廻つてやつてくれた。お蔭で無精者の私は大助かりである。プラットフオルムに山程一行の荷物を積み上げてしまふと、A女史はその張り番を私達二人の男に頼むで、『部屋を捜しに』と云つて、他の女達を引連れて、改札口から出て行つてしまつた。これも私には助かつた。

でも『部屋を捜す』と云ふA女史の言葉が少々氣にならないではなかつた。一體A女史の話に依ると、P氏は一行の

爲にそうした面倒な事も快く引受けやうと云つて、最う三週間近くも前に出發せられた筈なのである。だから、若しB氏とA女史の間に、その後の打ち合せがうまく出來てゐるなら、何も今更ら『部屋を搜す』必要なぞない筈である。

所在なさにプラットフオルムをコツコツ歩いてゐたDは、しばらくすると私の傍へ近寄つて來て、

『君、腹が空きはしないか？』と云つた。

それには答へず『皆な遲いね』と云ふと、

『部屋がないらしい』と呟き乍ら、鞄の中から葡萄酒の罎とサンドヰッチの包を取り出して『食ひたまへ』とすゝめた。

私は遠慮なく食つた。

『僕』と彼は口をモグモグさせ乍ら言葉を繼いだ『B氏は我々に教へる事を好まぬのだと思ふ』

彼はその不自由な佛蘭西語を、頭の中で搜す樣にしながら、その理由を語つた。その言葉に依つて大體を察しると、B氏が出發せられて以來、二度ばかりA女史から手紙を出して、準備について問合せたさうだが少しの返事もないとの事である。それに依て推すると、B氏は純藝術家肌の人で、生徒の面倒を見る事など、内々嫌がつて居られるのかも知れない。唯だA女史が强ひたので、嫌とは云へず承知されたものゝ、特にその爲に大事な仕事の時間を割く氣にもなれず、其まゝにして居られるのだらう。それをA女史は『行けばどうにかなる』でやつて來たのである。

『兎に角、B氏の返事も待たないで來たのはよろしくない』と彼は繰返して云つた。

では若しB氏が教へてくれないとすれば、我々の『郊外アカデミイ』はどうなるだらうと云ふと、『多分L氏が代つて教へる事になるだらう』と彼は答へた。つくづく考へると立つ前の日、L氏は私達に向つて『若し何か困る事が出來たら、遠慮なく手紙を下さい』と繰返して云はれたが、矢張りそうした事情を知つて居られたのかも知れない。

女達は一向歸つて來なかつた。そしてものゝ二時間近くも經つたと思ふ頃、H老孃だけ引返して來た。私を見るなり、

『駄目々々、部屋なんぞありはしませんよ』と云ふ。『大體こんな事は前以てよく打ち合せて置かねばならん筈です』

大分A女史に對する風向きが惡くなつた。汽車を降りるなり二時間も町中をあるき廻つて、軒別に問ひ合せて見ても

駄目なので、散々くたびれさせられた女達はいま停車場前のカフェへ引返した所だと云ふ。
『荷物は私が代つて番をしますから、あなた方行つて食事をして來て下さい』と云つた。まさか最うサンドヰッチを平げましたとも云へず、それに溫い珈琲の一杯も引つかけたかつたので云はれるまゝに行く。街道を挾んで停車場と筋向ふのところに小さなカフェがある。その葡萄棚の下で女達は朝餐を取つてゐた。
『マドモアゼルHに聞きましたが、部屋がないさうですね』と云ふと、
『B氏も酷いぢやありませんか』とA女史は私の言葉には答へず、先づ豫防線を張つて置いて、そして云つた『最う余程前に立つて置きながら』
『何だつてまた返事もないのに出かけたんです』と云ふと、もう先刻からその事で何度も云ひ爭つたらしく、他の女達は待つてましたとばかり、てんでに勝手な事を喋り出した。
『だつて待つてるだけ時間が無駄になつてしまふぢやありませんか』とA女史は抗辯した。
『ぢや何故その事を前以て知らせてくれないのです。私なぞは何も知らずにやつて來て、今朝聞いて始めて解つた位です。そんならそれで私にも積りがあつたのに』
『どんなお積り?』
『態々こんな遠い所へやつて來ないまでの事です』と云つてはつとした。別に喧嘩をする氣はなかつたのである。で、話をかへて『カザールと云ふ所はこゝからどの位あります?』と聞いた。
『十四五キロメートルださうです』とA女史が答へた『斯うなれば私は是非直接行つて談判して來ます。いくら何だつて、斯う皆さんから云はれちや引合はないから』
『それがいゝわ』と挑むやうに、二三の聲が應へた。
その中誰かゞ、まだこの先にカオールと云ふ寫生地がある。一層其所まで行つてB氏と交渉の結果を待つてはと云ひ出した。するとまた、最初B氏との約束はこゝだからと云つて反對するものがあり、一向相談がまとまらずに居た。斯

うして指で云ひ合つてゐると、一行の様子を聞き傳へたと見え、百姓らしい男や、主婦さんらしい女がやつて來て、『まことお困りなら部屋を貸しませう』と云ふ。何だ、それなら文句はなかつたのにと、恰度その時、私達の傍に居あはせた、暇さうな顔をしてゐる郵便脚夫の爺いさんが、『俺が案内してやらう』と云ふのを幸ひ、二三の疲れた人達を殘して私達はまたそれらしい家を片つ端から探してあるいた。

停車場前からなるい坂路がつゞいて、一度低い谷あひへ降りると、其處からまた小高い丘の周圍を繞り乍ら、道は町の方へと續いてゐる。町は丘の上にある。太いプロタアヌの並樹があつて、丘の上の廣場には役所と向ひ合つて聖ピエールと云ふ寺がある。十四世紀末のものだが田舍にありうちの大して珍らしいものでない。唯だその寺の脇の、細い急な小徑を上つて、寺の上の高臺から見渡した景色は流石にその畫趣私達の胸を打つものがあつた。大きな本堂の棟と、低い家並の參差した彼方に、ロトの沃野の緑が、晝下りの眩しい日光を受け乍ら銀の樣に輝いてゐた。併し肝心の部屋は何處を尋ねて見ても、此地方の田舍者によくある私達の足元を見透して無法な高値を吹つかけるか、でなくば南京蟲の巣喰つてゐさうなじめじめした所しかなかつた。それに誰しもましな部屋を欲しがるので、強いてこゝに止まらうとすればあちこちに分宿した上、場合に依つては二人一部屋へ收まらねばならない。で、また再び一行の議論が別れて、カオールへ行かうと云ふものと、こゝへ止まらうとする者の二派に分れた。

『ねえ君』と此時Dが私に耳うちした。『こゝの景色はわるくないがね。少し都合のわるい事があるんだ。』と云ふ。

『何うして?』と問ひ返すと、

『水が遠い』と云ふ。N孃がその傍から口を添へて、

『ドルドオニユにしても、セウ(ドルドオニユの支流)にしても、此處から何キロメートルも離れてゐると村の人に聞いたのですよ』

『ぢや水の景色が描けないと云ふのですか』と聞いて見ると、なあに、どうせお風呂がなささうだから、水浴みするにも困ると云ふのだ。呑氣な事を云つてゐる。

『皆なそんな勝手な事ばかし云つてどうするんです』と不意にA女史が金切聲を立てた。『もう〳〵私は……』とそろそろヒステリイの發作が始まつたやうだ。

厄介な事になつたと私は思つた。が皆なそれに取り合はないで、二人三人づゝに固まりながら、すた〳〵歩いてゐたするとA女史は私に近づいて來た。そして、

『あの小娘がよくないのです』と前にDと手を組みあはせ乍ら歩いてゐるN孃を指して云つた。『あんな溫厚しさうな顏をして、あれで私を眼の敵にして、皆を煽動て〻私に反對させるんですからね』

何か誤解してるのだらうと思つてさう云ふと、

『あなたは何も知らないのです。今朝皆と一所に居なかつたから』と極めつけてをいて『何うでせう、あの甘たれて男にしなだれる風は。畫もろくに描けない癖に。小さなものへお人形様のやうなものしか描けない癖に……』

『あなたはいま激昂してゐらつしやる。ちと心を落つけになつたら如何です。お互いに道連れなんだからそんな事は云はない様にしませう』と和めて見たが効を奏しなかつた。人の悪いK孃は二人の會話を聞き乍らにやにや笑つてゐた。

結局、一行の行動を多數で極める事にしたらカオール行きに極まつた。『あなた方は間違つてゐます。カオールなんぞへ行つたつて、山に圍まれた擂鉢の底のやうな所で、何處を見たつて押し潰される樣で、ろくに眺望なぞありはしません』と案内の郵便脚夫が强つて止めたけれど、もうそれに耳を傾けるものはなかつた。私達は停車場へ引つ返して。その夕方四時の汽車で立つた。

カオールはグールドンから南四十キロメートル餘、汽車で一時間半程の所である。ロゼールに源を發して佛蘭西南西の沃野を貫くロトの流れが、幾多の側壁、峯嶺のために支へられて、幾度か曲がり紆ねつてゐる、その溪谷の一つに位置を占めてゐる。往昔此地方をカデュルクと云つた頃首都であつたが、その後サラセン、ノルマン民族のために屢々劫掠を受け、また英國の軍勢のために侵襲されていまは寂びれに寂びれたそれ等の殘墟を、町を區切つてゆの字なりに流れる

河水の上に燦してゐる。

私達が此處へ着いたのは暮れ方の六時近かつた。町にはまだ赤い夕陽が、家並の高い處に殘つてゐた。グールドンを立つとき、停車場で逢つた主婦さん風の婦人から、オテル・ド・ラ・クロア・ブランと云ふのが安いと聞いて、では其所にしやうと懷中の模樣を氣にしてゐる手合ばかり、早速それに泊ることゝなつた。荷馬車を雇つて一行の荷物を積み上げ、一それについて其處まで行つて見ると、安いと云つた筈で、木賃程度の家だつた。それはいゝとしても、一行八人を泊めるだけの部屋が空いてゐなかつた。またかと思つたが、皆のする樣にしてゐると、ましな所から我れ勝ちに極めてしまつて、最後に私の番になるともう一つも部屋は殘つてゐなかつた。何しろ日が一日、ぶつ通しで歩き廻つて草臥れてゐるのだから無理もないけれど、それでは此方が困るので、何でもこゝまで來る道すがら、此ホテルの同じ並びにオテル・デューロオプと云ふのがあつた。外から見た所では此所より大分清潔らしかつた、運び込まれた鞄をまた提げて、疲れた足を引摺り乍ら出て行かうとすると、A女史につかまつた。

『何處へ行くのです？』

『オテル・デューロオプへ』

『あそこは高さうだからお止しなさい』

人を止めるに事缺いて、西洋人と云ふものは露骨なものだ。

『でも此所に部屋がなければ仕方がないぢやありませんか』

『あなたは余り溫厚(おとな)し過ぎるからそんな目に逢ふのです』と飛んだ挨拶だ。私がおとなしくなければ、他に困る者が出來るとは氣がつかないらしい。

が、もう一つ本當の所を云ふと、私もおとなしくて遠慮したのではない。此ホテルの薄汚ならしい體たらくが、無精者の癖に横着の私をして引き退がらさるを得せしめなかつたのだ。斯んな話の最中に、ホテルのお主婦(かみ)が聞きつけて、一人でもお客を逃がすまいと、『何とかして一つ部屋を都合しますから』と云つた。出來るならそれで辛抱しやうと案内

を賴むと、なんだ、同じ棟の下でなくて、辻を越えて一町ばかりも行つた所の、これも汚ない素人家の二階だつた。』大分離れてゐるじやないか』と抗議を申込むと、『いゝえ、ほんの隣りです』と云つた。豪儀な隣もあつたものだ。そしてあてがはれた其部屋も、街角に當つてゐると見え、三角形の平面をもつた、落つきのわるい所だつた。

でもそれはまだしもよかつた。夕食をホテルでしたゝめたあと皆して近くのポン・バラントンまで散歩した十四世紀はじめから七八十年もかゝつて出來たと云ふ、上にゴシック風の古雅な角塔が三つ聳えてゐる、一寸面白い恰好の橋だ。が、トレンドのアルカンタラ橋を見た眼には大して有難い程のものでもない。最う薄暗くなつた橋の袂を行きつ戻りつ、畫になるまいかと構圖を考へてゐる中、先刻（さつき）から急に蒸暑くなつて、曇つた空からぽちぽち雨粒が落ちて來た。で引つ返す。ホテルの前で皆に別れて、私獨りさつき云つた家まで戻つて來ると、まだ宵なのに表が閉つてゐる。田舍の人は早く寢るもんだと、扉を叩いたが一向開けてくれない。遠慮して小さく叩いたからだらうと、少し大きくどやしつけると、二階の窓の扉があいて、下を見下し乍ら『誰だ』と怒鳴る者がある。『誰れだと云つて、今日夕方から泊つた者だ』と答へると、『そんな者は知らない、行つちまへ』と云つてがたんと鎖めて了つた。亂暴な奴もあつたものだ。

癪に觸つたから早速ホテルへ引返してお主婦をつかまへて散々小言を云つてやつた。今朝からのむしやくしややら何やらで、大分荒まじい權幕とは私自身にもわかつてゐた位だから、向ふでも驚いたらしい。平あやまりにあやまつて直ぐ樣一所に行つてかけ合つてくれた。わけを聞けば何んの事はない、夕方歸つて來た其處の主人が、私の顏を見知らう筈もないので、てつきり迂散だと考へたらしい。散々怒つたあとなので今度は此方が極り惡かつた。

事はまだそれでおしまひにならなかつた。翌朝ホテルの方へ食事に行くと、昨夜は大變濟まなかつたと詫びて、部屋を今一つ此方で空ける事にしましたからと云ふ。卓子での話を聞くと、ホテルの方で泊つた七人は、大半南京蟲にやられたと云つて、その話で持ち切つて居た。おとなしくしてゐた報ゐで私はその厄をのがれたわけだ。で、皆がその尻をお主婦に持つて行くと、『それは蚊でせう』と云ふ挨拶、『いくら何だつて蚊と南京蟲の區別位はつきますあね、私だ

つて巴里ぢや隨分……』と云ひかけて、A女史が口をおさへたのは一寸滑稽だつた。私はこれを聞いて、こゝへ移るのも考へものだと思つた。

南京蟲の一件がどうなり斯うなり濟みさうになると、今度はまたA女史とH老孃との間に激しい口論がもち上つた。事の起りは矢張り『郊外アカデミイ』から始まつて、今後どうしたらよからうとなり、とりあへず仕事にかゝり乍らB氏と交渉の結果を待つことになつた迄はいゝが、其時A女史が持ち出した案に、仕事をするなら案内者でも雇つて、此邊の勝手を充分知つて置くのがいゝと云つたのを、H老孃が反對して、『案内者なんて必要がないぢやありませんか、高が斯んな小さな町ですもの』と、どつちでもよささうな事を、どつちも老孃の片意地を通さうとして果ては『あなたは惡者だ』とか、『私が惡者ならあなたは意地惡だ』とか、傍で聞いてゐられない樣な事を云つた揚句、『勝手になさい』『勝手にします』の物分れなつて、A女史は案内者に拂ふ料金の割前五十サンチームを皆から徴集した。が、H老孃は勿論それに應じなかつた。

私はこんな所に居合はすのが淺ましくなつた。で、そつと座を外して表へ出ると、後からついて來たR孃が、『何所へ行くんです』と聞く。

『私はあんな口論を聞いてゐるのがいやだから、此ひまにサン・テチエンヌ寺を見物して來ます』と答へた。

『それは有名なの？』

『さうです。羅馬ビザンチン式のものとして美術史にも出てゐます』

『ぢや私も連れてつて頂戴』

さう云つてゐる中に、私達と同じ思ひの人達が一人二人づゝ出て來て皆な連れて行つてくれと云ひ出した。『可笑しいわ、ムッシュウは日本人なのに反つて私達を案内するなんて』『さうよ、この方は物識りなんだから』と少々擽つたい事まで云つた上、『私も一つ勉强して、日本へ行つたら恩返しにムッシュウを案内してあげませう』と笑はせる。皆ドヤドヤついて來るので、しまひに口論最中のA女史やH老孃まで私達の後を追つて來た。勿論A女史は途中案内者を

物色する事を斷念しなかつた。併し彼女の手許に集まつた三法五十サンチームは、如何に物の安い田舍でも案内料として充分とは云へなかつた。それに斯うした小さな町では、そんな必要もないと見え、それに應じやうとする者も見出せなかつた。

サン・テチエンヌには初期佛蘭派の天井畫がある。手法が素朴で面白いと云へば云へるけれど、作品の價値その者はこれも大したものでない。寧ろ此寺院のすぐれた所は全體の構造と裝飾彫刻に在つて、殊に左側門外部の欄間上にある『基督とサマリア婦人』『サン・テチエンヌの殉教』などは傑れたものだ。寺を出てロトの河岸まで出る。岸には大きなプラターヌの並樹がある。滴るやうな綠の影が胸壁の上や、または其處に樹てられた十字架の上に落ちて、梢漏るまろらかな日影と共にちらちら動いてゐた。ゆうべの雨に洗はれて、かつきり淺黃色に晴れた空を映して、緩やかに流れて行くロトの流れが樹の間から見え、河の向ふ岸の次第に高まつて行く赤土の丘には葡萄や、其他の果樹園が續いてゐた。

カベツシユと云ふ、鳥籠を伏せた樣な恰好をした鐵橋を渡ると、橋の袂に市設稅關(オクトロア)があつて、其處から先はフオブール・カベツシユである。昔のドミニカン派の僧院跡があつた。それから河に添つて下り、土地の人がコツチイと呼んでゐる水車小屋や、二三の村落に畫材を探つてゐる中、何と思つてかA女史が斯う云ひ出した。

『どうでせう、皆さん、これから此旅行期間を萬事ムツシユウ・クロダの指導を仰がうぢやありませんか。何でも知つてゐらしやる樣だし、皆さんも私よりはムツシユウの云ふ事ならよく聞かれるやうですから』

冗談ぢやない、物識りの何のつて私は唯だ案内書の受賣りをやつた位なものだ。A女史の語氣に皮肉な所があるのから察すると、此案内書の受賣りが案内者を雇はふと云ふ女史の考へと抵觸するので氣に入らなかつたらしい。老孃と云ふもの程物に固執するのも尠ない。何しろ朝から余憤が此處へ出口を見つけて迸らうと云ふのだらう。面倒臭さかつたから私は取り合はなかつた。すると他の女達がこゝぞとばかり、こそこそ耳打ちし乍ら、『第一地圖があつて案内書があるのに、案内者でもないもんだ』とか、『Aさんは郊外アカデミイなんぞ組織する腕がない』とか、『一人大將になり

たがるのだ』とか、例の女三人の話をしみじみ思ひ出したのは此時だつた。
『つまらないわ』とR嬢が小聲で呟いた『私達は假想的内省に五十サンチーム拂つたのね』
『郊外アカデミイも假想的ぢやないでせうか』と云ふと、おほゝゝゝツと大きな聲で笑つた。A女史が恐い目をしてその方を睨みつけた。

その日の午後四時、私達は此近郊のエルスを訪れる事になつた。カオールから東へ折れて二十キロメートル余、同じ名の溪間にある美しい村だ。私は此所を見たとき、何だか笠置邊の木津の溪流を思ひ出した。停車場を出るとすぐ眼の前にそゝり立つ赤土の崖の下に、小さな會堂が立つてゐた。まい村の通りを抜けて半町ばかりも行くと、滾々として巖に激する水の音が手に取る様に聞え、細い木橋を渡ると、直ぐ其處にホテルや土産物を鬻ぐ家や、乗合自動車の待合所が軒を並べてゐる。私達の見る所は、有りふれた山間の避暑地に過ぎなかつた。綺羅びやかな風をした都會人が、あちこちに屯集して、毛色のちがつた一行を、さも不思議なものでも見つけた様に、眼ひき袖ひきしてゐた。

私達は溪川を溯つて物の十町ばかりも歩いて見た。景色は美しいけれど、これまでの私の經驗に依ると、かう云ふ處で余り畫の出來たためしがない。矢つ張りカオールかグールドンがいゝと思つた。それで、此所へ泊つて見たいと云ふ連中が、その邊に軒を並べてゐるホテルへかけあつて見ると、僅か四人分の部屋しかあいてゐないと云ふのを幸ひにして、私はH老嬢、Aそれから S嬢と一所に引つ返した。日が永いので、遅くから出かけたのだが、カオールへ着くと、やつと暮れた位のものであつた。

で、とう〳〵今日になつた。斯うして立つてから三日ばかりはごた〳〵と、何もしないで過ぎてしまつたので、殆ど旅に對する興味を失ひさうだ。今朝も九時頃から外へ出て、カオール中を歩き廻つたけれど、土地に馴れない間は駄目だ。何を見ても珍らしい國で、さて一つも描いて見たいと思ふものに出くわさない。昨晩エルスで泊つた連中が歸つて

來た。金の事をけちけち云ふ癖に、よくあんな所で泊る氣になつたと、よく聞いて見ると何の事だ。一昨夜の南京蟲に恐れを作したからだと云ふ。それで歸りに停車場近くのオテル・テルミニユウスへ交渉して、とう〱此所のホテルを逃げ出して了つた。だから云はない事ぢやない。はじめからも少しましな所へ泊つて置けばいゝものを、『日本には一文惜しみの百知らずと云ふ諺があります』とH孃をつかまへて云つてやると、『いゝえ此所よりは向ふのホテルの方が高いので』と答へた。馬鹿な、そんな事を云つてやしない。でも解らなくて幸だ。解つたら定めし文句を云つたらう。

夕方、食事をすませた後、一體どんな所へ泊つたのかと見に行つてやると、なるほど崖の上に立つた、一寸豪儀なホテルだ。但し連中のゐるのは其屋根裏だ。屋根裏だつて構はない。自分もあすこで泊つて見たくなつた。で、此所へ部屋を都合して貰つたばかりだし、幸ひ南京蟲も居ないのだが、ゆうべエルスへ泊らなかつた三人もあすこへ行きたいと云ふから、明日一所に向ふへ移る事にする。で、まだ斯んな譯で、はつきり宿所がきまらないのだから、私の留守に來た手紙は一時預つてくれる樣、宿の爺に云つて置いてくれないか。B氏との交渉の結果、事に依ればすぐにカオールを立つ事になるかも知れないから。

○

一九二二年七月十四日、カオールにて。

今日は七月十四日(カトローズ・ジュイエ)(革命紀念日)だ。さぞ巴里は賑かな事だらう。前後三年ばかりも佛蘭西に居る勘定だが、私はまだ一度も巴里の此日を見たことがない。その時分になると屹度田舍へ出てゐるからだ。田舍は駄目だ、此所の町でも市役所(オテル・ド・ヰル)の前なぞ、此間から兵隊なぞが手傳つて、大分綺麗にしてゐるけれど、そのちやちさ加減お話にならない。多分その邊の珈琲店では、ちやちな樂隊でちやちなダンスでも踊つてゐるだらう。これも鄙びてゐていゝのかも知れない。

天氣も駄目だ。昨日の夕方から曇り出して、今日は一日どんよりして、時々雨も降る。從つて畫も駄目だ。昨日あたりから午前と午後にかけて二枚ばかり始めてゐるが、迚も物になりさうにない。何しろ氣もちが落つかないのだから、

何をしたつて駄目だ。

昨日夕方からオテル・テルミニウスの方へ移つた。移る時に前のホテルで、また勘定の事でごてついた。A女史が南京蟲を云ひ立てにして、約束の値段から幾らか割引をする様に云つた。所が前の話で、向ふはどうしても『蚊だ』と云ひ張るんだから面白い。『蚊だ』『いや南京蟲だ』と何時迄云ひ争つても果てしのない事を長い事こね返してゐた。迚も氣のみぢかい日本人の出來る藝でない。さてそうして一文にもならないで物別れとなり、こゝのホテルへ引移つた。屋根裏の安いところは大抵前の連中に占められて一部屋しか空いてなかつた。するとそれは直ちにA女史の占める所となつた。で、H老孃と私はその一階下の少々高い部屋へ収まる事となつた。所が何が幸になるか知れないもので、南京蟲を逃げ出した連中は、今度は本當に蚊にいぢめられる事となつた。屋根裏の部屋には、私やH老孃のところの様に蚊帳（ムスチケイルと云つて、絹紗で拵へた五月幟のやうなもの、これを天井からつり下げて、寢る時に頭だけ突つ込んで寢る。蚊の居ない巴里にはこんなものは見たくもあるまい）の設けがないので、其處に居た連中がまた騒ぎ出した。敷布を引つこ抜いて頭から引つ冠つたり、窓をしめたり、灯を消したり、暑いのに一晩中騒いでゐたらしい。日に一法や二法の事をしまつするからこんな目に逢ふのだ。お蔭でH老孃と私とは其厄をのがれた。今日午後、私は部屋に閉ぢ籠つて、描きかけの畫をつゝいてゐると、上の部屋へ掃除に行つてゐた女中がぷんぷんし乍らやつて來た。A女史か誰かに剣突でも食つたのだらう『いくら蚊帳をつけろと云つたつてさうは行かんがなもし。わしは宿屋の主人ぢやないがなもし。女中ぢやで、主人がいかんと云ふ事はいかんのぢやし、よいと云ふ事はよいのぢやがなもし』と、田舎辯で話しかけるエキスプレッシオンを取つて見れば斯うなる。うるさいから『さう〱お前の云ふ通り〱』と云つて追つ拂つてやつた。

昨日A女史は、私達にせつつかれて漸つとB氏に手紙を出した。巴里出發以來一行の行動を報じて、兼ねてこのカオールまで教授に來て貰へまいかと云ふのである。B氏は忙しい人だ。態々カザールから出て來てくれまいと思ふ。兎に角氏の返事次第で私も行動を決したい。若しも氏の指導を仰ぐ事が出來なければ、私は何時までも此んな所にぶらぶらし

てゐるのが惜しい。此所まで來た甲斐に、せめてモントバン(アングルの郷土)位は見て、巴里へ引つ返したいと思ふ。

○

一九二三年七月二十一日、カオールにて。

巴里は雨續きださうだな。定めて欝陶しい事だらう。お察しする。こつちはそれ程でないけれど、降つたり照つたり曇りがちの日も續いて天候甚だ定かでない。その中で、漸くシャトルウズの庭を十二號に描き上げた。昔の修道院跡だ。廣やかな中庭に、四列になつて、太いプラターヌの並樹が植はつてゐる。中庭の三方は高い四角な建物で圍まれてゐる。そしてその各々に穹窿のついた通用門がある。一方は土塀になつてゐて、その向ふに尖つた塔が見える。雨が降つたあとに行つて見ると、土の窪みに大きな瀦水が出來て、プラターヌの葉が浮び、尖塔の影が倒に映つてゐた。日が照り出すと、建物の白壁へ梢の影が斜めに映り乍ら風に戰いでゐる。大して變つた景色でもないけれど、寂としてゐて描いてゐる間氣が散らないのがいゝ。併し物と云ふ者は都合よく行かぬもので、こゝが靜かで車も通らないものだから、あたりの百姓の女達が兒供を遊ばせる場所になつてゐる。その中の一人でよく喋るのがあつて、これが屢々仕事の邪魔をする。色んな事を話しかけるので、面倒臭いからいゝ加減に返事してゐると、とう〳〵女は何時の間にか私が其兒供の肖像を描く事に極めて了ひ、『さあ何時描いてくれる?』と駄目を押されたには弱つた。一時のがれに『此畫が出來上つたら』と云ふと、それから物の三十分もする毎に兒供を連れてやつて來ては『もう出來たか?』を繰返へすのだ。まだあすこで二三枚は描きたいけれど、これが氣になつて出掛ける氣がしない。全く田舍者にかゝつてはやり切れない。

田舍者と云へば、今朝ホテルの上の方で描いてゐると、一人通りかゝつた男がある。暫らく私の畫を見てゐたが、突然、

『君、その畫を賣つてくれないか』と云ふ。

『賣るために描いてるのぢやありません』

と素氣ない挨拶をすると、

『ぢや何の爲に描いてるんだ』と聞く。

『私自身のプレイジールのために』と答へると

『賣つて、更に描いたら尙ほそのプレイジールが續くわけぢやないか』と突込む。

田舍者にしては割に理屈に合つた事を云ふなと思つたが、うるさいので、

『賣らないと云へば賣らないのだ』と劍突を食はせて追つ拂つてやつた。

そして午後停車場の食堂へ行つて、麥酒を注文してゐると、其處には私達の泊つてゐるホテルの主人や、町の金持らしい男が二三人集まつてゐた。その中に今朝逢つた男も居た。私を見るなり、傍に居る者に今朝私が描いてゐた畫の事を話して、『どうしても賣つてくれないのか』と云ふ。此方が頑固に云ふものだから、面白がつて嘲弄ふのだらうと思つて、『どうしても賣らない』で押つ通してやつた。すると、『君が賣らなければ、ホテルの君の部屋へ行つて、君が居ない中に盗み出してやるから』と不穩な事を云ふ。で、ホテルの主人に『あんな危ない事を云ふから、私の部屋の戸締りをよく氣をつけるやうにして下さい』と賴んで來た。すると私の歸つた跡へA女史が行つたらしい。それで其の男に、ホテルの主人も口添へしてわけを話し『どうか、あの日本人に畫を賣らせて下さい』と賴み込んださうだ。A女史が答へて、『あの人は一旦いやだと云ひ出したら駄目ですの。それより外に賣らうと云ふ者もありますから』と云つて

暫らくすると自分の畫を持つて行つた。そして斷られて歸つたさうだ。何時の間にか此話が一行の間にひろがつて、A女史の事は、あの茶目のK孃が私の處へ來て話したのだ。但しその序に賣る事を勸告された。『百五十法も入ればいゝぢやありませんか』と云ふ。百五十法ばかりで汗水垂らして描いた畫を持つて行かれてはたまらない。

漸くB氏から返事が來た。カオールまで行く事は、時間の都合上許されないと云ふのだ。豫想の通りだ。但し同時にドルドオニユのセナツクと云ふ處を指定して、其處へ來てはどうかとあつた。處が其處のホテルも一行八人を收容し兼

ゐるらしい。それではグールドンと同じことを繰返す勘定だ。此頃一行の間では、B氏とA女史との感情に圓滑を缺く者があつて、それが今度の『郊外アカデミイ』の成立を碍げてゐるのだと云ふ噂が專らある。それかあらぬか、今日更にB氏に交渉すべく、A女史に頼まれてR嬢が手紙の代筆をした時、私も相談を受けて傍に居たが、大分禮を失する様な文句があつた。勿論R嬢はそれを筆にすることを拒むだし、私もその不可なる事を說いたが、A女史は頑として聞き入れなかつた。『あなた方がいけないと云ふなら、私自身B氏に逢つてそう云ひます』と云ふのだ。てんでお話にならない。此んな調子でやつてゐるのだから、一向事が運ばないのだと思つた。私もそろ／＼見切りをつけて此處を立ちたいと思ふ。

○

一九二二年七月二十三日、カオールにて。

昨日サン・シイル・ラポピイまで行つて來た。カオールの東三十キロメートルばかり、此前皆で出掛けたヱルスから、まだ汽車で三十分ばかりも行つた處だ。一昨日の晩、君に手紙を書いて了つてから、最う寢やうかと思つてゐると、其處の奇景をホテルの主人に聞いたと云つて、H老嬢が誘ひに來たので、急に行く氣になつたのだ。連れはこの外にR嬢を誘つたと云つてゐた。

所が其日の朝早く、私の部屋の眞向ふに當るH老嬢の戸口をどんどん叩くものがある。『もうお出掛けになりませんか?』と云ふ聲は確かにA女史だ。はてな、あの人も行く事になつたのか知らと、ちやうど身拵へも終つたので、廊下へ出て『あなたも行くんですか』と聞いて見ると、『えゝ勿論、疾うに七時も打ちましたよ。ぐずしてゐては間に合ひませんよ』とさか樣に劍突を食つたには驚いた。一體誰れに誘はれて誰れと行くんだか解らなくなつたが、そんな事を聞くわけにも行かず、いつも行くカツフヱで簡單な食事をすませ、停車場へ行つて見ると發車間際になつてゐた。其處へR嬢とS嬢が驅けつけて、これもやつと間に合つた。そして發車する。

サン・シイル・ラボビイはロトの河岸の断崖に臨んだ小さな村である。停車場から爪先上りの路を大分登つて行かなければならない。息を喘ませて登り乍ら、少し前の方へ行くH老孃とR孃が何かこそこそ呟いてゐる。

『驚いたのね。朝早くから……』

『えゝ、私ちつとも誘ひはしなかつたのに』

『何處までついて來る積りなのでせう』

A女史の事を云つてるらしい。

『でもSさんはいゝわ』

『私も大好きです。あの人達の中で一番いゝ人ね』

『だからAさんが誘つたのでせう。他の人達とだと喧嘩ばかりしてますからね』

巖山の絶頂に恰好のいゝ寺がある。十五世紀ゴチックである。巖山の中腹から裾へかけて、赤瓦の小さな家が、層々として積み重なり、其間を胡桃や栗の木立が點綴してゐる。甍裏が日に輝いて美しい。空は鮮かに晴れてゐた。羊毛のやうな光を帶びた空が一すぢ、寺院の棟の邊を掠めながら、斜めに棚引き、それがすぐ下の、深い崖の根下に、物凄い青い淵を作つてゐるロトの水面に映つてゐる。私は此處で水彩を一枚試みやうと思つた。所が朝早く、あまり急いで出かけたので筆洗を忘れて來て困つてゐると、傍で景色をながめてゐたR孃が、其邊に立つてゐた村の兒供を呼んで、水をもつて來る樣賴んでくれた。暫くすると大きな罐詰の殼へ、なみ〳〵入れて持つて來た。その小さな掌へ一心に白銅を二つばかり置いてやると、默つて欣々（いそ〳〵）して驅けて行つた。七才位の可愛いゝ男の兒だつた。私はふと國に殘した兒供を思ひ出した。

お晝になつたので、豫ねて落ち合ふ事にしてあつた山麓のレストランへ、R孃と二人で行つて見た。レストランと云つた處で、普通の百姓家の庭に、粗末な木の卓子（テーブル）と、長い床几が備へてある位のもの、庭の隅の小屋からは驢馬の頭ものぞいてゐやうと云ふ所だ。レストランと云はねばそれと解るやうな處でない。

他の人達はもう來て待つてゐた。食事がはじまると、何と思つたのかA女史が私に訊いた。

『あなたは郊外アカデミイが終るまで、ずつと居て下さるでせうね』

ちか頃私が一行を離れて、巴里へ歸りたがつてゐる事を薄々感づいてゐるらしい。私もB氏の指導を受けられさへすれば、そんな氣もちも起さないですむのだが、前に書いた通りA女史のやり方を見るととても駄目だと思はれたので、

『殘念ながら、もうそんなに長く居る事は出來ません』と云つた。

『何うしてゞす。あなたは最初その積りで來たのぢやありませんか？』と詰じる樣に云ふ。

『勿論です。併し巴里を出てから、最う二週間にもなるのに、B氏に敎へて貰へさうにもありませんから、私は何時迄もこんな所にぐずぐずしてゐるのが惜しくなりました。巴里へ歸ればする仕事がうんとあるのです』

『あなたは氣が短かいのね。まだB氏との交渉も斷絕した譯ぢやないではありませんか』

『併し昨日の樣子では迚も駄目です』と云ひかけて、私は口を噤むで了つた。またヒステリイでも起されては大變だと思つたからだ。

『それに敎授を受けることもいゝですが、私もアルチストである以上、折々獨りになつて考へて見たい事もあります』

と云つて置いた。

H老孃も、R孃も、S孃も默つて私達の問答を聞いてゐた。

話はそれなりになつて、晝餐を終ると皆また仕事を續けた。R孃とS孃と私は河の傍まで降りて行つて、其處で仕事をしたり話したりしてゐた。R孃もS孃も今度の事はB氏がわるいのでなくて、たしかにA女史に手落ちがあるのだと云つた。普通考へた所で、あの自分の仕事と云ふものに一切を捧げ切つてゐるB氏と、アカデミイを自分の小遣錢を作り出す道具と心得てゐるA女史との間に、意志の疎通する筈がないと云ふ樣な事までも云ひ合つた。私はふと人に聞いた話だが、以前B氏がアカデミイMに敎鞭を執つて居られた時分、その生徒等に對する假借のない批評が、一人でも多く生徒を殖やさうとばかり考へてゐるA女史を心配させて、度々B氏の批評に干渉がましい事を云つたと云ふ話を思ひ

出して、そんな事までも原因してゐるのぢやないかと思つた。

日が暮れてからホテルへ歸つて、獨り部屋の中で考へてゐると、N孃とDとが尋ねて來た。そしてA女史から聞いたと云つて、私が立つ事を暫く思ひ止まつてくれと云つた。私は此の間から考へてゐた事をすつかり話して、『A女史があの態度を改めない間は到底我々の郊外アカデミイも物にならないと思ふ。私はもう諦めた』と云つた。するとN孃が、

『實はその事で相談に來たのです。私達はA女史を離れて、直接B氏と交渉しやうぢやありませんか。そしてこれ迄かちA女史が書き送つたことは、我々の意志にはかつたものでない。我々はどんな事があつてもB氏を慕つて來たのだから、氏の指導のまゝに從ふと云へば、B氏だつて承知して下さらない事はないでせう』と云つた。

『それは一方から考へればよい事でせう。併し此郊外アカデミイはもと〳〵A女史の考へた事ですから、女史を度外する事はよくありません。女史だつて少しも解らない所はあるけれど、決して惡い人ぢやないのです。そんな事をして今後私達の間に一層揉めをひどくする樣な事はよくないでせう』と云ふと、

『いゝえ、A女史は事が纏まりさへすれば何とも云ひはしないのよ。私達だつて全然女史を排斥するのでなく、唯だ交渉だけを我々の手でして、あとは女史に任せればいゝのです。あの人は少しでもお金にさへなれば、面目なぞはどつちでもいゝのよ』とうがつた樣な事を云つた。

兎に角立つのは二三日のばしてほしい、これは自分達二人の意志でなく、R孃も、S孃も、他の人達も望んでゐるのだと云つて歸つて行つた。あとでよく考へると、なる程だB氏と交渉の餘地もなくはない樣だと思つた。それで私は、皆なからの勸告もあり、いま一兩日様子を見る事にする。

○

一九二一年七月廿七日、カオールにて、

あれからまだいろんな事件が起つたが、それはもう省略する。

とう／＼A女史はB氏と直接交渉するために、そしてそれに關する一切の準備を整へるために、昨日午後立つて行つた。尤もA女史が行くに就いて、一行の中では可成り議論が持上つた。前云つた樣に、手紙の上でさへ隨分失禮な事を平氣で云つてやる人だから、直接氏に會つたら何を云ふか解らないと皆が心配して、代りに誰れかを撰拔してやればいゝと云ひ出したが、女史は何うしても承知しなかつた。其爲にDやN孃と凄まじい口論があつた位だ是非自分が行くと云つて、昨日晝過ぎ、部屋へ歸つてせつせと荷拵へをしてゐたが、手に餘る重い物は跡に殘つた者にまかせ、三時に此所から出ると云ふ乘合自動車で、カザールまで立つて行つた。『もつと早く行つてくれゝば、こんなに長い間苦勞をせずとも。濟むだものを』とある者が云ふと、『其處がAさんですよ、手紙で濟みさうなら、態々費用をつかつてまで行くがものはないと思つて居たのでせう』と他の一人が答へた。

女史は行きがけに、恰度ホテルに殘つてゐた私へ、あとの事を賴み旁々挨拶に來た。で私は『向ふへ行つたら、なる可くB氏の云はれる事に逆はないで下さいよ。皆の爲だから』とくれぐれも賴む樣に云ふと、女史は笑ひ乍ら『いゝ事よ。私はこれでもちやんと心得てるんですから』と云つて出て行つた。

昨夜もその事で、皆な心配して私の部屋へやつて來た。そして若しA女史の交渉がうまく行かない場合、善後策を講じて見たが結局話は纏らずじまひだつた。私は最う腹を極めてゐた。女史の通知があり次第直ぐさま其指定地へ向ふかまたは巴里へ引つ返すか、何方にしても此所を立つばかりと、今朝起きるなり荷拵へにかゝつた。

A女史は話がうまく纏まつて、準備がつき次第電信か電話で知らせると云つてゐた。それに依れば晝までに何とかたよりがある筈なのだ。晝食時に何時も皆が行くレストランへ行つて見ると、N孃とDが居た。若しやA女史から何か便りがあつたかと聞くと、『ない、事に依ると今日は駄目かも知れん』と云つてゐた。最う二時になつてゐる。望みを棄てかねた私は、女史の便りを待ち乍らこの手紙を書く。

（以下同日、セナツクに赴く車中にて書き添へる）

二時になつても三時になつても何とも云つて來ないので、愈々今日は駄目かと思つてゐると、やつと四時になつて電話がかゝつて來た。恰度外から歸つて來たばかりのR孃に電話口に出て貰ひ、居合せたH老孃と私は傍について聞いてゐた。A女史の便りは『萬事好都合、皆な出來るだけ早く來て下さい』との事だつた。三人はすぐ樣停車場へ驅けつけて、女史が云つて來たセナツクまでの道筋と、其處まで行く列車の時間を問ひ合せて見た。列車は夕方六時過ぎに出るので、それに遲れると明日まで待たねばならない。あと二時間を餘すばかり、私は最う荷拵へが出來てゐるからいゝけれど、まだ出來てゐない人もあるので、それを待ち合せる暇に、市役所の警察部まで行つて、在留證明書に判を貰ひに行つた。恰度途中で、寫生から歸つて來るK孃とS孃に逢つた。わけを話して『早く〳〵』とせき立てた。用事をすませて歸るともう發車までに三十分もなかつた。私を先頭に用意の出來たものから次第に停車場へ集まつたのは最う汽車がプラツトフオルムを離れやうとするぎりぎりの處だ。N孃とDとはとう〳〵來なかつた。今日は駄目と極めて水浴に行つたのだと云ふ。何處へ行つたのか時間が切迫して探す事も出來ず、S孃が置手紙して知らせる事にした。

汽車はいま、來しなに一苦勞したグールドンを過ぎて、私達の乘換驛カズレスに近づかうとしてゐる。もう八時近い流石に長い日影ももう全く薄れて窓の外を慌しく去來する赤土の崖や、黑い巖、段々畑などを罩め乍ら夕闇が迫つて來た。九時でなければサルラに着くまい。其處から更に何キロメートルか行かねばならぬ。どうせ今夜中に着けばいゝのだ。明日からは本當の樂園（パラディ）がはじまるだらう。

—一九二三年五月三十一日稿—

素人の見たる現代創作並創作家

1、現代日本の創作及創作家に對する御感想を簡單に洩らして下さい。

2、そして誰の作品を最もお好きになりますか、最近に御讀みになつたもののうちで特に興味あり、または價値ありと思はれたものは何々ですか。

3、現代作家に對する注文、小言をもお願します。

4、今後の文藝の傾向と、我國作家中にて誰が中心作家となるかの御豫測を御願します。

高畠素之

藝術家といふものは藝人であるから、理窟はわからず人格は下劣であつても（勿論、理屈もわかり、人格も上等なら尚更いゝが）、藝に特別の冴えがあり鍛へがあり力がある限りは本職として存在の理由を持つてゐる。素人藝ではいけない。アクのぬけない、土くさい理屈でごまかした様な藝では、錢を出して見る氣にはなれない。されば と云つて、徒らに玄人ずれのした、そしてそれ以外に取りえのない源之助式の死藝も困りものだが、とにかく手に入つた藝でなくては、本當の客がつくものでない。近頃流行のプロレタ文藝といふものは、あれは一夜づくりの醉色屋の流す醉色はどこにも商品化してゐない。精々尾崎士郎の浪花節ぐらゐの所だから、客が錢を出さない。隨つて食へない。隨つてあせる。いくらあせつても、無い藝は出せないのだから、無藝屁理屈と來るわけだが、屁理屈となると却つて素人の方に達者なのがゐる位ゐだから本藝にはならない。どのみち食へないに定まつてゐるのだから、プロレタ文藝の方は早く足を洗つて本物のプロレタリアになつた方がいい大きにお世話だ。

所謂ブルジョア作家の中には、氣に入つたのが幾人かゐないわけではないが、最近の作物には大した感服させるものがあつたとは思はない。私は正宗白鳥が一番すきだ。此人のものだけは、文句なしに木戸錢を拂ふ氣になれる。藝に磨きがかかつてゐて、感じも深く鮮かであり、何人にもまねられない底光りを持つてゐる。強い自我を持ちながら、冷かに離れて見る妙機を捕へてゐる、から、表現に無理がなく絶えず普通と必然に則しつつ、充分の深みを示してゆける。此人ばかりは眞に名人であると思ふ。（未完）こんなに長く書いたら木戸錢をおごつてもよからう。

山川均

拜復私は小説は好きで、讀めば大抵の小説は感心するのです。それで讀みたいと思ひながらつい暇が無い爲に久しく讀みません。大

正何年頃だつたか、有島武郎氏の『カインの末裔』とかいふのを雑誌でか讀んで大變感心したことを記憶して居ります。之が私が最近に讀んだ小説であります。右の有様ゆへ私にはとても貴問にお答へする資格がありません。

河上肇

これは門外漢の事とて御返事をさし控え度存じます何卒不惡

土田杏村

1、自分の持つてゐるすつかりの力を集中し、其れを使ひ盡した、といつた風の創作に乏しい。そして作家たる事も亦一の職業だと信ずるらしい空氣が濃厚だ。

2、永井荷風、島崎藤村、德田秋聲、正宗白鳥諸氏は尊敬せらるべき偉大なる日本の作家だと思ふ。

正宗氏の近作すべて、永井氏の「雨瀟々」（單行本）、里見弴氏「直輔の夢、」佐藤春夫氏「都會の憂鬱、」水上瀧太郎氏「大阪、」「勤人」有島武郎氏「骨」、神野岩三郎氏「屍は亂れ飛ぶ」（通俗文藝として）

3、陳腐なる政黨的時調を止めて（近來の評論は皆其れだ）作品に全力を注いで欲しい。

4、プロレタリアの全生活全要求を包容する作品が生れると思ふ。其の中心作家となるものは、現文壇にはまだ頭を出して居ない。

赤松克麿

私は文壇に於ても階級闘爭が在るものだと考へる。併しそれは無産階級の政治運動乃至經濟運動から見れば、單なる一傍流に過ぎないと思ふ。併し傍流だからといつて、私は私の同志の二三の者がやるやうに、決して頭から之れの價値否定するものではない。文壇の階級闘爭もたしかに存在の理由を持つて居ると信ずる。從つて無産階級藝術家に對して、私は好意を持つて居る。

私は日頃小説を愛讀する方ではないので、あまり讀んでは居ないが、時折り讀んだ無産階級藝術家の作品に就いて感想を述べると、諸君の立場があまりに個人主義的であつて、現下の無産階級運動の集團的、組織的、統制的な方面は殆んど諸君の心理に映じて居ないやうに思ふ。資本主義の壓制に對して、個人主義的な自由のために反逆するのは、プチ、ブルヂョアの行き方である。無産階級の陣營の強味は集團的組織と訓練にある。私は大ストライキなどの時に、勞働者が銘々の「個人的自由」を犧牲にして、恐ろしい集團的威力を發揮する時、云ひ知れない感激に打たれることがある。今、無産階級運動の本隊は、戰鬪力の集中を原則として集團的組織訓練の發達に努力して居る。無産階級藝術家を以て任ずる諸君も、此の本隊の行進の傾向に着眼せられる必要があるのでなからうか。

木村泰賢

文藝家について何にかかけとの御注文に候へどもこの方にはトント無智の小生故、遠慮仕り度し不惡御了承被下度候。

高島米峰

一、私は可なり多くの創作を讀んだ。しかし、近年に至つては、たゞ、常に青年に接する機會を多く持つて居るところから、青年と語り合ふ時の必要上、餘儀なくされて讀んで置くといふ位の程度になつてしまつた。それも、昨年頃からは、力めて讀んだが創作から何ものをも與へられることなく……作家と私との年齡の相違、思想の懸隔のために、創作が與へて呉れないのではなく、私が受け取り得ないのであるかも知れないが、……何等共鳴を感ずることも出來ず、忙しい時間を割いて、わざ〳〵讀んだのに對して、餘りに貧弱

なる報酬しか得られないので、こんなことなら、何か外に讀むべきものがあつたらうにと失望し後悔することが多いので、昨年の後半からは、殆ど創作を讀まないやうになつてしまつた。從つて、最近の創作で誰彼といふ譯にはゆかないが、有島武郎君のものだけは、創作でも、評論文でも大抵遁がさず讀んで居る。そして學ぶところが甚だ少くない。

二、醜い自己の外的生活を、露骨に描寫してさへ、雜誌や新聞が歡迎して呉れるといふ賣文業者に取つては、頗る都合の好い時代になつて來たところから、駈け出しの三文創作家までが、好い氣になつて、風敎を害し廻はり、更にそれを、誇張して創作にする。こんなことでどうして、偉大なる創作が出來るものか。

三、この頃創作家の、創作家としての壽命の短いのは、一體どうしたものか。名も無い青年男女が、一躍して文壇の寵兒となることは珍らしいこともなく、又驚くにも足らないがその寵兒が、創作の三ツも出すと、もう行詰つて、あとは微かな惰力で生きるより外、仕方が無いなどは、盛者必衰も、あまりに手酸しい。從つて、文壇の流行兒で、それの三年以上も續くといふのは、甚だ以て珍とすべきである。畢竟それ、蓄ふるところ多からずして、餘り早く大家になり過ぎた、[illegible]いで無いとは言はれまい。學ぶことゝ養ふことゝは、苟も人間たるものゝ生涯の仕事でなくてはならない。古人曰はく『飛び込んだ力で浮ぶ蛙かな』と。

四、西洋思想の受賣りは、獨り、文藝界ばかりでなく、一般思想界に於ても、行詰つて居る。と言つて、獨創的の思想、若くは文藝は、現代の日本の思想家や文藝家には、期待し難いことを、甚だ口惜しく思はざるを得ない。これで、一方に、向上進展の一路を見出さうとならば、印度か支那か兎も角、今更ないがら、脚跟下の東洋思想に、來らざるを得ないからう。近來、ベタ臭い釋迦や、ペンキ臭い老子などが、ポツ〳〵書肆の店頭に現はれて來たことは、釋迦や老子のためには、氣の毒だが、已むを得ない過程である。……兎もあれ、東洋思想に深い造詣があり、且つ、文藝的才能に於て、他の追隨を許さないといふ人物が出て呉れゝば、その人こそ、當分、文壇の中心作家となり得るだらう。（大正十二年四月廿七日）

北澤新次郎

(1)自分は文藝の方面には全く門外漢で且つ左程興味を持つてゐません爲め滿足な御答へが出來ません。然し文藝も現今の資本主義經濟組織を離れて存在しないと考へる私にとりましては大體に於て今日の文藝は現在の經濟組織の反影にすぎないものであると考へます。從つて現代我國の創作の大部分はブルジヨアジーの旗色が鮮明の樣に思はれます。唯私共の心强いと思はれる事は最近プロレタリヤ文藝がポツ〳〵勃興して來た事であります。之れが將來如何ほど發展するかは非常に重要な事であると信じます。

(2)最近に私が面白いと思つて讀みましたものは麻生久氏の「濁流に泳ぐ」です。尤も麻生久氏は所謂普通の創作家ではありませんが。

(3)私は現代の作家の方々に註文する程の何等の素養がありません。唯現狀維持を謳歌する作家達ちにはもつと社會進化の推移を洞察されん事を希望し、新社會建設に貢獻せんと努力つゝある方々にはもつと深刻に實社會を直視せられん事を熱望します。どうも此頃の樣に各地方〳〵に於て見るオカユの出來損ない見たいな妙ちきれんな風采をして、人の解らない事を云つてゐれば大文士であるかの樣に誤信してゐる所謂文學青年の輩出は鼻持ちならない事だと考へますから。

、文藝に就ては全然門外漢に有之從て作品に關し申上候程の感想無之慚愧之至に御座候

花井卓藏

堀江歸一

貴問は私共素人に取つては甚だしき難問であつて、御返事に苦しみますが、正直に所感を申上げます。

1、現代の創作や創作家が著しく進歩したことは爭へない事實であると思ひます。

2、私は改造中央公論等の創作や、東京日々東京朝日に連載される小說を大體讀みますが、讀むに隨つて忘れます。一時谷崎潤一郎氏、菊池寛氏佐藤春夫氏の創作を面白く讀んだこともありますが、近頃では左ほどにも感じません。此二三年間に讀んだ創作中、今日まで頭に殘つて居るのは上司小劍氏の東京第一卷です。水上瀧太郎氏が昨年あたり大阪毎日新聞に出した「大阪」と題するものも面白く讀みました。

3、別に註文も小言もありません。唯創作家諸氏が自重して、永續きのされることを望むのです。

4、斯る事に素人の私には御返事致し兼れま

す。

板垣鷹穗

一、現代日本の創作や創作家に對して細かに注目する暇のない特別な感想もありません。漠然とした印象が殘つて居る丈のことです、表現する力が足りなくて踠いて居る人、ほんの思ひ付きで滿足して居る人、日記を小說に書き代へて居る人、雜誌社からせきつかれて惰性のまゝ筆を取つて居る人、自分を偉大なものにして獨りで良い氣持になつて居る人、恥や罪を賣り物にして居る人、手先の才で感心させることの上手な人…限りない多數なフイジオグノミーが未來派の畫のやうな渦をまく。―私の頭に殘つて居る印象は此麼なものです。

二、そんな理であまり澤山の作品は讀みませんから何とも云へませんが芥川氏の短篇の中には時折り面白いものがあるやうに思ひます。

三、現代の作家に對しては別に何の註文も小言もありません。强いて云つてみた所で詰局無理な註文になつてしまうでせう。自分に滿足する心がもう少し强くなかつたら、――と云ふきまりきつた言葉を繰返してみたところで仕方のないことでせう。

四、今度の文藝が何う變るか？　これは六ケ敷い問題です。然し、廣い意味での外國文學の模倣が不變の傾向ではないでせうか。

岸田劉生

私は畫工の事とて文藝の事はよく分りませんが武者小路ものや長與ものは尊敬してゐます。志賀直哉君も作家として尊敬してゐますが、何しろ近來殊に讀ないので、後はよく解りません、敬愛する人の噂で誰れそれは中々いいと云はれる人をやはりさうかしらと思つてゐます。

文壇に註文はありません、武者や長與や志賀がいい作をどん／＼生んでくれゝばそれで結構です。皆な友人ですが友人だからほめる氣はありません、皆な丈夫で元氣で仕事してゐる事は愉快です。　五月三日

杉森孝次郎

拜復「創作」につき再應の御來狀に候ところ小生御回答申上ぐる知識上の準備無之候間不惡御了承願上候

村田良策

一。階級文學と云ふことが喧しい樣ですが、我々の文學鑑賞の上では別に關心する必要がないと思ひます。創作家が又階級と云ふ樣なことに殊に關心して創作すると云ふことも如何なものでせう。

二。私などにとつては、好きな作品は、作家が特に何等かの目的や關心を露骨に表現しやうとしない作品です。自然に作家の個性が滲み出てゐるものに心惹かれます。ありふれた言草ですが最近のものでは、白鳥氏の「象牙の塔」、藤森成吉氏のものなど。（讀んだ數は極めて少ないその中から云ふのですが）。いつも容易に作者の心の中に入つて行ける鑑賞の自然さを感じます。從つて愉快です。小說とは或は云へないでせうが、「冬彥集」は愛讀しました。興味だけを問題にすれば「舊約」などは面白うございました。

三。然らずに表現しやうとする對象をしつかり握むことが大切ぢやないかと存じます。これも古い言葉でせうが。かういふ點で技巧は別として武者小路氏や二三の若い人達の作に純な對象の把握力を感じて愉快です。何か何かと焦つてゐる多くの作家は、自分の心までも失くして了つてゐるのではありますまいか。

四。中心作家に誰れがなるかなど、考へて見たこともありません。落付いた藝術が欲しい。今はあまりに生活の外部の力に藝術が支配されてる樣です。心の內部に聽く要があるでせう。理想を持つことが人間としても作家としても何時もながら望ましい。殊に今の日本では。

桑木嚴翼

御尋ねの趣き、私には餘り材料になるやうな御答へが出來ません。第一に少し意見を申上げたい點は創作といふ言葉の用ひ方です。一般に小說戲曲等を指して居るとは承知して居ますが、本來創作を文藝のみに限るのは偏狹です。學術には研究といつて創作とは言へないといふことも或場合には尤もですが、其の研究も又批評も一個の纏つたものなれば立派に創作品といはれませう。材料の陳列のやうな研究なら創作とは言へないか知れませんが、論文の體をなすものは文藝と同樣に見られませう。決して學術上の大發見の如きは創作といつても些しも差支はないと思います。然しこんな小言は先づ止めて、御趣意の通り創作を文藝同意義に解釋して置きますが、さて其の文藝に對しては私も隨分橫好きの方ですが、近頃は餘り讀んで居ないので何とも申しかねます。折々『改造』などのを見ることもありますが、文藝的鑑賞よりは寧ろ何か或る變つた事柄を取扱つたものに眼をひかれます。例へば朝鮮へ旅行した際に其の土地の話しを小說で見ると讀む氣になります。其他、やはり前から知つて居た人の作だと先づ第一に讀む氣になります。つまり自分と同じ時代の人の作に惹き付けられるのでしよう。こんな頭ではとても未來の豫測などは出來ません。

楠田民藏

「我等」に載る創作を時々讀む位の事で、外では何も讀んで居ませんから、御答へのしやうがありません。何分あしからず。

小泉信三

(1)——

(2)平生敬意を表し居候作家は永井荷風、正宗白鳥、志賀直哉、芥川龍之介、里見弴、久保田萬太郎、水上瀧太郎の諸氏にて此人々の作品は出れば必ず讀み居候。就中永井氏の作品は斷簡零墨をも讀み落とさぬやう努め居候最近のものにあらざれども「暗夜行路」が掲載さ

れ始めし頃には「改造」の發行が樂しみ待たれし事記憶に新たに候。愛讀作家にはあらねども野上彌生女史の「海神丸」中央公論は閨秀作家に珍しき力作と存候

(3)——

(4)某々君が名を成せるを見ては文壇は不公平なりと思候併し又別の某々君がその大聲疾呼にも拘らず、何時迄も名を成さゞるを見ては矢張り文壇は公平なりと思候由つて將來誰が中心作家となるか全く豫測致兼候　以上

山川菊榮

一、一向讀んでゐませんので御返事に苦しむ次第ですが。一般的に申せば『文壇』といふ別世界に住んでゐる先生方のお筆先は、私共下界の人間にはサッパリ有難味が分りません。時々評判の作家だとかいふ人の書いたものをのぞいて見て感ずることは、よくまあ氣恥かしくもなくこんな馬鹿げた寢言が書けると思ふくらひなものです。藝術は人生のエッセンスだそうですが、日本の創作家を通じて見た藝術は人生のしぼり滓のような氣がします。

昔何とやらいふ歌よみのお公卿さんは謀叛の計畫に加擔したらうといつて糺問された時、『思ひきや我しきしまの道ならでうき世のことを問はるべしとは』と答へたのでうまく其場を逃れたそうです。これが訊問をそらす故意の手段なら感心といはなければなりませんが、もし本音だとしたなら——恐らく本音でしたら——歌よみは要するに藝人であり、其の時代のおもちやであることを證明したにすぎません。

今日の世の中で、全世界に亘る資本と勞働との白熱した戰ひの渦中に住み、右に傷つき左に仆れる兄弟の血のとばしりを受けながら、その戰爭の慘害をよそにして小さな家庭の中のいさかひや、他愛もない戀物語に沒頭してゐる創作家達は、見れども見えず、聞けども聞こえぬ盲目であり聾であつて、其等の人々の手に成つたものは、要するに色盲の描いた繪、聾者の作つた樂譜にすぎません。是等の連中も何かの場合には『うき世のうちを問はるべしとは』とばかり、長袖で顏を蔽うてよゝとばかりに泣き入ることによつて一身の安全を圖る手合でせう。自分の一身の目前の安危より外に何も感ぜず、何も考へぬ、利己主義と無感覺とがブルジョア文藝家の得意の態度かと考へます。これによつて今日の謂ゆる文藝家はブルジョアの若旦那や奥樣の御贔屓を伺ふ點に於て、お出入の呉服屋や小間物屋の番頭なみの商人であり、又その坐興を添へて徒然をお慰め申す點に於て藝妓や幇間と同じ藝人乃至玩弄物の一種と思はれます。

二、好きな作家も作品も皆無。最近に感服したもの皆無。

三、注文や小言の云ひ甲斐ある作家あるを知らず。

四、今後は幾らか階級意識ある作家のものも出て來るでせう。誰が中心作家となるかの御質問に對して、今後私の方で『うき世のことを問はるべしとは』と外しておくのが賢いやうです。神ならぬ身の、誰が文壇とやらいふ境の中央の椅子に坐るか、かいもく見當がつきかねます。

黑人ルネ・マラン作
高瀬毅譯

（黑人の赤裸々な戀愛は我々をしてゾッとせしむ）

定價壹圓五拾錢
書留送料十五錢

參拾四版

バツアラ

題材が、黑美人、猛獸、ナイル河等の蕃地であることと、作者が黑人であることとに依つて有名なる本書は、日本の青年士女にも數萬の味方が出來ました、そして三十四版を出すの盛況を呈しました、黑人の戀愛とは？

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

島田清次郎著
小説 **革命前後** （8版）
定價一圓六十錢 送料十七錢

豪宕の才筆に鳴る島田氏の傑作「大化維新」の裏に潜める鎌足と漢智姫との殉情的戀愛を題材とし、革命の裡に此種の情熱が芽生ゆる經路を綢やかに織り出して若き人々の心胸に一つの炬火を投じた。

中澤臨川著
小説 **嵐の前** （15版）
定價二圓 送料十五錢

情熱の思想家として文壇の一人者たりしニイチエの失戀を題材として描かれた涙ににじむ思想小說だ。著者は我が論壇の麒麟兒として情熱に生れ情熱に鍛れたる理想的生活の持主として青年の憧憬を一身に集めた人である。

中西伊之助著
長篇小說 **赭土に芽ぐむもの** （10版）
定價三圓 送料十九錢

「こんなにも虐げられた人々もあるものか」と涙ぐませる。朝鮮と云へば我國だ、朝鮮人と云へば我々の同胞だ、その氷山、そのいぢらしい人情、その死刑囚の苦しみ、どの章句にも生々しい血の流れてをるこの深刻な小說を見よ。

中西伊之助著
長篇小說 **汝等の背後より** （10版）
定價二圓卅錢 送料十七錢

プロレタリア文壇の第一人者たる氏が鋭利辛辣なる筆致にて朝鮮の女革命家を中心として革命家の内爭、脱獄、決闘、虐殺、强姦等の陰慘な場面を描いた我國唯一の「國際小說」である。蓋しプロ文學で最高の實行きを示すのは本書だらう。

尾崎士郎著
長篇小說 **逃避行** （7版）
定價二圓卅錢 送料十九錢

若き社會運動家尾崎氏が、社會主義運動の裏面を赤裸々に告白し、自分は飄然として逃避するに至つた悲しき社會記錄だ、全篇火の如き熱烈さに充ち〳〵してをる感激多き小說。

尾崎士郎著
長篇小說 **懷疑者の群**（逃避行第二部） （3版）
定價一圓六十錢 送料十七錢

若き社會主義者その内面生活の素破抜きであり、その首領達の裏面史であり、そして若き日の惱み多き戀の秘錄である、本書を一讀せずして彼等社會主義者の内面生活を窺ふことは出來ない、本書は逃避行の續篇。

葛西善藏著
哀しき父 （5版）
定價一圓九十錢 送料十七錢

文壇の雄將有島生馬氏は云はく「自分が今まで讀んだ小說中本書の如く强く我心を打たれたものはない」我子の不良を哀しむ父の悶え、父の運命、その子の運命は悲しき慘苦に充ちて一讀鼻がつまるの思ひがある。

長田秀雄著
戯曲 **愛憎篇** （4版）
定價一圓八十錢 送料十五錢

本書は我文壇の雄長田氏が、大阪石山本願寺とその法敵信長との間の確執を背景とし門跡光佐一門の中に波瀾伏起せる人間愛着の心理を捕へ來り深刻なる筆を以つて描出せる同氏會心の宗教小說で、他に戯曲「父の罪」を添ふ又同氏心血の結晶。

東京芝區愛宕下町　**改造社**　振替東京八四〇二

賀川豊彦四名著

死線を越えて

大正十二年五月までの調査によると本書ほど部數の出た書籍は日本にないさうです 本書は幾多の暗示と光明とを現代の人々に呼びかけ世評囂々たるものです、本書の社會人心に及ぼした影響は他の何書と雖、到底企及すべからざる社會感化力を有つものだ。

285版

價 3 圓

送料 19錢

太陽を射るもの

「死線」の前篇は我國に前例なき賣行を示した、本書も前篇に劣らず百八十五版の賣行を齎したのは、賀川氏の勢力がいかに偉大であるかを想像するに足る、月十五圓で一家を支持して行つた氏の青年時代を此二巻で味つて下さい。

184版

價2圓80錢

送料 19錢

生存競爭の哲學

生存競爭の原理を闡明したものだ、生存競爭と成長競爭、生存競爭と生存互助の哲理を解說し、生存競爭は建設か破壞か――のどちらであるか――を指示し生命力と愛の力は生存競爭を超越するものであることを進化論的に實證し人類の向ふべき針路を科學的に解示す。

13版

價 2 圓

送料 17錢

空中征服

大阪市を中心として書かれた我國で尤も新らしきユトピア小說だ、谷本博士は本書の價値は「死線」に優り、そして我國で尤も諷刺に富み、よき暗示を國民に與へてくれた小說だと激賞した。

20版

價2圓20錢

送料 17錢

東京市芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

文學博士 瀧精一著

文人畫概論

定價貳圓　送料拾五錢

挿畫拾五葉　菊判上製

第六版

有識階級よりの註文殺到す

文人畫の流行今日より甚だしきはなく、またそれほど喜ばしく美はしきことはない、されど悲しいことには文人畫の概念を得るの一書だにないことだ、斯界の第一人者瀧博士は、深くそれ等の缺陷を遺憾に思ひ、本年東京帝國大學にて「文人畫概念」てふ趣味深き講演をなされた、本書は實にその講演を基礎として(一)文人畫の起源(二)文人畫の流派化(三)文人畫の原理(四)文人畫と南畫(六)文人畫の精華(六)將來の文人畫を説いたものだ、挿畫も麗しきコロタイプ十五圖を挿入したれば、美術の國の人々が必ず一讀せではすまぬ含蓄多き著書。

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

山本有三作

山本有三戯曲集

定價金貳圓八拾錢

◇送料十九錢◇

◇四六判布製◇

第六版

本書が、近代戯曲中の最高力作であることは萬人の均しく首肯する所です、今回本書は**山口高等商業學校**にて教科書となりました、以つて本書の聲價と、本書が**近代的の家庭**にも受入れられる深刻な、そして興趣深いものであることを窺知することが出來ます。

内容

- 津村教授
- 嬰兒殺し
- 生命の冠
- 女親
- 坂崎出羽守

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

日蔭者の研究

（女性改造七月號所載）

此世で尤も不幸なるものは日蔭ものである妾、私生兒、監獄で生れた兒、情婦、私娼、公娼の社會的研究であります、彼等は太陽の光を避け、公衆の人前を避ける月見草の如く闇に咲く寂しき花です、これ等の研究は社會的に非常な意義を有ちます、これ等は女性改造七月號に掲載されました、皆さんの御一讀をおすすめします。

男性支配と私有制度　堺利彦

一代の風雲兒が日かげものを論ず、その直言は近來の痛棒であり、特に新しき人々の一讀すべき文字であります。

妾論　大沼利道

現代の妾氣質と、妾の本場、我國史中の妾の代表的經驗者などを捕へた通人の筆致は實に身慄ひする程幽婉である。

監獄で生れた女　澤田撫松

女囚人の娘は一度日當へ出たが間もなく又地獄の責苦にあふて其母のごと死刑に處せられる哀切限りなき實話。

私生兒問題　早田正雄

私生兒に對する社會政策的立法の必要を力說する新人の透徹した條理、眞摯な慷慨は殊に世の男性に必讀を乞ふ。

日蔭者の生む悲劇　新居格

日かげ者は私有財產制度の濕地に成育する苔の花である。そこには切り刻まれた女の體が死にもきれずに横つてゐる。

中西伊之助作

長編小說

農夫喜兵衛の死

四六判上製

定價壹圓七拾錢 書留送料拾五錢

◇小作農喜兵衛の伜は兵に徵されて滿洲で戰死し、その娘は賣られて朝鮮に赴きました、そして朴訥の聞え高かつた彼は地主からいぢめられて水に溺れました。◇本書を讀めば小作人がいかに地主にいぢめられ、そして小作人の娘や、伜が悲しい人生觀を抱いて離遊するか農民生活のみじめさがしみじみと身にしみて來ます◇農村は年と共に荒廢して行きます、そして地主と小作人との階級意識も年と共に熾烈になる、經世家が第一に注目すべきは此點です◇彼等はしかくいぢめられて死より强き反抗心を子々孫々に傳へます◇そして一面蹴られ、擲ぐられても戀愛は娘自身の好きな方面に芽生え、生長して行きます、彼の戀愛の前には資本家の猛烈な壓迫も及びもつきません◇プロ文壇の第一人者たる中西君のメスがいかに鋭く彼等の叫ばんとする處を突き刺したか精讀して下さい◇時代に魁せんとする人々はこの虐げらるる人々の眞相を了解して下さい。

農民小說の魁をなせる本書を一讀して下さい。

中西伊之助著 長編小說 **緖土に芽ぐむもの** 十版 定價三圓 送料十九錢

中西伊之助著 長編小說 **汝等の背後より** 十版 定價二圓卅錢 送料十七錢

東京芝區愛宕下町 **改造社** 振替東京八四〇二

矢崎美盛著（新刊）

現代哲學思潮

定價壹圓六拾錢
送料十七錢

哲學入門の新刊

哲學に入らんとする人の多くして、「哲學入門書」のないのを遺憾とした著者は、幾多の苦心を經て本書を公刊しました、本書は現代に鳴りひびく哲學者及その哲學について解說を與へたものです、矢崎氏は東京大學の生める新進氣鋭の哲學者で、特に近代哲學思潮の權威者です。

東京市芝區愛宕下町　**改造社**　振替東京八四〇二

創作



指輪

佐藤春夫

日曜日の夜であつた。川瀬松吉は女房のしげ子と一緒に銀座を歩いてゐる。それは實に三四年來の事件である——彼等がかうして二人づれで歩くのは。そればかりか、今日の散歩は松吉の方から言ひ出したのである。それだのに松吉自身は屢々誘はれでもした者のやうに歩いてゐる。しげ子を置き去りにするやうにすたすたと歩いてゐる。小柄なしげ子が人ごみのなかで夫を見失ひはしないかと思つてきよときよとしてゐるのを松吉は知らぬげに見える。しげ子にとつては、それでも、この漫歩はうれしいのである。

さすがに松吉は立ちとまつた。しげ子を待つてやるつもりなのだ。立ちとまつた松吉はしげ子が五六間も遅れて歩いてゐるのを一瞥すると、それを待つ間、彼はショヨオウヰンドウの方へ立ち寄つた。

そこは偶然、寶石商の前であつた。

「まあ、いい指輪があること！」

いつの間にかしげ子が追ひついて來てゐて松吉にさう言ひかけたのである。

が　松吉の見てゐたのは指輪ではなかつた。ネクタイピンであつた。

「…………」

「ね、あの指輪いいでせう。ああいふのがはやるの？」

しげ子は默つてゐる松吉に話しかけた。しげ子は指輪が欲しいといふのではない。ただ夫との話題がほしいのだ。それは松吉も知つてゐる。そこで松吉が言つた。

「どれだ？」

「そら、」しげ子はガラス越しに世帶染みた手で指さした「ね、あの上の列にある左から三番目」

「大きなルビイかい？、」

「え、え、」

それは平べつたい隋圓形のルビイであつた。なるほどそれが流行と見えて、表はただ平に滑に磨いてあるだけである。なか側からは切子に磨いてあるのでそれが表へ透してうつる。新らしい形であつたし、石は大きくつて立派であつたが無論人工石の安いものである。¥13.50といふ札がぶら下つてゐる。それがしげ子にはよく讀めなかつた。

「高いんでせうね。いいわねえ」

「安いよ、十三圓——十八圓じやないだらうな——十三圓五十錢」

松吉はさう答へながら自分でも安いものだと思つた。すると松吉の頭のなかへその指輪をはめてゐる一つの手が思ひ浮んだ。松吉はひとり言のやうに言つた——

「安いのだ」

「まあ、安いのね。いいわね」

しげ子の聲は、松吉の聲におびき出されたのであつた。それをせびる樣子は少しもなかつたが、ただそんなものなら自分たちにも買へさうだといふ喜びであつた。

「駄目だよ」松吉は言つた「あれや、お前、十七八の——せいぜい十九ぐらいの娘の指輪ぢやないか。子供を抱てあんな指輪をしてゐると人が笑ふよ」

松吉はさう言ひながら再び歩き出した。

「さうね。さうだわね」

しげ子もさう言ひながら素なほについて歩いた。

「……でも、」しげ子は十歩ほど歩いてから言ひ出した「でも、私、ルビーの指輪を一つ欲しいわよ。——前にあつたのが無くなつたのですもの。——お母さんと湯ケ原へ行つてゐた時、お母さんが無くなる前の年なのよ。そこの宿屋で指輪が見えなくなつたの。——やつぱりルビーで。十六かそこらの時お父さんが大阪からお土産に下さつたのよ。——自分の不注意から紛失したのだからつて、そのままにしたけれど。——さうだわ（さう言つてしげ子はちよつとためらひ氣味に）ちやうどあなたから始めてお話があつたところなのね。ルビーの指輪を見ると……」

歩きながらしげ子は話した。それは、囁くやうに息せわしさうに言つたせいか小娘のやうな話ぶりであつた。しげ子はもう少し話したかつた。けれども夫がただいい加減返事をするだけで滿足に相手になつてくれないのに氣がついた。さうして見上げると、夫は不機嫌さうな顔つきをしてゐる。しげ子は自分があの指輪を買ひたがつてゐるのだと夫に思はれたのかも知れないと考へると、[illegible]

松吉は、しかし、さうではなかつたのだ。松吉はしげ子の話を聞き入つてゐた。聞き入りながら、さうして時々さつきの指輪の嵌まつてゐる或る手をちらちらと目の前に見た。——それは白い手である。柔な手である。長い指である。ペンを輕く持つてゐる。

——しげ子の手が五年むかしだつてこれほど美しかつたらうか？……

目の前に甘美を浮べて、心の底で苦澁を味つてゐる。そこで松吉は沈んだ顔をしてものを言はない。

* * *

一週間ほど後であつた。

會計で月給を受取つた松吉は胸算用をしながら、階段をゆつくり下りた。松吉は、今度の土曜から日曜へかけて會社の仲間が皆して利根川べりへ遊びに行くのを、自分だけやめるつもりでゐる。自分が當番幹事で自分が發議したのだがその當日前になつて急に用事が出來たことにするつもりでゐる。

階段を下りると屋外はかがやかな初夏であつた。

あれも今日からもうセルの着物を着てゐたつけ——そこで松吉はニツコリした。

松吉は急ぎ足で銀座の街を歩くといつかの日の寶石店へ這入つた。ちよつと氣怯れがしたやうではあつたが。

* * *

二日ほど後であつた。

三つになる子供の服を買ひに行つたしげ子は一時間ばかり經つて歸つて來た。それを子供に一度着せて見て安心すると丁寧にたたみ直しながら、しげ子は夫に言つた。

「あの指輪ね。この間のルビイの、誰か買つたと見えてもう無くなつてゐてよ」

「指輪?」松吉はさう言つたが驚いたやうでもありとぼけたやうでもあつた。それから言ひ直した「ああ、あの指輪か……。ウヰンドウに無いからと言つて賣れたとは限るものか。もう十日も經つてゐる。飾り直すかも知れないじやないか」松吉の聲は惱つてゐるやうであつた。それを松吉も氣がついたので默つてしまつた。その時電氣が來たものだから部屋のなかが急に明るくなつた。すると松吉は急に立上つて、とんとんと二階へ上つてしまつた。

しげ子は自分が何氣なく言ひ出したことで夫があんなに機嫌を惡くしたのを不思議に思ひながら、しばらくぼんやりとそこに座つてゐたが立ち上つて、子供を子守に背負はせると、自分はおそくなつた夕飯の用意を急ぎ出した。

郊外の貸家の安普請は電車が通りすぎてもちよつとした地震ぐらゐ搖れる。その不安な二階の窓に松吉は凭りかかつてゐる。その窓の下を泣く子をあやしながら子守が往つたり來たりする。重く曇つた夕空を見ながら喚き立てゝゐるのは松吉の子である。

今、松吉の目には二つの笑ひ顏が交々見えて來る。それは指輪の話を自分にしかけて自分がきげんを惡くした時に、自分の顏色を覗ひながらしげ子がいつもそんな時にはきまつてするあの意味のない笑ひ顏である。今日は夕闇のなかであつたから見えもしなかつたが、唇の片方だけがきゆつとくぼむ無理につとめるやうな笑顏である。そのさびしい笑ひが四五年前に松吉の心をどんなにひきつけたことか! もう一つの笑ひ顏は大きな桃色の花のやうに明るい――若々しい肩をセルの着物につつまれて、事務机の向ふから時時そつと松吉を見上げてはうつ向いたままで笑ふ……。そのあの女の輕くまるで弄ふやうにペンを持つた手のやはらかな指には昨日から大きなルビーの指輪がはまつてゐる。

そつと松吉に頼[illegible]買つた指輪のある手を松吉に見せながら、あの女はどんなに無邪氣に笑つ

たか！　それが松吉にはどんなに美しかつたか！……

松吉は思はずホツと溜息をした。二つの笑ひ顔――松吉の目に浮ぶ二つの笑ひ顔のそのどちらかが、せめてあんなに笑ひさへしなければまだいいのだ。いやいや、あの指輪をしげ子が見つけたのでなかつたらまだいくらかよかつたのだ！――自分はどうしてもつと外の指輪にしなかつたらう………。さうしてひとり呟いた――

「それにしても、あの指輪がそんなにしげ子の氣に入つてゐたのかなあ」

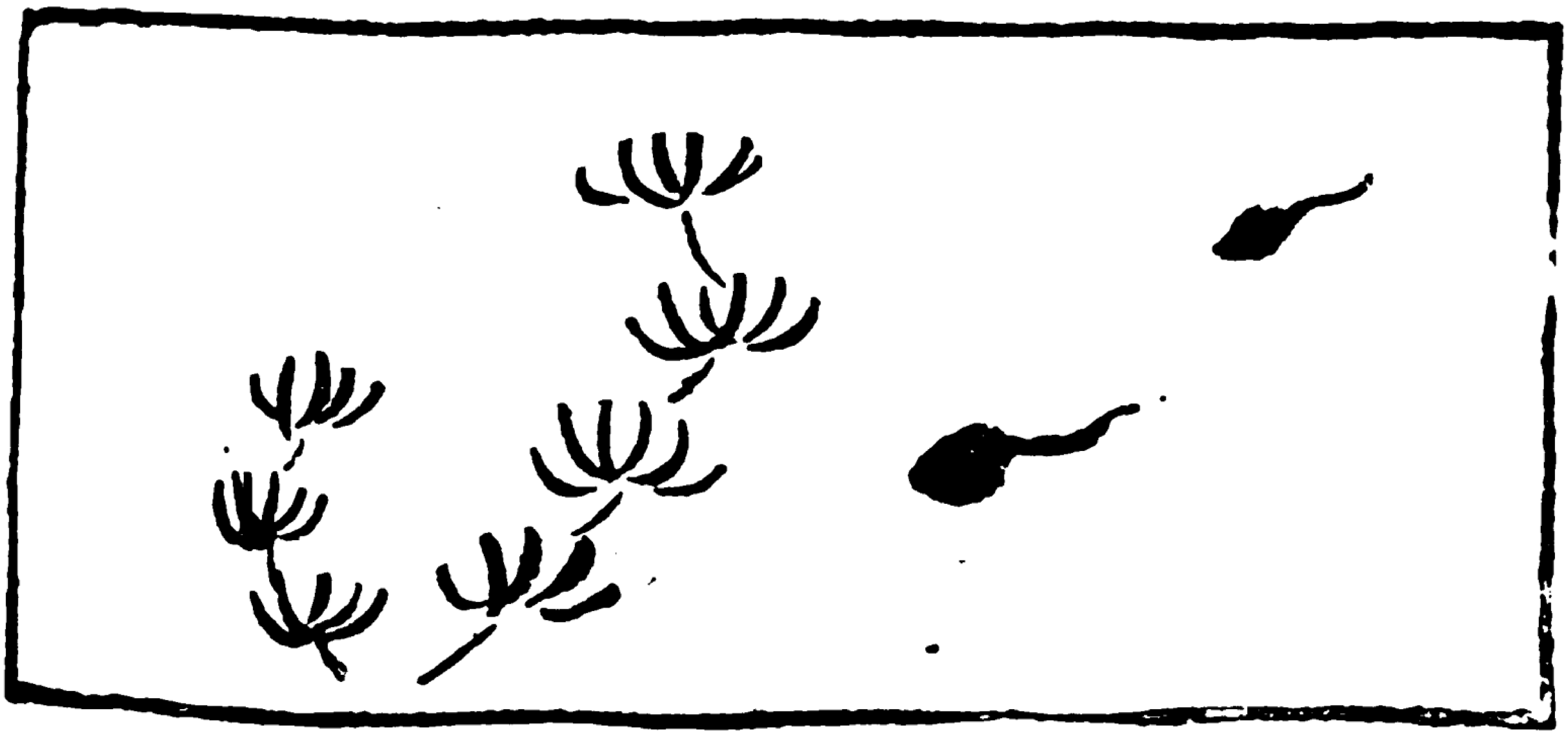
＊＊＊

川瀨松吉君。

君はまともな人だから、私が君を揶揄してゐると思ひはしないだらうが、ほんとうに私は君にも同情したい――台所で味氣なく火の番をしてゐる君の細君にはもとよりだが。

一たい神さまはどうして人間にからも一途でない心をくれたものか。川瀨松吉君若しわれわれのどちらかが神樣に逢ふやうなことがあつたら、一つそのことを尋ねて見ようではないか。

それに、一たい、嘘といふものは生育するものだ。一つの嘘を遂げる爲めには千の嘘を言はなければなるまい。これは全く手をへない建物だ。まあ考へても見たまへ。もう五六日もすれば君は仲間に向つて、急に持ち上つたさうしてのつぴきのならない一つの川作を案出しなければなるまい。さうしてそれの次には君は君の細君に利根川べりの宿屋の名や、さうしてもし細君がそれ以上に求めるなら、君は見たこともない水邊の初夏の景色を細描してみせることもしなければなるまい……。



無心

藤森成吉

1

「次郎さんが、今度桃山公爵の邸へ勤めるやうにおなりですッて――。」

十月の初めの或る日、田村がそとから歸つて來ると、細君のきん子が留守來たハガキを渡しながら云つた。

「ふむ、そうか。」

意外な氣もちがしながら、彼は、見馴れた拙い字の、細かくうすインキで書いた文面へ眼をうつした。

「拜啓、時下秋冷之候に御座候、御貴君樣御始め、御皆々樣御機嫌如何に候や伺上候也、小生事、長々御不沙汰に打過ぎ甚だ申譯之無、平に御愛顧下され度候。

此度、小生事三郎の世話にて、表記桃山公爵樣御邸内に勤務致すやう相成候間、何卒御休神下され度、いづれ御宅へ御伺致度心組に候へ共、新入りにて樣子も知ら申上、小生の上の人病氣にて引籠致し候次第、いづれ御面會之節も之有るべく候、

まづは長々御無音まで、御皆々様へ宜敷御傳へ下され度候也。　早々頓首。

二仲、小生事、殿樣の元にて西洋館掛り、朝は前四時半より六時半餘迄かゝり、(殿樣は六時半目覺め也)又前九時より十一時半迄、午後又同四時より五時迄掃除致し候、此の時間中面會デキヌ、又時間なき時は御面會デキルなり、一寸御申上候。

急字不禮。なほ夜番カチカチ〳〵有り、三回づゝ三日置き有り。ヨイは十一時、十二時、前一時の三回、アケは、二時三時四時三回、是れが三日置きに、交り番こに參り候、一廻り廿五分掛り候、一廻り六錢也、安い。」

「なんだ、小使に入つたんだな。」

田村は、誤字だらけの、いつ見ても讀みにくい、一種獨特の奇體な報告の文句をやつと讀み了へると呟いた。

「そうなんでせう。」

きん子は、急に吹られたやうに笑ひ出した。

「とうとう小使になツちまつたのか、まだあの年をして――だが結構だ、まアそうやつてひとりで食べてさへ行けりやあ。」

田村は、遠くその姿を思ひやるやうな眼つきをした…………。

次郎は、今年まだやつと四十になるやならずの働き盛りだつた、田村の故郷の生家の貧乏な別家の次男だつたが、彼の今までの生涯は、まつたく一種の悲喜劇の連續だつた――。

家の暮しが不自由な爲め、彼は十幾つでもう東京へ丁稚奉公に出された。先きは、當時下谷の一角に眞ツ黒く塗つた家を構へて、屋根の上へ高い時計臺を聳えさせた、東京名物の一つに數へられたほどの大時計屋だつた、そこで十何年

間、彼はつゞけさまに時計の仕事を見習つた、が、そのうちに、主人がまだ小さい後取りを殘して病死し、寡婦と番頭の手で家の中が次第に掻き廻され、そこへ市區改正で、さしも名を賣つた長年の場所も追ひ立てられなければならないやうなハメになつて、それだけの大身代が、わづか二三年のあいだにバタ／＼と衰運に向つた、つゞいて店を閉じて、家族は市外に靜かなしもたや暮しをし、店員達はみんなバラ／＼に離散して了つた、次郎も、その時暇を貰つて國へ歸つた。

が、元來頭の力が少し足りない、愚鈍と丁寧一方で勤めて來てゐた彼には、腕の方も未熟なら、手當も澤山は貰つてゐなかつた、暫くは兄の太郎夫婦の家でぶら／＼して、親類や知り合ひの家の時計の修繕をしたり、自分で獨立の店を出す費用を田村の家へ頼んだりしてゐたが、そのうち次第に持ち金も兄夫婦達の乏しいくらしへ注ぎ込んだりして、やがて彼は又もとの一文無しに返つた、

その時、丁度嫂の實家が東京近傍の大森で體操學校をやつてゐたが、その一人娘との縁談がいゝ工合にまとまつて、彼は再び東京へ出て入り婿になつた。

が、わづか半年も經たないうちに、彼の役に立たない人物が舅姑や當の娘に見すかされて、彼はその家を出されて國へ舞ひ戻らなければいけないやうになつた、——その後、長いあいだ、たゞ兄夫婦の家に居候をしてゐたのち、彼は今度は、二里ばかり離れた村の母親の實家の醫者の家へ、手傳ひかた／＼厄介になることに定つた、そうして、極善良な田舎醫者の叔父のもとで、藥局の藥を調合したり、療治の助手をしたりしたが、彼自身はそう云ふ仕事に少しの滿足も感じなかつた。

彼の一生の望みは、どうかして、小さい時分から習ひ覺えた時計の仕事で、小規模にでも獨立して一家を立てたい、と云

ふとだつた。人の評判には頓着なく、彼は自分の技倆にかけては充分の自信を持つてゐた、叔父の家庭の中で、彼は何遍となく田村の父親——彼に取つて唯一の金主と思はれる——へ向つて長い〱手紙を書いた、一番小さな時計屋から、自分のほんとうの滿足の行く時計店まで、彼はほとんど何十も何百もの空想を描いて、いろんな器械やら、飾りつけやら、……屋賃やら自分の一月の食料まで、長い細かい表に作つて、自分の現在の生活の不平と一緒に、繰り返し繰り返し田村の父親へ訴えた。

が、父親の方は、彼の腕にどうしても信用を置かなかつた、今まで試しに彼に修繕させた時計は、どれもこれも結果が思はしくなかつた、何度やりかへさせても、すぐ又狂つたり、もとどほり針が止つて了つたりした。

「どうも此の、やつぱ器械が揃つてゐましねえで。」

そのたんびに、次郎は云ひわけをして、又コツ〱いぢくりなほした。

「又、わけのわからねえ長え手紙をよこした、ふんとに、ありやあ時計狂えだ。」

おしまひには、もう父親は碌々よみもせずに、すつかり彼を「時計狂一扱ひにして了つた、外の親類の連中も、次郎の長い手紙と云へば誰知らぬ者もない笑ひ話の一つにした。

二年足らずの後、とう〱又次郎は叔父の家を出て、長いこと兄夫婦の澤山の子供の守なぞをしながら厄介になつたが、そのあいだに、當時新宿の乾物屋の番頭の弟の三郎へ何度となく又長い手紙を書いて、その世話で又々東京へのぼつて行つた、そうして、望みがかなつて、銀座の或る時計貴金屬商の店へ勤めることになつた。

電車通りへ向つた、古い狹い暑苦しい二階の土藏部屋の中で、彼は外の職人達と机を並べながら、毎日一日ぢう細かい時計の仕事をした、夜はその同じ土藏に泊つて、夕方たゞ一寸日比谷公園あたりまで散歩に行つて來られる位な、單

調な騒々しい生活で、給料もほんの僅かに過ぎなかつたが、然し彼は、自分が職工をいぢくつてゐられることだけでひどく滿足した、そうして、休み日には新宿の弟の家へ遊びに行つたり、小石川の田村の家へ出かけて御馳走になつたりして、久しぶりでたのしい日夜を送つてゐた、が、その切角のよろこびも束の間だつた、仕事が上手でないと云ふ理由で、半年ばかりで彼は又店から暇を出されて了つた。

再び國へも歸れず——又歸りたくもなかつた次郎は、それなり三郎の家へ同居して、又小さな姪達の子守りをし始めた、が、困つたことには、太郎夫婦の家とはちがつて、今度は彼と三郎の女房のおさととのあいだがどうしてもうまく行かなかつた。

おさとは昔川向藝妓をしてゐて、その頃三郎と馴染みになつて世帶を持つた位の女だけあつて、ひどく勝氣で、おまけに口汚かつた、どこか半分拔けたやうな、動作の緩漫な、無職の義理の兄が、狹い長屋の中へ子供達と同居するやうになると、彼女は恐ろしく神經を高ぶらせた、そうして、何かと云へば彼を目の敵にして突ツかゝつた。

次郎は又次郎で、たしかに惡かつた。元來氣不精な性質のところへ持つて來て、長いあいだの乏しい生活の爲めに、彼は妙に意地穢くケチ臭い所がしみツついてゐた、厄介になつてゐながら、彼は自分の稼ぎためたわづかな給金はすつかり別にしてくらした、あまい物も酒も、すべて飲み食ひする物は呆れるほどいくらでもいけたが、子供やおさとには構はず、彼はよくひとりでぶらりとそとへ出て、買ひ喰ひしたり、寄席へ行つたり芝居を見物したりして廻つた、が、その歸りに、小さな姪達へ硃すツぽ土産物も買つて來てはやらなかつた、——芝居を見る時でも、彼はわざ〳〵安芝居の一等へ行つた、それは、少しは金がかゝつても、氣もちのいゝ席へ掛けるばかりか、いろんな景物が出る爲めだつた、く[illegible]寄席だの、[illegible]芝居を見られた上こんなお土産物を買へるのが何よりのたのしみで、彼はい

つも引ッぱられて行くのだッた、そう云つた調子が、ひどくおさととの仲を險惡にしたのだつた。

その二人の不和に、三郎はすつかり手古摺つた、身勝手な兄のやりかたには彼も不快な氣もちがしたが、いくら何でも、兄であつて見ればそう強くも云へなかつた、そこを、又少しも斟酌なく、面と向つて、まるで穀潰しのやうに兄へ食つてかゝる女房を見ると、彼はどうしていゝか途方にくれて了つた、いろ／＼外に働き口も探して見たが、あんまり丈夫でない次郎の身體や、又その半人分の能力を考へると、これと云ふ仕事は何も見つからなかつた、そのあげくが、とうとう持てあまして、彼は又ひとまづ次郎を國の兄夫婦のもとへ送りかへした。

國で、再び散々兄達に厄介をかけてから、彼はやつと兄達の骨折りで、町から一里ばかり離れた或る驛の銀行の支店へ勤めることになつた、それから二年足らず、毎日平凡に彼はその道のりを家から通つてゐたが、そのうちに、――中年の戀とでも云ふか――ふとその宿の茶盆子(私娼の土地名)に熱くなり始めて、百圓あまりの銀行の金をひそかに費ひはたした、それが間もなく銀行へ知れて、危く刑事沙汰にまでなりかゝつたのを、やつと兄達の力で詫びがかなつて、が、それなり銀行の方はお拂ひ箱になつて、彼は又前どほり兄の家で何もせずにごろ／＼とくらすやうになつた。

狹い故郷でそう云ふ不面目を惹き起したことが、又たゞでさへ貧乏で苦しんでゐる兄達に、思ひがけない負擔をかけるやうになつたことが、再び廣い東京へのぼる氣もちに、彼の心を燃えあがらせた、何遍となく又三郎へ手紙を出したり、專門學校の講師の田村あたりへも、方面ちがひの時計屋の口やら保證人やらを散々頼んだりしたあげく、この夏の終りに、とう／＼三郎の家をたよつて彼は四度目に東京へ出て來たのだッた、が、以前と同じやうに、勿論――殊にこの不景氣に――彼に取つて恰好の職なぞがありやうがなかつた。

一度三郎に連れられて、彼は相變らず痩せた貧相な顏つきをしながら、田村の家へ挨拶かた／＼訪ねて來たこともあ

つたが、それなりどうなつたか少しも彼の消息を知らずに、今まで田村夫婦は過して來てゐたのだつた――。

「いつか、一つ様子を見に行つて來やうか。」

「前三時書、朝七時發、……桃山公爵御邸内、小林次郎、」などゝ念入りに表へごた／＼書き込んである字をよみかへしながら、田村は呟いた。

2

そのまんまいろんな用事に追はれて田村が訪れずにゐると、丁度二月ばかり經つて十二月初めの日に、又次郎から長い手紙が田村宛て「親展」で屆いた。

「拜啓、時下寒氣相增し候處、御尊君樣御初め御皆々樣には益々御壯健に遊ばされ候段、一大賀至極奉存候、さて、小生事無事勤務罷在候間、御休心下された度候也、御尊宅へ御參上致し、御願度事之有候へ共、色々と用事にて不參仕り甚だ申譯之無く候也。

實は國方にて、兄上義去月初め頃より身體へ「アセカ」（ハシカの誤り）樣の御デキ出來、毎日病院へ參り居り候由小生へ借用金申參り候間、月々五六圓づゝ平均國の方へ送金致し居り候次第に候、その爲め、却つて自分の身の方不足にて、今は御皆々樣の入用の月に御座候へ共、何分御同情之段御願申上候。

小生毎日着用のシャツ、モモ引の着換も之無候次第にて、西洋館の掃除に參り候も、ゴコゴレ候物を着用デキズ、決して無駄に使ひ候には之無、小生もケンヤク致し居り候次第、助けると思ひ御貸用金の義御願申上候也、返金之義、近き日數に一圓る、月々に返金致すべく候。

小生月給は、今月より貳拾圓に上給に相成り候、今迄十七圓五十錢にて居り候次第にて、此の上はのぼりも致さず、何年にても同様の由に候也。

一、買物入用品は、食事魚及青物代御下り物入れて、月に七圓かゝり候。

一、米は御下り入れて貳圓五十錢かゝり候。

一、外に、小づかひ錢湯錢月に八拾錢かゝり候。

一、外足袋シャツ、一足及び一枚づゝ入用に候。

一、是れより寒氣相増し候故、エリマキ、手袋、モモ引、その外入用に候、右之次第申上候。

三郎へ借用致し居り候殘金貳圓之有候間、本年中渡し度考へに候、是れも雇入の際にて、色々買物にて三郎より借用致し候次第に御座候也、御尊君様へ右之通り申上候は、甚だ恐縮の至りに御座候へ共、一寸貳拾圓位入用に付、何卒々々御愛願の程御願申上候。

二伸。病氣にて三日間臥すデキ候へ共、四日目より離雇の次第に付、自分の身が大切々々。風病にかゝらぬ様に致さされば、務めもデキヌなり、賓に御邸にても、仲々ハクゾウに候也、寒くもふせぐ外之無、御尊君様へ申上度くは山々に候へ共、まづは長文に付御止め、後便申上候、御奥方様に、宜しく御願申上候也」。

「ハクゾウ？………何の事だらう」。

粗末な洋紙を大幅帳のやうに長く二つ折りにして、ビツシリ兩面へ書きつめた二枚の手紙をよみ終つて、田村は傍の細君にゆびさした。

「きつと、『薄情』ッてことなんでせう」。

「あゝ、さうか、——なるほど、こりやあ如何にも薄情な郎だなあ、三日だけは捨てゝおいてもいゝが、四日目になつたらもう追ひ出すんだツて。おどろいた處だね」。

田村は憤慨したやうに云つた。

「今時、ほんとに珍しう御座んすわね」。

きん子もびつくりしたやうに應じた。

「だが、とう／＼云つて來たな」。

「お金？」。

今までの次郎の調子から推して、いつかきつと借金を頼んで來るだらうと考へてゐた田村は、思はず苦笑した。

「うむ、何を云つてるんだかわかりやしない」。

そう云つたなり、田村はその手紙をうツちやつて了つた、彼には、どうしてもその手紙がそのまんまに信じられなかつた——。

月末でもあれば格別、今給金の入つたばかりの筈の月初めに、そんな依頼をして來ることが第一彼にはおかしい氣がした、その次ぎに、これと云つて特別な入要の件もないのが腑に落ちなかつた、手紙の文句にあるとほりの質素な衣食住とすれば、たとへ國へ金を送るにしたところで、どうにか次郎はその給金でくらして行ける筈だつた、三郎への借金なぞまで、自分が立て替へる義理はないとも田村は思つた、よしその外に防寒具に金がかゝるとしても、彼の一月分の給料をも越すやうな金を云つてよこすとは………。

が、そんな事よりもツと重大な、根本的な金についての不信用を、彼は次郎に對して心に抱いてゐた。

それは、例の次郎の銀行金費消問題についてだつた。

丁度その年の春、田村の祖母が死んだ爲め、彼は久しぶりで國へ歸つて行つたが、その時、彼は父親からその一寸前に起つた事件の話を詳しく聞かされた、――父親の言葉によると、當時次郎は泣きながら、二百圓ばかり銀行の金を使ひの途中でなくして了つたから、一時貸してくれ、と云つて父親へすがりついて來たそうだつた、兄の太郎も一緒になつて、涙をこぼしながら頼んだ、始終商賈で金を扱ひつけてゐる父親は、が、さすがにきかずに、もう一遍よく調べて見ろ、とすゝめた、ところが、とう／＼まもなく、實は次郎が茶盆子に入れあげたので、決して金を落したりしたわけでないことがわかつた、然かもその費ひ込みは、二百圓ではなく、百二三十圓だと云ふことまで知れた。

「ふんとに呆れ返つた奴さ、うそばツかゝ、おまけにそれだけ吹ツかけて來たど、――ありやア今まで、八分（馬鹿）は八分でも、正直なうそなんずは決して云へねえ性分かと思つてたら、うそもうそ自分の道樂の尾拭ひを人にさせやうツて云ふだで、呆れてものも云へねえぢやアねえか、又、太郎も太郎さ、ありやアいくら年をとつても、たゞ人がいゝばつかで、次郎からそんな嘘八百をつかれて、ほんきになつて一緒にうちへ泣いて頼みに來るツちうだでまア如何にも揃つた兄弟さ」。

詫びはしたものゝ、それ以來面目を失つて本家へ足を踏み入れられずにゐたのを、祖母の死によつて思ひがけなく呼びやつて來て向ふの部屋にゐる次郎と、兄の太郎とを、父親は顎でしやくひながら田村に語つた。

「ほう、――そう云やあ、その時分僕んところへも、次郎さ、（さん）から長い手紙をよこしました」。

田村は云ひ出した。

「何か、お前んところへも云つてやつたか」。

父親はおどろいたやうにたづねた。

「えゝ、今家の屋根が漏つたり、疊かすつかりくさつて了つて、もうどうにも住めなくなつて了つたから、その屋根替きやら疊替へやら家の修繕やらの費用に、どうか二百圓ばかり貸してくれないか、何なら百五十圓でもいゝ、一時貸しておいてさへくれりやあ、あと月賦で拂ふ、一たい兄が書く筈だけれども、今病氣で寢てゐるから、假りに自分が代つて書くが、これはどうかお父さんへは絶對内密にしてくれ、ツて云ふやうな手紙でした、どうも様子が少し變ですし、それにその時金の持ち合はせもなかつたもんですから、僕もついことはつて了ひましたが……」。

何もそんな話まで持ち出す必要はない、と直ぐ心の中で考へながら、云ひ出したキッカケでとう〳〵田村はしやべつて了つた。

「ふむ、東京へまでそんなことを云つてやつたか、そりやあ、いよ〳〵以ておどろいたもんだ」。

「實際、今太郎さの家は困つてることはわかつてゐますから、僕もよつぽどその時何とかしやうかと思つたんですが、その使ひ込みの金の始末は、で、どうなりましたか？」。

田村はきゝ返した。

「それがさ、どうにも困つたあげくが、やつと銀行へ頼んで示談にして貰つて、昇（太郎の總領息子）の會社から貰ふ給料で、これから月賦にして埋めて行くツちうことになつてゐるんだ、つまり、今まで家へくらしに入れてた昇の給料を、みんなそつちの方へ費ふだで、別家おちやさこれから除計困るわけさ、何てふんとに仕方のねえ奴だかさ」。

父親は苦々しそうに、まるで噛んではき出すやうに語つた——。

以前からの三郎の話などによつて、次郎の善良な性質に弱さの混つてゐることは、田村もそれとなく知つてゐた、お

この父親の話は、彼に取つてもかなり意外だつた、その半年餘り前の父親との對話の記憶が、今の次郎の手紙によつて再びハツキリと彼の頭へ呼び起されて來たのだツた。

「今度も亦その手紙かも知れない」。

今まで長年のあいだたび〳〵次郎の無心に應じて來た自分の人のよさと一緒に、田村はどうしても一度そう思はずにはゐられなかつた、が、實際の理由はとにかく、今の次郎がかなり金に不自由してゐるだらうことはやつぱり確かな氣がした。

「然し、十圓もやりやあ澤山だ、――いつか訪ねて見やうと思つて延び〳〵になつてゐたとこだから、御歳暮代りに近いうちにそれだけ持つて、一つ行つて來てやらう」。

彼は思ひかへしてひとり言をした。

3

それから一週間足らず經つた或る風の強い日の午後、田村はひとりで家を出て、久しぶりに赤坂行きの電車へ乘り込んだ、そうして葵橋で降りると、かねて次郎から敎へられてゐた道筋を辿つて、桃山公爵の邸の前へ着いた。

それは、門前の芝生の上へあちこち傘松の生ひ茂つた、見るからに廣々とした大きな邸構へだつた、一まはり見廻しても、どこに小門があるやら見當のつかない田村は、少し變な氣もちがしながら、――日本風に眞黑く塗つた、端に青銅の飾りをくツつけた大きな立派な門をくゞツた。

「一寸伺ひますが、この中に、小林さんて方がいらツしやいますか」。

硝子戸をめぐらした門衛の建物の入口へ寄つて、中にゐる洋服姿の老人に彼はきいた。
「小林？――それは、こゝで働いてる人ですか」。
割合柔和な眼つきの白い髮の老人は、不審さうにきゝ返した。
「さうです」。
「そんなら、向ふの通用門の方へいらツしやい、此の堀のずツと左にあります、そこを入つた小使部屋できくとわかりますから」。
「どうも………」。
思はず赤面して、彼は一寸頭をさげるといそいで廣い砂利道を引ツ返して、堀の曲つて右の方を眺め廻した、と、一際枝をひろげた傘松のうしろに、前の正門とは似てもつかないケチな、同じやうに黒く塗つた門の開いた口を見つけた。
彼は苦笑しながら、松のあいだの小徑を縫つてその小門へ近づいた、入ると、よごれた二枚の障子の立たツた、粗末な小使部屋の建物がすぐとくツついて立つてゐた。
「一寸伺ひます、小林さんて方がおいでゝすか」。
おもての格子戸をあけて、彼は前と同じやうに聲をかけた。
「へえ、私が左樣ですが――」。
と、思ひがけなくすぐと中で返事がして、がさごそと起きあがるやうな物音がして、やがて障子が押しあけられた、次郎が古ぼけた寢衣風の着物を着て、そこへ突ツ立つてゐた。
「やあ」。

「おや、こりやア……よくおいでゝ」。
二人は一緒に聲をかけ合つた。
「どなたかと思ひましたら、――どうぞまアおあがりなすつて」。
次郎はつゞけた。
「いゝんですか」。
何だかごた〳〵してゐるらしい室の様子を次郎の身體のあいだから覗ひながら、田村は一寸躊躇した。
「いんえ、へえちつとも構ひましねえ」。
圍の方の書類をまるだしにしながら、次郎は着物を取りつくろつて先きへ立つた。
もうかなり古くすり切れた疊の上へあがると、田村はすぐそこの大きな火鉢の傍へ寄つて、先刻から默つてその横へ立て膝をして二人の様子を眺めてゐる、消防衣を着込んだ、年配の「頭」風の一人の男へ挨拶した。それから、室ぢうをぐる〳〵見廻した。
それは一種異様な室だつた。――床も何もない八疊敷きの一間の中に、まだ午後の二時をいくらか廻つた時刻なのにまるで眞夜中でゝもあるやうに、寢床が四つも敷きツ放してあつた。對ひ手の押し入れらしい襖寄りに三ツ、前手の、大火鉢の並びに一ツ、……その向ふ側の眞中の寢床に、今まで次郎は寢てゐたらしかつた。
「構ひませんよ、どうかそのまゝに」。
田村がとめるのもきかず、何か口の中でぶつぶつ云ひながら、次郎はのろくさと、そのよごれた、薄い、洗ひざらされて半分色の消えかゝつた青い唐草模様の――勿論敷布も何もない客の煎餅蒲團をまくりあげたり、同じやうによごれ

た固そうな枕を片づけたり、寝衣を普通の着物に着換へたりし始めた。

決して、次郎の寝道具だけが見すぼらしいわけではなかつた、そこに敷き並べられてある限りの寝床が、みんな同じ程度によごれて、薄く、みじめだつた、そのうちの一人は、――それは硬そうな髮を短く刈つた、如何にもガッシリした丈夫そうな恰好の頭の若者だつたが、それツきりなのか、一枚の綿の覗きかゝつた短い蒲團を柏餅にして、窮屈そうに身體をちゞめて、くる〳〵と大きな蓑蟲のやうにころがつてゐた、誰も彼もがさも疲れはてたやうな、睡そうな、が外のひツきりなしの電車の音やら、いろんな昔日中の物音やらでよく眠れない、と云つた荒んだ様子をして寝倒れてゐた、例の若者は、時々フウと牛のやうな息をつきながら、かぶつた首を柏餅から出したり、又猫の子のやうに引ツ込めたりした、次郎の寝床を隔てゝ反對の隅へ寝てゐる中年の男は、又まるで瘋癲病院の患者のやうな、間を置いては絶えず低い聲で何か寝言を呟いてゐた、火鉢の横手の、頭の半分胡麻鹽になつた老人は、さも寝つかれなくて困つたと云つたやうに、微かに溜め息をついたり、眼をつぶつたまゝ寝返り打つたりしてゐた。

そのめい〳〵の枕もとへかけて、煙草入れやら、薄鼠色の木綿の三尺帶やら、よごれた足袋やら、何枚かの新聞やらが亂雜に取り散らかされてゐた。

思ひがけない光景を見出した氣がして、田村はなほまはりへ眼を移した。

おもての塀に遮られた、暗い狹い、便所を控えて樹も稜もない庭の側の障子と、あかり口とを除いて、外は壁も襖も一杯ベタ〳〵洋紙で貼りくるめられてゐた。フランスあたりの動物雑誌の古表紙らしい青い文句刷りの紙、魚類や鳥類や獣類や、あらゆる動物の形を、あんまり高級でない色刷りで一枚へ三四疋づゝ現はした標本圖の紙、明治初年時分の戰爭らしい、長髮に陣羽織の軍人が、采配をふるつて砲煙の中へ突い立つてゐる武者繪、明治三四十年代の物かと思は

れる、軍隊調練や、仰々しい觀兵式の彩色畫、……そんな繪が、何の順序もなくごた／＼と貼り交ぜられて、一樣にすゝけ古びて、飾りどころか、餘計室のみじめさを添へる爲めに役立つてゐた。

ふと、その中の一枚の一きは大版の子供繪に、田村は眼線を惹きつけられた、――それは、「桃太郎凱旋圖」とでも云ひたいやうな彩色活版刷りだつた。

型のやうな、爺さん婆さん桃太郎の三人が主にして描き出されてゐたが、變つてゐるのは、その三人の服裝だつた、如何にも酒と美食で肥つたらしい、血色のいゝ、成金らしい――も一つ年に似ず大分女好きらしい爺さんは、フロツクコートを着込んで、俗惡な太い金鎖をそのチョッキのあいだから覗かせてゐた、婆さんは、愛國婦人會幹事とでも云つた恰好に、ちやんと丸髮に結つて白襟紋服のいでたちで、爺さんと並んで床の間へ坐つてゐた、その年寄達の前へ、黑い水兵服を着た、五分刈り頭の小桃太郎が、あだかも學校から歸つて「只今」でもしてゐる小學生のやうな兩手をついてお辭儀をしてゐた。三人の現代式な姿に似合はず、赤珊瑚や小判やかくれ蓑や小槌などの寶物がその眞中の式臺の上へは、堆高く古風に結納のやうに積まれてゐた。

「おどろいたな………」。

それを眺めて、田村は思はず苦笑した、前のいろんな繪からも、彼はすぐと、此の邸の主人の公爵が、かつて二十年フランスへ見學に行つてゐた事があり、日淸日露の兩戰役で勇名を鳴らした豫備陸軍大將なことを連想してゐた、が、この一枚の官僚や軍閥や財閥の露骨な幼稚な表現とでも云つたやうな繪は、當の小使部屋のあはれな空氣と一緒に公爵邸の全部をそのまんま見せつけたやうな氣もちに彼をさせた。

「どうも御不沙汰ばつか致しまして」。

——（無心）——

やつと着換へを濟まして、次郎は火鉢の向ふへ坐つて挨拶した。

「僕もおたづねしようと思つてながら……」。

「お宅では、皆さんお變りもありましねえか」。

次郎はよく物が云へない爲めに痩せた貧相な頬を痙攣らせるやうな顔つきをしながら、ほそい力のないを眼を瞬かせた。

「ありがとう」。

「左様で、……私も、このうち（何でもこのと云ふ合の手を入れることが彼の一つの癖だつた、）あがらゝうあがらうと思ひながら、何しろ時間々々の勤めで、それにおくれるとやつぱいけましねえで、お宅へは仲々電車へ乗つても道が御座いますし、ついへえ申わけねえ御不沙汰をしました」。

火鉢には、赤い炭がどん〳〵おこつて、何が物でも焼く用意の爲めか掛け渡した金網の上へは、大鐵瓶がブツ〳〵と威勢よく白い湯氣を噴き、又傍の盤の上へは、うすよごれた湯呑みが二つばかり置いてあるにもかゝはらず、別に茶を淹れやうともする樣子もなく、次郎はぼんやりしやべつた。

「おや――」。

その時、門の方へ馬か何か這入つて來る物音をきゝつけて、今までもじ〳〵縁を打つてゐた老人がいきなり飛び起きて、障子をあけてそとへ飛び出して行つたが、何を二言三言云つて馬を返すと、田村の方は見向もせずに黙つて又もとの寝床の中へもぐり込んだ。

「皆さん、夜番で疲れてらつしやるんですか」。

その様子を見ながら、田村は低い低でたづねた。

「左樣で――此の前手紙で申しあげましたやうに、何しろこの交る〴〵夜拍子木を叩いて廻らなけりやアいけましねえもんだで―。

「あ、せんだつては手紙をどうも、……御返事もあげなくつて―。

「いんえ、私こそあがらなきやアいけねえとこを、へえふんとに御不沙汰を致しまして―。

同じやうに、何遍となく次郎は不沙汰の詫びを繰り返した。

「今御用はありませんか、――お暇だつたら、一寸出かけませんか―。

相手の手持ち不沙汰な恰好と、落ちつかない室の樣子を見て、田村は云ひ出した、こゝでは話も出來ない、と思ふと一緒に、眠れなくてもじ〳〵してゐる周圍の人間達への遠慮も考へられた。もう一つ、さつきから別に新聞をよむでも煙草を吸ふでもなく、たゞ立て膝のまんま、口一つきかずに不愛想な調子で火鉢へあたつてゐる消防着の男が、田村には妙に不氣味に感じられた。

「左樣で、……おやあ御一緒にまゐります、もし〳〵、あの、あなた。」

一寸躊躇したのち、次郎はいきなり傍の寢てゐる老人の夜具へ手をかけて、呼び起した。

「ちよつと、これから出かけて來ますで、どうかあと……―。

「え?、あゝ、そうですか―。

半分死にかゝつたやうなぼやけた聲で、老人は一寸眼をあけて答へた。

古い鳥打をかぶつた次郎と一緒に、相變らず默つてゐる消防衣の男に挨拶して、田村はその陰氣な息のつまるような

屋を出た。

4

「今の人が部屋の取締りで御座います」。

桧のあいだを通り抜けながら、次郎が話しかけた。

「ほう、あの消防のハッピを着た男が？」。

「いんえ、今私の頼んで來ました年取つた人が、——あの半纏を着た人の方は、始終御邸へ出入りする仕事師の頭で御座います。今、私を入れて丁度十人働く人がありますが、そのうち、三人はコックさんの方の手傳をしますで、掃除や夜番の方は、まア七人ちうわけで御座います、その外に、時々臨時の人夫を雇ひますが、その頭があの人で」。

「七人の——その人達がただ掃除や夜番だけやつてるんですか」。

びつくりして田村はきいた。

「へえ、左樣で……、何しろこの、お邸がとても廣いですでね、へ、へ、へ。」

次郎は、人數の多さや邸の廣さにひどく得意を感じでもしたやうに笑ひ出しながら、

「朝は、おそくても四時にやアへえみんな起きます、それから六時半まで掃除をしたり、ストオヴへ火をたきつけたり致します、そのあとで朝飯をたべて、九時から又十一時半まで、これがざつと二時間半ばかり、朝の分の殘りをします、何しろ全體で西洋間の數だけでも十二もありますで、これに廊下たんかは、みんなピカピカ光る位え艶を引きますだで、ひ、ひ、ひ、ひ、——これから午すぎは、四時から五時まで又一時間、あとの掃除をやります。掃除の方は、まあ朝

れりやアそんなに苦しくもありましねえが、夜番の方が仲々骨で御座います、三日おきに、ヨイとアケと六度づつ柏子木を叩いて……」。

「ああ、そりやアもう知つてます、だが、何て恐ろしい念入りな掃除と、嚴重な用心だらう」。

馬鹿丁寧に繰り返さうとする次郎を遮つて、田村はあきれたやうに云つた。

「左様で、……始終お客や宴會がありますが、この時は又特別に掃除をいたします。この二十日ごろから、又殿様がたはみんな國府津の別邸へ御避寒になりますが、そのあとで、年内一杯毎日大掃除をするだつちう話で御座います、……そんな時は室や廊下のペンキ塗りの板なんぞは、みんなシヤボンをつけて奇麗に洗ふだツちひます、まるでへえ人間の身體見たやうで、ひ、ひ」。

「おどろいたな。」

電車道を、次郎と肩を並べて歩きながら、田村は再び呟いた。――年の暮近い冬空はよく晴れて、オレンヂがかつた日の色が街の上へうすさびしく溢れてゐたが、風が強い爲めに、あつちでもこつちでも廣い坂道の上へは白いすさまじい埃の旋風が捲きあがつてゐた、田村の近眼鏡もインバネスも、忽ちその細い土煙で薄白くなつて行き出した。」

「これで、殿様も仲々ハクソウで御座います」。

ひどく油が乘つて來たやうに、次郎はその埃の中で舌の廻らないやうなおしやべりをつゞけた。

「カチカチやつて廻ると、三度でどうしても一時間半はかかりますが、手當は、これで六錢きりで御座いますでねえ、それに病氣んなつても、四日寢りやあ、へえすぐと保證人を呼んで引き渡すツちう定めになつてゐます、そんなに長く寢てゐると、部屋が狹いで、外の者の迷惑になるでツてお邸ぢやあ云ふそうです」。

「馬鹿にしてゐね、それで手當は與れるんですか」。
「いんえ、そんなもんは一文も貰へましねえ、………だで、これが病氣になつたら大變で御座います、——これからだんだん寒くなりますで、もし夜番の時風邪でも引いたらと思つて、それが一番心配になります、もう一つ心配なことは、掃除の時うツかり粗忽をしねえやうにと、これがへえいつも氣になつて困ります、何しろ御居間でも座敷でも廣間でも、みんな私達が手分けをして掃除しますだで、そん中の立派な瓶やガラスの器物なんかにも一々ハタキをかけますが、もし間違つてどれか壞しでもしたもんなら、すぐとお金を取られたうへ出されるツちひますで、——あの小使部屋のうしろに事務所がありますが、そこで毎日そんなことを調べてゐます、そう云ふ病氣や間違ひばツかでなく、あれはどうもよく働かねえの、これは云ふことを聞かねえの、ツてもし事務所の方から殿樣の方へでも云つて行きやあ、やつぱへえお暇が出ることになつております、いつそうやつて首になるかわかりましねえもんだで、みんなどうしても、かうして働いても落ちつきましねえ、始終もしかの時の働き口を考へておかなけりやアいけましねえし、おまけに給料も安し、窮屈も窮屈なり、………部屋の人は、みんな私見たやうな獨り者ばつかで御座います、獨り者か、——そうででなけりやあ、夫婦者でも一緒に住んでゐることは許しましねえだで」。
「ほう」。
「だで、へえ何もたのしみがありましねえ、今んところ、二十圓以上取つてる人はあの取締りツきりで御座います、やつぱ獨り者で、今年六十二になりますが、へえ二十年もゐますで特別に三十何圓だか貰つてるツちひます、——でもまア、お蔭さまで取締りは大へん私に同情してくれて、小林さん見たやうな方は、こんな處にゐちやアほんとに惜しいもんだ、ここにゐちやあ先きに何のたのしみもなし、いつそ今のうち、どツかもつといい處へ行つちやアどうだ、なん

て、こんなにいつも親切に云つてくれます、が、私は、いんえ、へえ結構ですでツて、何でもないやうな顔つきをして、云はれるとほり何でもハイハイつて働いております、いい按配に、事務所の方でもみんな氣に入つてくれて、殿様も信用して下さつてるそうで、私もまアよろこんでおります」。

訴えと得意と安心をごたごたに混ね合はせたやうに、次郎は語つた。

「そうですか」。

もしかしたら、その取締りの言葉は婉曲に彼に辭職を勸告してゐるのではないか、——話の途中にそう思ひながら、田村は思はず次郎にかくれて溜息をついた、いろいろ不平を訴えながら、やつぱりその虐げてゐる人間達の中に一生懸命自分に對する好意をさがして、ひとりでよろこんだり、心を休めたりしてゐる「使はれてゐるのあはれさ人間」が、泌々と彼の胸を打つたのだつた。

「事務所には、今三人宮内省から來ておりますが、それがお邸へ入る物もみんな調べます、だもんで、出入りの商人達とすつかりぐるになつて、どんな納め物でも殘らず上前をはねますで、そとで七錢の魚なら、中ぢやアきつと十四錢にやアなります、私達が安い給金を貰つて働いてる反對に、あの人達ア何も苦勞もしずに、ほんとにいい金儲けをやらかしております。——そう云つても、何しろまあ上様のお下りや女中部屋からの廻し物がありますで、外とちがつて私達も割合金はかかりましねえ、煮炊きの道具は、一揃いあの部屋のうしろの唐紙の中にあつて、誰でも勝手に使へるやうになつておりますが、御飯を炊くなんちう事あ、まア月に數へる位ツきりありましねえ」。

「ふむ」。

おやあ、せんだつこの手紙はやつぱり半分うそたのだ、——自分のあはれな誇りと正直さから問はず語りをする彼

を眺めて、一方すつかり同情に打ち負かされながら、田村は冷かに考へた。

「ただ、時々部屋の附き合ひがありまして、この時にやア、やつぱ自分一人退けるツちうわけにも行きましねえで、これが可成りかかります」。

「附き合ひツて?」。

「いんえ、大抵金を出し合つて、菓子でも買つて來て食べるだけですが、何しろたびたびだもんですで、——もつとも、お酒も表向きはいけねえことになつておりますが、なア に騒がずに飲む分にやあ、大目に見ることになつてゐますで、時々はみんなで買つて來てやります、何しろ、ほかにたのしみツちうもんがありましねえだで、ひ、ひ、ひ、ひ、」。

「次郎さん、ちよツと入つてお茶でも飲みませう」。

いつか電車通りからそれて、あまり廣くない道の兩側に靜かな店の並んだ街へ入つて行つた時、夢中に雄辯をふるつてゐる次郎を田村は遮つた。そうして、新しく店構へを造りつけたらしい、「しるこ、餅菓子」などと、磨り硝子へ赤く書いた紙を貼りつけた、小奇麗な一軒の菓子屋の戸をガラガラ押しあけた。

「あなたは、あまい物は何でも好きでしたね」。

新しい、氣もちのいいテエブルを狹んで、次郎と對ひ合つて椅子へ腰をおろしながら田村はきいた。

「いんえ、へえどうかないお構ひなして」。

一緒に腰をかけながら、半分ドキマギしたやうに、半分わざとらしく次郎は遠慮した。

「ちやあ、お汁粉を二つ、お菓子を二皿下さい」

仕事場とのあいだの小さな紺暖簾を掻きわけて茶を運んで來た亭主へ、すぐと田村は注文した。
「もし、ほんとにどうかへえ御心配下さらねえで、………そんねにやア、私アとてもいけましねえで」。
亭主が引ッ込むと、次郎は再びことはり出した。
「まあ遠慮はやめて下さい」。
苦笑しながら、田村は濃い熱い茶を一口のんだ。
「切角おいで下さつたに、お茶もあげられましねえで反つて――」。
次郎はくどくど繰り返した。
「實はせんだつてのお手紙ですがね」。
今日やつて來た用事を、田村はその時初めて切り出した。
「正直にお話すると、どうも僕にやあ腑に落ちないんです、それでつい御返事もあげなかつたんです」。
「左様で………」
キョトンとしながら、次郎は黄色いしなびれた顔を急に赧くした。
「遠慮なく云ひますが、月末でもあれば格別、今は月初めで、あなただツてまだ給金を貰ひなさつたばかりでせう、それに、特別何か澤山金の費るやうな御話もなし。」
田村はぢつと次郎の顔を見つめた。
「左様で………いんえ、へえほんとに飛んだ御心配をかけまして、――あの時、實はよく申しあげツと思ひましたが、何しろ手紙ぢやアあんまり長くもなりますし、それに御知りのとほり、一向思ふことがうまく書けましねえもんだ

で、ひ、ひ、ひ、」。

何かにまぎらかすやうに次郎は笑ひ出した。

「まア、あがりながら話して下さい」。

運ばれた菓子皿を田村はすすめた。

「どうも、——實はあがつてお話しづかとも思ひましたが、やつぱごたごたいろんな用がありまして、……いんえいつもなら兄さんとこへ這つてやつても、まだ一二間はどうかかうか殘りますが、今度は一寸しだことで、急に「十圓の債券を一枚買ひましたもんだで、それでへえ金が足りなくなつてあんなことを申しあげたやうなわけで、どうかへえ惡くお思ひ下さらずに」。

次郎は詫びるやうに、閙く赤く、滑かさうに頂邊のひろく禿げた頭をさげた。

「え?、債券を?——」。

ひつくりして田村はきき返した。

「へえ、國庫債券でものは確かですし、おまけに籤がついてゐますもんだで、今少し無理をして買つておいても、もしうまく籤が當つたらとつい考へまして」。

「ほう、そりやアおどろいたな、なら、なぜそうとハッキリ書いて下さらなかつたんです」。

「行つて申しあげツと思つてゐながら、やつぱ何だかこの、そんなことは云ひにくいもんですで、ひ、ひ、」。

「で、そいつはいくらの期限です?」。

「二十年で御座います、籤はつかぢゃアなく、この上利子が年に五十錢づつ附くことになつております」。

「二十年で五十錢？何て馬鹿な事をするんです」。

聞けば聞くほど馬鹿々々しくなつて來て、思はず田村はどなり出した。

「ぢやあ、籤よりほか何の目當もないぢやアありませんか、——そりやあ何をなさらうと、あなたはあなた、僕は僕それがいいの悪いのツてことは僕は云やアしません、だが、そんな小さな慾に釣られて、それも金でも有り餘つてゐるんなら格別、ひとから借金してまで債劵を買はうなんてなあ、あんまり考へがちがつてゐすぎやアしませんか」。

「ほんとに左樣で御座います、いんえ、私も買つてからすぐ、こりやあ飛んだ間ちがひをしたと思ひましたけんど……

……」。

「ほんとうに大間ちがひですよ、——もう濟んだことは取り返しのしやうもないが、これからは、そんな馬鹿げた事はよしちやアどうです」。

七つ八つ自分の方が年下ながら、田村はこの後の爲めにもと、思ひ切つてピシピシつづけた。

「いんえ、これからはへえ、私もこんなことは決して致しましねえ、どうかまア悪くお取り下さらねえで、——すぐ賣り拂つちまはづかとも思ひましたが、何しろこの、一寸買手も見つかりましねえし、そうかツて質屋へ持つて行きやあ、たかだか七圓位ッきりよこさねえツちうもんですでね」。

如何にも濟まなそうに、次郎は又すなほにちよッと禿げた頭をさげた。

「そうですか、ぢやあ、ここにこれだけ持つてますから、これはお歳暮代りにあなたへあげます、取つておいて下さい」。

かねて用意して來た十圓紙幣一枚を、その時田村は懐の蟇口の中から取り出した。

「いんえ、今度はへえ又私も何とか致しますで。………」。

あはてたやうに、次郎はその折つた黒ずんだ紙幣を押し戻しかけた。

「そんなことを云はずに、わづかなもんですから、それだけはどうか取つて下さい」。

田村はかさねて押しつけた。

「左様で、――そんぢやあ、へ、へえ切角の御志ですで、仰るとほり當分御預りいたします」。

「なアに、僕の方は別に要りやアしないから、もし又あなたがうんと金でも入つたら返して下さい」。

田村は戯談らしく云つた。

「左様で、――ほんとに申しわけありましねえ」。

「お待ち遠さま」。

その時、亭主が赤い輪のついた汁粉の黒椀を盆へのせて運んで來た。

「あア、それからお土産に――さうですね、一つ五十錢ばかり餅菓子をつつんで下さい」。

次郎の同じ部屋仲間へ持つて行かせやう、と考へて、田村は亭主へ頼んだ。

「は、かしこありました、………お茶をお變へ致しませうか、ア、こりやアつい火鉢へ火も入れないで。」

その注文の言葉で、今までやや冷淡だつた亭主は、急に愛嬌よくお世辭をふりまきながら、「どうかへえお構ひなく」

などと飛んだ遠慮を云ふ次郎に構はずに、空の茶碗を盆へのせて立つて行つた。

「實は――」

紙幣をシヤツのかくしへ入れて、汁粉をすすつたり、自分の分の菓子はみんな平らげて田村の分まですすめられるま

ま食べたりしながら、不意に次郎は云ひだした。

「今度の債券は私あ餘儀なえ事情で買ひました。やつぱ同じ仲間の人が、先月の眞ん中ごろ一晩吉原へ遊びに行きましたが、それが家をあけたことが事務所へ知れて、へえすぐとお拂ひ箱にされちまひました、無論、手當も何も出ましねえもんだで、貯金はなし、その人はすつかり困つて、丁度今債券を一枚買つて持つてるが、誰かそりよを買つて金にしてくれめえか、つて云ひましてね、みんなに頼んだあげく、私んとこへやつて來て、小林さん、どうか一つ自分を助けると思つて買つてくりやう、つて泣きつくでせう、わしも金アねえがつて一旦はことはりましたけんど、あるだけ貸してくれりやアあとは月末でもいいでつて、たつて頼みますもんだで、何しろ同じ飯をたべた仲間のことでもあり、私も氣の毒になりまして、そんぢやアツちツてつい八圓で買つてあげました、お邸でもあんまりハクゾウですで、私も餘計見てゐられなくなりまして、どうもそれ、自分で困つてゐるくせにやつぱ人の困つてるとこを見てえるとどうにも堪ててておけねえ性分ですで、ひ、ひ、ひ、……そうしたら、涙をこぼして御禮を云ひました。」

「ほう、そんな債券なんですか、で、あとみんな拂つたんですか、」

意外な言葉に、田村は思はず身體を乘り出した。

「左樣で、——だで、書いてあるのは十圓でも、ふんとは拂つた分は八圓で御座います、……けんど、そこへ頼まれましてね、その人が云ふにやア、まだどうしても金が足りねえで、今一足、まだ買つてたつた一度お女郎買ひへ穿いて行つたつきりの福助足袋があるが、それもついでに買つてくれめえか、つて、こんなに云ひませう、穿いて見ると丁度いい工合に合ひますもんだで、私もどうせこれから一足位は要りますし、又助けてやる氣になつてそんぢやあ新しい位の價段でもいいでつちツて、ついへえ一遍に思ひがけね散財をやりまして、ひ、ひ、ひ、ひ、」

御馳走されたり金を貰つたりしながら、なほいい加減な金高を云つてゐてはどうしても氣が濟まないと云つたやうに思ひ切つたやうに、次郎は御禮と詫びの氣もちをこめてしやべつた。

「ふむ、なぜ、そんならそうと初めから正直に打ち明けないんです、そう云ふことだたら、もつと何とか早くしてあげるとこだつたに、」

腹立たしいやうな氣もちと一緒に、田村はすつかり感動させられて詰つた、――何と云ふあはれな生活と同時に、心からの相互扶助だらう、何と云ふ、うそと入り混つた美と善良さだらう、たとへ彼の氣もちに、彼獨特の卑しさや慾や醜さが加はつてゐるにしても、そんな物をすつかり帳消しにしてまだ餘る人間の根本的な精神が、ちやんとそこに根を張つてゐる……………。

「いんえ、へ、へえあまり身のほどを知らねえ人間だと、お思はれ申す氣がしましたもんだで――」

詰責と親切にドキマギさせられて、次郎は申しわけらしく又笑ひ出した。

「實際、上へ行くほど不人情だな、」

一旦に湧きあがつて來た同情と一緒に、田村は深く自分の不人情な態度をふりかへさせられて呟いた、――そんなに乏しい中からでも、彼等はみんな血の出るやうな身錢を切つて助け合つてゐるのだ。なのに自分は?、わづかの無心を氣らくに出し惜しんで、おまけに相手に權突を喰はせたり、說教したりしてゐる自分は……彼は、對手の前へ打ちのめされたやうな氣分になつた。

「ふんとに左樣で、――これが商賣屋だと、どんなにらくで安心だか知れねえ、つてみんな仲間の人も云つてます、お邸なんちうと、名前は如何にもよう御座いますが、中は人一倍ひどいだで呆れつちまひます、」

次郎は感ちがひして再び愚痴をこぼした、

「そう云へば、もうそろそろ時間ぢやアないかしら、」

急に氣づいて、田村は時計を探そうとして店の中をキョロキョロ見廻した。

「いんえ、時計は私持つております、」

次郎はその樣子を見て、早速帶のあいだから安つぽい大きなニツケル製の時計を取り出した。

「何時です？」

「丁度、四時二十分前で御座います、」

「ぢやあ、もう歸らなくちやアいけませんね、もしもし」

田村はすぐと亭主を呼んで、次郎がすつかり食べて了つた菓子や汁粉を一緒に、土産物の包みの代を彿つた、そうして、亭主と同じやうに「ありがとう存じます、」などと馬鹿丁寧に返辭をかへす次郎を連れて、おもてへ出た。

「ぢやあこれ、わづかだけれど、部屋の仲間の人達へお土産に持つてツて下さい、それから、今お金がないが、すぐあとからシヤツや股引や襟卷きなんかを一揃ひ、きん子に見計らつて買つて送らせますからね、そいつを着て、精々風邪を引かないやうにおしなさい、」

もう日が屋根のうしろへ寒く傾いて、相變らず強い風のピユウピユウ吹きまくつてゐる蒼ざめた莽の街をやや急ぎ足に歩きながら、田村はやさしく傍の次郎に云つた。

「いんえ、へえこれだけでも飛んだ御厄介をかけましたで、」

次郎はびつくりしたやうにことはつた。

「なアに、身體にゃあ替へられやアしない、これからいよいよ寒くなるから、もし夜番の時薄着して風邪でも引き込んだら、それこそ大變ですからね、」

「ふんとに、今んところ身體が何よりの資本ですでね、ひ、ひ、ひ、」

やや耻かしそうに次郎は笑つた。

「ぢやアお大事に、……又暇ん時、遊びにやつておいでなさい、」

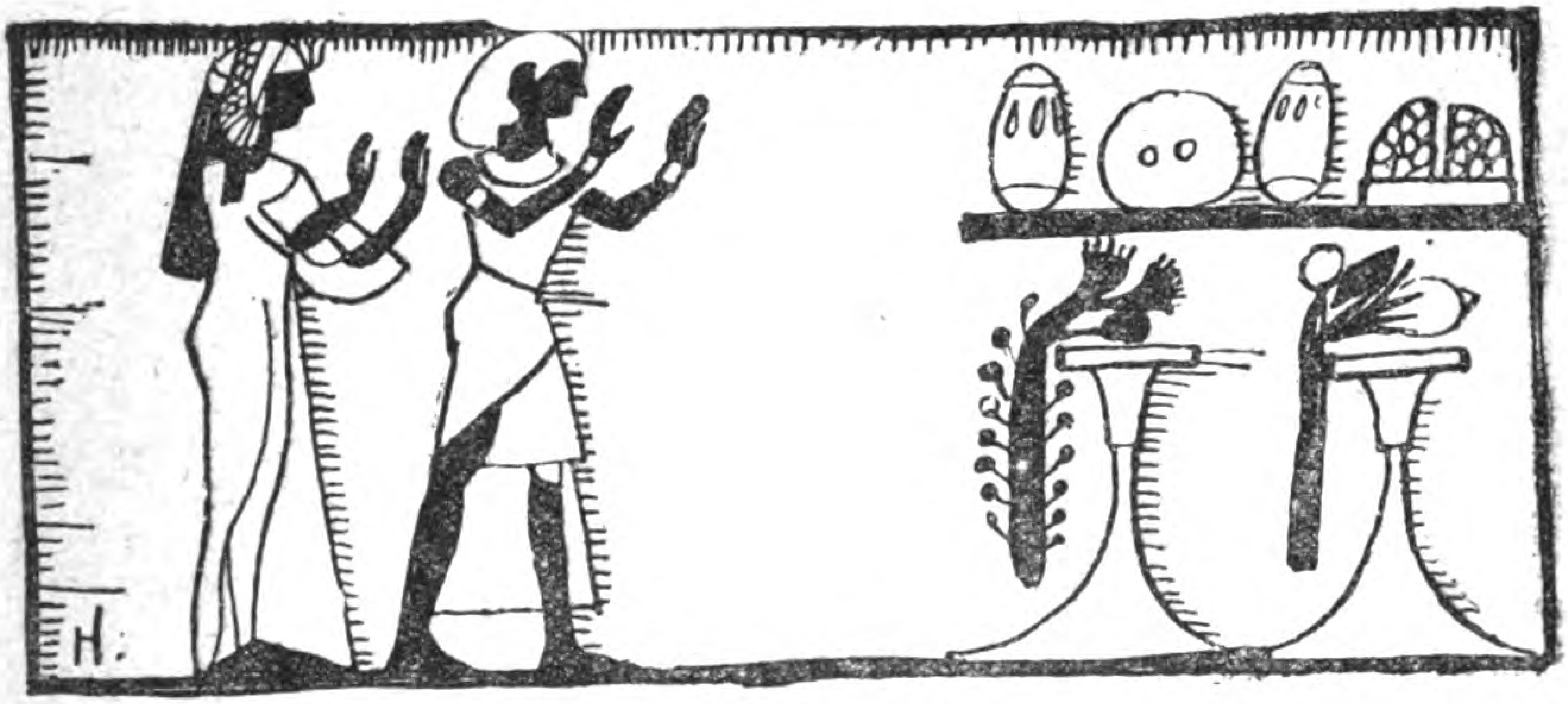
再び前の電車の停留場まで歩いて來た時、田村は立ちどまつて別れの挨拶をした。

「どうも、いろいろとありがとう存じました、皆様にもよろしく仰つて……、」

次郎は丁寧に頭をさげて、彼と別れてひとりで、そこからもう遠くない公爵邸の裏手の坂道をあがつて行つた。

薄寒い夕日にわづかに照らされながら、白ッぽい砂煙につつまれてとぼとぼと猫背に背中を曲げてのぼつてゆく彼のうしろ姿を眺めて、ある沁々とした氣もちに打たれながら——向ふから來た電車も忘れて、——田村はぢつとむせッぽい埃の中に立ちつくした。

（12・6）



最後に一番大切なもの

武林無想庵

低い線路が高い線路と交叉して、その下の穹窿をば、スル〳〵とかい潜つて出る淺緑の雨に萌えた草土手の上と下と、雁行して各四條宛、その上を走る往復の車窓が、しツきりなし、見上げ見下ろす。さうした睨み合ひの姿のまゝで、まだ幾鎖(チエーン)か一寸協調の餘地も見込みもない途中ながら、高い方は高いまゝに、低い方も低いまゝに、不平等のまゝに、天然自然の需要供給上、不可抗的に乘降客が殺到して、是非に及ばず、おのづと築き上げられて了つたやうな、不用意に、調子外れに、ゴタ〳〵と層なり合つた、プラットフオムまでが變に二階立の、上段下段兩頭を有する二重停車場……そこで降りた。

又候、一臺しきや、爰でもあいにく俥がゐなかつたが、どうシヤレる氣になつても、まさか三人一緒にとは、さすがに云へもしなかつたので、論なく、若いのだけ先へやる。殘つた二人は、ぬかるみを拾ひ〳〵、徒歩でユツクリと跡からゆく。

すべてが候補者。幌の中なは花嫁の候補者。足駄でつゞいたは、姑の候補者。舅

段の候補者。さうしてこの三候補者の何れもつく也にと云つて、たとへ喧聞な三人世を立てられるにしても、出來るだけ人々の…そし　…當前な、コンヴェンショナルな、世間並な、即ち月下氷人の……

が、この際、たゞ一言、これ迄虚偽も、虚偽でも、また虚…甚だしく混亂を極めてゐても、要するに、人間の耳の鼓膜を震動させて、「厭だ！」と、たゞ一言、私が…つ、さうハッキリと言ひ漏れたとしたら、どうであらう？…… hated! hated! ……かうした一切の候補者達に、怨み吹き消される燭の焔のやうに、跡方もなく煙と化して、恐らく闇中に四散し去つて了つたであらう…… had been! had been!……

私は厭だとは云はなかつた。むしろ云へなかつたのであらう……内心厭であるなしに拘らず、なほそれ以上の我所に我々所に執着すべく、歯をムキ出して、白眼して、所謂風俗習慣に反抗すべく、私の四十年の孤獨生活は、あまりに多く淋しすぎて了つてゐたからであらう。一歩進めば、狂死か、悶死か、その外にはもう、到底たへきれなくなつてゐたからであらう。

代々木のT氏の應接間には、十年前、まだ木口の生々しかつた頃、一兩度訪問して通された事がある。いろ〳〵と御馳走にまでなつて、髮の毛の黒かつた主人公と岩野泡鳴との間に交換された、花々しい徹底自然主義論をば、耳の痛くなるほどきかされた覺えさへある。

自然主義とは果してどういふものなのか、今もつて私にはよく分らないが、分らないうちに、もうよツぽど以前から人々はそんな言葉も問題もオクビにすら持出さうとはしなくなつて了つてゐた。その筈だ。應接間の木口は黒くなつてT氏の髮の毛が白くなつて、事もあらうに、恰も弱味にでも附込んだやうに、當の自然主義自身からは、背つて無慈

悲に、殘酷に、勿論完膚なく、さんざんに冷笑され、愚弄されたところの、月並の、世間並の、形式的の、所謂舊時代そのものゝ權化なる、結婚披露式の媒酌者に立つてくれなどゝ、弟子と稱する、後輩と稱する、女性男性の妖怪どもから、臆面もなく懇願に及ばれる時勢にまで、世はいつのまにか進化だか退化だか、とにかく長足の展開を敢へてして了つた後だもの……

これが思ひきつて厭だと云へなかつた結果だ。

――式だとか、披露だとか、そんな事は問題ぢやない……そんな事は、要するに、どうだつてかまはないのだ……たゞお互ひの愛の深さ如何が問ひたいだけだ……二人とも、今日迄恐らく他から愛されてばかりゐて、自分達の方からは徹底的に他を愛した事などは、察するところ、まだ一度もなかつたらうと思ふから、問題は、つまり、その一點にかゝつてゐるわけだ……愛の價値は愛する側にある。愛せられる側にない……たとへ永遠に報ゐられる機會のない愛にしても、愛すれば愛するほど……と、T氏の言葉は次第にこの頃書く氏の文章と同じやうになる。

が、それはそれとして、披露式をやると云ふのなら、無論出席して、媒酌者の地位にでもなんでも、快く立つてくれる、といふ言質を得て、三候補者はいそいそと引退る。

――Tさんは、相變らずTさんらしいわね……ほんとにいゝ人ねえ……いつお目にかゝつても……

――齒のぬけた口で、『生殖は終つた。』なんて、大眞面目で云つてたね……が、あれでゐて、先生、やツぱり二十代と同じ心持で、どこまでもセンチメンタルな戀愛の謳歌者でもあり、憧憬者でもあるんだから、全く嬉しいよ。

――でも、憎らしくもあつたわ、一寸…ほんの一寸だけれど……

——憎らしいッ誰が？

——Tさんがサ。

——なぜね？

——だつて、あなたと私とは、さも〳〵段違ひの人間のやうな、それこそ提灯に釣鐘だと云はんばかりの口振だつたぢやありませんか？

——へえ？そんな事を云つてたかね？

——云つてたわよ。

——たとへば？

——そら……あなたの方はいくら私を棄てゝも置いてきぼりを食はしてもかまはないけれど、私の方はあくまでもシツカリと縋りついて、たとへどんな事が起らうと、決して〳〵放れてはいけない、ツて云つたでせう？

——が、ありや、先生自身の叙情詩サ……つまり、何サ……要するに、一度封建教育を受けたものゝ、それからはどうしても脱却しきれない、妙にストイツクじみた、漢學じみた、武士道じみた、何となく昔形氣なところサ。年と共にだん〳〵と、上州は館林の郷士で厶るといふ、四角四面の、堅忍不抜の、律氣一遍の、立志傳中の、爭はれない先生の木地が現はれて來たところサ。有難いところサ。

——私にとつちや、あんまり有難くもないけれど……でも、正直のところ、實は私も、Tさんに云はれるまでもなくはじめツから、その覺悟でゐるんだわ……だから……

——だから？

——だから、いくらあなたが來てようとしたつて、逃げようとしたつて、どうしたつて駄目よ。恐ろしい女の一念で草を分けても、きつと探し出さずにや置かないから、とつ捉まへて放しやしないから……

——さうサ。蛇になつて釣鐘を溶ろかす一念サ。かねに恨みが數々ござるサ。我輩の懐ろを多少なりと纏まつた金の通過する見込みがある間だけサ。

——さう云はれて了やア、さうかも知れない………が、まア、長い目で見てゐて下さい………

——見てゐるとも………我輩は女が好きだからね………

——どうだか………

——好きだけれど、信じないよ。絶對に信じないね。

——ぢやア、男なら信ずるの？

——男だつて信じないよ。要するに、人間が信じられないのサ。

——でも、あなただつて同じ人間ぢやありませんか？

——だから、信じられないのサ。

——御自分が、御自分でねえ？

——さうサ。

——さア、さういふ事になつて來ると、學問のない、薄ツぺらな私なんぞにやア、とても難かしくて、手がつけられなくなる。

——學問はさて置いてだ………生まれながらの御人體から、あんまり手なんかゞつけられさうな柄でも代物でもない

んだからね、お互ひにサ・

――ホヽホ、そりや大きにさうかも分らない………

――まア、成るやうに成つてゆくサ………ヘン、あしたの事が分るもんか………

と、さう、結局のところは、さう横着な、不貞腐れた高を括りながら、アナクレオン氣取の酒で誤魔化す。醉に乘じて、ヌラ〳〵した細滑慾のどん底にのたうち廻る。味覺と嗅覺と觸覺との、焦げ爛れるやうな、蒸し溶ろけるやうな、息づまる、胸ぐるしい快感をば、むしろ苦感をば、貪り得られるかぎり、堪能出來得るかぎり、ガジ〳〵と齒を咬み鳴らしつゝ、惑溺の極を盡す。鯛のアラ煮の骨までシャブる………さう、或は狗の枯骨を噛むやうに………

さうした息もたえ〴〵な、ぐだ〳〵な、眼のトロリとした、男女兩性の、和合佛のやうな、だらしのない淫魔どもの隙を狙つては、同番地の五百羅漢氏は、恰も自身その陶醉に共鳴しつゝあやかりつゝあるものゝやうに、やうなふりまでして、チョイ〳〵姿を示現しては、その都度、そのたび毎に、甚だ老巧な駄目を押してゆく。

――御尊父さんの方へは、委細貴公の御下命どほり、昨夜、正式に………と云ふのも、ヘ、ヘ、ちと大袈裟だが………とにかく、お察し申上げると、あながち冗談事でもお有りなさらないのだらうから、一應御通告して置きましたやうな次第で………だから、どうぞ、左樣御承知を………いづれ、御返事のあり次第、式のところは、改めて………いや、式もヘチマも、實は、あなた方新人にとつては、勿論、必要のない話にはきまつてゐるのだが、そこが、それ………何に致せ、所謂衆愚の世の中に於ける、卽ち世間の義理と稱する、甚だもつて愚劣な奴でナ………へヽへ、だから、まア、さういふ愚にもつかぬ事は、一切萬事この禿頭へなすりつけて置いて、置いて頂いて…

……あなた方はあなた方だけで、どうか、御隨意に、御存分に、但し愚老にだけは、なるべくお手柔らかに、どし〳〵自由行動をお取り下さらん事を、へゝへ、この通り、指を啣へて御願ひして置く次第なんで、………ヘッ！

と云つたやうな遺悔しきに………

――さア、さうきまつたら歸るぜ………いゝだらう？

――アラ、どこへよ？

――勿論、鵠沼へサ………何しろ地面の金が確實に手に這入らないうちは、あすこからは一寸動けないんだからね…

……二ケ月以上にもなるのに、まだ一文も入れてない始末だから、逃げ出したと思はれても困る。

――わかてつるわよ………私達が寄つてたかつて、あんまり蟲のいゝ事ばかり、づう〳〵しく持ちかけるので、それが煩くなつて、お歸りになるのよ………さうよ、わかつてるわよ………お察しゝてるわよ………だから、私、もうどうでもいゝの………籍が這入らうと這入るまいと、披露が出來ようと出來まいと、洋行になンぞ行けようと行けまいと、そんな事はもう問題でも何でもなくなつて了つてるのよ………たゞね………

――たゞ？

――ホヽホ、あなたの首ツ玉へ、シツカリとかぢりついて、あなたのゆくところへは　どこまでもくツついてゆくだけよ………Tさんの仰ツしやつたとほりにね………

――差支ないね、おぼし召さへあるならばだ………だから、籍を入れろと云ふなら、籍も入れるサ。披露式が、やりたいと云ふなら、披露式もやるサ。洋行へ一緒に連れて行けといふのなら、連れてもゆくサ……我輩にとつても、そん

な事は一向問題ぢやない………たゞ併しだ………

——たゞ？

——たゞ併し、我輩はもう死ぬまで、一生このまゝ放浪の旅をつゞける決心でゐるんだ………それさへ承知なら、厭になるまでついて來るサ………放浪中の道づれとしてだ………人生巡禮の同行としてだね………

——同行二人ね………願つたり協つたりよ………嬉しいわ。菅笠でも何でもかぶるわ。

——これがゼニさへフンダンにつゞくものとしたならばだ。さしづめ我々の後半生を貫いて、要するに、つまり、いはゞ新婚旅行の延長だけに終つて了はうといふわけなんだがね………

——結構だわ………新婚などゝは、臆面もなく、あんまり云はれた年でも柄でも、また義理でもなさゝうだけれど………、

——ところが、座して穏しく食らツてさへ山も空しだ。まして、そいつを、湯水のやうに撒きちらして歩かうツてんだから、數が知れてゐる………恐らく黄粱一睡どころか、半睡もむづかしからうよ………だから、結局、やはり、たゞのお先まツくらサ………

——それでいゝぢやないの。

——さうか。さう度胸がすわつてゐるんなら、何も改めて云ふがものはない………さア、行かう………

——行きませう。

口をきゝ出すと、この通り、忽ち隔意がなくなつて了ふ。が、默るが最後、人はお互ひに一人ぼツちだ。と、相手の心がわからなくなる。と、自分で自分の心にさへ、すぐこの次の瞬間には、果してどんな思ひがけない料簡が、とび出

して來るものやら、全く見當がつかなくなる。一切に對して自信がもてなくなる。一切が疑はしくなる。刻々不安でたまらなくなる。やるせなくなる。淋しくなる。恐ろしくなる。そこで、再び、止む事を得ず、口をきゝ出す……

──どこへ行かう？

──どこへでも。

──どこがいゝ？

──あなたの行らッしやるところなら……どこにかぎらず……

──鵠沼でもいゝかね？

──えゝ。

──ほんとかね？

──えゝ。

──でも、この間は、途中から逃げて歸つたぢやないか？

──もうこの間とはちがひます。

──ぢや、行かう。

──行きませう。

何だか、うまく、まんまと首尾よく、どうも一杯くつたやうな、手もなく引懸けられて了つたやうな、酒がさめると、そばからそんな氣ばかりがしきりに突ッつくので、汽車の中では、口さへ碌にきかなかつた。

この間とは打つて變つて、無論、自動車などは[illegible]、[illegible]こしを切り、よそ目には誰だか何だか分らぬほど、遙か先へ立ち、それでも切符だけは二人分買つて、ムッ[illegible]へ入る巧にあやつりの糸を繰つて、思ふ壺に引きはめ[illegible]男、女にバカ[illegible]しほらしいものだ。外面女菩薩、云ふまでもなく、内心の女夜叉が、ペロリと舌を出した姿だ。貞淑とはその事だ。

停留場から宿屋まで、暗い松林と別莊との間々を縫つて、直角に又直角に、一曲、二曲、三曲、四曲、十丁の上もある。終電車だから、無論伴はない。

××××さんとは、何遍この路を歩いたか分らないが、汗ばむ手と手を握り合つて、肩を抱へて、頬ずりして、五歩に一摟、十歩に一佇、×××××××××××××××××××××熱烈にガツ／＼と貪つたものだ。それがこの冷やかさ……

×さんが好きで、この女が嫌ひだと、さういふわけではさら／＼ない。我儘で、依怙地で、意地ばかり强くて、蟲がよくて、さうして思ひやりのない、愚かな男には、何もかもさらけ出して、どこまでもと跡を追つて來る女と、到底遊戯以上に出る氣遣ひのない、小心な、金持の、平凡な、併しどうしても自分の思ひどほりにはならぬ女と、その間の價値判斷が、きまりきつて、とかく轉倒しがちなものだ。

宿屋ではもう玄關の戸を閉めて、横手の帳場の電燈まで消して、どうやら殘らず寢静まつて了つてゐた。と、叩き起されて、ねぼけ眼をこすり／＼、思ひもよらぬ「お連れ樣」に、さうしてその「お連れ樣」の何人かに氣がつくと、仰天したのはお鹿さんだつた。

——どうだい、ビックリしたかね？

──いゝえ、別に……でも、まさか、こちら様が……

──やツぱりビツクリしたんぢやないか……誰だつてビツクリするサ。僕自身だツてビツクリしてる位なんだからネ……

──髷になンぞお結ひになつてるので、私はまたテツキリ……

──例の奥さんかと思つたのかネ？……お生憎様サ……かうした海千山千のバケモノを引張つて來たんでネ……

──アラ、そんなヒドイ事、おツしやるもんぢやありません！　と、平常に復すと、お鹿さんは早速ながらテキパキと、持前の肝高聲できめつける。

一夜明けると、さア、事だ！

何者のイタヅラか、よく／＼種の払底な時だと見え、社會面の目に立つところへ持つて行つて、大きく、例の蘆花さんに似てるとか寫眞師が媚びへつらつた、ザンギリ頭の、心持首をかしげた、いやに丸ツこい、變にヤニ下がつた、シカツメらしい顔をした、その頃からの一張羅の、大島ぞろひの、ブク／＼と、どう見てもソツクリそのまゝのプテイ・ブルジョア然と着ぶくれた私の寫眞が、業々しく、ケバ／＼しく、ある新聞へ掲載されてゐたといふ騒ぎだ……さすがに、ドキンとして、ひそかに胸を躍かしながら、前後の記事を讀んで見る。

──どうも驚いたね……順風耳、千里眼にかゝつちやア、とても助からない……へえ？　この七月には夫妻相携へて先づアメリカへ赴かれるんださうだ。さうしてシカゴなる氏の令妹を訪問せられる筈だとある……

──不思議だわねえ！　どうしてから早く何もかにも分ツちやツたんでせう？　私達の口からは洩れさうな筈はなし

…………洩れるとしたら…………

——Kがどこかで五百羅漢氏を捉まへて、何となく吐き出させたものサ…………が、かういふ風に好意をもつて書いてくれるなら、少々位事實相違してもかまはんね………とにかく、お互ひに名譽な事だ。禮狀を書いて出したい位だよ……

……

——お蔭樣で今日までの名譽恢復が出來たわ………Kさんといふ方、中々文章がうまいのね。

——どう、一つ、この記事の豫言どほり、七月には先づアメリカへ出かけるか？

——さうねえ！………でも、あたし、なんなら、いきなりズツとフランスへゆきたいわ。さうしてすツかり巴里ツ子になつた上で、それから妹さんにでも誰にでもお目にかゝりたいわ。

——ぢや、さうするサ。

お祝ひなんださうで、もりツ子まで交へた六七人の女中達を引率して、金澤八景へ汐干狩を奢らせられる。何かと云ふと、ちきに涙をこぼしたり、ペタリと廊下へ平伏して、板の間へ額をすりつけたり、さうした秘術を濫用するお神さんの、臆面のない、見え透いた、倂し却つて巧妙な外交手腕にかゝツちやア、いくらこツちがバケモノでも、お客樣としての盤面上、地の利が惡くて、どうものツぴきがならなくなる。殊にかうした機宜の尻尾を捉まへられて了つた上は

………

藤澤で頭數だけ靑切符を買ふと、

——アレ、勿體ない。あたし達は二等で澤山でしたのに。とお鹿さんがまづ、恰も衆意を代表したやうに、持越しの

世話女房ぶりを發揮する。

紳士、淑女、要するに服裝だけでさう呼びなしたブルジョア共の面前へ居並ぶと、到底一生かゝつても自分達の身には着け難い彼等のその服裝に壓倒されて、女中達は殘らず妙に固くなる。革命なしに階級撤廢を叫んでも無益な事は、この些細な温情主義の實驗に徵してもすぐ分る。

大船で乘換へて、逗子からは自働車、にぎ／＼しく二臺へ分乘して、前後相呼應する急速力……坂、杉林、丘陵、その頂きの日あたり、崖、櫻、だんだら畠、朽ちた石垣、筧の水、柳、藁屋、杏の花、砂ほこり……と、間もなく、干潟を前にした、頗る都會ばなれのした、古風な、閑雅な、シーンとして殆ど人氣のない宿屋へ着く。

鵠沼などゝは二世紀も時代がちがふ。

バラ／＼と小松の生へた、辨天の洞のある、その一角の荒蕪した突堤から　いよ／＼舟を出す段になつて、

——私だけ宿屋で待つてますわ……と、舟虫のはひまはる、朽木のやうにフツ／＼小孔の穿たれた石垣の上で、うそ寒さうな顏しながら、卒然として彼女が云ひ出す。

與に乘つてキヤツ／＼とハシヤいでゐた女中達が、云ひ合したやうに、忽ちピツタリと押默る。さうして一齊に怪訝にたへぬ目を瞠る。

私も少し案外な氣がしたので、

——なぜね？　と、思はず訊いて見る

——日にやけるのが厭だから……と、彼女の答は明白なものだ。さうして、

——それに、風でも引いたかして、少し寒氣もするしするから・・・と、この方が却へていゝ加減と見え、やゝ曖昧

に口籠る。

お鹿さんをはじめ、女中達は代る〳〵、しきりに同行を懇願したが、彼女は微笑を湛へたまゝ、何と云つても應じなかつた。恰も一旦口から外へ出した事は、理が非でも、決してあとへは引かぬといふ意氣込みさへ示しながら……ことほど左樣に、この際、色の黑くなるといふ事が、どうあつても、たとへ萬難を排しても、是非とも、避けずにはゐられなかつたほど、それほど容易ならさる、彼女にとつては、よく〳〵の一大事だつたものなのであらう……ことほど左樣に、『自己の容色をば、實際以上に、出來得るかぎり、より美しく人に見せたい』といふ、女性としての僞らさる本能をば、彼女は無意識に、無邪氣に、思はず赤裸々に告白して了つたものなのであらう……

『へえ、なるほどね……この女にして、やつぱりかつした、お孃樣然たる、天眞爛漫な、淸淨無垢の、人間らしい性格の一面もあつたんだナ……』と、人知れず、心の底だけで、私はソツと興をさへ催した。

干潟の間の、溝川のやうな、見る〳〵淺くなる引汐の中へ、ジヤリ〳〵と舟が出る。その舟の姿の見えずなるまで、反對に、舟から陸の眺められる方向が、全然轉換して了ふまで、それでも彼女は辨天の後ろの小松林の枝蔭に佇んでゐた。

豫定の場所で舟は泊る。女中達は手拭を冠つて、裾をまくつて、眞紅の或は鴇色の腰卷を潮風に翻かして、ハチきれるばかりに健康な、瑞々しい紗縮の裸脚をば惜しげもなく、ピチヤ〳〵と泥土の平原に委する。さうして老船頭の跡をついて、そこら中をホジクリかへしはじめる。汐が引いて、再び上げて來るまでの行樂だ。餘念のない彼等は、見るからにいかにも幸福さうであつた。

澪口の波打際まで、シガレットを咥へながら、水たまりをジャブ〳〵と、私はポカンとして唯一人、蟹のやうにさまよひ歩く。その蟹で思ひ出す……詩人石川啄木が、それ、東海の小島の磯の白砂か何かへ、ポタリ〳〵雫のやうな涙を流しながら、泣きぬれ泣きぬれ戯れたといふ、さう、その折からの蟹でゝもあるかのやうに……唯一人！……かうした樂しげな汐干狩の連中には加はりながら、そばからさういふ淋しい詩人を想ひ出したくなつて來るほど、それほどいつもひとりぼツちなのが、きまつて唯一人なのが、唯一人と感ぜざるを得なくなるのが、たゞ〳〵年中僻み根性の中にのみ生息しつゞけてゐる私の常なのだ……

アメリカへか歐洲へか、いづれ遠い〳〵海外へ赴くのであらうところの花やかな巨大な一大城廓のやうな客船が。すぐ澪口の外を通りすぎる。と、岬の蔭へその船の姿の隱れゝるまで、思はずジツと見送つてゐると、どうした加減か何の氣のない私の双眼から、不意にポロ〳〵と涙がこぼれ出た。センチメンタリズム！……

が、四十年の私の生活、それを一言に詮じつめて了つたら、その外には何が殘る？　何が？……

白河でもまだ夜船でもないのに、十二分にくたびれた女中達は、歸りの舟中では、大部分いゝ心持さうに、コクリ〳〵やつてゐた。辨天崎へ着いたのはたそがれ時で　もう干潟のかくれてゐる海に面した座敷々々には、うすぼけた田舍びた電燈が、陰氣くさくともりはじめてゐたが、酒は飲み放題の無禮講といふ夕飯の膳へ向ふと、彼等の元氣もどうやら再び勢づいて來る。

——この儘で歸るのは、何だかまだ勿體ないやうね……旦那、何處へ行つて見ませうよ……ねえ、連れてツて下

さいよ……と、一杯機嫌になると、私の事をば急に旦那々々と呼びはじめたお鐵さんが、眼をトロンとしてねだり出す。

——いゝ了見だ！ と、お鹿さんは例の金切聲を張りあげたが、決して不賛成ではなさゝうな顔だ。

——よし、行かう。ウム、横濱へ行かう。伊勢崎町へ行かう。そして活動を見よう。と、へゞレケになつた私は、論なくお調子に乘つてしまふ。

——アラ、嬉しい！

——バンザーイ！

——今夜はみんなで松ケ枝町へ押しかけてツて泊らない？

——一寸、活動は新派よ。よくて？

——いやよ。私は西洋ものよ。

自鳴器がテンデに勝手放題な熱を吹く。かうなると、宿屋の女中達だか、蕩兒を取卷いた藝妓どもだか、云つてゐる言葉だけきいてゐると、全く區別がつかなくなるほど、それほどほとんど同じやうな口をきく。

が、さすがはかうしたお附合には、とても既う辛抱がしきれなくなつたものゝやうに、彼女だけは、皆さんよりは一ト足お先へ御免を蒙つて、すぐ鵠沼へ歸らして貰ふと申し出る。自然の單純なる義理立から、女中達は二派に別れる。鵠沼黨と横濱黨とだ。が、さて、いよ／＼、ギリ／＼決着のところ、いざ大船で乘換へなければならぬ段になると、彼女を除いては、一人殘らず、とう／＼すべてが横濱へ出掛ける事にきまる。

横濱……勿論電燈と色彩との花やかな目まぐるしい、飾窓、商店、寄席、活動、キヤフエ、料理屋、さうした家の

東京ならば、銀座、淺草公園。大阪ならば、心齋橋、道頓堀千日前。京都ならば、四條通、新京極。北京ならば、前門（チエンメン）、大柵欄（ターチヤーラン）。南京ならば、秦淮（シンワイ）、夫子廟（フウシウミヤス）、上海ならば、大馬路（タマロ）、四馬路（スマロ）。巴里ならば、グラン・ブルヴアール。倫敦ならば、ピカデイリー。伯林ならば、ウンタア・デン・リンデン。羅馬ならば、コルソオ・ウムベルトオ。紐育ならば、ブロードウエイ……要するに、夜だけに限つて、不思議に人間を吸ひ寄せる、都會のうちの或る一定のサカリ場だ。さうして人間がたゞそこだけで、本當の意味に於ける人間らしく、やわらぎ、くつろぎ、興じ、浮かれ生活そのものに醉はうとしつゝある一郭だ。

鵠沼の宿屋に奴隸生活しつゝある女中達だつて、やつぱり同じ人間には相違はないのだから、たまには生活そのものに醉つても見たかろ………そこで、この機を逸せず、手近いところで、即ち、この、伊勢崎町となつたわけだ。

――勞働は生活でない。

マルクスか誰かの言だそうだが、全くだ。

遊ぶにかぎる。ブラ／＼と遊ぶにかぎる。さうして餘念もなく遊び得る間だけ、人間は纔に人間らしい生活を取戻す**のだ。**

が、餘念もなく遊び得るのは彼等だけであつて、私ではない。彼等に面白い事は、私にはサツパリ面白くない。面白くないばかりか、苦痛を感ずる事の方が多い。それゆえに、彼等とかうして行動を共にする事は、從つて私には、たゞ／＼苦痛を耐へるといふだけの一事に歸して了ふ。彼等がプロで、私がブルだから、といふ意味ではさら／＼ない。彼等が若し悉くブルであつたとしたら、私の苦痛は倘一層甚しいに相違ない。さうして到底こんな風にジツと辛抱などし

行列した、用事のない群集が、無意味にその前を往つたり來たり、徒らに時間を消しつゝある、たゞそれ夜だけに限つて、潑剌と復活する伊勢崎町の事だ。

てさへゐられないであらう……

尤箱根の權現のところが、深夜の月光でも示すやうな、不自然に誇張した着色法で、併しそれが爲に、却つていかにも新派悲劇らしく、ケバ〳〵しく映し出される。眞暗な、ウヨ〳〵した、ムツとする人いきれの底から、泣くが如く、恨むが如く、愬ふるが如き辯士の造り聲が、畫面につれて、刻々看客の腸を斷つ。藝者であつた文學士の內緣の妻が、義理に迫つて、白百合の花を抱きながら入水する。跡を追つて來た文學士と、文學士の許嫁であつた富豪の令孃とが、一足遲れた入水の痕を眺めて、悲痛の淚に咽びながら、思はず手に手をとつて　犇と相抱擁する……

パッと明るくなると、女中達の眼はみんな淚でぬれてゐる。さうして、

――よかつたわねえ！　と、溜息まじりに、そツとお互にさゝやき合つた。

私は女中達と同じ心持になれない事が悲しくなる。

終電も出了つたあとだつたので、私とお鐵さんとが先頭に立つて　線路づたひに、藤澤から鵠沼まで、高々と裾を褰しあげて　勢よく大股に歩いて歸る。午前の一時頃。

翌日、待ちかねた書留が來る。まづ、第一に、妻帶の件が祝福してある。式の節には、實父が必ず上京する心組さだうな。さうして手附金の一萬圓は二三日中に送れる事にはなつたけれど、跡金のところは、御承知のとほり、昨今襲來しつゝある實業界恐慌の爲、買手の方で一寸都合の惡しき事も有之、今一ト月は更に待つてやらねばなるまいか、などゝある。

――なアんだ、また一ト月か……馬鹿にしてる……と、私は手紙を拋り出す。

と、横目でチラリ、併し彼女は努めて見ないやうにしながら、

――一ト月ツて？　と、やゝ心配さうに訊く。

——もう一ト月たゝなければ金が來ないといふわけサ。

——とれるにきまつてるお金なんでせう？

——そりや取れるだらう………親父が着服して了はないかぎりはネ………

——そんなら何もさう急ぐ必要はないぢやないの………

——たゞそれだけ洋行の時期が後れるだけサ………從つて、爰から一歩も身動きが出來ないだけサ………

——どうして爰から身動きが出來ないの？

——無論、拂ひが出來ないからサ。

——いくらばかり溜つてるの？

——さア、七八百圓もあるかね。

——千圓ほど拵へて來てあげませうか？

——へえ？　君に金が拵へられるのかい？

——一ト月位なら融通してくれる人はあるのよ………金持のお爺さんだけれど、自分でもチョイ〳〵株をやつてる人なの………千圓位の事なら、きつと貸してくれるわ。

——さうかい………それぢや、さうして貰はうか………氣の毒だけれど………

——お安い御用だわ。

と、かうしたかりそめの問答がそれから一週間とたゝぬうちに、不思議と事實になつて實現される運びとなり、私はとう〳〵この宿屋から、論なく彼女のはからひによつて、きれいに引上げて了ふ事になつた。

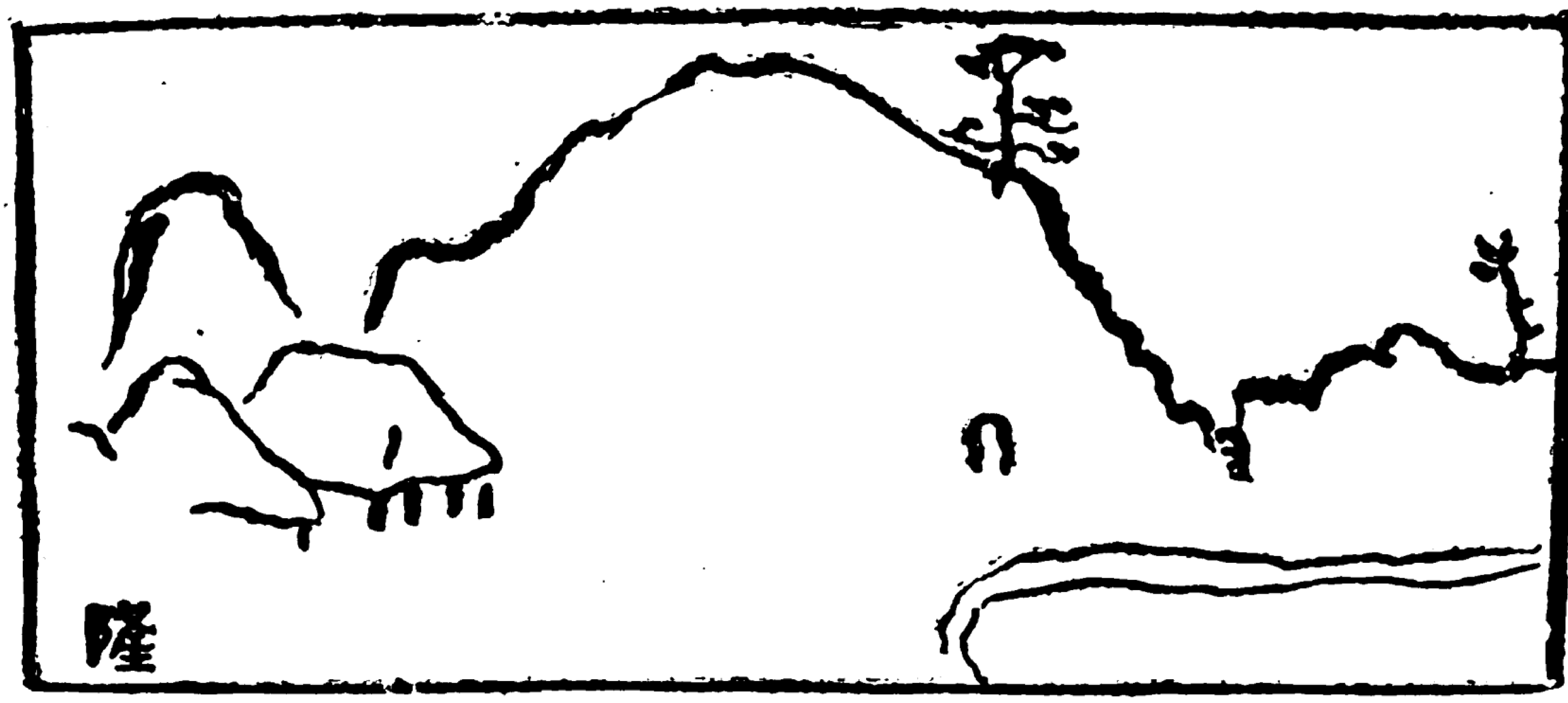
女から女へ………さう、比叡山の雪の中から、何の苦もなく招びよせられて、のめ〳〵と降りて來たのは、云ふまで

もなく鎌倉の奥さんによつてだつた。さうしてその奥さんの、あまりに氣の弱い、臆病極まる、一寸のがれの言葉に釣られ〳〵て、つひ〳〵ダラシもなくお神輿を据ゑて了つた宿屋。で、その宿屋から離れるには、その宿屋へ現れた、一樹の蔭、一河の流、二十六夜の月待でも何でもいゝが、要するに、諸法因緣生の本文通り、ヒヨツコリ、偶然、白兎のやうな顔をば、端的にふりかざして、否應なく私の目前へ現れた彼女に喚かされなければならなかつたわけだ。

女から女へ……男は、いや、少くとも私は、男のハシクレであるところの私は、ひよツとすると、或は男子全體の面よごしになるか知れないが、今日までの實驗上、ジヤン、ジヤツク氣取りの例の僞らず飾らざる告白をすると、たゞもう女の御意と、それから金錢の効力によつてのみ、知らず識らず、水の低きにつくやうな、おのづからにして境遇の轉換を行ひつゝ、縱に生息しつゞけて來たゞけの話だ。

女から女へ……色と慾だ。つまり、金だ。××、××。家族、ゼロ。人類愛、ゼロ。社會道德、ゼロ。宗教、ゼロ藝術、ゼロ。科學、ゼロ。ブルジョア文化、ゼロ。さうした凡ゆる偉げな觀念の世界をば、ツムジ曲りに悉く拒否して了つた後、猛然として私の體內の肉の底からコミ上つて來るのが、食慾と性慾、結局その二つの本能だ。從つて、その二つの本能をば、この資本主義の社會組織の下にあつて、思ふがまゝに受用せんが爲には、それ等二つの本能の對象物件をば、人間にしろ、品物にしろ、完全に買收し所有し得らるべき、充分に潤澤なる、高利貸に非ずんば他の何人も決して把握し得られざる、金錢だけが、何としても最後に一番大切なものとしてこの世に殘る。金、金、金のこと、金のこと、金のこと……暴力、破壞、內亂、革命、階級戰爭、さうした不逞なたくらみに一身を投じないかぎりに於いて……

一萬圓屆く。彼女はいそ〳〵とそれを持つて、銀行へ返濟にゆく。また知合ひのお婆さんから、例の千圓も借りて來る。さうして[illegible]母を誘ひつれて、鵠沼の宿屋へ支拂ひにも出かける。スツカリもう世話女房だ。で、あとはたゞ、三萬圓の洋行費が到着するのをたゞ、一日千秋の思ひで待つばかりの身の上となる。結構な身の上だ。



或る男

武者小路實篤

一七七

彼がまだ下二番町にゐた時分。今新しき村にゐる川島が始めて福島縣から原稿をよこした。又同じく村にゐる佐土原君が始めて原稿をもつて來たのも下二番町の時だつた。

彼が「その妹」を白樺の三月號に出してからは彼はなほ多くの人から手紙をもらうやうになつた。「その妹」について悪口を云つて來た人も二人あつたが、それは甚だ見當ちがいだつたので彼は笑つてすませた。

その一つは彼がなぜ「その妹」を小説にしないで脚本にしたか、そしてムダが多いと云つて來た。この人も、下二番町に彼がゐた時、白い花の束をもつて彼の所にたづねて來た、偏人だが、そんなことを云つて相手の度膽をぬく事が出來ると思つてゐる呑氣人だつた。しかし彼はその手紙をよんだ時は一寸考へさせられた。あれがなぜ脚本にかいてはいけないのだ、元々脚本の形が出來て流れ出した創作ではない

か。ムダが多いと云ふのも、會話が重複してゐる處があると云ふのなら少しはうけとれるが、彼にはのみこめなかつた。それから半年程たつてその人が出した長篇をもらつて彼はムダのない作品と云ふものはどんなものかと讀んで見たら、全部ムダで、頭が少しどうかしてゐる人だつたので、ごく少しでもその人の手紙で考へた自分の愚を苦笑した。

もう一人は彼の知らない人だが、それは彼の「小さき世界」を感心してよんだので、「その妹」を期待してよんだらつまらないのでがつかりしたと云ふのだつた。そして內證話が見物人に聞へるやうに云つたら、わきの人に聞へないはづはない。なぞと教へてくれた。彼はふき出した。

しかしそれ等は十に一つ、或は二十に一つの例外で、あとはほめた手紙許りが彼のもとにまい込んだ。其處で人のいい、お世辭も眞に受ける時分の彼だつたから、例によつて目に涙をためながら室のなかを步きまわつたことはまちがいない事實であつたらう。

勿論その手紙の多くはお世辭を知らない人々によつてかゝれてゐた。

其處で彼は得意になり、感謝し、そして發奮してから云ふ詩をかいた。

「自分は今二階の六疊の室にゐて
机に向ひながら波の音を聞いてゐる。
障子をあければ
正面に江之島と大島が見へる。
右手に富士が見へる。
下では妻が琴をひいてゐる。

自分は演壇に立つたつもりで何かかきたいのだ。
諸君！
自分の筆から權威ある言葉よ
ほとばしれ。

自分は殆んど毎日一つ以上
自分にたいする感謝と讃美の手紙を受けとる。
それは自分にとつてよき食物だ。
なくて叶はぬ食物になりつゝある。
一日でもさう云ふ手紙が來ない時は
腹がへつたやうな淋しさを感じる。
それはいゝことか、わるいことか
自分は知らない。
だが淋しければ淋しいで
力をよびさましはする。
自分に出づるものは

自分に歸る。

自分は彼等に力を與へ
さうして彼等から力を受ける
自分は彼等に愛を與へ
さうして彼等から愛を受けとる。
自分は一人で思つてゐることが
彼等の心にふれる。

消えてゆくべきものが
たゞは消えてはゆかないのだ。
自分が一人で思つてゐることが
遠く、遠くにはなれてゐる人々の
心にふれるのだ。
自分が高きにのぼれば
彼等も高きにのぼるのだ。

自分が泣く、彼等も泣くのだ。
自分が笑ふ、彼等も笑ふのだ
自分が何かしやうと欲する
彼等も何かしやうと欲する。

自分は未能力者だ
しかし何かする人間だ。
彼等も。

火のやうな言葉をもて！
彼等も燃える。
眞理を持て
彼等も持つ

汝、汝、汝
自分は恐ろしい。（一五、三、一〇）

彼は毎日小泉に逢つてゐた。彼は誰も來ない日は必ず一度は小泉の處へ出かけた。海岸を廻つてゆくと三四十分かゝつたらう。眞すぐ行つても二十分近くはかゝつたらう。

よき散歩道でもあつたが、逢はないとおちつかなかつた。彼は一たいに自分の家にゐることをよろこばなかつた。自分の家は仕事場なので家にゐると仕事のことが氣になつて、おちつかなかつた。そのくせ二階の自分の室に上るのがいやなので、下で妻や、キク子を相手に遊んでゐるが、しかし仕事が氣になつた。外へ出るとどうせ書けないと思ふのでおちつけた。又人がくると或心して遊べるのでよろこんだ。しかし氣のおはない、話のない人に來られると困るが、滅多にそんな人は來なかつた。

長與や、岸田や、千家が時々來た。木下も泊りがけに來て、鵠沼の風の音を聞いて、有樂座の風のやうだとよろこんでゐた。實際さう云はれると、有樂座の嵐の音そつくりの音をたてゝ風が吹きよせて來た。

有島生馬も來て、彼の下二番町の家に比して堂々(?)とした家に住んでゐるのでおどろいてゐた。

段々暖かくなつて春らしくなり、小川に日出なぞが出だした時、彼は小泉とキク子をつれて目だかをしやくいに行つた。

キク子はすつかりなれて、その時分彼の處にゐた十四五の女の子とよく

「あご出した兵隊さんはのこ〳〵歩く」

なぞと云つて室を二人で歩きまわつてゐた。又近所にお松と云ふ同じ齡位いの子供がゐていゝ遊び相手になつた。之があとで、岸田の村娘のモデルになつた子供だ。

彼は當時の生活を思ひ出すと呑氣だつたやうに思ふ。だが彼の内に燃えてゐる力は彼を呑氣にはさせなかつた。彼は

たへず、何かをしたがつた。書くことが彼の本職であつて、彼はいろ〳〵の雜誌からぼつ〳〵たのまれることになつた。
彼は「その妹」をかいて一と月たつたかたゝないかに「太陽」のために「未能力者の仲間」をかいた。
之はさつきかいた詩の
「自分は未能力者だ
しかし何かする人間だ
彼等も」
を、もつと具體化してこまかい實感をこめてかいたものである。戰爭がこゝにも一つの題目になつてゐる。
杉原は彼の近くに住みたがつて鵠沼に一軒家をかりて、よく彼の處にも來、又彼達も出かけた。
彼は結婚しない前は春を恐れたが、彼は今は春を恐れてばかりはゐないで、一緒にたのしむことを知つた。
そして一家中で海岸に「ボーフ」をとりにいつたり、松林のうちに松露をさがしたりした。そして彼には珍らしいのどかな詩を一つつくつた。誰からもほめられたことはない詩だが彼は一人でその詩はすきなのである。
「春だ、春だ、本當に春だ。
自分は歩きながらさう思つた。
自分は春は好きだ。
昔は春になると淋しかつた。
お貞さんと別れたのが春だつたから
今は春らしいものはのこらず好きだ。

櫻も、桃も、麥も、菜の花も、さうして若い女の着物も。

春よ、お前は私の頭をわるくするけれども、
私はお前は好きだ、
お前の喜悅に、
わが身をまかせるのが好きだ。
自分は庭に出て、
土呂をほつたり
池の鯉をとつたり、
濱へ行つてぼーふをとつたり
つみ草に出かけたりすることも好きだ。
さうして大きな聲で笑ふことが好きだ。
それは如何にも春らしいことだ。

人々は今戰つてゐる。
しかし自分の心は春に同化されてゐる。
苦々しく、喜ばしく、

しやべり、且つ唄ひたい。
俺の言葉はお前を喜ばさないかも知れない。
だが俺も、俺の聲をもつてお前の歌を唄ひたい。
自然が皆、お前の歌を唄つてゐるやうに。
春だ、春だ、本當に春だ。」

しかしその喜びは生理的に、肉體的に、又自然に生れた貴いものではあるが、彼は一度戰爭の事實を見、人類の運命を思ふと、彼は呑氣にはしてゐられなかつた。一方呑氣を愛するだけ呑氣にしてゐられない人々のことを思はないではゐられなかつた。

するとこんなことをかいた。

「世界的の恐怖時代がもしかしたらこの世紀にくる。それは國と國の戰ひを意味してゐないことはたしかだ。この恐怖時代を來さゝないでしかも人類が自己の意志をこの世に生かし得るやうにしたいものだ。今度の戰爭は少くもその遠因にはなるであらう。むづかしい時だ。一時は生命の不安が誰人の上にもおゝいかぶさるであらう。さうして同じ國の人間が同じ國の人間と最も殘酷に殺しあふ時代が再び來さうだ。自分の生てゐる間に來るとさへ云ひたい。しかも強いられゝば、自分はさう云ふ時代を持ち來たす爲にこそ〳〵働くことを人類から命ぜられてゐる一人かも知れない。恐ろしい」と或人は云つた。

「考へたくないことが自づと考へられてくる。さわりたくないことが自づとさわらないではゐられなくなる、實は正面からさわりたくないのだ。さうして自分は僅かの人にだけこつそりと語りたいのだ。人類は近づいて來たよ。訪れた時

にすぐ戸をあけ玉へ」と、或人は云つた。』（一五、五、三）

一七九

或る雨の降つた日江馬修が彼を訪ねた。二人は少し前から親しくしてゐた。彼が「お目出たき人」を出した時、非常に厚意のある手紙をうけとつた。それから一年程たつて彼の所へたづねて來た。それから知りあいになつた。

二人は元氣に話してゐたが、暫くして小泉を雨の中を海岸の方を通つてたづねることにした。

二人が川のふちに來た時、五六疋の捨てられた仔犬が雨にびしよぬれになつてないてゐた。彼等が通ると、その内の二三疋が彼等の方によち／＼やつて來た。彼は同情はしたがたすけてつれて歸つて飼ふのも厄介だと思つてそのまゝ通りすぎて巾のせまい板の橋をわたり出したら、その内の一疋の仔犬が橋の上までついて來て、川のなかに落ちて流されていつた、彼はそれを見のがすわけにゆかないので、川が深かつたら勿論見のがしたらうが、膝まで位いの處だつたので、川へ入つてその仔犬をたすけてやつた。たすけてまたすてるのもいやでつれてゆくことにした。犬は彼の手の内で寒いのでぶる／＼ふるへてゐた。小泉の處で新聞紙でそれをふいて持つて歸つて飼ふことにした。

彼夫婦はこの犬を可愛がつて、犬小屋のなかゝら身體に不相應な大きな頭を出してゐるのを見た時、デイオがネスから思ひついてデイオと名をつけた。

その内に杉原が片瀬の方へゆくことになつたので、杉原の家が彼のゐた家より水の具合や、風呂場の具合や、間どりがよかつたので其處に引越すことにした。

或る日知らない何處かの四十位いの細君が犬の仔をだきながら彼の處に來て、私の所でゐなくなつた犬の仔があなた

の所に來てはゐないかと云つて來た。そして彼の妻が本當のことを云つても信じないで、どうも私の所でなくなつた犬の仔によく似てゐるなぞと云つた。

しかしはつ切りさうだとも云へずに歸つていつた。それからまもなくディオが居なくなつた。彼逹は本當に心配した。

そしてディオ、ディオ、ディオと大きな聲で彼と房子とキク子と女中でよんで見たが、何處からも出て來なかつた。房子は半分泣き顏して泣き聲を出してゐる。彼も段々悲しくなつて來た。そして近所の人に聞いたら、あんパン屋の小僧が先日彼の處へ來た女の人の所へつれていつたらしいと云ふことがわかつた。彼夫婦は日がくれてくるに從つてますますおちつかなくなつた。それで門を出て、ディオの行つたらしい所へ行つて、大きな聲で何度もよんだ。すると遠くの遠くの方から仔犬が一心に、眞すぐに走けてくる。

それがディオと氣がついた時、二人は本當に泣きたい程、うれしかつた。

彼はさう云ふ呑氣な自分逹を可愛いく思つた。一方、恐ろしいことが人類の上におそつてゐるのを知つてはゐるが、平和な時の人間の心の一寸したことにムキになつて悲しんだりよろこんだりする人間を彼は可憐に思ふ男であつた。

一八〇

或る日、彼の所に文藝座の林和が訪れた。

そして彼の「わしも知らない」をやりたいと云ふ話をもち出した。彼は自分のものが芝居にやられるなぞとは思つてゐなかつた所へ不意にさう云ふ話があつたので、なほよろこんだ。

しかし彼はあまりあてにしやうとは思はなかつたが、話してゐる内に、どうも今度は本當にやりさうなのでよろこん

でも大丈夫だと云ふ氣が段々して來た。彼のものはそれまでに一度やると云ふ話があつてお流れになつたことがある二度とも「二つの心」であつた。彼は少し氣まりのわるいやうに元氣になつて來た。彼はもうそれまでに十以上も脚本をかいてゐたらう。しかし彼は自分のものが舞臺にのることは空想としては考へてゐたが、現實として考へるのは蟲がいゝやうに思つてゐた。多くの人は彼の脚本を舞臺のことをまるで無視してゐると云つて非難した。それがむしろ定評になつてゐた。彼はそれに反抗したが、何處かで皆がさう云ふので、そんなものか知らんと思つてゐた。

今、林和は彼のものをやるのに自信があるやうに云つてゐた。さう云はれると彼の自惚が頭をもたげないわけにはゆかない。

彼は淋しい生活になれてはゐたが、そして「養父」の主人公のやうに涙の内に幸福を見出すことにならされてはゐたが、しかし彼は一方華かな空氣を愛し、底ぬけの笑ひも愛してゐ、又劇場の空氣を愛してゐ、役者達を通して自分のリヅムをなりひゞかせることは彼のよろこびの一つであつた。

彼は今迄彼にとざされてゐた世界がやつと開かれ出したやうに思つた。彼は林和にあなたにやれる自信があればよろこんで承諾しますと云つた。

彼は彼の作品が、役者によつてやられて、どんな舞臺効果を得るかと云ふ見當が正格にはつかなかつた。又あの短かい場面が重なつて、そして可なり金をかけ、又大人數でないと出來ない場面がある芝居が、一たいうまくゆくものかどうか彼には正格にはわからなかつた。しかしやる方で自信があるのなら大丈夫だらう。精神には少し背のびしてものを云つてゐる所はあるが、嘘ではない。そして清淨な靜かさ、ほがらかな朝で萬事が終つてゐる惡夢のさめたあとのほがらかな程の感じには自信がなくもなかつた。しかしそれにしてもあまりに短い。感じが出るものか知らんと思つた。出ない

とも思はなかつたが、出るとも思へなかつた。しかし彼はうれしく思つた。そして一緒に海岸や、松原を歩いて、日本の芝居について話した。執念深かくやるより仕方がない。確信した道をやり通すより仕方がない。それが彼の定論である。彼はその話をきいてからまもなく、こんなことをかいてゐる。

「自分は今度自分のものが上演されることになつてから、あらためて自分の尊敬する人々のものをよみなほした。自分は心細い氣がしないではゐられなかつた。

　自分はこの四五年の内には何か、書いたと云ふ氣持のするもの、世界の劇壇に出しても耻かしくない大作をしたいと今更に思つた。自分はまだい〻意味のドラマチツクな感情を生かし切つたことはない。このことは今更に感じられ、耻かしく思つた。しかし、しかしだ、自分にはある自信がある。こ〻四五年だ。さうして今度の上演は何かよき會得を自分に與へてくれさうな氣がする。さうしてある人々にも、「わしも知らない」の上演が如何に不結果に終らうとも自分にとつては無意味ではない。さうしてそのことが又或人々にとつて無意でないことを祈る。さうして我々にとつて無意味でないことがやがて更に大きなものにとつても無意味でないことを信じてゐる。かく信じ得るものに祝福あれ」（五月二十一日）

　彼の蟲のい〻のはどつちにころんでもたゞは起きない所にある。そして彼は例によつて、興奮した勢ひでつゞけて詩をかいた。

『彼等は大勢で自分は一人。
　彼等は一生の仕事をもつて立つ。
　自分はやつと五年間の仕事をもつて立つ。』

かく書き出すと彼のリズムは流れ出す。

世界中の劇曲家のゐるパルナス山のやうな所に彼は一人まぎれこんだことになる。そしてかゝりの人から呼ばれもしないのに來たものゝやうにとりあつかはれ、其處に入る資格のない自分がまぎれこんだ淋しさから穴に入りたい氣になる。彼のかいたものが、シエキスピヤの處へもつてゆかれる。それをゲーテが氣樂によむ。

『人々はシエキスピヤとゲーテのまわりに集つた。』

ゲーテは氣輕に讀んで皆に聞かせた。

さうしてあの日本の人は、

「まだ十七八の子供だらう」と云つた。

「それならのぞみがないでもない。

自分も小さい時はこの位いのもの切りかけなかつた」

或る人はさう云つた。

かゝりの人はその時、

いゝえ、あの人は三十です。

調べて見たらさうかいてありました。』

人々は幼稚におどろく、其處でかゝりの人は得意になつて、斷ることをすゝめる。

ゲーテは

「まあもう少しおいておくさ」と云ふ。彼は閉口しきつてゐると其處に、一人の男が出て來て彼をなぐさめる。

『自分はうつむいた。涙がぽと〳〵したたつた。

その時見知らぬ人が來た。
「しつかりしたまい君の心もちはよくわかる。握手をしやう。」
「あなたは何處の方」
「私はシャムの人間。」――其處で眼が醒めたことになる。

彼は芝居をやる少し前に上京した。そして役者の人達にあつた。作曲をしてくれた山田耕作に逢ひ、おどりの方のふりつけしてくれた西本朝春氏に逢つた。皆、彼に厚意を見せてくれたので彼はよろこんだ。

作曲された音樂を聞いたり、おどりを見たりすると彼はちがつた世界に來たやうな氣がし、そして皆が熱心にやつてくれてゐるのを見ると、皆自分自身のためにやつてゐるのにしろ、彼の作をよく生かすためにやつてくれてるやうな氣がして感謝したい氣がした。

同時にもつといゝものがかきたいと云ふ氣がした。

彼は舞臺稽古を見てもあまり注意は出來なかつた。勘彌の釋迦は安心したが、猿之助の流離王が一寸氣になつた。始めつから「わしも知らない」と云ふ脚本は釋迦は内からかけてゐるが、流離王は内から十分にはかけてゐない、二三分外から無理に充實させてある。作の出た時批評家は流離王の復讐の强さの方をほめ、釋迦の無力を非難したが、彼は意表外に思つた。芝居をやるやうになつてからも流離王の方が役者に人氣があつたやうに聞いた。彼は自分の氣にしてゐる方がほめられるので反つて安心した位いだつたが、猿之助のやつたのを見た時、矢張り作の必然さがなほ稀薄になつたやうで氣になつた。それで一寸注意した。しかしその注意は反つてよくなかつた。少し右によつてくれと云つたら右によりすぎたと云ふ傾があつた。それで少し左へと注意したかつたが、あまり親しくなく、又その當時彼の存在は認め

られてゐなかつたので、注意が十分出來なかつた。それでもあとで彼は兄から、猿之助が僕がいろ〳〵注文出すのでいやがつてゐたさうだから、何にも云はない方がいゝだらうと注意されて、彼は恥かしい氣がした。

恐らくこのことは猿之助は忘れてゐると思ふ。しかし彼は兄にさう云はれた時、不服に思ふと同時に赤面した。

いよ〳〵その日になつた。彼は其處で、覺悟してゐたやうな見物の嘲罵も、又私かに望んでゐたやうな興奮をも與へることは出來なかつた。自分の作の淡いのに不安を感じた。彼の後ろにゐた女達は「つまらない芝居ね」と云つた。しかし彼は不服に思ふよりも寧ろ氣の毒に思つた。自分の眞價は彼等にわかるには高すぎると彼は一方思はふとしたが、しかし自分の力がもつと强かつたら、見てゐる人の心を奪つて放さないにちがいない「マクベス」のやうに、「夜の宿」のやうに、「タンタヂールの死」のやうに、材料はちがい、世界はちがうだらうが、力强いものがかけたら、人々の心を奪ふことが出來るのだがと思つた。

そしたら演ずる人も見物を喜ばすことが出來るのだがと思つた。しかし彼は釋迦の出てくる場はわりに好きだつた。そして感心してゐる人などもあることをいく分感じてはゐた。何處かに彼は得意も感じてゐたらう。だが自分の力の小さいことを思はないわけにはゆかなかつた。彼は一方日本人は何を見せてもおどろかない文藝上の田舍者だと云ふことを感じてゐた。其處にある最もいゝものを感じるには修養が足りなすぎると云ふことを感じてはゐた。しかし自分の力の小さいこと、自分のかくものゝ淡いことが彼を不安にさせた。

彼は二日目は舞臺の裏にゐて、嵐の音をさせる手つだいをしてゐた。その場が終つた時猿之助が舞臺から降つて來て暗い所にゐる彼等に怒鳴つた。

「一たい今日の嵐はどうしたのだ。でたらめにならされるので、聲が通らないで困つた」

彼は本當に悪かつたと思つた。猿之助が彼が其處にゐるのを知らないのをよろこんだ。其處へ林和が來た。そしていきなり彼の手を握つて、興奮して云つた。

「今日は成功でした。成功でした」

彼も力强く握り返した。

三日目は彼は夏目さんを招待した。夏目さんは彼夫婦に夕飯をおごつてくれた。彼はそれを名譽に思ひ、うれしく思つた。

しかし彼は三日目、最後の日がすんで歸る時、へんに心細かつた。負軍の將のやうな氣がした。とり返しのつかない不名譽をかうむつたやうな、皆にすまないやうな氣がした。妻と二人、こつそりと逃げるやうに東京の兄の家にゆき、翌日又逃げるやうに鵠沼へ歸つた。そして自分の家におちついた時、ほつと安心した。いつかこの不名譽をとり戻してやらなければと思つた。勿論、一方自惚れた考もあつたが、それは淋しさをやぶる力なく、すぐ淋しさの空氣の下にしなひていつた。



わが世

室生犀星

いくら咲いて見てもこの世は咲ききれないものかも知れない、——それと同じいやならな意味でこの世は咲いて見る値さへないとも言へさうだ。自分自身の感情をふりかへつて見ても、まつたくこの世のありさまを縮刷したやうなものでさまざまな氣もちにさへ出會すのだ。——一體、この世はそんなに美しいものでもなく、樂しいことの有餘るやうなこともない。もし樂しい ことがあつてもそれはその樂しいことばかりに出會す男がゐて、その男だけが充分な滋養分を吸ひ取つてしまつてゐるのだらう、そのためあとの男は何一つ樂しさうな目にあはずにゐるらしい——とさういふ考へは僻んでゐると言つて退けてしまつていいだらうか? 實際は二つ咲く花はそれきりしかなくて、二つとも剪り採つてしまつたら何も殘らないではないか——この世にさういふ二つきりしかない花を二つとも切り取られたやうな心持ちが、どこか自分の近間に殘つてゐさうな氣がする……

私自身の考へからいへばこの世は樂しみすくないものである故に、何一つ思ふとほりにならないものであるから、自分からすすんでこの世にあるだけのものを樂しんで味つて、それでもなほ出會すことがなかつたら、それは自分の不運の致すところとして、それまでは何一つ殘さないやうに樂しみを樂しみつくしてやらう。――他人のことなどはどうでもよい、こんな微些な私といふけちな人間がどうでも捜せるだけの分を、その分け前にあづかつてやらう、私にだつて蝿が日光のなかにぢつと身凝つて温かいひかりをあびてゐるやうに、それに似たくらゐのうたげはあるにちがひない――それでなくとも私らしい私の分はまだ私の目や心のとどかないところに、ちやんと供えられてありさうな氣もするではないか――はじめからこんな下らない世の中だと言つて、諦めてかかるなどといふことは食はずぎらひの一つだらう。この世にどんないいことや、私に適當なものがあるにちがひない――この世に秋や冬の季節のあるのはわれわれのやうな貧乏人の感じるくらゐのもので、われわれの知ることのできない結構な暮らしをしてゐるものには、冬も秋もなくつて何時だつて春のやうな氣もちでゐるかも知れないのである。寒がつて腰をかがめて歩いてゐるわれわれには想像できない温かい冬を暮らしてゐる人人がどんなに多いことだらう――しかしそんな人は羨やましくはない、羨やましいのは明日も明後日も愉快で、その又た明後日はなほ樂しげな人人のことだ。私どもには今日も明日も面白くなくてさらに明後日になつたらどんなに退屈だらうと思へるからだ。明日になつたら何か樂しみがあるとか、その樂しみを今日から考へてどういふふうに味ふものだか、などと考へるやうな人人は私のやうな俗人から言つて羨やましい――明日も明後日も同じい机の上で同じい下らないことを考へて、それをこつこつ纏めてゆくといふことほど退屈なことはない。それさへ世ののじりの的となることはともかく、世に恥ぢることをまで綴つてゆくといふことは、何とつまらない仕事をえらんだことだらう。――それだからと言つてこの詰らない仕事を止めてしまつたら私は一體どういふ仕事をして暮し

を立ててゆくべきであらうか。私にはちから仕事といふものは出來ないし、商人のやうな資本の要るものは出來ないばかりでなく、人一倍人と接ふことが厭ひで、いつも獨りで勝手なことをしてそして自分の爲てゐることを決して他人に知らしたくないやうな性分では、とうてい商人とやらになれさうもない。——ただ一つ自分に一番ふさはしいやうな仕事、結局紙とインキとを持つて何か知らいやいやながらもむだ書きをつづけると言ふやうなこと以外にできさうもないとすれば、私はもと通り私は私の心が老ひ込んであぶら氣がぬけてゐるにかかはらず、無理にも空想のちからを頼つてゆかなければならない——あんなに濫費し過ぎた空想さへ間歇的にちびちび湧くだけで、それも清純なそれでなく、乾いた餘にふれるやうなものばかりで、しまひに何時でも嘆息をつくくらゐが落ちで一向その空想にさへ手頼られさうもない現在では、どうして私にいいものが書けるわけがあるものか。——いくら私にしても悪いものを書いて世を茶化す氣にはなれないし、よし悪いものを書いたとしてもその悪いものの中でも私は私らしい嘆きをつづり込むか、又一ところに私は充分に良心のしびれてゐないところかを示して、やつと一と安堵をしてゐるくらゐである。

どんな自棄くそた藝術家にだつて、どんな淫猥しい心にもない物語りを書いてゐるとしても、その人のそんなにまで下卑た心にもなほ藝術家らしい褪めた色が匂ひ殘つてゐることがあるものだ。私はときどきそんな藝術家の、ひとさかりを過ぎた作をよんでゐるときは充分な輕蔑もするが、さて何か知ら心に觸れてきてちよいと本を伏せて考へ込むことがある。こんな老ぼれの作をむやみに遣つつけていいだらうか。これは單に詰らないと言つて最うその本さへ投げ出して了つてゐるにかかはらず、何となく不安なおちつけない氣もちが殘つてゐて、まじまじと何かを考へあてるやうな氣になるのは一體どうしたことだらう。私はそんなとき詰らない作には感心できなくとも、何となくさういふ詰らないものを書かねばならないみじめな心を妙にさびしく思ひ出すのだ。——此人だつて一と時代もあつたし世の中もそれをゆる

じてゐたのに、いつの間にか影が元來影であるための姿を消すやうにさかり場から消えて行つて、いまは途方もないところに糞蠅のやうな灰色の翼は翼だけのものをひろげて、そしてやはり人生は退屈なもので決して退屈以外のものでないことを、つべこべと饒舌りちらしてゐる。——全く私にとつてこの世の悲慘なことは貧乏人が好んで貧乏してゐることではなく、また時代思想とやらが黑白にわかれて睨み合つてゐることではない、私のつくづくと骨節にこたへるのは、こんなみじめな藝術家が、年々に殖えて行つて、どこかこの世の隅の方でこつこつと書きつづけてゐて、やはりそれをすら賣らなければならないそんな心をいふのだ。場末の褐色した家並みつづきをうろついてゐる色さめた癈兵の白つぽい姿を埃のなかで見出すとしたら、あんな姿がみじめな藝術家の何かを考へあてるに適當なことに思はず手を拍つてみたくなるのだ。——大方、私自身だつてだんだんに埃つぽくなつて行つたら、あんな姿でやはりあんなうろうろした物忘れしたやうな顏をところ嫌はずに浮べて行くことだらう。そして結局人生はつまらないことの續きだつたことや、人生は嘆ける人にとつて嘆き甲斐のあるものだといふくらいの思案をもつやうになつてゐるだらう。そして他人のことなぞはどうでもよいと考へた舶來の考へがだんだん姿をちぢめて行つて、日本人らしくいつの間にか他人のことも自分の中へ加へて、さて悲しんだり嘆いたりしてゆくことであらう——。

いつの間にか、さう思ひ設けたわけではなかつたが、私はもう卅五になつて、ひとなみの暮しを立てるやうになつたが、それにしても此頃は私のいまの年齢の三分の一くらゐの年齢を私は誰かに依つて加へられはじかれた算盤を思ひ出すのだ。つとめて私は自分の年齢をよけいに見せる必要もなく、他人からも決してさう思はれたくなかつたが、何よりもこの重い變なふうに落着いた心がよけいに氣になるのだ。どんな罪悪だつてどんな破廉恥なことだつて、又どんな罵りだ

つてそれをつい一笑に附してしまふやうな、いけずうずうしいと言へば云へるその心を所つてゐることが悲しくもあり賴もしくもあるのだ。どんな人間の前にだつて最初はつい對手の人格の新らしさにふれると、ちよいと子供らしく赧くなつて口籠つてすぐには話し出されさうもなかつた自分が、このごろではさういふ羞恥することなぞなくなつて、平氣でさつぱりと話し出してゐることだ。――對手に氣に入らうとするやうな心の構え方が生活の方の必要からもなかつたが、それよりも何よりも對手の人のことなぞを除りくどくどと考へないで、枯淡に受けもする、そして流しもできるといふ心をいふのだ。そんな風になるために私は勉强した覺えがなく、そんな風にならうとさへ考へたことすらなかつた。――つづまり眼のいろを變えたり心にきりつとしたものをかんじないで、もつと言ひよくいへば靜かに一人でゐるときの續きを緻かしてゐるやうな物腰で、人と自分とを合はせることのできるのは、あるひはつつましい人生のうちの拾ひ物の一つかも知れない、――人一倍の羨恥と人一倍他人のことを氣にする私がなぜさういふ風になつたかと言つても、さう大して理由のあるわけではない、それは私のせいであらうよりむしろ古くさい年月のしわさだらう、雨や苔や不健康な日の堆積がそれにつながつて、いつの間にか私の母のむかしの言葉でいへば何となくいけずうずうしくなつたのであるし、私のいまの心からいへばこれは拾ひ物で何よりも結構なものだと言へもするずうずうしさであらう――。もう一つ言へば私が世の罵りの中に坐つて、毎月といはずに賴まれるままに書いて書きなぐつた頭の惡さや、書いたときに知らず知らずに追ひ込まれた心の齢が、永い間つかひなれた湯呑に茶澁のついたやうになつてしまつたのであらう、そのたびに私の心には一と皮づつの皮が纏つて行つて苟のやうに中身をつつんでしまつたのではないか？　だがその苟は中身は柔らかくはあるが、私の心は硬直しまつたきりで元のやうな柔らかさに返らない――。

「人間はしかし何と言つても子供心は失せないものだ。」さういふ心さへ私には疑はしい氣がする。それは今の私にしても時折子供の折はかうでなかつたとも思ひ、あの時分はもつとこれこれであつたといふふうに考へても見るが、それはこのごろになつて全然間違ひであつたことに氣がついた、と言つても左う新しいことではないが……從令へば子供のときはたいへん温良だつたとか正直だつたとか言ふことも、あれらは子供のときのことだけを言つたものに過ぎない――惡くも善くもならうとするああいふ發育ざかりのときの性分や才能などといふものは、實際何一つ的になるものではなく假りにあてにした親だちがあつたりすればそれは馬鹿にちがいない、――この子はこんなふうにならうとは思はなかつたといふ歎きをその子の上に感じるとすれば、なぜその子をさうなる前に假りにその自分を温良だとか正直だとか言つて決めてしまつたのであらう、惡い性分のものは始めからそれを持つて出たものにちがひなく、それを始めに温良しいと言つて勝手に決めたのが惡かつたのだ。――今の私にしても時たま退屈まぎれに子供のをりあゐでもかうでもなかつたころの、その性分をかんがへると、あの時分とはすつかり違つた氣もちになつてゐることに氣がついた。さういふ子供時分のことを考へ出さうとするときの心もちは、何時だつて頼りなく一歩づつあとへさがつて行くやうなときだ。過んだことを考へるといふことほど厭らしい風景觀賞家はない、――あんな時分のことを考へて幸福になつたつて、それが何になるのだらう、さういふ將來へまで搬んでゆけないものを人間は考へる必要があるだらうか――それに何一つ的にならない性分を性分としてゐるあんな時分に、「人間はしかし何と言つても子供心は失せないものだ。」と言ひ得るだらうか

それでは今おまへの暮し向きはどうだい――何一つ子供のときから考へ貯へたものを現はさないものはないではないか？　とさう言はれたら私は實際の子供の自分の考へはあの時分ぼんやり考へたことで、人間が三十五になつて、さて考へ出した子供時分のことこそ本物であるといふふうに、それこそ確かなものであると言ふより仕方がない――人間は

どうにもならないときに何か新しい考へにありつきたいものだ。その新しい考への中に子供時分のことをこまごまと考へ込んで、今の年齢で築きあげたそれをちよつとの間考へ込むとしたら、實際のところ卅五の男が編み出した幼年時代にちがひない、それより以外のものでない――だから人間は一生の間に子供時分のことは一つきりしかなくて、それはその時分にとくに亡びてしまつたもので、三十五になつても到底生きかへつてくるものでない、生きかへさうとする奴があつたらそれは時計のねぢを逆に廻すやうなもので、ついその時計をまでぶち壞はしてしまふものではないだらうか？――それよりもいつそ一と思ひに、人間が三十五になつて、そんな幼いころのことを新らしく作りあげやうとするところに本物があるやうな氣がする。

暇で困りぬいた夫婦者が、何か知ら新らしい思ひつきがこの世の中にないかとよく考へ出さうとする。はじめからそんな思ひつきも、思ひ設けられさうもない世の中に、それが假りにあるものだとしての考へは誰だつて一遍くらいは考へるだらう、そして結果として草花の種を蒔いたり小鳥を飼つたりする。が、結局小鳥を飼つてもたつた一日か二日のうちはその啼きごゑも美しくはあつたが、しまひにその美しさに馴れてしまつて、ただ、依然小鳥を飼はない前よりもよけいに復雜な退屈がやつて來て、いたづらに茫乎とその籠をながめ込むくらゐだらう。そしてこんなではなかつた筈の、その新しい思ひつきさへいまはどうにもならないのが本當だと考へるやうになる。が、さういふうちにも間もなく草花をいぢくつたり、生れた子供を可哀がつたりしてくる。そしてやはり何か新しい思ひつきと、も一つれいの子供時分の「何か變つた遊びをしないか？」といふ考へに又しても打つかつてゆかふとするのだ。そんな絶え間もない同じ頁を繰りかへしてゐるやうな厄介な人間――結局はぼんやりと同じい小鳥の姿を籠の中に眺めこんで、この小鳥は何故ああも目まぐるしく上から下へ、たえず宙返りをしなければ居られないのだらうかと考へ、小鳥は飽きることなん

ぞないのだらうかなどと考へる、——そして新らしい思ひつきの影もないその後になつて、ただ、溜息ばかりついて退屈な人生をただ坐つて受身になつて眺めてゐるより外に仕方がない——。或る新婚の夫婦者が同じい暮しに倦いてしまつて、何か變つたことがないだらうかと捜してあるいたつて、所詮はどうにもならない同じいことの繰り返しだと言つても、かれらは聞かないかも知らない。かれらはまだその性分さへ、その結婚といふものの性分さへ知らない子供だから——。

たとへば私のやうなやくざの人間が、面白くも可笑しくもないこんな世の中に、どうにかして何か知ら面白さうなもの樂しさうなものを採りに選んで、外面でも實際面白さうにしてる私が、—ことに人生は愉しみすくないものだと知りながら、やつと理想めいたものを持つて、私にだつて人生の殘りものの樂しみくらいはあるだらう、何々を買つて見たら！そしてあんなにも愉快なサアカス團や活動や舞踏やを見に行つたら、すこしくらゐは晴々とした氣もちになるだらうくらいの考へで、時たま着換えをして電車道まで行く途中にも、三遍くらゐは立ち止つて考へ込んで、まだ自分の心持ちを定めかねるやうなことのある私は、ときには行くさきが急に厭になつてすごすごとわが家へ引返す、—わが家へかへつても却つて二頭に不機嫌になつてしまつて、先刻なぜずつと電車に乘つて出掛なかつただらう、どんなにつまらなくとも家にゐるより周圍は動いてゐるし、それに從つて自分だつて動いてゆくのだつたのに、なぜ勇を皷して出かけなかつたらうと同じいことを繰り返しては考へ込むのだ。當然遊び仲間が仲間に入れてくれる筈の一人だつた私を無理にもその仲間から私だけを逐ひ出したやうな氣がして、誰を怨んでいゝか分らない怨みに似たものをぼんやり心にうかべる。そして私の行きそくなつた繁華な街のありさまをさまざまに考へなほして、私は私のやくざな性分のために溜息を

つくのだ。――そして私自身にもよく分らない筈の蓄音機を廻して、私にはがらにもないジェラルディン・ファアラアだのテトラチニだのガリクルチだのメルバだのを聞き澄すのだが、そんな、蓄音機などのそばへ寄つて、腰をかがめ、蝙蝠傘直しのやうな恰構をして――そして私はこんな華麗な異人の歌なんぞが分るのだらうかとさへ、自分自身に叱つてみたくなる。人にも叱れるなら存分に叱つて見たい私であるだけに、自分自身をどんなにたてよこに叱つたつて誰も何も言ふものはゐないだらう――そのせいか、私は何のためにこんな大げさな蓄音機を買つたりして樂しまうとするのだらうそればかりではない、本當のところは私は私のがらから言つて、こんな貸家にのんぞり返つて一家の王者であるやうにでも振舞つて、妻や子や下女や、それから國の母などに仕送つてやつたり、殆五日目くらゐに強制られるやうに持つて行かれる金のことなども、何んだか私らしくない私がやつてゐるやうな暮しのやうな氣もするのだ。と言つたら彼奴はあんな暮しをしてゐるからあんな工合な我儘なおしやべりをするのだらうと言ふものがあつたら、それは勝手にしろ――私のほんとうに若しての世での唯一つ、じつくりと唉いて見る氣もちを腹藏なく言つてみたら、こんな重くるしい暮しが日を趁ふて復雜になつてゆくことだ。――私は嘆くといふことを言つたが、實際、どうしても私はこの世のことを面白さうにもの語るよりも、むしろこの世のことを横からも縦からも唉いて見ようといふふこころもちになるのだ。私自身を根に置いてこんな工合な暮しを今から建てなほすことはできないが、しかしこんな工合に私があたまを益々悲くして行つても、そのために私の生涯に取つて毎日づつがその生涯の百分の一か、あるひは千分の一かづつの壽命をちぢめて行くやうなことを私は仄かに知りながらも、なほそれを敢てしなければならない業腹なやくさな、そして悲しげな仕事すら何時救ひ出されることもない忌々しい職人――さうまで私は私を跳め叱るのだが、それにしたつてどうにもならないことではないか？ 世の中のことはみんなそのやうにできるし、お前ばかりが何も苦しんでゐるわけではない

——お前なんぞは方外な金を取つて方外な暮しをして、恬として暮してゐるではないかと言ふなら、それならばそれでもよい、と言つて私はそれにもう二度と口をきく氣はないのだ、——なぜなればどんな場合にでも言譯をするといふことは惡こすい正直でなければ、その言譯自體の卑劣さをもつてゐるからである。それに私は私の暮しが普通の人間なみであるといふこと、そして普通世の中の誰でもが負ふべき暮しの責任を負つてゐるといふことに過ぎない——が、私は横着でなしに私自身を知つてゐるために最う一度私が人なみの暮しをささへてゐるための資格がこれまではあるとしても、これからさき有り得るかどうかといふ私自身にとつて本當の、これは一つ嘆いてみたいといふ氣もちである。——私を信じてゐる母親にしても妻子にしても、明日のことさへ分らない私の身の上を考へることは、健康な間は何一つ不安を抱かないであらう、たんに健康であるといふ一つのつながりに、その他のことは何も考へないだらう。だが健康であればあるほど不健康であるものゝ存在する。私のやうな人間が刻々そのやくざな仕事と苦衷とによつて、たかの知れた壽命をすこしづつ削つて行つてゐることすら知らないお人好しな人達ち、そんな人たちに私自身のことを言つて分らないだらうが、しかしそのためにも私は私自身に對つて、ほとほとこの世の面白くもない有様を嘆いてみたいのである。私にとつて嘆くといふ氣もちはちやうど人人の愚痴とはかはりはないのである。——

私はよく老人といふものを考へて見た、——わけても私の隣室にゐる既う五十六七位の肥つた老人がゐて、田舍の百姓娘のやうな女を一人連れて、これも浴泉の客らしく寢たり起きたりしてゐた。——私はなぜ突然にこの話を持ち出すかといへば、私にとつてこの五十六七になる肥つた老人が人並以上に醜くいばかりでなく、人並以上に健康らしく水々しい白い體軀をもつてゐたから——それを見るたびに何故か私の心が沈み込んで仕方がなかつたのである。私のやうに

瘠せてゐるからだと併んで、この老人のからだは鈍重なほど肥つて白く、私と年齢を逆にしたやうなところがあつたからである。私は同じい浴槽に浸つてゐても滅多に口をきくことがないので、この老人とは毎日顔を合してゐても話一つしたことがない——ただ、この老人を見るごとに私は氣難しげな心になつてしまふのである。それは強ち田舎娘らしい女がこの老人の姿であるといふことばかりでなく、私だちの前でもれいれいしく年にも恥ないで、一二八一しよに入浴つて少しもきまり惡るがらないその心が私にはかなりに悄憫にさもしげに又何となく誇らしげにも振舞はれてゐたからである。こんな脊ぎつた自分の豫期以上に働く物欲の强い老人には、こんな小娘のひとりくらゐを連れて歩くといふことは、それほど世に恥じる必要もなかつたであらう、この老人にしてもやはりこの世の先例にならつて自分の老後をいたはるものの一人くらゐは欲しかつたのであらうから、誰の前にも立派にそれを隱しもせずに居たつていいのだらう——それは唯世の中には隱して置くことと現はしていい事位はあるもので、

私はそんなことに私の心を腐らせるのではない、唯世の中には隱して置くことと現はしていい事位はあるもので、それの區別をこの老人は知らないらしいのが氣になるのである。

溫つぽいやうな何處かぐずぐずしたとこのあるその偽め田舎者に見えるその娘は、いつもこの老人の肥つた肩を叩いてゐた。そして何時も妙に氣のくさるやうな顔付で微笑んだところを見せたことがない——自分はこんな老人と連れ立つてゐるが、しかし人生といふものはみんな此慇風なもので決して自分ばかりが、不幸なのではない——それはまだ運不運にわかれるくらゐなもので、ひよつとすると自分は相當の金のあるこの老人の世話をしてゐることが、あるひは世の羨望の的になつてゐるかも知れない、現に自分の母だの妹だのがそのやうなことを言つてもゐる——とでも考へてゐるやうに娘は人前を恥ぢてはゐない。ただこの種の强情で我儘な老人を對手にしてゐるだけあつて、恐ろしく沈默で、沈默それ自身が柔順な氣質にならせてゐるやうでもある。あるひはこの娘は生れつき少しくらゐ馬鹿でそのため柔順

に見えるのかも知れないが……そのどちらにしても何となく專制な老人からいがみつけられた分の陰影――ともすると直ぐにでもふさいで了ふやうなところ――などが私の心を惹いた。それとは反對に老人はいつだつて怒つたやうな聲で、怒つたやうな顏付をして娘にものを言つてゐた。それも性分らしい我ままなところがあつたが、その老人がわづかな石鹼を洗つて持つて行かないとか、自分が湯から上つたらすぐ酒の用意して置けとか言ふことまで、まるで怒つてゐるやうな調子で言ひ附けてゐた。一たい此怒つたやうなこゑで物をいふのといふものは不愉快なものだ。對手が妻だとか下婢だかの場合は怒つてゐられるが、それ以外の怒りのきかない連中には人間は卑怯にも默つて濟せることがあるものだ。自分の妻だから怒つていいが、他人の妻だから怒つてわるいといふ理由はない――本統に心から怒りたいと思つたとき、私はむしろ默つてゐた。人間の本統の怒りなどといふものはそれ自體その人の心の中で起つて、その心で亡びる性質のものだから――がみがみした怒りを妻や子の前にあらはにしては何となく恥かしくなる年齡があるものだ。怒ることすらその鳥渡の前にかなり叮嚀にこれは怒つていいことだらうかとさへ考へるべきものだ。そりや我儘のできさうな人物を人間はときどき退屈まぎれに選んで、それにばかりこの世の我ままを遣るのは惡いことではない、だが我ままのできさうな人物を全然自分以下の者に選ぶのは卑怯だ。自分と同等のものか或ひはそれ以上の者かでなければならない――それだのにこの老人の我ままは、娘をいびりつけるだけだつたらしかつた。

あらはな五月の朝日が美しい透明な湯の中にさし込んで、縮んで大きくも小さくも見える二つの人間の姿――その老人と娘とがさうして每朝のやうに浸つてゐるのを見ると、私はしほらしくもこの世を悲しむといふより、むしろ老人の心を心として見て悲しかつた。それはれいの怒つたやうな顏の中に、いつもどんな表情があつたか？　そこには何時だつて面白くも可笑しくもない素氣なさと、女にたいする興味も失せきつてしまつたくそ忌々しさが惜體にむしろ露骨に

あらはれてゐたからだつた。むしろ荷厄介にもなりはじめたらしい孤獨のいろさへ浮んで、眼さへあればこんな女となぜ一しよに連れ立つてきたのかといふ調子が、湯掬きをする手つきの端々にさへ現はれた。ときには女の湯のしづくが老人の顏にそれると、かれは不機嫌にちえ！と舌の先きを鳴らして、切れ長い鋭い一重瞼をみひらいたくらゐだつた。女は日を追ふてにぶいやうな物腰とれいの沈黙を殖やしてゆく一方だつた。——實際、さういふ明るい朝日のこぼれた湯槽に、あらうことか五十五六の老人と、二十くらゐの娘とが、しかも裸になつてじつくりと湯にひたつてゐる姿を思ひ出して見たまへ。——老人はれいの不機嫌さうにしてゐるし、女はおどおどと鮒のやうに慄へてゐるやうな姿で、身うごきもしないでゐる。——その表情にあらはれたものは憂慮に近い心配げな、どうしたら老人の氣に入るだらうかといふ、自分には些つとも異體のわからない老人の怒りをしよつちう氣にしてゐるらしかつた。

私はそんなときむしろ淺猿しいといふ心もちを通り越して、何も彼も爲つくしたあとの老人の、異常ないらいらしげな顏を左の頬にかんじながら、こんな男でも保養といふことの必要であること、又こんな老ぼれにさへ此樣にまでも自由になる女がこの世にあるものだといふこと、こんな途方もない人間を客としてゐる旅館といふ變なものが存在してゐることなどを考へて、どれもこれも決して惡いやうにできてゐない人生だといふふうに考へた。——もし私があんな年になつて、あんな若い女がほしくなつても、この男のやうにこんなにまで堂々と世間を向へ廻しても少しも恥ぢないことができるだらうかと考へると、さういふ考へを持つだけでも不愉快な氣がした。だが、「おれだつてあんな風になつたらあんなに澄してゐられるだらうか。」と左う考へたとき久しぶりで恥かしさに顏があかくなるやうな氣がした。だが、よく考へて見ろ、お前のやうな圖太い人間が年をとるとみんな彼樣になるんだぞ——そしたらこの男がどんな氣もちでゐるかが分るぜ——この男が生きたり死んだり不幸になつたりしたつて、この書にはかかはりはない、だがもう此

男は私の心ににじんで來て離れやうとしないのはどうしたことだ。

「年寄りといふものは子供みたいなものだ。そして年をとると若い女がほしくなる――年とるほどほしくなる。」と、さう私は古くからも聞いてゐる。だがかうしてまざまざと眼前の二人をながめては、私はつい此世にさらにある筈の、決して珍らしくもないものの姿を何となく溜息なしで眺められないのである。「何といふ困つた人たちだらう――。」と私はかなり分別あるらしい氣になる。が決してこの女を可哀相だとか、改めて老人をにくにくしく眺めるとかいふ氣にならない、あの老人だつて寂しいだらうくらゐに考へて、もし近づきになつたら

「あなたはやはり私の父なぞよりも上手で、あなたから見たら私の父などは飛んでもない正直者だつたのですね。」

さう言つて一生不犯の、自分の妻に虐待されながらゐた私の父をも一度思ひ出して、あんないい人なんぞ居るものでないと、さう父の徳をたたへたいくらゐに思ふのだ。自分では何も知らない善良、そこらにざらにあるうす馬鹿に近い善良、そんな善良をも私は私の父であるゆえに今になつて拜みたいやうな氣になるのだ。――人間が三十五になつて親のことをほめるやうになるなんてことも、私のこの世での、これは尊いめぐり合せのやうな氣がする。私が母と諍つてゐると父はいつも手を振つて、「いや何も言はない方が、よい。」とさう陰で言つたものだ、――さうして母の前で母を叱らないでそのまま母の仕方題なことを眺めて、それに小言をいふにはもう倦きかかつてゐるらしかつた彼處にまですなほになつてゐた心が、いまやつと私の眼前に浮んでくる。それは父の氣が弱かつたせいもあらうが、それよりも肝賢なことはもう對手を一生かかつて讀み終せたやうなところがあつたからだ。何を言つたつて能く分つてくれない人物――さういふ人物には決して怒つたつて小言をいつたつて、怒る方が草臥れてしまふではないか?、そんな枯淡なあきらめを自分で知らない間に會得してまつた季節遲れの學問すら、やつと私にはいま微笑みの種となつて、扨てほのぼのとし

た氣もちになるのだ。

私はれいに依つてれいの老人ととなり合せに湯舟につかつてゐたが、ずつと前から顏馴染みになつてゐたせいか、老人はしきりに何か話しかけたい容子を示したが、私には人と話すよりその人の顏をみてゐる方が、どれだけ多く話をしたやうな氣もちになるか分らないので、その朝も默り込んでゐたのだが、何かのはづみにかれはかう言つて私をかへり見た。

「あなたはどこかご病氣でもおありになつて、こちらへ入被つたのですか？それともたゞの湯治なんですか。」

私は病氣つゞきだと言つた方が、いゝかも知れない、私には健康なときがすくないだけに、それゆえたまにどこかゞ惡くてそれが恢復つてしまふと、からりと晴れた日のやうな氣がする。人間にもし病氣がなくて何時も健康だつたら、どれは又た思ひがけない退屈な氣がすることだらう

「病氣といへば病氣です。胃も腸も惡いです。」

かれは尋ねもしないのにかれらしく、そして例の怒つたやうな言葉つきでせかせかと話した。

「實は私は水蟲にくはれてゐるんですが、醫者にかゝつて見ましたが醫者なんてものは決して的にならないものだと知つてから、靑森を振り出しにして淺蟲、會津、鹽原といふ順序で今年の一月から溫泉廻りをしてゐるのです。水蟲には溫泉だけしか利きませんからね。」

いまは五月であるのに、この男はもう半年もさうして旅行をして歩いてゐるのだ。こんな男が、そんなにまで氣にしてゐる水蟲は、左の人差指と親指と、も一本、なか指しか食つてゐなかつた。それもたゞ白く皮膚が剝けてゐるに過ぎないー／＼さう言へばこの老人はいつも絶え間なく指ばかり搔いてゐたのを思ひ出した。考へても見たまへ、こんな男が

一生水蟲に食はれたつてどれほどのこともないたつた三本の指――どうせ生きぞこないの業腹なこんな男がそれがよし恢復つたつてこの世には何の役立たない三本の指が、こんなにまで大切なものだらうか？――この男があんなにぞんさいに取扱ふあの女の一生をふいにしてしまつたつて、そんな事はどうでもよいことで、それよりも三本の指が大切なのだらう。この男はあの世まで水蟲に食はれたまゝ搬ばれて行つて、この男のからだが冷たくなつてしまつたら、しぜん水蟲もそんな冷たいからだに用事がなくなつて、しまひに離れて行つてしまふだらう。と、そこまで考へると私はひとりで微笑ひたいやうな氣がした。こんな忌々しげな老ひぼれ！それにさへ私は微笑ひし出したことを考へると又不機嫌になつた。

「何も面白くて湯治に歩いてゐるわけではないんです。いろ〱な湯治場へ行つたつてみんな同じですからね。」

老人はさういふと實際面白くもなささうな顔付で、れいの人差指をみがいてゐた、――それきり私は何も返辭をしないでゐるうち、れいの女が這入つてきて、私がゐるので躊躇つて衣物を着ぎかけて、どうしたらいゝだらうかといふ顔付で老人をかへり見た。「關はんよ、入浴つたつて――。」老人は昂然として言つた。

だが、世の中にはそんな老人が此處には一人きりだと思つてゐた私は、二階にも偶然にいはゆる附添えをつれた六十ばかりの、これはさきの老人とは全然體質の違つた老人のゐることに氣がついた。せいの高い何處か精悍な鹿のやうにかつきりした、せか〱と足早に歩くくせをもつた老人だつた。此間からふしぎに思つたのは、私のゐる部屋のすぐ二階の手すりに凭れた下町あたりの大家の小間使風な女が、何か低い聲で歌つてゐたことで、そこにこの老人がゐること

に氣がついた。かれらはなるべく人氣のない浴室の時間をはかつて、これもやはり一緒に入浴してゐることが同時に濡手拭を手すりに乾かすことによつて、私にはやつと首肯けた。女はまだ二十一二位であつたから、何か柔らかい銘仙物を肌にくつつけるやうに着て、これはさきの老人の女よりずつと快活で敏捷で、どこまでも小間使ひ上らしいところがあつた。この女が若いこゑで御隱居さまといふのが、よく私の方へきこえた。――どれもこれも人生には何一つ信じていゝ事があるのか、どこまで眞實などゝいふものが、あるのか、私はこの御隱居さまを見出してから、さつぱり見當がつかなくなつてしまつた。二階から庭へとき〴〵かれらは臆面もなく食後の腹こなしに歩きに出た。若葉かげのした廣い庭さきは全くしやはせのよい人間には耀かしい青綠の陰影があつた。そして御隱居さまは珍らしい樹や草の名を一々自分の孫のやうな女に說明して聞かせ、女はそれを一々じつくりと心から面白さうに聞いてゐた。型のとほりの厭な文字をならべるならば、かれらは綠の樹がくれに見えたり現はれたりしながら、人生はそんなに老ひ込んだつて失望するものでなく――さうして利巧な人間はもう死にかけるときまで、あるだけの物欲と幸福とを引延してゆくものだ。人間は無邪氣で一本氣で、そして何時までも子供らしく罪のない暮しをするのが本當で、引つ込み思案をしたり、餘計な身に負ひきれない考へごとなぞをするのは以てのほかだとでもいふやうに、れいの鹿のやうな足つきで歩いてゐた。

ひよろ長い頸のこけた頭に毛のない人間と、そして片一方はみづ〴〵しい鼻がしらからさらに露でも垂れさうな、たらりとした光澤のある皮膚をした女と――ひとりは茶褐色の着衣姿で、一人は襦衣の端々に紅い搦きや袖口のある姿でさうしてめでたくも美しい新綠の陰で、途方もなく樂しさうで平和で人生には些しの屈托する心配もない……。

「はははは……。」

と、ご隱居は世にもまれな枯れたこゑで微笑つて、むつまじげに話をしてゐる。この世では凡そ不快なことは風邪一つ引くことも厭で、興味いことを言つたら何一つ逃されないやうな快活な老人、すこしも陰氣なところもなく、又考へることなぞ此世には存在してゐなさうに見える老人――

私はこの隱居とさきの肥つた老人とを考へあはせたが、隱居は我まゝなところさへ最う卒業してしまつてゐるのに、もひとりの老人は、まだ人間らしく人生の变には物足りない不平を稱へて、ともすると變な不機嫌にいら〳〵してゐるらしいのと較べたら、この隱居は何といふ枯淡な氣もちでゐることだらう――隱居は何も彼もありつけるだけのものにありついて、それにすつかり安心してしまつてそのためにも快活すぎるくらゐに快活になつてゐる。――も一人の老人は不服だらけの世の中にまだ自分はどれだけも幸福になれなくて、むしろ不仕合せだとも考へてゐるらしい。人生は癡つたり不平を言つたりすべきものであつて、あんなに高いこゑで、しかもあんなに哄然と笑つてゐられべきものではない、こんな水蟲に食ひ惱まされてゐるばかりではなく、何時だつて場末の塵埃箱にだつて棄てられるものなら棄てゝしまつても關はないやうな女――人間をもそんなふうに取り扱つていゝ時代が來たなら、それを誰よりも一番さきに遣つて了ほうとまで考へてゐるらしい老人にとつては、あんな隱居と若い女とのそゞろ歩きが、障子硝子を通してあまりにまざ〳〵と、この世にある自分の不幸にくらべて、あまりに華やかに仕合せさうに影をうつしてくるではないか？老人は障子硝子に眼をやつて扨て何となく老ひてなほ已れを嘆いてやる氣もちで、さう、全く充分に自分のめぐりあはせを悲しんでみるやうな氣になつて、そして永い間二人のうしろ姿を見送つてゐるのではないか？――。死にかけてゐながらそれに知らず知らず壓されてゐる身も世もない哀れな焦燥……そんな人間が思ひつめると何を仕出來すか分らない突然な果斷さへ見えるのだ。」

次ぎの夕方、私は庭へ出て浴後の歩を拾つてゐたときにも、この隱居はすこし自分よりせいの倭い女と歩きながら、何か話してゐるのをきいた。私は二人の姿を何かの小説のなかにでてくる人物のやうな氣で、それが決して作者にも讀者にも不快なところがなく、ごく自然に何んだか人生といふものはこんなものだと言ふふうに、心に沁みてくるやうな氣もちでながめた。そしてやはり靜かに皮肉でない意味で一つ微笑つてみたいやうな氣がした。いつたい私どもが常から微笑つて見ようといふ氣もちになつてゐるときは、實際微笑つてゐるのではなくむしろ泣いてゐるのだと言つた方が適當かも知れない――何かしら人間は心と反對な意味でよく微笑つてみることがあるものだ。母親に叱られながら心は多分に悲しんでゐるにかゝはらず剛情に子供は母親に對つて微笑つて見せる。しまひにはその悲しい氣もちを持ちきれなくなつて、もの陰へ行つて思ふ存分泣き出す。――つまり私どもの時にしば／＼一つ微笑つて濟さうかと考へたり、無理にも微笑つたりしてゐるときは疑ひもなく泣いてゐると言つた方がよい――いま眼前に縁もゆかりもない年老つた男と若い娘との姿を見て、さらにこの世はこんなものだ。お前にしてもこんな世の中にゐるので、この世の中の外へ出られないのだと心でさう考へたら、やはり一つ微笑つて見たいやうな氣になる――そしてさきの老人の女は美しくないためにあの男は悲しんでゐるのかも知れないし、この隱居の女は若くて美しいための快活さかも知れない、その孰方が本統であつても己れ自身が人生の殘者であることを氣がつかないだらう、あのまゝな姿があのまゝあの世へずり落ちてゆくのではない、あれらは二つとも別れてしまつて、一番さきにあの男どもがあの世へ落ちてゆくのだ。それ故にあれらの姿があんなにまで私には悲しげに見えてくるのは、さう手近い間ぎわまであんなに勇ましくこの世の樂しみを愉しんでゐるところにあるのだ。かれらにも人並の嫉妬や悶着はあるだらう、ときには後悔や沈欝なときもあるだらう、しかしそれがあんな人たちに何の値もない……ものゝ姿を見てこゝろから覗いてみる氣もちを知らない人間に、どうして

この世の味ひがじつくりと解る筈があるだらう――。この世の味ひのわかる人間はどんな時だつて健康な人間の心にはなくて、いつも病ましげな心にあることだ。そしていつも不幸なボロだらけな心をひきずつて、外面はどんなに快活に見えても、いつも物ごとを嘆いたり悲しんだりする心にあるのだ。

「こんど歸へると電話の番號がかはるんだよ。」

「さう、かへるとすぐ變るの。」

「あ、すぐだよ。」

なる程、この隱居は電話くらゐ持つてゐるであらう、そんな話がつい七八歩さきを行くこの間に交されたときに、私は今やつとこの電話といふ文明機關らしい言葉によつて、この二人が、こんな文明な世にゐるのだと氣づいたやうに珍らしく二人をながめた。かれらは何か話してゐたやうだつたが、よく分らなかつた。唯わかつたのは、その女の言葉が決してご隱居さまにつかふ言葉づかひではなくて、自分とは同等の、ちよつと上の人くらゐな言葉づかひだつたことに初めて氣がついたのである。それすら極く樂にいくらか甘えたやうなところもあつた。

　私の考へはたまたまこんな二つの些細な、いはば有りふれた挿話によつて決して愛想も何も彼も盡きてしまつた人生だといふうちに言ひたくもなければ、さらにこの事に依つてさツき私の言つた所謂どこに眞實があるのか見當さへつかなつたといふことさへ、私は今は見當がついたやうな氣がした。――それは誰でもこんな事くらゐは平氣でやるだけのものを持つてゐるが、一生のうちにそれをやる必要がなかつた人とか、やるだけの勇氣のない人とか、全然やれない德をもつてゐた人とかに依つて區別されるべきであつて、みんながみんなで遁れないことだと言ふのは間違ひだらうくらゐの見當がついたのであつた。

では私の父は？と、さう考へてみると、これは全然さういふ事すら考へもしなかつた人ではなからうか？――それは母の眼もあたらうが、何より左ういふ性分がなかつた人だと言へさうだ。あんなに靜かな、そして自分自身すら投げ出して一生を我ままな母につかへるやうにしてゐた父としては、いま、どんなに考へたつてあんな恥かしい孫のやうな女をつれて歩く人ではなかつた。――それよりも却つて母の方にそんな氣もちどころではなく、どうやらそれに似た氣質があるやうに思へた。――父の靜かな、干渉がましくない暮しのなかの母は、あんな平和な田舍にゐてさへ役者を家へあつめては、酒と歌とで日を送つたものだ。その役者も一人や二人ではなくて同時に三四人も招んで、夜明けまでさわいでそしていつも決つてゐるやうに、最后に一人居殘つて行つた役者――それが朝日のさした田舍町の裏口からいつもこつそりと歸つて行つたではないか？いつも蒼白い顏をしてゐた役者はそんな晩をどれだけ私の家の二階で送つて行つたか分らない、そんな晩父は何をしてゐたか、自分の決めてゐた晩酌の醉を抱いてさつさと自分の寢床へ引きさがつた父は、ただ煙管の音をときたま、さう、ときすると夜明けまでつゞける以外にはべつに小言らしいことも母にむかつて言はなかつたではないか？自分の居間のすぐ二階に何か話してゐるらしい自分の妻と、そして全然違つた他人とが何かひそひそと話しごゑをさせてゐる。それを父はいつまでも寢ないで、その癖小言一ついはないで默つて聞いてゐる。――私はそのときまだ子供だつたが、しかし今思ひ出してみると何と我慢の強い父だつたらう。そりや人間はそんなときは誰だつて怒鳴ることはできるが、默つて過せるものではない――餘程の馬鹿か、餘程の利巧な男でなければ默つて見て見ぬふりをできるものではない、――。

　では父はそれ程の馬鹿だつたらうか、いやさうではない、それでは利巧な方だつたらうか、どうやらこれでもなささうだ。結局馬鹿でも利巧でもなかつた父にあつたものは、もうあきらめることが出來てゐて、これより外のハケロがな

かつたものだと言へる。自分で凝乎と悲しさうにさまざまな考へを押へ、自分ひとりの不遇だといふふうにあきらめてゐたのだ。――さういふ時でも決して遠慮がましいことをしなかつた母は、ほとんど向不見ずにむだ金をつかつて、明るい春の晝日中に重詰を下げて腹心の人を誘つて、いつも芝居小屋の埃の中に坐つてゐたことを考へると、何となくこの隱居や老人に似たものを感じさせる。他人のことを淺猿しいと考へるひまに人間は何と自分や自分に近いところに、そんな多くの淺猿しさが腐つた滓のやうに殘つてゐることだらう――だが、あんな酒や淫蕩な暮しをした母が、もうそんな一切の過去のことを忘れつくして、たゞ父の位牌ばかりを眺めては、今年はその七年忌にあたると言つて、それをどういふ風に修めるべきであるかといふことを、私にわざわざ相談してくるやうになつたのは、何といふしほらしい女になつたものであらう――老人にも二種の暮しがあるもので、はじめはこの世の歡樂に近いものを娶りつくさうと焦るこころと、それが又た存外詰らないものだつたりすると、もう無爲な、何かいい加減な偶像でも石ころでもいいから、それに手頼つてこの世を胡魔化してゆこうとするこころとがあるらしい――そしてどんなに眞面目にこの世は老人であるといふ一つのつながりにうまうまと胡魔化されてしまふことだらう。――ちやうど水盤の魚が、何かなし逃げやうとするときに、ひと濁り水をくもらせてゆくやうに、かれらも眞顏になつていと殊勝げに左うあとを濁らせてゆくのである。

「こんな老人だちを世の中の人は面白い人物だとか、元氣なお方だとか言つてしまふのだらう。」

全く考へると恥かしいことなんて人間の世に一つもなくて、それをことさらしく恥かしがるのは、氣の弱い私の父とか、父に似た珍らしい德をもつてゐる人かが言ふことであつて、生活のちからの强い人間には何だつて不思議なことではないらしいのだ。たゞ氣の弱い人間はできるだけこの世では損をすることになるのだらう。

しかし私はさらに恥かしいといふ單なる事實を何處までも徹底させた人物をこの二老人以外に見たときは、全くその男に對して「君は一たいこれは本氣でゐるのかい！」とでも言ひたいくらゐな氣がした。

——その男は下町のあたりの商家の主人らしく、そして私が滯在した一週間を頬の尖つたその男の同年輩のらしい女と一しよにゐた。私は疑ひもなくそれが夫婦者であると思つてゐたのだが、或朝、ふと浴室で出合したときに、驚いたことには！對手の女が昨日のそれではなく水々しい髷に結つた若い下町作りの、それも極く近頃めとつたばかりの新妻らしいのに驚いた。——では昨日まで一緒にゐた女はこの男の妾だつたらうか？それにしてもその女はどうしたのだらうか、さう思つて女中に尋ねてみると昨夜おそく女は東京へ發つて、こんどは奥さまの方が入らつしやつたのだと言つて、でもずいぶんですわね、と女中さへ呆れかへつて言つた。——上一週間を妾と送つて、下一週間を本妻を呼んで同じい旅館の、同じい衆目のなかで送らうとする男、そんな事くらゐに顏色一つ動かさずに、しかも私などの眼前にその本妻をつれて悠然と入浴してゐる有さまは、全く私をして並々ならず驚らかした。こんなに澤山の女中や浴客のあるなかで、この男の平氣で押し通してゆかうとする生活は、よし正しくあつてもなくても、その心の圖太さには私も感心した。自分ひとりの考へた事柄や欲求のために、世間のどんな微細な心の動き方にも、又恥を恥とするにはあまりに人間の心を粉微塵にしすぎた仕打にも、表情一つ動かさずに恬然としてゐる男——君たちはどう考へやうと君たちの心とは關係のない自分だといふふうに、かへつて澄しかへつてゐるやうな人物、——全くそんな人物こそ初めから良心を持つてゐないし、恥といふものの本統の姿さへ知らない男ではないか？がそれさへその男の本統のなにも彼も犧牲にした生活だとしたら、私たちはなにも言ふことができない、たゞそんなときに私たちの言ふことは、言葉といふ形式をとらずに

「この男だつて私だちと同じい人間で、そして喜怒哀樂さへわかつてゐるらしい人間の一人だらう。」

とでも言つて、すぐにこんな人間のことなぞに頭をつかはないやうに仕たいものだ。だが人間は頭をつかはないやうに仕たいと思ふ事ほど、人間にとつて大切なことはない──いやなことは忘れてしまひたいと思ふのは人情だらうが、しかし厭なことは頭底忘れられるものではない！

私はその本妻らしい女を見て、これはそんな性質の惡い女でない、むしろ善良すぎるくらいにまで少しばか氣たところのある女かも知れないと思つた。女は利巧なほど古風なところがなく、新しい器物のやうに手ざはりが粗いものだ。──すこしばかり利巧でそのためにも少しばかり馬鹿げてゐるやうな女には、どこか古風なところがあつて好ましいものである。この女にもどうやらそんな傾があつて、顔付に古風な、直覺の鈍感があつた。これは何よりその女がそんなにまで不偶な位置にあつても、それを知悉することのできないらしいその女にとつて寧ろ幸福らしい位置をあたへてゐるらしかつた。それ故女は自分の訪ねてきたすぐ前の晩まで夫がどういふ女と一しよにゐたかと云ふことなど、すこしも知らなかつた。かの女はいつも夫が不自由をしてゐるとしか思はないで、そして久しぶりである夫の新鮮な心にふれる思ひで、何かしらそはそはと不拘らず嬉しげにさへ見えたのである　そんな心には決して不幸が急に綻びかかつてくるものではない、その不幸は完全にさへ包まれてゐるではないか？しかし女中の一人がうつかり口をすべらして、あの男の昨日まで一しよにゐた女のことを話し出したとしたら、この女はいきなりへたばつてしまふほど吃驚してしまふだらう、──人生といふものには決して油斷をしてならないもので、そして自分もそれに充分な心をつかつてゐたのに、突然自分の夫の上にそんな厭らしい事件が覆ひかぶさつてゐるなんて、これは一體信じていゝことだか惡いことだか、と左うあの女は善良らしい性分のあるだけで心勞するだらう、そして今までの自分の性分に最う一層の烈しい新たな性

分が加はつて、その本來の、すこしばかり馬鹿げたところと少しばかりの利巧げなところとが、即座に拭き去られてしまふだらう、あとに何が殘るか？あとには唯不愉快げな女ができ上つてしまふばかりである——それ故私は心ひそかに思つた、あの女に何も知らせるな、知らずにゐるまで知つてはならないことだから？が、私は依然その日から變な心の沈むことをかんじた。それは世の中には平凡な人間の二人分或ひは三人分の生活をしてゐるもの丶存在してゐることそのせいではないが、又の一人分さへ充分に生活できないでゐる人々のゐることなどを考へた、——當然自分自身にさへ與へられるものまでそつくり不合理に、しかもがむしやらに奪ひ取るやうにした男の三人前分の生活が、何とそこらに多いことだらう、私自身のことを言へば人々は嗤ひ出すだらう、だが君だち一人づ丶の分け前がどんな工合でか、いつの間にか減つてゆくことがあるではないか？誰彼れが持つてゆくわけではないが、何となくその二つ三つづつをつまみ食ひされるやうに、ほんとうに夢のやうに何かがさらはれて行つてしまふやうな氣がするではないか？あんな二人の老人やこんな男の生活ばかりでなく、もつと知らないでゐる分のものが、刻々にこの世から消えて失くなる……、そして一人前分の生活さへできないやうな不幸な生活者は、その一人前分の半分までそのために奪はれて行つてしまふのだ。

朝、目がさめると、これらの人々にどうしても顔を合さねばならず、さうなれば、ひとりでに考へてしまふために、朝は私の心に本當の意味での悲しい氣が起つた。庭といはず山河の荒い街道すぢにかれらの姿が、世間から隔れた谷のこんな山奧の至るところに黑ずんで浮んで見えた。何も知らずにいそいそしてゐる例の妻をつれた男の散歩してゐる姿や、小娘をつれた老人——もうそんな不合理な姿すら此處では當り前のことのやうに思はれてゐるらしい止みがたい風俗、人間の心をさまざまに映して見ることのできる飛んでもない安樂——

「何といふ併し困つた人だちだ。」

さういふ私も何といふ籤引の弱い、そしてがらにもなく恥を恥として居る下らない實着さうな男だらう——ふと、全く實着さうによそほつてそして何も彼もあるだけのものを仕て見たくと手出しもできない不甲斐ない男の一人であらうぞ——ちやうど私の父が商業上のことから女客でもあると、對手が女客であるといふ單なる一つのことからして、なるべくその女客が早く歸つてくれゝばよいといふ詰らない母への遠慮のために、どんなに屢々そはそはと居苦しさうにしてゐたことだらう、それは外からもよく見える慌て方と、そして何と糞正直と弱氣とを兼ねた人人だつたらう——。

「そりやあなたの心にも何かがあるからですよ、そのためにもそんな慌てかたをなさるのだ。」

とさう母親はいくらか冷笑つて氣の毒な父に言つたものだつた。

しかし父はそれには答へずに、その場を切り上げて小人らしく吻と息をついて、さて寂しさうに、

「女客といふものは何となく氣の置けるものでな。」

と、何か考へ込みながら云ふとそれきり唖のやうに默つた。

こんな氣の毒な私の父、何かのはづみにはたゞ嘆息をして、それでもうこの世には何もいふことなんて一つもなささうだつた父が、どうかするとロでいふほどもなく、何となく待ちあぐんでゐたやうな女客をまでさつさと歸してしまつたあとで、そのうしろ姿を眺めかへしてゐるやうなところのあつたのも、私にはわるい氣もちではない——全く左うあらう筈の父だつたらうと思へるのだ。

「ロなんて調方なものさ？」

さう母はたまたま言つて、何もできもせず仕もしない父のすなほな心に、理由もなく腹つてみて扨て退屈さうに欠び

をしてゐた母の心も、私にはわからない事もない――鬪つて見たつて鬪り甲斐のない父の心には、ほとほと母も退屈のあるだけをして、馬鹿扱ひにしてゐた

母はいまはまるで自分の夫でもなければ、又自分のそれほど親しい人間でもなささうに寧ろむきつけに言つて全く煩さゝうに煙管に火をつけたりして父に與へた、――父はそんな母に對つても全く自分自身の世話の燒け過ぎる病體を厭ひながら言つた。

「お前には氣の毒だと思つてゐるが、いつ靜かになれることかいと左うしよつちう考へてゐる」

父の左ういふ言葉にはどこか謝まつてゐるやうなところがあり　すこしも母の仕打に對して反感も持つてゐないらしかつた。――そのうち自分だつて靜かになつてしまうだらう、それまではお前だつて不運とあきらめて介抱してやつて呉れといふ、ほとほと歎願に近い調子さへ交つてゐた

母は冷淡に、むしろ罵るやうにつんけんと言つた、

「いつでも同じいことをあなたは言つてゐる人だ。」

母はさうきつぱりと父をやり込めると、それきり對手にしなかつた。こんな死ぞこなひ！　母の顏はにくにくしさうに尖つて見える。老ひれば老ひるほど尖るものは女の顏ばかりだ。それだのに反對に父の顏は一日づゝ物優しげになつてゆく、つい昨日とか一昨日とかに微笑つた表情が、そのまま夢を凍らせたやうになつて、その形をくずさずに殘つてゆく……これはあの世まで持つてゆく顏にちがひない。餘命のないものの微笑の一つ一つに名殘りをほしむやうな色があるではないか？　もはやそんな怒つたり泣いたりするものなどはない、あるものは喜びだけを紀念してゆくところ、あんなにまで優しいこの世からの凱旋ではないか？　あんなにまでに善良になつきつてゐるではないか？　私は何を言つ

てこの人を喜ばしたらいいだらうかと、さう考へては中途で止して、しまひにはなるべく父の顏を見ないやうになつた父の顏を見つめることは苦息しい氣がするのである。

　何といふいとしげな父だつたらう――と、さう今考へる私はやつと自身の肉親を拜むだけの資格を人生からも私自身からも與へられてゐるやうな氣がした。――そして父の死後母は何といふ安らかに暮してゐるだらう、父へつくせなかつた私は却つて母親に仕送りをした。私の兄も手づたつて母を安樂にした。――當然父の分け前であるべきこの世の安の二人前を、母はめでたくも受け取つてそして何不足もない――だがあの世の父はそんな事をそねむやうな人がらではない、あの世からもなほ微笑みを投げて喜んでゐられることだらうか?

　私はこのごろ國にゐる七十五になつてゐる母のことを考へて見るごとに、兄や私はそばにゐなくて、唯一人で毎日膳に坐つて一人で食事をしてゐる姿を思ひ出した。一と箸づつ考へながら食べてゐるやうな姿、それでゐて決して何も考へてゐないやうな忘失されたやうな顏付――人生の何も彼もがゆつくりと時間通りに過ぎ去つてしまつて。そのあとには唯食つて生きてゐるだけの仕事が殘つてゐるだけの、あんなにも所在ない姿。父のゐる間は半死の父をさへおもちやにしながら、どうやらかうやら自分を胡魔化してゐたのが、急にいまは何もすることがない――人生には口小言さへいふこともなければ、又た進んで何かを言つて見やうといふ氣さへ起らない今の有樣は、母親をだんだんに物優く鈍く、ともすると睡り勝ちな人間にしてしまつた。そして自分の子息からの金を少しづつ貯めながら、それで自分の葬ひの費用にするのだと言つて、葬ひまでは決して子息達の世話にならない、さうしては濟まないと言つて、蟻の餌ほどの金を積んでゐるやうな殊勝げな母親――役者を買つたり父をいぢめたりした人物は別にあつて、決してこの母親ではなささうに思へるほど、何も彼もがなだらかな性分になつてしまつた。そんな事から人間の過去にあつたものが何も彼も忘失

され帳消しになるものかどうか分らないが　しかし人間はこんなに佛像めいた老母を前に置いて、於一洞過去の事をならべ立てられるべきだらうか？　あなたはこれこれの事をしたが併しあなたの事は何時の間にか風雨にさらされて消えてゐる――あなただつてそんな事は忘れてしまつてゐるやうに世間でも最も忘れてゐる。あなたの現在の、そんなに素直な心が何も彼も消して了つてゐるではないか？　あなたは死ぬまで素直な美しい心をもつて行かれるだらう。そして佛像めいた顔が日に日に皺に光澤が含んで、悲しい分は悲しげにちぢれ、平和な分は平和にだんだんに彫られるやうになつてゆくに違ひない――そして父が最後に殘して行つたやうな微笑み、この世をも一度じつくりと眺めて何となく微笑んで見てゐたあんな顔に、母の顔もだんだんに近づいてゆくに違ひない……

「これはお葬ひのお金です――これまでお前たちに苦勞をかけて本當にすまないと思ひますからね」

さういふ母親の手をみてさへどんな狼狽しいことだつて私はすぐ忘れたくなる。弛んだ澁紙のやうにくちやくちやになつた手と五本の指――それはともすると、すぐ物を拜むために合掌されやすい手で、合掌することが最う母親にとつてこの世の仕事のやうに殘つてゐるのだから……これは稀ふ方もない私だけの人生の母親で、この世にとつては貧しい蟲けらのやうな取るに足らない私のひとりの母親である。」

朝は毎朝のやうに晴れあがつて、この世には何のかはりもない――何か知ら變つたことがありさうにも思へるがその實何一つ變つてゐない――れいの二組の老人と、商家の主人らしい男とが、新綠の樹の下を歩いてゐる。何の屈托もなく考へることなぞあらう筈がなく、昨日のやうに今日は又た別段に晴れた美しい日のしたを、かれらは娘のやうな女を親愛するために選んだこの山奥の初夏な愉しにでゐるらしい、それもよい、何も彼もよい、私はあんな人だちに氣むづ

かしい顔をするのは、つくづく私の頭冏からするのであつて、誠は向ふから挨拶をしたなら、私だつて冷たい新緑の光をあびてこんな新鮮な朝はさらりとした顔付になつて、無理にも快活になつて、さて

「お早う——」

と、さう答へて私は私だけの樹の下を彼らとはべつべつに歩くべきであらう、こんな世の中で頭をなやますべきではない、却つて快活になつて朝は遲れずにお早うを繰り返すべきであらう——私はさう考へて無理にもはればれしい氣になつて、この狹苦しい山の奥にもある人生の朝ぼらけを人なみに新鮮らしげな顏つきで歩き出したのである。

編輯私語

○

共產黨事件―、それは隨分國民の耳目を聳動した、少くとも其の發表される前夜と當日は異常の緊張と不安とを帝都の人々に起させた、しかし其翌日になつて市民は昨日の緊張を馬鹿らしく思つたのはどう云ふ譯か。

○

我等はこのドサクサ紛れに「過激法案」が頭を擡げるのぢやないかと危ぶむ。

○

後藤新平氏の骨折は一段落した、罵詈した氏の政敵も氏の根氣を多とした樣だ、外務省も根負けした、加藤高明子も冷笑から正面した、後藤君も得意だらうが、單身敵地に入つて此處まで漕ぎつけたヨワフェ氏は定めて大滿足だらう。

○

早稻田の森には軍閥が巣喰けらとした、しかし鳴子の聲に驚いて直に逃げ出した。

○

覆面者もそろ〳〵頭巾を外づす時代だ、義一なぞは陸軍侵略同盟でも起したらどうか、ロシアもソロ〳〵若手を製造し、支那は顧維鈞どころを拔擢してはどうか、又過激外人を拘虜として山窩一派に內閣を讓るのも一興だらう。さて我國は差當り誰か。

○

土方成美氏の力作を下さつたことを感謝します、氏は東大經濟科助教授で少壯俊銳を以つて知られています。

○

生物哲學の創設者とも稱すべき獨逸のドレッシュ教授は九月十三日北京から來京する面白い特殊な研究だから相應に注目する必要があらう。

○

日本を脫け出した大杉氏は或は露國に赴いたと傳へられ、或は廣東、北京、巴里といろ〳〵に傳へられたが、巴里から長篇の紀行文がついた。本夏雜誌界隨一の讀みものであることは請合だ。

○

賀川氏の渡歐は眼疾のため當分延期となりました。それから矢崎美盛氏は哲學研究のため渡歐しました。社員秋田も十三日獨逸から歸朝しました。

○

「一茶」研究は七月號で發表するつもりでしたが投稿者意外に多數であつたため、選擇に時日がかかり遂に八月號で發表することとなりました。

改造定價

壹冊	定價八十錢
郵税	貳錢

半ケ年（四円八〇〇）以上郵税不要
增大號臨時號の定價は別に定む

註文の注意

◇註文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇見本は發送せず
◇外國發送の註文は別に郵税（普通號貳拾四錢）を申受く（但し支那を除く）
◇郵便切手代用は壹割增のこと
◇拂込は振替貯金によるるが最も便利なり

大正拾貳年六月廿日印刷納本
大正拾貳年七月一日發行

編輯兼發行者 印刷者 東京市芝區愛宕下町一ノ一 平田貢一郎
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿七番地 秀英舍

（本號に限り特價金壹圓）

發行所 東京芝區愛宕下町一ノ一 改造社
電話 芝（長）一六三八 芝二八五四 芝四三〇三
振替 東京八四〇二

法學博士 堀江歸一著

續篇 國際經濟と國民經濟

定價二圓五十錢
送料十七錢

最新刊

最近經濟界の混亂行詰りは金融業者たると一般の民衆たるとに差別なく苦惱煩悶の極に達して居る、或は一家の倒壞より、或は會社、銀行の破綻より一身を犠牲に供する悲しむべき報導が頻々として起つてくる、此財界に漲れる不安混亂の原因は如何。

我財政學者として、經濟學者としての權威である堀江氏は、その依つて來る病患を一々深切に提示し、政府、政黨の秉れる經濟政策、財政政策が刔いて此悲しむべき結果を招來せるをも指摘して國民が眞に經濟的に目醒めねば財界の前途に光輝を見る能はずと斷ず、最近の經濟界を論じてかく剴切淋漓たる書はなく、又近き未來の財界を豫測してかく適切を極むる書籍はない、此文獻は啻に昨今經濟界の苦惱を醫する唯一の善藥である、本書を靜讀し、默想せば其處に得る所が多からうと信じます。

堀江歸一著

國際經濟と國民經濟（六版）

定價壹圓九十錢
送料十五錢

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二番

吉田絃二郎作

（吉田氏の尤も自信ある作物のみを集めた傑作集）

定價　貳圓貳拾錢
送料　十七錢

小説 ダビデと子たち

第八版

吉田氏の全人格の現れであり、且つ氏の藝術の眞の代表作である「ダビデ」と「欅」の二大長篇を收む、氏が宗教的感激は、而して氏の全的人生觀、宗教觀は本書によりてのみ知るを得。

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二番

近代女性の表現

北澤秀一著

第5版

表現は女性の全生命であるのに,なぜ日本の女性はそれを等閑にするのでせう,西洋婦人の表情の旨さは實物が7の縹緻があるなら7+3=10位に見えます。しかし日本の女性は實質が7だとすると7−3=4位の價値にしか見えませぬ.

假令ば相手に戀して居ても,それを無理に推隱さうとし,そして蔭ではそれが爲め悶々して居る狀態である,そして結局は失戀と來る,表現なき女は美もなく,味もないそして淋しくて陰欝である著者は最近歐米にて表現法を研究した唯一人者です,此表現法を會得するものだけが近代的に美はしく且つ尤も愉快に,そして戀愛的に生きることが出來ます,一本を購つて歐米女性の美はしき近代表現を味はつて見て下さい.

價 170錢
送料 15錢

改造社



商品券は東京、大阪、京城、大連の三越の何品とでも御取替が自由ですから中元御贈答品として非常に重寶されて居ります

御贈答品十種

- ◆食料品……一階
- ◆洋品類……三階
- ◆洋食器……一階
- ◆中形浴衣地……三階
- ◆草履下駄……四階
- ◆書籍雑誌……四階
- ◆半襟帯揚等……二階
- ◆袋物類……四階
- ◆化粧品……一階
- ◆髪飾品……三階

従來月二回（十日、廿五日）を定休日と定めて居りましたがお客様の御不便不尠に鑑み爾今定休日を廢することに致しました

東京市

三越呉服店

駿河町

LITICS LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
RICE: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
FFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO